

早稲田大学大学院教育学研究科 博士学位請求論文

日本語感覚表現語彙の歴史的研究

—嗅覚を中心に—

池
上
尚

目次

序論

第一章 研究の目的と意義

第一節 本研究の目的	1
第二節 嗅覚表現に関する先行研究	1
第一項 一九三〇年代・一九六〇年代	1
第二項 一九七〇年代・一九九〇年代前半	2
第三項 一九九〇年代後半・二〇一〇年代	3
第四項 問題の所在	3
第三節 嗅覚表現研究史・語彙史における本研究の意義	4

第二章 研究の方法と手順

第一節 研究の方法	6
第一項 調査語の選定	6
第二項 読みの推定	8
第三項 意味の認定	9
(一) 対象の意味――(一・一) 対象 (一・二) 修飾成分 (一・三) 評価性についてのまとめ (二) 文体的意味	
(二) 形容詞の意味分類における術語	
第四項 時代区分の規定	15
第五項 調査資料	16
第二節 研究の手順	22

第一項	形容詞	22
第二項	自動詞	23
第三項	結論	24
第四項	凡例	24
本論		
第一部 形容詞 I カグハシとその転化形における別語意識の成立		
第一章 カグハシ・カウバシ・カンバシの意味・用法分担―原形・転化形の共存過程―		
第一節	はじめに	27
第二節	問題の所在	27
第一項	先行研究	27
第二項	本研究の立場	28
第三節	用例の分類基準	28
第一項	表記と語の認定	28
第二項	“焦げるにおい”の定義	29
第四節	カグハシ・カウバシ・カンバシの史的変遷	30
第一項	カグハシ	30
	(一) 上代・中古	(二) 近世中後期
第二項	カウバシ・読み不明	33
	(一) 上代・中古	(二) 中世前期
	(三) 中世後期	(四) 近世前期
	(五) 近世中後期	
第三項	カンバシ	45
	(一) 中世後期	(二) 近世前期
	(三) 近世中後期	

第四項	近代以降	49
	(一) カグワシイ (二) コウバシイ (三) カンバシイ	
第五節	おわりに	53
補節	現代語において衰退している／現代語にのみ使用される快形容(動)詞	55
第一項	ニホハシ・ニホ(ヒ)ヤカナリ	55
	(一) はじめに (二) ニホハシ・ニホ(ヒ)ヤカナリの史的変遷——(二・一)ニホハシ	
	(二・二)ニホ(ヒ)ヤカナリ (三) 衰退の原因	
第二項	カオリ高イ	61
	(一) はじめに (二) カオリ高イを一語と認める立場 (三) カヲリ高シについて	
第二章	成句「梅檀は二葉より」述語部分の史的変遷——カウバシからカンバシへ——	67
第一節	はじめに	67
第二節	述語部分の史的変遷	67
第一項	中世	68
第二項	近世	69
第三項	近代(明治)	70
第四項	近代(大正・昭和)	72
第三節	諸本によって異なるものについて	73
第一項	『保元物語』	73
第二項	『平家物語』	74
第三項	『曾我物語』	75
第四項	『太平記』	75

第五項	『信長公記』	76
第六項	『撰集抄』	76
第七項	諸本の異同から推測されること	76
第四節	おわりに	76
第二部 形容詞Ⅱ くクサシ語彙の担う意味領域の展開		
第三章 クサシの意味とモノクサシの意味―嗅覚表現から性向表現へ―		
第一節	はじめに	85
第二節	問題の所在	85
第一項	先行研究	86
	(一) 接頭辞モノについて	(二) 中世語としての形容詞モノクサシについて
		(三) 辞書の記述
第二項	本研究の立場	89
第三節	クサシの史的変遷	89
第一項	具体的な事物を対象にとるクサシ	90
	(一) 穢れ (二) 魚介類 (三) その他	
第二項	抽象的な事物を対象にとるクサシ	93
	(一) 事実・真相が不確実な事態 (二) 演技	
第三項	クサシの意味の広がり	94
第四節	モノクサシの史的変遷	95
第一項	クサシと重なる意味	95
	(一) (あるものが) 不快なおいにする (二) (あるものが) 怪しい・疑わしい (三) モノクサシの語構成―その一	
第二項	モノクサシ独自の意味	99

(一) 対自己―― (一・一) 気が進まない (一・二) (体調が万全でなく) 気が進まない (一・三) 気に入らない	
(二) 対他者―不精である (三) モノクサシの語構成―その二	
第三項 モノクサシの意味の広がり	105
第四項 モノクサシの語構成―その三	106
第五節 おわりに	108
補節 類義語モノウシについて	109

第四章 接尾辞・クサシの意味と上接成分の拡大―において雰囲気へ―

第一節 はじめに	116
第二節 問題の所在	116
第一項 先行研究	116
第二項 本研究の立場	117
第三節 ・クサシの意味と上接成分	118
第一項 Aクサシ	118
第二項 Cクサシ	119
第三項 Bクサシ	120
第四節 ・クサシの史的変遷	121
第一項 Aクサシ	121
(一) 中古 (二) 中世前期 (三) 中世後期 (四) 近世前期 (五) 近世中後期 (六) 近代 (明治)	
(七) 近代 (大正・昭和)	
第二項 Bクサシ	133
(一) 中古・中世 (二) 近世前期 (三) 近世中後期 (四) 近代 (明治) (五) 近代 (大正・昭和)	

第三項	Cクサシ	139
	(一) 中世 (二) 近世前期 (三) 近世中後期 (四) 近代(明治) (五) 近代(大正・昭和)	
第四項	A'クサシ	147
第五項	C'クサシ	148
第六項	文末外接形式	149
	(一) 表現価値 (二) 文末外接形式化の背景	
第七項	上接成分の拡大から見えてくること	153
	(一) 《におい》から《雰囲気》へ (二) 強調の前景化、マイナス評価の後景化 (三) クサシの発達と単純形容詞クサシ	
第五節	おわりに	156
第五章 水クサイの意味変化―江戸俚言水ツポイとの共存過程から―		
第一節	はじめに	163
第二節	問題の所在	163
第一項	先行研究	164
	(一) 『日本言語地図』第三八図「塩味が」うすい (二) 『日本国語大辞典(第二版)』	
第二項	本研究の立場	166
第三節	水クサイの史的変遷	166
第一項	中世	166
第二項	近世前期	168
第三項	近世中後期	170
	(一) 転義Ⅳの伝播 (二) 本質的な意味Ⅱ・Ⅲの伝播 (三) 伝播に対する「受容」と「拒否」	

第四項	近現代	173
第四節	おわりに	175
第三部	自動詞Ⅰ ニホフに見る両極の評価性の獲得	179
第六章	ニホフの意味の下降―自動詞的用法「名詞＋スル」との共存過程から―	179
第一節	はじめに	179
第二節	問題の所在	179
第一項	先行研究	179
(一)	ニホフ――(一・一) 対象の意味(評価性)と文体的意味 (一・二) 意味変化 (二) 「名詞＋スル」――	
(二・一)	現象を表すスル (二・二) 機能動詞としてのスル (二・三) 「ニオイ＋スル」の評価性	
第二項	本研究の立場	185
第三節	用例の分類基準	187
第四節	ニホフの史的変遷	187
第一項	ニホフの評価性	187
(一)	上代 (二) 中古 (三) 中世前期 (四) 中世後期 (五) 近世前期 (六) 近世中後期	
第二項	「名詞＋スル」の評価性	191
(一)	上代・中古 (二) 中世 (三) 近世前期 (四) 近世中後期 (五) 評価性を分担するニホフと「名詞＋スル」	
第三項	ニホフは、なぜマイナス評価を表しにくいのか	200
(一)	鑑賞としての対象か、実用としての対象か (二) 日常語的か、文章語的か (三) ニホフという語の二面性	
第四項	ニホフの比喩的転義の発生	204
第四節	おわりに	205

第七章	ニホフの連用形名詞ニホヒの意味の下降—カ・カヲリ・カザとの共存過程から—	210
第一節	はじめに	210
第二節	問題の所在	210
第一項	先行研究	210
	(一) 小松登美 (一九七六)	(二) 『日本言語地図』第八五図
		(三) 工藤力男 (二〇一〇)
		(四) 国語辞書の記述
第二項	本研究の立場	213
第三節	用例の分類基準	214
第四節	ニホヒの史的変遷	214
第一項	上代	216
第二項	中古	217
	(一) ニホヒ	(二) カ
		(三) カヲリ
		(四) カヲリ・カザ
第三項	中世前期	219
第四項	中世後期	222
	(一) ニホヒ	(二) カ
		(三) ニホヒとカとの交替
		(四) カヲリ・カザ
第五項	近世前期	224
	(一) ニホヒ	(二) カ
		(三) カヲリ
		(四) カザ
第六項	近世中後期	230
	(一) ニホヒ	(二) カ
		(三) カヲリ
		(四) カザ
第四節	おわりに	234

第四部	自動詞Ⅱ カヲル・クンズの文章語としての表現価値の確立	239
-----	-----------------------------	-----

第八章 カヲルの雅語化―和語表現「風カヲル」と漢語「薰風」との関係を中心に―	239
第一節 はじめに	239
第二節 問題の所在	239
第一項 先行研究	239
第二項 本研究の立場	241
第三節 カヲルの史的変遷	241
第一項 上代	241
第二項 中古	242
第三項 中世	243
第四項 近世	246
第四節 「風カヲル」・「薰風」の史的変遷	250
第一項 中国語における「薰風」	250
第二項 日本語における「風カヲル」・「薰風」	252
(一) 上代・中古	
(二) 中世前期	
(三) 中世後期――(三・一) 意味の限定化 (三・二) 語源論	
(四) 近世	
第五節 おわりに	262
第九章 クンズによる「非日常性の演出」―漢語系文章語という文体的意味から―	270
第一節 はじめに	270
第二節 問題の所在	270
第一項 先行研究	270
第二項 本研究の立場	271

第三節	クンズの史的変遷	272
第一項	文体的意味	272
(一)	上代・中古	
(二)	中世	
(三)	近世	
(四)	近代以降	
第二項	対象の意味	278
(一)	身体(超越性)を対象にとるクンズが意味すること	
(二)	固定的表現「異香クンズ」が意味すること	
(三)	マイナスの評価性を有するクンズが意味すること	
第四節	おわりに	284
補節	狂言台本における神仏の登場場面について	284
結論 290		
第一章 嗅覚表現語彙の史的変遷 290		
第一節	はじめに	290
第二節	本論のまとめ	290
第一項	形容詞	290
第二項	自動詞	292
第三節	嗅覚表現語彙の史的変遷	293
第一項	文体的意味	295
第二項	対象の意味	297
(一)	評価性	
(二)	対象	
(二・一)	具体的な事物	
(二・二)	抽象的な物事	
第四節	おわりに	301
補節	嗅覚表現語彙の統語環境	303
第一項	用法の分類	303

第二項 用法から見た嗅覚表現語彙	305
第二章 成果と課題	309
第一節 語彙史研究における本研究の成果	309
第一項 語彙研究として	309
第二項 歴史的な研究として	311
第三項 他の領域と連携する研究として	312
第二節 今後の課題	312
既発表論文・口頭発表と本稿との関係	314
参考文献	316
嗅覚表現研究史年表	341
調査対象資料使用テキスト一覧	345
用例数一覧	363

序論

第一章 研究の目的と意義

第一節 本研究の目的

本研究は、語彙体系論^一の立場から、中央語を中心とした日本語嗅覚表現語彙の史的変遷（古代～近現代）を考察し、日本語感覚表現語彙における位置づけを明らかにするものである^二。これは、(一)嗅覚情報の性質・状態を言語化するためにどのような語彙が必要とされてきたかという、日本語の表現法の歴史を記述する研究でもあり、(二)嗅覚表現語彙がどのような事物・物事の描写に使用されてきたかという、日本語の思考・発想法の歴史を記述する研究でもある。また、(二)に関連して、ある嗅覚表現語が（嗅覚表現語以外の）どのような意味分野の語と類義関係を結ぶかという点にも注目し、嗅覚表現語彙の共時的な意味領域の広がりについても言及する。

第二節 嗅覚表現に関する先行研究

従来の嗅覚表現研究は、特に日本文学の分野において盛んに進められてきた。本論各章に関連する先行研究については当該の章において触れるこ

ととし、ここでは、嗅覚表現研究史の概観を目的として、年代順に主だった先行研究を取り上げることとする。先行研究の詳細は、巻末に嗅覚表現研究史年表として示した。

第一項 一九三〇年代・一九六〇年代

いち早く嗅覚表現を取り上げた研究に、吉沢義則（一九三七）がある。これ以降、北住敏夫（一九四一）、三木幸信（一九五〇）、柴生田 稔（一九五九）など多くの論考が続くが、いずれも、古代におけるニホフ・カールの本質的意味を問うという姿勢が共通していた。すなわち、『万葉集』や中古仮名散文におけるこれら二語が視覚表現語のような振る舞いをも見せることに注目し、視覚表現語から嗅覚表現語へ（またはその逆）の現象が起きたと主張したのであった。こうした一九三〇・六〇年代の研究成果をまとめた記述となっているのが、『日本国語大辞典（初版）』（一九七二・七六）の二語の補注である。

- (1) 「におう」の「に」は「丹」と関連づけて考えられ、本来赤い色がきわだつことをいったか。（「におう」項補注）

「カオルは」元来は、香に限らずすべて物の気が漂うことをいい、それが人の感覚を刺激することから次第に香気を感じることにいうようになり、「におう（にほふ）」と類似してくる。「におう」は元来、「色がきわだつ」意で、それが影響して他の物が照り映える、また、嗅覚で感じる意にも用いられるようになる。（「かおる」項補注）

特に、ニホフが古く視覚表現語であったとの見方は、以後一般に広く知られることとなった。

第二項 一九七〇年代・一九九〇年代前半

一九七〇年代に入ると、『源氏物語』におけるニホフ・カヲルの用例を具に考察した藤田加代（一九八〇）により、嗅覚表現研究に新たな視点が導入される。藤田氏は、ニホフが「対象に内在する美質が強く発散し、その明るく華麗な雰囲気があたり一面に広がる」こと表すとし、その「美質」が色彩であるか芳香であるかは区別されないと指摘した（藤田加代一九八〇…五一頁・傍点筆者）^三。一九三〇・六〇年代の嗅覚表現研究は、古代のニホフ・カヲルにおける、視覚表現語から嗅覚表現語へ、あるいはその逆といった、一方向性を前提とした感覚領域の変化に興味・関心を持つ

てきた。これらに対して、藤田氏は、視覚表現語と嗅覚表現語における発散という共通点を強調し、ニホフの表す感覚領域が視覚であるか嗅覚であるかをただ一つに決定できないことを指摘したのであった。

一方で、稲田利徳（一九七五・一九七六）や佐竹昭広（一九七五）、山縣熙（一九九三）のように、嗅覚をめぐる共感覚表現に注目するものも散見され始める。共感覚表現とは、ある感覚表現に属する語が他の感覚表現に転用される現象を指し^四、認知言語学において盛んに論じられてきたテーマである。これらの論考が嗅覚と他の感覚との共通性に注目する点は、先の藤田氏と一見類似するように思われる。しかし、共感覚表現に見られる共感覚的比喩の方向性（転用の方向性）を説くということは、むしろ、一方向性を前提とした一九三〇・六〇年代における議論の問題意識に通ずるものであったと言える。

藤田氏を除き、感覚領域の変化を問題にすることが多かったそれまでの嗅覚表現研究に対して、佐藤宣男（一九八三）は疑義を呈した。佐藤氏は、ニホフやカヲルが嗅覚表現として用いられるか視覚表現として用いられるかは資料による偏りが認められること、よって、嗅覚表現語に見られる感覚領域の変化は通史的に捉えにくいことを指摘したのである。

第三項 一九九〇年代後半・二〇一〇年代

佐藤氏の指摘は、嗅覚か視覚かといった二者択一が難しいというその事実こそが嗅覚（表現語）の特徴であることを暗に示していたと思われる。また、そうした認識はその後の嗅覚表現研究においても広がり、「我々が嗅覚と呼んでいるものの実体は一体何であるか」について考察する向きが強まっていった。

例えば、「視覚と嗅覚の互換、あるいは融合」といった表現や（朱 捷一 九九六・七〇頁）、「嗅覚（聴覚も）は個別的な感覚としてあったのではなく、視覚によって統合される全体的な感覚」であったと見る立場（多田一 臣二〇〇四・二二頁）、「視覚・嗅覚双方を含む幅広さ」が認められるとする指摘（森 朝男二〇〇八・六三頁）が現れるようになるのである。

こうした、感覚そのものの在り方・輪郭を描き出そうとする立場がある一方、嗅覚情報それ自体の本質を問う立場も現れる。すなわち、においが、視覚を中心とした身体全体で体感し得る（雰、気）に相通ずることを主張する立場である。塚本瑞代（一九九五 a・b）は、においが空間を漸成的等質化すると指摘し、山本英一（二〇〇二）は、視覚・聴覚・嗅覚情報が発散という共通項を有すると主張した。これは、前述した藤田氏のニホフの意味の捉え方に一致するものでもある。一九九〇年代後半には、藤田氏

の言及から一段進んで、嗅覚情報一般に（雰）気としての特徴を見出した段階と言える。

ただし、においが雰に通ずるという見方の登場は、日本語学・日本文学において待つまでもなく、二〇世紀のフランスで活躍した医学者 E・ミンコフスキーによってすでに指摘されていた。E・ミンコフスキー（一九三六）では、「匂い」とは、「根本的な性質をそなえた雰の気のこと」、「匂い」物体の属性であるよりも、いつそう本原的に非人称的な発散であり周囲の雰の属性」であると述べられていた（引用は翻訳による）。

ニホフやカナルといった嗅覚表現語が視覚表現のように解釈できる場合が存するのは、E・ミンコフスキーの立場から考えるに、そもそも視覚情報と嗅覚情報とが《発散》という共通項を有する「気」の下位分類に過ぎないことに起因していた。

第四項 問題の所在

日本における嗅覚表現研究は、古代におけるニホフ・カナルの意味（感覚領域）の変化を追究することから始まり、視覚などと比較対照されながら、嗅覚とは何か、嗅覚情報とは何か、といった抽象的な議論へと進んでいった。その成果として（E・ミンコフスキーの指摘に立ち返る形ではあつ

たけれども）、本質が《発散》に存するという点において視覚情報と嗅覚情報とが同次元・同質のものとされること、ニホフやカラルの表す感覚領域が視覚であるか嗅覚であるか唯一的に限定されない場合もあるということが明らかになった。

嗅覚情報、乃至、それとの関連が認められる視覚情報については、如上の理論的な枠組みによって明快に整理されたと言える。しかし、そうした一知覚としての嗅覚の特殊性に注視した研究であったために、視覚表現との重なりが問題にならない（と考えられた）ニホフ・カラル以外の他の嗅覚表現語の意味・用法は研究の対象とされにくかった。その結果、嗅覚表現語彙全体の広がりには、通時的にも共時的にも知り得ないのが現状である。また、『万葉集』や『源氏物語』のニホフ・カラルが最も視覚表現的であると捉えられ、これらが専ら調査の対象となったために、言語資料の網羅的な調査はなされず、現代語との繋がりを意識した史的研究も登場しにくい状況であった。

第三節 嗅覚表現研究史・語彙史における本研究の意義

本研究では、先学の研究成果から嗅覚情報の本質を学んだ上で、美意識的側面に限らない、嗅覚表現語彙の担う意味分野の全貌とその史的変遷の

究明を目的とする。すなわち、嗅覚表現語を語彙体系論の立場から、かつ、歴史的な観点から考察するというのが本研究の特色である。特に、外界の事象に対する人間の反応が色濃く反映される形容詞と、それに類似した働きをする知覚自動詞とを中心に扱い、各語の意味・用法の史的変遷についての考察を進めていく。また、それらを総合して、嗅覚表現語彙の変化の歴史を記述することにより、語史研究としても、語彙史研究としても有意義なものになるのではなからうか。

ここでの「語史」は、対象とされる語そのものが主役の歴史を言い、「語彙史」は語同士の関係そのものが主役の歴史を言う（小野正弘二〇〇一b）。考察は周辺の語との比較を通じて行われることが望ましく、その意味で語史と語彙史とは不可分の関係にある。しかし、「研究をするに足る語を多く含み、つまり語史としての方法を用いて、しかも明確な体系性のある小分野はいくらでもあるものであろうか」（山内洋一郎一九八二：一三頁）という指摘もなされたように、語史研究としても語彙史研究としても価値の高い分野語彙は必ずしも豊富ではない。

その中であって、嗅覚表現語彙は、これに属する形容詞・自動詞の多くが語史としての価値を有し、それらを総合した語彙史としての価値も有する理想的な部分語彙であると筆者は考える。本論では、嗅覚表現形容詞・

自動詞の意味・用法変化を類義語にも目を向けながら通史的に考察し（語史）、それらをとりまとめ、語彙としての変遷にどのような方向性が認められるかを考察する（語彙史）。嗅覚表現語彙を一つのモデルとして、語史研究としても語彙史研究としても記述する価値を有する部分語彙の研究を示したい。また、嗅覚表現語彙という一つの分野の語彙史研究が、さらに大きな感覚表現語彙の語彙史研究へと発展していく可能性についても言及する。

一 語彙体系論とは、語彙を語同士の意味的な関わりからなる体系と考える立場を指す。語彙を「語の集まり」と見る語彙計量論に対し、語彙を「語のまとめり」と見るのが語彙体系論である（田中章夫一九七八）。

二 以下、単に嗅覚表現語彙、感覚表現語彙と呼び、日本語のそれを指すことにする。

三 カヲルは、ニホフに比して発散性を欠くものの、ほぼ同義であるとする。

四 「黄色い声援」の黄色イに見られるような、視覚表現の聴覚表現への転用などがこれに該当する。

第二章 研究の方法と手順

第一節 研究の方法

本節では、研究の基本的な方法について述べる。まず、調査対象とした語（第一項）とその読み（第二項）・その意味（第三項）の考え方についてまとめる。次に、時代区分の仕方と調査対象とした言語資料について言及する。

第一項 調査語の選定

第一章第一節で前述した通り、本研究の目的の一つには、「(一)嗅覚情報の性質・状態を言語化するためにどのような語彙が必要とされてきたか」を掲げている。つまり、調査対象とすべきは、「嗅覚情報の性質・状態を言語化」する語彙である。日本語におけるその典型は、寿岳章子（一九五五）の述べるごとく形容詞である¹。

形容詞は名詞のような、外的なものに対してそれと表裏関係にたつ密接さはなく、外在の諸現象に対する人間の反応度がかなり濃い品詞と
思う。……いわば人間表現となるのであって、人間が事柄をどんなに

受け取ったか、いかに感じたか、などを直接に表出することを使命とする点動詞などより一そう内なる世界に関係するのではあるまいか。

（六一頁）

よって、本研究では、嗅覚表現に使用される形容詞（以下、嗅覚表現形容詞）を第一の調査対象語彙とする。なお、形容詞に名詞化接尾辞・ミ・サが付加した語（例、クササ）や、形容動詞については適宜言及することにする。

ところで、自動詞の中にも形容詞と相通ずる働きをするものが存する²とは、存在を表す自動詞アルと形容詞ナイとの例を挙げるまでもなく、一般に知られるところである。形容詞と一部の自動詞とを並べて考察することの意義については、すでに林 巨樹（一九六七）や北原保雄（二〇一〇）などに言及がある。例えば、北原保雄（二〇一〇）は、所動詞ニ（相当）に含まれる見エル・聞コエル・食ベラレルなどが、「…が、…が」構文をとること（例、私が（Ⅱ能動主格）山が（Ⅱ所動主格）見える（Ⅱ所動詞）、主格の制限つきの属性を表すこと（その山は「私にとって見える」という属性を有する）を挙げ、所動詞述語文を形容詞述語文とともに考察する必要があると述べる。嗅覚表現においても、自動詞ニオウと形容詞クサイと

に一部意味の重なりが認められるなど、「嗅覚情報の性質・状態を言語化」する語彙における自動詞の存在価値は看過できない。そこで、本研究では、嗅覚表現に使用される自動詞（以下、嗅覚表現自動詞）を第二の調査対象語彙とする。なお、嗅覚表現自動詞は、その連用形が名詞化する場合がある（例、ニホフに対するニホヒ）。これらは自動詞に付随して扱う必要があると考え、調査対象に加えたものがある。

さて、次に、具体的な調査語の選定に入る。ある意味分野に属する語を知るために分類語彙を利用する方法もあるが、分類語彙表は言語普遍的な概念体系という側面が強く、言語の分類として完璧でないとの見方もある（宮島達夫一九七七a）。そこで、ひとまずは『日本国語大辞典（第二版）』に見出しのある嗅覚表現形容詞・自動詞・名詞を抽出することにした。その結果をまとめたものが次の表一である。また、表一では、その結果を中型国語辞典である『明鏡国語辞典』と対照させた。「○」は見出しが立てられていることを、「×」は見出しが立てられていないことを表す。

表一掲載の嗅覚表現語彙をすべて調査・考察するのが理

想ではある。しかしながら、一時代にわずかに用例が見られる程度の語が多く含まれるのも事実である。また、現代語との繋がりを意識した史的研究を目指すのであれば、現代語においても使用が認められる語を優先的に

表一 調査語の選定

品詞・語(昇順) \ 辞書	『日本国語大辞典(第二版)』	『明鏡国語辞典』
形容詞	カウバシ	○
	カグバシ	○
	カンバシ	○
	クサシ	○
	〜クサシ	○
	ニホバシ	○
自動詞	カガフ	○
	カガユ	○
	カヲル	○
	クズ	○
	キコユ	○
	ニホフ	○
	ニホユ	○
名詞	カ	○
	カウバシサ	○
	カウバシミ	○
	カグバシサ	○
	カグバシミ	○
	カザ	○
	カヲリ	○
	カンバシサ	○
	クササ	○
	クサミ	○
	キキ	○
	ニホバシサ	○
	ニホヒ	○
	ニホヒヤカゲサ	○

調査・考察する必要がある。そこで、調査それ自体は表一の語をカバーしながら、考察は網掛けを施した語を中心に進めることにした。網掛けを施した語以外は、必要に応じて適宜取り上げることとする。

第二項 読みの推定

「調査語」のうち、特にプラスの評価性を有する語は、漢字のみで表記され読みが特定できない用例（例、香、馥）や、漢字表記に送り仮名が示されていても読みが不確かな用例（例、

香シ、芳シ）がある。これらは、文内における出現位置により、ある程度品詞を推定することができても、どのよう

に読むべきか（どの語であるか）を特定することは難しい。読みを類推する手立てとして、漢字表記かつ振り仮名の付される用例に注目してみても、語ごとの用字・送り仮名の共通性は見出せなかった。また、一資料中においても用字選択の自由度は高かったよう

で、読みの推測に利用できる傾向は十分に分からない。

ここで古辞書に目を転じ、プラスの評価性を有する調査語が和訓として配される漢字を調査してみる。その結果が、次に示す表二である^四。この調査結果から、一語に対応する漢字の種類が多様であるということが分かるばかりで、語ごとの用字の傾向を読み取ることは難しい。現代語では常用漢字の制定なども相まって、語ごとの表記はある程度定まっているが、近世以前ないし近代においては、そうした一語一表記の認識は通用しない。

表二 古辞書における調査語とその表記

辞書（成立年代）／語とその表記	自動詞					名詞					形容詞				
	ニホフ	カヲル	クンズ	カ	ニホヒ	カウバシ	カンバシ	甘兼	馨	馥	薫	芬	芳	香	
新撰字鏡（八九八―九〇一頃）															
色葉字類抄（一一七―一八二）															
類聚名義抄（平安末）															
和玉篇（一五世紀後半）															
文明本節用集（室町中）															
明心五年本節用集（一四九六奥書）															
天正十八年本節用集（一五九〇）															
饅頭屋本節用集（室町末）															
黒本本節用集（室町）															
易林本節用集（一五九七）															
書言字考節用集（一七一七）															

そこで、本研究では、読みが不確かな用例は積極的に読みを決定せずに、そのまま読み不明の用例として扱うことにする。ただし、「句」はニホフのために作られた国字である⁵ため、これに限りニホフ（連用形名詞ニホヒ）と読むことにする⁶。また、この読み不明の用例の中には、意味・用法や出現する言語資料の性格・成立年代などによりいくらか読みを類推することは可能なものもある（例、和歌・連歌のように音節数の限定から語を類推できる場合など）。具体的な考察を進める中で、そうした読みの類推を行うことにする。

第三項 意味の認定

意味分析にあたっては、その多面性に留意する必要がある（佐藤喜代治一九四九・服部四郎一九六四・宮島達夫一九七七 a b・宮島達夫一九八八・小野正弘一九九九など）。本研究では、宮島達夫（一九八八）の用語を援用し、対象の意味と文体的意味との二側面から語の表す意味を記述する。また、国広哲弥（一九六七）に従い、語の表す評価性に快・不快という生理現象を含め、これを対象の意味の一側面と考える⁷。

以下、対象の意味と文体的意味とについて、その認定基準を述べる。

（一）対象の意味

形容詞の意味分析において対象が重要な観点となり得ることは、時枝誠記（一九四一）をはじめ多くの指摘がある。ここでは、動詞と形容詞との相違に触れながら対象の重要性を説いた西尾寅弥（一九七二）を引用する。

動詞の表わす動作には、動作主という意味での主体のほかに、動作をうける相手や動作の客体なども重要な要素になっている。ばあいが多い。しかし、形容詞の表わす属性は、多く静的なものであり、ほかに積極的に働きかけるといふ性質のものではない。したがって、形容詞のばあい、属性の主体という観点は、意味分析のための主要な手がかりであると言ええる（四二頁）

ここで言う「属性の主体」とは、形容詞（それに類する働きを持つ知覚の自動詞）によって形容される対象を指す。よって、本研究では「対象」をもって「属性の主体」を表すことにする。西尾寅弥（一九七二）は現代語の研究であるものの、こうした対象を基準とした分析の観点自体は「解釈に依存せず、作品の変異を越えて通用する記述の枠組み」（田中牧郎二〇〇〇…四八頁）と呼べるものであり、意味変化の歴史を扱う研究において

も十分な効果をもたらすと考えられる。また、語が形容する対象への着目は、第一章第一節で掲げた「(二)嗅覚表現語彙がどのような事物・物事の描写に使用されてきたか」という問題の考察へ繋がるもので、本研究の目的達成には不可欠の観点である。

もちろん、注目すべき統語条件は対象のみにとどまらない。小野正弘(二〇〇一a)は、前述の西尾寅弥(一九七二)や田中牧郎(二〇〇〇)における形容詞分析から一歩進み、形容詞に限らず語(句)の意味変化に伴う形態論・語法上の変化を整理している。小野氏は、当該の語(句)そのものの運用と、その語(句)と同一文内における成分との関係との二側面から、より一般的な分析の枠組みを提示した。前者は、品詞の変化などの語法的運用の変化や接辞の付加・複合が該当する。また、後者は、修飾・被修飾成分の変化や格成分(本研究における対象)の変化が該当する。

本研究が考察の対象とする語のうち、嗅覚表現自動詞・名詞については、対象に加え、小野正弘(二〇〇一a)の言う「修飾・被修飾成分」が評価性の変化を考察するにあたり有益であると思われる⁸。本研究では特に修飾成分に注目する。

以下、対象と修飾成分とを具体的に規定しながら、その評価性についても述べていく。

(一・一) 対象

対象は、まず、実体を備えるか否かという観点から、具体的対象と抽象的对象との二つに分ける⁹。具体的対象とは事物であり、抽象的对象とは物事である。さらに細かな分類は、各章により(調査語により)異なるため、ここでは、本論第一部第一章、第三部第六章、第四部第七章・第八章に共通する分類を中心に取り上げる。その他の章に関しては、各章で独自の分類を示すことにする。

【具体的対象(事物)】

具体的対象は、植物(草木/花)、薫物、飲食物、風、身体(美しさ/超越性)、気(精彩・煙霧)、穢れ、その他に細分類する。こうした対象を概観するだけでも、嗅覚表現語彙がどのような描写に使用されてきたかが分かる。

植物 草木(草木と花との両方の場合も含む)であるか、花(花のみに限

る)であるかによってさらに分ける。

〔**薫物**〕 香料や香木をも含めた総称とする。また、薫物を薫染めたものも、それを身に付けた人間も含む。

(宇治拾遺物語・卷六・九)

〔**飲食物**〕 それを食する意図が存すると判断できるものを指す。

〔**風**〕 空間を覆う空気をも含めた総称とする。風それ自体が嗅覚刺激の発生源と考えられる場合である。嗅覚刺激の発生源が特定でき(他に対象が存在し)、風はそれを運ぶに過ぎない場合は含まない。

〔**身体(美しさ)**〕 色艶とも呼ぶべき身体の美しさを指す。他に嗅覚刺激を発する対象が存在しない場合に限る。これは、愛敬・目(見)・面ツキ・顔などの顔付に関する語彙や、視覚表現語彙と共起する傾向がある。

公卿、殿上人、これ「僧伽多の妻」を見て、限りなくめでまどはぬ人なし。みかど、きこしめして、のぞきて御覽するに、いはんかたなくうつくし。そこばくの女御、后を御覽じくらぶるに、みな土くれのごとし。これは玉のごとし。……みかど、ちかく召て、御覽するに、けはひ、すがた、みめありさま、かうばしくなつかしき事限なし。

〔**身体(超越性)**〕 往生人・神仏の登場に伴うにおいを指す。よく知られて

いるように、往生の場面では共通して、光や香気が満ち音楽が聞こえる。また、神仏などの超人間的な存在には常に芳香が付随することも、文化人類学の分野においてしばしば指摘されている(A・コルバン一九九〇など)。

臨終ノ体、端坐シテ化ス。紫雲靡テ、室ノ前ノ竹ニカ、ル。紫ノ衣ヲウチ覆ヘルガ如シ。音楽ソラニ聞ヘ、異香室ニ薫ズ。

(沙石集・卷一〇末・三)

〔**気**〕 精彩(色光彩)であるか、煙霧(煙や靄・霞・霧など)であるかによってさらに分ける。

〔**穢れ**〕 悪臭・異臭を発すると考えられる、禁忌とされる死人や排泄物、腐敗した飲食物、獣の総称とする。

〔**その他**〕 上記の対象に当てはまらないものを指す。また、次のような聴覚

情報も含める。

／花中の鶯舌は、花ならずしてか**んばし**、人は賢に仕へよ、賤しきに混るへからす
(天理本・花子)

ところで、身体や気を対象とする場合、嗅覚表現というよりも視覚表現的であるようにも思われる。しかし、一般に視覚情報と見なされるようなこれらの対象と、嗅覚情報であるにおいては、《発散》という共通項を有する「気」であり(E・ミンコフスキー一九八三)、峻別は困難である。さらに言えば、その他に含めた聴覚情報も、空气中に《発散》されている点において視覚・嗅覚情報と共通するのである(山本英一二〇〇二)。におう／におわないの判断が恣意的な文化行為である(A・コルバン一九九〇)とすればなおさらである。本研究では、嗅覚情報が視覚・聴覚情報と連続・共通する側面を有することを積極的に認め、従来、嗅覚表現からは除外されてきた用例をも含めた広義の嗅覚表現を扱う。

【抽象的对象(物事)】

抽象的对象はさらに、概念や人間の行為・態度に分けることも可能であ

る。ただし、そうした下位分類を示す必要のある場合に限りそれぞれに言及することにする。

これらのうち、普遍的に忌避されてきた穢れを対象とする場合のみ、語は単独でマイナス評価を表すとひとまず認める。しかし、対象が穢れ以外の場合、その対象へ下された評価性の判断を現代語の感覚から類推することは難しい(後述)。よって、穢れ以外の対象をとる語は、単独でプラス評価を表すと暫定的に考えておく。ただし、穢れ以外を対象にとりながら、自動詞・名詞がプラス評価以外を表すと判断する場合がある。その基準は次に述べる修飾成分の有無によっている。

(一・二) 修飾成分

嗅覚表現自動詞・名詞が、それ自体評価性を有する修飾成分に修飾される場合(例、臭クニホフ、良キニホヒニ)、語それ自体は単独で中立的な意味を表し、修飾成分を含めた表現全体でプラス／マイナス評価を表すと考える。つまり、評価性を有する修飾成分の有無によっては、対象が何であれ、語それ自体は単独で中立的な意味を表し、修飾成分を含めた表現全体でプラス／マイナス評価を表すと考えるのである。実際に得られた用例

の中で、プラス／マイナスの評価性を有する修飾成分と判断したものの代
表的な例を以下に示す。

プラスの評価性を有する修飾成分

イミジ^三、美シ、旨シ、得ナラズ、艶ナリ、面白シ、カウバシ、カグ
ハシ、カンバシ、清ゲ／ラナリ、懐カシ、深シ、優ル、目出度シ、ユ
カシ、良シ、世ノ常ナラズ、ヨロシ

マイナスの評価性を有する修飾成分

悪シ、浅マシ、嫌ナリ、ウタテシ、得ナラズ、得モ言ハレズ、乙リ
キナリ、汚シ、奇妙ナリ、クサシ、くクサシ、卦体ナリ、コチタシ、
甚ダシ、変ナリ、ムツカシ、悪シ^{ワレ}、悪シ^{ワロ}、ヲカシ

(一・三) 評価性についてのまとめ

対象の意味のうち、評価性に関してその判断基準をまとめると、次の表
三のようなになる。評価性は、対象と修飾成分の二段階で判断されることにな
る。

もちろん、こうした手続きが全き判断基準であるわけではない。しかし、

現代語の感覚で評価性の認定を行うと、当代の意識と必ずしも一致しない
と考えられる。「地域や時代など、背景となる文化」ことに、「芳香」になっ
たり、「悪臭」になったりもするという、「文化的行為」としての嗅覚の恣
意性」が存するためである(吉村晶子二〇〇八)。本研究では、明示的な言
語表現を判断基準にすることで、評価性を認定し、可能な限り客観的な判
断を下したい。

表三 評価性の判断基準

語自体の評価性	対象	修飾成分
プラス	穢れ以外	
中立的	穢れ	マイナスの評価性を有する 修飾成分あり
マイナス	穢れ	プラスの評価性を有する 修飾成分あり

* 修飾成分を含めた表現全体の評価性はマイナス
** 修飾成分を含めた表現全体の評価性はプラス

(二) 文体的意味

宮島氏の一連の論考(宮島達夫一九七七 a b・一九八八)などを取り上
げながら、本研究の考える文体的意味の全体像を提示する。

宮島氏は、現代語を例に、語の文体的意味(また意味・用法も)が文章
の文体を決定づけると主張する。語種が文体に影響を及ぼすと考えられが

ちであるが、そうした一般的な理解に疑問を呈したのである。その中で示された、文体的意味の三分法を紹介する。

宮島氏は、文体的意味を「文章語」「日常語」「俗語」という三層の連続と考える。まず、「文章語」は「もっぱらかきことばや、あらたまつたはなしことばだけにつかわれる」とし、和語系であるか漢語系であるかの区別の必要性も説く。次に、「日常語」は「積極的な文体の特徴をもたず、どのような種類のはなしことば、かきことばにも自由につかわれる中立的な層」と捉える。そして、「俗語」は「かきことばにはあらわれず、もっぱら、くだけた、下品なはなしことばでつかわれる」とする(宮島達夫一九七七b…八七四頁)。また、宮島達夫(一九八八)には、これら文体的意味と対象的意味との間に一定の相関関係の存するとの指摘もあり、大変参考になる。すなわち、「文章語」は「日常語」に比して、大規模、価値が高い、非個人的、抽象的、公的な現象の表現に偏るといっているのである^{一四}。如上の宮島氏の文体的意味の三分法を、古代語を扱うための三分法に応用させてみたい。以下、規定のしやすさを考慮し、日常語、俗語、文章語の順に述べる。

まず、前提として、言語はその伝達様式により、音声言語と書記言語とに二分される^{一五}。また、言葉遣いにより、文語的であったり口語的であったりする。これを踏まえ、日常語は、いずれの伝達様式・言葉遣いであつ

ても現れる文体的意味と考える。

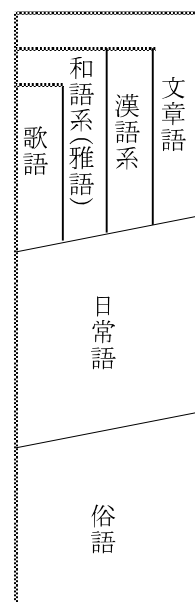
俗語は、音声言語資料に現れやすく、また、書記言語資料中の「書かれた話しことば」にも現れる可能性のある文体的意味と考える。言うまでもなく、近世以前においては音声言語資料が皆無であるため、俗語の認定基準はかなり高くなる。

文章語は、宮島氏に従い、漢語系と和語系とでさらに分ける。漢語系文章語は、漢文や和漢混淆文のうち文語文要素の強い言語資料(あるいは部分)に現れやすい文体的意味と考える。和語系文章語は、韻文や擬古文に現れやすい文体的意味と考え、また、その指し示すものが分かりやすい術語として雅語という呼称も使用することにする。雅語には、その中核をなすと考えられる歌語(和歌のことば)(田中章夫一九九九)も含める^{一六}。

ここでは、あくまでも大まかな文体・資料ジャンルの分類を提示したに過ぎない。例えば、具体的にどういった「文語文要素の強い言語資料(あるいは部分)」であるかについては、本論の中で述べることにする。

本研究における文体的意味の全体像をまとめたものが、次の表四である。文章語・日常語・俗語という三分法が連続的であることを表すため、それぞれの区切り線を斜めに引いた。

表四 文体的意味



(三) 形容詞の意味分類における術語

嗅覚表現形容詞については、その対象的意味から、状態を表すか情意を表すかといった、形容詞全体としての所属について言及する場合がある。

本研究では、川端善明(一九八三)による形容詞の意味分類を援用する。

川端善明(一九八三)は、形容詞述語文における主語―述語の関係を明らかにする中で形容詞の意味を四つに分類した。

まず、構造的に対立する二極として、情態形容詞・情意形容詞があるとする。前者は「知覚に基づく外的情態」を意味し、後者は「情意に基づく内的情態」を意味する形容詞である(一三二頁)。この二つの中間に、感覚形容詞・評価形容詞の二つを位置づける。

感覚形容詞とは、痛イ・冷タイ・暑イ・重イなどの下位感覚(痛覚・触覚・圧覚・温度感覚など)に対応する形容詞を指す。意味の上では知覚に対応する形容詞であるため、状態形容詞に含める。しかし、感覚は「私の身体(の一部)において成立し、感覚形容詞の主語は情意形容詞にお

る一人称主語に連続するため、文構造は情意形容詞に類似すると述べる。

また、美シイ・醜イ・良イ・悪イ・憎イなどを評価形容詞とする。これらの形容詞が表す情意的な意味は、主語をなす何らかの個別状況を機縁としながら、その他の多数の個別状況においても妥当する。そして、個別状況の不特定多数群を情意述語によって要約的に結論づけることを「評価」と呼んでいる。評価形容詞は、意味の上では情意性形容詞と等価である。しかし、情意の主者としての「私」が主語として文に現出しないという点から、文構造は情態性形容詞文に類似すると述べる。

以上をまとめると、形容詞はその表す意味によって、

情態形容詞 感覚形容詞 評価形容詞 情意形容詞

の四つに分類できることになる。本研究においても、川端善明(一九八三)に従い、この四つの術語を採用する。ただし、「情態形容詞」は「状態形容詞」と表記する。

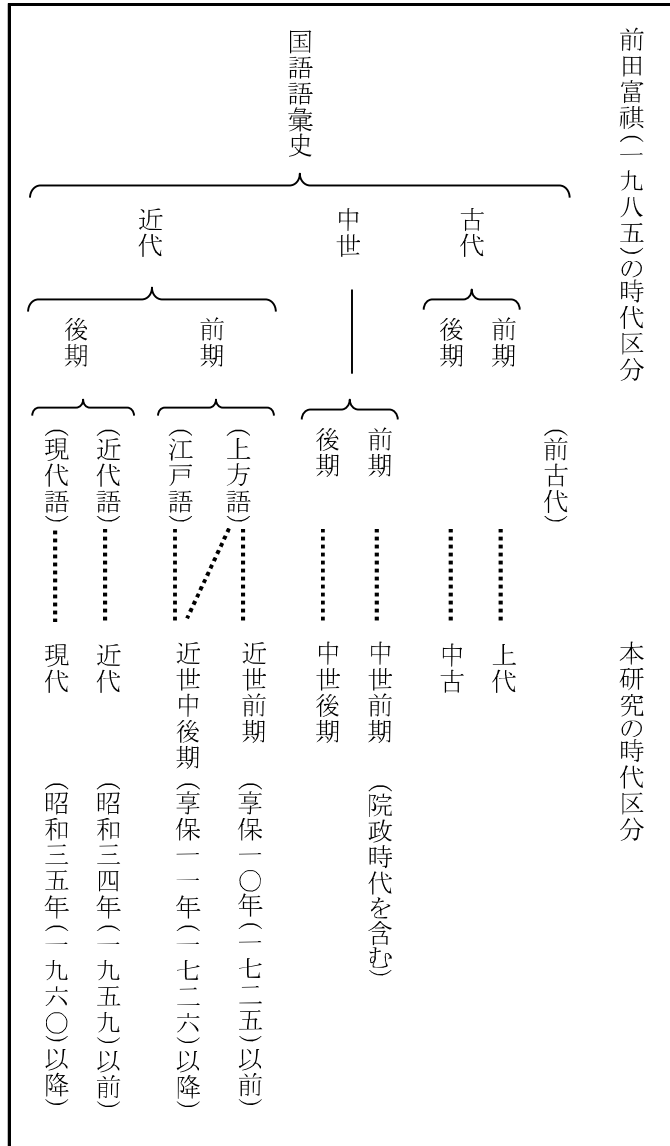
第四項 時代区分の規定

文法史や音韻史がその古代性・近代性を説明しやすいのに対し、語彙史

は、語彙全体の变化の方向性が見極めにくいためそれが難しい。そのため、具体的に時代区分をする場合には、作業仮説としてのそれを設定するほかない。本研究では、前田富祺（一九八五）の大まかな時代区分に若干の修正を加え、嗅覚表現語彙の変化を論ずるに有効と思われるものを設定する一七。

前田富祺（一九八五）は、次の図一のように、古代・中世・近代の三時

図一 時代区分の規定



前田富祺（一九八五）の時代区分

本研究の時代区分

代に分け、さらにそれぞれ前期・後期に細分が可能であると述べる。ただし、これは大まかな時代区分であって、年代による期間の限定はされていない。本研究では、前田氏の八区分を採用しつつ、政治史の時代区分を重ねながら明確な年代で区切った一八。

前田氏と異なるのは、近世を前期・中後期に分けた点である。これは、

嗅覚表現語彙において上方語／江戸語による差異があまり見られず、前

期・中後期に分けた方が変化の時期を見出しやすいと考えた結果である。もちろん、考察は地域差に配慮した上で行うが、地域差に関して特筆すべき点がなければ、中央語としての上方語の様相がそのまま江戸語へと伝播したと想定することにする。

なお、本研究における時代の八区分は、宮地敦子（一九七八）の提案する、個別的な語史に有効な「比較的細分化した時代区分」と位置づけ、複数の語彙や部分語彙の語彙史を考える場合には、別に「比較的大まかな区分」を採用する（三七頁）。後者は、古代・中世・近代の三区分とする。この三区分により、中世を移行期として仮説した上で、嗅覚表現語彙の古代性・近代性についても究

明してみたい一九。

第五項 調査資料

調査は、基本的に、韻文・散文を問わず上代から近世末までに成立した言語資料を出来る限り網羅できるよう努めた。各資料の使用テキストの詳細は、巻末資料：調査対象資料使用テキスト一覧を参照されたい^{二〇}。また、章ごとに追加調査を行う場合、その旨を断つた上で、用例を示す際に調査に使用したテキストを明記した。

なお、扱う言語資料が多いため、個々の用例数の詳細は巻末資料として示し、本文中では基本的に、文体や資料ジャンルごとに用例数をまとめ、その集合体を時代順に配列し史の変遷を記述する方針をとる。この方法は、文体・資料ジャンルごとに特徴的に現れる嗅覚表現を浮かび上がらせるという目的も兼ねる。もちろん、用例数をまとめる中でも、個々の資料性を捨象しすぎぬよう注意を払い考察を進める。

ところで、注一八でも述べたように、「集合体」としてのまとまりを優先したことで、文体・資料ジャンルによっては時代区分に若干の差が生じている。史の変遷を記述するにあたり、この差が大きな影響を与えることはない^{二一}と判断し、「集合体」を配列し用例数を示すという手段をとった。

以下、**時代**、**資料ジャンル**、資料名（※は一部調査）の順に調査対象資料を並べる。

上代

【記紀万葉（歌謡含む）】

古事記、日本書紀、万葉集、神楽歌

中古

【仮名散文Ⅰ期】

伊勢物語、土左日記、大和物語、平中物語、宇津保物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、和泉式部日記、源氏物語、紫式部日記、栄花物語、浜松中納言物語、堤中納言物語、更級日記、狭衣物語

中世前期

【仮名散文Ⅱ期】

讃岐典侍日記、大鏡、今鏡、とりかへばや物語、篁物語、松浦宮物語、無名草子、百詠和歌、源通親日記、無名抄、たまきはる、うたたね、十六夜日記、中務内侍日記、徒然草、竹むきが記、とはずがたり、増鏡

【説話（宗教関係資料含む）】

今昔物語集、古本説話集、打聞集、唐物語、癡心集、宇治拾遺物語、閑居友、今物語、撰集抄、十訓抄、古今著聞集、沙石集、親鸞集三帖和讃、日蓮聖人遺文、梶尾明恵上人伝記、梶尾明恵上人遺訓、一遍上人語録

【和漢混淆文Ⅰ期】雲州往来、水鏡、方丈記、保元物語、平治物語、平家物語、海道記、東関紀行、源平盛衰記

【中世後期】

【和漢混淆文Ⅱ期】

曾我物語、義経記、太平記、信長公記、地藏菩薩靈驗記

【室町物語】

あしびき、転寝草紙、しぐれ、鴉鷲物語、岩屋の草子、かざしの姫君、高野物語、西行、俵藤太物語、弁慶物語、毘沙門の本地、猿の草子、師門物語、さゝやき竹、大黒舞、頼朝最後の記、御茶物語、井田本羅生門※

【抄物】

杜詩続翠抄、漢書抄、百丈清規抄、史記抄、日本書紀兼俱抄、古文真宝桂林抄、古文真宝彦龍抄、山谷抄、湯山聯句抄、論語湖月抄※、蒙求抄、莊子抄、毛詩抄、四河入海、中興禅林風月集抄、全九集、句双紙抄、中華若

木詩抄、論語抄、玉塵抄※、三関斎本碧岩抄※、古文真宝笑雲抄※、絶句

鈔※、五家正宗賛抄※、京大本孟子抄※、勅規桃源鈔※、三体詩幻雲抄※、三体詩素隠抄※

【キリシタン資料】

天草本平家物語、天草本伊曾保物語、天草本金句集、コンテムツスムンヂ、ぎやどぺかどる、どちりなきりしたん

【狂言台本】

天正狂言本、祝本

【室町雑】用例は「抄物・キリシタン資料・狂言台本」に含める。

さゝめごと、高館、あづまの道の記、実隆公記※、玉吟抄※、河村誓真聞書※、蓮如御文章※、連理秘抄、申楽談儀、親長卿記※、三十二番職人歌合

【近世前期】

【狂言台本Ⅰ期】

大蔵流・虎明本、和泉流・天理本、大蔵流・虎清本、和泉流・和泉家古本、狂言記、鷺流・忠政本、狂言記外、続狂言記

【仮名草子】

酒茶論、大枕、恨の介、大坂物語、竹斎、薄雪物語、尤之双紙、清水物語、伊曾保物語、仁勢物語、是樂物語、為愚痴物語、ねごと草、浮世物語、元の木阿弥、都風俗鑑、好色袖鑑

【浮世草子】

好色訓蒙図彙、好色貝合、男色十寸鏡、好色破邪頭正、好色通変歌占、人倫糸屑、好色万金丹、好色大福帳、新色五巻書、けいせい色三味線、元禄太平記※、風流曲三味線、古今堪忍記、けいせい伝受紙子、傾城禁短氣、世間娘氣質、国姓爺明朝太平記、傾城手管三味線、傾城歌三味線、世間母親容気、当世宗匠氣質

【評判記】

用例は「浮世草子」に含める。
難波物語、野郎虫、たきつけ草 もえくる けしすみ、色道大鏡、難波鉦、名女情比

【嘶本I期】

戲言養気集、寒川入道筆記、醒睡笑、きのふはけふの物語、わらいくさ、百物語、私可多咄、理屈物語、一休はなし、狂歌咄、竹斎はなし、一休諸国物語、秋の夜の友、宇喜蔵主古今咄揃、当世軽口咄揃にがわらひ、囃物語、杉楊枝、軽口大わらひ、当世手打笑、当世口まね笑、鹿野武左衛門口伝はなし、鹿の巻筆、正直咄大鑑、新竹斎、籠耳、二休咄、諸国落首咄、

枝珊瑚珠、軽口露がはなし、遊小僧、初音草嘶大鑑、露新軽口はなし、軽口御前男、軽口ひやう金房、軽口あられ酒、露休置土産、軽口福蔵主

【井原西鶴作品】

好色一代男、難波の兒は伊勢の白粉、諸艶大鑑、西鶴諸国はなし、曆、凱陣八嶋、好色一代女、好色五人女、本朝二十不孝、男色大鑑、武道伝来記、懷硯、日本永代蔵、武家義理物語、嵐は無常物語、色里三所世帯、新可笑記、好色盛衰記、本朝桜陰比事、一目玉銚、新吉原つねづね草、世間胸算用、浮世栄花一代男、西鶴置土産、西鶴織留、西鶴俗つれづれ、万の文反古、西鶴名残の友、俳諧石車、難波土産、精進膾、俳書・発句その他

【浄瑠璃I期（近松）】

出世景清、三世相、津戸三郎、蟬丸、十二段、最明寺殿百人上臈、日本西王母、曾根崎心中、用明天王職人鑑、堀川波鼓、心中重井筒、五十年忌歌念仏、卯月の潤色、淀鯉出世清徳、碁盤太平記、心中万年草、孕常盤、吉野都女楠、冥途の飛脚、薩摩歌、今宮心中、姫山姥、夕霧阿波鳴渡、長町女腹切、大経師昔暦、嘉平次おさが生玉心中、国性爺合戦、聖徳太子絵伝記、博多小女郎波枕、山崎与次兵衛寿の門松、曾我会稽山、傾城酒呑童子、平家女護嶋、傾城島原蛙合戦、心中天の網島、双生隅田川、女殺油地獄、信州川中島合戦、心中宵庚申、浦島年代記

【近世雜Ⅰ期】

室町殿日記、反故集、捷解新語、女重宝記、町人囊、それぞれ草、ひとり

ね

【俳諧Ⅰ期（他韻文資料含む）】

犬子集、毛吹草、埋木、芭蕉文集、芭蕉句集、真蹟去来文※、三冊子、風

俗文選、口真似草※、談林十百韻※、太郎五百韻※、句兄弟※、桜川※、

崑山集※、柱曆※、住吉みやげ※、大花笠※、古今夷曲集※、後撰夷曲集

※

【近世中後期】

【浄瑠璃Ⅱ期】

心中恋の中道、心中二つ腹帯、右大将鎌倉実記※、本朝檀特山※、八百屋

お七、壇浦兜軍記、猿丸太夫鹿卷毫、ひらかな盛衰記、夏祭浪花鑑、菅原

伝授手習鑑※、姫小松子日の遊※、神靈矢口渡、桂川連理柵、伽羅先代萩、

道中亀山嘶、新版歌祭文、鎌倉三代記、近頃河原達引、蝶花形名歌島台

【歌舞伎】用例は「浄瑠璃Ⅱ期」に含める。

幼稚子敵討※、御撰勸進帳※、猿若万代厦※、傾城飛馬始※、韓人漢文手

管始（唐人殺し）※、お染久松色読販※、染替蝶桔梗、桜姫東文章、綴合

新著膝栗毛※、宝曾我島物語（島の徳蔵）※、大杯觴酒戦強者※、芽出柳
緑翠松前

【狂言台本Ⅱ期】

鷺流・保教本、狂言記拾遺、大蔵流・伊藤源之丞本、鷺流・名女川本、大

蔵流・虎寛本、大蔵流・虎光本、和泉流・雲形本、鷺流・賢通本

【談義本】

艶道通鑑、田舎荘子、風俗文集 昔の反古、当世下手談義、教訓雑長持※、

当風辻談義※、風流志道軒伝、根南志具佐、根無草後編、当世穴さがし、

教訓乗合船※、遊婦多数寄、成仙玉一口玄談

【近世雜Ⅱ期】

交隣須知、他阿上人法語、四方のあか、癩癩談、玉勝間、道二翁道話、臆

大小心録、山中人饒舌、松翁道話、蘭東事始、花月草紙、松屋筆記※、半

日閑話※、紹鷗茶湯百首、高ねおろし※、鳩翁道話、近世女風俗考※、続

飛鳥川※、玲瓏随筆

【嘶本Ⅱ期】

軽口はなしとり、軽口機嫌囊、座狂ばなし、軽口独機嫌、軽口蓬萊山、水

打花、軽口耳過宝、軽口へそ順礼、軽口腹太鼓、鹿の子餅、楽牽頭、軽口

大黒柱、聞上手、飛談語、坐笑産、口拍子、今年咄、聞上手二篇、近目貫、

御伽噺、再成餅、都鄙談話三篇、仕形噺、絵本珍宝艸、新軽口初商ひ、軽口五色昏、茶のこもち、一のもり、和漢咄会、軽口駒佐羅衛、頓作万人噺、売言葉、鳥の町、一の富、立春噺大集、高笑ひ、夕涼新話集、書集津盛噺、年忘噺角力、春俗、管卷、時勢話大全、時勢話綱目、喜美賀楽寿、さとすゞめ、譚囊、今歳笑、福の神、青楼吉原咄、金財布、寿々葉羅井、気のくすり、万の宝、大御世話、明朝梅、鼠の笑、笑長者、豆談話、梅屋敷、嗚呼笑、話問訥、春帖咄、歳旦話、夜明鳥、落咄人来鳥、福喜多留、下司の智恵、百福物語、千年草、かたいはなし、うぐひす笛、福種笑門松、振鷺亭噺日記、富貴樽、拍子幕、落咄梅の笑、滑稽即興噺、わらひ鯉、軽口筆彦咄、鳩灌雑話、即当笑合、喜美談話、噺手本忠臣蔵、雅興春の行衛、臍が茶、庚申講、三歳智恵、無事志有意、新玉箒、塩梅余史、意戯常談、新製欣々雅話、臍煎茶吞噺、虎智のはたけ、曲雑話、馬鹿大林、太郎花、六冊懸徳用草紙、新撰勸進話、落咄臍くり金、珍学問、花の咲、麻疹噺、東都真衛、笑府商内上手、はなし亀、しみのすみか物語、蛺蝶児、落咄見世びらき、譚話江戸嬉笑、正月もの、瓢百集、笑顔始、玉尽一九噺、画ばなし当時梅、妙五天連都、臍の宿かえ、会席噺袋、福三笑、身振噺寿賀多人景、〔芝居絵落噺貼込帳〕、おとぎばなし、春興噺万歳、はなしのいけす、小倉百首類題話、落噺屠蘇喜言、咄土産、白癡物語、落噺題懸鎖、噺栗毛、か

こひものの落し噺し、女郎買の落し噺し、十二支紫、延命養談数、落噺年中行事、笑話草かり箆、一口ばなし、百面相仕方ばなし、縁取ばなし、昔はなし、落しばなし、俳諧発句一題噺、万燈賑ばなし、春色三題噺初編、諺臍の宿替※、筆はじめ※

【洒落本】

史林残花、南花余芳、両都妓品（西都妓品・両巴扨言）、吉原源氏六十帖評判、傾城つれづれ草、嶗陽英華、会海通窟、白増譜言経、百花評林、瓢金窟、華里通商考、華里通商考（異本）、阿房枕言葉、仙台冶情、烟花漫筆、陌婦伝、猪の文章、当世花街談義、吉原出世鑑、交代盤栄記、詼楽譚論談、魂胆総勘定、本草妓要、禁現大福帳、花菖蒲侍乳問答、穿当珍話、風俗七遊談、風俗八色談、西郭燈籠記、異素六帖、聖遊廓、花街浪華色八掛、秘事真告、陽台遺編・妣閣秘言、遊客年々考、水月ものはなし、迷処邪正按内拾穂抄、肉道秘鍵、月花余情、月花余情（異本）、十二段弥味草紙、正夢後悔玉、くたまき綱目※、感陌醉裏、色道このてかしわ、列仙伝、開学小筌、原柳巷花語、玄々経、本朝色鑑、夢中生楽、〔西郭東涯優劣論〕、色道三略卷、永代蔵、旧変段、遊郭擲銭考、花落色里つれづれ草、当世座持話、古今吉原大全、北里懲毖録、間似合早粹、江戸評判娘揃、郭中奇譚、郭中奇譚（異本）、評判娘名奇草、あづまの花、遊子方言、辰巳之園、風流醉談

議、甲馭新話、当世爰かしこ、郭中掃除雜編、当世穴知鳥※、傾城買指南所、通志選※、富賀川拜見、蛇蛻青大通、卯地臭意、つれづれ酔か川、傾情知恵鑑、浮世の四時※、残座訓、通言総籬、玉之帳※、青楼昼之世界錦之裏、傾城買二筋道、松登妓話※、南遊記※、遊僊窟烟之花※、当世嘘之川※、老楼志

【黄表紙】

高漫齊行脚日記、元利安売鋸商内※、莫切自根金生木、大悲千祿本、江戸生艶気樺焼、心学早染艸、敵討義女英、賢愚湊錢湯新話、仙術独稽古

【読本】

雨月物語、椿説弓張月、春雨物語

【滑稽本】

風来六部集、戯男伊勢物語、東海道中膝栗毛、戯場粹言幕の外、浮世風呂、続膝栗毛※、狂言田舎操、浮世床、大千世界楽屋探、七偏人、大わらい臍の西国※

【人情本】

仮名文章娘節用、春色辰巳園、春色梅児誉美、貞操婦女人賢誌、春色恵の花、花の志満台、いろは文庫、閑情木摘花、清談若緑、春色恋廻染分解

【俳諧Ⅱ期（他韻文資料含む）】

蕪村句集、小林一茶句、鶉衣、誹風柳多留、江戸新八百韻※、武玉川※、賀茂翁家集拾遺、良寛歌、ほたる火※、雲鼓評万句合・寛延三※、川柳評万句合・宝暦一〇※、川柳評万句合・宝暦一三※、川柳評万句合・安永元※、伊勢冠付、神酒の口、木摘花※、俳諧・三〇※、歌羅衣※、太箸集※、大花笠※、万載狂歌集※

第二節 研究の手順

本節では、本論・結論の構成を簡潔にまとめながら研究の手順について述べる。

第一項 形容詞

本論第一部・第二部では嗅覚表現形容詞を考察の対象とする。第一部ではプラス評価を表す形容詞について、第二部ではマイナス評価を表す形容詞について、それぞれ論ずる。

第一部第一章では、カグハシとその転化形であるカウバシ・カンバシを取り上げる。三語それぞれの意味・用法の成立過程を明らかにしながら、プラスの評価性を有する嗅覚表現形容詞語彙がどのような史変遷をたどってきたのかを考察する。また、補節では、この三語に関連して、現代

語において衰退しているニホハシ・ニホ（ヒ）ヤカナリや、現代語においてのみ使用されるカオリ高いについても触れる。

第一部第二章では、前章で扱った形容詞を含んだ成句「梅檀は二葉より芳し」に注目する。その述語部分がカウバシからカンバシへと交替する過程を追いながら、第一章で明らかにした日常語におけるカウバシ・カンバシの変化が、文章語に属する成句に及ぼした影響について考察する。

第二部第三章では、クサシとその派生語と考えるべきモノクサシとを歴史的に対照させながら、二語それぞれの意味領域の全貌を明らかにする。特に、本来、嗅覚表現形容詞であったモノクサシが、人間の性向を評価する形容詞へと変化していく過程とその背景について究明する。また、補節では、モノクサシの類義語と言われるモノウシを簡単に取り上げることによって今後の課題を導く。

第二部第四章では、前章で扱ったクサシに関連して、接尾辞・クサシを取り上げる。接尾辞・クサシが結合力（上接成分を拡大する力）を発揮し上接成分を拡大していくとともに、この接尾辞自体に生じた意味の抽象化を通史的な観点から整理する。また、接尾辞・クサシにより産出されてきたマイナスの評価性を有する嗅覚表現形容詞クサシが、語彙としてどのような史的变化をたどってきたのかを考察する。

第二部第五章では、前章で扱った接尾辞・クサシの結合例のうち、水クサイ三の語史を個別に記述する。味覚表現への使用が可能になるこの語の表現特性と、そこから感情的な意味を表す形容詞へと変化する史的变化を考察し、意味変化の要因を類義語水ツポイなどとの共存過程の中に位置づける。

第二項 自動詞

本論第三部・第四部では嗅覚表現自動詞を主な考察の対象とする。第三部では日常語としての性格をも有するニホフと自動詞的用法、ニホフの連用形名詞について、第四部では文章語であるカラル・クズについて、それぞれ論ずる。

第三部第六章では、ニホフと、知覚の自動詞と同じ働きをする自動詞的用法「名詞＋スル」とを取り上げる。プラス評価のみを表していたニホフがプラス／マイナス両極の評価性を獲得するに至るまでの意味の下降過程を、自動詞的用法「名詞＋スル」との共存過程の中で解明する。

第三部第七章では、前章で扱ったニホフの連用形名詞ニホヒを中心に、カ・カワリ・カザなどを含めた嗅覚表現名詞を扱う。プラス／中立的／マイナスの評価性を有する中心的な嗅覚表現名詞をめぐるニホヒとカとの交

替に注目しながら、嗅覚表現名詞語彙がどのような史の変遷をたどってきたのかを考察する。

第四部第八章では、カヲルとその慣用表現「風カヲル」、それと関連があるとしてきた漢語「薫風」を取り上げる。カヲル単独の史の変遷を明らかにした上で、「風カヲル」の発生・展開へと考察を進め、特に漢語「薫風」との関係性について従来の指摘を再検討する。そして、その中で、「風カヲル」という慣用表現の誕生に、嗅覚表現語彙の在り方が影響を及ぼしていた可能性について追求する。

第四部第九章では、第七章・第八章の和語動詞に対する漢語サ変動詞クズを扱う。身体（超越性）を対象にとり往生人や神仏の登場場面に多用される一方、マイナスの評価性をも有し得たというクズの対象的意味を、この語の文体的意味から統一的に理解する。また、補節では、神仏の登場場面が頻出する狂言台本を取り上げ、クズの史の変遷と狂言台本における伝承の状況とを比較する。

第三項 結論

結論第一章では、本論の内容を簡潔にまとめ、それを基礎に語彙史の観点から嗅覚表現語彙の史の変遷を考察し、嗅覚表現語彙の古代性・近代性

について検討する。また、補節では、本論で触れていない嗅覚表現形容詞・自動詞の統語環境について言及する。

第二章では、本研究の成果と、そこから導かれる今後の課題を述べる。

第四項 凡例

用例を示す際は、調査語以外に限り表記を適宜私に改めた。筆者が私に補足した部分は「」で括り、底本以外の諸本によって補足した部分は「〔 〕」で括った。また、省略した部分は「……」、欠字・不明瞭箇所は「□」で示した。

なお、用例の出典を示す際は、章ごとに追加調査したものを除き、全体に共通する近世以前の言語資料（巻末資料、調査対象資料使用テキスト一覧に掲載のもの）については使用テキストの明記を省略した。

一 副詞や形容動詞も含まれるとしながら、その代表は形容詞であるとする。
二 術語は三上章による。

三 ただし、『今昔物語集』においては、天竺・震旦部が「香」、本朝部が「馥」を使用するという、使用漢字の相違が見られた。このことは、すでに佐藤武義（一九八四）が指摘している。

四 カウバシは特に漢字の種類が多く、ここでは古辞書間で共通する漢字、実際の用例にも見られる漢字を中心に一部抜粋し掲示した。

五 「句」字を取り上げたものに、こまつひでお（一九七六）や大野 透（一九七七）、三木雅博（一九八二）、朱 捷（一九九八 a b）、笹原宏之（二〇〇七）などがある。諸氏様々な見解を提出するが、「句」は「勻」を変形させ新たに作った国字であり、ニホフの字義・字訓に特定されていたと見なす点は共通する。

六 表二からは、『色葉字類抄』『類聚名義抄』において「句」字がカラルと読まれることが分かるが、他にカラルの用字としての「句」の例は見出せない。よって、『色葉字類抄』『類聚名義抄』のこの和訓例は、「句」にニホフとカラルとの両訓を認めることで、ニホフとカラルとの二語の意味の重なりを示したものではなからうか。「句」字は、あくまでもニホフの国字であったと考えられる。

七 立場の異なるものに西尾氏の見解がある。西尾氏は、内的経験である快・不快が主観的な判断である評価性とは異なると考え（西尾寅弥一九七二）、語感に含める（西尾寅弥一九七七）。また、評価性を対象的指示的内容にかぶさるものとして位置づける（西尾寅弥一九九八）。

八 他の形態・語法からの分析をも試みた結果、修飾成分が最も有効である

と判断した。

九 対象から意味を分析するため、次のように、言葉の意味を説明する文脈での用例は考察の対象外とした。

草色勻等意色ノウルくトシタルヲ云又ハニヲウト読ハウスカウハシ
キ意也。先生ノ此句□齋卜訓シ又音ニ勻ト点スルトキンハ可矣ニヲウ
ト点シコトハイヤニテアルソ
（四河入海・六ノ三）

一〇 挙例の類話を所収する『今昔物語集』では、カウバシではなく、一貫して視覚表現語である美麗を使用する。

王宮ノ人、皆出デ、「僧伽多の妻を」見ルニ、美麗ナル事无並シ。此
レヲ見テ愛欲ヲ不^{【わらわ】}菽ザル者无シ。国王、此ノ由ヲ聞キ給テ、蜜ニ見給
ニ實ニ美麗无並シ。若干ノ寵愛ノ后ニ見競ブルニ、彼レハ土ノ如シ、
此レハ玉ノ如シ。
（今昔物語集・卷五・第一）

二 「人々が他の世界からきたものの存在を認識する場合に、香りのものつ
意味は決定的だった。」「場合によっては、香は目で確認できないものを具
体的に物語るものとみなされていた。だからこそ、香は一方で異香として、
神仏の存在を人びとに教え、他方で異臭として、往生できなかった人の死
をも教えることができたのである。」（千々和 到一九八七・一四一・一四

二〇頁、一五二・一五三頁)

二三 名詞については、述語がマイナスの評価性を有する場合(例、ニホヒ悪シ)も含める。

二四 プラス／マイナス両方の評価性を有する成分は、文脈によりその評価性を判断した。こうした成分については一つ一つ断らず、すべて同じ処理をする。

二五 大規模(例、「草原」対「くさはら」)、価値が高い(例、「庭園」対「いわ」)、非個別的(例、「樹木」対「き」)、抽象的(例、「市場」対「いちば」)、公的(例、「見解」対「意見」)。

二六 いわゆる話しことば／書きことばの区別とは異なる。音声言語資料の存在しない近世以前においては、書記言語資料によってのみ言語の実態を知ることになる。つまり、「書かれたことば」しか知り得ないのである。

本研究においては、話しことば／書きことばの区別は難しい。

二七 連歌・俳諧に詠まれる季語は、日常語から文章語にわたる文体的意味を有すると考える。

二八 時代区分に関する諸説については、宮地敦子(一九七八)に詳しい。

二九 ただし、本研究では、用例の得られた言語資料を文体やジャンルによってまとめ、その集合体を時代順に配列し史的変遷を記述する方法をとる(後

述)ため、「集合体」としてのまとまりを優先して、一言語資料の成立年代が必ずしも時代区分と一致しない場合がある。例えば、談義本というジャンルで一括される資料群は、そのほとんどが享保一一年以降に成立しており、近世中後期の用例として扱うことができるものの、享保一〇年以前に成立した談義本もわずかに認められる。そうした談義本の用例も、「談義本」という「集合体」として近世中後期の用例と考えるのである。

三〇 古代性・近代性の究明という観点には、乾善彦(二〇〇一)を参考にした。乾氏は、文法史・音韻史を例に、古代と近代とはその時代を特徴づける要素を説明しやすいのに対し、中世は難しいと述べ、むしろ「移行期」としての中世を考えておくことも、一つの見方であろう」と述べる。そして、古代・(移行期としての)中世・近代の三分をとるならば、「時代区分の大きな目的は、古代性と近代性の説明」、つまり、「体系の史的変遷に有効な」その時代を特徴付ける要素の究明であると指摘する(二七頁)。

三一 既刊の索引を利用した場合も、原文にあたり表記・意味を確認した。
三二 用例数には含めないが、訓点資料から参考例を示す場合がある。調査には『訓点語彙集成』『汲古書院・二〇〇七・二〇〇九』を利用した。

三三 その出現時期を考慮し、イ音便化した形で示した。詳しくは該当章を参照されたい。

本論

第一部 形容詞 I

カグハシとその転化形における別語意識の成立

第一章 カグハシ・カウバシ・カンバシの意味・用法分担 —原形・転化形の共存過程—

第一節 はじめに

現代語について、〈快いにおいがする〉さまを表す嗅覚表現形容詞を考えてみると、まずカグワシイが思い浮かぶ。また、意味が限定的ではあるものの、コウバシイもこれに相当しよう。そして、一般に広く嗅覚表現に使用されるとは言い難いが、カンバシイも挙げられる。

カグワシイは香^カクワシイから成る語であり、この語の第二音節〔*hu*〕が〔*ε*〕と鼻母音化し第三音節が有声化したのがコウバシイ（亀井 孝一 九五六・一九七二）、第二音節が撥音化し第三音節が有声化したのがカンバシイである（浜田 敦一九五二）。つまり、カグワシイ—コウバシイ・カンバシイは、原形—転化形の関係にある。現代語において原形と転化形とが

共存し得ている事実は、各語が独自の意味・用法を築き上げた完全なる別語となったことを物語る。そして、それが可能になったのは、三語が互いに影響を及ぼし合いながら語彙体系の均衡を維持しようとしたためであるう。

本章では、これら三語の意味・用法の成立過程を明らかにしながら、プロセスの評価性を有する嗅覚表現形容詞語彙がどのような史的変遷をたどってきたのかを考察していく。

第二節 問題の所在

第一項 先行研究

現代語形容詞の意味・用法を記述した先行研究の中で、カグワシイ・コウバシイ・カンバシイ三語を取り上げたものには、西尾寅弥（一九七二）や飛田良文・浅田秀子（一九九一）などがある。

西尾寅弥（一九七二）は、日本語の形容詞に〈不快なおいがする〉さま—ま一般を表す語としてクサイがあるのに対し、〈快いにおいがする〉さま—一般を表す語が欠けていると指摘する。ただし、ある制限つきでカグワシイ・コウバシイ・カンバシイの三語がこれに相当すると言及する。すなわち、カグワシイは文章語・詩語的であるという文体的意味における制限、コウ

バシイは飲食物の焦げる快いにおいのみを表すという対象的意味における制限、カンバシイは嗅覚表現よりも評価語として多用される傾向にあるという対象的意味・用法の制限である。

飛田良文・浅田秀子（一九九一）は、西尾寅弥（一九七二）の成果も取り入れながら、この「制限」をより詳細に記述する。ここではカグワシイ・カンバシイについて参照しておく、まず、カグワシイは、文体的意味（文章語）に加え、専ら（植物の快いにおいがする）さまを表すという対象的意味の偏りを指摘する。また、カンバシイがカグワシイと文体的意味（文章語）を同じくすることや、対象的意味にも重なりが見られると言及する。すなわち、カンバシイが嗅覚表現として使用される場合には、（植物の快いにおいがする）さまを表すのである。さらに、カンバシイが評価語として使用される場合には否定表現を伴うという統語的特徴や、客観的な基準に照らして好ましくないというニュアンスの付随することも言及する。

古代語研究においては、上代のカグハシの意味を文学的見地から考察した松本 剛（一九七八）もあるが、語源論から「呪的な言葉、いわば対象の背後に霊威のごとき尊い力の存在を意識して発せられた言葉」（二七頁）という一解釈を提出するにとどまっている。

また、『日本国語大辞典（第二版）』のような、語の意味それぞれについ

て初出例を挙げる辞書を参照しても、対象的意味・文体的意味の成立時期を特定することは困難である。特に、コウバシイに関しては、（飲食物の焦げる快いにおいがする）という語釈自体が見えないために、その初出例すら知り得ないのである。

第二項 本研究の立場

現代語における三語の意味・用法は、西尾寅弥（一九七二）や飛田良文・浅田秀子（一九九一）により概観することができる。しかし、こうした現代語の様相がいかにして成立し得たかという史の変遷については、これまでに十分に明らかにされてこなかった。本章では、現代語研究の成果との関連づけを目指した三語それぞれの語史と、三語間の相互影響を史的観点から記述する語彙史を目指して考察を進める。その際、先行研究で見たように、対象的意味の限定化（特にカウバシについては（飲食物の焦げる快いにおいがする）さまを表す初出例の特定）や、文体的意味の確立、さらに、統語環境にも留意した史の変遷の記述が最低限必要となろう。

第三節 用例の分類基準

第一項 表記と語の認定

用例は、カグハシ・カウバシ・カンバシ・読み不明の四つに分類する。読み不明とは、「香(ば)し」「芳(ば)し」のように、漢字表記のため読みの分からない用例である。古辞書類によっても読みの類推に有用な結果は得られず(序論第二章第一節参照)、振り仮名の施された漢字表記の用例に注目してみても、また、一資料における用字選択に注目してみても、語と漢字との結びつきについて特筆すべき傾向は見出せなかった。そこで、漢字表記のものは積極的に読みを決定せずに、読み不明という項目を設けることにした。ただし、近世以前においては、三語中カウバシが圧倒的に優勢であることを踏まえ、読み不明もカウバシと読む可能性が高いと考え、カウバシの項で付随的に扱うことにした。

しかし、ここで大きな問題となるのが、「nu」の撥音化現象が表記に完全には反映されないという事実(迫野虔徳一九八七)である。先に触れたように、カウバシはカグハシの第二音節「nu」が鼻母音化した語、カンバシはカグハシの第二音節「nu」が撥音化した語であり、その第二音節の音価は近似する。少なくとも、中世後期に才段長音の混同が生じるまでは、カウバシ・カンバシの二語に明確な別語意識が存していたとは考えにくく、表記上ではカウバシが優勢であっても、その時点でカンバシという発音が存在しないという証拠にはならない。才段長音の混同以前、つまり、二語

間に別語意識が確立する中世後期以前においては、たとえカンバシと発音されていても、カウバシ・カンバシはほぼ同じ音価の語であると書き手が認識し、カンバシを「カウバシ」と表記する可能性も十分に考えられるのである。

こうした発音と表記との乖離という問題をはらむものの、本研究では、「カンバシ」という表記が定着する段階をもってこの語の一語としての独立性を認め、それ以前における「カンバシを「カウバシ」と表記する可能性」については問題としないことにする。なぜなら、「カンバシ」という表記が定着する段階、すなわち、撥音化した「nu」が「ン」と積極的に表記される段階が、カウバシ・カンバシの二語間に明確な別語意識の萌芽した段階であったと考えるためである。

第二項 “焦げる”の定義

“焦げる”の定義は、調理に限らず、火や熱などによって状態が変化したものにおいてである。ただし、薫物はここに含めなかった。薫物も火(その熱)によってにおいてを発散させてはいるが、超越性の象徴として身にまとう薫物の“焦げる”と、現代に引き継がれるような現実的なものの“焦げる”とは、意味合いが異なると考えた

めである。なお、調査結果を示す全体表では、「焦げるにおい」を○数字で表記し、他の用例数と区別した。

見ていく。

第一項 カグハシ

第四節 カグハシ・カウバシ・カンバシの史的変遷

(一) 上代・中古

第一項から第三項では、近世以前における三語それぞれの語史を詳述する。それを踏まえ、第四項では、近代以降における史的変遷を三語同時に

カグハシは古く上代より見え、いずれも植物(草木/花)を対象とする。歌謡の用例しか確認できず、訓点資料には使用されていないようである。

資料ジャンル\対象	カグハシ			
	植物(草木/花)	薫物	その他	抽象
記紀万葉・上代計	2/5(7)	0	0	0
	7(7)			
仮名散文Ⅰ期・中古計	0/1	1	0	0
	2			
仮名散文Ⅱ期				
説話				
和漢混淆文Ⅰ期				
中世前期計	0	0	0	0
	0			
和漢混淆文Ⅱ期				
室町物語				
抄物・キリシタン資料・狂言台本				
中世後期計	0	0	0	0
狂言台本Ⅰ期				
仮名草子				
浮世草子				
噺本Ⅰ期				
井原西鶴作品				
浄瑠璃Ⅰ期(近松)				
近世雑Ⅰ期				
俳諧Ⅰ期				
近世前期計	0	0	0	0
	0			
浄瑠璃Ⅱ期				
狂言台本Ⅱ期				
談義本				
噺本Ⅱ期				
近世雑Ⅱ期	0/2(2)		1	
洒落本				
黄表紙				
読本				
滑稽本				
人情本				1
俳諧Ⅱ期	0/1(1)			1(1)
近世中後期計	0/3(3)	0	1	2(1)
	6(4)			
総計	2/9(10)	1	1	1(1)
	15(11)			

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

(1) 榊葉の 加乎加久者之美 求め来れば 八十氏人ぞ 円居せりける

円居せりける

(神楽歌・二二)

(2) いざ子ども 野蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道の 迦具波斯 花

榊は 上枝は 鳥居枯らし 下枝は 人取り枯らし 三つ栗の 中
つ枝の ほつもり 赤ら嬢子を いざささば 良らしな

(古事記・四七)

(3) 榊の花 香を加具波之美 遠けども 心もしのに 君をしそ思ふ

(万葉集・卷二〇・四五〇〇)

(5) 「絵解」これは東の中あけて君達もの見給ふ。夜さりの料に花造らる、

いと多かり。かぐはし。

(宇津保物語)

第二項で後述するように、中古以降の散文世界では、カグハシはカウバシに完全に取って替わられることになる。中世後期頃の言語状況を保存していると考えられる『日葡辞書』(一六〇三)においてカグハシが立項されていないことも、そうした交替が起こったことを示している。なお、韻文資料では、二十一代集に三例ばかりカグハシが確認されるものの、内二例は前掲例(1)の引用例であり、当代的な用例とは言いがたい。

中古には、薫物を対象とする用例も一例見られるようになる(4)もの

の、植物を対象とする一例(5)と併せて、この『宇津保物語』(九七〇

・九九九頃)の二例を最後に、散文においてはしばらく姿を消すことになる。

(6) 榊葉の 香をかぐはしみ 求め来れば 八十氏人ぞ まとみせりけ

る (拾遺和歌集(一〇〇五・〇七頃)・五七八)「新編国歌大観」

(7) 千早ぶる 三上の山の 榊葉を 香をかぐはしみ とめてこそとれ

(続千載和歌集(一一三二〇)・九二六)「新編国歌大観」

(4) 「右」大將殿、大いなる海がたをして蓬萊の山の下の亀のはゝ「腹カ」

にはかぐはしきなび「衣カ」を入れたり。山には黒方、侍従、薫衣香、

合せ薫物どもを土にて、小鳥玉の枝並み立ちたり。(宇津保物語)

(二) 近世中後期

中古以降は衰退したかのように見えたカグハシであったが、近世中後期に至ると復活する。近世雑II期の『玉勝間』(一七九五・一八一二)に見え

る植物（花）の二例は、万葉歌の引用であるから当代の純粹な用例ではないにしても、俳諧Ⅱ期に含めた賀茂真淵や良寛らの和歌において再び使用され始めた点に注目すべきである。

(8) 露にしをれしふぢばかまかぐはしき名は世にのこれ

(賀茂翁家集拾遺)

(9) かぐはしき桜の花の空に散る春のゆふべはくれずもあらなむ

(良寛歌・はちすの露)

また、散文においても、近世雜Ⅱ期の雅文体で書かれた『花月草紙』（一八一八）や、地の文が文語体である人情本『春色辰巳園』（一八三三・一八三五）の序文に使用されている。

(10) 年ふる鯉のありけり。「いかにして、さまじゝのこともかゝり給はで、かくまし〜給ふや」ととへば、「さらばかたりものせん。かぐはしき鯉のあれば、とめきてもくはまほしきことながら、これぞ大事のことと心にしめてみれば、あやしきことあるもの也。さおもひつくれば、ひれふりて遠く逃れて、いさゝかもかへりみず。よそのいほも、

あやしきことよとはおもへど、遠くさることをせず、わらはべなんどは、かの釣り針てふ物にかゝりて、いかほどもとらるゝをみながらも、とにかくそのかぐはしさに心つながれて、あたりはなれずありきて、

(花月草紙・卷六・一二八・老鯉)

(11) 書房の欲心其「本の評判」かぐはしきにうつゝをぬかし、今一花咲

せんと、頓にそが餘興をもとむる事切なれば、ふり捨てたき梅が香かの、
句にはひも深き川の世界、題而春色辰巳園と云。(春色辰巳園・初編・序)

中古以降、二十一代集などの和歌の中でのみ保存されるにすぎなかったカグハシが、雅文体や文語体の散文中においてその表現価値を再び見出されたのである。その表現価値とは、使用された文体から推測するに、文章語（雅語）という文体的意味であったと考えられる。次に示す『和英語林集成』（初版（一八六七）・再版（一八七二）・三版（一八八六））の記述からも、近世中後期にはカグハシが文章語（雅語）として意識されていたことを指摘できる。三版に立項されているカグハシには、古語注記キコが付されているのである（12）。比較としてカウバシを参照してみると、こちらには特に注記が見られない（13）。なお、カンバシは立項されていない。

(12) +KAGUWASHIKI, —KU Fragrant; sweet-smelling.

(和英語林集成・三版)

〔明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス〕

(13) KŌBASHII, —KI, —KU Fragrant, odorous, aromatic.

(和英語林集成・初版三再版三版)〔同右〕

また、カグハシには、カウバシの訳語“odorous”（芳香を含めた広い意味でのにおいを発すること）が見られず、“sweet-smelling”とあることから、特に花のような甘いにおいを描写するという、意味領域の狭さを推測させる。得られた用例からは、植物（花）をはじめ、その他、抽象的対象など様々な対象が確認できるものの、近世中後期においてすでに文体的意味（雅語）が対象の意味に影響を及ぼしていた^四と考えられる。その証拠に、近代に至ると対象が植物（草木／花）に偏っていくのである（後述）。

第二項 カウバシ・読み不明

(一) 上代・中古

全体表では、飲食物を対象とするカウバシが上代から見えるが、これは『日本書紀』（七二〇）の平安中期末点の和訓の用例である。上代の確例と

は言いがたく、中古の確例と言うにとどまる。

(14) 押坂直、與童子、煮「菌」而食之。大有氣味^{カウバシ}。

（日本書紀・卷第二四皇極紀）

カウバシの確例の登場は、中古まで待たねばならない。仮名散文I期の用例のうち、最も早いものは『大和物語』（九四七・九五七頃）における薫物を対象とする用例である(15)。訓点資料には『大和物語』より古い八三年訓点の植物（草木）を対象とする用例も確認できた(16)。

(15) 色などもいときよらなる扇^{アヲ}の、かなどもいとかうばしうておこせたり。

（大和物語・九一）

(16) 道氣を檀林^{タンリン}に受けて、香き風、更に馥^{カウバシ}し^五。

（地藏十輪經元慶七年点（八八三）・序）

〔古点本の国語学的研究積文篇〕大日本雄弁会講談社・一九五八〕

表二

資料ジャンル\対象	カウバシ						
	植物(草木/花)	薫物	飲食物	その他	身体(美)	身体(超)	抽象
記紀万葉・上代計	0	0	1	0	0	0	0
	1						
仮名散文Ⅰ期・中古計	2/0(2)	46	0	0	0	6	0
	54(2)						
仮名散文Ⅱ期	0/3	6		1,① [#]		1	
説話	2/0	12		① [#]	1	18	1
和漢混淆文Ⅰ期	3 ^{**} /2	1			1	5	4
中世前期計	5/5	19	0	1,②	2	24	5
	63						
和漢混淆文Ⅱ期	4 ^{**} /4	2		1		2	2
室町物語			1			1	
抄物・キリシタン資料・狂言台本	4 ^{**} /2	2	1,①	5			5
中世後期計	8/6	4	2,①	6	0	3	7
	37						
狂言台本Ⅰ期			①	1			
仮名草子	0/1						2
浮世草子	2/0	1	①				8
噺本Ⅰ期	1 [*] /1	5	⑤	2			
井原西鶴作品	1/0(1)						1
浄瑠璃Ⅰ期(近松)							3(1)
近世雜Ⅰ期	0/2						1
俳諧Ⅰ期	3 [*] /1		4,①(4)	4,① [#]			
近世前期計	7/5(1)	6	4,⑧	7,①	0	0	15(1)
	53(2)						
浄瑠璃Ⅱ期							
狂言台本Ⅱ期				2			
談義本	2 [*] /0		1				
噺本Ⅱ期	0/1		③				1
近世雜Ⅱ期	1/0(1)	1	2,①				
洒落本	0/1			2			1
黄表紙							
読本	2 [*] /0						2
滑稽本	2 [*] /0	1	②				1
人情本							
俳諧Ⅱ期			①				
近世中後期計	7/2(1)	2	3,⑦	4	0	0	5
	30(1)						
総計	29/18(3)	77	10,⑩	18,③	2	33	32(1)
	238(4)						

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数) ○: “焦げるにおい”

#の数: 燈火の内数 *の数: 成句「梅檀は二葉より」の内数

表三

資料ジャンル\対象	読み不明							
	風	植物(草木/花)	薫物	飲食物	その他	身体(美)	身体(超)	抽象
記紀万葉・上代計	0	0	0	0	0	0	0	0
	0							
仮名散文Ⅰ期・中古計	0	0	0	0	0	0	0	0
	0							
仮名散文Ⅱ期		1/1						
説話		2*/4	20	2	1	1	30	3
和漢混淆文Ⅰ期		0/1						2
中世前期計	0	3/6	20	2	1	1	30	5
	66							
和漢混淆文Ⅱ期								
室町物語								
抄物・キリシタン資料・狂言台本	1	15/28	10	8,③	1,② [#]		3	8
中世後期計	1	15/28	10	8,③	1,②	0	3	8
	78							
狂言台本Ⅰ期								
仮名草子								
浮世草子								
噺本Ⅰ期								
井原西鶴作品								
浄瑠璃Ⅰ期(近松)								
近世雑Ⅰ期				2				
俳諧Ⅰ期		0/1						
近世前期計	0	0/1	0	2	0	0	0	0
	3							
浄瑠璃Ⅱ期								1(1)
狂言台本Ⅱ期		0/3(1)						
談義本								
噺本Ⅱ期								2
近世雑Ⅱ期		1/0	1	1				
洒落本		1/0						
黄表紙								
読本								
滑稽本								
人情本								
俳諧Ⅱ期				②(1)	1(1)			1
近世中後期計	0	2/3(1)	1	1,②(1)	1(1)	0	0	4(1)
	14(4)							
総計	1	20/38(1)	31	13,⑤(1)	3,②(1)	1	33	17(1)
	161(4)							

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数) ○: “焦げるにおい、

#の数: 燈火の内数 *の数: 成句「梅檀は二葉より—」の内数

先に見たように、カグハシは中古の二例を最後に、散文には長い間姿を現さなくなる。これと交替するように、中古以降はカウバシが多用されるのである。カグハシと同様に、とる対象には植物(草木)や薫物がある他、身体(超越性)も確認される。

(17) 稲妻の光に行かむ天の原はるかに渡せ雲のかけはしと音の限り吹き

給ふは、げに月の都の人も、いかでか聞き驚かざらん。樂の声いと

近うなりて、「紫の雲たなびく」と見ゆるに、天稚御子、角髪結ひて、

言ひ知らずをかしげに、かうばしき童姿にて、ふと降りる給

(狭衣物語・巻一)

特に薫物の用例が多いことについては、この時代の調査資料である仮名散文が、貴族文化の影響を強く反映する言語資料であった(薫物の描写の頻度それ自体が高い)ことがひとつの要因として考えられる。ただし、同時代のニホフ・カラルと比較した場合にも、カウバシの薫物の描写への多用は指摘できる(本論第三部第六章・第四部第八章)であり、この頃のカウバシにおける(薫物の快いにおいがする)という意味側面は重視してよい。

(二) 中世前期

中世前期には対象がさらに広がり、新たに植物(花)(18)や身体(美しさ)(19)、抽象的对象(20)が登場する。また、それらに分類しきれない、その他も見られ始める。

(18) 九月九日、菊の宴させ給て、「菊開けて水の岸かうばし」といふ題、

作らせ給けるとぞ聞侍し。(今鏡・すべらぎの上第一・きくの宴)

(19) 六には、七条修理大夫信隆卿に相具し給へり。翠黛紅顔の粧ひ、花よりも猶かうばしく、玉の簪照月の姿、あたりも耀ばかりなり。

(源平盛衰記・巻第二・清盛息女事)

(20) 此官は先祖満仲最初拜任の官也。其跡尤馥しといへども、本右馬権助也。(保元物語・中・朝敵の宿所焼き払う事)

中世前期における読みの確かな用例はすべてカウバシであるため、読み不明もカウバシと読む可能性が非常に高かろう。中世にこのような読み不明が増加する背景には、和漢混淆文の発達が考えられる。また、そういった資料群の発達により言語化される世界が前代に比して拡大し、語のとり

対象も広がりを見せていく。読み不明のとする対象はすべてカウバシと共通しており、読み不明をカウバシと読む可能性の高さを保証する。

身体（美しさ）とは異なる。

(21) 羽林の花、新たに開け、春にあへる匂ひ、天下に薫ばし。(海道記)

(24) 本師源空のおはりには
光明紫雲のごとくなり むらさきのくものごとし

(22) 堀川ノ中将、欄姿ニテ、型ハ光ル様ナル人ノ愛敬ハ泛ニ泛テ、艶ズ馥クテ参リ給ヘリ。
(今昔物語集・巻第二八第二一)

音楽哀婉雅亮にて あはれみすめるこゝろなり
異香みぎりに映芳す かゝやきかうばし

(23) 情ケ深ク契芳シケレドモ、中有ニトモナフ習モナク、苦患ニ替タメシ
モナシ。
(沙石集・巻七・二二五)

(25) 「長者」眼ヲ閉トキハ又菩薩ノ形ト現シテ、法門ヲ演給フ。……俄ニ
死ス。異香空ニ満テ甚香ハシ。
(十訓抄上・第三)

ただし、カウバシ・読み不明ともに、身体（美しさ）を対象とする用例は一時的なものであつたらしく、中世前期以降は一切見られなくなる。身体（美しさ）が頻繁に描写される仮名散文において、この対象をとるのは専らニホフ・カナルであつた（本論第三部第六章・第四部第八章にて詳述）ことを併せて考えれば、カウバシにおいては臨時的にとるに過ぎない対象であつたと言えよう。

中世前期に最も注目すべきは、「焦げるにおい」を表すカウバシの登場である。ただし、現代語コウバシイとは異なり、飲食物が対象ではない燈火である点に留意したい。現在の調査で遡り得る初出例は、次の『百詠和歌』（一一〇四）の用例である（26）。同時代成立の『今物語』（一二三九頃）にも類例がある（27）。

これとは対照的に、カウバシ・読み不明ともに、身体（超越性）を対象とする用例が非常に多いことに気づく。説話において頻繁に登場する身体（超越性）の描写に、自動詞ではなく形容詞が専ら使用された点が、先の

(26) 燭 浮香迎綺茵。秋の夜しとねのほとりに蘭燈をかゝぐといへり。蘭草を油に和して、そのかをとる也。又云、蘭草の汁を煎じて、その油

の^レともし^レびを^カぐるに、光の至る所^カうはしと云り。

(百詠和歌・八・服玩部・燭)

(27) 待賢門院の堀河、上西門院の兵衛、おとゝひなりけり。夜深くなるま

で、草紙を見けるに、ともし火のつきたりけるに、油綿をさしたりけ

れば、よにかうばしくにはひけるを、堀河、「ともし火はたき物にこ

そ似たりけれ」と言ひたりければ、兵衛とりもあへず、「丁子頭の香

やにほふらん」とつけたりける、いとおもしろかりけり。

(今物語^八・一五・丁子がしら)

これらの用例から、一三世紀初めにはカウバシが「焦げるにおい」をも

表し得ていたことが分かる。そして、その「焦げるにおい」は、例(27)に「と

もし火はたき物にこそ似たりけれ」とあるように、プラス評価であった。

この頃、読み不明にあつてカウバシにはない対象として飲食物がある

(28)。しかし、飲食物を対象とする前掲例(14)は、上代の確例とは呼べな

いまでも中古のカウバシの確例ではあり、早い段階からカウバシが飲食物

を対象としていたことは明らかである。よって、次のような飲食物を対象

とする読み不明もカウバシの意味に矛盾せず、カウバシと読む可能性が高

い。

(28) 荒レタル一ノ房有リ、年極テ老タル僧一人居タリ。委ク見レバ、鱗^ニ・

骨ナドヲ食ヒ散タリ。其香、鼻^ニ放キ事无限シ。……大師、「是ハ、誰人

ノ御スルゾ」ト問フニ、「是ハ、三尾ノ明神御ス也」ト答フ。「然レバ

コソ、只人ニハ非ズ、ト見ツル人也」。「此ノ老僧ノ有様、猶ヲ委ク見

□」思テ、其房ニ返リ至ルニ、初メハ鼻カリツルニ、此ノ度ビハ極テ

馥シ。「然レバコソ」ト思テ入テ見レバ、鮎鱗・骨ト見ツルハ蓮華ノ

萎鮮ナルヲ鍋ニ入テ煮、食ヒ散シタリ。驚テ隣ナル房ニ行テ此ノ事ヲ

問フニ、僧有テ云ク、「此ノ老僧ヲバ、教代和尚トナム申ス。」

(今昔物語集・巻第一一第二八)

なお、例(28)に関しては、森 正人(二〇〇四)に「生臭い魚が香ばしい

蓮華に変じたのは、それを食する弥勒の力によるものであるとして、本尊

の力の偉大さを語ろうとするものである(二六頁)という指摘があるよう

に、「弥勒」の超越性を象徴する飲食物である。説話ならではの対象と言え

よう。

(三) 中世後期

中世後期にはカンバシも登場するが、カウバシに比して用例が圧倒的に少ない（後述）ため、この頃の読み不明なおカウバシと読む可能性が高いと考え、以下考察を進める。

前述した通り、身体（美しさ）を対象とするカウバシは中世前期を最後に見られなくなる。これに付随するように、身体（超越性）の用例も、中世後期の次の例を最後に一切見られなくなる（29）。これは、読み不明にも同様に指摘できる衰退である（30）。

(29) 楼門をうち過て、歩む足もかうばしき玉のきたはし、よち登れば、紫宸殿とおぼしくて数千間につくりみがける宮殿あり。庭には瑠璃の砂、真珠の砂、ほとりもなく撒き満てり。黄金の柱、玉のこじり、七宝の欄干、玉の石畳あたゝかなり。御殿の綺麗さは、莊嚴は目に見ることは申におよばず、かつて耳にも聞およばず。（俵藤太物語・上）

(30) 趙匡胤ト云人ノウマル、時ワ、洛陽ノ夾馬宮ト云処テウマレタソ。ソコカ、七日香シカツタホトニ、香孩児宮ト云タソ。其子モ香シカツタ程ニソ。（湯山聯句抄・四四才）

こうした、身体（超越性）を対象とする用例の減少は、往生人や神仏の

描写自体の減少が背景にあるとも考えられる。しかし、そのような場面が描写されたとしても、嗅覚表現語彙がその描写に使用されなくなったという可能性もある。実際に、中世後期以降における数少ない超越性の描写には嗅覚表現語彙の使用が確認できず、専ら視覚表現語彙によって描写されているのである。その一例として、近世前期の仮名草子『為愚痴物語』（一六六二）に見られる往生場面を挙げる。

(31) 時しも八月十五夜、月明らか成に。西に向かひ、うみつら遙かに、見渡して。彼まんまる仏を、余念なく、念し居たりけれハ。俄かに紫雲たなひき。其中に。雪の如く成。白くしたる、まんまる仏、光明かくやくたる、光を、放して。彼道善に、あひ見え給ふ。道善、かんたんに、肝に銘し。随喜の、涙を、流して。是を、拜ミ奉ること。度々に、及へり。そのうち、道善、八十一歳にして。大往生のそくハいを、遂げける、となり。（為愚痴物語・六・一四）

このような、やや特殊な対象である身体（超越性）の動向を除けば、中世後期においてカウバシがとる対象は前代のそれと変わらない。その中でも特筆すべきは、カウバシ・読み不明ともに「焦げるにおい」と判断でき

る飲食物の用例が抄物に見られ始めることである。

確認できるのである。

- (32) 是悉くとゞのへすまいて、神前へそなゆるぞ。苾く前にあつたぞ。
香いぞ。あふらを合た程に、かうばしうも、あらうずぞ。

(毛詩抄・卷一三)

- (33) 旨酒——酒ヲ飲デ悦、アフリ物モ香シイゾ。(毛詩抄・卷一七)

- (34) 巴豆 辛ク温ニシテ降ル。皮ヲ去、心ヲ除キ、香シクナルホトイリ焦
ラカシテ用。(全九集・卷二・一五才)

なお、繰り返しになるが、飲食物を対象とするカウバシはすでに中古に
(前掲例(14)、(カウバシと読む可能性の高い)読み不明は中世前期に(前
掲例(28)、それぞれ確認できる。こうした例の延長線上に、例(32)〜(34)は位
置づけることができる。

カウバシが、現代語コウバシイにより近づき始めたのが中世後期であつ
た。ただし、留意する必要があるのは、第一に、この頃はいまだ「焦げる
におい」が飲食物に限定されていない点である。「焦げるにおい」の初出
例(26)の対象が、その他に分類され得る燈火であったように、中世後期にお
いても、燈火の「焦げるにおい」の用例が(読み不明ではあるが)抄物に

- (35) 薰ハヨモギゾ。……燭ニ作テトボセバ、香バシウテヨイゾ。

(毛詩抄・卷四)

そして第二に、(飲食物の焦げる快いにおいがする)さまを表すように
なったとは言え、これがカウバシの中心的な意味にまではなり得ていない
点である。このことは、『日葡辞書』によっても確認できる。

- (36) Cōbaxij. Cou/a cheiro/a, ou cheirar hem.

(日葡辞書) 『パリ本日葡辞書』勉誠社・一九七六

「邦訳…匂いのよい(もの)、または、芳香を放つ(もの)。(『邦訳日葡辞書』岩
波書店・一九八〇)」

カウバシは、(快いにおいがする)さま全般を意味するポルトガル語に
よって翻訳されており、この語の意味領域の広さを窺わせる。

ちなみに、読み不明の対象には、カグハシ・カウバシ・カンバシに見ら
れない風が抄物に一例ある。しかし、これは「薰風自南来」の「薰風」の

翻訳部分に現れる特殊な用例であり、風を対象とするのが専らカヲルであった（本論第四部第八章にて詳述）ことをも考慮して、例外とみなした方がよからう。

- (37) 薰風自南来殿閣生微涼 南カラ香シイ風ガザツトファイテクレバザシ
キガスズシウナルナリ
(句双紙抄・八ウ)

(四) 近世前期

後に見るように、近世前期にはカンバシの用例も一定数確認できるようになる。しかしながら、用例数の上ではカウバシが優勢であることに変わりはなく、とる対象も、身体を除き前代のそれを維持し続けている。

特に目立つのは、飲食物を対象とする用例の中で、「焦げるにおい」を表すものの占める割合が高くなっていることである。

- (38) 伯蔵主くさりながら、何やらかうばしひにほひがいたすが、何物をおいでだますぞ……はあ、わかねずみを、油あげにしすまひておひたは、かゝつたが道理じゃ……
(といひて、つえにて二つ三つ打て、つえのさきをかひで)

伯蔵主くまつはむまひかゞする (虎明本・釣狐一〇)

- (39) 「……何もあがるゝやうな物はござりませねど、煎海鼠と牛房の煮が、其入子鉢にすこしと、其上の棚に鱧の皮のあぶつた、かうばしい所がござりますれど、是は明日廿八日の膾に入れます。……」

(けいせい伝受紙子・巻四・四)

こうした用例の多さをもって、近世前期には、(飲食物の焦げる快いにおいがする) という意味がカウバシに定着したと言えそうである。さらに、その傍証として嘸本I期『醒睡笑』(一六二三)の用例を挙げよう。なお、同じく嘸本I期の『軽口露がはなし』(一六九一)にも同話が所収され、『醒睡笑』と同様にカウバシを四度使用する。

- (40) 飯後の湯出たるに風味事にかうはしく大にすくるゝ杯ほめけるをねうぼう聞付嬉しけにのうれんの隙より顔さし出しお湯のかうはしきもことはりやたき物をくべた程にと座に居たる皆とも耳にしみてそ感しける中に一人羨み帰り妻に語ればそれ式の事をはたれもいふへき物をとあさわらひぬある時知音をよひならべ飯の湯を以前の様にとゝのへ出し人とかうばしやとほめる時ねうぼうはゝからすお湯は

かうはしからふ柴を三束くべた程に (醒睡笑・卷五・人はそだち)

例(40)の、前二例波線部「かうはしく」「かうはしき」は、薰物によつて

〈快いにおいがする〉お湯を描写し、後二例傍線部「かうばし」「かうはしから」は柴をくべたことによつて〈快いにおいがする〉お湯を描写する。

質の異なるにおいを、カウバシ一語で表す興味深い用例である。妻の勘違いが、この頃のカウバシの意味領域の広さを示すとともに、「焦げるにおい」を表す語としての認識が定着し始めていることを示している。

「焦げるにおい」を表す用例は、俳諧I期に燈火の用例が一例見える。

しかし、これは前掲例(27)の引用であり、当代的な用例とは考えにくい。この例(41)を最後に、以降「焦げるにおい」が飲食物に限定されていくこと(後述)を踏まえると、やはり古典の引用にとどまる用例である。

(41) あぶらわたをさし油にしたりけるにいとかうばしくにほひければ

「ともしびはたき物にこそ似たりけれ」上西門院兵衛

「丁子がしらの香やにほふらん」待賢門院堀川

(犬子集・上古俳諧)

その他について補足しておく、近世前期の八例中、半数の四例は固定的表現「花中の鶯舌、花ならねど」である。

(42) 俳諧は人の心をやはらげて、花に啼鳥の、花ならずしてかうばしとい

へる、世のまじはりの媒ナカダチとならば、彼鶺鴒のはらからも、などや一巢のよしみなからん。(風俗文選・牧童ガ傳)

(43) 夫…はなごのおしやる事は、花中の鶯舌は、花ならねどかうばし

ひ、そなたのつかはせらるゝものじや所で、太郎くわじやが、ふだんつかひにくれ共、ことはやはらかに、匂ひなんどして、身共にねんごろにいふてくるゝ程に、目をかけておつかやれといふた程にな、満足してとれ (虎明本・花子)

こうした固定的表現中のカウバシは、前掲例(41)と同様、当代的な用例というよりも古典的な用例である。相対的に見てその他の用例が少ないということは、前代までのように自由に対象をとれなくなっているということである。近世前期のカウバシは、依然としてカグハシ・カンバシの二語を圧倒する中心的な嗅覚表現形容詞でありながらも、確実に対象の幅は狭まり始めていた。それと相反して、独自の意味領域である(飲食物の焦げる

「快いにおいがする」を定着させていき、二語との差異化が進んでいく。

なお、近世前期には読み不明が三例ある。近世前期以降は、カンバシの用例数が増加するため、これら三例をカウバシと読む可能性は、中世以前に比して低くなるであろう。とる対象もカウバシ・カンバシの二語と重なるため、読みを確定するのは大変難しい。

- (44) 魏の文帝は群臣にの給ひしは、葡萄にて酒の酔を醒す物なり。善酔ても醒やすし とも見へたり。古へは蒲桃とも書し也。物類感志にのせしは、此ものよく香しからんと思はる、麝香を皮のうちに一所に入べし。實なりてことくく芳しとも見へたり。武備志の夷考の内にも鎖葡萄の事をのせたり。(ひとりね・一三〇)

- (45) 彫せし梁、書ル壁も風に破れ、雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたるニ、竹縁の前に柚の木一もと、花芳しければ、「柚の花や昔しのばん料理の間」「ほととぎす大竹簾をもる月夜」

(芭蕉文集・嵯峨日記)

ただし、俳諧Ⅰ期の例(45)に関しては、芭蕉文集全体において専らカウバシが使用されることを踏まえ、カウバシと読む可能性が高いものと考ええる。

(五) 近世中後期

近世中後期のカウバシは、一見して、とる対象の種類がまだ広いように思われる。しかし、対象ごとの用例数の分布に注目してみると、薰物(46)・その他・抽象的对象(47)は、植物・飲食物の半数以下となっている。

- (46) かの霊香と聞しは、今迄聞覚えし松金由男の鬢付の香、伽羅麝香の袖の香、茶々として香しく、音楽と思ひしも、それにはあらで、花やかに三味線の音じめ琴の調やさしく、小弓の音のあはれげなるに、

(戯男伊勢物語・巻五)

- (47) 五老井ハ師と許す事、六あると言心から許六と号たといふことだと、ひとりが咄せば、又一人が、しかし、末ハよからぬ病をわづらひ、ろくろ訪ふ人もなかつたといふ事だ ナニ、癩病をわづらつたのハ、病だから是非がない。すでに大谷刑部ほどの人でも、此病をわづらつたといふことだ。しかし、名ハ千ざいのちまでもかうばしく、許六が異名も、菊阿仏といふたそうだ 号を菊阿仏と言たわけがある ナゼ 艸庵も霜除ほどだといふた (春色三題漸初編)

また、その他の四例に関しては、古典的な用例が二例、例外が二例であり、当代的・一般的な用例とは認められない。すなわち、狂言台本Ⅱ期の固定的表現「花中の鶯舌、花ならねど」の二例、通常（く）クサシが対象とする穢れについてカウバシと言った洒落本の二例（48）からなる四例なのである。カウバシはもはや、その他に分類されるような種々雑多な対象を自由にとることができなくなっている。

- (48) 一此掛の若衆はこの頃の仕立ての若衆なれば、悪くすれば気をやる事
あるべし。全て若衆の淫水は色黄色にしてにほい甚だこふはし

（開学小笠・風地観）

そして、飲食物と同等数用例の得られた植物（49）から、固定的表現である成句「梅檀は二葉より」の三例（本論第二章にて詳述）を除くと、カウバシが最も対象としやすいのは飲食物（特にその「焦げるにおい」）であることが明らかになる。

- (49) 此嶋に、祇園宮といひて、氏神とする社有、いかなる神を祭るにか、

さだかならず、其祭にとなる詞あり。その詞、ひろたけの、楠の木は、かれてもにほひ、かうばしや、親鳥あれや、此宿の、さのみはな
いそぎめされそ。かく唱へて、楠の木を祭ると也。

（玉勝間・巻七・石見の海なる高嶋）

- (50) 今日ハめづらしい汁をふるまわれてきた。ソレハ何じるじやのば
らと汁とやらで、かうばしいものさソレハよかつたらふ。はら
ごハよいものさされバゑものかしらぬが、今日のハ目ばかりだ

（聞上手・はらご）

- (51) 「成程これがしんせいの香煎か」ト言ながら、茶碗を鼻へ押つけフン
くと嗅ぎ、野良「ハツ、ヘエツクシヤウえゝ畜生、あぶなく膝へ蹴
すところだ。何だかめつぼう香ばしい。こいつア見体といひ匂ひと
まるで七色蕃椒といふ塩梅だ」

（七偏人・初編・巻中）

少ない用例数の中で、対象の偏りを指摘するのはいささか問題があるろう。しかし、挙例からも分かるように、飲食物（特にその「焦げるにおい」）を対象とするカウバシが口語的要素の強い言語資料（あるいは部分）に出現する傾向にあるのに対し、それ以外の対象をとるカウバシは文語的要素の強い言語資料（あるいは部分）に出現する傾向にあるという分布からも、

近世中後期におけるカウバシが専ら（飲食物の焦げる快いにおいがする）さまを表す語となっていたと見ることができるとはなからうか。前代的な・古めかしい言語意識が働いた場合には、カウバシが飲食物（特にその「焦げるにおい」）以外を対象とすることが可能であったと考える。

カウバシは、中古・中世においては確かに、様々な対象をとり得る万能な嗅覚表現形容詞であった。しかし、中世後期から近世を通じ、（飲食物の焦げる快いにおいがする）という独自の意味領域を確立し、これを表す語として多用されるようになった。それと同時に、自由に対象をとることもなくなっていく。近代以降、（飲食物の焦げる快いにおいがする）さまを表す語として多用された事実（後述）から逆算するに、カウバシの意味の限定化は近世中後期からすでに始まっていたと考えられる。こうしたカウバシの意味変化を促した背景には、「焦げるにおい」表現に使用できる形容詞の需要が存していたであろうし、また、カグハシの雅語としての復活（前述）、新語形であるカンバシの登場（後述）がそれを可能にし得たのである。

第三項 カンバシ

（一） 中世後期

前述したように、カンバシは、「*mb*」の撥音化現象が表記上になかなか現れてこないという問題をはらむのであった。中世後期に才段長音の混同が始まり、カウバシとカンバシとの別語意識が高まるのと時を同じくしてカンバシの初出例が確認できるのは、そうした問題を鑑みれば至極当然の結果であろう。

表に示したカンバシの初出例は、『信長公記』（一五九八）の成句「梅檀は二葉より―」の例と、『地蔵菩薩靈驗記』（一六世紀後）の例を指す。また、古辞書『和玉篇』（一五世紀後）が「甘」の字をカンバシと訓じていることから、中世後期にはカンバシが独立した一語として認識されるに至ったと見てよからう。

(52) 梅檀者二葉よりしてかんばしく (信長公記・卷一二)

(53) 「菓穀苗稼花果茂実」潤・澤ジュンタクク・香カウケツ・潔カンバシク・軟イサギヨク・美ナンビ
ナラントナリ。 (地蔵菩薩靈驗記・卷一・五)

カンバシのまとまった用例は中世後期以降にならないと確認できないのであるが、訓点資料にも和訓カンバシは一例ながら確認でき、本研究の調査結果よりも大幅に初出例を遡ることができるようである。

資料ジャンル\対象	カンバシ					
	植物(草木/花)	薫物	飲食物	その他	身体(超)	抽象
記紀万葉・上代計	0	0	0	0	0	0
	0					
仮名散文Ⅰ期・中古計	0	0	0	0	0	0
	0					
仮名散文Ⅱ期						
説話						
和漢混淆文Ⅰ期						
中世前期計	0	0	0	0	0	0
	0					
和漢混淆文Ⅱ期	2*/0					
室町物語						
抄物・キリシタン資料・狂言台本						
中世後期計	2/0	0	0	0	0	0
	2					
狂言台本Ⅰ期				1		
仮名草子		1				
浮世草子						
噺本Ⅰ期						
井原西鶴作品						
浄瑠璃Ⅰ期(近松)	1*/2(1)			1	2(2)	2(1)
近世雑Ⅰ期			1			
俳諧Ⅰ期						
近世前期計	1/2(1)	1	1	2	2(2)	2(1)
	11(4)					
浄瑠璃Ⅱ期						2
狂言台本Ⅱ期				3		
談義本			①			
噺本Ⅱ期	0/1					1
近世雑Ⅱ期	0/1					
洒落本	1*/0					
黄表紙						
読本				2		
滑稽本						
人情本	1/0					1
俳諧Ⅱ期						
近世中後期計	2/2	0	①	5	0	4
	14					
総計	5/4(1)	1	1,①	7	2(2)	6(1)
	27(4)					

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数) ○: “焦げるにおい”
 *の数: 成句「梅檀は二葉より」の内数

(54) 或る時は諸の香蘇油を用ゐよ

(蘇悉地羯羅經延喜九年点(九〇九)) 『日本国語大辞典(第二版)』

よつて、表記上の初出例が一〇世紀初頭まで遡れるとしても、カウバシと

ただし、こうした古い時代の用例はこの例(54)しか見つからない。

は全くの別語としてカンバシの存在が認識されるようになるには、やはり中世後期まで待たねばならなかったと考える。

(二) 近世前期

近世前期に至ると、特に浄瑠璃の中でカンバシが好んで使用され始める。対象の種類も多く、具体的対象である植物(草木/花) (55) をはじめ、抽象的対象 (56) をもとる。

(55) 春に先だつ冬梅は、雪を穿ちてかんばしく、夫に後るゝ徒し身は、後家として立つる家もなし。(双生隅田川・第四・狂女道行)

(56) 蘭麝待の名香内甲にたきしめん。鬢の髪に名香かほる首取たりと云人あらば。義貞が討死と思へとの御詞。……名香はたかね共弓取の心の花は。梅桜よりかんばしく仁義に命を捨しもの。(吉野都女楠・第三)

表記上では新たに登場した語形であるものの、とる対象はカウバシのそれと一致するように幅広いのである。カンバシはカウバシと意味領域の大部分が重なる「近接類(義)語」(小野正弘一九九一)として認識されていたようである。

あえて二語の相違を指摘するならば、カウバシが中世後期をもって対象としなくなった身体(超越性)の用例が浄瑠璃I期に見られる点である。ただし、これ以降には用例が確認されないことや、カンバシを好む傾向にある浄瑠璃に見える用例であることを考慮すると、特殊・一時的なカンバシの用例と考えた方がよからう。身体(超越性)の描写に使用されるか否かで二語を区別するのは適切でないと考える。

(57) あら不思議や有難や清風四方にかんばしく。玉世ノ姫の御肌潤すと寛えしが。玉の様なる若宮をやすくと誕生あり。心地涼しく成り給ふ。変毒為薬の仏法不思議。たつとかりける奇瑞なり。(用明天王職人鑑)

二語間の使い分け意識が認めにくいことは、『日葡辞書』や『それぞれ草』(二七一五)によっても説明できる。ともに、カウバシとカンバシとを「近接類(義)語」として認識する。

再掲 Cōbaxij. Coufa cheirofa, ou cheitar hem.

(日葡辞書) 『パリ本日葡辞書』 勉誠社・一九七六

「邦訳…匂いのよい(もの)、または、芳香を放つ(もの)。(『邦訳日葡辞書』

(58) *Cambaxij. Couya cherofa.* (日葡辞書) [同右]

「邦訳：香氣がある（もの）。『邦訳日葡辞書』岩波書店・一九八〇】

(59) 都の八重桜は富んで芳し、吉野の一重桜は貴くして芳し。

(それぞれ草)

ところが、再び『日葡辞書』に目を向け、二語が他の語の語釈に使用されるか否かという観点から概観してみると、大きな相違が認められる。すなわち、カウバシは、「香簡・香羹・香味・香花・濃香・露香・薫油・芬芬・芬芳・芳名・芳蘭」など、多くの語の語釈に使用される二のに対し、カンバシは、それ自身の名詞形カンバシサの語釈に使用される程度なのである。また、同時代成立の『羅葡日辞書』（一五九五）においても、語釈にはカウバシが専ら使用され、カンバシは一例も使用されない（言うまでもなく、カグハシも一切見られない）。他の語の説明語として使用されるか否かという観点から二語を比較すれば、カンバシはカウバシに比して使用頻度の低い語であったと言えよう。中古以来のカウバシ優勢の状況は、近世前期においても変わらないようである。

(三) 近世中後期

カウバシと意味・用法の相違が見出せなかったカンバシは、近世中後期に至り、文体的意味に特徴が現れるようになる。すなわち、カンバシは、文語的要素の強い言語資料（あるいは部分）に出現する傾向にあり、文章語としての表現価値が認められるのである。

(60) 松の緑り色をかへず、梅が香四時ともにかんばしく、繁榮たとへんにものなし。
(小倉百首類題話・梅・小野小町)

(61) 「三笑亭可楽」雲上様方・御大名様、多くの席の賜ものハ、巳になる金の余光にて、酒楼に登つて甜ものぐひ、滑稽の開語にハ、駟も及ばずといへども、意のかんばしきハ、持鼓郎の類に入らず、実に風流の一奇人なり。
(十二支紫・序)

(62) 卯月となり、卯の花垣に咲て、新茶の飴かんばしく、時鳥声哀れに、松魚はからし酔に貴し。
(風俗文集 昔の反古・卷二・飲食四季の文并序)

カンバシが文章語としての文体的意味を獲得し得た要因には、漢語を連想させるような撥音^四を含む音声的特徴がまず考えられよう。純粹な和語

でありながら、その語感が手伝って、あたかも漢語のように硬い文体に溶け込むことができたのではなからうか。

また、そうした語感の問題でカンバシが選択されるのであれば、単に書き手の好みで語の選択が決定される場合も自ずと出てくる。例えば、文語体資料である読本でも、馬琴はカウバシを、秋成はカンバシを使用するのである。ちなみに、秋成は随筆の中でもカンバシを使用する。

(63) 「……今江に入て魚の遊躍あそびをねがふ。權かりに金鯉が服を授けて水府のた

のしみをせさせ給ふ。只餌かじの香かほばしきに味あじまされて、釣つりの糸にかゝり身を亡なふ事なかれ」
(雨月物語・巻二・夢応の鯉魚)

(64) 「水仙すいせんは」香草に而根は最もかんばしといふ。我は臭かほしと思ふなり。香臭かほのたがひ、おのがこのむまゝにこそあれ。(膽い大小心録・一五四)

カウバシに意味の限定化が生じ始めた近世中後期には、カンバシもまた、その語感が特定の文体・書き手に好まれ、独自の文体的意味(文章語)を獲得していくこととなった。

なお、抽象的対象について補足しておく、近世以前のカグハシ・カウバシ・カンバシ三語は、いずれも抽象的対象をとり得たものの、否定表現

を伴い(好ましくない)の意味を表す用例は認められなかった。おそらく、こうした用法は近代以降に誕生するのであろう。この点にも留意しながら、近代以降の三語の意味・用法を観察してみたい。

第四項 近代以降^{一五}

近代を概観すると、コウバシイ・カンバシイの用例数の少なさ、読み不明の用例数の多さが目立つ。これは、コウバシイ・カンバシイの漢字表記が増加したためであろう。なお、漢字表記に振り仮名の付されたコウバシイ・カンバシイは、ともに「香(バ)シイ」「芳(バ)シイ」の両表記が混用され、使用漢字の偏りは見られなかった^{一六}。

実際の用例を見る前に、明治初期の国語辞書における立項・記述状況について、『明治期国語辞書大系』[大空社・一九九七・二〇一一]を参照しながら簡単に述べておきたい。規範意識の働く国語辞書には、前代的な言語の使用実態が色濃く反映されているよう。

まず、カグワシイについて見てみる。普通語辞書では、大槻文彦著『日本辞書言海』(一八九九・一八九一)をはじめ、山田美妙著『日本大辞書^{一七}』(一八九二・一九九三)、藤井乙男・草野清民編『帝国大辞典』(一八九六)、林龜臣・棚橋一郎編『日本新辞林』(一八九七)、落合直文著『ことばの泉』

(一八九八・一八九九)などに古語注記が付されている。また、雅語辞書では、物集高見著『日本小事典』(一八七八)以下、多くの雅語辞書が専らカグハシを見出しに立てていることから、この語が文章語(雅語)と認識されていたことは堅い。普通語辞書・雅語辞書ともに、近世末におけるカグハシの様相と矛盾していない。

次に、コウバシイについて見てみる。普通語辞書では、カグワシイのよ
うな文体的意味についての注記は特に見えず^{一八}、雅語辞書にほとんど立項
されていないことなどから、文体的意味においては中立であったと言える。

カグワシイに対する雅語認識(前述)と、カンバシイを付随的に扱おうと
する姿勢(後述)とからも、近世末のカウバシイが嗅覚表現形容詞の中で中
心的な存在であったことが分かる。なお、(飲食物の焦げる快いにおいがす
る)さまについて触れた国語辞書は見えないものの、近世中後期に始まっ
た意味の限定化がこの頃定着へ向かっていることは、後に述べる近代の実
際の用例からも確実と言える。よって、国語辞書のコウバシイの語釈はや
や不十分であると見た方がよからう。

最後に、カンバシイについて見てみる。カグワシイ・コウバシイの二語
とは異なり、普通語辞書・雅語辞書ともに非常に簡単な扱いとなっている。
すなわち、普通語辞書では、立項されていても空見出し(コウバシイで言

い換える)にとどまり、雅語辞書には一切立項されないのである、近世末
の段階では、カンバシイが日常語として一般に広く定着しておらず、あく
までも文章語として認識されていたのであろう。

(二) カグワシイ

明治から昭和に至るまで、一貫して韻文・文語体における使用が圧倒的
に多い。近代においてもカグワシイに対する雅語意識は維持されており、
そのまま現代語へ引き継がれたようである。

とる対象の幅は広いが、文章語(雅語)ゆえに、日常卑近な対象よりも、
植物(草木/花)などの高踏的で鑑賞の対象となるものが多い。これらの
対象においては、コウバシイ・カンバシイの二語よりも優勢である。こ
うした対象の偏りは、第二節で見た飛田良文・浅田秀子(一九九一)の現代
語についての指摘と繋がるものである。

(65) 世は太政維新の春にあひて、霜雪を凌ぎし梅花香ぐはしく、こゝに年

来の愁眉をひらき、其年の冬伯と共に東京築地の邸に移り住みましぬ。

(東久世伯の母君(一八九五) 佐々木信綱)「太陽コーパス」

特に注目したいのは、抽象的対象をとるものである。近代において抽象的対象をとるのは専らカグワシイ・カンバシイのいずれかであり、肯定表現中に使用されるのがカグワシイ、否定表現中に使用されるのがカンバシイという、用法の棲み分けの存することが分かった。

- (66) あわれ、そのかぐわしき才色を今に語り継がれているサフォこそ、この男のもやもやした胸をときめかす唯一の女性であったのである。

(葉(一九四七) 太宰治) 『作家用語索引太宰治』教育社

- (67) 競馬賭博の胴親等あまりよからぬ事にて成上りたるビイチの娘。才色共に香ばしからず、加之跛足といふ廢人に近き。

(長篇探偵小説ハートの九『第五回』(一九二五))

ビ・エル・ファルジャン作、延原謙訳 「太陽コーパス」

(二) コウバシイ

コウバシイの多くは飲食物を対象とする用例で、かつ、その「焦げるにおい」を表すものである。カグワシイ・カンバシイにはこうした用例がほとんど見られないため、読み不明のうち、飲食物(その「焦げるにおい」)を対象とする多くの用例も、コウバシイと読む可能性が非常に高い。近世

中後期に始まったカウバシイの意味の限定化は、近代において定着したと考えられる。

- (68) お高は番茶の焙じたてを煎れ直して、それを浅井にすゝめ自分にも其香ばしいのを呑んで、大分心地が恢復ツて来たので、漸く世間話に乗ツて来た。(実印と預金帳(一九〇九) 柴田流星) 「太陽コーパス」

また、文語的要素の強い言語資料(あるいは部分)であれば、抽象的対象をとるコウバシイもわずかに見える。ただし、カグワシイと同様に肯定表現中での使用に限られる。

- (69) 驚きて傍人に問へば、是ぞ此組の頭として、当時天下に鬼神と称揚るゝ近藤勇、其人なりき。噫、前日の彼は実に、他年、成敗を以て節を変ぜず、孤忠其の事ふる所に倒れたる近藤なりしか! 死して猶侠骨の香きを今日に聞く勇なりしか!

(他流試合(一八九五) 塚原蓼州) 「太陽コーパス」

(三) カンバシイ

カンバシイの多くは抽象的対象をとる用例であり、かつ、否定表現を伴う形式が現れることに注意される。「快いにおいがする」という本来の意味は抽象化し、単に「良い」「好ましい」を表すようになり、「カンバシイ＋ズ／ナイ」という形式全体で「良くない」「好ましくない」を表す。こうした用法はカグワシイ・コウバシイに見られないことから、同用法の読み不明用例はカンバシイと読んで問題ないであろう。初出例は、カンバシイと読むであろう読み不明の一九世紀末の用例である。カンバシイと読み明かな用例も二〇世紀初頭に確認される。

(70) 諸新聞の文界時事に「某氏の痛快精細なる時事論」など称揚せらる。

さても香ばしき話ならずや。

(小文学者の懺悔録 (一八九五) 綱齋主人) 「太陽コーパス」

(71) 実は会員中には余り香ばしくない「淑女とは言えない」奥さん方も随

分ありますが爾ういふ香ばしくない方を追々に導かうといふのが目的でムいます

(社会百面相 (一九〇二) 内田魯庵) 「近代デジタルライブラリー」

前述した通り、近代には読み不明の用例が多いため、読みの確かなカン

バシイが抽象的対象をとる全一例中、否定表現と共起する用例は五例であり、少ない印象を受ける。しかし、カンバシイと読むであろう読み不明の同用法の用例は三三例ある。また、読みの確かなカンバシイの初出例である例⑥の後は、抽象的対象をとるカンバシイが常に否定表現と共起するようになることを考え合わせれば、この語に同用法が確実に定着していったと言えよう。

ただし、こうした用法以外の用例が全くないわけではなく、同じく文章語であるカグワシイと同様、その文体的意味が作用し、植物(草木／花)などの美的対象となるものをとることもある。これは、第二節で見た飛田良文・浅田秀子(一九九一)の現代語についての指摘とも一致する。

(72) 穂麦の馨い匂がした。

(長篇小説鼯つかひ (一九二五) 国枝史郎) 「太陽コーパス」

しかし、現代語カンバシイが嗅覚表現としてはほとんど使用されず、専ら否定表現を伴う評価語として確立していることを考えると、近代においてすでに意味・用法の限定化は進行していたであろう。そして、その背景には、カンバシイの有する文章語としての側面が、(実際の客観性はさてお

き) 理論的な批評表現における評価語として好まれたという可能性も推測される^{一九}。現代語カンバシイに付随する、客観的な基準に照らして好ましくないというニュアンス(飛田良文・浅田秀子一九九一)は、論理的な表現に溶け込む文体的意味(文章語)がもたらしたと考えられないであろうか。

第五節 おわりに

カグハシ・カウバシ・カンバシ三語の意味・用法の史的変遷をまとめる。

上代では原形のカグハシのみ用例が確認された。ところが、中古に入りカグハシと転化形カウバシとは完全に交替し、以後、カウバシの独擅場が続く。

カウバシは様々な対象をとる嗅覚表現形容詞として多用され、中世前期には「焦げるにおい」をも描写するようになる。しかし、その初期の用例は、(薫物に類する)燈火の焦げる快いにおいがするさまを表していた。そして、中世後期には、現代語コウバシイと変わらない(飲食物の焦げる快いにおいがする)さまをも意味するようになる。カウバシが「焦げるにおい」をも描写できるようになったのは、この語が薫物の描写へ多用されていたことと関連するであろう。すなわち、「焦げるにおい」とは「火や

熱などによって状態が変化したもののにおい」であり、その点では「薫物も火(その熱)によってにおいを発散させてはいる」のであって、(薫物の快いにおいがする)から(薫物に類する)燈火の焦げる快いにおいがするへ、さらに(飲食物の焦げる快いにおいがする)へと、「火や熱などによって状態が変化したもののにおい」という共通項を媒介にして新たな意味を派生させていったと考えられるのである。

こうした新しい意味を獲得したとはいえ、中世後期におけるカウバシは依然としてとる対象の幅が広く、(快いにおいがする)さま全般を表す形容詞として多用されていた。そして、ちようど同時期に、カグハシのもう一つの転化形カンバシが表記上にわずかながら現れるようになる。

近世前期においても、カウバシは変わらず嗅覚表現形容詞の中心的な語であった。しかし、(飲食物の焦げる快いにおいがする)さまを表す語としての認識は徐々に強まり、意味の限定化が始まっていた。また、前代に登場したカンバシは、カウバシほど多用されないまでも、カウバシの意味・用法とほぼ重なるような「近接類(義)語」として捉えられていた。

近世中後期には、それまで散文から姿を消していたカグハシが文章語(雅語)として復活する。カンバシは、その音声的特徴から漢語のような印象をもたれたのであろう、硬い文体や特定の書き手に好まれる文章語として

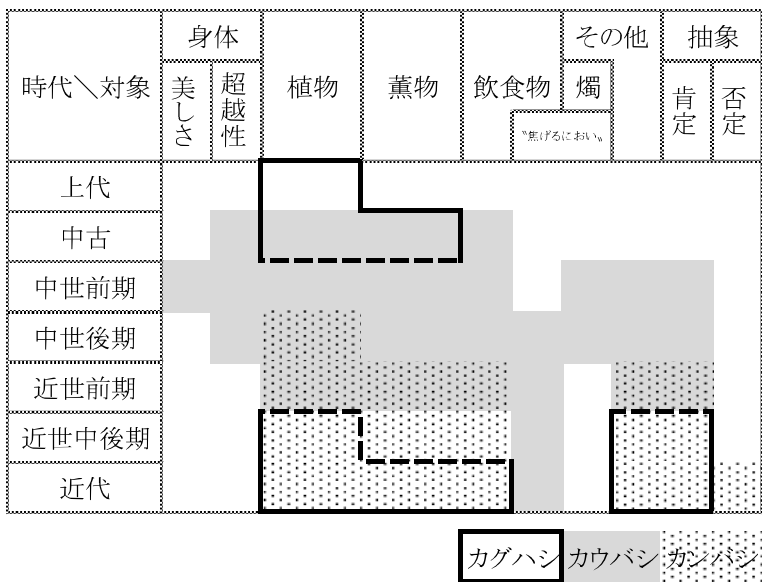
の使用が広がっていった。カグハシやカンバシが独自の表現価値を獲得していく一方で、カウバシは意味の限定化が進行する。

こうした三語それぞれの表現価値は、近代に入り一層定着する。カグワシイは、文章語（雅語）ゆえの対象の偏りはありながらも、〈快いにおいがする〉さま全般を表す語となった。また、コウバシイは、前代に始まった意味の限定化が定着し、専ら〈飲食物の焦げる快いにおいがする〉さまのみを表すようになった。そして、カンバシイは、カグワシイ同様、文章語であることが作用した対象の偏りは見られるものの、〈快いにおいがする〉さま全般を表すに至った。しかし、カンバシイの本領は嗅覚表現にはなく、否定表現を伴う評価語としての用法に見出された。これは、カグワシイ・コウバシイとの棲み分けを図るべくして生まれた抽象化派生義とも、評価語彙の穴を埋めるべく別の意味領域へ移行していった結果とも考えられる。

通史的に眺めた場合、三語の中心的な存在は長い間カウバシであった。しかし、カウバシに意味の限定化（〈快いにおいがする〉から〈飲食物の焦げる快いにおいがする〉へ）が生じ始めると、嗅覚表現形容詞語彙の均衡を保とうと、カグハシ・カンバシの二語に変化が起こった。すなわち、語彙の穴を埋めるべくして、前者は文章語（雅語）としての表現価値、後者

は硬い文章にもなじむ漢語のような語感を有する文章語としての表現価値をそれぞれ獲得し、〈快いにおいがする〉さま全般を表す語となった。また、近代に至るとカンバシイは否定表現を伴う評価語として専ら使用されるようになり、カグワシイ・コウバシイとの差異化がさらに進んでいった。こうした史的変遷を経て、カグワシイ・コウバシイ・カンバシイの三語は、現代語において共存し得たのである。

図



最後に、三語の対象の意味の史的変遷を大まかに図示しておく。近代に完成する三語の棲み分けに向かって対象の幅が広がって／狭まっていく様子を理解しやすいように示すため、用例が得られても塗りつぶさずに空欄にした場合がある。

補節 現代語において衰退している

／現代語にのみ使用される快形容(動)詞

補足として、ニホハシ・ニホ(ヒ)ヤカナリニ・カオリ高イについて述べる。これらは、現代語ではほぼ衰退している、あるいは、現代語において使用が広がったと考えられる語である。

第一項 ニホハシ・ニホ(ヒ)ヤカナリ

(一) はじめに

形容詞ニホハシ、形容動詞ニホ(ヒ)ヤカナリは、中古の仮名散文において散見されたものの、その後衰退の一途を辿った語である。現代の通常の口語ではほとんど使用されなくなっていると言えよう。

寿岳章子(一九五五)は、「意味、語の構成法、語形、如何なる点に於ても中世にあってよさそうなもの」(六四頁)としてニホハシを挙げたが、なぜこの語が中世以降あまり使用されなくなったのか、その衰退の原因はいまだ明らかにされていない。また、ニホ(ヒ)ヤカナリはこれまでほとんど注目されたことがなく、管見の及ぶ限り、犬塚 且(一九五四)があるのみである。ただし、犬塚氏の論考では中古の仮名散文での使用状況に対する印象批評に留まっており、その史的様相については明らかにされていない。

ない。

『日本国語大辞典(第二版)』における二語の語釈を確認しておく、ニホハシは、「においやかである。つややかに美しい。」とあり、ニホヒヤカナリによって換言されている。そこで次にニホヒヤカナリを参照してみると、以下のような説明がされている三。

- (1) つやつやと輝くように美しいさま。あたりに照り映えるように美しいさま。また、人が、内側からの魅力があふれてくるように美しいさま。つややか。におやか。

- (2) 芳香が立ちこめているさま。かんばしいさま。また、おいがはつきりわかるさま。におやか。

ブランチ(2)に関しては用例が挙げられておらず、専らブランチ(1)の意味で使用されていたことが推測される。『日本国語大辞典(第二版)』の記述を総合すると、ニホハシもニホ(ヒ)ヤカナリも、(艶やかな雰囲気が漂う)さまを表す語ということになる。特に後者に関しては、ブランチ(1)から分かるように、その対象が人間の美しさであることが多いと考えられる。

『日本国語大辞典(第二版)』以外に、『時代別国語大辞典(室町時代編)』

や『角川古語大辞典』などを参照してみても、やはり、へ人間の美しさ・艶やかな雰囲気が漂う」といった語釈で共通している

ニホハシ・ニホ（ヒ）ヤカナリの対象として、人間の美しさ・艶やかな雰囲気が多いということを予め念頭に置き、他にとられている対象にはどのようなものがあるかも確認する必要がある。そして、この二語の実態をつぶさに捉えるで、衰退の原因を見出してみたい。

(二) ニホハシ・ニホ（ヒ）ヤカナリの史的変遷

調査結果は表五として示す。概観するに、ニホハシよりもニホ（ヒ）ヤカナリの用例数が圧倒的に多いことが分かった。また、ニホハシ・ニホ（ヒ）ヤカナリともに、身体（美しさ）を対象とする場合が中心であることも明らかである。以下、語ごとにその用例を見ていく。

(二・一) ニホハシ

中古

ニホハシは、『源氏物語』に初出のようである。名詞形を含め、四例全てが身体（美しさ）を対象とし、へ艶やかな雰囲気が漂う」さまをニホハシが表している。

表五

資料・成立年代\対象	ニホハシ		ニホ(ヒ)ヤカナリ				
	身体(美)	薫物	薫物	身体(美)	その他	植物(花)	
宇津保物語	970-99頃		1	4			
枕草子	10C末			1			
源氏物語	1001-14頃	4**	1	17*			
紫式部日記	1010頃?			1			
栄花物語	1028-92頃		1	4			
浜松中納言物語	11C中頃			4			
堤中納言物語	11C中-13C頃			2			
とりかへばや物語	12C後	1		8			
増鏡	1368-76頃		1				
太平記	14C後			2			
転寝草紙	中世後期初			2			
岩屋の草子	中世後期				1		
四河入海	1534					1	
中華若木詩抄	1633					1	
都風俗鑑	1681			1			
暦	1685			1			
男色十寸鏡	1687			1			
好色大福帳	1697			1			
雨月物語	1776			1		1	
椿説弓張月	1807-11			3		1	
総計		5	1	3	53	1	4

*の数: 名詞形の内数

(73) あてにめでたきはびや、思ひなしに、劣り、まさらむ。あざやかに

にほはしき所は添ひてさへ見ゆ。

(源氏物語・藤裏葉)

(74) 「世に類なし」と見たてまつり給ひ、名だかうおはする宮の御かたち

にも、なほ、にほはしきは、譬へん方なく美しげなるを、世の人「光

る君」ときこゆ。

(源氏物語・桐壺)

『源氏物語』を除き他に用例が確認されないことから、一般に広く使用されるような語というよりも、この資料に特有の語であった可能性が高い。

なお、同時期のカウバシもほとんど身体(美しさ)を対象としてとることがなかった。これを踏まえれば、この頃、身体(美しさ)を対象とする語として一般的に広く使用されていたのは、自動詞ニホフであったと考えられよう。

中世以降

中世前期に至っても、わずかに二例見られるのみである。前代と同様、身体(美しさ)を対象とする一例の他、薫物を対象とする一例もある。

(75) 中納言は、はなとくと見れどもくあくまじうにほはしく、こぼるばかりの愛敬、似るものなき

(とりかへばや物語・上)

(76) 御前に御匣殿、花山院の内大臣師繼の女、二藍の七に紅の單・紅梅の

表着・赤色の唐衣・地摺の裳、髪うるはしくあげてさぶらひ給。かん

ざし・やうだい、これもけしうはあらずみゆ。あたらしき年の御喜び

などすこし聞こえ給て、例のたゞならぬ御事どもうちさゝめきがちに

て、それより公守の大納言の女の曹司さしのぞかせ給へば、いとさゝ

やかに衣がちにて、花桜のあはひにほはしきに、山吹の表着、裳ひき

かけて、より臥し給へる、あてにらうたし。

(増鏡)

ニホハシは、この後、用例が確認できない。ただし、俚言に対応する雅言をいろは順に並べた俗雅辞書『詞葉新雅』(一七九二)には、俚言ツヤくとに対応する雅言として「みやびかににほはしく」が挙げられており、中世後期から近世期にかけ、この語が文章語(雅語)と化していったことが分かる。近代以降の小説にはまれに使用されることがあるもの、もはや日常語としては意識されていない古語である。

二・二 ニホ（ヒ）ヤカナリ

中古

ニホ（ヒ）ヤカナリは、ニホハシよりも早く『宇津保物語』に初出である。この資料に見られたニホヒヤカナリ全五例中、四例が身体（美しさ）を対象としてとる。他に、薫物を対象とする一例も見られた。

(77) かの大臣「女御は」髪は多く長き数多あるべしや、筋、有様こそ

難けれ。これは有難くぞ」などで、かい分けつゝ見奉り給。つやゝかにめでたし。ことにそこなはれ給はず。少し青み給へれど、いと貴に

気高きさすがにほひやかにおはします。

（宇津保物語）

(78) 三の宮黒らかなる搔練一襲、縹の綺の指貫、おなじ直衣蘇枋襲の下襲

奉りて土器取りて、中務の宮に参り給ふ御様丈そびやかに気高きものから、いとほひやかなるもてなし、いと心憎くて、中務の宮に参り給ふ。

（宇津保物語）

上記の初出例に限らず、中古仮名散文では身体（美しさ）を対象としてとる場合が圧倒的に多く、この語の中心的な意味であることが分かる。

中世

中世に至っても、前代と同様、身体（美しさ）を対象とする用例が多い。

(79) すこしなへばめる直衣に、紅の衣かさねて、しをに色の指貫の、色も

つやもなべてならぬが、かほり染みふかく、我御身まで、くゆりかゝる心ちして、いとなれ顔に、そひ臥したるに、胸つぶれて、ふと「顔を」見あげ給ふに、かのむかしがたりにきこゆる光源氏の君も、かくばかりやはとおぼゆるまで、にほひやかに、愛敬づきて、さるはしめやかに、いとあはれなるかたもたちそひて

（転寝草紙）

また、聴覚情報も対象とするようになっていく（その他に分類）。空気を振動させ伝わってくる聴覚情報が、空气中に漂う気に通ずるからこそ、嗅覚表現語を使ったこうした描写が可能になるのではあるまいか。

(80) 忍びやかに覗きて、詳しく見給へば、此姫君は人の見るとは夢にも知り給はで、いとほやかなる御声をさし上給ひて

（岩屋の草子）

なお、ニホ（ヒ）ヤカナリが聴覚情報をも対象とするようになったのは、例(80)よりもやや遡ることができそうである。中世前期の『名語記』（一一二六八）に、以下のような記述が見られた。

- (81) 色ニモ、声ニモ、ニホヤカ。ニホニホナドイヘルニハ、如何。コノニホハニホヤカトイヘル義歟。句ノ義ナルベシ
 （名語記・卷三）

また、中世後期には、聴覚情報以外のみならず、植物（花）をも対象とするようになる。

- (82) 此詩ハ此ノ花ノキツカト体ニ出テ、是ト云コトハ上ヘハ見ヘ子トモシカモノコニニホヤカナル處カ言外ニ突然ト見ヘタソ
 （四河入海・一四ノ二）

- (83) 春風弘檻露華濃……春風ガ牡丹ノアル欄檻ヲウチ払イテ、花ニハ露ガイツキリト置イニヲヤカニ見エタル也。
 （中華若木詩抄・清平調・李太白）

二例ともに見エルという視覚表現語と共起していることから、植物（花）

の見た目・においの心地よさを描写していると解釈できる。

近世

中世後期には対象がやや広がったニホ（ヒ）ヤカナリであったが、近世以降はそうした対象の拡大は認められず、用例の大部分は身体（美しさ）が占める。

- (84) 抜からぬ顔付威儀有躰は、名人の挿したる立花の精あり。いさぎよく清ら成さまは、水晶の鉢より白玉椿の咲出たるが如く、衆道侍の意気をそなへ、しかもぎこつなくてやさしく、句ひやかに又どこやらきつとしたる様は、木つき見事なる梅の古木より八重ひとへに咲乱れ、句ひ貴やかなるが如し。
 （都風俗鑑・第三・四条河原之評判）
- (85) 「朝顔の姫」ちゝの御名はくちまじと、らうたけてにほやか成かほばせより、つながぬ玉をはらくとこぼし
 （暦・第一）

また、近世中後期には文語体資料である読本にしか用例は出てこず、日常語としては衰退していたと推測される。

(86) 年は廿にたらぬ女の、顔容髪のかゝりいと艶ひやかに、遠山ずりの色よき衣着て、了鬢の十四五ばかりの清げなるに、包し物もたせ、しとゞに濡てわびしげなるが、豊雄を見て、面さと打赤めて恥かしげなる形さまの貴やかなるに、
(雨月物語・巻四・蛇性の淫)

(87) 梅花はじめて匂やかに、桂樹に雑る鐵樹花もつぼみ含て冬をまつ
(椿説弓張月・続篇・巻四・第三八回)

近世中後期には日常語として衰退し、文章語(雅語)として認識されていたことを示すのが、次に挙げる『和英語林集成』である。ニホヤカナリニホヤカナリには古語注記が付されているのである。ニホ(ヒ)ヤカナリが一貫して身体(美しさ)を対象としてきたことを踏まえてか、語釈は視覚表現語が並ぶ。

(88) NIHOYAKA, ニホヤカ、芬芳, New and fresh in color, bright.

—na iro. (和英語林集成・初版)

「明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス」

(三) 衰退の原因

中世前期以降、日常語の世界から衰退していったニホハシも、近世期に日常語の世界から衰退していったニホ(ヒ)ヤカナリも、一様に身体(美しさ)の描写に使用される語であった。この二語が衰退した原因は、その対象にあったと考えたい。

本章で前述したように、中世後期以降においては、美人描写に嗅覚表現語彙自体が使用されなくなる。身体(美しさ)を対象として頻繁にとつていた自動詞ニホフ・カヲルも、視覚表現が多用されるに従い、身体(美しさ)を対象としなくなるのであった。美人描写から嗅覚表現語彙が退けられていくということは、つまり、美人描写を第一の用法としていたニホハシ・ニホ(ヒ)ヤカナリの存在価値が失われることを意味する。語自体の存続が危ぶまれる局面にあつて、ニホ(ヒ)ヤカナリは、これまでとは異なる対象(聴覚情報や植物(花))をとることで、中世後期においても生き長らえたのではないだろうか。ニホハシは、そもそも一般に広く使用される語ではなかったため、新たに対象を広げることなく衰退するに至ったのであろう。

カウバシのように幅広い対象をとらず、あくまでニホフの派生形容詞として使用されていたニホハシ・ニホ(ヒ)ヤカナリの二語は、美人描写以外の固有の用法を確立するに至らないまま、衰退の一途を辿っていったの

である。

(読切小説集・一九五六年一月・二一〇)

第二項 カオリ高い

(一) はじめに

前項ではニホハシ・ニホ(ヒ)ヤカナリのような派生形容(動)詞を扱った。本項では、いくつかの先行研究が一語として認めるカオリ高いという複合形容詞について取り上げ、先行研究に対して史的観点からの補足をしておきたい。

(二) カオリ高いを一語と認める立場

西尾寅弥(一九七二)では、形容詞高いの基本的意味が「ものの垂直上方への延長が大きい」(三六七頁)であるとし、「空間的に高く、卓立したものが目立ちやすい」(三八八頁)のために、比喩的・慣用的には「たんに量的・程度的にいちじるしることを表わす」(三八三頁)場合のあることを述べる。その一例として、嗅覚表現について高イが使用された用例を挙げる。

沈丁花シマヅクシがとおり一杯に高く匂におうくっていた。

(くれない・三〇)

クリスサンベツの両岸に宿が林立、脂粉シメツクの香も高い。

かつて私が切断された足首を見た河原へ、私は歩み出した。萱の間で臭気におが高たかくなった。

(野火・一五九)

一方で、カオリ高いを一語の複合形容詞と見て、「よい意味に使われ、また具体的ななおいから離れて抽象的な意味に使われることが多い」と指摘したのである。

食後には遠く南国よりもたらし熱帯のかおり高き果実やコーヒコーヒを味わうことさえできる。

(貧乏物語・九三)

健全な、香り高い映画が数多く作られるように、

(娯楽よみうり・一九五六年一月四日・六三)

西尾寅弥(一九七二)の研究成果を取り入れた飛田良文・浅田秀子(一九九一)においても、カオリ高いは一語の複合形容詞として挙げられている。そして、「具体的ななおいがきわだつて、あたりに発散している場合」や「抽象的なものが他からきわだつて魅力がある様子を表す場合」があると述べる(一三八頁・傍点筆者)。また、カグワシイ・カンバシイとの相違点

として、においの程度が大きいことや、抽象的な意味での使用が見られることを挙げる。

(三) カヲリ高シについて

先行研究で一語として認められたカオリ高イは、その初出例をどこまで遡ることができるであろうか。

結論から述べれば、カヲリ高シという語（あるいは一語化以前の語句）

は近世以前の言語資料に出てこず、おそらく近代以降に誕生したものと考えられる。近世以前において確認できるのは、近世中後期の人情本の「カヲリノ高シ」一例のみである。

(89) 浮世に遠き山住の、春を数へて雪中に、まづ頼母しき冬至梅。其香も

ゆかし白梅の、闇を照らせし柴折戸に、臥龍が隆中の才智ならねど、
節知り顔の梅一輪。その花びらの五年以来、販元画工の丹誠に、木ぶりも仕上し枝から枝、やうやく香をりの高くなりて、来る年ごとに
看官の、まだかくと問ひたまひし、御最貞故に、

(春色恵の花・自序)

ここで興味深いのは、カヲリ高シが未見であったのに対し、ニホヒ高シは二例認められることである。ともに近世中後期の用例である。

(90) 此里のはん多ひ立帰る春ことに桜は四方ににほひたかく、文月のとほ

し火は家毎にゆらく玉の緒の光をあらそひ
(交代盤栄記・序)

(91) 参詣日日に群集し、茶店あまた祇園香煎の匂ひ高く、齒磨うりの居合

抜、買薬のいひたて、うき世ものまね、能狂言、境内に所せきまでみ
ちくくたり
(東海道中膝栗毛・七編・上)

ただし、一語化していると言えるほど用例は多くない。また、次のように「ニホヒモ高シ」という助詞を介する用例もあることから、この頃のニホヒ高シは、単に主述関係にある語句としか言えないであろう。

(92) 左勝 三木「にほひある聲や伽羅ぶしうたひ初」

右 義正「春の歌やふとく出申うたひぞめ」

左の発句は。にほひも高き伽羅ぶしのうどんげよりもめづらかに覚え
侍る。
(芭蕉文集・貝おほひ・一番)

近代以降、いつ頃からカオリ高イが登場してくるのかは十分に分からないままである。今後の調査によってその時期を明確にしていきたい。

また、カオリ高イ以外に、一語化とは言えないまでも非常に緊密に結びついた語句があるのかどうかも検討する必要がある^{三四}。そうした表現をも含めることで、嗅覚表現語彙をより広く捉えることができるはずである。

一 『日本国語大辞典(第二版)』「こうばしい」項には、「(1)かおりがよい。

においがよい。かぐわしい。(2)見た目や心に受ける感じなどが、すばらしい。魅力的である。美しい。好ましい。りっぱである。徳が高い。」とある。

古代語カウバシが(快いにおいがする)さま全般を表していたことに引かれ、やや不十分な語釈となっている。

二 ただし、『今昔物語集』においては、天竺・震旦部が「香」、本朝部が「馥」を使用するという、使用漢字の相違が見られた。このことは、すでに佐藤武義(一九八四)が指摘している。

三 初版のみ、活用・派生形として「KOBASHIKI, —KI, —KU, —U, —SA」のようにウ音便形・名詞形が挙げられている。

四 文章語は、対象そのものの価値が高い傾向にある(宮島達夫一九七七・一九八八)。「少女に対する」乙女、「金に対する」こがね」など。

五 平仮名はヲト点を、片仮名は加点をそれぞれ表す。

六 名詞化接尾辞・サの付加したカウバシサであれば、すでに中古の段階で抽象的対象をとる用例が見える。「親のお側に漂い出る慕わしい心地よさ」といった解釈にでもなるうか。

これより東なる花園になむ、春と秋とくんだり給フなるを、花園よりと
うけ給はれば、親の御あたりのかうばしさに、娑婆世界の人のかよは
ぬ所なれども、
(宇津保物語)

七 村田菜穂子(二〇〇五)は、「院生鎌倉時代以降に、シク活用形容詞の終止形に「—しし」という形態のものが認められるようになる」ことについて、「ク活用・シク活用とを対立的に意識し、シク活用語尾を肥大化して捉えていたことの現れ」(一九六頁)と指摘する。この他、橋本四郎(一九五七)や鈴木丹士郎(一九六三)などに、シシ語尾が文語的表現であったとの言及がある。

八 『今物語』のこの用例は、歌を中心として『菟玖波集』(一三五六)にも収められている(ただし、作者名は逆になっている)。

油綿をさし油にしたりけるがいと香しく匂ひければ、

「ともし火はたき物にこそ似たりけれ」上西門院兵衛

「丁子かしらの香や匂ふらん」待賢門院堀河」

(菟玖波集・一八九四)

なお、この二資料の共通性については、金子金治郎(一九六五)に言及がある。

九本論第二部第四章で詳述するように、中世前期において「焦げるにおい」を表すマイナス評価の語には、焦ガレクサシがある。なお、「焦げるにおい」を表すクサシの増加は中世後期以降に始まる。

一〇 近世初期成立の狂言台本のうち、「釣狐」を所収する他台本を参照してみると、狂言記正篇(一六六〇)には、発話者が異なるものの若鼠の油揚げに対して「気味の。ゑい」という味覚表現が見える。やや時代が下り、近世中後期成立の鷺流名女川本(一七六一)では、享保九年本「むまいにをい」、貞享三年本「むまい香」とある。また、大蔵流虎寛本(一七九二)と鷺流賢通本(一八五五)とは共通に「うまい匂ひ」、和泉流雲形本(一八一八・一八三〇)は「うまいにほひ」とあり、やはり味覚表現となっている。ここで挙例を見返してみると、後続の文脈で「かうばしひにほひ」が「むまひか」に換言されていることに気づく。嗅覚表現語彙と味覚表現語

彙との密接な関係性が窺える。

二 意味的中和(どちらを使っても言える)が起りやすい「近接類(義語)」を扱った論考に、信太知子(一九八四)や小野正弘(一九九一)などがある。小野正弘(一九九一)では、そうした言語事象を例に、言語の経済性の重視には慎重を期すべきであると指摘する。

三 語釈される語の多くは字音語である。『日葡辞書』の字音語の見出しは、その訓読を語釈の冒頭に示すことを本則とし、「身近な日本語で和らげた言い方にかえて言うための手引を与え」「複合語全体の意義を具体的に示す傾向が強い」(『邦訳日葡辞書』岩波書店一九八〇・解題一六頁)とされる。カウバシがカンバシよりも日常語として認識されていたことが分かる。

三 狂言台本においては、流派により二語の使用傾向(伝承)が分かれるようである。固定的表現「花中の鶯舌、花ならずして」の述語部分に、大蔵流(虎明本(一六四二)・虎寛本(一七九二))はカウバシを、和泉流(天理本(一六四五前後)・雲形本(一八一八・一八三〇))はカンバシを使用する。

四 古く擬声語・擬態語の中に分布していた促音・撥音が、顕在化し正式な音韻体系に組み込まれるに至った契機として中国語との接触が考えられる(小松英雄一九八一)。促音・撥音は漢語らしさをもたらす語感であろう。

一五 調査には、既刊の小説テキスト、『口演速記明治大正落語集成 一〜七』
「講談社・一九八〇・一九八一」、『昭和戦前傑作落語全集 一〜六』「講談社・一九八一・一九八二」、太陽コーパス、現代書き言葉均衡コーパス、近代デジタルライブラリー、聞蔵Ⅱを利用した。

なお、近代の調査結果は表にまとめず、特筆すべき傾向を記述していく形にした。これは、用例の得られた資料の文体が種々様々で、近世以前のように資料ジャンルで用例数をまとめて掲載することが難しいためである。また、語の表す意味について、それを可能にした資料一つ一つの文体に触れるのはあまりに煩雑になると考え、得られた用例を概観しての特徴を記述するにとどめた。

一六 一九四八年の「当用漢字音訓表」によつて「芳」に「かんばしい」の訓が採用されたのは、こうした「香」「芳」二字の混用が甚だしかったことが背景にあったのであろう。

一七 前田富祺（一九八七）は、『日本大辞書』における古語意識が、一般のそれとどの程度一致するかについては十分な検討を要するとしながらも、優れた一文学者の国語意識の現れとして古語・廢語注記に注目する。

一八 ただし、『帝国大辞典』『日本新辞林』の二辞書のみ、コウバシイに古語注記を付す。『日本新辞林』は『帝国大辞典』を増補したものであるため、

『帝国大辞典』がなぜコウバシイにまで古語注記を付したかが問題となる。この辞書は、『日本大辞書』の版權を買い取り、それを基礎とし他の国語辞書をも参考にして作られたものであるが、基礎となった『日本大辞書』ではコウバシイに古語注記は見られない。『帝国大辞典』が雅語・俗語の網羅を意図した辞書であった（飛田良文・松井栄一・境田稔信編二〇〇三）ために、編者により雅語認定の基準が広げられ、コウバシイにまで古語注記が付された可能性が考えられよう。

一九 このように、文体的意味と語の用法とに関連の見られる事例として、助詞スラがある。高山善行（二〇〇三）では、古代語スラが論理的・説明的な表現に頻出するために、中古以降においてほぼ漢文系資料に専用の助詞となると見ている。つまり、高山氏はまず語の用法があり、それが文体的意味に影響を及ぼすと見るわけである。

しかし、カンバシは、その逆、あるいは、同時に相互影響の存したものと考えられる。すなわち、文章語という文体的意味ゆえに評価語として批評表現に多用されたか、あるいは、文体的意味の確立と用法の確立とが同時に進行していったか、という経緯が想定される。

二〇 〈快いにおいがする〉さま全般を表す日常語は自動詞が担う（本論第三部・第四部）。

二三 ニホヒヤカナリと同義であるニホヤカナリも用例に含めて論じていく。
二三 なお、「にはほやかに」項ではニホヒヤカナリに同様という旨が書かれるのみで、特に詳細な語釈はない。

二三 ニホヒヤカナリは、三版にのみ立項され、*“adj. Same as niyoyaka.”*とだけ語釈がある。

三四 例えば、「気味」には、「良い気味ダ」「気味が悪い」といった固定化した表現が見られる。

第二章 成句「梅檀は二葉より―」における述語部分の史的変遷

―カウバシからカンバシへ―

第一節 はじめに

本章では、本論第一部第一章で扱った形容詞に関連する表現「梅檀は二葉より芳し」を取り上げる。この成句^一は、優れた人間が幼少の頃からその才能を表すことを、白檀が発芽の頃から香気を放つことに喩えたものである。『観仏三味海経』に見られる「梅檀ハ根芽漸成長シ、纒ニ樹ヲ成サント欲シテ、香氣昌盛」に基づくとされ^二、初出例は『保元物語』の「梅檀と云^三云^四樹は二葉より芳^五かんなるは」「金刀比羅本」まで遡ることができ^六る。現在、この成句の述語部分にはカンバシを使用することが一般的である^七が、『保元物語』ではカウバシとなっていることに注目したい。

一般に、成句は古い時代のことばを残す傾向にあり^八、意味の多様性や歴史の変遷の認められるものが多くないために、日本語学において研究対象として取り上げられることは少なかった（佐竹秀雄二〇〇九）。しかし、「梅檀は二葉より―」の述語部分に関しては、ともにカグハシを原形とするカウバシ・カンバシのうち、より新しい形である後者に取って代わられているのである。述語部分の交替は、いつ頃起きたのであろうか。

本章では、「梅檀は二葉より―」の述語部分の変遷について調査し、カウ

バシ・カンバシの交替現象がいつ頃生じたのかを明らかにする（第二節）。また、この成句を好んで使用し始めた資料群である軍記物語については、諸本を対照し、どのようなバリエーションが見られるかを確認する（第三節）。これには、一言語表現を通史的に考察するだけでなく、共時的にはどのような展開を見せていたのかをも考察する意図がある。そして、本論第一部第一章で明らかにした日常語におけるカウバシ・カンバシの変化が、文章語に属する成句「梅檀は二葉より―」にどのような影響を及ぼしたのかを探ってみたい（第四節）。以下、「梅檀は二葉より―」を指して、単に「成句」と称する。

なお、本章では、新たな調査対象として近世以降のことわざ資料や明治期の国語辞書などを加えた。

第二節 述語部分の史的変遷

調査結果は、用例の得られた資料のみ、その述語部分の詳細を示す。述語部分における読み不明欄には、「香（バ）シ」や「芳（バ）シ」などのように、漢字表記のため読み分からない用例を分類した。また、カウバシ・カンバシ・読み不明の用例については用字も示したが、用字の明確な使い

表一 中世

No	資料	成立年代	カグハシ	カウバシ	カンバシ	読み不明	ニホフ	述部省略	その他
1	保元物語	1220頃?		○芳					
2	平家物語	13C前期		○					
3	撰集抄	1250頃				○薫			
4	源平盛衰記	14C前期		○芳					
5	曾我物語	南北朝		○					
6	太平記	14C後期		○					
7	一箱満王(幸若舞)	中世後期		○					
8	摂待(謡曲)	中世後期					○		
9	蟬丸(謡曲)	中世後期		○香					
10	桜井(謡曲)	中世後期		○芳					
11	天草本平家物語	1592		○					
12	天草本金句集	1593		○					
13	信長公記	1598			○				
	計		0	10	1	1	1	0	0

分け意識は見出せなかった。

第一項 中世

前述した通り、この成句

の初出は中世前期の『保元

物語』であり、その述語部

分は「芳」^{かうばし}「金刀比羅本」

であった。続く『平家物語』

も「かうばし」「龍谷大学覚

一本」とある。初期の用例

が軍記物語に多くみられる

ことから、こうした資料群

が好んで使用し始めた成句

であることが分かる。軍記

物語は、「何か一つの重要な

歴史的・社会的・政治的事

件を述べようとする時、規

範を求めて故事来歴を探り、

權威ある言説を典拠に尋ねるのであり、ことわざ・格言・故事成語が自ら

多量になる」傾向があると言われる（麻原美子一九八六・二六・二七頁）。

この成句が軍記物語の中で好んで使用され始めた事実も、そうした傾向の

中に位置づけることができよう。

初期の成句には説話における用例も一例あった。

(1) 梅檀は二葉より薫し。

（松平本撰集抄・巻九・九）

中世前期の成句ではカンバシがほとんど使用されず、一貫してカウバシ

が使用される傾向にあることを踏まえれば、例(1)もカウバシと読む可能性

が高いと考えられる。なお、「薫」の字を使用したものは通史的に見て例(1)

のみである。

中世後期においても、カウバシが圧倒的に多く使用されていることが分

かる。軍記物語以外にも幸若舞・謡曲などの資料において使用されるよう

になり、例(2)のように意図的に述語部分の表現を工夫するものも出てくる。

(2) 父給べなうとて走り寄れば。岩木を結ばぬ義経なれば泣く／＼膝に懐

き取る。げにや梅檀は。二葉よりこそ句上はふなれ。(謡曲・撰待)

中世後期には、述語部分の表現を変えても本来の形が想起されるほどに、

広く知られた成句として認識されていたのであろう。この成句が『天草本金句集』に採られていることも、その証左と言える。

(3) 虎生マレテ三日牛ヲ食ウ機有リ。 *Yendan ua futaba yori cōbaxij ga gotoqu zo.*
(天草本金句集・二〇一則・心)

そして、中世後期末に至りようやくカンバシの例が出現する。以下の例

(4) が、この成句の述語部分にカンバシが用いられた最初の例である^五。

(4) 梅檀者二葉よりしてかんばしく
(信長公記・卷一一)

第二項 近世

近世初期の段階では、成句の述語部分においてカウバシが優勢であるのは変わらない。しかし、一八世紀以降はカンバシも散見され始める。

(5) エ、いかに幼ければとて十ヲに余れば大人役などさ程にも弁へなき。
せんだんはふたばよりかんばしといふ譬えも有。
(吉野都女楠・天皇かちどの御ゆき)

さらに、読み不明の用例が三例あることに留意したい。近代に至ると述語部分にカンバシを使用するものが急増する(後述)ことを考慮すれば、近世の読み不明の用例をカンバシと読む可能性も低くはないのである。

また、前代に引き続き、ニホフや述語部分の表現を変えたものもあつた。なお、ニホフは、例(6)を最後に近代以降には見られなくなる。

(6) げにやせんだんはふたばよりこそにほふなれ。(凱陣八嶋)

(7) 梅檀ハ二葉より。その香か。餘木よぼくに優るといへり。

(俊寛僧都鳴物語・卷一)

例(7)のように述語部分に工夫を凝らすものの他に、以下のように述語部分を省略したものが多くあり、これが近世の特徴にもなっている。述語部分を省略しても当該の成句だと知れるほど、この成句が一般に広く定着していたことを示していると言える。

表二 近世

No	資料	成立年代	カグハシ	カウバシ	カンバシ	読み不明	ニホフ	述部省略	その他
14	醒酔笑	1623		○					
15	毛吹草	1645		○					
16	子孫鑑	1667		○					
17	杉楊枝	1680						○	
18	医生物語	1681						○	
19	凱陣八嶋	1685?					○		
20	遊小僧	1694		○					
21	絵本集艸	近世中期			○				
22	吉野都女楠	1710頃			○				
23	国姓爺明朝太平記*	1717		○芳					
24	国姓爺明朝太平記*	1717		○					
25	軽口機嫌囊	1728						○	
26	尾張俗諺	1749				○香			
27	根無草後編	1769		○香					
28	喜美賀楽寿	1777						○	
29	傾情知恵鑑	1783			○				
30	譬喩尽	1786		○香					
31	戯男伊勢物語	1799		○香					
32	石言遺響	1805		○香					
33	石童丸苜蓿物語	1806		○香					
34	椿説弓張月	1807-11		○芳					
35	俊寛僧都嶋物語	1808							○
36	国字分類諺語	1830				○芳			
37	仮名文章娘節用	1830						○	
38	諺叢	1832				○香			
39	雀巢漫筆	1866						○	
40	世俗俚言集	幕末頃		○					
41	仙台藩土谷津老鱗雜記	1868			○				
計			0	13	4	3	1	6	1

*一資料に二例確認

(8) 梅檀ハ二葉よりと申も、この御かたの事なるへきなど、ほめあぐ
るうちに、
(杉楊枝)

(9) 梅檀はふた葉とやら、やがて成人したならば、孝行者にならうの
に、
(仮名文章娘節用)

第三項 近代（明治）

明治期に至るとカウバシ七例、カンバシ一三例と、近世以前の様相
とは一転してカンバシが優勢になっていることが分かる。読み不明の
用例も九例と多くあり、このうちカウバシと読むものもいくつか含ま
れるかもしれないが、明治期はカンバシが優勢になり始める時期であ
ると指摘できよう。

興味深い用例として、日本の諺をローマ字で三〇〇収録する
『Kotowaza-dukusi』がある。

(10) Sendan wa Hutaba yori kanbasi. Sendan wa kobasi ki no Na.
(Kotowaza-dukusi)

表三 近代(明治)

No	資料	成立年代	カグハシ	カウバシ	カンバシ	読み不明	ニホフ	述部省略	その他
42	和漢洋諺	1885				○香			
43	日本いろはたとへ英訳	1886						○	
44	無花果艸紙	1887頃				○香			
45	浮雲	1887-89							
46	ことわざ	1889		○馨					
47	和漢泰西俚諺集	1890		○馨					
48	知玉叢誌	1890-91				○香			
49	国民の品位	1891				○馨			
50	知識宝庫金諺一萬集	1891							○
51	俚諺千篇堪忍袋卷之上	1891			○馨				
52	開桜	1892							○
53	作文良材世言考	1892				○香			
54	格言俚諺一言萬金	1893				○香			
55	雛鏝	1897						○	
56	ことばの泉	1898-99	○						
57	俚諺通解	1899			○香				
58	処世要訣規箴	1899		○香					
59	出処註釈世諺叢談	1900		○香					
60	俗諺辞林	1901			○馨				
61	新選俚諺集	1901			○香				
62	思出の記	1901			○芳				
63	二葉より馨ばしの梅檀	1901				○馨			
64	国書辞典	1902	○						
65	一語千金俚諺類集	1903							○
66	年ほめ*	1903			○香				
67	年ほめ*	1903			○香				
68	新式いろは引き節用辞典	1905		○馨					
69	福岡県俚諺集	1905頃				○香			
70	俚諺辞典	1906			○香				
71	分類一覽俚諺全書	1907			○香				
72	日本俚諺大全	1908			○香				
73	俚諺通解	1909		○香					
74	品性修養金言俚諺釈義	1910		○香					
75	小学校掲示資料	1910				○香			
76	Kotowaza-dukusi	1910			○				
77	大辞典	1912			○				
	計		2	7	13	9	0	2	3

*一資料に二例確認

成句は「kanbasi」であるのに対し、解説では「Kobasi」となっている例である。カウバシ・カンバシが共存する中で、日常語として（古語的ではあっても）いまだ「梅檀（という植物）がカウバシ」と表現され得る状況にありながらも、文章語としての成句の述語部分にはカンバシが適切であると認識されていたことを、如実に示しているのではなからうか。

述語部分を省略したものは二例、述語部分の表現を工夫しているものは三例ある。

(11) 梅檀は二葉より知れる（一語千金俚諺類集）

さらに、『明治期国語辞書大系』[大空社・一九九七・二〇一一]所収の国語辞書二七冊を調査したところ、成句を立項するものとして落合直文著『ことばの泉』、同著『国書辞典』、山田美妙編『大辞典』の三冊が確認された。

落合直文の手による二冊は、いずれも述語部分にカグハシを採用する。

(12) せんだんはふたばよりかぐはし……『せんだんの木は、もえいづ

るときよりかぐはしくはふといふ義』すべて、人に優りたる人は、

未だ幼き時より、そのしるしあり。(ことばの泉)

なお、『ことばの泉』ではカグハシ・カウバシ・カンバシ三語を立項して

おり、このうちカグハシのみを古語として認識している。古くからあるこ

の成句の述語部分には、原形であるカグハシがより適切であると考えたの

であろうか。あるいは、著者が歌人であったことが、雅語であるカグハシ

の採用に繋がったのかもしれない。いずれにせよ、成句の述語部分にカグ

ハシを採用したものは、通史的に見てもこの二辞書のみであった⁶。

上の二辞書とは対照的に、山田美妙の編んだ『大辞典』は述語部分にカ

ンバシを採用する。

(13) せんだんはふたばよりかんばし……香木タル梅檀ハソノ嫩葉カラ

早く既ニ芳香ヲ有スルトノ意。スベテ、秀才ナドハソノ幼少カラ早く

ソノオモムキガ見エテ居ルトノ意。(梅檀ノ嫩葉必シモ事実ニ於テハ

香バシクナイ。此句ハ只梅檀ヲ香木ト思フママ想像デ単ニ云ヒ成シタ
モノ。(大辞典)

落合直文による先の二辞書はやや例外であって、国語辞書においても例

(13) のような見出しが立てられるほどに、成句の述語部分としてのカンバシ

の使用は定着していたと考えられる。

第四項 近代(大正・昭和)

成句の述語部分においてカンバシが優勢になり始めた明治期を経て、大

正期に至ると、読みの分かっているものではカンバシしか見られなくなる。

二語が完全に交替したと見てよからう。昭和期においてもその様相に変化

は見られない。現在のように、述語部分にカンバシのみを使用するように

固定化したのは、近代の明治期から大正期にかけてであったと考えられる。

(14) Sendan wa, Futaba yori kanbashi. 梅檀は二葉より香し

(Japanese proverbs)

表四 近代(大正・昭和)

No	資料	成立年代	カグハシ	カウバシ	カンバシ	読み不明	ニホフ	述部省略	その他
78	実用故事俚諺俗語新辞典	1912			○香				
79	日臺俚諺詳解	1913				○香			
80	罵倒録	1914						○	
81	万国共通ことわざ集	1916			○芳				
82	格言俚諺辞典	1917			○芳				
83	和漢泰西金言と俚諺	1918			○香				
84	月明	1921				○香			
85	大婚満二十五年	1925				○香			
86	社会万般番附大集	1927			○香				
87	格言警句集	1928			○芳				
88	金言	1929			○香				
89	福島県の俚諺	1932				○芳			
90	Japanese proverbs and proverbial phrases	1935				○芳			
91	諺の解釈	1935			○香				
92	俚諺読本	1936				○香			
93	伊予の俚諺	1936			○				
94	趣味常識俚諺と世相	1940			○香				
95	Japanese proverbs	1940			○				
96	ことわざ物語	1940			○香				
	計		0	0	12	6	0	1	0

第三節 諸本によって異同のあるものについて

第二節で見たように、この成句を好んで使用し始めたのは軍記物語であった。これらは伝本相互の異同が多いことも知られている。そこで、本節では、軍記物語『保元物語』『平家物語』『源平盛衰記』『曾我物語』『太平記』『信長公記』と、初期の軍記と同時代成立の説話『撰集抄』の七つについて諸本を対照し、第二節で使用した伝本以外における成句の状況を見ていくことにする。これにより、成句の史的変遷に加え、共時的な展開をも考察する。以下、異同の見られたものを中心に言及していきたい。

第一項 『保元物語』

現存する『保元物語』の諸本のうち、最も古い奥書(文保二年(一一三二一八))を有する文保本は中巻しか残されていないため、成句の有無が確認できなかった。ただし、文保本の書き入れを本文に取り入れている半井本はこの成句が見られないことから、文保本も半井本と同様に、成句の見られない可能性が高いと考えられる。

この二本に次いで古態とされる鎌倉本・京凶本にも、成句は見られていない。前掲した金刀比羅本以前の『保元物語』の諸本において、この成句は取り入れられていないようである。

金刀比羅本系であり、金刀比羅本よりも先に成立したとされている宝徳本には成句が見られるものの、「香ハシかんなる物を」とあり、その読みは分からない。

注目すべきは、金刀比羅本系に次ぐ京師本系において、カンバシが使用されていることである。

(15) せんたんといふ木ハ二葉よりかんばしかんなる物を

(保元物語)「京師本」

ただ、京師本以降の諸本を校異し、流布本系統の本文を前提とする『参考保元物語』には「馨シカンナル物ヲ」とある。京師本以外の諸本にカンバシを使用したものは確認できないことから、『保元物語』の成句の述語部分としてはカウバシが定着していたと考えられよう。

なお、流布本系の古活字本、流布本系に近い本文を持つとされる杉原本には、成句自体が見られなかった。

第二項 『平家物語』

『平家物語』では、語り系諸本か増補系諸本かを問わず、成句の述語部

分には一貫してカウバシが使用されている。

語り系諸本のうち、鎌倉時代成立と推定される古本系諸本では、屋代本を除き成句が見られている。述語部分は、カウバシを使用しているものが国立国会図書館蔵百二十句本・龍谷大学蔵覚一本・東京大学国語研究室蔵覚一本の三本、「香」とあり読みの分からないものが平松家本・竹柏園本・慶応大学斯道文庫蔵百二十句本・鎌倉本の四本である。

(16) 梅檀ハ自ニ一タ葉一香ト

(平家物語)「竹柏園本」

同じく語り系諸本で江戸時代成立とされるものを見ると、平家正節では「芳」、波多野流節譜本では「香」とあり、いずれもカウバシを使用している。

鎌倉時代成立とされる増補系諸本では、語り系諸本と全く異なる調査結果となった。源平闘諍録・四部合戦状本・南都本・延慶本・長門本には成句が一切見られないのである。増補系諸本のうち、唯一成句が見られたのは『源平盛衰記』である。

(17) 梅檀樹ハ二葉ヨリ芳クカウバシ(源平盛衰記)「内閣文庫蔵十一行古活字本」

第四項 『太平記』

『太平記』は、諸本によって述語部分に異同がある上に、他の軍記物語にはない表現が見られる。

第三項 『曾我物語』

『曾我物語』では、真名本系の妙本寺本・大石寺本、仮名本系の太山寺本には成句が見られなかったが、流布本系の十行古活字本・彰考館本・万宝寺本には成句が確認された。

- (18) 梅檀は、二葉よりかほばしカウハシセ
(曾我物語)「十行古活字本」
- (19) 梅檀は二葉より□「草冠十句」
(曾我物語)「彰考館本」
- (20) せんたんは二ばよりかうはし
(曾我物語)「万宝寺本」

流布本の中でも、古態を留めるとされる例(19)の彰考館本の述語部分は、『大漢和辞典』にも見えない漢字のためその読みは分からない。ただし、他の二本はカウバシを使用していることから、『曾我物語』においても成句の述語部分としてカウバシの定着していた可能性が高いと考えられる。

- (21) せんだんハ二ばより芽て百圍香ハシトいへり
(太平記)「神田本」
- (22) 梅檀ハ二葉ヨリ百圍ニ馥シト云リ
(太平記)「義輝本」

「梅檀の芳香が百圍に及ぶ」という表現は、『太平記』のこの二本にのみ見られた表現である。なお、例(22)の義輝本「馥」の字は、成句中のカウバシに使用された例が他に見られなかった。

慶長八年十二行古活字本・玄玖本はそれぞれ「芳」「香」とあり、読みは分からない。読みの分かるものとしては、土井本・梵舜本・日置本がある。土井本・梵舜本は「かうはし」「芳」とあり、ともにカウバシを使用しているが、次に挙げる日置本(元和四年(一六一八)書写)ではカンバシが使用されている。

- (23) 梅檀ハ二葉ヨリ香シカウハシ
(太平記)「日置本」

第五項 『信長公記』

成句の述語部分におけるカンバシの初出は『信長公記』であった。陽明文庫蔵本（前掲例(4)）・我自刊我叢書ではともにカンバシを使用しているが、作者である太田牛一の自筆本と推定される岡山大学池田文庫蔵本には成句が見られなかった。町田家本・内閣文庫蔵本は、この二本を校合したもののしか確認することができなかったが、これもやはりカンバシを使用している。他の軍記物語は（いくつかの諸本を除き）成句の述語部分としてカウバシが定着していたのに対し、これらよりも成立年代の遅い『信長公記』はカンバシで定着していたようである。

第六項 『撰集抄』

『撰集抄』は諸本によって述語部分の異同が大きい。広本系の松平本（前掲例(1)）・書陵部本・静嘉堂本では「薰し」とあり読みは分からない。書陵部本・静嘉堂本は近世初期頃に書写されたものであるので、カンバシと読む可能性もあるかもしれないが、正和四年（一一三一五）の奥書を有する松平本は、未だカンバシが多用されていない時期の本文を示していると考えられ、カウバシと読んでいた可能性が高いであろう。松平本・書陵部本・静嘉堂本と同じく広本系である鈴鹿本では、述語部分の表現が変えら

れており、動詞ニホフが使用されている。

(24) 梅檀は二葉よりにほひ。
（撰集抄）「鈴鹿本」

慶長年間刊行とされる略本系の嵯峨本ではカンバシが使用されていた。

(25) 梅檀は二葉よりかんはし。
（撰集抄）「嵯峨本」

第七項 諸本の異同から推測されること

「梅檀は二葉より」は、軍記物語において特に好まれた成句であったようである。しかし、資料ごとに表現の細かな異同があるのみならず、同じ資料においても諸本様々な展開を見せることも明らかになった。これはつまり、多少表現を工夫してもそれと特定できるほどに、当時この成句が広く知られていたことを示しているのではなからうか。

また、例(15)の京師本『保元物語』、例(23)の日置本『太平記』、『信長公記』の諸本、例(25)の嵯峨本『撰集抄』など、成句の述語部分にカンバシを使用している諸本は、いずれも中世後期末から近世にかけて成立したものである。諸本を対照させることによっても、この成句の述語部分にカンバシが

進出してきた時期は浮かび上がってくると言える。

第四節 おわりに

中世後期末から近世期にかけて、本来カウバシが使用されていた成句の述語部分に、より新しいカンバシが進出し始めた。さらに、近代の明治期から大正期にかけて完全に二語は交替することになる。また、述語部分に二語以外を使用したり、述語部分を省略したりするなど、表現に様々な工夫を凝らす場合のあることも確認された。こうした多彩な展開を見せながらも、この成句の述語部分はカンバシただひとつに限定されていくのである。

しかし、なぜ、カウバシではなくカンバシがこの成句の述語部分を独占するようになったのであろうか。なぜ、古くから伝えられてきた表現をあえて変化させるに至ったのであろうか。

第一章で明らかにしたように、古代において広く「快いにおいがする」さまを表していたカウバシは、近世には「(飲食物の焦げる快いにおいがする)」さまのみを表すように意味の限定化が生じ始める。そうしてカウバシの表しにくくなった意味(単に「快いにおいがする」という)領域に、文章語としてのカグハシ・カンバシが入り込んでいくことになる。

カウバシの意味の限定化が進行していくと、まず、日常語における「植物がカウバシ」という表現はやや古めかしく感じられるようになることが推測される。言うまでもなく、「梅檀(という植物)がカウバシ」と表現することの不自然さにも次第に繋がっていく。また、この成句自体の暗示的意味(優れた人間は幼少の頃からその才能を表す)が評価表現の範疇にあるために、述語部分においても、評価語としての意味を確立しつつあるカンバシが相応しいと考えられるようになった可能性もあろう。

通常、日常語における言語変化は文章語に属する成句にまで容易に影響を及ぼさないと考えられているが、「梅檀は二葉より―」には当てはまらなかったのである。このことはまた、成句の表現を変化させるほど、カウバシは「(飲食物の焦げる快いにおいがする)」さまを表す語専用になるとうとする傾向が、カンバシは評価語になろうとする傾向が、それぞれ強かったことを示すものであろう。

さらに、この成句が特に軍記物語において好まれたという事実から、軍記物語に相応しい成句のイメージを手伝う語としては、撥音を含む音的特徴を持つカンバシが適切であると考えられるようになった背景もあつたと考える。

カグハシ・カウバシ・カンバシ三語の意味・用法分担、語としてのニュ

アンスの相違が明確になるにつれ、「梅檀は二葉より」の述語部分に相応しい語として、カンバンが意識されるに至ったのである。

使用テキスト

成句の調査に使用したテキスト・影印・版本を以下に示す。掲出順は表中№に従い、諸本を調査したものは第二節で中心的に論じた底本に*を付す。

1 『保元物語』

半井本・鎌倉本・京師本・杉原本

古典研究会（一九七二・一九七四）『古典研究会叢書第二期（国文学）

保元物語 上・下』汲古書院

京図本

日下 力編（一九九〇）『早稲田大学蔵資料影印叢書 国書篇 第十七

巻 軍記物語集』早稲田大学出版部

宝徳本

陽明文庫編（一九七五）『陽明叢書国書篇第十一輯 保元物語』思文閣

金刀比羅本*・古活字本

永積安明・島田勇雄校注（一九六一）『保元物語』岩波書店

参考保元物語

早稲田大学中央図書館蔵（坪内逍遙旧蔵）本

2 『平家物語』

屋代本

麻原美子・春田宣・松尾葦江編（一九九〇）『屋代本・高野本対照 平

家物語 一』新典社

平松家本

山内潤三・木村晟（一九六五）『平松家旧蔵本 平家物語』古典刊行会

竹柏園本

天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編（一九七八）『天理図書館善

本叢書和書之部第四十五巻 平家物語 竹柏園本 上』天理大学

出版部

慶応大学斯道文庫蔵百二十句本

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編（一九七〇）『百二十句本 平家物

語』汲古書院

国立国会図書館蔵百二十句本

吉田幸一編（一九六八）『平家物語 百二十句本 一』古典文庫

鎌倉本

古典研究会（一九七二）『古典研究会叢書第二期（国文学）鎌倉本 平家物語』汲古書院

研究会

龍谷大学蔵覚一本*

高木市之助他校注（一九五九）『平家物語 上』岩波書店

延慶本
高橋貞一解説（一九八二）『延慶本平家物語 一』大東急記念文庫
長門本

東京大学国語研究室蔵覚一本

梶原正昭・山下宏明校注（一九九一）『平家物語 上』岩波書店

3 『撰集抄』
市島謙吉編（一九〇六）『平家物語 長門本』国書刊行会

平家正節

平家正節刊行会編（一九七四）『平家正節 上卷』大学堂書店

松平本*・嵯峨本・鈴鹿本・書陵部本・静嘉堂本

波多野流節譜本

渥美かをる解説（一九七七）『平家物語 波多野流節付語り本 第一冊』

4 『源平盛衰記』

勉誠社

内閣文庫蔵十一行古活字本*

源平闘諍録

早川厚一他編（一九八〇）『源平闘諍録 内閣文庫蔵』和泉書院

蓬左文庫蔵写本

四部合戦状本

慶応義塾大学付属研究所斯道文庫編（一九六七）『四部合戦状本 平家

古典研究会（一九七三）『古典研究会叢書第二期（国文学）源平盛衰記

物語 上』大安

5 『曾我物語』

南都本

松本隆信解題（一九七一）『平家物語 南都本南都異本 上』古典研

妙本寺本

角川源義編（一九六九）『曾我物語』角川書店

大石寺本

黒川真道編（一九一四）『国史叢書』所収『大石寺本曾我物語』国史研

究会

太山寺本

村上美登志校注（一九九九）『太山寺本曾我物語』和泉書院

十行古活字本*

市古貞次・大島建彦校注（一九六六）『曾我物語』岩波書店

彰考館本

村上 学・徳江元正・福田晃編（一九六八）『伝承文学資料集 第四輯

曾我物語』三弥井書店

万法寺本

吉田幸一編（一九六〇）『曾我物語 万法寺本 上』古典文庫

6 『太平記』

慶長八年十二行古活字本

後藤丹治・釜田喜三郎校注（一九六一）『太平記二』岩波書店

土井本*

西端幸雄・志甫由紀恵（一九九七）『土井本太平記 本文及び語彙索引

本文篇』勉誠社

梵舜本

吉田幸一編（一九六六）『太平記 梵舜本 四』古典文庫

神田本

古典研究会（一九七二）『古典研究会叢書第二期（国文学）神田本太平

記 上』汲古書院

玄玖本

前田育徳会・尊経閣文庫編（一九七四）『玄玖本 太平記 二』勉誠社

義輝本

高橋貞一編（一九八一）『義輝本太平記 第二分冊（巻九―巻十六）』

勉誠社

日置本

長谷川端編（一九九〇）『新典社善本叢書七 中京大学図書館蔵 太平

記 二』新典社

7 横山 重・村上 学（一九八〇）『毛利家本舞の本』角川書店

8 10 大谷篤蔵（一九七八）『謡曲二百五十番集索引』赤尾照文堂

11 江口正弘（一九八六）『天草版平家物語对照本文及び総索引』明治書院

12 金田弘編（一九六九）『天草版金句集本文及索引』白帝社

13 『信長公記』

岡山大学池田家文庫蔵本

岡山大学池田家文庫等刊行会編（一九七五）『信長記 十二』福武書店

陽明文庫蔵本*

『信長公記』国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる

我自刊我叢書

古書保存書屋（一八八一）跋我自刊我叢書

町田家本・内閣文庫蔵本の校合

桑田忠親校注（一九六五）『戦国史料叢書一 信長公記』人物往来社

14・17・20・25・28

武藤禎夫・岡 雅彦編（一九七六・一九七九）『嘶本大系 二・四・六・

七・一一』東京堂出版

15 加藤定彦編（一九七八）『毛吹草 初印本 影印篇』ゆまに書房

16 中村幸彦校注（一九七五）『近世町人思想』岩波書店

18 朝倉治彦編（一九八一）『仮名草子集成 二』三陽社

19 新編西鶴全集編集委員会（二〇〇七）『新編西鶴全集 上（俳書）／下

（俳書・発句・その他）』勉誠社

21・51・65・69・80・90・91・93・96

ことわざ研究会編（二〇〇五）『ことわざ資料叢書 第三輯』クレス出版

22 近松全集刊行会編（一九八七）『近松全集 六』岩波書店

23・24

八文字屋本研究会編（一九九四）『八文字屋本全集 六』汲古書院

26・38・40・43・73

ことわざ研究会編（一九九六）『続ことわざ研究資料集成』大空社

27 中村幸彦校訂（一九六一）『風来山人集』岩波書店

29 高木好次他編（一九三二）『洒落本大系 五』林平書店

30 宗政五十緒編（一九七九）『譬喩尽並二古語名数』同朋社

31 早稲田大学中央図書館蔵本

32・35

鈴木重三・徳田武編（一九九五・一九九八）『馬琴中編読本集成 一・八』

汲古書院

33 早稲田大学中央図書館蔵文化三年刊本

34 後藤丹治校注（一九六二）『椿説弓張月 下』岩波書店

36・42・47・53・57・61・71・72・81・83・89・92

ことわざ研究会編（一九九四）『ことわざ研究資料集成』大空社

37 早稲田大学中央図書館蔵文政十四年序刊本

39・44・48・49・74・79・82・86

ことわざ研究会編(二〇〇二)『ことわざ資料叢書 第一輯』クレス出版
41 東京大学史料編纂所蔵本

45 二葉亭四迷(一八八七)『浮雲』新潮社

46 泉本宗三郎編(一八八九)『ことわざ』正文堂

50・54・68・75・76・78・87

ことわざ研究会編(二〇〇三)『ことわざ資料叢書第二輯』クレス出版

52 樋口一葉(一八九二)『武蔵野 第一編』

55・66・67

暉峻康隆・興津要・榎本滋民編(一九八〇)『口演速記明治大正落語集成

四・六』講談社

56・64・77

飛田良文他編(二〇〇三・二〇〇八)『明治期国語辞書大系 普12・雅14・

普21』大空社

62 徳富蘆花(一九〇一)『思出の記』民友社

63・85

太陽コーパス

70 熊代彦太郎編(一九〇六)『俚諺辞典』金港堂書籍

84 豊島与志雄(一九二二)『月明』『新小説』一一月

88 足立栗園(一九二九)『金言』(『金言名句人生画訓』大日本雄弁会講談社 所収)

「付記」 13 『信長公記』の調査に際しては国文学研究資料館に陽明文庫

蔵本マイクロフィルムの閲覧を、41 『仙台藩士谷津老鱗雜記』の調査に際

しては東京大学史料編纂所に資料の閲覧を、それぞれお許しいただいた。

ここに記してお礼申し上げます。

一 宮地 裕(一九七四a)は、「成句」を次のように分類する。

(一) 格言・ことわざ

(二) 慣用句 (1) 直喩的慣用句 (2) 隱喩的慣用句

(三) 連語成句

しかしながら、宮地氏も述べるように、(一) 格言とことわざとは峻別されるものではない。成句全般を分類しようとする場合には、格言とことわざとの区別に困難がつきまとうのである。「相対的に言えば、ことわざは教訓的事実より叙述的事態を内容とする」(一一四頁)との見方に従えば、「梅檀は二葉より」はことわざに分類されようが、成句全般における分類の問題を踏まえ、本章では大分類である「成句」と称することにする。

なお、宮地 裕（一九七四b）では、右の成句と複合助辞とを合わせて「複合語句的表現類型」にまとめる。

二 中村幸彦校注（一九六一）『風来山人集』〔岩波書店…四二三頁〕

『観仏三味海経』とは、五世紀前半、東晋の仏陀跋陀羅によって漢訳された観仏經典である。源信の『往生要集』（九八四・九八五）の中でこの『観仏三味海経』が頻繁に引用されており、この經典が日本の浄土思想にも大きな影響を与えたことが指摘されている（福原隆善二〇〇一）。なお、『往生要集』には、『観仏三味海経』の「梅檀ハ根芽漸漸成長シ……」に類似する表現として、「梅檀の樹出成する時に、能く卍由旬の伊蘭の林を変して、普く皆香美なり。」（往生要集・六九ウ）『最明寺本往生要集积文篇』汲古書院〕のような文言が見られた。

三 管見の限りでは、『日本国語大辞典（第二版）』、『角川古語大辞典』、『故事俗信ことわざ大辞典』の三辞書のみ、この成句の述語部分にカウバシ・カンバシ二語のあることを示す。それ以外の辞書では、述語部分にはカンバシが見えるのみである。

四 古い時代のことばを残すからこそ、考察する価値のあるものもある。例えば、小林賢次（一九八八）の取り上げた「憎まれっ子世にはばかる」などがある。（遠慮する）（へつつしむ）といった意味を表すハバカルが、「憎ま

れっ子世にー」の中では（威張る）（のさばる）の意味で用いられており、その原因に、語形の近いハダカルとの混同が存するのである。

五 例(4)はあくまでも表記上のカンバシの初出例であるが、本研究では語としての初出例としても認める。発音と表記との乖離についての本研究の立場は本論第一部第一章を参照されたい。

六 『国書辞典』の方は、雅語辞書のためか成立の新しいカンバシは立項されていない。また、文学作品においては成句の述語部分にカグハシを使用したものは見られなかったが、明治期のことわざ資料『格言俚諺一言萬金』にはカグハシと読む可能性のある「香ハシ」が見られる。

○梅檀ハ二葉ヨリ香ハシ○千里ノ馬ハアレド一人ノ伯樂ハナシ○船頭、多ケレハ舟山へ上ル
（格言俚諺一言萬金）

ただし、前後には濁点の脱落している箇所（「多ケレハ」など）も散見されるため、「香ハシ」も濁点が脱落している可能性はあり、カウバシ・カンバシと読む可能性がないとは言いきれない。

七 「かほばし」という表記は、〔an〕＞〔ao〕＞〔o:〕という開長音化の表記面への現れと考えられる（出雲朝子一九八三）。

ハカウバシという語自体を通史的に見た場合には、『今昔物語集』などで「馥」の字が使用されることもある。

九 尚学図書編（一九八二）『故事俗信ことわざ大辞典』『小学館』では、『撰集抄』の例を挙げながら、この成句の述語部分に、形容詞カウバシ・カンバシだけでなく、動詞クンズをも認める立場をとっている。

梅檀は二葉（ふたば）より薰（くん）じ梅花（ばいか）は蕾（つぼ）めるに香（こう）あり 梅檀は二葉のころから芳香を放ち、梅の花はつぼみのころにはもうよい香がする。前項「梅檀は二葉（ふたば）より芳（かんば・こうば）し」と同意。「梅檀は從二葉一薰し、梅花は蕾めるに香ありとは、かやうの事に知られ侍り」『撰集抄・九』

二節で見たように、この成句の述語部分に使用される表現は必ずしも形容詞だけではなく、『撰集抄』の例をクンズと読む可能性もないとは言いきれない。しかし、クンズと読む可能性が出てくるのは「薰シ」「薰ジ」という表記の場合のみである（クンズの見える『色葉字類抄』『文明本節用集』『書言字考』では、和訓クンズに対応する漢字が「薰」のみである）。さらに、「薰」の字を使用した成句が『撰集抄』以外に見られなかったことを考

えると、述語部分をクンズと認定できる他の例を見つけるのは困難である。

第二部 形容詞Ⅱ くサシ語彙の担う意味領域の展開

第三章 くサシの意味とモノクサシの意味

―嗅覚表現から性向表現へ―

第一節 はじめに

物事をするのに面倒がることや、そのような性質・人を指して、モノグサと表現することがある。このモノグサを、あえて漢字で表記すれば「物臭」である。実際、古代に遡って見てみると、第三音節が清音のモノクサシという形容詞形で専ら使用されており、嗅覚表現形容詞として使用され始めたことが分かる。

しかし、現代共通語においては、専ら形容詞語幹の形で名詞・形容動詞語幹として人間の性向表現に使用され、嗅覚表現形容詞という意識はほとんどない。

(1) 料理の「り」の字も知らない三十歳。今どき「料理作れません」じゃ、自立した男とはいえないらしい。この際、台所に立つきっかけをと、ものぐさながら考えついたのが、ゆで卵。子どものころは、おやつ代

わりによく食べたものだ。

(朝日新聞・一九九六年四月二一日・朝刊)「聞蔵Ⅱ」

(2) 洗車は面倒だけど車が汚いのも嫌っていう、ものぐさでワガママな野郎です。

(Yahoo!知恵袋・二〇〇五年)「現代日本語書き言葉均衡コーパス」

(3) もともとは漫画原作で、2007、2010年にテレビドラマ化された作品だ。蛍のものぐさな面は、「恋愛するより家でゴロゴロしているのが好き」という「干物女」のキャラクターとして定着していった。

(朝日新聞・二〇一二年六月一日・夕刊)「聞蔵Ⅱ」

本来、嗅覚表現形容詞であった語が人間の性向を評価する形容詞へと変化していくという意味の広がりには、あくまでも一語の意味として総合的に理解されなければならないであろう。ところが、管見の及ぶ限りこの語の意味が整理されたことはなく、いつどのようにしてその意味・用法を變じていったのかについて記述されることがなかった。本章では、モノクサシの語史を明らかにし、この語の意味・用法の史的变化を考察する。

第二節 問題の所在

語から情緒性が読み取れるのは、(Ⅲ)の段階ということになる。

これに対し、モノが属性形容語と接続する場合は、事情が大きく異なる。

例えば、モノ遠シという語であれば、まず、モノと遠シとが主語―述語の関係で解釈できる段階があるとする。この場合、モノは実質名詞の機能を持ち、モノ十遠シ全体が(程遠い)という意味を表すことになる。そして、モノ十遠シの一語化が進むと、主語―述語の関係は意識されなくなり、具体的な意味(程遠い)を表していたモノ十遠シから、抽象的な意味(つれない・冷淡だ)を表すモノ遠シへと変化する。この段階をもって、モノ十属性形容語は情緒性を帯びるのである^四。

このように、下接する形容語の種類により情緒性の契機は異なれど、モノ形容語一語に付随する情緒性は相通するものと東辻氏は述べる。

(二) 中世語としての形容詞モノクサシについて

モノクサシの中世語としての側面に注目したものとして、まず、佐竹昭広(一九六七)がある。佐竹氏は、御伽草子『物くさ太郎』から出発し、中世におけるモノクサシの意味領域に注目する。そして、『類聚名義抄』の「嬾」「慵」「窳」にモノクサシ・モノウシの両訓が施されること、『沙石集』や『他阿上人法語』においてモノクサシ・モノウシが併用されることを論

拠に、モノクサシの基本的意味がモノウシと同様、『倦怠』にあるとの指摘をした。

この佐竹昭広(一九六七)を踏まえた小林賢次(二〇一一)では、モノクサシの多義の連続性についての指摘があり参考になる。すなわち、『日葡辞書』(後掲例(34))に見られるモノクサシの意味(体調が悪い)と、現代語モノグサの意味(気が進まない)との連続性である。体調が悪ければ何をするにも気が進まないのは自然の道理であるとして、体調による無気力感と単なる怠け心による無気力感とは連続するものと見るのである。

(三) 辞書の記述

最後に、諸辞書の記述からモノクサシの意味領域を概観しておく。

次の表二は、『日本国語大辞典(第二版)』の「ものぐさい」項のブランチに合わせて、『角川古語大辞典』と『時代別国語大辞典(室町時代編)』との語釈を対照させたものである。

まず、『日本国語大辞典(第二版)』の記述を見る。ブランチ(1)・(2)は、単純形容詞クサシに接頭辞モノ(何となく)を添えた意味と理解できる。しかし、ブランチ(3)・(4)・(5)は、少なくとも現代語の単純形容詞クサイの意味とは重ならない。また、接頭辞モノの意味も読み取ることができない。

よって、ブランチ(3)・(4)・(5)は、単に接頭辞モノクサシと説明することのできない、モノクサシ独自の意味と考えられる。

②はともに、すでに述べたように、モノクサシ独自の意味と考えられる。

『角川古語大辞典』は、『日本国語大辞典(第二版)』の記述にほぼ対応

『時代別国語大辞典(室町時代編)』に取り上げられたのがブランチ①・②のみであるということから、この二つは中世以降に確立したモノクサシの

する。ただし、『日本国語大辞典(第二版)』のブランチ(3)・(4)が話し手・

一側面であるという推測も立てられる。また、『角川古語大辞典』と同様に、

書き手の側からそれ自身の記述となっているのに対し、『角川古語大辞典』

現代語との繋がりが明確に感じられる、他者の性向表現としての記述であ

のブランチ②・③・④は他者の様子の記述となっているという相違が認め

ると指摘できよう。

られる。後者は、現代語との繋がりがより前面化した記述と言える。

次に、『時代別国語大辞典(室町時代編)』の記述を見る。ブランチ①・

表二 辞書におけるモノクサシの記述

『日本国語大辞典(第二版)』	『角川古語大辞典』	『時代別国語大辞典(室町時代編)』
(1)何となく怪しい。どこからともなく嫌なにおいがする。	①なんとなくいやなおにおいがする。薄汚い。	
(2)何となく怪しい。疑わしげである。くさい。	⑤なんとなく怪しいさま。何か子細がありそうなさま。	
(3)物事をするのがおつくうである。めんどうである。大儀だ。わずらわしい。気が進まない。	②物事をするのに気が進まないさま。めんどうでおつくうに思うさま。大儀であるさま。 ③性格が不精であるさま。ずぼらであるさま。	②忘れて、なすべき事をしようとしないうさまである。
(4)病気で気分がすぐれない。体の具合が悪い。	④病気などで気分がすぐれないさま。	①体調がすぐれず、気力・意欲のわかない状態である。また、そのように、事をするのが何となくわずらわしく、大儀に感じられるさまである。
(5)とるにたりない。問題にならない。じゃらへん。		

第二項 本研究の立場

ここまでに見てきた先行研究の成果や辞書の記述から、モノクサシの語史を記述する上で考察すべき観点をまとめておく。

(一)モノクサシ（・クサシ）の意味領域は、どのように変化していったか

東辻氏の立場に則れば、モノクサシはモノに属性形容語であるクサシが下接した語例ということになる。佐竹昭広（一九六七）や小林賢次（二〇一一）のいうモノクサシの中世的側面を史的変遷の一部として位置付けながら、具体的な意味から抽象的な意味へ変化する過程を考察する必要がある。また、それを明らかにする上で、モノを冠しない単純形容詞クサシの史的変遷をも踏まえておかなければならない。

ところで、先に「モノクサシはモノに属性形容語であるクサシが下接した語例」と述べたように、モノ形容語はモノ＋自立語の語彙という前提が存する。しかし、モノクサシについては、この前提の妥当性を十分に検討する必要がある。すなわち、モノを冠する形容語がすべて自立語であると言える中で、モノクサシについては、モノ＋接尾辞・クサシと捉えられる可能性を排除する必要があるということである。結論から述べれば、モノクサシは他のモノ形容語と同様に、モノ＋自立語と考えられる。その根

拠については、モノクサシの意味を概観した後に述べることにする。

(二)モノクサシの情緒性とは、具体的にどのようなものか

モノクサシは、なぜ嗅覚表現から体内感覚・心内感情表現（『日本国語大辞典（第二版）』における③・④・⑤）へと意味・用法を転じていくことができたのであろうか。意味の派生の契機・経緯が問題となる。また、その中で、「情緒性」と一言で済まされがちな語の側面を、明確に記述することも重要な課題となる。

以上を踏まえ、本章では、クサシとモノクサシとを通史的に対照させながら、クサシがモノと接続することで新たに獲得した意味領域とその変遷について、史的観点からの記述を試みる。

第三節 クサシの史的変遷

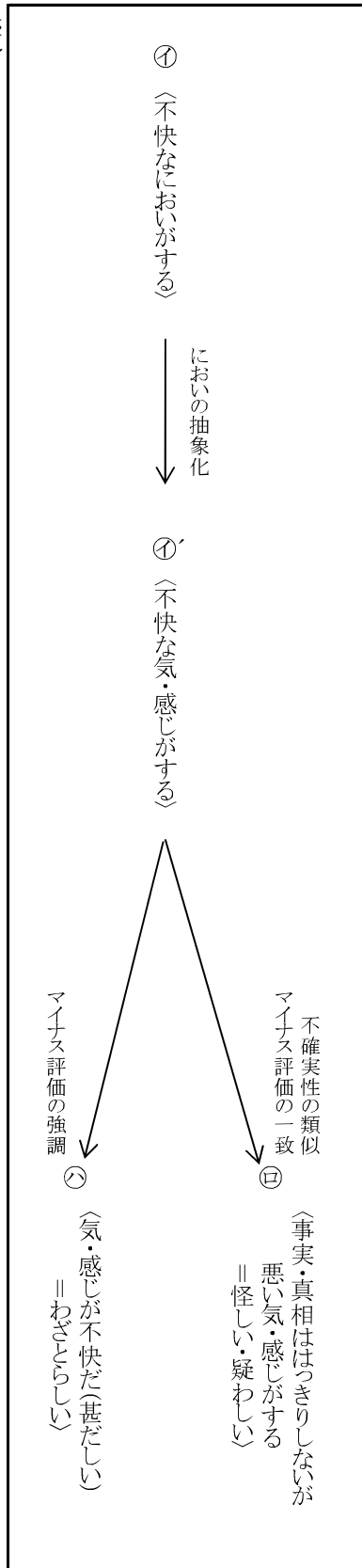
第三節では、モノクサシの基礎となるクサシの意味を概観しておく。なお、強弱を表す接頭辞を冠したクサシの語例、^{ワル／＼}悪クサシ・^{ウツ}薄クサシの二語も用例に含めた。

表三は、とる対象ごとに用例数の分布を示したものである。クサシは、

表三 クサシ用例数

資料ジャンル\対象	具体	抽象
記紀万葉・上代計	1	0
仮名散文Ⅰ期・中古計	6	0
仮名散文Ⅱ期	1	
説話	53	
和漢混淆文Ⅰ期	1	
中世前期計	55	0
和漢混淆文Ⅱ期	2	
室町物語		
抄物・キリシタン資料・狂言台本	34	
中世後期計	36	0
狂言台本Ⅰ期	3	
仮名草子	6	
浮世草子	16	2
噺本Ⅰ期	34	
井原西鶴作品	3	
浄瑠璃Ⅰ期(近松)		
近世雑Ⅰ期	12	
俳諧Ⅰ期	2	
近世前期計	76	2
浄瑠璃Ⅱ期	3	1
狂言台本Ⅱ期	4	
談義本	6	
噺本Ⅱ期	48	2
近世雑Ⅱ期	13	
洒落本	22	1
黄表紙	2	
読本		
滑稽本	53	1
人情本	2	1
俳諧Ⅱ期	4	6
近世中後期計	157	12
総計	331	14

図一 クサシの意味



※①'は、あくまでも意味変化の過程を説明する際に想定した段階であり、必ずしも語の意味として確立しているわけではない。

具体的な事物をとるものが上代から現れ、次いで、抽象的な事物をとるものは後に詳しく触れる。

のが近世以降に現れ始める。とる対象が具体的な事物であるか抽象的な物事であるかによって、意味が異なると考える。また、用例の出現順から推

第一項 具体的な事物を対象にとるクサシ

測される意味の派生図を先に示せば、図一のようなになる。この図一につい

まず、クサシが具体的な事物を対象にとる場合、① へ不快なおいがす

る」さまを表すと考える。

表四では、上代に一例見られることを示した。ただし、これは次に挙げるように、『日本書紀』における平安中期中点「臭」^{クサ}（ないし院政期末点「臭」^{クサキ}）の用例であり、上代の確例とは言えない。

(4) 丙午罷造皇祖母命墓 役。仍賜臣連供造帛布、各有差。是月茨田池水、
漸々变成白色。亦無臭^{クサ}氣^カ。
(日本書紀・卷第二二皇極紀)

しかし、表四に掲出していない訓点資料中には、次のような上代の確例もある。よって、④「不快なおいがする」は、古く上代からあり、現代語クサイにも引き継がれている意味と言える。

(5) 臭^{上主訓}穢^{久左之}

(新訳華嚴經音義私記 (七九〇))

『古辞書音義集成』汲古書院・一九七八

は、次に挙げるような穢れであることが分かった。これがクサシの全用例のおよそ七割を占める。

(6) 「女子」父君に尿多にしかけつ。宮に「これ 抱き給へ」とて、さし奉り給へば「あな、むつかし」とて押し出で、うちしもへむき給ぬ。君「頼しげなの人の親々」内侍のすけにさし取らせて拭はせ給。宮「いかにかくさからん。あな、むつかしや」とて、むつかり給。
(宇津保物語・一三・くらびらきの上)

特に説話においては、往生する前の身体の汚らわしさをクサシによって表し、無事往生を遂げた場合にはカウバシによってそれが証明されるといふ、香臭の対比が多く描かれる。

(7) 「誰々もさばかり有りし真浄房が、又まうで来たるぞ。其故は、真心に後世訪ひ給へるうれしさも聞こえんと思ひ給ふる上に、暁すでに得脱し侍り。如何となれば、そのしるし見せ奉らんため也。日比我が身のくさくけがらはしき香かぎ給へ」とて、「息」をためて吹出だしたるに、家のうちくさくて堪へ忍ぶべくもあらず。さて夜もすがら物が

(一) 穢れ

具体的な事物をより具に見てみると、通史的に見て一貫して最も多いの

たりして暁に及びて、「唯今ぞ既に不浄身を改めて極楽へまうで侍る」として、又「息」をしたりければ、そのたひにかうばしく家のうちかほりみちたりけり。
(発心集・第二・八・真浄房暫く天狗になる事)

中世後期には、穢れに分類される成句「くさい物身知らず」の前身と思われる用例が登場する(8)^五。なお、「くさい物身知らず」の形での初出例は例(10)である^六。

(8) 自屎不^レ覚^レ臭^トコトヲ
ヲノレカクゾハクサイトヲモハヌナリ
(句双紙抄・三六才)

(9) 自屎^{cusagi}ハとを覚えず。心、我が身にある癖は弁へにくいものぢやぞ。
(天草版金句集・八九則)

(10) 自屎―「不^レ覚^レ臭」クサキモノ身シラスト也。
(三関齋本碧岩抄・八)『時代別国語大辞典(室町時代編)』用例

この「くさい物身知らず」の出現と時期を同じくして、成句「くさい物に蠅がたかる」も登場する^七。蠅がたかる「くさい物」とは、本来、穢れの対象となる腐った「臭肉」を指していたようである。

(11) 臭肉集^{ハクニクニ}蠅^{ハク}ヲ
クサイ物ニハハイガタカルナリ(句双紙抄・三三才)

(二) 魚介類

穢れの他、魚介類もまとまった用例の得られた対象である。ただし、クサシの全用例の一割にも満たない。ここでは、その原点を孔子家語^八に遡ることのできる成句「鮑魚の肆に入るが如し」について簡単に触れておく。次に挙げるのは、この成句とともにクサシが用いられた最初の例^九である。

(12) 与^レ善人居ハ如シ^レ入ルカ^ニ芝蘭ノ之室^ニ。久而自芳シ也。与^レ恶人居

ハ如シ^レ入ルカ^ニ鮑魚ノ之肆^ニ。久而自臭シ也。(十訓抄・中・第五)

この成句は、「鮑魚の肆なまぐさきを知らず」という言い方もあるように、現代語であれば生グサイを使用するのが自然である。ところが、次に挙げる諸例のように、中世から近世にかけて一貫してクサシが用いられていたようである^{一〇}。

(13) 孔子のことばにも、「善人にまじはれば、蘭麝の窓にいるがごとし、

そのかをばせのこり、悪人にまじはれば、かきよ「河魚」の肆に入
かことし、くさき事のゝこれる」と見えたり。

(曾我物語・卷第五・三浦與一をたのみし事)

- (14) 大師莞尔として曰、「鮑魚の肆臭き事を覚えず、蓼の虫葵にうつず。
女色に淫るゝ輩は、我男色の貴きことを知らず。……」

(根無草後編・卷四)

- (15) 内證の苦み薄く自然と心のびやかにて氣象に微塵もいやみなしとは、
鮑魚の肆臭ことを覚へず、深川に遊んで深川の穴をしらず。

(風来六部集・吉原細見里のをだ巻評)

(三) その他

最後に、一般的にはプラス評価が下される傾向にある対象に対して、ク
サシをもってマイナス評価の下された用例を挙げる。次に挙げる例(16)は、
普通なら、「よきか」であるはずの「沈香」を悪クサシで形容する。例(17)も
同様に、普通なら、「かんばし」いはずである「水仙」を、クサシで形容す
る。

- (16) 我、有時、仏前に花を手向け、沈香をたきて。彼二人の女に、沈のか

やする。よきかぞするらん、と、尋ねはんへりけれハ。彼者かいはく。
何やらん、先より。わるくさきにほひ、しきりにして。心地悪く覚え

しか。さてハ、ぢんの香にて候けるそや。さてもわるくさき物にてこ
そ候へ、と言ふ。つらく、是を思へは。良き道を知らざる者ハ、み
な、かくの如し。色にそむ心ハ、有もせめ、香にめつる心ハ、露ハか
りもなし。是もまた、一つのとく成へしや。(為愚痴物語・二・一五)

- (17) 水仙は金盞銀臺の賞最面白し。和名なくば、何にても字のまゝによめ
かし。たぞや「よむな」と云し。是を水と云字の形にて水仙とは云か
と云し人おかし。香草に而根は最かんばしといふ。我は臭しと思ふな
り。香臭のたがひ、おのがこのむまゝにこそあれ。牡丹の香、是も臭
し。楊貴妃の腋臭ありしといふには、名花・傾国両相臭といはん。

(膽大小心録・一五四)

第二項 抽象的な物事を対象にとるクサシ

(一) 事実・真相が不確実な事態

近世に至ると、抽象的な物事を対象にとるクサシも見られ始める。この
頃の対象は、事実・真相が不確実な事態と規定できそうである。この場
合、クサシは㊤へ怪しい・疑わしいさまを表すと考えられる。これは、

近世前期から確認され、現代語クサイにも引き継がれている意味である。

(東京風俗志(一八九九・一九〇二)・下・演劇)

『東京風俗志』八坂書房・一九九一

(18) 亀戸の方より来る人に、武者修行ていの者を見かけざるやと問ふに、

その武者修行の人は、今剣術の稽古道具を担ぎたる人が七八人にて、

彼処の冠木門の内へ連こみたりと聞き、「イヤアそいつア臭い話^{くそ}じだ」

(七偏人・二編・巻下)

(19) くさいとは うたがわしきこと

(新撰大阪詞大全(一八四一)・く)

『近世方言辞書集成 七』大空社・一九九八

(二) 演技

近代に入ると、クサシのとする対象である抽象的な物事に、演技が加わる。

この場合、クサシは㊦へわざとらしいくさまを表すと考えられる。これは、

近代の明治期から確認され、現代語クサイにも引き継がれている意味である。

(20) 東京者は上方俳優を観て「臭^{くそ}くて、しっこい」といへば、上方者は東京俳優を見て「あつけない」といへり。

(21) わざと、そんなクサイ芝居^{しばい}をしてると思はれては、たまらないから

(苦笑風呂(一九四八)・ロッパ放談)

『日本国語大辞典(第二版)』用例

なお、『日本国語大辞典(第二版)』では、「くさい」項のブランチ(3)「演

劇などで、演技が大げさでわざとらしい。転じて、言動、表現などが、い

かにもわざとらしくて嫌味である。」の初出例として例(21)を挙げる。しか

し、本調査により、その初出例は例(20)の『東京風俗志』まで、およそ半世

紀ほど遡ることが明らかになった。

第三項 クサシの意味の広がり

以上見てきたクサシの意味は、出現順から考えるに、㊦(不快なおい

がする)が本来の意味であったと言える。そこから、どのような抽象化が

働き、㊧や㊨といった意味が派生していったかをまとめたものが、前掲の

図一である。

本来の意味である㊦(不快なおいがする)が抽象化することにより、

「におい」は「氣・感じ」へと転じ^{二五}、①「不快な氣・感じがする」という段階が生じる。そこから、「氣・感じ」の不確実性^{二三}、「不快」というマイナス評価の一致を共通項にして、「事実・真相ははっきりしないが悪い氣・感じがする」という、②「怪しい・疑わしい」の比喩的転義^四を派生させるのである。一方で、③「不快な氣・感じがする」のマイナス評価の側面が強調される^{二五}と、「氣・感じが不快だ(甚だしい)」という、④「わざとらしい」の比喩的転義も派生させることになる。クサシの意味の広がりには、およそこのように理解できよう。

第四節 モノクサシの史的変遷

三節で明らかにしたクサシの意味を踏まえた上で、これと重なる意味を表すモノクサシと、これとは重ならず独自の意味を表すと考えられるモノクサシとに分けて見ていく。

まず、モノクサシの意味の派生をまとめた図二を次頁に示す。これについては後に詳しく触れる。また、図二の意味分類に従い用例数をまとめたものを次々頁に表四として示す。

第一項 クサシと重なる意味

(一) (あるものが) 不快なおいがする

モノクサシは中古に初めて見られる。この初出例は、クサシの意味①「不快なおいがする」とほぼ同義と考えられる。ただし、この場合のモノクサシは、初出例の後、近世後期に一例あるばかりで、通史的に見て二例しか確認できない。近世後期の一例も、文語体資料である読本に見えた用例であり、当代的なモノクサシの意味であったかは分からない。

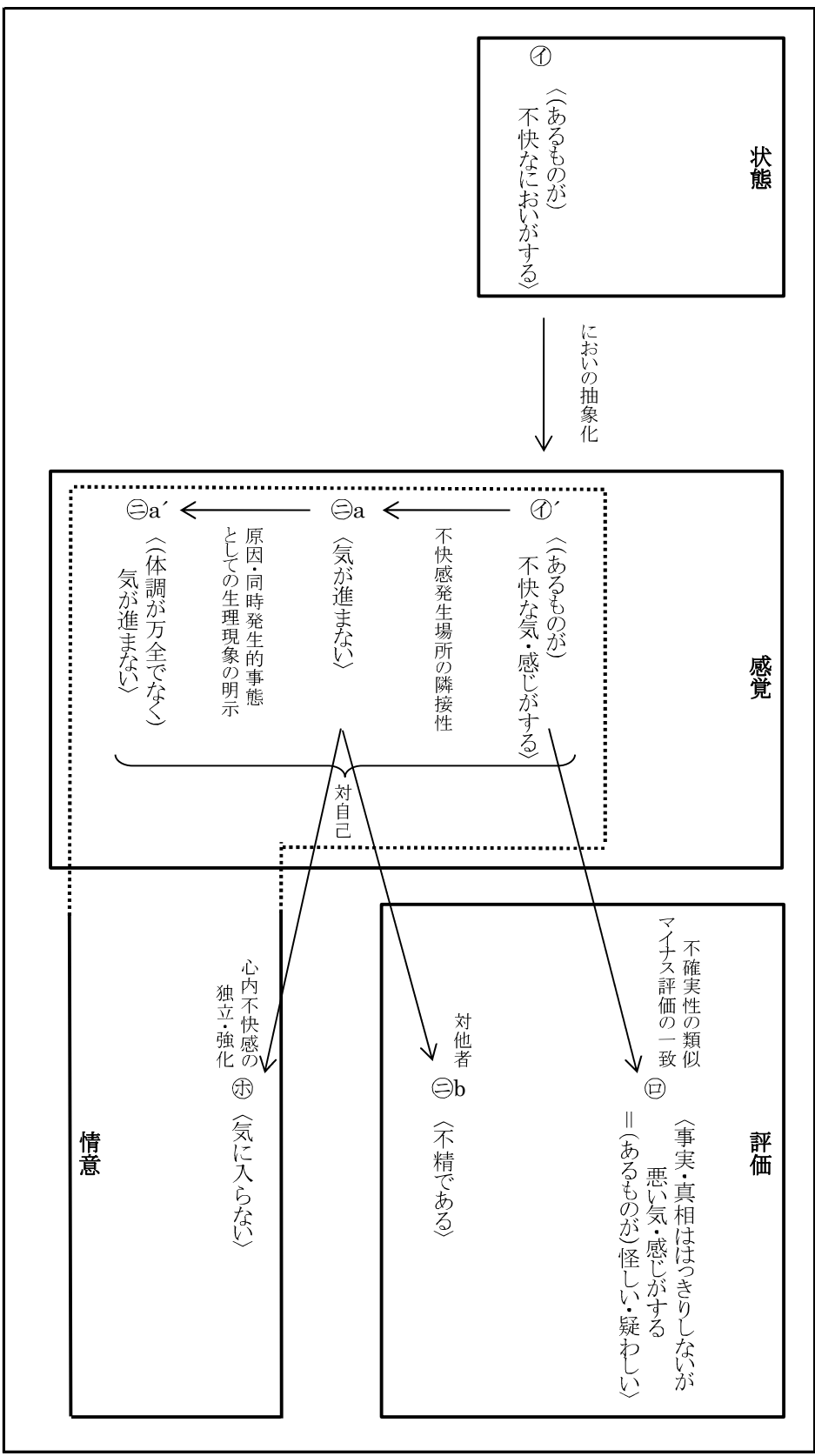
(22) 樞戸の廂二間ある部屋の、酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋の、

たゞ畳一枚口のもとにうち敷きて、「我が心を心とする物は、かゝるめ見るぞよ」とて、いと荒らかに押し入て、手づからつい鎖して、錠強く鎖していぬ。君は、方に物の香くさくにほひたるがわびしければ、いとあさましきには、涙もいでやみにけり。……女君は、程ふるまゝに、物くさき部屋に臥して、死なば少將に又物いはず成なん事、長くのみいひ契りし物をと、いと悲しく、夜べ物ひかへたりしのみ思ひ出られて、いとあはれなれば、いかなる罪をつくりて、かゝるめ見るらむ、継母のにくむは例の事に人も語るたぐひありて聞く。……あこぎ泣くく、「今朝より此部屋のあたりをかけづり侍れど、えなんさぶらはざりつるは。いみじくもさぶらひつる物かな。しかじかの事いひ出

たる成けり」と申せば、いと泣きまさり給ふ。「少將の君おはした
 り。かくなんと聞かせ給て、たゞ泣きに泣き給ふ。かうくなむ侍り
 つる」と申せば、いとあはれとおぼして、「更に物も覚えぬほどにて、
 え聞えず。「対面は、消えかへりあるにもあらぬ我身にて君をまた見

んこと難きかな」と聞えよ」と、「くさき物どものならびゐたる、い
 みじうみだりがはしうてなん。生きたれば、かゝる目も見るなりけり」
 とて、泣き給とは世の常なりけり。
 (落窪物語・卷一)

図一 モノクサンの意味



※ ①は、あくまでも意味変化の過程を説明する際に想定した段階であり、必ずしも語の意味として確立しているわけではない。

表四 モノクサシ用例数

資料名・成立年代\意味	㊦	㊧	㊨		㊩	
			a (㊨a)	b		
落窪物語	10C後	1				
今鏡	1170		1			
十訓抄	1252			1		
梅尾明恵上人伝記	1232-50頃		1(1)			
梅尾明恵上人遺訓	1238			2		
名語記	1275			1		
一遍上人語録	中世前期			1		
とはずがたり	14C前				1	
連理秘抄	1349		1			
申楽談儀	1430		1			
杜詩統翠抄	1439頃			4		
漢書抄	1458-60			1		
親長卿記※	1471			1		
史記抄	1477		1*			
古文真宝桂林抄	1485頃			1		
古文真宝彦龍抄	1490頃		1			
山谷抄	1500頃		4(4)	1		
論語湖月抄※	1514		1*			
蒙求抄	1529頃		1(1)			
塵添壻囊鈔	1532		1(1)			
四河入海	1534		6(4)*	5		
中興禪林風月集抄	1550頃		4(4)	1		
玉塵抄※	1563			2		
弁慶物語	中世後期				2	
高館	室町末 近世初				1	
室町殿日記	1602頃				1	
日葡辞書	1603		1(1)			
仁勢物語	1639-40頃		1(1)	1		
都風俗鑑	1681		1			
好色訓蒙図彙	1686				1	
真蹟去来文※	1694		1			
日本西王母	1699頃				1	
古今堪忍記	1708		1			
碁盤太平記	1710		1			
国姓翁明朝太平記	1717				1	
双生隅田川	1720				1	
信州川中島合戦	1721		1			
芭蕉文集	近世前期			2		
他阿上人法語	1778		30(3)	5		
春雨物語	1808	1				
染替蝶桔梗	1816		1			
鶉衣	1785・1823			1		
和英語林集成(初版)	1867			1		
計		2	5	56(20)	31	9
				103		

※一部調査 ()は㊨aの内訳を示す *の数:[モノガ(ハ)クサシ]の内数

(23) おのれ「法師」は「さか魚物臭し」^なとて、袋の中より大なる蕪根^{かぶらね}を

ほしかためしをとり出でて、しがむつらつき、わらべ顔して又懼^{おそろし}。

(春雨物語・目ひとつの神)

られる用例も見られるようになる。ただし、こうした用例は近世期に計五例確認されるのみで、モノクサシの一時的な用法であったらしい。

(24) 此ほどは武州に下り、江戸の町にこゝかしこ迷ひける内、ある朝本町

(二) あるものが怪しい・疑わしい

近世前期には、クサシの意味㊨(怪しい・疑わしい)とほぼ同義と考え

仕出しと各心もとなく、目を離さず守り居たるに、
る、買物使と見えて、端々の都合あはずと見ゆるは、
に出、呉服棚にかゝりけるに、其風俗何様由ある旗本家に召しつかは

(古今堪忍記・巻七・二・賺の堪忍)

(25) 馬屋の側なる小屋の内より煙しきりに渦巻上がる。由良之介きつと見て南無三寶。あの煙其まゝ打すて外の人に鎮められ。塩冶郎等四十余人師直を討損じ。うろたへたりと言はれては恥辱の上の名折れなり。

いざ鎮めん尤も我も〱と小屋の戸に手をかけ。ゑいやつと引はなせば。中には薪炭俵煙は消えてなかりけり。此内は物ぐさし捜せや捜せと言ふ声に。内より炭を掴みかけわり木を投げかけ投げつくる。

(基盤太平記)

(26) 郷左「……それにつけてもあの吾妻、最前から影も見せぬが。ム、

物ぐさいこの屏風の内、もしや吾妻が、」トつか〱行、屏風明よふ

とする時、吾妻出て、吾妻「エ、何じやいな平岡さん。……」

(染替蝶桔梗・序幕)

なお、クサシの意味①(へわざとらしい)を表すモノクサシは未見であった。

(三) モノクサシの語構成―その一

以上のように、クサシとモノクサシとの意味の重なりは、クサシで言う

ところの、①(不快なおいがする)と②(怪しい・疑わしい)とのみ認められるようである。

モノクサシ①・②の場合、モノの指す対象は明確で、主語(実質名詞)モノ 述語十クサシ

と解釈することができ、クサシの派生語としての意識は強かったと推測される。『言海』のモノクサイは「物臭シ、ノ義カ」モノウシ。タイギナリ。

備欄「『明治期国語辞書大系「普5」』大空社・一九九八」とあり、近代には本来の意味が分からなくなりつつあった状況が窺えるため、先の語源意識は、少なくとも近世期まで保持されていたと言える。

ところで、この場合のモノクサシのように、対象を実質名詞モノに置き換えるという言語表現は、何を意図しているのだろうか。対象の明言を避けるという点では一種の婉曲的表現と見なされる。そして、そのように考えた場合、(何となく)の意を添えるとされる接頭辞モノの機能もこれに類することになる。先行研究の多くは、モノが名詞であるか接頭辞であるか、という二者択一の議論を展開してきた。しかし、結果として表現される意味が近似するのであれば、品詞を唯一的に限定する必要もないように思う。東辻氏の主張するように、その時々により、モノが実質名詞的であったり接頭辞的であったりすると見た方が自然である。モノクサシも、モノクサシと解釈できる段階においてはモノを実質名詞と捉える。

そして、こうした観点から前述のモノクサシの意味を詳細に記述しよう
とすれば、クサシの意味①〈不快なおいがする〉に重なるとしたモノク
サシは、①へあるものが、不快なおいがするさまを表すことになる。
また、クサシの意味②〈怪しい・疑わしい〉に重なるとしたモノクサシは、
②へあるものが、怪しい・疑わしいさまを表すことになる。「あるもの」
の訳出は、言語化が憚られるというニュアンスの付加を担う。

第二項 モノクサシ独自の意味

(一) 對自己

(一・一) 気が進まない

中世前期頃から、先述の①・②の意味では理解しにくい用例が現れる。
対象への不快感を表す点は①・②と共通するが、その不快感ゆえに自ら
消極的になる内部的状态を含蓄している。これを㊦へ気が進まないとす
る。これには、自らも含んだ一般論として語る例(29)のような用例もある。

(27) かの僧正「深覚」、大ニ条殿「教通」の限りにおはしましけるに
参り給て、「碁打たせ給へ」と申給ければ、いかにあさましき事など
侍けれど、あながちに侍ければ、「やうぞあらむ」とて、碁盤取り寄

せ、かき起こされさせ給て、打たせ給けるほどに、御腹のふくれ減ら
せ給て、一番がほどに例ざまにならせ給ける。いとありがたき験者に
て侍けり。経などよみ、祈り申などせさせ給はむだに、かた時のほど
にめでたく侍べきに、碁打ちてやめ給けむ、たゞ人にはおはせざるべ
し。「僧正」何、出でよ。かに出でよ」などいひて、打たせ給けるに、
かひくしくて減らせ給にければ、「僧正」この碁ものくさし」とて、
立ち給にけりとかや。(今鏡・むかしがたり第九・いのるしるし)

(28) 静成し夜、砧の能の節を聞しに、かやうの能の味はひは、末の世に知
人有まじければ、書き置くものくさき由、物語せられし也。
(申楽談儀・序)

(29) 「句を詠むこと、また、それが採用されることを」人にふと越されて
ちぢけだちぬれば、あがる事なし。又「句を出すのが」物くさくなる
因縁也。(連理秘抄)

現代語モノグサは専ら他者の性向表現として使用されるのであるが、初
期の用例はいずれも自己の内部的状态を描写していたことが分かる。現代
語モノグサに通ずるモノクサシは、対自己のモノクサシにやや遅れて発達
することになる(後述)。

それでは、こうした現代語モノグサには見られない^{㊠a}という意味領域は、いつ頃衰退していったのであろうか。表四からは、モノクサシ^{㊠a}が近世後期の『他阿上人法語』においても確認できることが分かる。しかし、この『他阿上人法語』は『一遍上人語録』の用語を受け継ぎ多用する言語資料であり、中世前期語資料としての価値が見出されている（小林賢次二〇一）。そうした資料性を踏まえると、モノクサシ^{㊠a}は、『真蹟去来文』あたりを最後に、一七世紀末頃に衰退し始めたと考えられる。近世末の『和英語林集成』のモノクサシに^{㊠a}に相当する語積が見られない（後述）ことも、^{㊠a}の衰退の時期を裏付ける傍証となる。

(30) それは書物のままにて、己が物に仕ゑざるゆへに、物ぐさくなり候
（真蹟去来文）『日本国語大辞典（第二版）』

さて、ここで、抄物に見られる「モノガクサシ」という表現についても触れておきたい。

(31) 酌サカテ飲ノミメバモノカクサイト云テ、ウツブイテ牛飲スルゾ

（史記抄・二）

(32) 年老テハ何モモノカクサイゾ。少年ノ時為ニ功名ニ急々ト有ガ、老テハ其ガナイ程ニ何モ懶ニゾ
（四河入海・五ノ三）

「モノガクサシ」の構造は、「主語（美質名詞）モノ述語十ガクサシ」と理解できる。そこで、中世後期におけるクサシの意味である[㊠]（不快なおいがる）を当てはめて解釈してみる。

例(31)の場合、なぜ「酌テ飲メバ」不快なおいがるのか、理解しにくい。また、ここでの「モノカクサイ」が仮に嗅覚表現であったとしても、それが「ウツブイテ牛飲スル」理由とはなりにくい。また、例(32)の場合も、「年老テハ」「少年ノ時為ニ功名ニ急々ト有ニ」ようなことがないために、不快なおいがるばかりだ、という解釈も不自然極まりない。

つまり、「モノガクサシ」は、三節で見えてきたクサシの意味から外れる特殊な用例ということになる。むしろ、形態的にも類似するモノクサシの、特に^{㊠a}（気が進まない）さまを表すと解釈する方が自然ではなからうか。そうした見方を補強するのが、例(32)の文末述語「懶（＝懶）」である。

この字の字訓候補を古辞書によって探してみると、オコタル（字類抄・名義抄）やモノウシ（字類抄・名義抄・下学集）、モノクサシ（名義抄）などの和語がその選択肢として考えられるようである。前文の述語部分に「モ

ノカクサイ」とあることを踏まえると、それとの形態的類似から「懶」をモノクサシと訓ずる可能性がある。しかし、前文の表現の繰り返しを避けるために、「懶」をオコタルやモノウシで訓ずると見ることもできる。決定的な判断は保留せざるを得ないが、いずれにせよ、「モノガクサシ」は嗅覚表現としてのクサシの一用法ではなく、《倦怠》を表すモノクサシの同義表現と見た方が良からう。

それでは、なぜモノクサシをあえて「モノガクサシ」と言い換える必要があったのであろうか。先に述べた通り、中世前期にはすでにモノクサシに独自の意味である \ominus^a （気が進まない）が派生していた。また、同時期成立の観智院本『類聚名義抄』には、〈怠る〉を表す「懶」（仏中一〇）や「慵」（法中八四）、「羸」（法下六〇）のそれぞれ一字にモノクサシの和訓が配されている。中世前期においてこうした状況であれば、抄物が登場する中世後期には、モノクサシの一語化がかなり進んでいたと考えられる。抄物は、講義録という性質ゆえ、ことばの意味を説明することもある。「モノガクサシ」も、当時一語化の進んでいたモノクサシの語源を理解しようとした結果の表現なのではなからうか^{一六}。

なお、「モノガクサシ」とモノクサシとを同一のものと見る立場に、『時代別国語大辞典（室町時代編）』がある^{一七}。「ものくさし」項には、「もの

くさ・し「懶し・物臭し」（形ク）「ものぐさし」「物が臭し」とも。」とあり、また、「くさし」項には、「二」⁽²⁾「物がくさい」の言い方で、事をするのが何となくわずらわしく、大儀に感じられるさまである意を表わす。」ともある。「モノガクサシ」のクサシが単純形容詞として解釈できないために、この表現全体でモノクサシ一語と同義になると判断したのであろう。

（一・二）（体調が万全でなく）気が進まない

中世には、先の \ominus^a のように自らの〈気が進まない〉さまを表しながら、対象への心進まざる気持ちの原因、あるいは、同時発生的事象として、病氣（33）（34）（35）や眠氣（36）（37）、老化（38）（39）などといった生理現象を同時に示す用例が多い。これらは、モノクサシ \ominus^a からの発展として、 \ominus^a （体調が万全でなく）気が進まない〉さまを表すと見る。

なお、このモノクサシ \ominus^a は、举例からも分かるように特に抄物に多く見られ、例（35）を最後に近世以降の用例はなかなか見出せない^{一八}。

（33）モノクサキハ、四支五体モヌケタルヤウニテ、スクヤカナラズ。是ニ

ヨリテ、ケタイ解体トモ書歟。

（塵添壻囊抄（一五三二）・一）

『塵添壻囊鈔・壻囊鈔』臨川書店・一九六八

(34) Monocusai. Oeftar indelpofto, como doente.

(日葡辞書)『パリ本日葡辞書』勉誠社・一九七六

「モノクサイ・病気にかかっているなど、気分がすぐれない(こと)。(『邦訳日

葡辞書』岩波書店・一九八〇)」

(35) をかし、男有けり。人の家を借りつゝ、いかで此永き日に、物食はん

と思ひけり。うち食はん事難くや有けん、物くさくなりて、死ぬべき

時に、

(仁勢物語・四五)

(36) 文書―秘書省テ有ホドニ、本ドモガ案ニ―ハイアルゾ。又ハ簿書ゾ。

ケツケ「―結解か」シ、ミダイタ時ハネムタイ。此書ガ―ハイ有ホド

ニ、物クサウテ、睡タイゾ。

(山谷抄・三)

(37) 三月ノ末ワタリゾ。物クサフ眠イ時分ゾ。

(中興禅林風月集抄・九オ一二)

(38) 庭―年ハヨリツ、シカモ物クサイゾ。衰ヘクタビレタホドニ久ク詩ヲ

モ作ラスゾ。

(山谷抄・一二)

(39) 今已老大ニシテ詩ヲ作テモ世間ヲ譏諷スルコトガモノクサイ程ニ、是

ヨリ先ノ如ニ時世ヲ譏諷スルコトモナイゾ。(四河入海・二五ノ一)

小林賢次(二〇一一)は、モノクサシの⊖a'という側面が『日葡辞書』に

記述されたことを以て、これをモノクサシの中世語的側面であると指摘し

た。しかし、前述の通り、モノクサシ⊖a'は、具体性へ踏み込んだ記述を行

う抄物に頻出する点に注意しなければならない。モノクサシ⊖a'が、抄物を

越えて中世語一般に指摘し得るこの語の側面であるか否か、現存する言語

資料からは十分に検討できないためである^{一九}。

以上を踏まえ、先に紹介した小林賢次(二〇一一)の言う、(体調が悪

い)と何をするにも(気が進まない)という多義の連続性は、多義の派生

順を指すものではなく、多義派生の要因としての言語使用者の推測と捉え

たい。すなわち、⊖a' (気が進まない)場合には当然(体調が悪い)とい

う原因・同時発生的事態も想定されるという当代の言語使用者の推測が、

⊖a'を表すモノクサシを誕生させた^{二〇}というように、共時的な現象と考える

のである。

なお、⊖ (気が進まない)の初出例である前掲例(14)も、解釈によっては、

⊖a' (体調が万全でなく)気が進まない)さまを表すと見ることもできる

のではなからうか。僧正は碁を打つことで教通の病気を治した後、「この碁

ものくさし」と言って退席するその理由を、「教通の病気は、それを取り去つ

たこの碁に移つてしまひ、もはややる気が起きない」と読むこともできる

のである。このように解釈すれば、モノクサシは、独自の意味を発生させた当初よりすでに、⊖^a（気が進まない）の原因・同時発生的事態を意識していた（⊖^a（体調が万全でなく）気が進まない）さまをも表す語と認識されていた）ことになる。

（一・三）気に入らない

自らの内部的状态を描写するモノクサシには、⊖^a・⊖^aとは別に、明らかに心情表現として用いられた例が認められる。これは、⊖^aへ気に入らないさまを表すと考えられる。こうした用例は、中世後期頃から近世前期あたりまで見られる。

- (40) 『源氏物語』の六条院の女樂をまねて」紫の上には東の御方「後深草院妃」、女三の宮の琴の代はりに箏の琴を隆親の女「藤原識子」の今参りに弾かせんに、隆親ことさら所望ありと聞くより、などやらん むつかしくて参りたくもなきに、「御鞠の折に、ことさら御言葉かゝりなどして御覧じ知りたるに」とて、「明石の上にて琵琶に参るべし」とてあり。……折々は「琵琶を」弾きしかども、いたく心にも入らでありしを、「弾け」とてあるもむつかしく、などやらん、物

くさながら出で立ちて、「柳の衣に紅の桂、萌黄の表着、裏山吹の小桂を着るべし」とてあるが、なぞしも必ず人よりことに落ち端なる明石になることは。（とはずがたり・巻二）

- (41) 我先にと進みし大衆、我劣らじと逃げたるはをかしうぞ見えたりける。武蔵是を見て、「あら、うたての御坊たちの空義勢や。さらば迎ひに参らん」とて、行けども一人もなかりけり。「あら、物くさや。仏に申つる諍ひの達せぬ事、口惜しや」とて、独り言して立ち聞きをぞしたりけり。……弁慶は諸寺諸山を馳せ巡り、「北陸道において、我に手にたつ物はなし。物くさいところ」とて、それより取つて返し、足にまかせて行くほどに、播磨の国に聞こえたる書写寺に着いたりける。（弁慶物語・中）

- (42) 我人隙なきつゝみにやすみをこそ、ものくさきくせものなれ、とくとくたちあがれと睨まへければ（室町殿日記・七）
- (43) 兄の村正齒がみをし飛んでかゝるをかいつかみ。物々しやと七八間みぢんになれと投げければ四つ這ひしてはふく逃ぐる。弟の官太こは無念と槍をつ取突つかくるを。ひつはずしむずと取しや物ぐさし小丁種めと。槍もぎ取て隙間なく突きかくれば村任は。こはかなはじと掻い振つてあとをも見ずして逃げたりける。（日本西王母・第一）

⊖^a・⊖^{a'}は、身体内部で認識した対象への不快感を表すとともに、「その不快感ゆえに自らが消極的になる」という心内で認識した不快感をも含意するのであった。体内と心内とは隣接するため、一方の不快感がもう一方のそれをも引き起こし得るのである。その結果、単なる心内における不快感の表明である⊖（気に入らない）という意味にも、モノクサシが用いられるに至ったのではなからうか。また、⊖^a・⊖^{a'}の情意的意味と⊖のそれとの相違としては、前者が対象への消極的な回避を意図するのに対し、後者は対象への積極的な拒絶を意図するという、心理的距離の程度の差が認められる。

(二) 对他者―不精である

(一) では、モノクサシが一人称（一般論も含む）の内部的状态の描写に使用される場合を見てきた。この場合、モノクサシによって表されるのは自分自身の感覚・感情である。よって、モノクサシ⊖^a・⊖^{a'}・⊖について言えば、ある行為・対象について心が惹かれられない原因・理由の把握ができ、かつ、その描写も可能になるのであった。

これにやや遅れて、モノクサシが二・三人称の描写に使用される場合(44)

(48) や、自己の客観視の描写に使用される場合(49)が出て来る。この場合、モノクサシによって表されるのは、あくまでも発話者・書き手から見た他者（としての自己）の状態であり、気が進まない原因・理由は知り得ない。あるいは、原因・理由がないにも関わらずそういう状態であると見なすことになる。ゆえに、原因・理由はよく分らないが気が進まないように見える”という、発話者・書き手の評価が前面に押し出された性向表現となる。これを、⊖^bへ**不精である**を表すモノクサシと考える。現

代語モノクサシの意味とはほぼ変わらないモノクサシの誕生である。

(44) 悪キ友達ヲ語ラヒ、酒ヲモリヲノミ好ミ、博奕ニ心ヲ入ル、程ニ、ト

リトコロナキ徒者ニ生ヒ立ツナリ。カ、ル者偶々宮仕ヲ思立トモ、サル振舞ヲスル上ハ心ニ入ル主モナシ。……シタル所作モナクテソラニ

果報ヲ期セン事、大ニ不定ノハカラヒ也。カヤウノ事ヲ云者ハ心ノ至リテ物クサク、性ノ極メテ不覚ナルガイタス也。(十訓抄・中・第七)

(45) 下臈ノマメナラヌヲ物クサシト名ヅクル。クサ如何。クサハ来ヌサマノ反。不来ノ義也。呼ブ所へ来ザル心歟。……次履物ニモノクサトイヘル。クサ如何。同前。作りサシタレバモノクサカル由也。

(名語記・五) 『名語記』勉誠社・一九八三

(46) 人ノ処へ行テ、何事カヲリソウ、何ンド、云テ、歩クコトモイヤゾ。

天性モノクサウ有ゾ。

(山谷抄・三)

(47) モノクサウテハナラヌゾ。種ヲワケ、田打ヲコリ、水ヲ入レ、草トリ

スルゾ

(玉塵抄・一一)

(48) 彼去来物ぐさきをのこにて、窓前の草高く、数株の柿の木枝さしおほひ、五月雨漏尽して疊・障子かびくさく、打臥処もいと不自由なり。

(芭蕉俳文・五三・落柿舎ノ記)

(49) 一云知一坡言ハ我モトカラモノクサキ人ナルニトテ、邦直トノ我ヲ勸

テ懶ヲ起ニ詩ヲ作テ寄ラレタゾ。起ハ起余ノ心ゾ。

(四河入海・一七ノ四)

前述のごとく、對自己の表現であったモノクサシ^{⊖a}・^{⊖a'}は、一七世紀末には衰退し始めていたことが推測される。一方で、対他者の表現であるモノクサシ^{⊖b}は、以後現代まで引き継がれる意味領域となった。そうした意味変化の起こったことを示すのが、近世末の『和英語林集成』である。

(50) MONO-GUSAI, -KI, -KU, モノグサイ, 懶惰, Lazy, indolent,

slovenly. Syn. BUSHŌ, RANDA.

〔明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス〕

(和英語林集成・初版)

英訳や類義語からも分かるように、モノクサシは専ら^{⊖b}〈不精である〉さまを表す語として認識されている。『言海』でモノクサシが「タイギナリ。」と説明されていたこと(前述)とも矛盾しない。

(三) モノクサシの語構成―その二

以上のように、モノクサシはクサシにはない独自の意味領域として、^{⊖a}〈気が進まない〉、^{⊖a'}〈体調が万全でなく〉気が進まない〉、^{⊖b}〈不精である〉、[⊕]〈気に入らない〉を築き上げてきた。

モノクサシ^{⊖a}・^{⊖a'}・^{⊖b}の場合、前掲モノクサシ^{⊖a}・^{⊖a'}のように主語(実質名詞)モノクサシ^{⊖a}・^{⊖a'}・^{⊖b}という構造としてはもはや理解できず、一語化が進んでいると考えられる。

第三項 モノクサシの意味の広がり

以上見てきたモノクサシは、出現順から考えるに、本来の意味が^{⊖a}〈(あるものが)不快なおいがする〉である状態形容詞であったと言える。そ

こから、どのような抽象化が働き、㊸や㊸^a・㊸^{a'}・㊸^b・㊸[Ⓟ]といった意味が派生していったかをまとめたものが、前掲の図二である。

㊸から㊸^a、㊸^{a'}から㊸^bへの変化は三節で述べた通りであるので、繰り返さない。ここでは、モノクサシに独自の意味を中心に述べる。

㊸^a（あるものが）不快な気・感じがするは、自らの体内における不快感を表明する感覚形容詞としてのモノクサシの用法と言える。そして、体内と心内とは隣接するがゆえに、㊸^{a'}（あるものが）不快な気・感じがするために㊸^a（気が進まない）という不快感の連鎖が生じる。この㊸^a（気が進まない）の段階になると、体内における不快感に加え、自らの心内における不快感の表明をも含意することになり、モノクサシは情意形容詞的な側面をも有すると言える。また、中世後期の抄物では、㊸^a（気が進まない）原因や同時発生的事態を明示しようとする向きが強まり、㊸^{a'}（体調が万全でなく）気が進まないという意味で解釈できる用例も散見されるようになる。この場合も㊸^a（気が進まない）と同様、感覚形容詞でありながら情意形容詞的なニュアンスの付加するモノクサシと捉えられる。㊸^a・㊸^{a'}のような対自己の描写に使用されるモノクサシにやや遅れて、对他者にもモノクサシが使用され始める。この場合、モノクサシは、原因・理由はよく分からないが気が進まないように見える”という、発話者・書

き手の評価が前面に押し出された性向表現となる。これが現代語モノグサに通ずる㊸^b（不精である）の誕生であり、モノクサシは評価形容詞としての側面を確立させることになる。

一方で、㊸^a（気が進まない）の一面であった、心内における不快感の表明が独立・強化されることにより、対象への積極的な拒否を表す㊸[Ⓟ]（気に入らない）という感情的な意味をも派生するに至る。これはまさに情意形容詞と呼ぶべきモノクサシである。

モノクサシは、本来、クサシの類義語として嗅覚で認識した対象への不快感を表す状態形容詞であった。しかし、その一語化が進むにつれ、身体内部や心内で認識した対象への不快感を表す感覚・情意形容詞へ、さらに人間の性向を表す評価形容詞と変化していったのである。

第四項 モノクサシの語構成―その三

モノクサシの意味領域を把握した上で、第二節第二項で問題提起をしたモノクサシの語構成について考察を加えることにしたい。

問題は、モノ形容語がすべてモノ＋自立語と解釈できる中で、モノクサシもそのように考えられる一方、モノ＋接尾辞・クサシという語構成も想定されるということであった。ここでは、クサシが接尾辞とは捉えられず、

自立語として捉える方が妥当であると考える根拠について述べることにする。

次の表五は、想定され得るモノクサシの語構成パターンを示した表である。語構成パターンは、名詞モノ＋接尾辞・クサシと見るⅠ、名詞／接頭辞モノ＋形容詞クサシと見るⅡ、モノとクサシとが一語化し分解不可能と見るⅢの三つに分けられる。

表五 モノクサシの語構成パターン

Ⅲ	Ⅱ		Ⅰ
	接頭辞	名詞	接尾辞
モノクサシ	〈何とな〜〉	言語化の憚られる 〈あるもの〉	クサシ
	形容詞	クサシ① クサシ② クサシ③ クサシ④	クサシ Aクサシ Bクサシ Cクサシ
		〈不快なおいがする〉 〈怪しい・疑わしい〉 〈わざとらしい〉	クサシ 〈〜の不快なおいがする〉 〈〜の不快なおい＋雰囲気がある〉 〈〜の不快な雰囲気がある〉

筆者の立場は、モノクサシがクサシと重なる意味を有する段階(①・②)ではⅡ、クサシとは別に独自の意味を有するようになる段階(③a④⑤)ではⅢをとることになる。

第四節第一項(二)で見たように、モノクサシには、クサシ③(怪しい・疑わしい)と重なる④(あるものが)怪しい・疑わしい)という意味領域が存在する。モノクサシのクサシを接尾辞と見る(Ⅰ)と、接尾辞・クサシの基本的な意味であるA・B・Cクサシではモノクサシ④の存在をうまく説明することができない。よって、語構成パターンⅠは否定されよう。

ここで思い出されるのは、〈怪しい・疑わしい〉を表す胡散クサシやキナクサシの存在である。しかし、前者は、上接成分「胡散」によって〈怪しい・疑わしい〉の意味を表すのであって、接尾辞・クサシは〈怪しい・疑わしい〉に直接関与しているわけではない。また、後者は、本来の意味〈布などが焦げる不快なおいがする〉が、「火のない所に煙は立たぬ」という発想により比喩的に〈怪しい・疑わしい〉を表すようになったもので、接尾辞の意味ではなく語の意味である。

モノクサシの語構成は、その表す意味により、理論的には前述のように解釈することができる。モノクサシも、モノ形容語全般の傾向にもれず、モノ＋自立語であった(Ⅱ)と考えられるのである①。

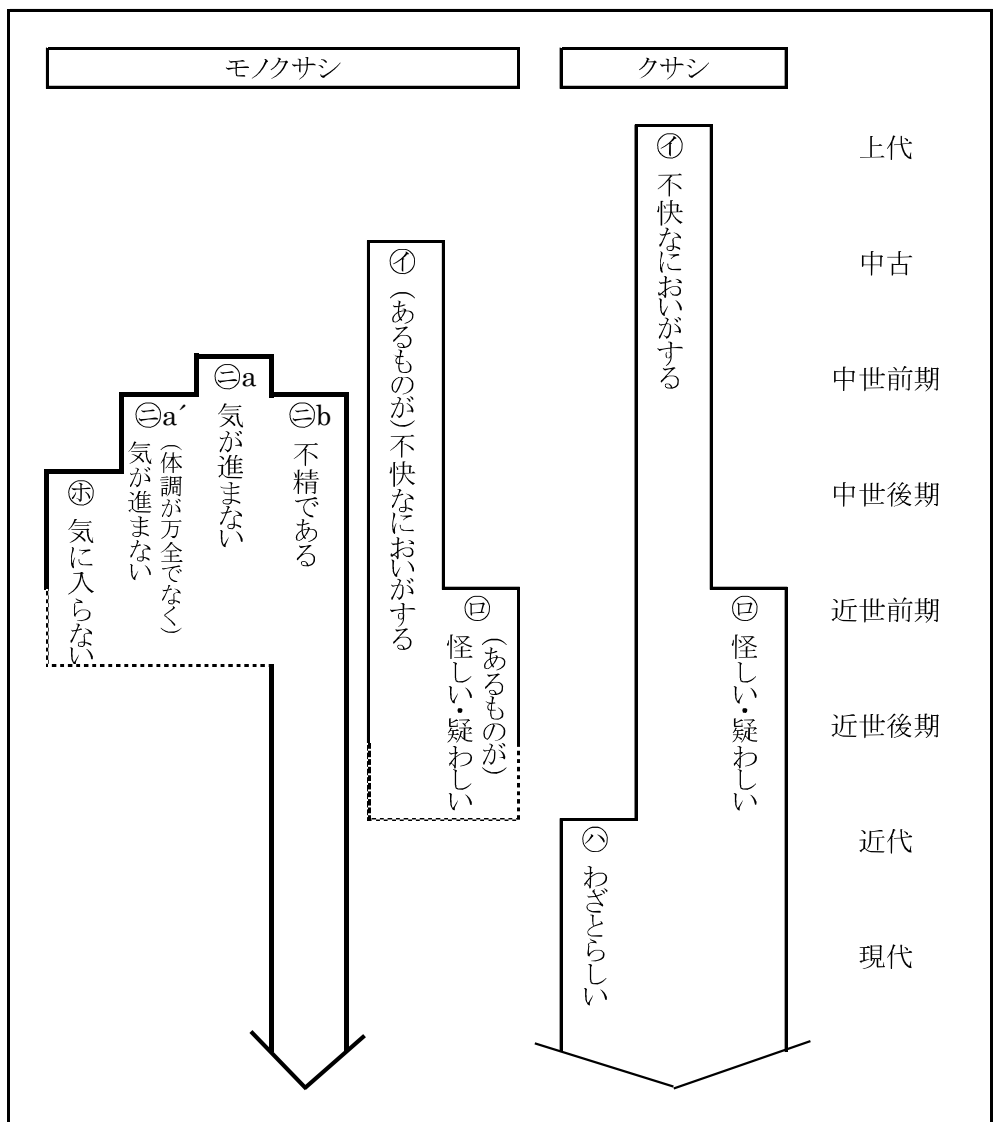
第五節 おわりに

第二節第二項で示した「モノクサシの語史を記述する上で考察すべき観点」を改めて挙げ、本章の考察結果をまとめる。

(一)モノクサシ・クサシの意味領域の変遷

モノクサシ①〈あるものが〉不快なおいがする〉、②〈あるものが〉怪しい・疑わしい〉は、あくまでもクサシの派生語（主語(実質名詞)モノ 述語十クサシ）という意識で使用されていた。しかし、モノクサシは中世以降、一語化が進むことで、固有の意味③a〈気が進まない〉、③a'〈体調が万全でなく〉気が進まない〉、③b〈不精である〉、④〈気に入らない〉を獲得し始める。このうち、③a・③a'・④という対自己に関するモノクサシは近世前期頃までに衰退し、以後、モノクサシは専ら対他者に関する③bを表す語として使用されるようになり、現代語モノグサに至ったのであった^{三〇}。

以上の史的変遷を図三としてまとめる。



図三 クサシ・モノクサシの史的変遷

※ ①は、あくまでも意味変化の過程を説明する際に想定した段階であり、必ずしも語の意味として確立しているわけではない。そのため、用例の認められる意味をまとめる図三では表示しなかった。

〔2〕モノクサシの情緒性

そもそも、嗅覚とは、味覚・内臓感覚などと同様に（粘膜を通した）内部的感覚である。つまり、嗅覚表現形容詞の段階においてすでに、身体内部（体内・心内）の状態を描写する語（情緒性を付随する語）へと変化する契機を内包していたと考えられるのである。

本章では、モノクサシを例に、嗅覚表現から体内感覚表現へ、さらには性向表現、心内感情表現へと一語の意味・用法が拡大する過程とその要因を明らかにした。結果として、モノクサシは、嗅覚表現に使用される状態形容詞から性向表現に使用される評価形容詞への変化が起こったこととなる。モノクサシのように、五感表現に使用される属性形容詞から性向表現に使用される評価形容詞への変化が起こった語としては、他にもミットモナイがある（佐竹昭広一九七七、彦坂佳宣一九八三b）。彦坂佳宣（一九八三b）によれば、本来（見ることを欲しない）という意味を表していた連語「見タクモナシ」（『太平記』の用例が早いもの）の一語化・音変化が進み、遅くとも近世初期には（体裁が悪い）（恥ずかしい）などの「自己にかかわる」「負い目」の意味を表すようになり、さらにそうした感情を起こさせる対象の属性を表す（醜い）（不格好）の「なじり・けなし」の気持ちさが

伴う意味でも使われるに至ったとのことである⁵¹。彦坂氏は明言していないものの、これは、視覚表現に使用される状態形容詞から性向表現に使用される評価形容詞への変化と捉えられる。同様の意味変化をたどる感覚表現語が他にもあるのか否か、今後さらに調査を進めたい。

補節 類義語モノウシについて

本章の考察においては、モノクサシの語構成要素である単純形容詞クサシと比較することに終始したが、その表現特性をより精査していくためにも、モノクサシの類義語であるモノウシなどに目を向ける必要がある。

モノウシとモノクサシとが類義関係にあることについては、すでに佐竹昭広（一九六七）の述べる通りであり、二語の共存過程にどのような意味の張り合いがあったのかが問題となる。

実際の用例に目を転ずると、写本・版本により二語が自由に選択されている状況が窺え、現段階ではその使い分け意識が十分に分からない。

(51) 或聖リ申ケルハ、「仏事ニ請ズル事アリ。道遠クシテ、老体ノ身、モ

ノウク侍リ。某ガ交レ申サバ、別ノ子細アルマジ。ヲハシマセカシ。

但シ道ノ程三日ノ道ナリ。彼ノ処ノ仏事ミナ覚ヘ侍リ、布施甘費ニハ

不可過。僅ノ事ナリ。又是ヨリ、一日路ナル所ニ、或社ノ神主、有徳ノ物ニテ、子息アマタモチタリ。七日逆修トリクニセムトテ、**某ヲ請ズ。コレモ物ウク候。**交シ申バ違乱アラジ。是ハ一日ニ無下ナラバ五貫、ヨウセバ十貫ヅ、ハセムズラム。何方ヘカヲワシマスベキ」ト云ニ、
(梵舜本(慶長二年写) 沙石集・卷七・二三・耳売タル事)
※慶長一〇年古活字本^{三三}「ソレモ請シ候。物クサク侍。」

(52) 教長、「この由をこそ披露仕り候はめ。但、子息義朝、内裏へ参りたらんによるべからず。御辺院へ参らん事何のくるしく候べき。今度はみな親は親、子は子にてこそ候へ。たとひ子息を参らせられ候とも、相具して参られんこそ交替あるべきに、居ながら御返事申され、子息計を参らせられ候はん事、いかゞあるべく候やらん。」とのたまへば、判官重て申けるは、「**凡よろづものうく候事**は、為義年来將軍の宣旨をのぞみ申候しかども、御ゆるし候はず、……」

(金刀比羅本保元物語・上・新院為義を召さるる事)
※京函本系統(早稲田大学中央図書館蔵本^{二四})「よろづものうく候事」
※金刀比羅本系統(陽明文庫蔵宝徳三年奥書本^{二五})

「凡よろづものくさく候事」

※京師本系統(彰考館文庫蔵本^{二六})「およそよろづ物くさく候こと」
※杉原本(彰考館文庫蔵本^{二七})「よろづ物うく候事」

なお、山口仲美(一九八二)には、「感情語彙」から「感覚語彙」への転用が例外的に認められる語例としてモノウシがあるとの指摘が見られる^{二八}。しかし、「感情語彙」に属していたウシが、モノを冠し「感覚語彙」に属するようになったとするにはやや飛躍があり、より丁寧にモノウシの多義の連続性を説く必要がある。そして、その多義説明にあたり、モノウシ・モノクサシを《倦怠》という合流地点へ向かうように同時に描き出せば、二語の差異が明確になり、日本語の《倦怠》語彙の在り方が少しでも明らかになるのではなからうか。

また、モノウシ一語をとつても、モノ形容語の中で定着の度合いが高いこと、その一語性の高さなどがつとに指摘されてきた(根来 司一九八二、西崎 亨一九九五、坂詰力治二〇一一など)。単純形容詞ウイが、憂サ晴ラシなどの名詞の一部にのみ残り単体として消滅したことについては、愛^ウイとの同音衝突を避けた結果との指摘がある^{二九}。しかし、一方で、先に述べたようなモノウイの独立性と、それゆえにウイの意味領域を浸食したという背景も考えられそうである。モノクサイとクサイとが互いに別語として

独立しそれぞれ現代語に残るのは異なり、モノウイとウイとで交替した点が興味深い。ウシ・モノウシの個別の語史を記述するとともに、モノクサシなどの類義語との比較対照が課題となる。

一 本来は第三音節が清音であった（金井清光二〇〇五）ことを踏まえ、本稿では近世以前に限りモノクサシと表記を統一する。

なお、中世には形容動詞モノクサゲナリも二例見える。形容詞と形容動詞とでは語幹の独立性が異なるものの、「客体世界の情態的な側面を表現する語」（村田菜穂子二〇〇五）という点で共通するため、品詞のちがいにについては特に問題とせず、用例をまとめて扱う。

二 他に、名詞モノの一用法に過ぎないと見る立場（山王丸有紀二〇一一）もある。

三 現代語研究の分野では、靱山洋介（一九九二）が、モノ形容語のモノに少なくとも次のような四つの意味が指摘できると主張する。

・〈強め〉 例、モノスゴイ

・〈数量的〉を〈心理的・感覚的〉に添加 例、モノ足りナイ

・〈情緒的〉〈ぼんやりとした〉 例、モノ悲シイ

・〈主体を人間に制限〉 例、モノ静カ

ただし、靱山洋介（一九九二）はあくまでも共時的な観点から意味を記述したものであり、各語の史的変遷を踏まえた上で再検討する余地もあるように思われる。

例えば、〈強め〉を表すとするモノスゴシは、『日本国語大辞典（第二版）』の挙げる用例のように、本来は〈非常に気味が悪い〉さまを描写する語であり、モノは〈言語化の憚られる得体のしれない何か〉を指す名詞と考えられる。そこから意味が抽象化していくと、モノは単なる強調のように捉えざるを得なくなる。

美乃国不破関にもかかりぬれば、細谷川の水の音ものすごく音信て

（延慶本平家・六本・大臣殿父子関東へ下給事）

Monosugoi（モノスゴイ）〈訳〉大きな森のように、寂しく、恐ろしい

（日葡辞書）

それぞれの語史をつぶさに考察することができれば、現代語におけるモノ形容語の整理にも繋がる。今後の課題としたい。

なお、靱山洋介（一九九二）ではモノグサを考察の対象外としており、この語の場合モノがどのような意味を表すのかについては言及がない。

四 東辻保和（一九九七）を基にモノ形容語の表現性について述べた坂詰力治（二〇一一）は、モノクサシの情意性に二種あるとの見解を示す。すなわち、モノを冠することで情意的意味を表す場合に（何となくくさい）となり、東辻氏の言うモノ（Ⅲ）により情意的意味を表す場合に（大儀である）となると言う。しかし、東辻氏のモノ（Ⅲ）は情意性形容語について述べたものであり、属性形容詞であるクサシにまで適用するのはやや疑問が残る。

五 なお、『日葡辞書』の「自屎」項の例文にも、「*Ixi cusaqi cotono xirazu.*

XIX. 誰でも自分自身のこととはわからないものである。ちようど自分の糞は自分には嫌な臭いがしないと同じように。『邦訳日葡辞書』岩波書店・一九八〇」とある。

六 『日本国語大辞典（第二版）』では、「臭い者身知らず」の初出例を浮世草子『傾城禁短気』（二七一）とするが、举例のようにだいぶ遡ることができそうである。

おかん鼻へ声を入れて、「古手さん私は恥づかしい事なれど、年々の湿

気のおどもり出まして、惣身はかやうに瘡にみしやれ、目は見へかね耳は遠くなる、鼻も迫付落ちませふが、よい中へは早う移るものじやと申せば、嬉しい事は此方さまと末かけて、お約束の通り添ひましたら、女夫ながら鼻がなふてくさい物身知らずと、二人が中がよからふと思ふて、悦んでおります。……」（傾城禁短気・卷三第三）

七 『日本国語大辞典（第二版）』では、この成句の初出例として次の『譬喩尽』（二七八六）を挙げているが、例(11)の『句双紙抄』（一六〇）まで、およそ二〇〇年遡ることができるようである。

臭^{くさい}ひ物に蠅^{はい}がたかる 臭^{くさい}イ物ニ蓋シテ置ヤウナ物

（譬喩尽・く之部）『譬喩尽並ニ古語名教』同朋社・一九七九

クサシを使用する成句について付言すれば、他に「くさい物に蓋をする」もある。こちらの初出例は、『日本国語大辞典（第二版）』によると近世前期一六五六年成立の俳諧に見出せるらしい。

臭^{くさい}支^しものには蓋^{ふた}をせよ

（世話尽・曳言之話）『日本国語大辞典（第二版）』用例

八 「与_レ善人_一居、如_レ入_二芝蘭之室_一。久而不聞_二其香_一。即与_レ之化矣。与_二不善人_一居、如_レ入_二鮑魚之肆_一。久而不_レ聞_二其臭_一。」（孔子家語・卷四・六本第一五）

九 同じく中世前期の説話『沙石集』にもこの成句が見られたが、形容詞クサシは使用されていない。

書云、「與善人居則如入蘭芝ノ室。久不聞其香而與之化矣。與不善人居則如入鮑魚ノ肆。久不見其臭而與之化矣……」（沙石集・卷四・九）

前に「久不聞其香」Ⅱ「久しく其の香を聞かず」とあり、「久不見其臭」も「久しく其の臭を見ず」と名詞として読むべきかと思われる。

一〇 なお、「鮑魚の肆」を知らず」に生グサシが使用された最初の例は、近世後期の『譬喩尽』（二七八六）になるまで見えない。

鮑魚^{ハツヒコノイシヤツトマヤクサキ}肆^{シラズ} 腥^{シラズ} を不知

（譬喩尽・一）『譬喩尽並二古語名数』同朋社・一九七九

二 加えて、隠蔽のニュアンスがあるようにも感じられる。以下、現代語の用例（すべて作例）を挙げる。

〈関係がありそうだ〉 あの子は（怪シイ／疑ワシイ／クサイ）

〈疑いがある〉 あの男が（怪シイ／疑ワシイ／クサイ）

〈悪い方向に変わりそうだ〉空模様が（怪シイ／*疑ワシイ／*クサイ）

〈信頼できない〉 （怪シイ／疑ワシイ／*クサイ）英語力

少なくとも現代語クサイには、人間の行為により「事実・真相が不確定」になっているという、隠蔽のニュアンスが認められそうである。

二二 においては、《発散》という共通項でまとめられる「気」の下位分類に過ぎない（E・ミンコフスキー一九八三）。

二三 森田良行（一九八九）では、怪シイは〈事実がはっきりせず真実・真相は不明であるが、マイナス評価へと傾きそうだ〉を、疑ワシイは〈対象がAであるか否か、確かでない〉を表すとそれぞれ記述する。

二四 術語は国広哲弥（一九九七）による。

二五 評価性にも程度がある（飛田良文・浅田秀子一九九一など）。

二六 『日本国語大辞典（第二版）』「ものぐさい」項の【方言】欄によると、

「(3)物事に飽き飽きしている。《ものがくさい》三重県伊勢」とあり、現代語においては一部地域にのみ残ることが分かる。

なお、『日本国語大辞典（第二版）』『時代別国語大辞典（室町時代編）』ともに、「モノガクサシ」の他、モノ形容語をいわば展開したような「モノガ形容語」の見出しは見えない。

二七 『日本国語大辞典（第二版）』では、「モノガクサシ」がモノクサシと同義であるとの明言は見えないものの、「もの」項の小見出しとしてモノガクサイを挙げ、「面倒である。面倒くさい。」と説明する。

二八 『他阿上人法語』が中世語資料の側面を強く残すことはすでに述べた通りである。

一九 ただし、『日本国語大辞典（第二版）』「ものぐさい」項の【方言】欄には、「(2)病気で気分がすぐれない。《ものぐさい》三重県志摩郡」とあり、現在でも一部地域でモノクサシの $\Theta a'$ に通ずる意味が保存されていることは確かめられる。今後、調査を広げること、モノクサシ $\Theta a'$ がモノクサシの中世語的側面であるか否かの再考を試みたい。

二〇 ただし、くクサシ語彙から眺めた場合、モノクサシは特殊な語として位置づけざるを得ない。すなわち、くクサシの多くは接尾辞・クサシからなる派生語であり、クサシを単純形容詞と見ることができるのは、モノクサシ・ワルノワロ悪クサシ・ウツ薄クサシの三語のみとなるためである。

二一 対自己の表現から対他者の表現へ変化した類例には「気ノ毒」もあり、

その変化の時期は近世後期頃である（小島幸枝一九八三）。

二三 また、柳田国男（一九四六）には、「ミトムナイ其他」と題して、ミットモナイの類義語を取り上げ、東北においてはミグサイ・メグサイという語があるとの指摘がある（初出は一九四二年九月から一九四三年八月にかけての『婦人公論』である）。クサイが多く「面白くない場合」に使われるために、これを添えたミグサイ・メグサイが、醜イ（見ニクイ）や見苦シイと類義語になるのだと述べる。如上の語彙の史の変遷をまとめることが出来たならば、視覚表現と嗅覚表現との関連についてさらに考察を深めることができよう。

二四 『沙石集総索引―慶長十年古活字本影印篇』〔勉誠社・一九八〇〕

二五 『軍記物語集』〔早稲田大学出版部・一九九〇〕

二六 『保元物語』〔思文閣・一九七五〕

二七 『保元物語上巻』〔汲古書院・一九七二〕

二八 『保元物語下巻』〔汲古書院・一九七四〕

二九 山口仲美（一九八二）では、「当事者だけの主観的な感じを表す点」で共通する「感情語彙」と「感覚語彙」とを、それぞれ次のように定義する。

「感情語彙」とは、刺激に対する精神的反応を表し、間接・抽象的な性質をもつ。

「感覚語彙」とは、刺激に対する生理的反応を表し、直接・具体的な性質をもつ。感覚を通して認識した対象の属性を表す語は含まない。すなわち、皮膚感覚や内臓感覚、体の深部から来る感覚を表す語群（熱イ・息苦シイ・ダルイなど）のみを指す。

二九 小池清治・河原修一（二〇〇五）は、ウシの消滅した要因を形容詞の近代語化に端を発すると見る。すなわち、中世後期に至ると、イ音便化した形容詞連体形が終止形の機能を備えるようになる。すると、ウシはウイとなり、〈好ましい〉を表す愛^ウイとの同音衝突を迎えることになる。これを回避すべく、ウイ自体は消滅し、ウイの意味領域はモノウイ・ココロウイなどに任せるようになったのである。

第四章 接尾辞・クサシの意味と上接成分の拡大

— においから雰囲気へ —

第一節 はじめに

現代語における〈不快なおいがする〉さまの表現には、マイナス評価を表す形容詞（く）クサイの他、自動詞ニオウや自動詞的用法「ニオイ＋スル」などが使用される。しかし、近世以前の段階では、自動詞（的用法）がマイナス評価を表す用例は非常に少なく（本論第三部第六章）、専ら形容詞が優勢であったと推測される。

こうした状況の背景には、形容詞側の接尾辞の存在と、自動詞（的用法）側の意味変化の経緯とがあった。すなわち、クサシが接尾辞・クサイを生み出すことにより様々なおいの表現を可能にし得たために、ニホフ（その連用形名詞ニホヒ）におけるマイナス評価の発生が遅れたと考えられるのである。もちろん、本来の評価性であるプラスが強く意識され続けマイナスの評価性を獲得するまでに長い時間を要したという、ニホフそれ自体の事情も影響していたであろう。しかし、それ以上に〈不快なおいがする〉さまの表現における（く）クサシ語彙の存在感は軽視できないものであったと考えられる。

本章では、マイナスの意味を表す嗅覚表現接尾辞・クサシに着目し、この接尾辞の結合力^二（上接成分を拡大する力）によりどのような合成形容詞が産出されてきたのか、くクサイ語彙の史的変遷を考察する^三。これは、単に嗅覚表現の範疇にとどまらず、面倒クサイなどの語に現れる嗅覚表現でない側面をも含めた包括的な記述が求められる。特に、くクサイと上接成分との関係に注目して、この接尾辞の意味の広がりを史的観点から整理してみたい。

第二節 問題の所在

第一項 先行研究

先行研究では、主に共時論的な立場から、辞書に立項されるような一語化した（と考えられている）くクサイの考察が進められてきた。

これらの先行研究に共通するのは、くクサイの中に、純粋な嗅覚表現とそうでないものとの二つを想定する点である。後者は、面倒クサイや照レクサイ、青クサイ（の転義〈未熟だ〉）などがその具体例として挙げられている。これら、嗅覚表現とは考えにくいくクサイの意味は、次の表一にまとめたように、それぞれの立場から様々な名称が与えられた。

表一 嗅覚表現とは考えにくい・クサイの扱い

先行研究	名称	転義	強調
玉村千恵子(一九八八)	「非嗅覚」		
山下喜代(一九九五)	「嗅覚の意味を含まない」等	含める	含める
門倉正美(一九九六)	「雰囲気」		
森田良行(一九七七)	「ようす」		含めず別に立てる
斎藤倫明(一九九五)		※	言及なし
飛田良文・浅田秀子(一九九二)	「感じ」	含めない	含めず別に立てる

※別に扱うとしながらも、田舎クサイ・坊主クサイなど(の転義)を含む。

留意すべきは、「嗅覚表現とは考えにくい・クサイの意味」に、接尾辞の意味と、語の意味(転義)とが混在していることである(ただし、飛田良文・浅田秀子一九九二を除く)。すなわち、面倒クサイなどの接尾辞・クサイの意味が嗅覚的でないことと、青クサイに見られる一般に定着した語の転義(未熟だ)が嗅覚的でないこととが、同次元に扱われているのである。

論者により立場が分かれるのは、「嗅覚表現とは考えにくい・クサイの意味」に、強調(上接成分の意味の強め)をも含めるか否かという点である。しかし、そもそもなぜクサイが強調を表し得るのか、その理由については諸氏共通に十分な説明がない^四。いずれにせよ、強調を「嗅覚表現とは考えにくい・クサイの意味」に含める場合には、先ほどと同様、接尾辞の意味である強調と、語の意味である転義とが、同類として扱われることに

なる(森田良行一九七七、門倉正美一九九六、飛田良文・浅田秀子一九九二を除く)。

以上を総括するに、飛田良文・浅田秀子(一九九二)を除く先行研究においては、本質的に嗅覚表現的でない接尾辞・クサイの意味(強調をも含む)と、転義が嗅覚表現的でない語クサイの意味という、レベルの異なる事象が同次元に捉えられていることになる。これは、

「共時論的な立場から、辞書に立項されるような一語化した(と考えられている)クサイ」を扱うにあたり、(本来的な意味ではなく)現代語において定着している意味に焦点が当てられたために生じた結果である。

こうした意味の検討とは別に言及しておきたいのは、玉村千恵子(一九八八)と山下喜代(一九九五)とが着目したクサイの上接成分である^五。両氏により、上接成分は名詞・形容(動) 詞語幹・動詞の連用形があること、その品詞によるクサイの意味のちがいが明らかにされた。先に触れたように、両氏ともに共時論的な立場からの研究であるため、ここでの「品詞によるクサイの意味」には語の意味である転義が含まれる。

第二項 本研究の立場

現代語・クサイ・クサイの意味領域の広さは先行研究により把握する

ことができよう。しかし、**・クサシ**を通史的に考察する場合には、前述の、「本質的に嗅覚表現的でない接尾辞**・クサイ**の意味（強調をも含む）」と、転義が嗅覚表現的でない語**・クサイ**の意味」とを峻別する必要がある。接尾辞の発生・展開を記述する際に、文脈から付与された語用論的意味である転義（語の意味）はひとまず問題とならないためである。転義を除いてもなお、本質的に嗅覚表現らしからぬ振る舞いをする**・クサシ**が存在することに注目し、これと純粋な嗅覚表現である**・クサシ**との連続性・関連性を史的観点から見出してみたい。また、**・クサイ**がなぜ強調の意味を表し得るのか、その理由についても検討する。

・クサシが本来的に表す意味を考察するにあたっては、上接成分から判断する玉村千恵子（一九八八）や山下喜代（一九九五）の手法が重要と考えられる。これら先学の恩恵に与り、本研究ではさらに、転義を除いた上での接尾辞の意味を見るという目的に沿って、名詞の細分化、動詞の具体的な規定を行った。また、辞書には立項されないような、ある時代に特有な一過性の結合の語も含め、より網羅的な記述を目指す。

第三節 **・クサシ**の意味と上接成分

上接成分を基準に判断した**・クサシ**の意味の全体像を示すと、次の表二

のようにまとめられる。以下、それぞれの意味を順に見ていきながら、上接成分の具体例（ここでは現代仮名遣いに統一）を示す。

なお、**悪**^{ワル/ワロ}**クサシ**・**薄**^{ワク}**クサシ**・**モノクサシ**の三語は考察の対象外とした。

悪^{ワル/ワロ}・**薄**^{ワク}**クサシ**は強弱を表す接頭辞を冠した**クサシ**と考えられるためである。モノクサシは、語構成（モノは名詞か接頭辞か）や意味の広がりなど問題があるため、本論第二部第四章でその語史を考察する。

表二
ク

名称	・クサシ の意味
Aクサシ	（ [〃] の不快な） 物の名前 ・立場・場所 ・クサシ の意 がする
Bクサシ	（ [〃] の不快な） ・クサシ の意 がする
Cクサシ	（ [〃] の不快な） ・クサシ の意 がする
A'クサシ	（ [〃] の） におい ・クサシ の意 がする
C'クサシ	（ [〃] の） におい ・クサシ の意 がする
文末外接形式	（ [〃] の不快な） ・クサシ の意 がする

第二項 Aクサシ

まず、上接成分に、嗅覚刺激を発散させ得る事態の変化（↓物質の変化を表す動詞の連用形）、具体的な形を備え嗅覚刺激を発散させ得るもの（↓

具体名詞)をとる場合、^一クサシは嗅覚表現として(への不快なにおいがする)を表すと考える。これを^Aクサシと称する。調査により得られた上接成分は次の通りである。

【(物質の変化を表す) 動詞の連用形^六】

熱^いレ、燻^{イフ}シ^セ、煎^イリ、焦^イガレ、焦^イゲ、湿^イリ、饅^イエ、寝^ネ(寝ルことによる状態変化)、陳^ヒネ、フスボリ、蒸^イレ、焼^イケ

【具体名詞―物の名前】

青(青もの)、垢、赤ガネ、芥、汗、油、油土、甘(甘い食べ物)、洗イ粉、硫黄、息、礬(礬のもの)、イルカ、魚^{ウオ}、鰻^{ウナ}粉、馬、膿、漆、煙硝、白粉、才前(特定の人物)、蚊、香^カ、蚕^カ、ガス、ガソリン、湯(湯のもの)、金^{カネ・カネ}、黴、紙、蚊帳、革、皮虫、紙子^{カンコ}、缶詰、狐^{キツ}、衣、伽羅、黄燐、金箔、葉、糞、雲、クレゾール、毛、煙^{ケムリ}、煙、獸、鉉^{ケナ}氣、麴、膏^{サカナ}葉、ゴミ、強飯、魚、酒^{サケ・サカ}、鮫、山水、塩、湿氣、シワラ(「皺+情態言^九」のもの)、シメ糟、麝香、シヤボン、熟柿、樹脂、小便、小用(行為ではあるが名詞「小便」と同義で使用)、塵芥、酢、鮭、鮭桶、煤、石油、石鹼、セメント、線香、大根、煙草、ダリヤ、血、チーズ、乳^チ、血生(血+生もの)、塵、津^ツ

のもの)漬物、土、土氣、銅、ドル、泥、ナフタリン、生^{一〇}(生もの)、鉛、涙、鯨、尿、大蒜、糠味噌、葱、鼠、熱(熱氣)、糊、舶来(舶来品)、バター(バター)、櫃、火繩、肥料、蒜、仏壇、古筆、紅、蛇、ペンキ、埃、抹香、松脂、魔羅、饅頭、水、水苔、味噌、虫、胸、メッキ、山羊、焼米、薬品、脂、湯ノ花、汚レ、燐、蠟、腋、腋臭、私^{ワシ}(特定の人物)

第二項 Cクサシ

次に、上接成分に、嗅覚刺激を發散させ得ない抽象的な概念(抽象名詞・形容詞語幹・形容動詞語幹^二)をとる場合、^一クサシは純粹な嗅覚表現と^二は言いがたく、(への不快な雰囲気^三がする)を表すと考える。これをCクサシと称する(面倒クサシなど)。このような^一クサシは、一見嗅覚表現らしからぬ振る舞いをするが、そもそも、においと雰囲気とは《發散》という共通項を有する「氣」である(E・ミンコフスキー一九八三)ため、こうした雰囲気に関わるCクサシも、嗅覚表現の一側面として捉えられる。前述したように、このCクサシはあくまで、接尾辞の本質的な意味としての雰囲気であり、語の転義として雰囲気を表す^一クサシの意味(キナクサシ(怪しい)など)は含まない。調査により得られた上接成分は次の通りである。なお、抽象名詞・形容動詞語幹には、動詞の語幹「ニチ^{二二}」「ネチ^{二三}」、

「ソソ」「チヨツポ」といった非独立要素の語素も含めた。

【形容詞語幹】

オカシ、遅、トロ、鈍^{ノロ}、古、マドロ (マドロイ語幹)

【抽象名詞・形容動詞語幹】

阿呆、アンダラ、威厳、イタズラ、陰気、慇懃、因縁、胡散、胡乱、演説、
横柄、愚力、窮屈、形式、ケチ、源平時代、高慢、古文、思案、芝居、渋、
自慢、邪魔、洒落^{シヤレ・シヤラ}、宗教、修身教科書、執念、殊勝、常識、辛気、神
秘、粹^{スイ}、世間、説教、禅、総会、葬式、ソソ(ソソク・ソソツカシイ)、
大層、旅、ダラ(ダラト)、チヨツポ(チヨボクサ)、哲学、道楽、鈍、
生(生半可)、ニチ(強請)、ネダリ(強請)、ネチ(強請)、馬鹿、半可、
秘密、貧乏、風雅、文学、分別、文明、ベラボウ、法、封建、真面目、間
拔ケ、見(見た目)、未練、名誉、面倒^{マド}、勿体、野暮、幼稚、読本、理
屈、吝、愷気、吝嗇、老実

第三項 Bクサシ

さて、このように上接成分を見ていった場合、具体名詞／抽象名詞いずれにも解釈できる名詞の存在に気づく。それは、身分・立場・場所(それ

ぞれ、「坊主」「男」「田舎」など)を表す名詞である。これらは、実際にその身分・立場にある人間やその場所の構成物といった、「具体的な形を備え嗅覚刺激を発散させ得るもの」と捉えられる一方、抽象度が増し一般化した「嗅覚刺激を発散させ得ない抽象的な概念」とも捉えられる。例えば、男クサシの場合、クサシは、対象が「具体としての「男」と同定できるだけの「男」を発散したと認識したことを表すとも、対象が「抽象としての「男」と同定できるだけの零囲気」を発散したと認識したことを表すとも考えられる。

しかし、において零囲気とが同質の「気」であるのはすでに述べた通りで、においても零囲気も発散させ得る対象において、どちらを発散しているかを問うても主観的な判断しか下せない。そこで、対象が「具体・抽象いずれの「男」としても同定できるだけの「男」を発散したと認識したことを、クサシが表すと見てはどうか。つまり、上接成分に「具体＋抽象名詞」をとると捉えて、クサシは「の不快なにおいて零囲気がする」を表すと考えるのである。これをBクサシと称する。繰り返しになるが、Bクサシの表す零囲気は、Bクサシという接尾辞が持つ本質的な意味であり、語の転義ではない^{一七〇}。

【具体十抽象名詞―身分・立場・場所】

アーメン（キリスト教徒）、空家、アメリカ、異国、異人、田舎、隠居、インテリ、インド、エッセイスト、奥州、落人、男、大人、親、親父、御僧、女、学者、神、唐、官僚、教員、教師、下々、賢人、孔子（孔子のようにできた人物）、子ドモ、子持ち、在郷、在所（田舎）、侍、敷（シキ鋤区）、爺々、支那、支那人、死人、十六（十六歳）、儒者、出家、女学生、植民地、所帯（所帯持ち）、素人、人物（一角の人物）、西洋、西洋人、世帯（世帯持ち）、仙人、内裏、高尾、他人、町人、寺、年寄、殿様、ドブ、泥溝、成金、日本人、女房、人間、盗人、野良、馬喰、化物、場末、畑、バテレン、万人、日陰者、人、人殺シ、鄙、日向、病院、病人、武士、フランス、不良、文士、法師、坊主、仏、魔物、モラリスト、役所、役人、耶蘇、耶蘇坊主、野蛮人、妖怪、養子、ヨーロッパ人、留学生、老人

以上のA・B・Cクサシが、クサシの基本的な意味である。これらの基本から外れる特殊なA'クサシ・C'クサシ・文末外接形式については、次節で詳述する。なお、Aクサシ・Bクサシ……という名称は、特定の成分を上接した場合の接尾辞の意味を指すのみならず、結果として産出された結合例を指すこともある。例えば、Aクサシであれば、動詞の連用形・物の

名前を表す具体名詞を上接するクサシの意味へく不快なおいがする

を指す場合も、動詞の連用形・物の名前を表す具体名詞との結合例（合成形容詞それ自体）を指す場合もあるということである。

次節以降では、それぞれの意味がいつどのような順序で発生し、どのような史的展開を見せるのかを明らかにする。

第四節 クサシの史的変遷

以下に示す表三・一から表五・七は、各時代において得られたクサシの結合例を、延べ語数の多い順に上から並べたものである。網掛けはその時代に初出の新語を表す。

第一項 Aクサシ

(一) 中古

表三・一 中古

Aクサシ	
上接成分	延べ
黴	2
蒜	2
皮虫	1
津	1
生	1

Aクサシのうち、具体名詞を上接するものはすでに中古に見える。すべてのクサシの中で最初に誕生したのがこのAクサシであった。その中でも、次に示す生グサシ・津クサシが最も早く確認される。

(1) 肉⁴ 奈万久佐志 (新撰字鏡 (八九八・九〇一頃))

『新撰字鏡』京都大学文学部国語学国文学研究室・一九五八

(2) 肉^習 魚肉爛也 臭也 豆久佐之 又阿佐礼太利 (同右) 「同右」

例(2)の津クサシとは、津にいる「魚肉」(この時代は魚を指す)の「爛」

「阿佐礼太利」(腐敗した) という不快なおいを表す語であったらしい。

例(1)の生グサシと併せて、(魚(肉)の不快なおいがする)さまを表す語からクサシが発しているのも興味深い。

なお、例(1)・(2)の『新撰字鏡』よりもやや年代を遡る用例として、訓点資料の生グサシがある^{一八}。

(3) 唯聞虫也 腥^{トクノカサ} (天理本金剛般若経集驗記平安初期点 (八五〇))

『仮名遣及仮名字体沿革史料』国定教科書共同販売所・一九〇九

中古の仮名散文にはそもそも、不快なおいそれ自体の描写が少ないのであるが、Aクサシは数例確認できる。

(4) 式部卿宮「今は御簾の内より流の御土器給はらばや。かのひるくさき

御肴こそいとたべまほしけれ」 (宇津保物語)

(5) さゝやかに押し巻き、あはせたる反故どもの、かびくさきを、袋に縫ひ入れたる、取りいでゝ、たてまつる。 (源氏物語・橋姫)

(6) 「若き人々」「いみじくさかし給へど、心ちこそまどへ。この御あそびものよ。いかなる人、蝶めづる姫君につかまつらむ」とて、兵衛といふ人、「いかでわれとかむかたなくいでしがなかはむしながら見るわざはせじ」と言へば、小だいふといふ人、笑ひて「うらやまし花や蝶やといふめれどかはむしくさき」^{一九}世をも見るかな」など言ひて笑へば、「からしや。眉はしも、かは蟲だちためり。さて齒ぐきは、皮のむけたるにやあらむ」とて、 (堤中納言物語・虫めづる姫君)

(二) 中世前期

表三・二 中世前期

Aクサシ	
上接成分	延べ
生	14
酒	3
尿	3
津	2
油	1
焦ガレ	1
寝	1
水	1
焼米	1

中世前期には、Aクサシが、物の名前を表す具体名詞に加えて、変化を表す動詞の連用形をも上接するようになる。

(7) 燧 コガス コカレクサシ (類聚名義抄 (中世前期書写))

『類聚名義抄』日本古典全集刊行会・一九三八

(8) 近江にかありといふなるかれひ山君は越えけり人とねぐさし

(金葉和歌集 (一一二四・一一二七) 恋下・五〇〇) 『新編国歌大観』

具体名詞を上接するAクサシも、前代までに見られなかったものが次々と現れる。説話の『沙石集』(一一八三)には、一資料中に尿クサシ・水クサシ・焼米クサシなど、様々なクサシが見られる。

(9) 或山寺二僧アリケリ。慳貪ニシテ、キビシク、マサナクシテ、事ニ、

表三・三 中世後期

Aクサシ	
上接成分	延べ
生	18
水	6
油	3
酒	3
シワラ	3
金(カナ・カネ)	2
垢	2
息	2
焦ガレ	2
焦ゲ	2
鯁エ	2
赤ガネ	1
漆	1
雲	1
麴	1
陳ネ	1
燧(フスボリ)	1
松脂	1

觸テ小法師ヲバ疑ヒ、戒メケルニ、ヤイ米ヲ桶ニ入テ、ヒトリ食テ、ヨクシタ、メテ、封ヲ付テ置タリケルガ、事ノ外ニ減ジテスクナク見ヘケレバ、例ノ小法師ヲ呼テ、「何ニワ法師ハ、此ヤイ米ヲバ盗タルゾ」ト云バ、「サル事候ワズ」ト答フ。「慥ニ盗タルヲバ、何ニ論ズルゾ」ト云ヘバ、「何事ノ證據ヲ以、カクハ被仰候ゾ」ト申ニ、「ヲレガヘヲヒリタルガ、ヤイ米臭時ニ、ソレコソ証拠ヨ」ト云ヘバ、小法師ガ云ク、「サレバ、ヘワ食タル物ノ香ノシ候カ」ト云ヘバ、「子細ナシ。サズカシ」ト云。「サテハ、御坊ノ一日比、ヘヲヒリ給テ候ガ、屎臭候シハ、屎バシナリテ候ケルカ」ト云ケル。坊主ツマリテ、ヲトモセザリケリ。

(沙石集・卷八・一〇)

(三) 中世後期

具体名詞・動詞の連用形ともに、さらに新語が産出される。

特に目立つのは、「焦げるにおい」に関する語の増加である。中世前期に既出の焦ガレクサシに加え、中世後期には焦ゲクサシ・^{フスボ}燻リクサシが登場する。近世以降もこうした（焦げる不快なおいがする）の語彙は増え続ける（後述）。

- (10) 炙脂帽子……アブラクサイコケクサキ帽子也（三関齋本碧岩抄・七）
- (11) 初逢恋 恋衣さもあながちに焼しめてふすほりくさき新枕かな

（玉吟抄）

ところで、中世後期に初出のシワラクサシについて、ここで補足しておきたい。前節では、「皺＋情態言ラ」のもの」と見ると注記をしたのであるが、『黒本本節用集』（中世後期）には次のような漢字表記の見られることに注目したい。

- (12) 死腹臭 シハラクサシ

（黒本本節用集）

『古本節用集六種研究並びに総合索引』風間書房・一九六八』

これに従えば、語構成はシ・ハラ・クサシとなり、『黒本本節用集』が漢字を当てるように、腐敗臭を指す語ということになる。

しかし、中世後期頃の言語の実態を反映しているとされる『日葡辞書』（一六〇三）には“Xiuaracusai.”とあり、また、語釈に「ひどく着古して長い間洗濯しない着物のような悪臭を放つ（こと）」、『邦訳日葡辞書』岩波書店・一九八〇』とあることから、その語構成をシワ・ラ・クサシと理解することが分かる。

実際の用例を見ると、「枕」や、「不浄キハマリナ」い「身」の描写に使用されており、積極的に「死腹臭」と見る必要はないように思われる。また、「シワラクサイ」「シワラクサキ」という表記から考えても、シワ・ラ・クサシ、すなわち、「皺＋情態言ラ」と解釈して良いのではないか。

- (13) 老―「枕」ハ、ワルイ、アカデテシワラクサイ枕ゾ（玉塵抄・一八）
- (14) 不法懈怠ニシテ不浄キハマリナク、シワラクサキ身ニテアリケルヲ、オガミヌルコト、真実真実、カタハライタキ風情ナリ

（蓮如御文章・正・二〇）

(四) 近世前期

前代に引き続き新語は増加する一方である。ただし、相対的に見た場合、動詞の連用形よりも具体名詞を上接する傾向にあるようである。

前述の「焦げるにおい」に関する語は、新たに煎リクサシ・紙子クサシ・煙硝クサシ・煙クサシなどが登場する。

(15) わかしさましの酒の間、煎息ヒシキをもかまはず、塩漬の楊梅巻鯛に南蛮かけて、枕本に重ねたる砂鉢呑するを見て

(元禄太平記・五・ながめことなる高雄のもみぢ)

(16) やい／＼岡平。火の廻り気を付よかんこくさいと出ければ。いや少しも苦しからぬこと。八幡愛宕方々のお洗米の包紙。只今火に上申たりと。間に合嘘も真赤な火箸なぶりてゐたりけり。(碁盤太平記)

(17) 人が着れば着ずには居られぬと遣りばなしのゑんしやうくさいに氣も付ずあんごり聞とれて (当世宗匠氣質・卷之三・第二)

(18) 香炉に火入の火を打こみ、灰をまかけず香盤をもしかず、うちくべたるまゝにてとむるゆへに、よき香かうもけふりくさくなれば、ついとり

／＼二度三度置かへて、香具をもしまふやしまはずの躰にて出るがち也。(色道大鏡・卷第三寛文式上)

類義語の多さで言えば、穢れとされるような「人間が体外に排出したものに」に関する語の増加も指摘できよう。前代までも、尿クサシ

(中古)や垢クサシ(中世後期)などが確認されたが、近世前期に至ると、小便クサシをはじめ、汗クサシ・糞クサシなどが散見されるようになる。

古今問わず、こうした穢れたものにおいてに敏感であったと言える。

(19) 扱嶋原は境地寂しき在所住まゐ、菜・大根の小便ヒビクくさきに打囲まれ、糞擔こゑたご子のかざ冬葱の追風に鼻を塞がねば堪忍ならず。

(好色万金丹・卷五第一)

表三・四 近世前期

Aクサシ	
上接成分	延べ
水	45
生	36
酒	13
油	9
熟柿	8
抹香	7
松脂	7
血	6
伽羅	4
紙子	4
青	3
礬	3
赤ガネ	2
息	2
黴	2
雲	2
シワラ	2
土	2
陳ネ	2
味噌	2
小便	1
汗	1
煎リ	1
漆	1
煙硝	1
金(カナ・カネ)	1
蚊帳	1
糞	1
煙	1
鮫	1
鮫桶	1
血生	1
泥	1
寝	1
櫃	1
燻(フスボリ)	1
虫	1
腋	1
腋臭	1

(20) 汗くさくなる曾我殿の鬨

虎御前の煩はたゞねつきにて

(犬子集・卷一・恋)

(21) 腐臭 クソクサイ

(倭語類解・飲食)

また、中世前期に初出の酒クサシと類義関係になる熟柿クサシも、近世に入り使用が認められるようになる。次に示すように、同じ書き手が酒クサシ・熟柿クサシともに使用することがあり、二語間に使い分け意識が存していたか否かは不明である。

(22) ヤ八右衛門此の中は久しい。昨日も今日も一昨日も。人遣ろくと思

うて何やかやと延引した。めつきりと寒いが親仁の疝気は婆様の蟲歯は。ア、いかう酒くさい過しやるなく。明日は早々人遣らう。

(冥途の飛脚)

(23) 彦介が足首を火燵の内よりしつかと取り。うんと締むれば「あいたゝたゝ。ヤレ足首がちぎるゝは」と目は顰むれど口減らず。此の火燵には狼が有るさうなど。蹴振るを引倒し蒲団押退けつと出で。じゆくしくさい彦介が。鼻の先に柿の渋い顔して立ちはだかる。

(山崎与次兵衛寿の門松)

ただし、狂言台本においては流派により二語の使用傾向が見出せる。ここでは、近世中後期成立の諸台本もまとめ、狂言台本における伝承の様相を述べる。

まず、大藏流では近世初期成立の虎明本(一六四二)に続き、近世中期成立の伊藤源之丞本(一七五一・一七七二)・虎寛本(一七九二)、近世後期成立の虎光本(一八一七)に熟柿クサシの使用が見られる。

(24) 主、太郎くわじやを、さるかたへ使にやつて御ざるが、おそひ、もはやまいらふ事じやが、最前酒に食べ酔ひて御ざる程に、なんといたひたぞ、参りみう、されはこそ是にふせつてゐる、やひ太郎くわじや、是はいかな事、じゆくしくさうて、あたりへもよられぬよ

(虎明本・抜殻)

(25) シテ、是はいかな事。何者やら道のまん中に寝て居る。やイく。側へ寄、つくくくと見て、はあ、酒に酔て居る。じゆくしくそうてならね。中りへ寄らるゝ事、でハない。

(伊藤源之丞本・茶壺)

(26) シテ……是に何者やらねてゐる。さらば起いてやらう。ヤイく、こゝは海道じや。起て行。おきて行いでな。ア、熟し臭い。酒に酔ふたと

見へた。

(虎寛本・茶壺)

い、おきよく

(27) シテ……イヤ是に何者やらよい物を背をふて寝て居舛ル。ヤイく愛

ハ街道ぢや。起て行ケ。ム、殊外ぢゆく酒くさひ。(虎光本・茶壺)

(シテむくと云)

扱もく酒くさい事かな、

(名女川本・抜殻)

次に、驚流では、近世中期成立の保教本(二七二六・一七二四)・名女川本(二七六一)、近世後期末成立の賢通本(一八五五)に酒クサシの使用が見られる。

(30) シテ……さればこそあれに何者やら、結構な箱を背負うて、余念も無

う寝てゐる。これにちと当つて見ようと存ずる。なうく、なうそこ

な人。この広い海道に寝てゐずとも、早う起きて行かしませいのう。

や。なうくく。やれ、ここな者。さてもく酒臭い事かな。きや

つは酒の酔と見えた。

(賢通本・茶壺)

(28) アトく最前太郎冠者ヲ吏ニ手枕シテ寝ヤツテ御座ルガ殊ノ外酔テ参ツ

タ程ニ定テ先へハ参ルマイト存ル鼠栗くト出テ様子ヲ見ウト存ル

(乍云出テ見付ル)

サレハコソ爰ニ酔テフセツテイルヤイ太郎冠者爰ハ

(ウゴカス)

道中シヤハ起ヨヤイ扱もく酒臭事カナ

(保教本・抜殻)

(29) アトく最前、太郎冠者めを使にやつて御座るが、殊外たべよふて参た程

に、定て先急は参まひと存る、にくいやつで、たべさせねは遣はれぬ

(と云て、行かゝりて)

さればこそ是にふせつておる、やい、太郎冠者、爰は海道じやは、や

なお、和泉流では台本により異なり、近世初期成立の天理本(一六四五

前後)では酒クサシ、和泉家古本(一六五三・一六九三)では二語両用、

近世後期成立の雲形本(一八一八・一八三〇)では熟柿クサシの使用が見

られる。

(31) シテ……寝ている者を、見つけて、是は、よさうな者に出会うたと

云、前後も知らず、寝入つたと見へたが、酒の酔ひかと、思ふと云

て、かいでみて、扱々さかくさひ、何も、急知らぬ体じやと云て、

背負うた物を、いろいろてみる

(天理本・茶壺)

(32) 茶／それへ水を入たらは・そつと酒くさい水であらうまでよト云

(和泉家古本・木六駄)

(33) シテ…：けうかつた者がねているト云テ・立ナカラオコスル也―や

い／＼・爰は道しや・ねている所てはなひおきてゆけト云テ・さて
 〳〵目をあかぬ事かなト云テ・カホ、見テ・鼻へ手ヲアテ、・さて
 も〳〵じゆくしくさい事かな・いかふ酒をくらうたと見えた

(和泉家古本・茶壺)

(34) シテ…：是はいかな事、きようがつた者が有。此海道に寝てゐる。

おこしてやらう。やい／＼、爰は海道ぢや、ねてゐる所でハない。
 おきてゆけ。やい／＼、爰な者。(ト云テ、鼻ニ、右ノ手ヲアテ、)
 ムウ熟柿くさやの〳〵。正体もなう酒にゑふて寝居る。

(雲形本・茶壺)

しかし、こうした流派による伝承の相違が、単なる好みからくるものなのか、何かしらの使い分け意識からくるものなのかは十分に分からないままである。

(五) 近世中後期

近世中後期にも新語が多く誕生する。ただし、前述のように、動詞の連用形を上接する場合の結合力は具体名詞ほど高いと言えない。

前代までに度々触れてきたように、〳〵クサシ語彙における「焦げるにおい」に関する語の多さは注目に値する。近世中後期に至ると、新たに焼ケクサシ・衣クサシなどが登場する。近代以降も、煙クサシや燻クサシなどの新語は見られるものの、(焦げる不快なおいがする)さまを表す〳〵クサシは近世中後期頃にほぼ出揃ったと見て良からう。

(35) 燻臭 ヤケクサイニヨリ 見ヨ (交隣須知・二・味臭)

(36) おちせ「モシでへぶ、きなつくさいよ。さんや、そこじやあねへか。」

表三・五 近世中後期

Aクサシ		Aクサシ	
上接成分	延べ	上接成分	延べ
水	45	泥	2
生	43	火縄	2
酒	21	汗	1
寝	9	洗イ粉	1
衣(キナ)	8	甘	1
松脂	8	香(カ)	1
乳(チ(チ))	7	獣	1
抹香	7	古筆	1
油	5	鮫	1
伽羅	5	山水	1
紙子	5	小用	1
熟柿	5	饅エ	1
味噌	5	血	1
青	4	血生	1
黴	4	土	1
強飯	4	糠味噌	1
熱(イキ)レ	3	陳ネ	1
膏葉	3	仏壇	1
小便	3	魔羅	1
礮	2	饅頭	1
漆	2	胸	1
煙硝	2	焼ケ	1
糞	2	脂(ヤニ)	1
焦ゲ	2	湯ノ花	1
シワラ	2	私(ワシ)	1

ゑん「ほんに、芝居のゆきが、らうそくへ降つたといふにほいだ。それおしやう、ぬしのはをりだそふだ。」
(通言総籙)

また、次の『物類称呼』(一七七五)のよく知られた記述からも、全国各地で「焦げるにおい」を表すくサシの需要が存していたことが窺える。

- (37) 焦臭を、京にて○かんこくさしと云(紙臭なり) 東武にて○きなくさいと云(木にてはないにほひ、と云こゝろ) 尾張遠江邊にて○かこくさいと云(京ををなし) 近江にて○やぐさいと云。和泉にて○かこびくさいといふ。奥州にて○ひなくさひと云。津軽にて○ふなくさいと云。薩摩にて○かなくさいと云。土佐にて○けふらぐさいと云

(物類称呼・卷五・言語)

『諸国方言物類称呼本文・釈文・索引』

京都大学文学部国語学国文学研究室・一九七三

ここで、現代語における「焦げる不快なおいがする」さまを表す語の

分布を明らかにした国立国語研究所『日本語地図』を参考にしながら、

ここまで見てきた「焦げるにおい」に関するくサシ数語について改めて述べる。

まず、『日本語地図』第三四図では、「布切れなどが火の中にはいると妙なおいがします。どんなにおいがすると言いますか。」という質問文によつて得られた回答が示されている。

これによると、近畿を中心とした地域にカンコ類が分布し、それを挟むごとく東西にキナ類が広く分布していることから、カンコ類の発生が新しいものと推測される(『日本語地図』解説)。カンコ類の地理的分布は前掲の『物類称呼』と一致するが、その発生順(キナ類→カンコ類)については、現在見つかっている二語の初出例による証明が難しい。先に挙げたように、衣クサシの初出は洒落本の『通言総籙』(一七八七)である三のに対し、紙子クサシのそれは俳諧の『太郎五百韻』(一六七九)であり、後者の方が古いのである。

- (38) 夜なか時分にたたく柴の戸 惟中

かんこくさい句はん花はさもあらばあれ 同 (太郎五百韻)

ただし、衣クサシが比喩的に「怪しい」を表す用例であれば、談義本の

『当世下手談義』(二七五二)まで遡ることができる。本来の意味(焦げる不快なおいがする)を表す衣クサシは用例こそ見えないが、比喩的転義の発生以前にすでに本来の意味で使用されていた状況が推測される。調査を広げ用例が集まれば、言語地理学の成果を裏付けることも可能かと思われる。

(39) 「道千、手相を見て」……厄害筋とて、所の名主大屋衆も、もてあつかはるゝ、町内の草臥者くたびれもの。なんと人が、いやがりましやうが。「いやほんによふあたるは。……慮外なこつたが、おらは、傷寒太郎兵衛が子分、時疫源七といつては、ちときなくさい男だから、大屋でも名主でも、鬼ではあるまいし、鬼神ではあるまいし、つがもないこと。こわい者は、日本の内に、天狗様ばかり」

(当世下手談義・卷三・足屋の道千、売卜に妙を得し事)

次に、『日本語地図』第三六図で示された、「飯をたいて焦げついたときどんなにおいがする」といふ質問文に対する回答を見ても、

この図からは、中央日本にコゲゝ類が広く分布していること、九州・奄

美・中国地方山間部・山陰にコガレゝ類が分布していることが分かり、西日本においてはコガレゝ類がより古く発生したものと解釈できる(『日本語地図』解説)。中央語の歴史から見ても、焦ガレクサシの方が焦ゲクサシよりも早く誕生したことは確かである(前掲例(7)・(10))。

なお、第三四・三六図の分布は、対象を限定させた質問文から導かれている点に留意しなければならない。「言語地図を利用するときには、そこに現れた各語の分布領域はあくまでもその地図の項目、質問の意味条件における分布領域であることを認識し、周囲の意味にも注意を払う必要がある」(小林 隆一九八五・二八五頁)。文献調査によって、対象の別による語の使い分け意識について明らかになることもある。ただし、現段階では用例が少なく、各語の表現価値を記述することは難しいため、ここでは、クサシの新語産出における「焦げるにおい」語彙の多彩さを指摘するに留める。

(六) 近代(明治)

Aクサシは明治に至っても結合力が衰えない。特に具体名詞を上接するAクサシの結合力は非常に高く、近世末から明治初期にかけて輸入された具体名詞「バタ」や「ペンキ」などの英語・オランダ語をも上接するよう

表三・六 近代(明治)

Aクサシ		Aクサシ	
上接成分	延べ	上接成分	延べ
生	65	熱(イキ)レ	1
水	27	イルカ	1
土	13	白粉	1
青	10	蚊	1
黴	10	金(カナ・カネ)	1
酒	10	草	1
汗	9	毛	1
血生	9	煙	1
油	5	煙(ケナ)	1
衣(キナ)	4	焦ガレ	1
菓	4	敷(シキ)	1
乳(チ(子))	4	湿リ	1
垢	3	麝香	1
礫	3	シャボン	1
瀉	3	線香	1
焦ゲ	3	土気	1
魚(サカナ)	3	涙	1
湿気	3	葱	1
熱	3	鼠	1
塩	2	バタ	1
小便	2	陳ネ	1
銅	2	煙(フスポ)リ	1
泥	2	紅(ベニ)	1
汚レ	2	ペンキ	1
味噌	1	埃	1
芥	1	蒸レ	1
甘	1	メッキ	1
硫黄	1	脂(ヤニ)	1

になり、上接成分に語種を問わない、結合力の高さが窺える。

なお、『日本国語大辞典(第二版)』によると、名詞それ自体の初出は、「バタ」(「バター」)が『安愚楽鍋』(一八七一・一八七二)、「ペンキ」が『東京新繁昌記』(一八七四・一八七六)である。

(40) 尤も日本だつて孤立して生存してゐる国柄ではない。矢つ張り西洋と

御付合をして大分ばた臭くなりつゝある際だから、西洋の現代文学を研究して、其歴史的の由来を窺て、ははあ西洋人は、今こんな立場で書いてるな位は心得て置かなくつちやなりません。

(創作家の態度(一九〇八) 夏目漱石)「近代デジタルライブラリー」

(41) 夏季の盛には、三百人からの人数が部落をなして、矢張天幕張の礼拝

堂が出来、真青い樹の間に白い天幕がちら／＼覗いて、オルガンや讚美の音が清涼な山氣にのつて来るなどは、頗る面白い。信心もペンキ臭い会堂よりは却つて旧約の昔忍ばるゝ此様な天幕の殿に起るものだ。(思出の記(一九〇〇) 徳富蘆花)「近代デジタルライブラリー」

一方、動詞の連用形を上接するAクサシは、近世以来そうであつたように、具体名詞を上接するものほどその結合力は高くない。近代(明治)に新たに上接する動詞の連用形には、「湿リ」や「蒸レ」が見られた。

(42) 百姓ほどみぢめなものは無い、取分け奥州の小百姓は

それが酷い、……僕はその湿気臭い、鈍い、そしてみじめな生活を見るたびに、毎も、醜いものを憎むと云ふ、ある不快と嫌悪とを心に覚える。

(南小泉村(一九〇七) 真山青果)

(43) 四方の矢狭間から、細く光線が漏れるばかりなので、

空気は蒸れ臭く

「近代デジタルライブラリー」

表三・七 近代(大正・昭和)

Aクサシ		Aクサシ	
上接成分	延べ	上接成分	延べ
生	67	金(カナ・カネ)	1
血生	48	紙	1
酒	44	革	1
油	18	紙子	1
水	18	缶詰	1
青	17	狐	1
黴	14	黄燐	1
土	12	金箔	1
汗	11	煙	1
泥	11	クレゾール	1
埃	10	獣	1
衣(キナ)	9	鉦気	1
乳(チ(チ))	9	ゴミ	1
小便	8	シメ糟	1
焦ゲ	5	湿り	1
礫	4	シャボン	1
饅頭粉	4	塵芥	1
馬	4	酢	1
ガンリン	4	石油	1
魚(サカナ)	4	セメント	1
塩	4	大根	1
塵	4	煙草	1
燻(イブシ)	3	ダリヤ	1
ガス	3	血	1
粟	3	チーズ	1
煤	3	漬物	1
熱	3	ナフタリン	1
バタ	3	鉛	1
垢	2	鯀	1
煙硝	2	大蒜	1
白粉	2	糊	1
熟柿	2	舶来	1
樹脂	2	肥料	1
石鹼	2	燻(フスポ)リ	1
糠味噌	2	蛇	1
寝	2	抹香	1
脂(ヤニ)	2	松脂	1
油土	1	水苔	1
硫黄	1	蒸レ	1
魚(ウオ)	1	山羊	1
膿	1	薬品	1
才前	1	燐	1
蚕	1	蠟	1
渦	1		

(良人の自白(一九〇四)木下尚江)『日本国語大辞典(第二版)』用例」

なお、この頃の水クサシはすでに転義のみを表す語となっている(本論第一部第五章にて詳述)。

(44) 角「汝水臭いぢやないか、金貸して呉れ……我が物乃公が物、乃公が物汝が物だ。貸して呉れなんて他人へこの事言は無いで、持つて行つて早く阿母様に薬服ませて遣るが宜い……」

(自称情夫(二八九七)四代目橋家円蔵)

『口演速記明治大正落語集成』講談社・一九八〇・八一」

(七) 近代(大正・昭和)

大正・昭和においてもAクサシは結合力を発揮し、新語を次々と産出する。明治同様、具体名詞それ自体が新しいものも上接することができるのである。中でも、「ガンリン」や「ナフタリン」は、『日本国語大辞典(第二版)』によると、それぞれ、『舶来語便覧』(一九一一)、『蔵の中』(一九一八・一九一九)が初出の英語・ドイツ語である。名詞の新旧・語種の偏りを問わず、結合力は非常に高い。

(45) 河岸に急造した棧敷の一隅に席を求め、まづい弁当を食ひ、気の抜け

たサイダーを呑み、さうしてガソリン臭い川風に吹かれながら、日の暮れるのを待った。

(柿の種 (一九三三) 寺田寅彦) 『柿の種』 小山書店・一九三三

(46) 十月、初秋の自然は風景写生によろし、されど二科会大阪開会とある。

相当出勤の義務あり。トランクより冬帽、セーター、オーバー等を取り出す。ナフタリン臭し。陽気定まり、身体やや元気出ず。

(めでたき風景 (一九三〇) 小出楯重)

『めでたき風景』 創元社・一九三〇

また、繰り返しになるが、結合力の高いAクサシといえど、動詞の連用形を上接する力は確実に衰えている。大正・昭和に至ってから確認された動詞の連用形は「燻シ」のみである。なお、表三・七には「燻シ」を上接するAクサシが三例とあるが、これは、「燻リ」「燻」それぞれ一例ずつを含めた三例である。語形の不安定さは、描写すべき事態を眼前にして臨時的に次々と語を作り出せる、Aクサシの結合力の高さを物語っている。

(47) ゆるんだ店内の空気に、床にまかれています濡れオガ屑の鼻をさすよう

な匂いと、燻製魚類の燻しくさい匂いとがつよくまじった。

(道標・第一部 (一九四七) 宮本百合子)

「展望」 筑摩書房・一九四七年一〇月・一九四八年八月号

(48) 焼跡に独特な、あの、湿っぽいやうな燻り臭い匂いひは、けれども、秋

晴の午後の微風に駕って、遠くまで流れ漂って来てゐた。

(今年竹 (一九一九) 里見弴) 『日本国語大辞典 (第二版)』 用例

(49) 秋桜などいぶくさくって迎も喫めなかつた

(明治大正見聞史 (一九二六) 生方敏郎)

『日本国語大辞典 (第二版)』 用例

第二項 Bクサシ

(一) 中古・中世

表四・一 中古

Bクサシ	
上接成分	延べ
子持ち	1

表四・二 中世前期

Bクサシ	
上接成分	延べ
法師	1

表四・三 中世後期

Bクサシ	
上接成分	延べ
仏	3
御僧	1
仙人	1

Bクサシの最初の結合例は、『宇津保物語』(九七〇・九九九頃) に見え

る立場を表す「子持子」を上接する例である。九世紀中頃にはすでに誕生していたAクサシ（前述）におよそ一〇〇年遅れるかたちで、Bクサシは誕生した。

(50) 中納言「こもちくさからぬ襖もてこ」とて香の唐櫃より染み返りたる

もて参りたれば、二所うち着給ひて
(宇津保物語)

さらに、中世前期には、身分を表す「法師」を上接するようになる。

(51) 文殊を憑み奉つて仏道の入門を得んことを思ひて、高雄を出で、衆中

を辞して、紀州に下向す。其の時詠じ給ひける。「山寺は法師くさく
てゐたからず心清くばくそふく」「雪隠」にても

(梅尾明恵上人伝記・上)

中世後期も同様に、Bクサシが上接するのは身分・立場を表す名詞である。特に、前掲例(51)の「法師」に続き、「仏」や「御僧」といった、仏門に関連ある名詞を積極的に上接する点が注目される。

(52) 我々カ性ニマカセテ仏クサイ事ヲハラツトリヲイテ可遊ソト云

ソ
(四河入海・一六ノ三)

(53) 酸餡トハ饅頭ヤナントノ中ノアムノスヘクサキヲ云也。僧ノ詩ハ饅頭

ノ中ノスヘタル餡ノヤウニテ無味ニテ御僧クサウテワルイ。

(四河入海・五ノ一)

(54) 杏園ニ鶯啼キ桃源ニ犬吠ルト仙人クサウ云イ成テ、仙人ノ居所ゴザメ

レ
(絶句鈔・六)

Bクサシの誕生当初は上接成分の異なり語数が少なく、Aクサシに比して結合力は高くなかったようである。

(二) 近世前期

表四・四 近世前期

Bクサシ	
上接成分	延べ
人	10
孔子	6
仏	6
下々	2
子持子	2
坊主	2
男	1
神	1
出家	1
日向	1
武士	1

近世前期に至ると、前代までに見られた身分・立場を表す名詞に加え、新たに、場所を表す名詞「日向」を上接するようになる。

冥途の風に誘われ、只今浄土に、赴き候と云て、一足二足行

(鬼立つて、人くさいと云て) (天理本・朝比奈)

(55) 男くさき羽織を星の手向哉 杏雨 (芭蕉句集・曠野)

(59) シテ▲……詞 是は朝比奈の三郎何かし。思はずも無常の風にさそはれ。

めいどへをもむく。そろりくと参らふ

(56) をかし、男、甲斐の國へすゞるに行至りにけり。そこなる女、江戸の

ヲニ▲はあ人くさい。罪人がきたそふな。さればこそ罪人がきた。

人は珍しくや思ひけん、せちに思へる心なんありける。さてかの女、

(続狂言記・朝比奈)

「ながくと連れて來ざらば妾にもなるべかりけり此月ばかり」歌さ

へぞひなたくさかりける。 (仁勢物語・一四)

ここで注意すべきは、閻魔王や鬼は人間を捕って喰おうとするのである

なお、近世前期に初出で、かつ、この頃最も延べ語数の多い人クサシは、

から、人間のおいが不快なのではなく、むしろ好ましい点である。よつて、語の有する評価性がプラスであれば、A'クサシ(後述)に類すること

全一〇例中九例が狂言台本の用例である。狂言では、流派の別なく、閻魔王や鬼が人間の存在を察知した際の常套表現としてこの人クサシを使用する¹¹⁰。

になる。しかし、(人間の快いにおいがする)さまを表すと解釈できる人クサシは、あくまでも狂言台本に特徴的なこの語の用法であり、通常はやはり(人間の不快なおいがする)さまを表すと考えた方がよい。

(57) 朝比奈はあさいなのなにがしにて候、無常の風にさそはれ、たゞい

(三) 近世中後期

ま冥土へ趣く、いそがばやとぞんずる閻魔王あら人くさやな

近世中後期も引き続き、Bクサシは身分・立場・場所を表す名詞すべて

(虎明本・朝比奈)

を上接する。中には、次の用例のように、場所を表す名詞「高尾」が(高

(58) ナノリは、朝比奈の三郎、何某にて候、寿命の事も、定まりけるか、

尾山を山号とする薬王院有喜寺の僧侶)という、身分そのものを指すこと

表四・五 近世中後期

Bクサシ	
上接成分	延べ
人	40
人物	8
日向	4
坊主	3
武士	2
仏	1
異国	1
落人	1
学者	1
下々	1
賢人	1
在所	1
侍	1
儒者	1
高尾	1
町人	1
寺	1
年寄	1
内裏	1
化物	1
畑	1
鄙	1
魔物	1

もある。

(60) 此所まで来る道にて高尾くさい者を見ず。縦高尾に逢たりとも生物を殺す事某は大不得手夫故汝を召連たり。
(伽羅先代萩)

同じく場所を表す名詞である「在所」について触れておく。在所クサシの「在所」は〈田舎〉を表しており、近世(明治)に初出の田舎クサシと類義語ということになる。現代語において一般的と思われる田舎クサシの先に、在所クサシという類義語が存在したことが分かった。

(61) あなた方のお姫様。女房にせふとは勿躰ない。今助った其命。又ひよんな事仕出すのか。ヲ、構ひおるな。おりやもふ今日から吃度した武士じゃ在所嗅ひ女房はいやじゃ。申どふぞ私に。お姫様をとひた願ひ。

(鎌倉三代記)

また、近世前期の人クサシがほぼ狂言台本の用例であることについてはすでに触れたが、近世中後期においても同様であることに注意する必要がある。すなわち、人クサシ全四〇例中三九例は狂言台本の用例である。

(62) さい人▲……某ふと無常の風に誘はれ、唯今冥土へ赴く。そりりと参ふ
シテ▲あら、いかふ人くさいく。されは罪人が来た。

(狂言記拾遺・八尾地藏)

(四) 近代(明治)

この頃のAクサシがそうであったように、Bクサシも、近世末から明治初期にかけて誕生した比較的新しい名詞を上接する。例えば、「アーメン」や「ドル」、「支那人」などである。『日本国語大辞典(第二版)』によると、これらの初出は、「アーメン」が『牛肉と馬鈴薯』(一九〇一)^{二四}、「ドル」が『幕末御触書集成・三・安政四年九月七日』(一八五七)、「支那人」が『異人恐怖伝』(一八五〇)である。

表四・六 近代(明治)

Bクサシ	
上接成分	延べ
田舎	6
養子	5
素人	3
西洋	3
坊主	3
仏	3
男	2
女	2
人	2
病人	2
アーメン	1
隠居	1
インド	1
奥州	1
親	1
親父	1
唐	1
教員	1
子ドモ	1
敷(シキ)	1
爺々	1
支那人	1
所帯	1
死人	1
他人	1
ドル	1
人間	1
野良	1
野蛮人	1

(63) 一番繁く出入して当人儘に智君登第の栄を得る意で己惚れてゐるの

が、大学の学士で某省の高等官とかを勤める華尾高楠、……耶蘇教の

坊さんだとかいふアーメン臭い神野霜兵衛、京都の公卿伯爵の公達鍋

小路行平——斯ういふ人達だよ。

(社会百面相・犬物語(一九〇二)内田魯庵)

「近代デジタルライブラリー」

(64) 神戸なる其商館の立者とは兼ねて窃かに聞き込み居たれど、斯くまで

に弗臭き方とは思はざりし。弗臭しとは黄金の力何事をも為し得るも

のぞと堅く信じ、雅たる心は少も無くて、学者、宗教家、文学者、政

治家の類を一笑し倒さんと意気込む人の意気をいふ。弗の文字は又た

亜米利加帰りの紳士といふ意をも含めり。

(おとづれ(二八九七)国木田独歩)「近代デジタルライブラリー」

(65) 旅から自分が帰つて来たのか、それとも自分が旅に来たのか、何方と

もつかないような心地で歩いた。あだかも支那からやつて来て、ポツンと東京の町を歩いている観光の客のやうに。斯うは言ふものゝ、山本さん自身も、何処か斯う支那人臭いとところを帯つて帰つて来た。大陸風な、ゆつたりとした、大股に運んで行くやうな歩き方からして……

(船(一九一一)島崎藤村)

「近代デジタルライブラリー」

これらの名詞は、「アーメン」がヘブライ語であったり、「ドル」が英語

であったりと、Bクサシの上接成分における語種の多様さを示すものでも

ある。また、同時に、異国の人間・文化を表す名詞でもある。こうした名

詞は、他にも「西洋」や「インド」がある。

(66) 「……一月に一度ぐらゐは、種々入用のものを、塩やら醬油やら、小

さなものは洋燈の心まで、一車づゝ調べさつしやります。横浜は西洋

臭し、三崎は品が落着かず、界限は間に合わせの俄仕入れ、しけもの

が多うござりますので、どうしても目量のある、ぶゝしりしたお堅い

ものは、昔からの藤沢に限りますので、おねだんも安し、徳用向きゆ

え、御大家の買物はまた別で、」

(草迷宮 (一九〇八) 泉鏡花) 「近代デジタルライブラリー」

(67) 活眼を開いて人生の活相を観得なかった私が、例の古手の旧式の思想

に捕はれて、斯う思つたのは仕方がないが、夫にしても、同じ思想に捕はれるにしても、もう少し捕へられ方が有りさうなものだった。物心

一如と其様な印度臭い思想に捕はれるではないが、所謂物質的文明は今世紀の人を支配する精神の発動だと、何故思れなかつたらう？

(平凡 (一九〇七) 二葉亭四迷) 「近代デジタルライブラリー」

ここで、女クサイが明治に至り初めて見られることについても触れておきたい。男クサイはすでに見たように、近世前期(一六八九)には使用され始めていた(前掲例(55))。男クサシという結合例があれば、同時に女クサシという結合例も誕生して不思議ではないが、後者は前者に二〇〇年ほど遅れてようやく用例が見られた。

(68) 我今まで愚痴といふことは知らざりしに、子の出来てより心弱くなり

女くさく物案じするやうなりしか

(いさなとり (一八九一・一八九二) 幸田露伴)

『日本国語大辞典(第二版)』用例」

(五) 近代(大正・昭和)

大正・昭和においてもBクサシの結合力は衰えることなく、新語は非常に多く見られる。『日本国語大辞典(第二版)』によると、「インテリ」は『真理の春』(一九三〇)、「エッセイスト」や「モラリスト」は『外来語辞典』(一九一四)がそれぞれ初出の英語である。Aクサシ同様、名詞の新旧や語種を問わず積極的に上接でき、結合力が非常に高い。

(69) 三日ばかり続けてP市の病院に通い、その伝染病舎の傍の泥溝どぶの水を掬すくって飲んだものだそうだ。けれどもちよつと下痢をしただけで失敗さ、とそのことを後で青井が頬あからめて話すのを聞き、小早川は、そのインテリ臭い遊戯をこのうえなく不愉快に感じたが、しかし、それほどまでに思いつめた青井の心が、少からず彼の胸を打つたのも事実であった。

(葉 (一九三四) 太宰治)

『作家用語索引 太宰治』教育社・一九八九

表四・七 近代(大正・昭和)

Bクサシ		Bクサシ	
上接成分	延べ	上接成分	延べ
田舎	19	支那人	1
西洋	12	十六	1
素人	11	女学生	1
女	8	植民地	1
人間	8	西洋人	1
日向	7	殿様	1
人	6	泥溝	1
年寄	5	成金	1
老人	5	女房	1
異人	4	盗人	1
インテリ	4	馬喰	1
男	4	場末	1
支那	4	バテレン	1
病人	4	万人	1
坊主	4	日陰者	1
子ドモ	3	人殺シ	1
大人	2	病院	1
教師	2	フランス	1
在郷	2	不良	1
世帯	2	文士	1
ドブ	2	法師	1
日本人	2	仏	1
役所	2	モラリスト	1
役人	2	耶蘇	1
空家	1	耶蘇坊主	1
アメリカ	1	妖怪	1
エッセイスト	1	ヨーロッパ人	1
官僚	1	留学生	1
爺々	1		

(70) だが一つの言葉を広く深い生きた意味に使はうとするのに、文学史の

先生のやうに昔からの腐れ縁に執着することは無論馬鹿げたことだ。

今日の「モラル」といふ言葉は慥かにもつと自由に新鮮なイメージを伴つて使はれてゐるだらう。処がそれにも拘らず何となくそれが又

「モラリスト」臭く「エッセイスト」臭いのだ。

(思想と風俗・第一部 風俗(一九三六) 戸坂潤)

『思想と風俗』三笠書房・一九三六

また、近代(明治)から見られたような、異国の人間・文化を表す名詞との結合例も一層増加する。近代(大正・昭和)に新たに見られるのは、

「支那」や「アメリカ」、「西洋人」、「バテレン」、「フランス」、「耶蘇(坊主)」、「ヨーロッパ人」などである。こうした語との結合例の豊富さから、当時の異文化への敏感さが窺える。

(71) 『どうも、大隈と副島は、耶蘇くさい』彼等が、耶蘇教の説明をきいてゐる頃は、此うした非難さへもつけた。

(明治初年外交物語(一九二五) 豹子頭)

「太陽コーパス」

(72) 折々奴等の吸う煙草のあかりで、奴等の顔が見える。どうもヨオロツ

パ人くさくない面つきの奴が多い。或はアフリカあたりの植民地の蛮民か、それとも植民地の兵隊との相の子か、と思はれるやうな奴等だ。

(日本脱出記(一九二三) 大杉栄) 『近代デジタルライブラリー』

第三項 Cクサシ

(一) 中世

表五・一 中世前期

Cクサシ	
上接成分	延べ
古	1

表五・二 中世後期

Cクサシ	
上接成分	延べ
法	1

Cクサシの最初の結合例は、『今昔物語集』（一一二〇頃か）の「古」を上接する例である。Aクサシは九世紀中頃に、Bクサシは一〇世紀末に誕生し（前述）、それらに遅れるかたちで、Cクサシはまず形容詞語幹を上接するようになる。そして、中世後期には、抽象名詞・形容動詞語幹をも上接するようになる。

(73) 大納言ノ北ノ方ハ、大臣ノ居給ヘル喬ノ簾ヨリ近クテ見ルニ、大臣ノ

御形チ・音気ハヒ・薫ノ香ヨリ始テ、世ニ不似ズ微妙キヲ見ルニ、我

ガ身ノ宿世心疎ク思エ、「何ナル人、此ル人ニ副テ有ラム。我レハ年

老テ舊^レ鼻^レキ人ニ副タルガ事ニ触テ六借ク」思ユルニ、弥ヨ此ノ大臣ヲ

見奉ルニ、心ノ置所无ク侘シク思ユ。（今昔物語集・巻第二二第八）

(74) 白謂、心性ヲ説タハ、マダ法クサイホドニ、抑下ニ見タガ面白也。

（五家正宗賛抄・三）

中世の段階において、上接成分には形容詞語幹、抽象名詞・形容動詞語幹いずれも確認されるものの、A・Bクサシに比して異なり語数・延べ語数ともに少ないことが分かる。中世以前におけるCクサシの結合力はあまり高くないようである。

（二）近世前期

表五・三 近世前期

Cクサシ	
上接成分	延べ
洒落	10
自慢	6
理屈	4
横柄	2
ネダリ	2
分別	2
阿呆	1
威厳	1
古文	1
神秘	1
鈍	1
生	1
ネチ	1
馬鹿	1
古	1
名誉	1

前代までのCクサシはA・Bクサシほどの結合力を持たなかったのであるが、近世前期に入ると新語を次々と産出するようになる。ただし、形容詞語幹を上接するCクサシは古クサシただ一語であり、結合力が発揮されるのは主に抽象名詞・形容動詞語幹であった。

(75) 此比は指切の心中のといふ事は木抓こつかで集める程あれば、絵草紙屋もふふるくさいとて板行せず。
(好色万金丹・卷三第一)

抽象名詞・形容動詞語幹のうち、最も延べ語数の多いのは「洒落シヤレシヤラ」である。

(76) 「異な事に片持顔、恋は心々の発明。海山思へばとて先の人が厭がらば詮のない事。あまり世話やかるゝな」と、まん勝ちに云ふもおかし。「しやらくさいおかしやれ。惣じて恋は人目の閑洩らさぬが楽しみなれば。人中でもや／＼云ふほどが費つひ。のふそうじやござんせぬか」といへば。
(新色五巻書・卷三第二)

洒落クサシについては、「堺の俳諧師藤井徳庵(別号社楽齋)の奇行に由来する流行語。」を語源とする説が広く知られていたようである二五。また、「理屈」や「分別」、「神秘」など、抽象的な概念を表す語には必然的に多量になる、漢語との結合例も多い二六。

(77) お国からは弟の敵じやとやら申て、りくつくさい侍がむね打ちを喰は

する
(心中万年草・中)

(78) 前後十八番の句合、やつがれ馬頭に成て、物定の博士にさゝれ侍る。十面顔に分別ぶんべつくさくひらきたる様、我ながらかたはらいたけれど、

(79) 神化シシクハ 一妙シンベウ 一秘臭ヒシクサシ
(芭蕉文集・俳文・一・拾八番句合跋)
(書言字考節用集)

さらに、動詞の語幹「ネチ」のような非独立要素との結合例も一例ながら見られるようになる。

(80) 親方がねちくさふ云ふなら、おれに会はしや、其方夫婦の落度にやせまい
(傾城歌三味線・卷之三・第二)

抽象名詞・形容動詞語幹を上接するCクサシのうち、談義本の『艶道通鑑』(一七一五)の用例が興味深いのでここで挙げておく。

(81) 半粋やからの族の、下手気の抜けぬ未熟柿が、己れ熟せりと甘味をつけれど、根からの美味うまみならねば、何所に否なる味の出るは腐くさみのつけるなり。腐つけば万の物もくさし。とかく臭気くさみの付く族むじせに、真物まことのもつはなしと知

るべし。味噌は味噌ながら、味噌くさは悪く、侍は侍ながら、さぶらひくさは悪き如く、粹も粹くさは粹ならぬものぞ。

(艶道通鑑・一・一六)

何かと鼻につく未熟者の、その過剰な自信を批判して、味噌の味噌くさいこと、侍の侍くさいこと、粹の粹くさいことなどの行き過ぎた状態に例えている。ここで例として挙げられる味噌クサシはAクサシの、侍クサシはBクサシの、粹クサシはCクサシの結合例である。この三語の鼎立意識は、クサシの表す意味が単一ではなく、少なくとも三つの段階が想定されることへの気づきを示していよう。

また、Cクサシの結合例がくらしイと共起するのみならず、この二つの接尾辞に類義関係を見る説明も現れる。

(82) 世に流行る寛滑者くわんくわつものといふは、侍の中にも町人の中にも、異風者と言

はるゝ輩也。……表向釣髭上髭食反らし、物毎自慢くさく、子細らしこさいく眼に廉かじを立て、張臂にして人を貶し、物言聲高に、僅かの事にも理屈をこね、根性骨道禮なく、底意地穢く、尻弱に憶病也。

(浮世物語・五・寛滑者の事)

(83) 鈍どんらしし。鈍どんなるといふ事也。らししは愛らしし・かはゆらししといふにひとし。

鈍くさし 同しく鈍どんなる事也。鈍なると計いへば詞ふりたるゆへに、あたらしくいひそへたる也。くさは、あほうくさしといふにひとし。

(色道大鏡・巻第一名目鈔・第六言辞門)

例(83)には、Cクサシの機能を「あたらしくいひそへたる」ところに認める記述が見られ、単なる強調と捉えていることも分かる。先の例(81)のように、「味噌の味噌くさいこと、侍の侍くさいこと、粹の粹くさいことなどの行き過ぎた状態」をクサシが表すとの見方に通じよう。また、これら例(81)により、近世前期において、一見嗅覚表現らしからぬクサシの用法、すなわち、Cクサシの存在が言語使用者に認識されていたことが証明される。

(三) 近世中後期

Cクサシが形容詞語幹を上接する例は、中世前期の古クサシ以降見られなかったが、近世中後期には、「遅」や「トロ」、「オカシ」、「ノロ」などの形容詞語幹を上接するCクサシも登場する。

表五・五 近世中後期

Cクサシ	
上接成分	延べ
理屈	12
洒落	11
古	6
胡散	5
遅	4
高慢	4
トロ	4
鈍	4
自慢	3
邪魔	3
辛気	3
生	3
面倒	3
勿体	3
阿呆	2
アングラ	2
粋	2
ケチ	2
ネチ	2
慇懃	1
オカシ	1
ソソ	1
チョッポ	1
ニチ	1
ノロ	1
風雅	1
分別	1
見	1
悟気	1

近世前期における非独立要素との結合例は、わずかにネチクサシ一語が認められるのみであったものの、近世中後期に入ると、「ソソ」や「チョッポ」、「ニチ」などを上接するCクサシも散見される。

(84) 名ざしをして遊妓ちよらうを呼に遣しける。それを待つ間のおそくさけれど、

妓迎きむかひのならひ、台所にて煙草のみ居たりける。(戯男伊勢物語・卷一)

(85) 地獄の凶のかけものかけ、弁にまかせてしやべつているを、つりひげのやつこが聞て、何さ、とろくさい。御坊。何と唐人や天竺の人ハ、ぢごくへおち申さぬか。それハどこでも人のこゝろのもちようしだい
でござる。そんなら此やうなばかな絵ハ、ぶちやぶつてしまいいめされ。

せめさせるやつらハ唐人で、せめられるものハ日本人ばかりか。

(軽口機嫌囊・三・こゝろこそ心)

(86) 鴨をにてふるもふとて喜介が鍋やきをしかけて、みんなしてたべいんした跡で、新造衆もやりて衆もどふかおかしくさい、むねがわるいと
おさんどんがもとしなんす

(郭中掃除雑編)

(87) のろくさい悪体除夜の所がら

(歌羅衣・五)

(88) 「聞えた聞えた、コリヤア……おふくろの所へやるふみをこっちへよ

こしたのだ、コリヤ奇妙奇妙ハハハハハハハハハハ」、「エエそそつくさい

ふとだア、見たくでもない」(続膝栗毛・一一・下)

(89) わたしがちよつほくさい云廻しも、なるやうにするわいなア

(猿若万代厦・三立)

(90) 見て帰り・にちくさく成る白鼠(川柳評万句合・宝曆一〇・満二)

しかしながら、形容詞語幹や非独立要素を上接する新語が増えるとはいえ、やはりCクサシが最も結合力を発揮するのは抽象名詞・形容動詞語幹に対してである。中でも注目すべきは、現代語においてかなり日常語化している面倒クサイが、近世中後期に初めて見えることである^{三八}。

(91) はり「オヤ、私わたくしも些ちつとお合を仕ませうぢやアないか。」孫「ナニく。」

此身おいらアそんな面倒めんたうくさい事をするより独りが勝手サ。何なら其所へ閣おいて往きなせへ、手酌で呑むから。」

(いろは文庫・卷之四三・第八五回)

ところで、近世前期には単純形容詞クサシが単独で〈怪しい・疑わしい〉をも表すようになっていた(本論第二部第三章)。一方で、類義語となるCクサシの結合例、胡散クサシも近世中後期に登場する。

(92) 指引さしひきのメ括くわくに手味噌てみその匂におひが移り、それが親仁ちんじんの鼻へ入、烏散臭うさんくさいと嗅かぎつけて、それより筵むしろが解初め、藁わらが乱れて揃そろへかね、一先身を潜めし

(艶道通鑑・五・七)

さて、すでに述べたように、近世前期には、一見嗅覚表現的でないCクサシの存在に着目した用例が見られた。近世末の『和英語林集成』に至ると、*“In the same sense as, rashii: =manner, appearance”* と見え二九、この頃、Cクサシの存在が広く認識されていることが推測される。

(93) KUSAI-KI, クサイ, 臭, a. Stinking, offensive to the smell, fetid,

rancid, putrid. Used in comp. in the same sense as, rashii; =manner, appearance, as, jiman-kusai, Furu-kusai. Inaka-kusai. Nioi ga kusai, the smell is offensive. Niku ga —, the meat is putrid.

(和英語林集成・初版)

「明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス」
なお、次に挙げる方言資料から、クサシとラシイとは地域差が存在することが分かる。

(94) 「江戸では」自慢こぼらしきと云フ 「丹波では」じまんくさい

(丹波通辞)

(95) 「江戸では」あほらし 「京都では」あほくさい

(両京俚言考)

このように、クサシのうち、Cクサシについてのみ関西方言である指摘が見られる。ただし、Cクサシの結合例も江戸語資料に認められるため、中央語の移り変わりとともに上方語から江戸語へと着実に伝播したと考えられる^{三〇}。

(96) 式亭主人は鳩車竹馬の友なり。性素より拙辨。生平の茶譚殊に鈍し。故に人呼で面白くなき人とし、且話のなき人とする。売客にして騷人。野暮にして在行。居は市中にありて自ら隠れ、躬は俗間にありて自ら雅なり。言語を通めかさず、妄に陳奮翰を吐ず。形容をすいがらず、假にも利屈臭^{りくつくさき}を論ぜず。

(浮世風呂・四編・跋)

(四) 近代(明治)

近代(明治)には、Aクサシ・Bクサシと同様、Cクサシも、近世末から明治初期にかけて誕生した比較的新しい名詞である「宗教」や「哲学」などを上接するようになる。『日本国語大辞典(第二版)』によると、これらの名詞の初出は、「宗教」が『航魯紀行』(一八六六)^{三三}、「哲学」が『真景累ヶ淵』(一八六九頃)である。

(97) 霊愛なるものを仮定して、それが神聖だと云へるなら、その一方に仮

表五・六 近代(明治)

Cクサシ	
上接成分	延べ
面倒	64
古	12
胡散	10
陰気	6
理屈	6
野暮	5
高慢	4
ケチ	2
洒落	2
半可	2
貧乏	2
分別	2
バラボウ	2
未練	2
吝	2
鈍	1
イタズラ	1
愚カ	1
窮屈	1
形式	1
邪魔	1
宗教	1
殊勝	1
辛気	1
世間	1
禅	1
大層	1
ダラ	1
哲学	1
トロ	1
馬鹿	1
真面目	1
見	1
勿体	1
老实	1

形容詞語幹を上接するCクサシは見られなかった。非独立要素を上接す

定した肉愛も同じだと云へるわけで——フロツクコートの学者と宗教臭い俗物とは、こと更らに肉慾を否定するだらうが、存在する肉慾を否定——進んで云へば、断滅——することが出来るなら、意志を断滅すると同様、世界の滅亡を意味するのである。「傍点原文」

(神秘的半獣主義(一九〇六) 岩野泡鳴)

「近代デジタルライブラリー」

(98) 「さう云へば云はれないことはないね。僕の分からなれと思つたのは、

生活の衝動とか、種族の継続とかいふやうな意義から考へたからです。

その方から見れば、生活の衝動を抑制してゐるのだから、egoistiqu^{エゴイストイック}よ

りは altruistiqu^{アルトリユスタイク}の方になるからね。なんだか哲学臭い^{ていびく臭い}ことを言ふや

うだが、さう見るのが当り前のやうだからね」

(青年(一九一〇) 森鷗外) 「近代デジタルライブラリー」

るCクサシは、わずかに一例ダラクサシが見られるのみである。

(99) 伝「真達さん串談じゃねへ。ワイお前金を返さなくつチャア往けねへ」

真「今ハ無ヨ」伝「今無くつチャア困るじゃアねへか」真「無物を無理に取うて云うも無理じゃアねへかだからくさい事を云をるナ」

(敵討札所の靈験 (一八八八)・二〇・三遊亭円朝)

「近代デジタルライブラリー」

(五) 近代 (大正・昭和)

近代 (明治) には見出せなかった形容詞語幹との結合例が確認される。

ただし、「洩」「マドロ」の二つにとどまる。

(100) 「馬鹿奴え。何を吐こきくさる。ワレのような小僧に何がわかるか。

表五・七 近代(大正・昭和)

Cクサシ	
上接成分	延べ
面倒	153
古	73
ケチ	61
陰気	38
胡散	33
貧乏	19
ノロ	16
分別	15
馬鹿	11
野暮	11
辛気	9
阿呆	7
胡乱	7
洒落	4
邪魔	3
文学	3
真面目	3
吝嗇	3
芝居	2
洩	2
秘密	2
鈍	2
吝	2
因縁	1
演説	1
源平時代	1
思案	1
修身教科書	1
執念	1
常識	1
説教	1
総会	1
葬式	1
旅	1
ダラ	1
道楽	1
トロ	1
半可	1
文明	1
封建	1
マドロ	1
間拔ケ	1
勿体	1
理屈	1
幼稚	1
読本	1

あの逆立ちは芸当の小手調べチユウて、芝居で云うたらアヤツリ三番

叟や。軽業の礼式みたようなもんやけに、ほかの芸当は止めてもアレ

だけは止める事はならん。それともこの禿頭が気に入らん云うのか」と言ううちにオヤジは洩臭い禿頭を吾輩の鼻の先に突付けて平手でツルリと撫でて見せた。

(超人鬚野博士・少年力持 (一九三五) 夢野久作)

『夢野久作全集 第五卷』三一書房・一九六九」

(101) その純正普選の根元地は、いふまでもない黒龍会で、言論ばかりぢや

まどろくさいと直接行動にさへ出でたくらる、両国の立会演説の如きは、あはや血の雨をも降さんとした。

(茶話 純正普選運動費の出所 (一九二五) 浪華小史)

「太陽コーパス」

通史的に見て、形容詞語幹や非独立要素を上接するCクサシはわずかであった。Cクサシが上接するのは、専ら抽象名詞・形容動詞語幹であったと言える。近代（大正・昭和）には、「源平時代」や「修身教科書」といった、それ自体が臨時一語的な複合名詞との結合例も見られるようになる。

(102) ずっと後になつては、何処其処の長が家といへば、娼家といふほどの意味にさへなつた位であるが、初めは然程に墮落したものでは無かつたから、長の家の女の腹に生れて立派な者になつた人々も歴史に数々

見えてゐる。力寿という名は宇治拾遺などには見えず、後の源平時代くさくてやゝ疑はしいが、まるで想像から生み出されたとも思へぬから、まず力寿として置くが、何にせよこれが定基には前世因縁とも云ふものであつたか素晴らしく美しい可愛いものに見えて、それこそ心魂を蕩尽されて終つたのである。

（連環記（一九四一）幸田露伴）「近代デジタルライブラリー」

(103) 「すぐ帰りますわよ」と、やはり、まじめな顔をして言ひます。正直、とは、こんな感じの表情を言ふのではないかしら、とふと思ひました。

それは修身教科書くさい、いかめしい徳ではなくて、正直という言葉で表現せられた本来の徳は、こんな可愛らしいものではなかつたのか

しら、と考へました。

（斜陽（一九四七）太宰治）「近代デジタルライブラリー」

第四項 A'クサシ

近世期に数例確認される、旨クサシという語がある。形容詞語幹に、クサシが結合した語例で、青クサシの「青」が「青物」を指すように、「旨」は「旨い物」を指し具体名詞に準ずる。

(104) きつね▲……いゑ。むまくさや〜。一口くおふか。や。此ねずみは。親祖父の敵ぢや。一打ち打つてくおふ。

（狂言記・今悔）

初出例は、狐を狩るために仕掛けられた狐の好物「ねずみ」と対峙した狐が、「ねずみ」の「むまくさ」さにその食欲を抑えきれなくなる場面である。この旨クサシは、明らかに嗅覚表現として使用されている。

これに続く近世中後期の用例も、やはり飲食物の旨そうなおいがするさまの描写に使用された嗅覚表現である。

(105) 鍋どころあまた、めう〜と湯煙たちて、うまくさき匂ひの、こゝに

まで、薫^いりて、あるじの女、うちほこりつゝ、手づから、飯ヒとりて、
もりくらふ有様 (癩癖談・上)

(106) 幸川の岸に魚屋のありて、鱸^{うなぎ}魚のかほりいとむまくさく匂ひければ、

そこに入りて飯打食ひ酒飲みけるに、 (戯男伊勢物語・卷一)

Aクサシと異なるのは、挙例においてカヲル・カヲリから共起することからも分かるように、旨クサシに付随する評価性がプラスの点である。ただし、このプラス評価は上接する旨シによるもので、クサシそれ自体に評価性は認められない。旨クサシのクサシは、単にへ〜のにおいがするさまを表すと考えられる。Aクサシのようなマイナス評価を認められないため、Aクサシと呼ぶ。

この特殊なAクサシは、形容詞旨シの語幹との結合例が確認されるのみで、旨クサシそれ自体も、近世期における一時的な使用にとどまったようである。現代共通語には残っていないが、高知県では、へ快いにおいがするさま全般を表す語として使用されるとの報告がある(吉田則夫一九八二)。また、岐阜県・愛知県・和歌山県・愛媛県では、へ旨そ〜なにおいがするが抽象化し、へ(具合・都合が)良いをを表す語として使用されるとの指摘もある(『日本国語大辞典(第二版)』ウマクサイ項)。現代語上方語におい

て誕生した旨クサシは、その後各地に伝播したものの、後に中央語となる江戸語には定着せず、中部地方や四国地方においてやや意味を変化させた状態(へ(具合・都合が)良い)の意味)で残るに過ぎないようである。

第五項 Cクサシ

近代(大正)に至り初めて見える、照レクサシという語がある。山下喜代(一九九五)も指摘するように、他のクサシが状態形容詞であるのに対し、照レクサシはただ一語、感情形容詞である点に特徴がある。

動詞照レルは、へ恥ずかしく感じる、へ恥ずかしそうな態度・表情をするを意味し、Aクサシの上接するような、物質の変化を表す動詞ともとれる。しかし、その変化は「嗅覚刺激を発散させ得る事態の変化」ではない。「照レ」は、照れている状態を表すと考えられ、Cクサシの上接するような形容詞語幹や抽象名詞・形容動詞語幹などに類する。

(107) いつそ三人きりならば、最後には、事実ありのまゝの関係をむきだし

に、自由な口の利きやうもあらうと云ふものだが、丁度この部屋の受持におはまが廻つてゐて、事々につけて信之のうへに気を使つてくれるのが、例へば何かの出演に、見ず知ずの他人よりも、内々の人に見

てゐられる方が、遙に気づまりでもあれば、てれ臭くもあるやうなもので、どうにも底を割ることの出来ない感じがあつた。

(多情仏心(一九二二・二三)・ひとり旅・里見弴)

『多情仏心』新潮社・一九二四

(108) 均平が、振り返つてにやり笑うので、加世子も口元にっこりして、

照れくさそうに父の側へ寄つて来た。

(縮図(一九四一)徳田秋声)

『現代日本文学館 八』文芸春秋・一九六九

一見、嗅覚表現らしからぬ表現として、雰囲気に関わる点はCクサシと同様である。しかし、例(107)では「気づまり」というマイナス評価の語、例(108)では「にっこり」というプラス評価の語とそれぞれ共起することからも、照レクサシには評価性の偏りが認められない。つまり、クサシそれ自体にも評価性は認められないのである。照レクサシのクサシは、単に()の雰囲気とするさまを表すと考えられる^{三三}。Cクサシのようなマイナス評価が認められないため、Cクサシと呼ぶ。

この特殊なCクサシは、動詞照レルの連用形との結合例が確認されるのみで、照レクサシそれ自体の登場も、他の成分と結合するクサシに比し

て非常に遅かった。

なお、Cクサシ(照レクサシ)全八五例中、五〇例が太宰治の小説の用例である。周知の通り、太宰は「文化と書いてハニカミとルビをふれ」という言葉を残しており、「含羞」が作品の一つのキーワードでもある(松本健一 一九八二・関井光男 一九九四など)^{三三}。そうした資料群からの用例が大半を占める以上、一般にどれだけ広く定着していたのかは疑問が残る。照レクサシが広く認識されるようになる契機として太宰を位置づけることもできようが、今後、同時期の調査を進め、この語の定着過程を明らかにしていく必要がある。

なお、太宰治が青森生まれであることから、地域性を考慮すべきかとも思われる。しかし、照レクサシを使用する他の作者、例えば、例(107)の里見弴は神奈川生まれ、例(108)の徳田秋声は北海道生まれであり、全国各地認められ、現段階では有意な地域差を見出せない。

第六項 文末外接形式

(一) 表現価値

ここまでに見てきたクサシとその用法を大きく異にするのが、近代(大正)に登場する、文を上接するものである。小説・落語類の調査では、次

に示す例(109)を得たのみであった^{三四}。特に落語は、「口承芸能であることや演者が中・高年の男性に偏っていることから、ことばそのものが保守的になる可能性が高い」（金澤裕之一九九一・二二三頁）との指摘もあり^{三五}、誕生の新しい文末外接形式が見えないのであろう。

(109) 小田原を訪ねた時、先生は風邪を引いて寝てゐた。奥さんも丹前を着て鼻をかみ乍ら「どうやら（妾もお相伴になった）くさいのよ。」と云つてゐた。元気なのは却つて只妹さんだけだった。

（竹沢先生と云ふ人（一九二四）長与善郎）
『里見弴・長与善郎集』講談社・一九六三』

この場合、上接する文の表す事態に対する話者の推量を表し、助動詞のように機能する。そして、A・B・Cクサシと同様に、上接する文へ主観的なマイナス評価を付随させる。これを文末外接形式^{三六}と呼ぶ。クサシのこうした用法は、近年における若年層使用の印象が強いが、その誕生は大正期まで遡り得ることを確認できた。

なお、この文末外接形式クサシは、ラシイやヨウダなどの助動詞と類義関係にある^{三七}。ただし、ラシイやヨウダの推量には評価性の限定がないの

に対し、クサシはマイナスに限定される。そのマイナス評価は、上接の事態の成立に対する疑念や懸念となつて現れる^{三八}。前掲表二では、他のクサシと意味記述を揃えるために（の不快な雰囲気とする）としたものの、より自然に表現するならば（よ）うな嫌な気（配）がする（と）でもなろう。

さて、前述の通り、小説・落語類の調査では前掲例(109)を得たのみであったため、用例の少なさを補う目的で国会会議録の調査を追加した。国会会議録は、整文が介在するために自然談話そのものではないものの、「フォーマルな言葉としての会議録という一般的な印象と裏腹に、きわめて自然談話に近い特徴が見られる」ため、「完全なる書き言葉でも完全なる話し言葉でもない、二極間の中間的特色^{三九}を持った国会会議録というデータの特質」に注目し、文末外接形式クサシの登場を期待して、国立国会図書館「国会会議録検索システム」で検索を試みた（松田謙次郎編二〇〇八・五七頁）。検索対象としたのは、一九四七年第一回から二〇一二年第一八〇回までの衆参両院、通常・特別・臨時国会すべての議事録である。

さて、現代にまでわたる長期間の調査にも関わらず、国会会議録から得られた用例は、次に示す二例のみであった。

(110) われわれどう考えてみても（日本側の方で権利を放棄した）くさいと

いうようなことはお答えはいたしておりますけれども、アメリカ側に放棄したとは言っておるのではないのでありまして、

(第二二回・衆議院・外務委員会(一九五五年五月一日))

発言者：福島慎太郎)

(111) 政府当局の方では、これはどうも(アメリカの秘密を盗んで公表した)くさい

と思います、本人はそんなことは全然知らないで、全くそれとは無関係に自分が発明して公表したという場合に、

(第二四回・衆議院・外務委員会(一九五六年五月一六日))

発言者：松本七郎)

文末外接形式クサシは、自然談話に近い特徴の見られる国会会議録と言えどもなかなか現れない、非常に砕けた・俗めいた表現であると言えよう。

「非常に砕けた・俗めいた表現」という点は、現代語においても引き継がれていると考えられる。新聞・雑誌などには見られないが、インターネット上には以下のような例が散見される(すべて二〇一一年一二月四日閲覧)。

(112) 正確に言うと 痛痒いんですわな

(「ちっと膿んでる」くさいんだよね

(http://yaplog.jp/chris_t/archive/14)

(113) 「ボートのエンジンが死んだ」くさいので、船のエンジンどなたか、

お安く譲って頂けないでしょうか??

(<http://fr.twitter.com/#/ZACKsanpee/status/132294541465223170>)

(114) 「風邪ひいた」くさい (http://yaplog.jp/tefufefutyo/archive/588)

こうした文末外接形式クサシの俗語としての文体的意味は、単純形容詞クサシの意味からもたらされていると推測される。すなわち、単純形容詞クサシは、「不快なおいがする」さまという不衛生で忌避される事態の描写に使用されるために、クサシの使用それ自体が、言語表現上の美感を損なうものとして忌避されることが装定されるのである。文末外接形式クサシは、そうした美感を問わない、非常に砕けた言語表現の場においてのみ使用することのできる文体的意味(俗語)しか有していないようである。そして、その文体的意味(俗語)が、ラシイやヨウダとの相違点でもある。なお、使用の地域差についても検討したが、用例が希少であることも相まって、特筆すべき傾向は見出せなかった。例(109)の長与善郎と例(110)の福島慎太郎とはともに東京生まれであり、例(111)の松本七郎は福岡生まれとのことである。

(二) 文末外接形式化の背景

ところで、本来、嗅覚表現のための接尾辞であった・クサシが、なぜ話者の主観的判断を表すようになるのであろうか。

ここで、新語を産出する結合力に注目してみたい。次に示す表六では、・クサシの基本的な意味であるA・B・Cクサシの新語の異なり語数を時代ごとに示したものである。併せて、A・B・Cクサシそれぞれにおける各時代の異なり語数の中で、新語の異なり語数が占める割合を示した。

表六 新語の異なり語数とその割合

時代\名称	Aクサシ	Bクサシ	Cクサシ
上代	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
中古	5 100.0%	1 100.0%	0 0.0%
中世前期	7 77.8%	1 100.0%	1 100.0%
中世後期	13 72.2%	3 100.0%	1 100.0%
近世前期	24 61.5%	9 81.8%	15 93.8%
近世中後期	23 46.0%	17 73.9%	20 70.0%
近代(明治)	31 55.4%	24 86.2%	21 57.1%
近代(大正・昭和)	45 51.7%	41 71.9%	24 52.2%

表六からは、A・B・Cクサシいずれも、全体の異なり語数の半分以上が新語であることが分かる(ただし、近世中後期のAクサシのみ除く)。・クサシは通史的に結合力を發揮し続けてきた接尾辞であった。

また、現代語の・クサイについて内省してみても、結合力は衰退するどころか、次々に新たなクサイを生産することが可能であると思われる。こうした現代語の状況から逆算してみても、・クサシは(基本的な意味であるA・B・Cクサシに限り)結合力を維持し続けてきた接尾辞であることは堅い。そして、この点にこそ、・クサシの和語系接辞としての特徴がある。一般に、カ・ゲ・ヤカ・ラカ・ガホ・ガチ・ブ・メク・ツク・ダツ・バム・ヤグ・ガルといった和語系接辞は、中古あるいは中世において一時的に結合力を有したのみで、結合力が通史的に認められるのは漢語系接辞などの限られた場合であると言われる(漆谷広樹二〇一〇^{四〇})。こうした和語系接辞の傾向を踏まえると、・クサシの結合力の高さの継続は最も注目すべきこの接尾辞の特徴と言えよう。

・クサシの文末外接形式化の背景のひとつには、こうした文をも上接可能にする結合力の高さが挙げられる。そして、上接成分の拡大に伴う、雰囲気に関わる意味領域の獲得が、雰囲気への疑念・懸念を伴った話者の主観的判断という用法を導いたのであろう。

第七項 上接成分の拡大から見えてくること

第四節の第一項から第六項までは、上接成分により六つに類別した・クサシの意味ごとにその史的変遷を述べてきた。第七項では、それらをまとめる形で、・クサシ全体がどのような史的変遷として捉えられるかを考察する。

次の表七は、・クサシの上接成分ごとの延べ語数を時代順に並べたものである（括弧内の数字は異なり語数を示す）。

なお、時代が下り調査資料の数が増加するのに伴い、用例数ももちろん増加する。よって、用例数の増加を意味の発達と捉えるのではなく、あくまで意味の発生順（上接成分の拡大）を見る目的で表七を提示する。

(一) 《におい》から《雰囲気》へ

・クサシの中で最も早く誕生したのは、九世紀中頃の訓点資料に見える、物の名前を表す具体名詞を上接するAクサシであった。これに次いで、身分・立場・場所を表す具体名詞＋抽象名詞を上接するBクサシが一〇世紀

表七 ・クサシ述べて語数

名称	上接成分										上代	中古	中世前期	中世後期	近世前期	近世中後期	近代 (明治)	近代 (大正・昭和)	計				
	Aクサシ	Bクサシ	Cクサシ	A'クサシ	C'クサシ	文末外接形式	句	動詞 照レル 連用形	形容詞 旨シ 語幹	形容詞語幹										形容動詞語幹	名詞		(物質の変化を表す)動詞の連用形
																					抽象	具体	
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	8	0	0	0	0	0	8			
	29	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	25	2	29	0	0	0	0	0	29			
	58	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	43	8	58	0	0	0	0	0	58			
	251	0	0	2	0	0	0	2	1	35	33	175	5	251	0	0	0	0	0	251			
	401	0	0	5	0	0	0	5	12	76	75	216	17	401	0	0	0	0	0	401			
	426	0	0	0	0	0	0	0	13	130	50	225	9	426	0	0	0	0	0	426			
	1160	1	85	0	0	0	0	0	93	409	157	402	13	1160	1	85	0	0	0	1160			
	2333	1	85	7	0	0	0	7	120	651	322	1094	53	2333	1	85	7	0	0	2333			

未成立の『宇津保物語』に登場する。出現順や用例数の多寡から見て、 \cdot クサシは、純粋な嗅覚表現に関わる語を産出するための接尾辞、Aクサシとしてまずは使用され始めたことが分かる。Bクサシは、中古・中世前期ともに用例数が少なく、出現した当初は、頻用されていたわけではないようである。

さて、中世前期には、Aクサシが物質の変化を表す動詞の連用形を上接した語例が『類聚名義抄』に見られるようになる。また、形容詞語幹を上接するCクサシも『今昔物語集』に確認される。中世後期に至ると、抽象名詞・形容動詞語幹を上接するCクサシが抄物に登場し、この時点で \cdot クサシの基本的な上接成分がすべて揃うことになる。しかし、中世後期以前においてはB・Cクサシの用例数が少ないため、 \cdot クサシの典型はAクサシであったと言える。

上述の上接成分の拡大を順に示せば、Aクサシ（具体名詞）↓Bクサシ（形容動詞語幹）↓Cクサシ（形容詞語幹）↓Cクサシ（抽象名詞）↓Aクサシ（動詞連用形）↓Cクサシ（形容詞語幹）↓Cクサシ（抽象名詞）↓Aクサシ（動詞連用形）となり、大略としてはAクサシ↓Bクサシ↓Cクサシと把握できる。AクサシからB・Cクサシへと、具体的な事物のみならず抽象的な概念をも上接するようになる、 \cdot クサシそれ自体の意味に外延の拡張と内包の縮小が生じる。すなわち、嗅覚で認識される嗅覚刺激（にお

い）がより抽象化し、（嗅覚という限定のない）感覚で認識される刺激（零囲）（氣）に対する不快感をも表すようになるのである。Aクサシ↓Bクサシ↓Cクサシの発達順はそのまま、《におい》↓《におい+零囲氣》↓《零囲氣》という \cdot クサシの意味の抽象化を表していると考えられる。また、上接成分の拡大は、その接尾辞が意味の抽象化・一般化の可能性を本質的に持ち合わせている場合に可能となる（阪倉篤義一九六六）ことから、 \cdot クサシが零囲氣と連続する「氣」の一つであることは明らかである。そして、その連続性を成立せしめたのは、一語で具体+抽象を表し得る名詞を上接する、Bクサシの発生であったと言える。

（二）強調の前景化、マイナス評価の後景化

こうした上接成分の拡大に伴う \cdot クサシの意味の抽象化は、A・Cクサシに至りマイナス評価の消失にも繋がる。しかし、 \cdot クサシの意味の構成要素として重要であろうマイナス評価が、描写しようとする事態において必要でないならば、 \cdot クサシそれ自体を使用する意義がなくなってしまう。評価性が問題とならない場合にも \cdot クサシが使用されるのであれば、マイナス評価を別の基本義から前景化した意味と見てはどうであろうか。そして、その基本義が、先行研究で触れられてきた強調と考えたい。

先行研究では、強調を嗅覚表現とは考えにくい、クサイに含めて論じることが多かった(前掲表一)。しかし、この強調なるものは、すべてのクサシが有する基本義と考えられないであろうか。そもそも、快不快や好悪といった二項対立的な評価は、話者が対象を過度に意識する際に生じる。

・クサシの表す不快感(マイナス評価)も、対象の属性(ここでは発散された「気」)の程度が、話者が意識せずにはいられないほどに甚だしいと感じた結果生じたものである。この「発散された「気」の程度が過度^四であると感じる」という意味こそが、すべての・クサシが有する、マイナス評価の根本にある基本義であり、従来、強調と呼ばれてきたものであろう。評価性の認められないA・Cクサシは、「マイナス評価の消失」した自然な意味ではなく、・クサシの意味が抽象化し、基本義である強調が前景化したために、マイナス評価が後景化した意味なのである。上述のように強調を位置づけて初めて、・クサシの用法のすべてを統一的に説明することが可能になろう。

(三) ・クサシの発達と単純形容詞クサシ

・クサシと単純形容詞クサシとの関連についても述べる必要がある。クサシは本論第一部第三章にて明らかにしたように、古く上代より使用が認

められるのであった。語としての需要は現代語に至るまで脈々と引き継がれてきたものの、「不快なおいがする」さまを表す(ク)クサシ語彙全体におけるクサシの存在価値は、時代が下るにつれて変化していったと考えられる。

日本語においては、・クサシ登場以前から「不快なおいがする」さま全般を表すクサシが使用されていた。しかし、・クサシが中占に誕生して以来、この接尾辞の高い結合力によって次々と新語クサシが産出されるようになり、クサシよりもクサシが多用されるに至るのである。クサシの延べ語数と、純粹に嗅覚表現としてのみ機能するAクサシのそれとを比較しても、その傾向は明らかである。クサシ・Aクサシの延べ語数は、古には六・七とあまり差がなく、中世前期には五五・二七とむしろクサシの方が多かった。しかし、中世後期には三六・五二と逆転し始め、近世前期には七八・一八〇、近世中後期には一六九・二三三と、Aクサシの結合例の方が多用されるようになるのである^四。このような(ク)クサシ語彙の変化には、日本語使用者の中で、においを具体的に表現しようとする意識が高まったという背景が指摘できるのではなからうか。こうした「表現の具体化の欲求」は、自動詞的用法である「名詞+スル」の多用にも認められるところである(第三部第六章にて詳述)。

第五節 おわりに

・クサシは、古代より継続的に結合力を發揮し上接成分を拡大していった。誕生当初は、嗅覚刺激を發散させ得る事物・事態を表す成分を上接し、純粹な嗅覚表現に関わる語を産出するための接尾辞（Aクサシ）であった。しかし、具体的な事物のみならず抽象的な物事をも上接する接尾辞（B・Cクサシ）へと變化し始め、・クサシそれ自体の意味に二方向の抽象化が起こる。第一に、嗅覚表現から感覺表現への一般化、第二に、マイナス評価の後景化である。

第一の意味の抽象化は、

Aクサシ（〜の不快なおいがする）焦ゲクサシ・黴クサシなど
↓Bクサシ（〜の不快なおい＋雰囲気がある）男クサシなど
↓Cクサシ（〜の不快な雰囲気がする）面倒クサシなど

の意味の發達順が、また、第二の意味の抽象化は、

Aクサシ（〜のおいがする）旨クサシ

Cクサシ（〜の雰囲気がある）照レクサシ

という意味の誕生が、それぞれ體現するところとなっている。また、第二の意味の抽象化（マイナス評価の後景化）が起こり得る背景には、・クサシの多様な意味の根本に、（發散された「氣」の程度が過度であると感ずる）という強調の意味があるのだと指摘した。

さらに、句を上接する文末外接形式の誕生についても触れ、・クサシがクサシと同様に、ある事態の成立に対する疑念や懸念を表すに至るまでを明らかにした。

従来、個別に論じられることの多かった・クサシの多様な意味は、その發生順から考察するに、上述のように理解できよう。

以下、古代・近代の別なく接尾辞を・クサシ、接尾辞・クサシによって構成される合成形容詞をくクサシと表記する。ただし、現代語について言及する際は、それぞれ・クサイ、くクサイと表記する。

三石井正彦（一九九二）は、「造語力」（新語を産出する潜在的な能力）と「結合力」（過去における見出し語レベルでの新語産出力）とを区別し、可能性の度合いである「造語力」を、可能性が実現した結果である「結合力」

から推定するという手段を示す。本研究の結合力も、石井氏の「結合力」と同様に、上接成分をいかに拡大していくかという新語産出力を指す。

なお、野村雅昭（一九九二）にも、石井正彦（一九九二）のように、いわゆる「造語力」に二側面あることの指摘が見られる。すなわち、新語を産出する潜在的な能力を指す「生産性」と、産出された新語の数量を指す「生産量」との二側面である。前者は石井氏の「造語力」に、後者は「結合力」に、それぞれ対応する。

三 本章に限り、名詞化接尾辞・ミ・サの添加した名詞形や、古辞書・『日本国語大辞典（第二版）』・『時代別国語大辞典（室町時代編）』から採集した用例を全体の用例数に含め表に掲載した。ただし、新たに調査した方言資料は参考として挙げるにとどめ、用例数に含めない。

なお、近代の調査には、近現代既刊の小説テキスト、『口演速記明治大正落語集成 一〇七』、『講談社・一九八〇・一九八一』、『昭和戦前傑作落語全集 一〇六』、『講談社・一九八一・一九八二』、太陽コーパス、近代デジタルライブラリーを利用した。

四 同じく理由の説明は見られないものの、クサイが強調の意味を有することについては、岩淵悦太郎（一九七四）や吉田金彦（一九七七）にも指摘がある。

五 森田良行（一九七七）にも、強調に限り、「主として形容動詞の語幹に付」く（一八九頁）という上接成分に関する指摘が見られる。

また、『日本国語大辞典（第二版）』では、「名詞あるいはそれに準ずるものに付いて、そのように感ずる意を表わす」とだけある。

六 動詞の連用形のうち、物質の変化を表す動詞ではないものとして、涼ミクサシが一例見られた。

祇園会の余波かたまつて出来た賑ひ。……本弓のぷすく楊弓のどんく。稽古浄瑠璃の乙はちやるめるにうちけされ。健仁寺のだらりは道成寺の鐘入に聞まがふ。……こへ松「||松明」の涼みくさきには掛香もしゆつときへ。蒲焼のむまくさきは七条におしやらる。

（風流碎談義・巻五）

「こへ松の涼みくさき」によって掛香（のにおい）が消えてしまうということから、涼ミクサシはにおいに関わる語であろう。ただ、涼むにおいが十分に分からない上に、それが「松明のにおい」とどう結び付くかが不明である。涼ミクサシは孤例であるため、今回はこの語を考察の対象外とした。

七 燻シには、燻リ・燻も含めた。それぞれ一例ずつであった。

八 「かんこ」は「かみこ（紙子）」の変化したもの。「紙子」の焦げたにおいからか（『日本国語大辞典（第二版）』「かんこくさい」項）

九 ラ・マ・カ・タ・サなど、a接尾による情態性の意味をもった語（阪倉篤義一九六六）。詳しくは後述する。

一〇 状態・程度の小さいことを表す接頭辞小_ミの添加した小生グサシも含める。

一一 抽象名詞は形容動詞語幹になる場合もあるため、ここでは両者を区別しない。

一二 「にちる ねちるも同意、五音相通なり、物をねだる心なり」（色道大鏡・一）とある。

一三 注一二参照。

一四 卑しめ・非難する気持ちを表す接頭辞イケ_イの添加したイケ洒落クサシも含める。

一五 今回の調査では、振り仮名のない漢字表記「粹」の用例も散見された。

近世以降の「粹」の字には、スイ・イキ・ツウ・シャレの四つの訓があると言われる（大橋紀子一九九〇）が、粹クサシに関しては前後の文脈からスイと読むことが分かる用例であったため、ここでも粹と挙げた。

なお、上方語ではスイ、江戸語ではイキと言うとの説もある（吉田秀三一九八三の整理による）が、用例数も少ないため、地域性は特に問題としない。

一六 程度を強め煩わしくて嫌だという気持ちを表す接頭辞シチ_シの添加したシチ面倒クサシも含める。

一七 本研究では、一語の本来の意味が「におい十雰囲気」であると見るが、森田良行（一九七七）と門倉正美（一九九六）とは、一語の転義が「におい十雰囲気」であると見る。すなわち、一語が同時に「そのようなにおいを連想するような性質・内容」（森田良行一九七七・一八九頁）を表し、「匂いと雰囲気がいっしょくたになっている」（門倉正美一九九六・八九頁）と見る。

一八 『訓点語彙集成』「汲古書院・二〇〇七・二〇〇九」によると、訓点資料には他にも、中世前期の和訓として「腥_{ツクサシ}」「腐_{クチクサシ}」が見える。

一九 『日本国語大辞典（第二版）』では、この皮虫クサシを立項し、「いとわしい。いやらしい。」と説明し、初出例としてこの例(6)を挙げる。しかし、この場合、部屋が多くの虫でいっぱいになっていることを前提とするならば、「世間では花よ蝶よというらしいが、私たちは毛虫くさい毎日を送っていることだよ」と、嗅覚表現として解釈するのがやはり良からう。

なお、皮虫クサシは例(6)が孤例であり、辞書に見出しがあるからといって一語化しているとは言えないことを示す好例である。

二〇 Cクサシと類義関係にある「ラシイ」の初出例も、この『沙石集』であることが報告されており（村上昭子一九八一）、接尾辞の多彩さが窺える。

二一 注九で前述したように、阪倉篤義（一九六一）の命名による。阪倉氏は、「情態言」を構成する「接尾語ラ」を、疊語形と等質であると指摘する。

「疊語形は」事物を集散的に考へることによつて、そこから、それらに共通する属性を抽象して、さうした属性を代表的にしめす一つの事態を意味することになる。……疊語形が有するこのやうな表現性とまさに同様な表現性を名詞にあたへるものとして、前述の、情態言形成の接尾語ラの機能を考へることができるであろう。（三四八頁）

『日葡辞書』の記述からも、シワラは疊語形シワシワに通ずる。

二三 『日本国語大辞典（第二版）』「きなくさい」項では、「(1)布、紙、わたなど、植物性のものが焦げるようなにおいがするさま。」の初出例に俳諧の『享和句帖』（二八〇三）を挙げるが、本研究の調査によれば、その初出年代をやや遡れるようである。

二三 鬼が人間の気配を察知した場合のこうした表現は、古く『今昔物語集』

卷一三・第二にある「今夜怪キカナ。例ニモ非ズ人間ノ氣有ル輩有リ。誰人ノ来レルゾ」などや、西洋の童話に見られる人喰い鬼の「人のおいがするぞ」などと共通の類型である（日本古典文学大系『今昔物語集 三』岩波書店・一九六一…一三・一四頁）。

二四 感動詞としての初出例は古く、『どちりなきりしたん』（二六〇〇）にすでに見られる。ここでは、感動詞から転じた「キリスト教やキリスト教徒をひやかしたり、さげすんだりしている語。」「『日本国語大辞典（第二版）』という名詞を指す。

二五 日本古典文学大系『新色五卷書』〔岩波書店・一九六六・四四五頁〕
小林一茶の『方言雑集』（二八一九・一八二七頃）にも「しやらくさい云事 元禄中泉劬荒井徳庵俳名社楽ト云より起 仙人ニナリ損ジタル故也」とある。

なお、社楽齋の奇行については、坂口安吾（一九三九）『勉強記』に、「その昔、泉州堺の町に、表徳号を社楽齋という俳人があった。仙人になる秘薬の伝授を受け、半年もかかって丸薬をねりあげて、朝晩これを飲んだあげく、もうそろそろ飛行の術ができるだろうというので、屋根の上から飛び降りて、腰骨を折ってしまった。この時以来、できないことをすること

を「シヤラクサイ」ことをする、というようになったという話である。」とある。

二六 『日本国語大辞典(第二版)』によると、「理屈」は『晋書』張憑伝「張憑勃率為_二理窟_一」に、「分別」は『勝鬘經』顛倒真実章「於_二身諸根_一。分別思惟現法見_レ壞」に、「神秘」は梁武帝『遊仙詩』「水華究_二靈奥_一、陽精測_二神秘_一」に、それぞれ見られるとのことである。

二七 この表現は広く知られるものとなっていたようで、これを真似た物言いや、引用例が散見される。

「親仁『説法式要』をそらんじ」「……すべて町人は、町人臭いがようおじやる。武士臭_{ぶしくさい}は大疵。……」

(当世下手談義・卷二・八王子の躰翁、座敷談義の事)
味噌のみそくさきと、学者の学者くさきは、さん／＼のものなりとて、又是を見破たる先生たち、宋儒の頭巾氣_{づきんぎ}となへ出せし卓見も、角を直さんとして牛を殺。
(風流志道軒伝・卷一)

和尚「……見れば事の外に婦人方の多く参詣故、まづ女人得脱成仏の説を申さうが、儒者の儒者臭_{じゆしゃくさい}きとやら、味噌の味噌臭_{みそくさい}きとやらで、出家が仏の話を致すは珍しからず。由つて、今日は婦人方の心得となつ

て、一生身の修め方を話ませう。

(花の志満台・第四篇・卷之中・第二十二回)

二八 『日本国語大辞典(第二版)』「めんどうくさい」項では、その初出例として『思出の記』(一九〇〇・一九〇一)を挙げる。本調査により得られた用例は『いろは文庫』(一八三六・一八七二)のものであるから、その初出年代はやや遡ることができる。

二九 反対に、「らしい」項では、クサシについて触れられていない。

三〇 類義関係にある接尾辞でいえば、江戸方言の、ポイ(新山茂樹一九六〇)などもある。クサシの地域性について考察するには、ラシイヤ、ポイとの共存について見ていく必要があるが、ここでは十分に論ずる用意がないため、今後の課題としたい。

三一 (一)では、“religion”の訳語としての「宗教」の初出を指す。仏語として〈仏の教え〉〈宗門の教え〉を指す「宗教」は、古く『蕉堅藁』(一四〇三)にある。

三二 浅田秀子(一九九七)は、羞恥のニュアンスを持つ形容詞が、プラス・マイナス両方の評価性を有する場合のあることを指摘し、この背景に、「アガる」心理を是とする日本文化を考える。照レクサシもそうした日本文化を背景に誕生した語であろう。

三三 試みに、青空文庫の検索エンジンで「照」や「恥」、「羞」といった漢字を検索すると、照レクサシのみならず、照レル・恥ズカシイ・羞恥・含羞などの用例が数多くヒットする。

三四 長与善郎の複数の作品に目を通したが、用例はやはり例(109)の一例のみである。

三五 金澤裕之(一九九二)では、明治期大阪語資料としての落語速記本・SPレコードの価値について述べる中で、落語それ自体の資料としての長所・短所を挙げる。なお、引用箇所「口承芸能であることや……」は短所として挙げられている。

三六 名称は尾上圭介(二〇〇二)を援用した。尾上圭介(二〇〇二)では、「文末外接形式」を「述語の一角ではなく半ば文の外に位置する―それゆえに形容詞終止形にも直接に下接する―」(三六二頁)と定義し、ヨウダ・ラシイ・ダロウなどの具体例を挙げる。なお、初出の論文である尾上(一九九九)では、「外接文末要素」(二〇五頁注五)とある。

三七 青木博史(二〇〇七)では、ソウダ・ヨウダ・ゲナ・ラシイに共通の変化が見られることを指摘する。すなわち、(1)客観的「様態」から主観的「判断」へ、(2)活用型から不変化型へ、(3)接辞要素からモダリティ形式へ、といった変化である。文末外接形式クサシもこれらに類する(現代語クサ

イ・ポイが上記(3)に相当することは、三宅知宏(二〇〇五)にも指摘がある)。

なお、青木博史(二〇〇七)は、上記の(3)が従来「文法化」の例とみなされなかったことに触れ、「当該の文法変化が「文法化」に該当するか否かという議論よりも、同じ方向性を持った文法変化が起こっている事実の集積こそ、史的变化を説明する文法論においては重要であろう」(二一八頁注一一二)と言及する。

三八 こうした疑念・懸念の意味は、単純形容詞クサシに意味の抽象化が生じた(怪しい・疑わしい)の意味にも確認される(第二部第三章)。

三九 ただし、「会議録全体が一様に「中間的」なのではなく、部分によって異なる話し言葉性を持った、多様なデータである」。(松田編二〇〇八・五八頁)

四〇 漆谷広樹(二〇一〇)は、和語系接辞の結合力が継続しない要因として、文体の変遷を指摘する。すなわち、和文臭の強い和語系接辞は、中世以降主流となる和漢混淆文体に馴染まなかったことが考えられるのである。

四一 山下喜代(一九九五)における、クサイの記述には、本研究の言う「過度」とほぼ同義の「濃厚」「過剰」という表現が見える。ただし、「濃厚」「過剰」と強調との関係に言及は見られない。

四二・クサシは、クサシを調査していない資料からの用例をも含むが、こうした用例を除いても、延べ語数の多少が逆転する現象は同様に指摘できる。

第五章 水クサイの意味変化

―江戸俚言水ツポイとの共存過程から―

第一節 はじめに

接尾辞・クサイは中古より徐々に上接成分を拡大し、現代に至ってもなお新語を産出する力の衰えない和語接尾辞の一つである。本論第二部第四章で明らかにしたように、この・クサイを通史的に観察した場合、上接成分の種類により六つのタイプに分類でき、その中でも具体名詞を上接し（〴〵の不快なおいがする）を表すAクサイ（黴クサイなど）というタイプの誕生が最も早かった。しかし、そうした上接成分の分類だけでは個々の語の使用実態が十分に見えてこないこともある。その好例が水クサイである。

この語は語構成の上では先のAクサイに分類されるものの、出現初期には味覚表現として用いられており、他のAクサイの結合例と同次元に扱うには躊躇われる特殊な語なのである。水クサイをAクサイに分類することの妥当性を検討するためにも、味覚表現に用いられるこの語の表現特性を具体的な用例に基づいて考察する必要がある。また、水クサイは「感覚を表わす語が心情を表わすものとして転用される」「情意的な相似」（前田富

祺一九八五・七九七頁）が定着する例としても興味深い。さらに、中央語ではこの「情意的な相似」の定着のみならず、「感覚を表わす語」から「心情を表わすもの」への意味変化も起きている。しかし、こうした現象がいつどのように生じたのか、またその要因が何に求められるのかについては十分に明らかになっていない。

本章では、水クサイの史的変遷を追いながら上述の意味の問題を考察する。その際、先行研究において水クサイの類義語と指摘されてきた甘イ・薄イに加え、水クサイと類似した語構成をもつ水ツポイに注目する。中央語における類義語との共存過程（語彙の変遷）の中に水クサイの意味変化を位置づけてみたい。

なお、・クサイがある側面において、ラシイ・・ポイと類義関係になることについてはすでに指摘がある（森田良行一九八九・山下喜代一九九五など）。本章の問題意識もそれら先学の研究成果から大きな影響を受けているが、水クサイ・水ツポイの二語を扱うだけでは、・クサイ・・ポイ全体の議論にまで到底及ばないことは言うまでもない。本章ではあくまで二語の個別の問題を論ずるにとどまる。

第二節 問題の所在

第一項 先行研究

(一) 『日本語地図』第三八図「塩味がぐうすい」

『日本語地図』第三八図では、「しる(つゆ)などを作ったとき塩の味の足りないを言うのに、しる(つゆ)の味がどんなだと言いますか。」という質問文による調査結果が示され、甘イ・薄イ・水クサイの三語が周圈的分布(ABCBA型分布)をなすことが明らかになった。これを踏まえ、加藤正信(一九六六)は、「アマイがもつとも古くからあったところ、文化の中心である近畿にまずウスイが発生して関東や四国・九州に侵入し、つぎに、近畿でミズクサイが発生し、周囲に広まりかけた」が、「日本の言語の中心が、近畿から関東に移ってしまった。そこで、ウスイ・アマイがふたたび勢力をもち返した」という伝播を推定した。

古く水クサイが「塩味が薄い」を表しており、それが現在の近畿方言を中心に保存されている事実はそれとして、ここで留意すべきは、この質問文が「塩味」に限定されていることである。「言語地図」に描き出された語の分布は、あくまでも限定された意味における分布状態にすぎず、他の用法にまで視野を広げれば分布の姿も変わり、したがって推定にも見直しが必要となってくることに注意しなければならない(小林 隆一九八六)のである。

参考までに『現代日本語方言大辞典』(明治書院・一九九二・一九九四)における水クサイの記述の一部を引用する。

京都

「塩気や甘味など味が薄すぎること。」(あじ【味】《分野6食》)

「味の加減が薄すぎる。」(あまい【甘い】《分野6食》)

大阪

「味が薄くておいしくない。」(うすあじ【薄味】《分野6食》)

岸和田

「味が薄く水分が多い。」(うすあじ【薄味】《分野6食》)

「味が薄いことを言う。」

(うすい【薄い】《分野14時間・空間・数量》)

兵庫

「ウツスラ(薄い)した味のこと。」

(うすあじ【薄味】《分野6食》)

太字にした部分からも分かるように、「塩味が薄い」という意味は水クサイの一面でしかなく、味が分かる。味の種類を限定せず、単に「味が薄い」という意味領域について対応する語を調査した場合の分布状況も気になるところではあるが、そもそも、水クサイの意味領域はどのように全体を把握できるのであろうか。

『日本国語大辞典(第二版)』

ここではひとまず、『日本国語大辞典(第二版)』における水クサイの語積を参考に意味領域を概観してみたい。また、語積の引用と併せて、筆者による語積の簡略化表現を(太字)で示した。以下、論述にあたっては簡略化表現を適宜使用することにする。

(1)水分が多くて味が薄い。また、塩気が足りない。水っぽい。

II(水分が多くて味が薄い) III(塩)味が薄い

(2)情愛が薄い。他人行儀である。よそよそしい態度である。親切でない。

IV(情愛が薄い)

以上のII、III、IVに加えて、II(水分が多くて味が薄い)の一部として当然想定されるI(水分が多い)をIIから分化させI・II・III・IVを設定する。水ツポイの意味領域として問題になるためである(後述)。これを図式化し、さらに水クサイの意味領域を塗りつぶしたものが次の図

一である。水クサイの本質的な意味はII・IIIであり、IVは転義と言えよう。

先に触れた通り、IIIが「塩味」に限定された記述であるのは疑問が持たれるところであるが、図一はあくまでも『日本国語大辞典(第二版)』の記述態度として了解しておく。

ところで、水クサイのブランチ(1)では、換言の可能な語として水ツポイを挙げている。次に、この水ツポイの語積も引用・図式化し、さらに意味領域を塗りつぶしたものを図二として示す。

図一 水クサイの意味領域

対象	意味
飲食物以外	I 水分が多い
飲食物	II 水分が多くて味が薄い
	III 味が薄い
行為	IV 情愛が薄い

※塩味が薄い

図二 水ツポイの意味領域

対象	意味
飲食物以外	I 水分が多い
飲食物	II 水分が多くて味が薄い
	III 味が薄い
行為	IV 情愛が薄い

(1) 水けが多い。水分が多くて味が薄い。

I へ水分が多い Ⅱ へ水分が多くて味が薄い

(2) 光や色が薄く感じられるさまである。

I へ水分が多い^四

第二項 本研究の立場

図一・二から、味覚表現として使用された場合の二語の相違が、〈味が薄い〉ことの要因として〈水分が多い〉が必須か否かという点にあることが分かる。すなわち、水クサイが水分量を問題としない場合がある(Ⅲ)のに対し、水ツポイは水分量に注目した場合のみ使用される(Ⅱ)のである(そのために、水ツポイが水クサイの言い換え語として挙げられるのに対し、その逆は見えないのであろう)。しかし、語構成からは二語ともに「水(分量)」が重要な要素であることは間違いなく、また、そうであるならば、水クサイの類義語としてはまず水ツポイとの比較を試みなければならないと考える^五。

水ツポイは、『日本言語地図』第三八図から関東地方に点在することを確認できるものの、加藤正信(一九六六)、藤沢 真(一九七五)、井上文子

(二〇〇〇)などの言語地理学の先行研究では十分に触れられてこなかった。また、現代共通語における水クサイと水ツポイとが類義語と意識されにくいために、クサイ・ライシ・ポイの記述を進めてきた現代語研究においても二語が比較対照されることはなかった。従来看過されやすかった二語の関係性を史的観点から検討することは、クサイという一接尾辞内の意味の広がりのみならず、他の接尾辞との意味の重なりをも視野に入れた語彙史研究の第一歩となる。以上の理由から、本章では水クサイと水ツポイとの二語を中心に扱う。

次節以降では、各時代における意味・用法とその変遷を追っていく。語が表す意味は図一・二にも示したように、語の取る対象が具体物のうち、飲食物はⅡ・Ⅲ、それ以外をⅠ、抽象物はⅣと認定する。なお、Ⅱ・Ⅲはいずれか判断できない場合も多く、判断できた場合に限り本文中で触れることにする。

第三節 水クサイの史的変遷

第一項 中世

管見の及ぶ限り、水クサイは中世前期末に初出で、酒を対象にとる。これに続く用例も対象は専ら酒であり、酒の濃度を描写するために誕生した

表一 中世

資料ジャンル	資料名	成立年代	Ⅱ・Ⅲ
説話	沙石集	1283	1
その他	あづまの道の記	1533頃	1
抄物	四河入海	1534	2
	三体詩幻雲抄	1536	1
	玉塵抄	1563	1
	全九集	1566頃	1
中世計			7

語であつたらしい。対象となる酒は水で薄められており、Ⅱ（水分が多く（酒の）味が薄い）を表す味覚表現となっている。古代においては、現在の濁酒のような酒が一般的であつたことを考慮すると、「（酒の）味」には酒精分に加え甘味も意識されていたと推測される。

(1) 説法ヲハリテ、尼公其辺ノ聴衆マデ呼テ、大ナル桶ニ、タブラカ「ニ」

酒ヲ入テ、トリ出テス、メケリ。能

説坊一座セメ「テ」、盃トリアゲテ

呑ケリ。此尼公、「アサマシク候ケル事哉。酒ニ水入ル、ハ罪ニテ候

ヒケルヲ、シリ候デ」ト云ケレバ、「水ノスコシ入タルダニモヨキ酒

也。今日イカニ目出カルラム」ト、ヨモフ程ニ、能説坊、「ア、」ト

云ケレバ、「イカニヨカルラム。感ズル音カ」ト、聞ホドニ、「能説坊」

「日来ハチト水クサキ酒ニテ候ニ、「コレハチト酒クサキ水ニテ候

ハ」ハ「イカニ」ト云ケレバ、「サモ候ラム。酒ニ水入ル、ハ罪ゾト被

仰候ツル時ニ、コレハ水ニ酒ヲ入テ候」トテ、大ナル桶ニ水ヲ入テ、酒ヲ一提バカリソ入タリケル。（沙石集・卷六・一六・能説房説法事）

(2) 醗ハ蔀ノロナリ通ノシテ作スレ瀉ト。醗ハウスイトヨムゾ。水クサイニゴツテウスイ酒ヲ云ゾ。（玉塵抄・卷七）

(3) 胡地酒ハ、薄テ水クサイホドニ、千盃バカリ飲ムトモ酔コトハナイゾ（三体詩幻雲抄・卷五）

もつとも、「風味」という語からも分かるように、嗅覚（表現）と味覚（表現）とは非常に密接な関係にあり、時に重なりを見せることもある（柴田武・石毛直道一九八三）。それでもなお、くサイ語彙において水クサイが特殊であると言えるのは、この語が明らかに味覚表現語として振る舞っていることによる。ここで、水クサイの表現特性を、語構成及びとる対象から考えてみたい。

「水＋くサイ」という、語構成要素それぞれの意味を単純に足した場合、（水＋の不快なおいがする）となる。しかし、水クサイは専ら酒の濃度を描写するのであるから、（水＋の不快なおいがする）はあくまでも表面的な意味に過ぎず、真に意図する意味は（水分が多く（酒本来の）においがほとんどしない）、すなわち、Ⅱ（水分が多く（酒本来の）味が薄い）

である。〈水の不快なおいがる〉がⅡ（水分が多く（酒本来の）味が薄い）の表面的な意味となり得るのは、酒という飲み物の味が薄い要因として水分量の多さが当然想定されるからである。極端に言えば、酒という飲み物を対象としてとるからこそ、「水＋クサイ」という語構成は可能になったのである。さらには、予想される一定の基準（本来の味）を下回る（薄い）と、それに対する評価はマイナスに傾きやすくなり、クサイが本来有する評価性とうまく一致する。〈水の不快なおいがる〉という間接的な表現を以てⅡ（水分が多く（酒本来の）味が薄い）さまをあえて描写した理由については、類義語・類義表現にも目を向けたより詳しい考察を要するが、水クサイが味覚表現語たり得た要因はおよそ上述の通りに説明できよう。また、たとえ表面的な意味に過ぎずとも、語構成要素それぞれの意味を単純に足した〈水の不快なおいがる〉を表すことに変わりはないのであるから、水クサイをAクサイ（具体名詞を上接し）の不快なおいがるをを表すクサイのタイプ）に分類することは妥当と言えよう（本章第一節参照）。

なお、中世の水クサイのうち、対象が「口中に感じる味」という、上掲例とは趣がかなり異なる用例が一例見られた。

(4) 味ニテ病ノ源ヲ知　口ノ鹹ハ寒也。口ノ酸ハ食ノ停滞。口ノ渋キハ燥トナ也。口ノ水クサキハ霊也。口ノアマクニカキハ熱也。口ノクサキハ腎中ノ熱也。
（全九集・巻五・二六才）

ただし、これは、口味（身体の不調からくる味覚異常）の一つである口淡（味を感じにくく、飲んだ水が逆流するために口内が潤う）を「口ノ水クサキ」という和語表現で言い換えた用例であり、水クサイの意味がⅡ（水分が多く味が薄い）である点は先の用例と変わらない。類例に、近世成立の『書言字考節用集』（一七一七）に見える「口淡」^{ミンクサシ}「風間書房・一九七三」もあるものの、術学的な表記が豊富な辞書であり、医学用語の説明である例(4)と併せて特殊な位相の用例に過ぎない。やはり対象は酒が一般的であったと推測される。

第二項 近世前期

近世に至り、具体物では、新たに茶が二例、食べ物が六例見られるようになる。一口に食べ物と言ってもその内容は様々で、水クサイが表す（味が薄い）の要因として〈水分が多い〉ことが想定されるか否かは個々の対象によって異なる。とる対象が食べ物にまで拡大した結果、Ⅱ（水分が多

表二 近世前期

資料ジャンル	資料名	成立年代	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ
仮名草子	酒茶論	不明	1	
	竹斎	1621-23		1
	好色袖鑑	1682		1
狂言台本	虎明本	1642	1	
	狂言記	1660		1
評判記	難波物語	1655		1
	野郎虫	1660		1
	たきつけ草 もえくぬ けしすみ	1677		5
	難波鉦	1680		3
俳諧	埋木	1656		1
	芭蕉文集句集	近世前期	2	
噺本	一休諸国物語	1672頃	1	
	新竹斎	1687		1
	二休咄	1688	1	
	軽口御前男	1703	1	
浮世草子	懐硯	1687		1
	新色五卷書	1698		1
	精進膾	近世前期	1	
	けいせい色三味線	1701		1
	傾城禁短気	1711		2
	国姓爺明朝太平記	1717		3
	傾城手管三味線	1726		3
浄瑠璃	卯月の潤色	1707頃か	1	
	姫山姥	1712頃		1
	大経師昔暦	1715		1
	心中天の網島	1720		1
その他	ひとりね	1724-25		5
近世前期計			9	34

く味が薄い)の抽象化が進み、水分量に関わらずⅢ(味が薄い)をも表すようになったと考えられる。

(5) (鬼はさあらは、そのみづくさき子をくはふより、なんぢをくはふと

いふ、女なふくこはやといふ)

鬼／さてもむまさうな子じや、是を一口にくひたひな、あゝ

「親しい者には当然ないはずの遠慮がある行動」(傍線筆者)に対して用いられるという飛田良文・浅田秀子(一九九一)の記述も、発話者・書き手の感じた意外性表出にこの語の表現価値が存することを指摘したものであろう。

なお、発話者・書き手と特定の人物との関係は、旧知(8)・身内(9)・

(虎明本・鬼の継子七)

(6) 天和三年三月二十七日の非時、柳草に桜苔をとりませて、独活むき栗も水くさく味へる程の事、座懐紙には何かあるべし。(精進膾・卷一)

(7) 青物の青々と四時全き常盤の陰に、ひとり其味の浅く水くさきを愛す。(芭蕉文集・常盤屋句合)

こうした対象の拡大は抽象物にまで及ぶ。その抽象物は特定の人物の行為に限定され、それにより、発話者・書き手の考える①自身と特定の人物との近しい間柄、②人間として当然持っている情が否定された場合に抱く不快感を水クサイは表す。Ⅲ(本来の)味が薄い)は、比喩的に、Ⅳ(本来感じられるはずの)情愛が薄い)を意味することになる。現代語水クサイが

恋仲(10)などがある。表二の用例数から明らかのように、男女関係の描写が多い評判記や浮世草子を中心にして、水クサイにIVの意味側面が広く定着していったようである。

(8) 亭主申けるやうは、「聞けば其方は沢山に金を拾ひて、田舎へも下り給ふと聞く物を。先づくめでたし。さりながら、年久しくも念比に

したる我等が中なれば、少しは我等に知らせよかし。」……亭主は、「…

…我等此程損をして、摺切りたりと見る程に、無心を言はれぬ前言葉に、隠し給ふか恥しや。それ程心の穢さを始めより知るならば、いかで因みをなすべきぞ。さりとは水くさし。今日よりしては恵比須・大黒殿、知音を切るぞ聞ゝ置かひ。田舎へ下り給ふとも、または社壇へ上り給ふとも、そちへも無心申まじ。こちへも無心はあるまひぞ。とくく宿へ御帰りあれ。早御帰りあれ」と腹を立つ。(竹斎・下)

(9) ▲おこ その時に。おれが。見ぬかとおもふて。左近と。つゝやき。さゝやき。きいたぞいやい

▲女房 のふおこどの。そりや。たれがはちぞいの。わが身のはちでは。ないかひの。

▲おこ おのれが恥よ。

▲女房 おれも。そのやうに。みづくさう。思われてからは。いらぬほとに。左近どののところへ。ゆきまするぞ。(狂言記・内沙汰九)

(10) 「とかく遊女程水くさきものはなし。かくぶ所存なる売女めにうかくと心をつくす所にあらず。さふしたつめたき女と死ては跡く迄の笑草。此里通ひも今日切り」(けいせい色三味線・京之巻・二)

第三項 近世中後期

(一) 転義IVの伝播

江戸語における転義の定着は近世前期から中後期にかけてであったと見てよい。江戸語資料からまとまった用例が得られた。

(11) 政「何だねえ、今以て、其様な他人がましい事を仰しやるヨ。何で気の毒がありません。そりやお互で御座います。モウく其様な水ツ嗅い料簡をお出しなさんな。(清談若緑・巻八・第一五回)

(12) 小三「……思案の外の不義いたづら。長右衛門は年といひ。おきぬといふおかみさんのある身分で、ひとり娘のおはんをば、身重にさせたいたづら者。」金「コウく何をいふ。そりやアほんの狂言だ。よし又実説のことにもしろ、なんのおれが水くさい、そんな心をもつものか

表三 近世中後期

資料ジャンル	資料名	成立年代	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ
浄瑠璃	心中恋の中道	1715		5
	八百屋お七	1731頃		1
	ひらかな盛衰記	1740		1
	蝶花形名歌島台	1793	3	
談義本	艶道通鑑	1715		3
	遊婦多数寄	1771		1
	成仙玉一口玄談	1785	1	
噺本	水打花	1716-36頃	1	
	聞上手二篇	1773		1
	新軽口初商ひ	1764-72頃		1
	軽口五色昏	1774		1
	立春噺大集	1776		1
	気のくすり	1779		1
	鳩灌雑話	1795	1	
	太郎花	寛政頃		1
	春興噺万歳	1822		1
	百面相仕方ばなし	1842		1
	洒落本	仙台冶情	1750か	
禁現大福帳		1755		1**
西郭燈籠記		1756		1
老楼志		1832		1
その他	交隣須知	18C中頃か	1	
	四方のあか	1787か	1	
	癩癩談	1791頃		1
	鳩翁道話	1834	1	
俳諧	神酒の口	1775		1
滑稽本	戯男伊勢物語	1799		1
人情本	仮名文章娘節用	1831-34		1
	春色恵の花	1836		1
	清談若緑	19C中頃		1
近世中後期計			9	29

*水クサミの形 **水クサケの形

(二) 本質的な意味Ⅱ・Ⅲの伝播

上方語資料を除く水クサイのⅡ・Ⅲの用例には、江戸生まれの作者による『四方のあか』、江戸にて出版された『水打花』の二例が見えた。ただし、前者は文語体で書かれた狂文の序中の用例であり、後者は長い間語り継がれてきたであろう『沙石集』（前掲例①）を踏まえた用例である。当代的な水クサイの意味と積極的に見るのは難しい。

- (13) この書や、四方の赤の一本気にして、かりにも水くさき駄酒をまじへず。 (四方のあか・序)

(14) あそこの酒屋ハ酒に水をいれて、人の目をかすめて売。にくいことじやといふを、さか屋のだんな寺きいて、さてくさたのかぎりや。わせたら、るけんをいはんとおもふところへ、彼酒屋見舞に来る。住持見て、こなたハ酒に水をいれて売さうなが、後生こそねがはずとも、そんな事ハせぬがよいとしかれば、御もつともでござります。今からやめませふといふてかへる。二三日すぐれど、酒の

さらには、近世末刊行の『和英語林集成（初版）』にも、水クサイの語釈に “like-warm, unfeeling, false hearted, insincere, not to be depended on.” と見えることから、中央語が上方語から江戸語へと切り替わる中でも水クサイの転義は確実に伝播・定着したことが分かる。

な。……」 (仮名文章娘節用・前編下巻・第三回)

あぢ^ミづくさく、もとのごとくなれば、だんなでら、ふくりうして、そのまゝ酒屋へ行、あれほど御みけん申たに、やめやうといつて、なげ、今に酒へ水いれやるといへば、さか屋、御まへの御みけんゆへ、その日から無用につかまりました。それでも、酒のあぢがおなじ事なハどふぞ。されば、酒に水いれます事ハやめにいたし、たゞ今ハ水に、すこし酒をませますといふた。(水打花・二・ふた道下り酒屋)

また、京都生まれの雨森芳州による韓国語学習書『交隣須知』の写本(方言訛音が多い)に見える例(15)は、明治時代に校正増補され新たに出版される際、例(16)のように修正された(ともにⅢ(塩)味が薄い)さまを表す)。

(15) 酸 スユウテツバキガ出マスル

淡 ミヅクソウテ 味ガゴザラヌ

腥 ナマグサウテ ム子ガワルフゴザル

(交隣須知・三・味臭)「京都大学国文学会・一九六六」

(16) 酸 スクテ ツバガ 出マス

淡 シホカア^ママクテ 味ガアリマセヌ

腥 ークテ ム子ガワルイ

(交隣須知・二・味臭)「笠間書院・一九九〇」

上方語と江戸語とで水クサイの意味領域が異なるために、こうした修正が施されたのであろう。転義Ⅳが江戸語にも伝播する一方、本質的な意味Ⅱ・Ⅲは上方語の域を出なかつたようである。それでは、なぜⅡ・Ⅲに限り伝播しなかつたのであろうか。

(三) 伝播に対する「受容」と「拒否」

中央語の伝播に対して地方がとり得る選択肢には、大きく分けて「受容」と「拒否」とがあり、これまでの伝播論において看過されることの多かつたこうした「受け手の論理」にも注目すべきである(小林 隆二〇一〇)。水クサイの特定の意味領域を「拒否」した「受け手」、すなわち、江戸語の「論理」とはどのようなものであろうか。ここで参考になるのが次の関西方言資料である。

(17) 水くさい 塩あまきことをもいふ 江戸でいふ水^ほいなり 心切ならざ

るをもいふ (浪花聞書(二八一九頃)・み)「近世方言辞書集成」

水クサイは「塩あまき」Ⅱ（塩味が薄い）さまを表すと言うが、（塩味が薄い）が水クサイの意味領域の一部でしかないことは具体的な用例を挙げながら前述した通りである。ここでより重要なのは、水クサイが江戸語の水ッポイに対応するという事実の指摘である。そもそも、ポイは江戸語において生じ（新山茂樹一九六〇）、上接成分の「割合の高さ」などを表す接尾辞であった（岩崎真梨子二〇一一）。味覚表現に使用された水クサイが見えない江戸語資料には、Ⅱ（水分が多く味が薄い）ことを表す水ッポイが散見されるのである。近世中後期における水ッポイは酒についての描写に使用されることが多く、水クサイの出現初期と類似するのも注目される。

(18) 干葉飯は咽につまり。早く喰へざれば。急なる仕事の間がかけるなり。

挽きわりも余りとくなる物でもなし。ひじき飯は水ッぽく力なし。雑

水は咽が乾き。茶の銭の費有り。（残座訓二（一七八四））

(19) 弥次「ラツトく、なるほどいゝ酒だ。水ッぽくてねからのめぬ。も

ふ一杯続けよふ」（東海道中膝栗毛・七編上）

(20) 正八「ハテナ。今の一盃は何だか夢中で呑だが、此酒はおかしく水ッ

ぽいやうだ」源八「フン、玉川を割過たか」玉川とは水を割る事、酒

屋の通言也。南部をかめるとも言ふ。是は茶屋の通言。正八「まづ

呑でみなさい。」トちよこを渡して、舌をびちや／＼しながら「どうか塩しほつ早いはややうでもある。おらア耳は聞えねへが、口までつんぽになる筈はねへ。」（戯場粋言幕の外・下）

江戸語では、Ⅱ（水分が多く味が薄い）を表す水ッポイがすでに一般化していた。また、第二節第一項（一）で見た通り、Ⅲ（味が薄い）を表す語としては甘イ・薄イがあった。こうした類義語の存在により、江戸語は水クサイの本質的な意味Ⅱ・Ⅲを「拒否」し、転義Ⅳのみを「受容」したのではなからうか。

第四項 近現代^三

『明治期国語辞書大系』「大空社・一九九七・二〇一一」を調査してみると、見出しが確認できるのは水クサイのみで水ッポイは見えない(21)・(22)。

語構成要素それぞれの意味を単純に足しただけでは説明しきれない転義Ⅳ（情愛が薄い）が水クサイに定着していたからこそ、辞書に立項されたのであろう。そして、実際の用例も転義の用例ばかりである(23)・(24)。

(21) みづくき・し・キ・ケレ・ク・ク（形・一）**水臭**（濃キ情ノ淡淡シ

クナル意カ」隔テ心アリ。ヨソヨソシ。他人ラシ。(骨肉ノ夫婦ノ間
ナドニイフ) (言海(一八九九・一九〇一))

(22) みづゝくさい(水臭) 形 親情ニ云フ語。濃厚デアラス。ヨソヨソ
シイ。(大辞典(一九二二))

(23) 「どういふ次第でも他人と思はなきや言へない筈は無からう。」です
から尚少しゝたら申しますよ。もツと沢山にならなきや、貴郎になん
か言へやしませんわ。」「だから水臭いさ。」

(実印と預金帳(一九〇九) 柴田流星) 「太陽」

(24) 芳「然うか……其奴は有り難へな……此恩は忘れ難い」杉「何だ
つて水臭い。女房に向つて然んなに礼を云ふ奴が有る者かね……」

(自称情夫(一八九七) 四代目橋家円蔵) 「百花園」

第三節第二項で見た近世前期の水クサイがそうであったように、近代の
水ツポイも対象が拡大する。ただし、食べ物を対象にとる場合にも、前代
同様(水分が多い)ことは必須条件であり、水分量を問題としないⅢ(味
が薄い)を表せない点で水クサイと異なる。

(25) 暫く猪口の遣り取りいたして居れば猪口が汚れてベタ／＼致す。夫も

別嬪からでも貰つたんならいいけれど、少し口の臭い年を老た男から
貰つたのは余り結構とは言へません。けれども盃洗があるから洗いで
遣れば別段に汚ない事は無いと看客方云ひませうが、成程盃洗で洗い
でやれば汚ない事はないが洗ぐ度に幾らかしら水が残る。酒屋の方で
玉川上水を沢山に混て已に誤魔化してある酒、尚以て水ツぼく致して
不味するやうなもの。

(英国の落話(一八九二) 英人ブラック) 「百花園」

(26) 清「……「がんもどきの材料のひとつ」紫蘇の実でございですが、春
は八百屋にございますが、夏分になるますと、漬物屋へ買いに参りま
す。これは塩漬けになっておりますために、塩出しをしなければなり
ません。それもあまり長く「水に」入れて置きますと水ツぼくなりま
して、油をたいそう痛めます」

(寢床(一九三二) 四代目柳家小さん) 「富士」

さらには、身体・自然現象などにも対象を広げ、Ⅰ(水分が多い)とい
う意味領域を獲得するに至る。水クサイがあくまでも味覚表現として水分
量の描写に使用されていたのに対し、水ツポイはその限定を越えることと
なった。

(27) 「叔母」「私もこんな体になって、いつどんなことがあるか知れない

で、夜分だけはどこへもお出なされないようにね。」と、水ッぽいよ
うな目で叔父の顔を眺めながら言った。……「私もこんな体になって
しまつてね。」と叔母は母親の顔を見ると、めそめそと泣き出した。

(足迹 (一九一〇) 徳田秋声) 「新潮社・一九二六」

(28) 秋が深くなつて、緑の日射しの色が水つぽく褪めかけてきた。

(木乃伊の口紅 (一九一三) 田村俊子) 「牧民社・一九一四」

(29) 地球は何となく水つぽく、野も山も森も湿つぽく、草は露にぬれる。

(めでたき風景 (一九三〇) 小出樽重) 「創元社・一九三〇」

なお、第二節第一項 (二) において、『日本国語大辞典 (第二版)』水ッ
ポイ項 「(2) 光や色が薄く感じられるさまである。」をⅠ (水分が多い) とし
たのも、その初出例 (28) は、秋らしい湿つた空気の中でこそ (光が薄い)
様子を水ッポイが表し得ると考えられるためである。

現代語に至っても状況は変わらず、水クサイは専らⅣを、水ッポイはⅠ・
Ⅱをそれぞれ分担している。

(30) 障壁 (バリア) をつくる、さらけ出さない、水くさい、常に防備して

いる (AERA (二〇〇一年四月一六日)) 「聞蔵Ⅱビジュアル」

(31) 余分な水 (余剰水) が、骨材の砂利やセメントが沈降するのにつれて

浮き出すため、表面付近はとりわけ水つぽいコンクリートになる。

(朝日新聞 (一九八六年四月一五日期刊)) 「聞蔵Ⅱビジュアル」

(32) 水菜は、調味料とあえてから時間がたつと水分が出て水つぽくなるの

で、必ず食べる直前にあえて。

(オレンジページ (二〇〇四年一〇月二二日))

「書き言葉均衡コーパス」

第四節 おわりに

以上見てきた史的变化を、第二節第一項 (二) で提示した図一・二に修
正を加える形で図三にまとめる。

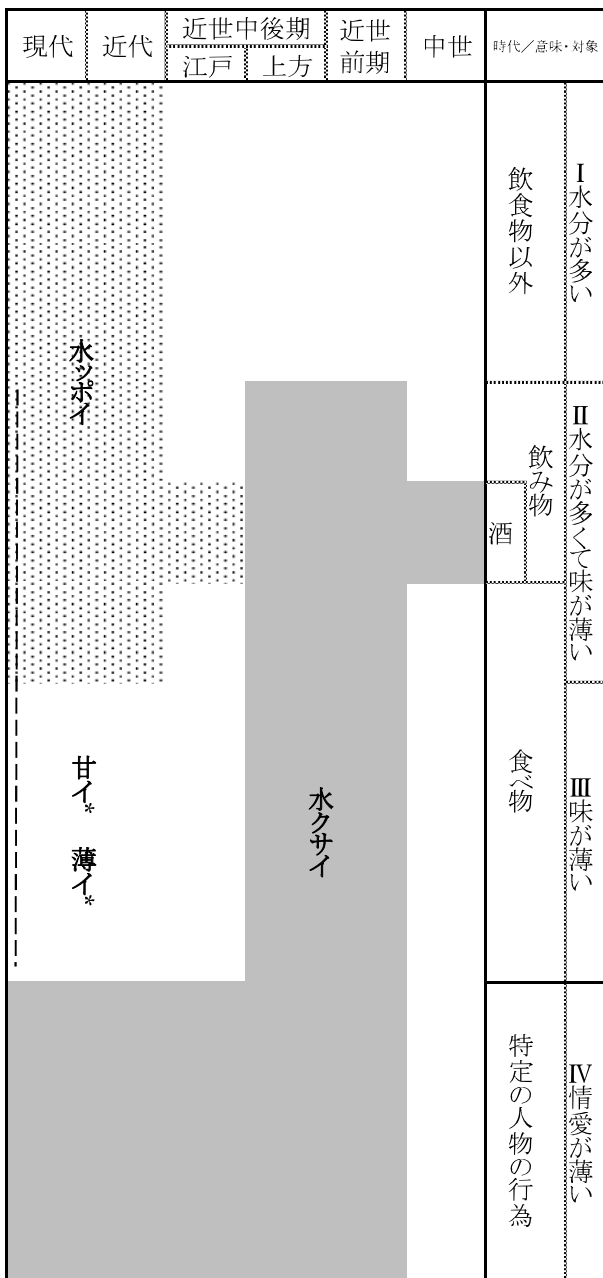
水クサイは、Ⅱ (水分が多く (酒の) 味が薄い) を表す語として中世前
期末に誕生し、近世には対象の拡大に伴う意味の抽象化を経て、Ⅲ (味が
薄い)、Ⅳ (情愛が薄い) をも派生させた。しかし、江戸語に「受容」され
たのはⅣの転義のみで、Ⅱは水ッポイ、Ⅲは甘イ・薄イ_三などの類義語の
存在によりそれぞれ「拒否」され、水クサイは感情形容詞としての表現価

値に支えられ現代語に至ることとなった^四。中央語の歴史として水クサイを観察した場合に、味覚表現形容詞としての意味Ⅱ・Ⅲから感情表現形容詞としての意味Ⅳへの意味変化が認められるのは、こうした類義語との共存が背景に存したのである。特に、水クサイが本来「水(分量)」に注目する語であったことを踏まえると、同じく「水(分量)」を描写する語であった水ッポイが、味覚表現語彙における競合の中で最も意識された水クサイの類義語であったと考える。

最後に、Ⅳ(情愛が薄い)さまを表す水クサイについて付言する。現代語では専ら、前掲例(11)・(21)・(22)のように、主体の想定する「①自身と特定の人物との近い間柄」が否定された場合に(他人行儀だ)という意味で水クサイが使用される。しかし、近世以前の水クサイは、前掲例(10)のように、主体の想定する「②人間として当然持っている情」が否定された場合に(冷淡だ)という意味でも使用される。すなわち、Ⅳとして一括りにした水クサイには、近世から近現代にかけて意味の限定化が生じたと推測され

るのである。このことは、現代国語辞書が、「(親しい間柄であるにもかかわらず)他人行儀であるさま。」『明鏡国語辞典(第二版)』、「親しい間柄なのに隔てをおく。他人行儀(ぎようぎ)だ。」『岩波国語辞典(第七版)』、「(もっともとしたしい関係のはずなのに)他人行儀だ。よそよそしい。」『三省堂国語辞典(第七版)』のように、前掲例(11)・(21)・(22)に相当する意味のみを記載するものが多いことから裏付けられる。Ⅳ内部における意味変化について論ずるには、類義関係にある漢語の薄情/冷淡/淡泊ダや、和

図三 水クサイ・水ッポイの意味領域の変遷



*『日本言語地図』第三八図などから現代語における意味領域を推測した。

語の冷タイ・ヨソヨソシイなどとの比較が必要となろう。これについては今後の課題としたい。

一 本章では主に中世後期以降を考察の対象とするため、形容詞(化接尾辞)の表記を(一)クサイとする。

二 小林 隆(一九八五)では、『日本語地図』の調査結果について、より詳細な意味の分析を進めるにあたり、(塩味が薄い)〈塩辛い〉(辛い)などの味覚表現の分野に興味深い結果が得られるのではないかとの見通しを立てている。

三 他に、『広辞苑(第五版)』[岩波書店・一九九八]、『大辞泉(増補・新装版)』[小学館・一九九八]、『岩波国語辞典(第七版)』[岩波書店・二〇一〇]、『新明解国語辞典(第六版)』[三省堂・二〇〇五]、『大辞林(第三版)』[三省堂・二〇〇六]なども参照した。概ね『日本国語大辞典(第二版)』と同様の語釈となっている。

四 挙例や、本調査による用例からは水分量が問題となっていると考えられる(後述)ため、I(水分が多い)とした。

なお、水ツポイのブランチは「③打ちとけずよそよそしい。水くさい。」と続く。しかし、挙げられている用例は管見の及ぶ限り孤例であるので、

例外として考察の対象としない。

なにも彼も打明けて呉れねえぢやあ、どうも水^ちつぽく^ちつて仕事^ちがしにくいんだが (半七捕物帳・帯取の池(一九二二) 岡本綺堂)

五 もちろん、甘イ・薄イが水分量を問題とする場合もある。甘イ・薄イを含めたより精緻な考察は今後の課題としたい。

六 「」は梵舜本に見えず、米沢本・古活字本によって補う。ちなみに、新編日本古典文学全集の「日来ハクイカニ」の現代語訳は、「ふだんは、少し水^ちつぽい酒^ちでしたのに、これは少し酒^ちつぽい水^ちというのは、どうしたことです」となっている。

七 同曲を所収する他流派・他台本(大蔵流虎寛本・虎光本、和泉流天理本、鷲流保教本・名女川本、続狂言記)においては、いずれも該当表現が見えなかった。

八 そもそもその転義発生の契機としては、『莊子』山木篇「君子之交淡若^レ水、小人之交甘若^レ醴」の存在が注目される。実際に、次のような模倣例も見える。

此夫婦は、正直にして柔らかに、陰言言わず人謗らず、君子^ちの交^ちは^ちり

ながら水くさからで、曾て少人の甘酒の、酔ても覚ても変はらぬ挨拶、
田舎に希なる今賢人なりし。
(艶道通鑑・四・五)

九 同曲を所収する他流派・他台本の状況は次の通り。

大蔵流虎明本・虎寛本・虎光本には該当表現が見えず、右近への罵倒表現のみであった。和泉流天理本には該当表現が見えなかったが、和泉家古本では、「なふおかしや・あのやうな事か言わるゝ事しや」、雲形本では「エ、夫様な比興な事がある物か」といった別の表現がとられる。鷺流名女川本には該当表現が見えなかった。

一〇 『和英語林集成(初版)』の水クサイには、味覚表現語的側面についての語釈“Raw or fresh taste, insipid.”も見えるが、これは辞書特有の前代・規範的な言語意識と見た方が良からう。

一一 『日本国語大辞典(第二版)』「みずっぱい」項の初出例はこの『残座訓』である。作者鈍九齋章丸、繁栄堂蔵版については十分に明らかでなく、確実な江戸語資料であるかを今確かめ得ないが、参考として挙げる。

一二 調査には、近現代既刊の小説テキスト、『口演速記明治大正落語集成 一〜七』『講談社・一九八〇・一九八一』『昭和戦前傑作落語全集 一〜六』

『講談社・一九八一・一九八二』、太陽コーパス、現代書き言葉均衡コーパス、近代デジタルライブラリー、聞蔵Ⅱを利用した。

一三 図三の甘イ・薄イは、『日本言語地図』第三八図などから推測される現代語の意味領域を示したに過ぎない。注五でも触れたように、この二語については、水分量に着目した通史的な調査を今後進めていく必要がある。

一四 「感覚を表わす語が心情を表わすものとして転用される」「情意的な相似」は比喩・詩的表現の側面が強く、意味変化として認めるべき段階に至る語例はあまり多くないと言われる(前田富祺一九八五)。しかし、水クサイは「情意的な相似」が完全に定着した語例と認められよう。

第三部 自動詞Ⅰ ニホフに見る両極の評価性の獲得

第六章 嗅覚表現自動詞ニホフの意味の下降

―「名詞＋スル」との共存過程から―

第一節 はじめに

現代共通語において、あるにおいがするさまを描写する場合、嗅覚表現自動詞として日常的に最もよく使用されるのはニオウであろう。これには、この語の文体的意味が影響していると考えられる。すなわち、同じく嗅覚表現自動詞であるカオル・クンズルが文章語であるの対し、ニオウは日常語としての側面をも有するために、見聞き・使用する機会が自然と多くなのである。また、上述の文体的意味が作用することで、カオル・クンズルの評価性はプラスに固定化され、その使用場面が限定的になるのに対し、ニオウは一語でプラス／マイナス両極の評価性を有し得る便利な語であるというのも一因であろう。ニオウは、対象の意味（評価性）においても、文体的意味においても、カオル・クンズルよりもその領域が広いのである。

ところが、古代語に目を向けてみると、ニホフは一語単独で専らプラスの評価性を有する語であることに気づく。プラス評価のみを表していた語にいつ意味の下降が生じ、どのようにしてプラス／マイナス両極の評価性を獲得するに至ったのであろうか。また、そもそも、一語が両極の評価性を有するという一見奇妙な現象が、なぜ成立し得るのであろうか。

本章では、ニホフがはらむ上述の意味変化の問題を、知覚動詞と同じ働きをする動詞スの一用法（例、「ニホヒガスル」「カゾスル」）と比較しつつ考察する。以下、この動詞スの一用法を自動詞的用法と呼び、総称として「名詞＋スル」を使用する。現代語における「名詞＋スル」（現代語では専ら「ニオイ＋スル」が使用される）は、連体修飾を伴い様々なおきの描写を可能にする分析的・複合形式として、総合的・単純一語のニオウとともにマイナスの評価性をもカバーしている。この自動詞的用法の近世以前における振る舞いにも考慮しながら、マイナス評価を表す形式として、ニホフと「名詞＋スル」とが共存するに至るまでの過程を考察することで、ニホフの意味変化をより大きな次元で捉えてみたい。

第二節 問題の所在

第一項 先行研究

序論第一章で述べたように、従来の嗅覚表現研究における問題意識は専ら、上代・中古におけるニホフやカヲルの美意識的側面の記述にあった。これに分類される先行研究については繰り返し紹介せず、ここでは、ニホフの意味変化を捉えるにあたり参考とすべき指摘を挙げていく。

(一) ニホフ

(一・一) 対象的意味(評価性)と文体的意味

現代語における動詞の意味記述を行う中でニオウ・カオルの二語を比較したものとして、宮島達夫(一九七二)や佐藤武義(二〇〇二)などがある。国語辞書の語釈からは見えてこない三二語の差異に考察が及んでおり、ニホフの語史を記述する上で大変参考になる。

宮島達夫(一九七二)は、現代語における動詞の表す評価について述べる中で、ニオウ・カオルの二語にも触れる。そして、ニオウがプラス／マイナス評価いずれも表し得る、あるいは、評価性を読み取りにくい場合があるのに対し、カオルはプラス評価専用の語であることを指摘する。また、動詞の対象的意味と文体的意味との関係を説く中でも、「よい評価をとまなうような現象をあらわす傾向がある」(七三〇頁)文章語の例としてカオルを挙げる。

宮島氏の言う、対象的意味と文体的意味との関係は、カオルがプラスの評価性のみを有することの説明においては十分であるものの、ニオウへの考察に関しては物足りなさが残る。すなわち、プラス／マイナス両方の評価性を有するニオウについて、その評価性(対象的意味)と文体的意味との関係がカオルと同様に考えられるか否かという点には触れられていないのである。この点について参考になるのが、佐藤武義(二〇〇二)である。

佐藤武義(二〇〇二)は、国語辞書における類義語の意味記述が同義語のそれに陥りやすいことについて述べ、「位相上の考慮を加えることが類義語の検討に手掛かりを与える場合」(一九頁)があるとし、その例としてニオウ・カオルを取り上げる。次に示すのは、佐藤氏のまとめられた表である。なお、語は歴史的仮名遣いで表記されるが、現代語に重点を置いた記述となっているため、本文中では現代仮名遣いで表記を統一する。

佐藤武義(二〇〇二)表

嫌な(句)	い(句)		カヲル	ニホフ
	日常語	雅語・文語		
×	×	○		
				○

ここで注目すべきは、ニオウの有するプラスの評価性(表中「いい(句)」)が、文章語(表中「雅語・文語」)と日常語との二側面から捉えられている点である。これが、佐藤氏の言う「位相上の考慮」である。宮島達夫(一九七二)がニオウをあくまでも日常語として捉えるのに対し、佐藤氏はニオウに文章語的側面をも認め^四、ニオウのプラス評価が「位相」という観点から二つに捉えられることを示した。つまり、ニオウが有するプラスの評価性は、(ある一面においては)カオルと同様に文体的意味からもたらされたと考えられるのである。

なお、佐藤武義(二〇〇二)では、ニオウが両極の評価性を有すること^五で生じる混同を避けるべく、将来的に「いい(句)」は「カヲル」、嫌な(句)は「ニホフ」と担い分ける(一九頁)ようになる可能性が高いと指摘する。ニオウのプロトタイプの評価性がマイナスになっていく可能性は十分に考えられ、今後の動向にも注意していく必要がある。

(一・二) 意味変化

序論第一章で見た通り、ニホフの意味変化が論じられる場合、感覚領域の変化に注目されることがほとんどであった。ここでは、それ以外のニホフの意味側面に触れたものについていくつか紹介する。

意味の下降

現代語と古代語とで、ニホフの評価性に差異のあること自体は古くから指摘があつた。管見の及ぶ限りでは、三木幸信(一九五〇)の「現代語の」ニホヒ・ニホフは、よい意味に付けわるい意味につけ、自由闊達な活動をしている(九頁)という指摘が早いものと思われる。次いで、田村専一郎(一九五四)に「かをる」は悪臭は拒否したが、「にほふ」は終にこれも受け入れて以て今日まで生き残つてゐる(四七頁)とある。一九四〇年代以降、美的側面へ焦点化した嗅覚表現研究が盛んになる中でも、数少ないながらこうした言及は見えていた。

しかし、問題は、いつどのようにしてニホフがマイナスの評価性を獲得したかという史的変遷である。これについて、岩淵悦太郎(一九七四)には、「古くは、ニオウ・ニオイが」嗅覚にいやな感じを与える意に使つたのは見えない。後者の意「||マイナス評価」に使うようになったのは大分後になってからなのではなからうか。」(七五頁)とあるばかりで、ニホフの意味の下降についての具体的な時期は知り得ない。

この点に関していち早く言及したのは、工藤力男(二〇一〇)である。工藤氏によれば、近世以前の字書において「臭」にニホヒ、と附訓したもの

はいまだ見出せていないとのことである。そして、調査は明治期まで一挙に下り、『和英語林集成(再版)』(一八七二)のニ、ホ、ヒに“effluvium”が見えること、落合直文著『ことばの泉』(一八九八)のニ、ホ、フの「臭」に「臭」を挙げながら、これらがマイナス評価を表すニ、ホ、ヒ、(ニ、ホ、フ)の早いものと見ている。

なお、『日本国語大辞典(第二版)』ニオウ項のブランチ^一(4)には、「(臭)とも書く) 嗅覚を刺激する気がただよい出る。香り、臭(くさ)みなどが感じられる。」とあり、挙例六例中一例(後掲例(3)『落窪物語』が「臭(くさ)みなどが感じられる。」の用例として示されている。これがはたしてニホフ一語でマイナス評価を表した用例であるのか、この他にどのような用例があるのか、語釈からは十分に知り得ない。

比喩的転義の発生

ニホフは、先の意味の下降の問題のみならず、比喩的転義の発生時期についても十分に明らかになっていない。『日本国語大辞典(第二版)』における「項のブランチ^二(9)には、「何となくそれらしい気配が感じられる。あまりよくないことについていう。」「どうやらにおってきた」という語釈が見えるのみで用例は挙げられておらず、その出現時期は不明である。ただし、

「あまりよくないことについていう」のであるから、意味の下降が生じマ
イナス評価を表すようになった後に比喩的転義が発生したと推測される。

なお、ニオウが(怪しい・疑わしい)の意味でクサシと類義になること
については、つとに岩淵悦太郎(一九七四)の言及があるものの、その類
義関係がいつ頃成立したのかについてはやはり触れられていない。

「「どうもあの男のそぶりがくさい」の例を挙げ」この場合のクサイ
は、疑わしい、あやしいという意味であろう。……この疑わしい、あ
やしいという意味には、ニオウを使うこともある。「大分におうぞ」
は「大分くさいぞ」とほとんど同じだ。(七四頁)

(二)「名詞＋スル」

「音ガスル」や「味ガスル」、「ニオイガスル」といった感覚表現語句は、
「意味的には動作の範疇を越え、一つの事態を表し」(平尾得子一九九〇…
五九頁)、「外的対象の様子を表現するものとなっていて、属性形容詞的に
なっている」(小出慶一二〇〇五…八頁)と言われる自動詞的用法^六である。

本研究では、このような名詞と動詞スルとの結合を「名詞＋スル」と呼ぶ
ことにする。「ニホヒ＋スル」に限定しないのは、後に見るように、カをは

はじめとしたニホヒ以外の嗅覚表現名詞が近世以前において一定数存在し、これらを含めて論じようとするためである。

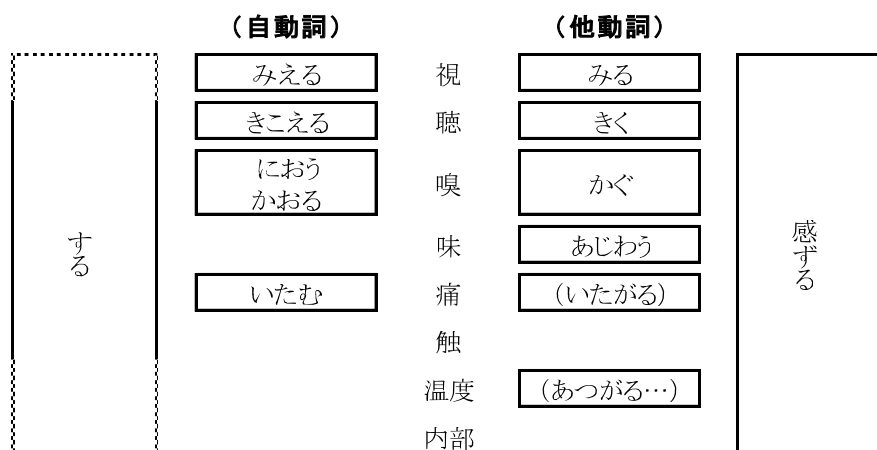
以下、「名詞＋スル」に関する先行研究を見ていく。

(二・一) 現象を表すスル

宮島達夫(一九七二)

は、「1つ1つの感覚をあらわす動詞のほかに、いろいろな分野の現象をひっくり回してあらわすもの」(六五四頁)、「いろいろな感覚の領域をおおう、抽象的な表現」(六五六頁)として自動詞スル(また他動詞感ズル)を挙げる。これを含め感覚動詞の全体像をまとめたのが次の図である。嗅覚表現にも、

宮島達夫(一九七二)六五五頁図



ニオウ・カオルに対応する自動詞スルの存することが示される。

さらに、例えば嗅覚表現の場合、ニオウはその対象として、現象(例、カオリ)も、もの(例、花)もとり得るのに対し、スルは現象しかとらないことを指摘し、スルが「感覚の表現ではなく現象の表現——対象がそのような感覚をひきおこすような状態にあることの表現」(六五八頁)であると述べる。また、このことは、感覚の主体が表現されないという点にも現れているとする。「感覚の表現ではなく現象の表現」という指摘は、前述した「外的対象の様子を表現するものとなっていて、属性形容詞的になっている」という小出慶一(二〇〇五)の指摘と通じよう。

なお、スルが現象のみを対象とすることについては、福田成樹(二〇〇四)により詳しい考察がある。福田氏によれば、感覚表現における「名詞＋スル」は、ガ格で示される刺激(名詞)を、発生部(主題)から分離して意識したことを表すと言う。つまり、「名詞＋スル」は、もの(発生部||主題)ではなく現象(刺激||名詞)に焦点化した表現ということである。

(二・二) 機能動詞としてのスル

村木新次郎(一九九一a九)は、「名詞＋スル」のスルを典型とした機能動詞として「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な

機能をはたす動詞」二〇三頁) についてその全体像を明らかにした。その冒頭では、「なにかにおう。」「なにかにおいがする。」などの動詞―機能動詞の組み合わせを挙げ、形式は異なれど同義性が保たれていることを指摘する。

村木氏は、機能動詞と結び付く名詞を整理し、典型的には動作・行為を表す名詞(例、誘いをかける、盗みをはたらく)をとること、その周辺に、状態名詞(例、平和をたもつ、不振におちいる)や現象名詞(例、氷がはる、においがする、息をする)があることを明らかにした。三つ目の現象名詞をとる機能動詞の記述は、宮島達夫(一九七二)のそれと重なるものである。また、この機能動詞と結合する名詞群は、それを限定する連体修飾を義務的に必要とする(例、*思いがする)という形態統語論上の制約があるとも述べる。

さらに、動詞単独では表しにくく機能動詞と名詞との結合によってしか表せない場合があるとして、次のような例を挙げる。

(19) 茶をほうじる芳しい香りがする。

(20) 南アフリカ沖合いで核実験とみられる大きな爆発があった。

ここでは、右の二例を「ある種の現象を表現する文」(二三四頁)と説明するのみで、どのような場合に右のような名詞+機能動詞の表現のみが自然となるのかについては詳細な言及がない。これについて推測するに、動詞単独では漠然とした現象を表す(例(19)であればカオル、例(20)であれば爆発スル)ために、その現象をより具体的に描写しようとする場合、連体修飾を必須とする名詞を表現にとりこんだ機能動詞との語結合が登場する、ということであろう。これは、機能動詞と結合する名詞に形態統語論上の制約がある(前述)ことからたらされる結果である。

(二・三)「ニオイ+スル」の評価性

小出慶一(二〇〇五)は、知覚動詞の語彙構造を、探索的な局面・受容的な局面の二側面から把握し、次のような表を提示する^二。

表1中、「1)特殊感覚―嗅覚×受容型―単独形」のニオウ・カオルを括弧で括るのは、特定の価値を持ったものを対象とするという制約が存在する点において、見エルや聞コエルと異なるためと述べる。その制約とは、ニオウ・カオルが芳香・悪臭という嗅覚刺激の両極のプロトタイプ(ただし、カオルは芳香のみ)を語彙化するというものである。

小出慶一(二〇〇五)四頁(表1)

		探索型	受容型 単独形	複合形
1)特殊感覚	視覚	見る	見える	—
	聴覚	聞く	聞こえる	～音がする
	味覚	—	—	～味がする
	嗅覚	かぐ	(匂う・香る)	～匂いがする
	平衡感覚	—	感じる	—
2)体性感覚	—表面	触る・触れる	感じる	—
	深部	触覚以外	—	—
		—	—	—
3)臓器感覚	—	—	感じる	～がする

て、前者が「空間全体に漂うにおいを対象とする」のに対し、後者は「特定のものから嗅覚刺激として提出されている刺激を対象とする」(九頁)と

これに対し、「1)特殊感覚——嗅覚×受容型——複合形」の「ニオイ＋スル」は、その使用範囲がニオウ・カオルよりも広いことを指摘する。すなわち、ニオウ・カオルが担わないプラス／マイナスの評価性の間を担当するのが「ニオイ＋スル」なのである。加えて、ニオウと「ニオイ＋スル」との意味上の差異についても言及する^{二〇}。小出氏は、「排気ガスがにおう」と「排気ガスのおいがする」との二文を比較し

いう相違点を見出す。これは、先に見た村木新次郎(一九九一a)や福田成樹(二〇〇四)の見方と繋がる。つまり、動詞単独では漠然とした現象を表す(村木新次郎一九九一a)ために、「空間全体に漂うにおいを対象とする」と言えるのであり、また、「名詞＋スル」がもの(発生部Ⅱ主題)ではなく現象(刺激Ⅱ名詞)に焦点化した表現である(福田成樹二〇〇四)ために、「特定のものから嗅覚刺激として提出されている刺激を対象とする」と言えるのである。

第二項 本研究の立場

如上の先行研究より、史的観点からの考察を行う本研究の目指すところを次にまとめる。

まず、ニホフの意味を論ずるにあたっては、可能な限り客観的に評価性を判断することから始めたい。その上で、ニホヒ(ニホフ)が近代にはすでに意味が下降していたという工藤力男(二〇一〇)の指摘や、『日本語大辞典(第二版)』の示す『落窪物語』の用例(後掲例(3))を参考に、ニホフの意味の下降の時期をどこまで遡ることができるのかを見ていく。

その際、現代語ニオウが両極の評価性を有し得た要因を説明する必要も出てくる。そのため、意味の下降に直接関わるマイナス評価を表すニホフ

ばかりでなく、プラス評価を表すニホフの動向にも注意する。これはつまり、プラスの評価性を支える文体的意味にも配慮した考察を必要とすることを意味する。

次に、意味の下降の後に発生したであろう比喩的転義の出現時期についても明らかにしたい。本論第一部第三章ですでに明らかにした通り、クサシの比喩的転義（怪しい・疑わしい）の発生は近世前期である。このことを参考にしながら、ニホフに比喩的転義が発生する時期（ニホフとクサシとの間に、比喩的転義においても類義関係が結ばれる時期）についても調査することにする。

また、右に傍点で強調したように、ニホフとその連用形名詞ニホヒとを同語的に扱うという工藤氏の考察の方法それ自体も検討する必要があると思われる。本論第三部第七章で詳述するように、嗅覚表現語彙においては、自動詞ニホフと名詞ニホヒとで意味の下降の原因（競合する類義語）は異なると考えられるためである。本研究では、自動詞と名詞とでそれぞれの語史を記述することにする。

このように品詞を厳密に区別した上で、自動詞と同じ働きをする自動詞的用法「名詞＋スル」にも目を向け、これと比較しながらニホフの表現特性について、さらには嗅覚表現自動詞語彙の変化を考察してみたい。こう

した、語・連語・慣用句などの枠を越えた表現の「連合的意味」に留意した考察の必要性については、すでに前田富祺（一九九〇c）の述べるところであり、自動詞と自動詞的用法との関係の史的変遷について取り上げる意義はあると言える。

なお、先行研究では現代語を対象としていたため「名詞＋スル」は専ら「ニオイ＋スル」を指していたが、これでは近世以前の史の様相を対象とした場合に不十分である。すなわち、近世以前の嗅覚表現名詞には、ニホヒの他、カなど注目すべきものが数語存在するのであり、これらをも対象として「名詞＋スル」の史的変遷を描き出さなければならないであろう。本研究では、時代により「連合的意味」に関わる表現が異なる点にも注目する。

ところで、プラス評価を表すニホフに関しては、専らプラス評価を表すカナルやクズとの関連も問題となる。そもそも、ニホフに意味の下降が生じた要因は、この二語の意味・用法が限定的であった／限定化したことに求められる。しかし、ニホフの意味の下降の過程に関しては、「名詞＋スル」との比較で最低限論ずることができると考え、カナルやクズの語史についてはそれぞれ本論第四部第八章・第九章に譲ることにしたい。

第三節 用例の分類基準

序論第二章ですでに述べた通り、語の評価性は対象と修飾成分の二段階で判断する。

再掲 評価性の判断基準		修飾成分	
語自体の評価性	対象		
プラス	穢れ以外	*マイナスの評価性を有する 修飾成分あり	*プラスの評価性を有する 修飾成分あり
中立的	穢れ		
マイナス			

* 修飾成分を含めた表現全体の評価性はマイナス
* 修飾成分を含めた表現全体の評価性はプラス

ただし、本章では、修飾成分のうち、プラスの評価性を有するものについては特に取り上げないことにする。これは、特にマイナス評価を表すニホフの登場に焦点化し論述を進めようとするためである。修飾成分と認定した語については序論第二章を参照されたい。

なお、筆者は意味の下降を次のように考える。まず、単独でプラス評価を表していた語が、マイナスの評価性を有する修飾成分を伴い、語自体の評価性が中立的になる。これを意味の下降の初期段階と見る。さらに、マイナスの評価性を有する修飾成分を伴わずに、一語単独でマイナス評価を

表すようになり、意味の下降は終了する。つまり、意味の中立化を、意味の下降の一段階として捉えるということである^三。

第四節 ニホフの史的変遷

第一項 ニホフの評価性

次に示す表一に沿って、ニホフの評価性の史的変遷について考察していく。表一は、第三節で述べた基準によってニホフの評価性をプラス／中立的（表現全体としてはマイナス）／マイナスの三つに分け、それぞれの用例数を示したものである。表中では、プラスの評価性を「+」、マイナスの評価性を「-」、評価的に中立ではあるもののマイナス評価を表す修飾成分を含めた表現全体ではマイナスの評価性となっているものを「 \ominus 」でそれぞれ代えて表した。

(一) 上代

上代のニホフはプラスの評価性を有する用例しかなく、意味の下降は認められない。

- (1) 手に取れば 袖さへ丹覆 女郎花 この白露に 散らまく惜しも

表一 ニホフの評価性

語(句)	ニホフ		
	+	-{m}	-
資料ジャンル\評価性			
記紀万葉・上代計	58(58)	0	0
	58(58)		
仮名散文Ⅰ期・中古計	129(56)	1	0
	130(56)		
仮名散文Ⅱ期	50(20)		
説話	23(9)		1
和漢混淆文Ⅰ期	16(3)		
中世前期計	89(32)	0	1
	90(32)		
和漢混淆文Ⅱ期	4(1)		
室町物語	2		
抄物・キリシタン資料・狂言台本	12(1)		
中世後期計	18(2)	0	0
	18(2)		
狂言台本Ⅰ期	3(3)		
仮名草子	5(3)		1
浮世草子	3(2)		1
嘶本Ⅰ期	9(5)		2
井原西鶴作品	9(9)		
浄瑠璃Ⅰ期(近松)	8(4)		
近世雑Ⅰ期	3(3)		2
俳諧Ⅰ期	20(17)		
近世前期計	60(46)	0	6
	66(46)		
浄瑠璃Ⅱ期	5(2)		
狂言台本Ⅱ期	9(7)		1
談義本	4(1)		
嘶本Ⅱ期	16(2)		
近世雑Ⅱ期	2		
洒落本	7(6)		4
黄表紙			
読本	6(2)		
滑稽本	6		2
人情本	3(2)		
俳諧Ⅱ期	14(12)		1
近世中後期計	72(34)	0	8
	80(34)		
総計	426(228)	1	15
	442(228)		

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

(万葉集・卷一〇・二一一五)

本(室町時代の写本(新日本古典文学大系))においても「くさくにほひた

(2) わご大君の うちなびく 春の初めは 八千種に 花咲き爾保比

る」とある。前後を校異した結果本文の大きな乱れは見られず、この箇所

山見れば 見のともしく 川見れば 見のさやけく 物ごとに 栄

も原態を留めている可能性が低くない。

ゆるると 見したまひ

(万葉集・卷二〇・四三六〇)

(二) 中古

中古に至ると、マイナス評価を表す修飾成分を伴い、評価的には中立な

ニホフが現れる。一例と用例は少ないものの、中古にはニホフに意味の下

降が生じ始めたと考えられる。もちろん、例(3)が寛政六年刊記古活字本で

ある点には、一応の留保が必要である。しかし、現在最古とされる九条家

(3) 柩戸の廂二間ある部屋の、酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋の、

たゞ畳一枚口のもとにうち敷きて、「我が心を心とする物は、かゝる

め見るぞよ」とて、いと荒らかに押し入て、手づからつい鎖して、錠

強く鎖していぬ。君は、方に物の香くさくにほひたるがわびしければ、

いとあさましきには、涙もいでやみにけり。

(落窪物語)

落窪の姫君の幽閉された部屋に漂う「物の香」（「酢、酒、魚など」が入り混じったにおい）は、穢れなどの不快なおいというよりも、快くはないにおいではあるまいか。一語単独でマイナス評価を表す形容詞（〜）クサシではなく、あえて「クサシニホフ」と表現したことからそれは裏付けられる。ニホフの意味の下降は、まず、こうした快くはないにおいの描写に際して生じ、次第に、一語単独で不快なおいを表すように変化していったと推測される。

なお、この例(3)は、第二節第一項（一・二）で触れたように、『日本国語大辞典（第二版）』「におう」項のブランチ(4)「（臭）とも書く）嗅覚を刺激する気がただよい出る。香り、臭（くさ）みなどが感じられる。」の傍線部に該当する用例として挙げられているようである。しかし、前述の如く、この用例のニホフの評価性は一語としては中立的であると見た方が良からう。

(三) 中世前期

中世前期末の『沙石集』（二二八三）には、一語単独でマイナス評価を表すニホフが登場する。若い女房の失態によって興ざめた所、導師が楽器や薫物などを引き合いに出しフォローしている話である。

(4) 若キ女房、礼盤近ク居テ、眠リケルガ、堂ノ中モ響ホドニ、下風ヲシタリケルガ、香モ事ノ外ニ句^上テ、興サメタル所ニ、導師是ヲ聞テ、「簫・笛・琴・箏・篳篥・琵琶・鏡・銅鉞、其音モタヘナリト云ドモ、香気ヲ具セズ。多摩「[羅]」跋香多伽羅香、其香カウバシト云ヘドモ、音声ヲソナヘズ。今ノ御下風ニヲキテハ、声モアリ。句モアリ、聞ベシ、カイフ^{一四}ベシ」
(沙石集・卷六・八)

中古に意味の下降が始まったニホフは、中世前期末に至り一語単独でマイナス評価を表す語として使用されるほどになった。

(四) 中世後期

中世前期末にはすでに、一語単独でマイナスの評価性を獲得していたと考えられるニホフであるが、中世後期にはプラス評価を表す用例しか見えない^{一五}。

ただし、当代の辞書に目を転ずると、ニホフは確かに前代までの評価性を引き継いでいることが分かる。『羅葡日辞書』（一五九五）には、マイナ

ス評価を表す修飾成分を伴い、評価性としては中立的なニホフが散見されるのである^{一六}。

(5) Foeteo—Axiq niuó, cusaxi.

(羅葡日辞書) 『ラホ日辞典の日本語本文篇』 勉誠出版・二〇〇五]

(6) Spurcus—Yocoximanaru mono, qegarauaxiqi coto, cōxocu naru
mono.—cusaqi mono, xūqi aru mono, vel axiqu niuó mono.

(羅葡日辞書) [「同右」

一語単独で、あるいは、修飾成分を伴い表現全体でマイナス評価を表すニホフが(一時的に)出現しない要因として、この頃発達し始めた接尾辞・クサシの存在が考えられる(本論第二部第四章)。中世後期に限らず、通史的に見てマイナスの評価性を有するニホフの全用例数が少ないことも、不快なにおいの描写に専ら形容詞が使用されたことを示唆していると考えられる。

(五) 近世前期

一語単独でマイナス評価を表すニホフ六例は、当代の用例数の約一割を占める。中古に始まるニホフの意味の下降は、この頃には定着したと見て良からう。ただし、意味が下降した後も、単独でプラス評価を表し続けていることに注目したい。現代語のニオウのように、一語でプラス/マイナスの評価性両方を有するニホフが、近世前期に誕生したのである。

(7) をかし、なまなりを漬けける女ありけり。男近う有けり。女歌詠む人なりければ、心見にとて菊の花の美しきを敷きて、男のもとへ遣る。なまなりの鮭をば五つ白菊の枝になりつゝぶらめくと見ゆ男、知らず詠みに詠みける。「腐りつゝにほふがうへのなまなりは呉れける人の物ゝかと思ゆ」 (仁勢物語・一八)

(8) 一 西浄「雪隠」をかう屋トいふ事に二説あり。一にハかミ「雪隠」紙」ををろすト云事シヤ。又一ニハにほふトいふ事シヤ。

(寒川入道筆記)

ニホフは、意味の下降が進行する過程において、マイナス評価を表す修飾成分を伴い、それ自体の評価性が中立的と認められる場合もあったが、前掲例(3)以降はそうした用例が見えず、中世後期の『羅葡日辞書』にわず

かに確認できるのみであった。そうした変化の過渡期を経て、近世前期に至ると、ニホフは専ら単独でプラス／マイナス評価のいずれかを表す語となつたのである。

(六) 近世中後期

近世前期に定着を見たニホフの評価性の在り方は近世中後期にも引き継がれ、ニホフは専ら単独でプラス／マイナス評価いずれかを表す。マイナス評価を表すニホフは、近世前期と同様に、当代の用例数の一割を占める。また、洒落本や滑稽本などの口語体資料(9)だけでなく、例(10)のような俳文集にも見られた。例(10)は、和歌に散見される言い回しを真似ている用例である。

(9) そらね さむそうななりにて、あたまのしらがもとゆひのさき、両方を紙にて いはえ、おいらんの中をりの駒げたと、じぶんのげたと、さげて来る。「ヲヤもふ、そふじ」「||便所汲取掃除人」がきたさふだ。いつそ句ふよ。らうかにはねずのばん、多くのあんどうをならべ、さうじしてゐる。

(青楼昼之世界錦之裏)

(10) つゐに鎌倉に嗅つけられて、七日の説法屁一つに破れぬれば、はては資朝・俊基の屁負ひ比丘尼_{ニヒ}となられける。または雑混寝の暗がり、主知らぬ香「||放屁の||」||こそ句へれと、歌人は詠みもおきしか。

(鶉衣・前篇・鳥羽絵賛)

以上見てきた史的変遷を簡単にまとめる。

上代ではプラスの評価性しか有していなかったニホフが、中古には意味の下降が始まり、マイナス評価を表す修飾成分を伴い、ニホフ自体の評価性は中立的と考えられる用例が見られ始める。そして、中世前期末には一語単独でマイナス評価を表すに至る。近世期にはマイナス評価を表すニホフが全用例数の一割程度確認されるようになり、現代語と同じく両極の評価性を有するニホフが定着することとなった。

如上のニホフの評価性変化に対し、「名詞＋スル」のそれはどのような史的様相を呈するのであろうか。第二項では、第一項で見えてきたニホフと適宜対照させながら、「名詞＋スル」の史的変遷を考察していく。

第二項 「名詞＋スル」の評価性

「名詞＋スル」の名詞には、ニホヒ・カ・カフリ・カザの四語に加え、漢字表記のため読みの分からない名詞がある。このうち、「ニホヒ／カ＋スル」以外の三形式については、次のような理由から表に用例数を掲載しなかった。

まず、「カフリ＋スル」は、近世前期二例、近世中後期一例の計三例と全体数が少ない。「ニホヒ／カ＋スル」のように多用された形式ではないため、論述の煩雑さを避けるためにもここでは特に触れないことにする。なお、この三例はすべてプラス評価を表す。

次に、「カザ＋スル」は、本論第三部第七章でも述べるように、カザが上方語に特有の語であり、その用例数も近世前期三例、近世中後期三例の計六例と多くない。ただし、カの派生語と考えられるカザ（堀井令以知一九八九）は、「カザ＋スル」も「カ＋スル」に準じてその評価性を捉えることができ、注目すべき用例もあるため、本文中で適宜言及することにする。

最後に、「読み不明名詞＋スル」は、全一四例中一二例がカと読む可能性の非常に高い「香」という漢字表記の名詞であり（八、その評価性も「カ＋スル」と重なるようである。ここでもやはり、論述が様々な形式を往復することを避けるために、用例数を表に掲載しなかった。触れるべき用例については本文中で適宜言及することにした。）

ところで、本論第三部第七章で詳述するように、両極の評価性を有する嗅覚表現名詞は、中世後期を境にカからニホヒへと交替する。ここでは、そうした名詞に個別の問題を踏まえつつも、ニホヒとカとを総合した「名詞＋スル」全体の傾向を把握することに重きをおきたい。

以下、調査結果をまとめた表二に従い考察を進める。

（一）上代・中古

ニホフが上代から多用されていたのに対し、「名詞＋スル」は「ニホヒ＋スル」がわずかに一例あるのみである。評価性はプラスである。

- (11) 紅に 染めてし衣 雨降りて 爾保比は為とも うつろはめやも

（万葉集・巻一六・三八七七）

中古に至ると、「ニホヒ＋スル」に加え、「カ＋スル」や、「カ＋スル」と考えられる「香＋スル」も登場する。いずれもプラス評価を表す用例である。

表二 「名詞＋スル」の評価性

語(句) 資料ジャンル\評価性	[ニホヒ＋スル]			[カ＋スル]		
	+	-{n}	-	+	-{n}	-
記紀万葉・上代計	1(1)	0	0	0	0	0
	1(1)			0		
仮名散文Ⅰ期・中古計	2	0	0	3(1)	0	0
	2			3(1)		
仮名散文Ⅱ期						
説話						
和漢混淆文Ⅰ期						
中世前期計	0	0	0	0	0	0
	0			0		
和漢混淆文Ⅱ期				2(2)		
室町物語						
抄物・キリタン資料・狂言台本	4			2		
中世後期計	5	0	0	4(2)	0	0
	5			4(2)		
狂言台本Ⅰ期	3	1		5(4)		
仮名草子		1	1	3(1)		
浮世草子	1	4	1		2	
嘶本Ⅰ期	6			2(1)	2	
井原西鶴作品						
浄瑠璃Ⅰ期(近松)						
近世雑Ⅰ期	2					
俳諧Ⅰ期						
近世前期計	12	6	2	10(6)	4	0
	20			14(6)		
浄瑠璃Ⅱ期	2		1			
狂言台本Ⅱ期	9		1	5(4)		
談義本		1				
嘶本Ⅱ期	6	5			4	
近世雑Ⅱ期	1	2				
洒落本	4		2			
黄表紙	2	3				
読本						
滑稽本	3	6		1(1)	1	
人情本					1	
俳諧Ⅱ期						
近世中後期計	27	17	4	6(5)	6	0
	48			12(5)		
総計	47(1)	23	6	23(14)	10	0
	76(1)			33(14)		

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

(12) 「宮の御方は、にほひこそこよなう劣りけれど、あてにをかしう、心にくげなる方などは、またをかしかんめり」など、さまざま見ゆる中に、兒姫君、今咲き出づる花のにほひして、いみじうをかしげにおはするを、大将ひぎにすゑて、搔ひ撫でつゝ、(浜松中納言物語・巻四)

(13) 御火取召して、山の土所々心みさせ給へば、「文は」更に類なきかす。鶴のかも似る物なし。白き香色と見給へば、麝香の臍半ら程ばかり入れたり。取う出てかを心み給へば、いとなつかしくかうばしき物の、

例に似ず。

(14) 「人のけはひせじ」とて、猶、動かで見給ふに、若き人、「あな、かうばしや。いみじきかうの香こそすれ。あま君のたき給ふにやあらむ」と言ふを、いま一人の女、「げに、あな、めでたの、物のかや。京の人は、猶、いとこそ、みやびかに、今めかしけれ(源氏物語・宿木)

「カ＋スル」が加わったとは言え、「名詞＋スル」として総合しても全六

例〔「ニホヒ＋スル」二例、「カ＋スル」三例、「香＋スル」一例〕である。当代のニホフが二三〇例あることと比較すると、「名詞＋スル」は非常に少ない。

(二) 中世

中世前期には一時的に「ニホヒ／カ＋スル」が見えないが、「香＋スル」であれば五例確認できる。また、この五例中一例は、評価性は中立的で、修飾成分を含めた表現全体でマイナス評価を表す「香＋スル」である。これが、「名詞＋スル」が不快なおいの描写に使用された初出例ということになる。「香」の読みを断定することは難しいが、嗅覚表現名詞全体の傾向と照らし合わせて、この頃の「香」は力である可能性が非常に高いと考えられる（本論第三部第七章参照）。名詞のみならず、自動詞的用法「名詞＋スル」においても、「ニホヒ＋スル」に先んじて「香（カ）＋スル」が中立的な評価を表すに至ったと考えられる。

(15) 「聖」山フトコロラスギ往間、人ハルカニタエタル所アリ。ソコロス

ギ往程ニ、エモイハズ嗅クサキ香スニ。漸々寄テ見レバ、草枯レ、イナラ

ヌ所アリ。鳥獸ノダニ見ズ。嗅ニカノタヘガタケレバ、鼻ヲ塞ギテ、

アヤシサニ強ヨリテミレバ、一人死シ人アリ。「コレガ香ナリケリ」と見程ニ、ミジロク様ニス。（打聞集・第九話・玄奘三蔵心経事）

中世後期は、ニホフがそうであったように、中立的／マイナス評価を表す「名詞＋スル」が未見である。この背景には、前述したようなクサシの存在があると考えられる。

(三) 近世前期

近世前期に至ると、「ニホヒ＋スル」は、プラス評価に加え、中立的／マイナス評価をも表すようになる。

(16) 扱、見立て大方心にかなひ、物ニ成べきをば。朝夕湯をひかせ磨くべし。髪は垢づかぬ様に洗ひなし、油してすくべし。品よくなりたるは、き、鬢付けを用ゆべし。未だ鬢付けなれぬ髪に。あくまで付けたるは、そこ艶なく。うは光りて。結句よく付きたるが、したるくてうるさし。大髻オオカマは、水を含むものなれば。あしきにほひする事なり。

（男色十寸鏡・上・少年若道のしたて気をとをす事）

(17) いかな楊貴妃の開中にでも、納豆三粒の匂ひはする。是、お定まりじ

やとの沙汰也。分ての薰大将と名に高きは、青ばいがおもわく様。粗忽に昼寝はさせぬ也。頬先の赤は、仰にくさいとの看板也。そのみならず、毛深い女と。色ふくべのごとく成と。こし気のあるは、かほり侍る事。ふしかねふるしぶ、しほからつぼ。せゝなき。すいもん。あるとあらゆる匂ひがする也。

(好色貝合下・臭開しうかい)

マイナス評価を表す修飾成分を伴い、それ自体の評価性が中立的である形式としては、中世前期に「香(カ)＋スル」が確認された。近世前期にも同様の用例はあるものの、用例数のみを比較した場合、すでに「ニホヒ＋スル」に取って代わられていると言えそうである。これは、中世後期に、両極の評価性を有する名詞としてカとニホヒとが交替するという名詞側の事情(本論第三章第七章)が、「名詞＋スル」にも反映されていると考えられる。

なお、次に挙げるのは、「カ＋スル」と「カザ＋スル」とがほぼ同義の形式として使用されている用例である。あるいは、「カザ＋スル」を使用する客人と「カ＋スル」を使用する亭主との間に地域差が認められる可能性もあろうが、少なくとも文脈からはそうした差異は読み取れない。

(18) ある人の所へ、はうばい一兩人つれだちて、はなしにゆく。ていしゆ

出合て、はなしふるまひをして出ず。ぜんなかばに、客人申さるゝ「火の傍に何ぞくばりたるか、あしきかさかする」と言ふ。亭主聞て、人を呼び、「火の傍に、何ぞあるか見よ、何やら、わるいかゞするぞ」と、言ひ付ければ、……「火のはたを、よく見て御ざれとも、なにも御ざらぬが、御方様の、火にあたりて御座る」

(昨日は今日の物語・上)

ところで、この頃、専ら単独でプラス/マイナス評価のいずれかを表す語となったニホフとは対照的に、「ニホヒ＋スル」は、それ自体の評価性はあくまでも中立的であり、修飾成分を含めた表現全体でマイナス評価を表す用例が多いことに気づく。これは、「カ(ザ)＋スル」にも指摘できる「名詞＋スル」全体の傾向である。

(四) 近世中後期

こうした「名詞＋スル」の評価性の在り方は、近世中後期にも引き継がれる。すなわち、「ニホヒ＋スル」をはじめとする「名詞＋スル」は、それ

自体の評価性があくまでも中立的なのである。ただし、結果的に表現全体でマイナス評価を表すことになる点に留意しなければならない。つまり、「結果としてマイナス評価を表す」という観点からニホフト「ニホヒ＋スル」をはじめとする「名詞＋スル」とを比較した場合、前者は八例、後者は二九例（ニホヒ二一例、カ六例、カザ二例）となり、後者が優勢であることが分かるのである。

(19) 鬼瓦「……へんく草や性根草が小沢山に生たが、猫の穢物の乾かた

まりと一緒に、ふんくくと鼻へ這入る。とんだ所で草いきれを麩物だぜ。まだおつりきな句がするやうだ。フンく。トかぎあてゝハ、

ア鳶めがいつの間にか鰻の骨をさらつて来て棟瓦の箱へ隠したナ。…

…
(大千世界楽屋探・初編・巻之下)

なお、先に「結果としてマイナス評価を表す」「名詞＋スル」に「カ＋スル」を含めたが、これが文章語（雅語）的であることについて補足しておきたい。「結果としてマイナス評価を表す」「カ＋スル」六例中、四例は文語体の嚙本資料の用例であった。少々長くなるが、引用する。

(20) 昔、博打集まりて、河豚の魚を買ひて、とりく食らんとせしに、

あしきかのしけれバ、こは、あされたり。この魚ハ人を殺すこと、例なきにあらざ。さハうち捨てよなど言ふを、さるにても、いたづらにあし費やし、おほかたに食はで止みなむも、心ゆかずあると、言ひしろひけるに、老たるかたみのわなきて、通りけれバ、試ミによびて、此魚食へとてやれば、かけたる筈に入れ、うちさげて行きぬ。とばかり過して、かのかたみ、いかなれると、河原に人やりて見すれば、こともなく物乞ひてをりといふ。さらバ此魚食ひたりともあしからじとて、たゞ食ひに食ひつ。されど猶わるきかのすれバ、思ふさまにも食はず、いさか食ひ余れるを、これ、いぬにやくハせましなど言ひてをるとき、かたみ、また門を通りけれハ、呼びて、これ、猶持ちて去ねとてやれば、はじめの筈に入て手にもち、いたゞきつ言ひけるは、きんだち、この魚、とくめされつるにやといふ。皆今食ひて、そハ残りなりと言へバ、さは、きこしめしたるにこそ。はじめ給ひつるもの、少々くさきかのし侍れバ、ようせずハ、腹を損なひなんとて、なほ食ハで置いて侍。きんだちの、しかきこしめしたるうへ、こともなくおはせば、おのれもまかりて、すなはちたうべなむとて、たちはしり、河原のかたへ去にけり。身を大事におもへバ、かたみすら、あし

きかのせしを食はざりける。この博打、かたゐには劣りたるものなり
けりと、心ある人は、笑ひけるとか

(しみのすみか物語・博打河豚を喰事)

残る二例は、一例が文語体で書かれた人情本の地の文の用例であり、も

う一例が滑稽本に見られた隠居の発話の用例である。

(21) 斯いふ時こど信心の徳もあらめと自ら暁して、心細くもたゞ独、鈴の

森へとさしかゝるに、上には松の梢颯々と鳴わたりて、吹風膚を通し、

岸打つ波は耳を駭かして、いと腥臭のするは、馬死捨場と思はれ

て、凄き事限りなく、宵暗なればたゞ一足の、先さへ見えぬ覺束なき、

幽に光沖の漁火も、波に揺れて惑ひは隠れ、遙かに聞ゆる狗の声は、

猶魂を消なるべし。(閑情末摘花第三編卷之中・第一五回)

(22) いんきよ「モシ、ゑどのお客、さけひとくち、どふじやいな」北八

「コレハおたしなみでございやすね」いんきよ「もふでけたそふじ

や」トさいろうのにしめなど出し、いんきよ、さかづきに少しついで

いんきよ「ドレおかん見ましょかい。イヤこれは、けたいな香がする。

べツ、べツ、コリヤ酒がわるなつたのか、よもやそじやあるまい。

ひとつ、おまいのんで見てくだんせ」トきた八へさかづきをさす 北
八「ハイ、これは、ヲト、べツ、ト引うけてぐつとのんでしまひし
が、何とやら、しほばゆきよふにて、へんなにはひのする酒だと、こゝ
ろにおもひながら、むねをわるくして、なでさすりく

(東海道中膝栗毛・六編・上)

例(22)では、老人の発話に「カスル」が使用されているのに対し、続く

北八の発話では「ニホヒカスル」が使用されている。このことから、当
代の日常語として一般的であったのは「ニホヒカスル」であつたと考えら
れよう。

また、韻文における使用に注目した場合にも、「カスル」が文章語(雅
語)として認識されていたことが分かる。すなわち、「ニホヒカスル」は、
その初出例である『万葉集』の一例(前掲例(11))を除きすべて散文中の用
例であるのに対し、「カスル」は全用例の約半数が韻文中の用例なのであ
る。

このような、文章語(雅語)「カスル」と日常語「ニホヒカスル」との
使い分け意識は、すでに近世前期に成立していたようである。その証拠と

なる評判記の用例を次に挙げる。傾城の言葉遣いについて、どのように表現すべきかを説いている。

(23) 文章の誤りは、其一人のみ見るなれば、外へ漏らさぬ心もあるべし。

これかれ多き付合ひにて、片言三のみのたまふ傾城を見れば、いと笑止にこそ侍れ。正義を知らぬはことほりなれど、公界ものなれば、片言なからぬやうにこそせまほしき物なれ。何程心安き傾国にても、片言言ひ出したる時、ひしと改めて言ひ聞かする事はしがたきものなれば、常に言ひ扱ふ事を、あらまし此書の後に書きつけをくなり。傾国、心ありて是を見覚えたまはば、詞林の種ともなるべきや。……物にあしき香のするを、女郎の口よりくさいとは聞ゝにくし。わるいにほひの、いやなほひのなどはいふべし。(色道大鏡・巻第九章部)

まず、文章語体で書かれている地の文では「(悪シ十)カスル」が使用されている。これに続けて、口頭での言葉遣いについて述べ、「(悪シ十)カスル」に意味的に対応するクサシでは直接的な表現となり聞き苦しいため、「(悪イ十)ニホヒカスル」や「(嫌ナリ十)ニホヒカスル」といった迂言的な表現にせよと注意しているのである。形容詞と自動詞的用法との

言い換えに目が惹かれるが、この用例は、文章語(雅語)「カスル」と日常語「ニホヒカスル」との使い分け意識の存していたことも示唆するのである。

(五) 評価性を分担するニホフと「名詞カスル」

第一項で考察したニホフの意味の下降の様相と、第二項で考察した「名詞カスル」の意味の下降の様相とを一つの図にまとめたものが、次の図一である。

なお、厳密に言えば、「名詞カスル」は、「ニホヒカスル」と「カスル」とに分けて表示すべきである。しかし、ここでは「名詞カスル」としての全体的な傾向を見るべく「名詞カスル」としてまとめた。二形式間に文体的意味の棲み分けの存することについてはすでに述べてきた通りである。

さて、図一に示したように、ニホフも「名詞カスル」も、本来の評価性はプラスであった。それはそのまま近世期まで引き継がれている。ただし、用例数から見た場合、「名詞カスル」よりも圧倒的にニホフが多いのであった。

図一

時代\評価性	プラス	中立的 (表現全体ではマイナス)	マイナス	
上代	ニホフ			
中古				
中世前期			「名詞＋スル」	
中世後期				
近世前期				
近世中後期				
			ニホフ	

中古に至るとニホフに意味の下降が生じ始め、語自体の評価性が中立的なニホフが誕生する。また、ニホフにやや遅れるようにして、中世前期に

は「名詞＋スル」も評価性としては中立的な用例が見え始める。

しかし、こうした中立的な評価性におけるニホフと「名詞＋スル」との共存は、中世に一時的なものであったと考えられる。すなわち、ニホフは中世前期に単独でマイナス評価を表すようになった後、近世以降は専らプラス／マイナス両極の評価性を有する語となり、中立的な評価性を表す用例が確認されなくなるのである。

一方の「名詞＋スル」は、ニホフの表さなくなった中立的な評価を積極的に表す形式となり、近世以降は単独でマイナス評価を表すまでに至った。ただし、用例数を比較した場合には、ニホフの方が単独でマイナス評価を表すのに多用されていることが分かる。(単独でなく)修飾成分を伴うという条件下において形勢が逆転することについてはすでに述べた通りである。

上代より多用されてきたニホフと、特に中世以降に発達していく「名詞＋スル」とが共存し続け、嗅覚表現自動詞語彙としての均衡が保たれるためには、上述の評価性の棲み分けが必要不可欠であったにちがいない。

ところで、なぜこのような評価性の分担が生じるのであろうか。本論第一部第四章で指摘したように、少なくとも嗅覚表現においては、時代が下るにつれてにこの種類を具体的に表そうとする「表現の具体化への欲求」が高まる^{三〇}。自動詞の範疇においても、この表現上の欲求に応えられる

形式として、〃 においの種類を具体的に表現できる連体修飾成分〃を伴いやすい名詞をその形式に含む「名詞＋スル」が好まれたのではなからうか。

これは、語彙全体が名詞優位の傾向になっていくという安部清哉（二〇〇九c）の指摘にも通ずる^{三三〇}。

しかし、自動詞ニホフも、連用修飾成分を伴い、より具体的に表現することは可能であったはずである。先の表現上の欲求とはまた別に、ニホフが（単独か、修飾成分を伴うかを問わず）マイナス評価を積極的に表しにくい要因が存するのではなからうか。

第三項 ニホフは、なぜマイナス評価を表しにくいのか

この問題を考察するにあたり、表一・二ではほとんど触れなかったプラスの評価性に着目したい。ニホフが、意味の下降の後もプラスの評価性を保持し続ける理由を明らかにすることで、マイナスの評価性を有する語としては積極的に使用されない要因が見えてこよう。

表一・二中の「＋」欄の用例数を具体的な対象によって細分類し、用例数の分布を示したものが次の表三である^{三三四}。なお、「名詞＋スル」に関しては「ニホヒ＋スル」と「カ＋スル」とで用例数を分けて掲出したが、考察においては「名詞＋スル」としての傾向を述べるにとどめる。

（一）鑑賞としての対象か、実用としての対象か

まず、ニホフと「名詞＋スル」との、とる対象の差異について見てみる。

表三から、植物・薫物・身体（美しさ・超越性）・精彩の四つは、総計・各時代の計を問わずニホフが圧倒的に多いことが分かる。

このうち、一時的に対象としていた精彩（上代に特有）と身体（美しさ・超越性）（中世前期以前に特有）とおけば、ニホフに意味の下降が定着する近世以降であっても、植物・薫物を対象として積極的にとり続けている。近世前期のニホフのうち約八割が、近世中後期のニホフのうち約七割がこれらの対象をとる。

(24) 庭前の長閑さ、今を春辺と匂ふ紅梅のさかり、次に初さくらのつばみ

も口をときければ、夫婦ハ餘念なく打ながめ、老のたのしみを催し、

（庚申講・一・みだれ髪）

(25) 伽羅すきな人が門を通れば、めつたに匂ゆへ、〔鼻三〕是でやうく〔門

を〕かぎだして、もしくと言バ、何んの御用で御座ります。イヤ、

此御家から、よき匂がいたします。定てこなたで御座ろう イヤく、

私方で左様な覚ござりませぬ デモ匂ます イエく デモく。こ

表三	資料ジャンル\語(句)	植物(草木/花)		蕨物		身体(美)		身体(超)		精神		飲食物	
		ニホフ	[ニホヒタスル]	[カナスル]	ニホフ	[ニホヒタスル]	[カナスル]	ニホフ	ニホフ	[ニホヒタスル]	ニホフ	[ニホヒタスル]	[カナスル]
	資料ジャンル\語(句)	20/25(45)	0	0	0	0	4(4)	0	9(9)	1(1)	0	0	0
	記紀万葉・上代計	1/71(55)	0/1	0	24	1	25	5(1)	0	0	0	0	0
	仮名散文I期・中古計	0/28(18)			14		8(2)						
	仮名散文II期	0/10(8)			6		1	3				1	
	説話	0/12(3)			2			2					
	和漢混濁文I期	0/50(29)	0	0	22	0	9(2)	5	0	0	1	0	0
	中世前期計	0/4(1)											
	和漢混濁文II期	0/1											
	室町物語	1/7(1)	0/1		3	2					1		
	抄物・キリタン資料・狂言台本	1/12(2)	0/1	0	3	2	0	0	0	0	1	1	2
	中世後期計	0/2(2)		0/4(4)	1(1)								
	狂言台本I期	0/5(3)			1	2						2	1
	仮名草子	0/4(4)			1	1						1	4
	浮世草子	3*/3(6)			2(1)							1(1)	1(1)
	井原西鶴作品	0/5(2)			2(2)								
	浄瑠璃I期(近松)	0/3(3)			4(3)								2
	近世雑I期	2/10(11)	0	0/4(4)	10(7)	1	0	0	0	0	3(2)	8	2(1)
	近世前期計	0/2(2)			1	1						1	
	浄瑠璃II期	0/3(2)	0/1	0/5(4)	5(5)						1	7	
	狂言台本II期	0/4(1)			6(1)	4						1	
	談義本	1/4(1)			1	1						1	
	喃本II期	0/5(5)	0/1		2(1)	2						1	
	近世雑II期	1/4(1)			1	1						4	
	洒落本	0/2(1)			1	1						1(1)	
	黄表紙	0/1			1	1						1(1)	
	読本	0/2(1)			2(2)	2						1(1)	
	人情本	1/5(4)			9	9						8(2)	13
	俳諧II期	3/31(17)	0/2	0/6(5)	18(9)	0	0	0	0	0	0	8(2)	13
	近世中後期計	30/223(181)	0/4	0/10(9)	77(16)	13	38(6)	10(1)	9(9)	1(1)	13(4)	22	4(1)

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

わ高になりけれハ、「門番」どつかとすわつて、匂ふはづ。おらが親
なをまかふくさい
(和漢咄会・伽羅門)

また、先に触れた身体(美しさ・超越性)を対象とするのがニホフのみ
であることも特筆すべき点である。

(26) 御かど三十余ばかりにて、顔かたち、いみじくうるはしくめでたうお
はします。中納言のありさまを御覧するにたぐひなし。そこらつどひ
たる大臣公卿、……「いにしへ、かうやうけんに住みけるはくかんこ
そは、我世にたぐひなきかたちの名をとどめたるも、あひぎやうのこ
ぼるばかりに、ほえるかたは、さらにかゝらざりけり」と定めけり。

(浜松中納言物語・卷一)

(27) 「上人の」其顔の色、瑠璃のごとくにあをくすきとをり、口よりしろ
き淡を垂す。其淡かうばしき事限なし。……彼白淡のかうばしき事、
他郷まで匂ければ、人あやしみつゝ、きをひあつまりて、おがみたう
とぶ事限なかりけり。
(古今著聞集・卷二・六四)

上掲のような鑑賞の対象にされやすい植物や薫物・精彩、物語世界や異
世界の描写において対象とされやすい身体(美しさ・超越性)については
ニホフが優勢であるのに対し、先の三つの対象よりは日常的・実用的で卑
近な飲食物については、一貫して「名詞十スル」が優勢であることが分か
る。

(28) (伯蔵主) \さりながら、何やらかうばしひにほひがいたすが、何物を
おいてだますぞ……はあ、わかぬずみを、油あげにしすまひておひた
は、かゝつたが道理じゃ……(といひて、つえにて二つ三つ打て、つ
えのさきをかひで)(伯蔵主) \まつはむまひかゝする(虎明本・釣狐)

以上のことから、ニホフ／「名詞十スル」の使い分け意識は、描写する
対象そのものへの意識のちがい(鑑賞／実用)が反映されやすいと指摘で
きるのではなからうか。そして、こうした対象の偏りは、宮島達夫(一九
七二)の指摘する文体的意味からの影響と考えたい。すなわち、プラスの
評価性を有し鑑賞の対象をとるニホフは、文章語的であるという文体的意
味によって支えられているのである。このことについて、次に少しく述べ
る。

(二) 日常語的か、文章語的か

表一・二に遡って、ニホフと「名詞＋スル」との出現しやすい文体・資料ジャンルを考えてみたい。

まず、散文／韻文の別について見てみる。表一・二では、韻文の用例数の内数を括弧で示している。これによると、ニホフは総用例数の半数近くを韻文の用例が占めるのに対し、「ニホヒ＋スル」のそれは未見である。「名詞＋スル」のうち、韻文に多用されるのは「カ＋スル」で、総計一四例が得られた。繰り返し指摘してきたカの位相(文章語(雅語))を踏まえると、「カ＋スル」のみが韻文において使用されることは至極当然である。また、それは同時に、「名詞＋スル」としてもっとも中心的な「ニホヒ＋スル」が、韻文よりも散文において特徴的に現れる形式であることを意味する。

このことは、資料ジャンルごとの用例数の分布からも明らかである。近世における俳諧などの韻文資料、談義本・読本・人情本(地の文)といった文語体資料には、同時代の他の言語資料が多用する「名詞＋スル」がほとんど使用されないのである。文章語(雅語)である「カ＋スル」であっても使用されることはなく、専らニホフが使用される。

つまり、ニホフは文章語(雅語)的側面をも持つのに対して、「名詞＋スル」(特に、その代表格である「ニホヒ＋スル」)は、多分に日常語・俗語的側面を持つと考えられるのである。

(三) ニホフという語の二面性

ニホフは、意味の下降の過程にあっても単独でプラス評価を表し続けた。ただし、その用例を「名詞＋スル」と比較し、対象・文体などの観点から分類し直すと、ある傾向が浮かび上がる。それは、プラスの評価性を有するニホフが鑑賞としての対象をとりやすく、文章語(雅語)的側面をも持つという傾向である。単独でプラス評価を表すというニホフ本来の評価性が、こうした特定の対象・文体において必要とされ続けていたために、一見すると奇妙な印象を受ける。一語がプラス／マイナス両極の評価性を有する“という状況が成立したのである。プラスの評価性が必要であったにも関わらずニホフに意味の下降が生じたのは、カラルやクンズといった文章語よりも、日常語的な側面をも有するニホフの方がマイナス評価を表す語として相応しかったためであろう(本論第四部第八章・第九章)。

しかし、限られた範囲であっても本来の評価性が保持され続けていけば、人によりマイナスの評価性を有する語として積極的に使用しにくくなる、

という事態が容易に想像できる。そこで、ニホフのように二面性を持たず、あくまで日常語的な表現として使用される「名詞＋スル」（主に「ニホヒ＋スル」）が、マイナス評価を表す形式として使用しやすかったのであろう。また、「名詞＋スル」が「表現の具体化への欲求」に十分に応じられることも大きく影響していたと考えられる。

第四項 ニホフの比喩的転義の発生

最後に、第二節第一項（一・二）で触れたニホフの比喩的転義について簡単に述べる。

ニホフが抽象的な物事を対象とする用例は非常に少なく、中古の『源氏物語』に三例、近世中後期の浄瑠璃に二例、計五例のみであった。また、次に示す用例のごとく、ニホフはプラス評価の物事を対象とし、〈良い兆候・気風を表す〉のような意味を表す。

- (29) 母北の方、なき騒ぎ給ひて、おほきおとゞを、「めでたきよすが」と、思ひ聞え給へれど、「いかばかりの、昔の仇・敵にかおはしけん」とこそ、思ほゆれ。女御をも、ことにふれ、はしたなくもてなし給ひしかど、それは「御中の恨み解けざりし程、『思ひ知れ』とにこそはあ

りけめ」と、おぼしの給、世の人もいひなししだに、なほ、さやはあるべき。「人ひとり」を、思ひかしづき給はむ故は、ほとりまでもにほふ例こそあれ」と、心えざりしを、
(源氏物語・真木柱)

こうしたニホフの用法は、少なくとも現代語において一般的ではない。また、通史的に見て用例数が少ないことから、ニホフの一時的な比喩表現と推測される。現代語ニオウのように、マイナス評価の物事を対象とし、〈怪しい・疑わしい〉といった意味を表すニホフの用例はまだまだ見つからないままである。ニホフに他動詞語尾ス（四段）・使役の助動詞ス（下二段）が付加した他動詞形ニホハスの〈暗示する〉という比喩的転義も考慮に入れながら、さらに調査を進めたい。

なお、ニホフに〈怪しい・疑わしい〉という比喩的転義が発生するに至る意味の抽象化については、本論第二部第三章で見たような形容詞クサシのそれと同様に把握できる。しかし、新たな観点を導入して再考する必要もある。例えば、山梨正明（二〇〇〇）では、主体の主観的な認識・判断の叙述に用いられるようになる感覚表現動詞を取り上げ、嗅覚表現については「あのそぶりはにおう／くさい。」といった用例を挙げながら、「嗅覚の場合には……思考・判断の意味での転用がみられるが、この種の用法

はかなりかぎられている」(一三〇頁)と指摘する。また、英語の嗅覚表現の拡張を見ると、視覚表現のそれよりもはるかに実現の可能性が低いとの指摘もある。他の感覚表現(自)動詞や他言語と比較することで、ニホフ・クサシに具体的にどのような制限が存するのを見えてこよう。

第五節 おわりに

ニホフの意味の下降は中古に始まり、中世を通じて進行し、近世において定着した。ただし、意味の下降が生じながらもマイナスの評価性専用の語とはならず、一語でプラス/マイナス両方の評価性を有するようになった点が、この語の意味変化の特徴だと言える^{三六}。こうした意味・用法の成立を可能にしたのは、鑑賞としての対象をとる語、文章語(雅語)的な語として、プラス評価を表すという本来の評価性が必要とされ続けたからであった。しかし、プラス/マイナス評価両方を表すという、相反する二面性を維持し続けたことで、近世以前においてはマイナス評価を表す語として広く定着するには至らなかった。そこで、日常語的表現として認識されていた「名詞＋スル」(主に「ニホヒ＋スル」)が、修飾成分を伴った表現全体でマイナス評価を表す形式として重宝されたと推測される。

カオルは和語系文章語(雅語)、クンズは漢語系文章語である。ともに文章語であるため、対象そのものの価値が高くなる傾向にある(宮島達夫一九七七・一九八八)。

ニ動詞スの一用法と呼ばずに自動詞的用法としたのは、今後、同じく知覚の自動詞のような働きをする「(く)ニホヒナリ」といった名詞述語文をも含め論ずる必要があると考えるためである。こうした類義表現をも想定し、自動詞的用法と呼ぶ。

三例えば、『日本国語大辞典(第二版)』のニオウとカオルとの語釈について、二語の意味が重なるブランチを対照させてみても、評価性の差異以外はよく分からない。

「におう」項 **■**(4) (「臭」とも書く) 嗅覚を刺激する気がただよい出る。香り、臭(くさ)みなどが感じられる。

「かおる」項 (2) よいにおいがする。

^四ただし、「共時的には日常語に用いるのが一般的で、雅語・文語性は衰えている」(一九頁)と述べ、表中「いい(匂)——雅語・文語——ニホフ」の欄はやや小さな○になっている。

^五これについては、小出慶一(二〇〇五)にも指摘がある。

六 渡辺 実（一九九六）では、他動詞の原型スルが自動詞的に使用されることについて、他動詞の再帰動詞的用法に通ずるとの見方を示唆する。

「[名詞+スル]のスルを」敢て他動詞の枠にはめこんで言えば、音が自分を実現させることが「音がスル」であり、句が自分を実現させることが「句がスル」なのであろう。これは或いは自動詞というものの、一つのルーツかも知れないという気がする。英語に例は少いが、ドイツ語やフランス語では、再帰動詞と呼ばれる他動詞の一群が、主語と同人称の客語（目的格）をとることで自動表現を果すことが多い。

（二〇七頁）

七 ただし、寒気や眩暈などの場合、対象が自己内部にあるため、感覚／現象の区別が不可能であるとする。

八 よって、一般的に「名詞+スル」が存在しないと考えられている視覚表現についても、発生部と刺激との分離という条件さえ満たせば、「名詞+スル」が成立し得ると福田氏は続ける。例えば、「稲光ガスル」であれば、発生部それ自体が不明であるがゆえに、刺激（稲光）の自立性が担保され、自動的に発生部と刺激とは切り離され、「名詞+スル」が成立するのである。

九 初出は、次に挙げる、一九八〇年から一九八五年にかけての論文である。

・村木新次郎（一九八〇）「日本語の機能動詞表現をめぐって」『国立国語研究所報告 六五 研究報告集（二）』秀英出版

・村木新次郎（一九八二）「外来語と機能動詞」『武蔵大学人文学会雑誌』

一三・四

・村木新次郎（一九八二）「迂言的なうけみ表現」『国立国語研究所 七四

研究報告集（四）』秀英出版

・村木新次郎（一九八三）「日本語の後置詞をめぐって」『日語学習と研究』

一九八三・三

・村木新次郎（一九八三）「地図をたよりに人をたずねる」といふ言いか

た」『副用語の研究』明治書院

・村木新次郎（一九八五）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本

語学』四・一

一〇 他にも、誘いをカケル（――誘ウ）、連絡をトル（――連絡スル）、考慮に入レル（――考慮スル）などがある。举例からも分かるように、機能動詞と名詞との語結合は和語動詞に限られる。

なお、村木氏は、機能動詞としての意味は具体的な用法からの転用ではなく、本来の働きが機能動詞的であると見る。

二 表中の注は省略した。

二三 ニオウと「ニオイ＋スル」との関係について述べたものには、小泉 保（一九八六）もある。小泉氏は、語の派生に際し「意味の分離と再統合」による「項化」（八一頁）が起こるとし、日本語の五感に関わる動詞が「項化」を好む傾向にあると指摘する。

例えば、ニオウの場合、

ニオウ — 意味分解 ↓ 「ニオイデ・感ズル」

— —
項化 変形
← ←

「ニオイガ・スル」

というように、ニオウが意味分解され「ニオイデ」という道具格が抜け出し、命題部の項へと項化し、「ニオイガスル」が派生するというのである。しかし、こうした小泉氏の論理は、あくまでも共時的な立場から語の派生を説明したものであり、これがそのまま史変遷としての派生関係に重なるか否かについては、慎重を期すべきである。

二三 意味の下降の捉え方については小野正弘（一九八四）を参考にした。

一四 「馥」の誤写と思われる存在しない字が使用されている。

一五 全体の調査結果には含めていないが、御伽草子『福富長者物語』には、ニホフが一語単独でマイナス評価を表す用例が見られた。

その夜もあくる日も、おなかの痛む名残ありて、夕の煙はるどころに立ち、野辺の虫はお中に鳴く。降りみ降らずみ打時雨たる空のやうに、しよんちよとしぶり、ほがみさしつゝこときり〜と病。あなはら〜といふ声も息の下なれば、鬼うば憎けれど、さすがわりなき中なれば、皺多き手を暖めておなかをさすれば、あさましくほつぽ「懐中」のうちにほひ出て、何やらにや〜とするもむつかしや。……し〜
「『幼児の小便』にやよだれにや、
（福富長者物語）

これを積極的に中世後期の用例と認められないのは、いわゆる御伽草子が、必ずしも全て中世に成立したわけではないためである。松本隆信（一九七三）では、以下のような指摘がされている。

慶長期以前に成立していたことの確な作品にあっても、御伽草子本のテキストとしての性格には問題が非常に多い。誇張した言い方をすれ

ば、これらの御伽草子本は、室町物語の江戸時代における改作とも言い得る性質を帯びているのである。従って、御伽草子本のこのような伝本としての位置と、二十三篇の中には、作品としての成立そのものも、江戸時代に降るのではないかという疑念を抱かせるものが相当数あることを、併せて考えると、御伽草子本なる叢書を、室町時代物語のテキストとして扱うことには、慎重な用意がなければならぬであろう。(二一九四頁)

さらには、「古典的表現を基本として、そこに当代的現象が散在するにとどまる」「蜂谷清人氏執筆「御伽草子」項『日本語学研究事典』明治書院・二〇〇七・七九六頁」という点も指摘されている。今後、御伽草子の資料性の検討を進めることで、このニホフの用例の歴史的な位置づけも定まってくるであろう。

一六 なお、一語単独でマイナス評価を表すニホフは確認できなかった。

一七 「屁負ひ比丘尼」とは、雇われた家の娘などに付き添い、その娘の過失を身代に負う尼を指す。娘が放屁をするとその失態を自分が引き受けるのである。

一八 この点については本論第三部第七章にて述べる。

一九 同説話を載せる『今昔物語集』巻第六第六では、「嗅クサケ香ス」が「臭香クサケ俄ニ出来ル」となっている。「名詞＋スル」と似たような意味を表す「名詞＋出来イデク」や、「名詞＋アリ」などの形式も含め、自動詞的用法を再考する必要がある。今後の課題としたい。

二〇 ただし、読みの分からない「臭＋スル」が抄物に一例見えた。これは単独でマイナス評価を表す用例と考えられる。

色悪―色ヲ失タヲ云ゾ。魚ニカギルマイ一切ゾ。臭クサケ悪トハ物ノ香、

臭スルヲ云ゾ。(論語抄・三・二三ウ)

「臭＋スル」の主語が「物ノ香」であることに注目したい。主語にカと読む可能性の高い「香」が含まれている場合、「臭＋スル」はカの繰り返しを避けた名詞となるのではなからうか。つまり、「臭＋スル」は「ニホヒ＋スル」である可能性が高い。ただし、「臭気＋スル」の「気」が脱落した可能性も考えられるため、ここでは読みに関する結論を保留せざるを得ない。もしこれが「ニホヒ＋スル」の用例であれば、この形式が単独でマイナス評価を表す初出例が中世後期まで遡れることになる。今後、中世後期の調査を進めることでこの用例の位置づけを再考したい。

二二 ここでの「片言」は、訛語ではなく誤用を指すか。

二三 単純形容詞クサシよりも合成形容詞クサシが多用されるようになる。

二四 次のような、総合型から分析型への語彙の流れを指摘する。

和語固有動詞 ↓ 「体言型語幹＋動詞的機能部」スル」

和語固有形容語 ↓ 「体言型語幹＋助動詞」ナ／ダ

和語固有副詞 ↓ 「体言型語幹＋格助詞」ニ／ト／φ

二五 その他・抽象を対象とする用例も散見されたが、前者は種々雑多なものが含まれるため、後者は個別に述べることがあるため、それぞれ表三に掲出しなかった。

二六 「」で括った語は、それを表す絵が挿入されていることを示す。以下同じ。

二七 これは、名詞ニホヒにも同様に指摘できる意味変化である。ただし、本論第三部第七章において詳述するように、意味変化の要因は自動詞と名詞とで異なる。

なお、一語で両極の評価性を有する他の例として真っ先に浮かぶのは、ヤバイであろう。「一語が両極の評価性を有する」という共通性で括られる語彙はどのように広がっているのか、また、そこに属する語の史的変遷

には何か傾向が見出せるのかといった点についても今後考えていきたい。

第七章 ニホフの連用形名詞ニホヒの意味の下降

―カ・カヲリ・カザとの共存過程から―

第一節 はじめに

現代共通語において、においを指す嗅覚表現名詞として日常的に最もよく使用されるのは、自動詞ニオウの連用形名詞ニオイであろう。他にカオリ・カといった嗅覚表現名詞もあるが、ニオイが日常語として多用されるのに対し、これらは文章語（雅語）的な要素が強く感じられる。そうした文体的意味が作用することで、評価性はプラスに固定化され、その使用場面が限定的となることも相まって、日常一般に見聞き・使用する機会はニオイほど多くない。一方のニオイは、一語でプラス／マイナス両極の評価性を有し得、また、評価性としては中立的な場合にも使用できる便利な語である。ニオイは、対象の意味（評価性）においても、文体的意味においても、カオリ・カよりもその領域が広いのである。自動詞ニオウが中心的な嗅覚表現自動詞であったように、その連用形名詞ニオイも中心的な嗅覚表現名詞であると言える。

ところが、古代に目を向けてみると、ニホヒは一語単独で専らプラスの評価性を有しており、現代語ニオイが覆っているプラス／中立的／マイナ

スの評価性を有するのはカであることに気づく。このことは、ニホヒに、プラス評価のみを表す名詞からプラス／中立的／マイナスすべての評価を表す名詞へ変化するという意味の下降が、カに、プラス／中立的／マイナスすべての評価を表す名詞からプラス評価を表す名詞へ変化するという意味の上昇が、それぞれ生じたことを意味する。ある語の変化する要因が、その語の属する語彙に求められる（小林 隆一九八四）ことを踏まえれば、上述の現象は個別的に発生したものは考えにくい。つまり、歴史上のどこかの時点で、**「プラス／中立的／マイナスの評価性を有する中心的な嗅覚表現名詞」**をめぐって、ニホヒとカとの交替が起こったと推測されるのである。

本章では、ニホヒの意味の下降を中心に、カの意味の上昇やカヲリやカザといった他の名詞の史の変遷も併せて考察する。そして、ニホヒとカとの史の変遷の中に相互影響を見出すことで、嗅覚表現名詞語彙がどのような史の変遷を経て現代語へ至っているのかを明らかにする。

第二節 問題の所在

第一項 先行研究

嗅覚表現名詞に焦点化した先行研究は非常に少ない。これは、ニホヒやカヨリが、本来の形である自動詞を含めて扱われてきたために、名詞としての問題が特別注目を浴びてこなかったことと関係していよう。

(一) 小松登美 (一九七六)

嗅覚表現名詞を取り上げる数少ない先行研究として早いものに、小松登美 (一九七六) が挙げられる。題目に「中古仮名文学に於ける」とあることから分かるように、一時代に焦点を当てた研究である。調査報告の性格が強く、一時代の概観にとどまっているものの、嗅覚表現名詞(カ・ニホヒ・カヨリ・カウバシサ)の共時的な様相を知ることができ、専らカ・ニホヒの二語が使用されることが指摘されている。ただし、語の表す評価性は主観的に判断されており、疑問の残る部分も多い。

(二) 『日本言語地図』第八五図

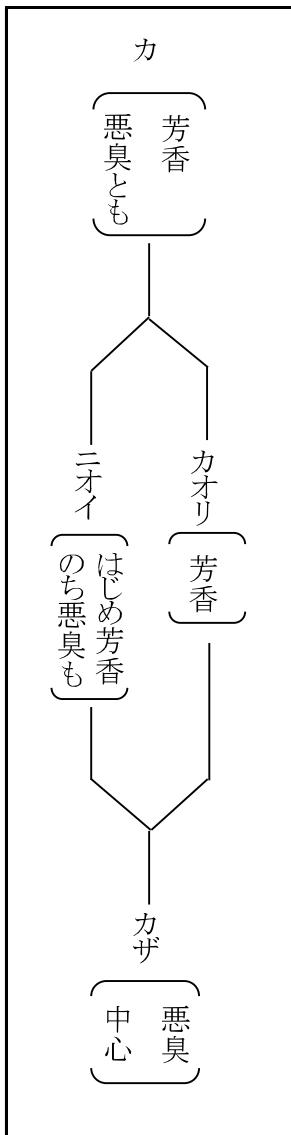
『日本言語地図』第八五図では、「物のおいを知ろうとして鼻で(くんくんかぐまねをする) こういうふうにする」ことを、おいをどうすると言いますか。」という質問文によって得た回答(「においをかぐ」の前部分)の全国分布が

示された。これによると、まず、カザが、東は佐渡あたりまで、西は九州東岸から沖縄にかけて中央日本を中心にして分布することが分かる。そして、カザの両側にニオイ類・カオリ類が混在して分布する。さらに、東日本の日本海側を中心に、淡路島、九州南部、沖縄の先島などにカが点在するようである。

徳川宗賢編 (一九七九) (徳川宗賢氏執筆「文献国語史と方言」) は、この第八五図を取り上げ、地理的分布から推測される嗅覚表現名詞の新旧と、文献におけるそれぞれの出現順とがほぼ一致すると指摘する。すなわち、文献調査によっても、方言調査によっても、カ、ニオイ・カオリ、カザの順に誕生していったことが明らかであると述べるのである。次に示す図は、文献調査の結果から徳川氏がまとめられたものである。

『日本言語地図』第八五図と、徳川宗賢編 (一九七九) とにより、嗅覚

徳川宗賢編 (一九七九) 一五九頁 図



表現名詞の大まかな出現順を知ることができ、また、本章において考察の対象とする四語がより一般的なものであったことも裏付けられる。ただし、大まかな出現順からは共時的な棲み分けの様相も分からず、特に各語の評価性の変化（それによる嗅覚表現名詞語彙の変化）については不明のままである。

(三) 工藤力男 (二〇一〇)

そうした嗅覚表現名詞の評価性の歴史に着目し、ニホヒの意味の下降と、古代語における力の在り方とを論じたものに工藤力男(二〇一〇)がある。しかし、先の小松登美(一九七六)と同様に、ニホヒも力もその評価性の判断基準が明言されておらず、主張の根拠を十分に知ることができない。また、ニホヒについては本論第三部第六章でもすでに問題を指摘したように、ニホフとその連用形名詞ニホヒとを同語に扱うという考察の方法に検討の余地があると思われる。自動詞ニホフと名詞ニホヒとで意味の下降の原因(競合する類義語)は異なると考えられるためである(後述)。そして、カに関しても、『今昔物語集』の用例のみに基づいた考察であり、それを当代の言語状況の反映と見る点に留意する必要がある。また、そもそも、『今昔物語集』の「香」をカと読む点に問題がないとも言えない。

確かに、「香」をカと読む可能性は非常に高い。しかし、『今昔物語集』の用例自体には振り仮名が付されていないため、あくまで漢字表記の「香」とある読みの分からない用例なのである。工藤氏の指摘が、他の資料にも当てはまるかどうかを確認する必要があるし、確実にカと読む用例を以てそれを実証しなくてはならないであろう。

以上のように、考察の手順にやや疑問が残るものの、「日本語には負の嗅覚対象を一括する総称名詞が脱落していた」(六四頁)ことが、ニホヒの意味の下降を促した可能性があるとの指摘は大変参考になる。

なお、ニホヒに意味の下降が生じた時期については、近世期以前の字書において「臭」にニホヒと附訓したものが見えないこと、『和英語林集成(再版)』(一八七二)の「にほひ」項に“*effluvium*”が見えることを挙げながら、ひとまず明治初期まで遡ることができると述べる。

(四) 国語辞書の記述

工藤力男(二〇一〇)を取り上げ評価性について触れたところで、『日本国語大辞典(第二版)』の記述を参照してみたい。

まず、「におい」項のブランチ(4)には、「(「臭」とも)ただよい出て嗅覚を刺激する気。かおり、くさみなど。悪いにおいについて「臭」とも書く。」

とあるものの、「くさみ」「悪いにおい」に該当する用例が見えず、ニホヒがいつマイナスの評価性をも有するに至ったかは分からない。

次に、「か」項のブランチ(1)には、「鼻でかいで知る物の気(け)。かおり。におい。よいにおいにも悪いにおいにもいうが、現代では多くよいにおいについていう。」とある。「悪いにおい」に該当する早い用例として挙げられたと思われるのは、『蘇悉地羯羅經延喜九年点』(九〇九)の「悪しき香^カのあるをば金剛部に用ゐる」であるが、後述するように、マイナスの意味を表す修飾成分である悪シを伴っており、カ自体の評価性は中立的であろう。よって、挙げられている用例だけでは、カにいつ評価性の変化が生じたのかは知り得ない。

ここで参考になるのは、『角川古語大辞典』の「か」項に見える「近世には「か」は雅語で、「にほひ」は俗語。」という補足である。ニホヒもカも、中世以前に評価性の変化を経て、それぞれ「雅語」「俗語」になったという仮説がひとまず立てられよう。

第二項 本研究の立場

以上の先行研究を踏まえ、史的観点からの考察を行う本研究の目指すところを次にまとめる。

まず、考察の前提として、嗅覚表現名詞の評価性を可能な限り客観的に判断することから始めたい。その上で、プラス／中立的／マイナスの評価性すべてを、あるいは、いずれかを有する嗅覚表現名詞が、時代ごとどのように推移していくのかを明らかにする。共時的な様相を詳細に記述しながら、そこに史的変遷を見出すことで、ニホヒの意味の下降、カの意味の上昇といった個別の問題を中心に、カヨリやカザをも含めた嗅覚表現名詞語彙の史的変遷を考察する。

また、ニホヒの意味の下降の要因・過程が明らかになれば、前章で扱った自動詞ニホフの意味の下降との関連を考察することが可能になる。自動詞と名詞との評価性変化は、同時期に発生したものか、あるいは、一方が先立って変化しもう一方に影響を与えることになったのかという点についても述べていく。

なお、以下、ニホヒ・カ・カヨリ・カザの四つの和語を指して「嗅覚表現名詞」と呼ぶ。厳密に言えば、嗅覚表現形容詞の連体形名詞^ニや、嗅覚表現形容詞に名詞化接尾辞・ミ・サの添加した形も和語の嗅覚表現名詞である。また、漢語「香氣」「臭氣」「芳香」「悪臭」などもあり、これら品詞や語種の別を越えた名詞をも扱うのが理想ではある。しかしながら、本章では、自動詞ニホフの評価性変化の問題に付随して、その連用形名詞^ニ

ホヒの評価性変化を論ずることを大きな目的としているため、一語の評価性が通史的に一貫している形容詞からの派生名詞や漢語名詞への言及はあえてせず、必要に応じて本文中で触れることにしたい。

第三節 用例の分類基準

本章で中心に扱うのは読みの確定しているニホヒミ・カ・カフリ・カザの四語である。「香」などの漢字表記で読みの分からない用例は、和歌など音節数に制限のある箇所において、一音節と読んでしかるべき場合に限りカと読み、残りはすべて読み不明のままとした。これら読み不明の用例は、本文中で適宜触れることにする。

さて、序論第二章ですでに述べた通り、語の評価性は対象と修飾成分の二段階で判断する。

再掲 評価性の判断基準		対象	修飾成分
語自体の評価性	プラス		
中立的	マイナス	穢れ	*マイナスの評価性を有する 修飾成分あり *プラスの評価性を有する 修飾成分あり

* 修飾成分を含めた表現全体の評価性はマイナス
* 修飾成分を含めた表現全体の評価性はプラス

なお、筆者は意味の上昇・下降を次のように考える^四。まず、単独でマイナス評価を表していた語が、プラスの評価性を有する修飾成分を伴い、語自体の評価性が中立的になる。これを意味の上昇の初期段階と見る。さらに、プラスの評価性を有する修飾成分を伴わずに、一語単独でプラス評価を表すようになり、意味の上昇は終了する。つまり、意味の中立化を、意味の下降の一段階として捉えるということである。

意味の下降は、意味の上昇で起きる現象の逆行と見える。すなわち、単独でプラス評価を表していた語が、マイナスの評価性を有する修飾成分を伴い、語自体の評価性が中立的になる。これを意味の下降の初期段階と見る。さらに、マイナスの評価性を有する修飾成分を伴わずに、一語単独でマイナス評価を表すようになり、意味の下降は終了する。ここでも、意味の中立化を、意味の上昇の一段階として捉える。

第四節 ニホヒの史的変遷

次に示す表一に沿って、嗅覚表現名詞の評価性の史的変遷について考察していく。表一は、第三節で述べた基準によってそれぞれの評価性をプラス／中立的（プラスの修飾成分を伴う／マイナスの修飾成分を伴う）／マイナスの四つに分け、それぞれの用例数を示したものである。表中では、

表一 ニホヒ・カ・カワリ・カザの評価性

語	ニホヒ				カ				カワリ				カザ				複合名詞・慣用的表現			色との共起	
	+	+{	-{	-	+	+{	-{	-	+	+{	-{	-	+	+{	-{	-	色香	移り香	梅が香	カ	ニホヒ
資料ジャンル\意味	10(10)	1(1)	0	0	0	4(4)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
記紀万葉・上代計		11(11)				5(4)				0											
仮名散文Ⅰ期・中古計	189(81)	45	2	0	64(24)	32(2)	1	5	31	17	0	0	0	0	0	0	2	20	0	6	1
		236(31)				102(26)			48									22			
仮名散文Ⅱ期	133(9)	17(1)	3		18(9)	3			7(1)	5							1	6	5	3	4
説話	37(8)	13		1	6(3)	4	3		2								3	3		3	
和漢混清文Ⅰ期	28(2)	3			9(5)	1			1								1	4			
中世前期計	138(29)	33(1)	3	1	33(17)	7	4	0	10(1)	5	0	0	0	0	0	0	5	13	5	6	4
		235(30)				44(17)			15(1)									23			
和漢混清文Ⅱ期	24(1)	1			10(3)												2	3	3	3	
室町物語	18(1)				1													4			
抄物・キリタン資料・狂言台本	19(1)	3	3		7(1)	1			3								3	2		1	
中世後期計	61(3)	4	3	0	19(4)	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	5	9	3	4	0
		68(3)				19(4)			3									17			
狂言台本Ⅰ期	11(1)	2			5(4)				1												
仮名草子	9(1)	4	1	1	13(2)	1	1	2(1)	1	1							11	3		5	5
浮世草子	24	4	9	7	22	1(1)	2		16(1)	3	1						6	4	1	4	1
喃本Ⅰ期	29(10)	2	3	2	13(6)		3(1)	1(1)	3	1							5	3	3	2	
井原西鶴作品	29(8)	3	1	5	22(10)				37(2)	3	1						10	7	1	1	1
浄瑠璃Ⅰ期(近松)	11(3)	1			9(5)				6(2)								9	2	5	1	2
近世雜Ⅰ期	16	1	5	1	4		1	1	4								3		1		
俳諧Ⅰ期	61(51)	2	1(1)		40(37)			2(2)	5(4)								6			11	3
近世前期計	190(74)	19	20(1)	16	128(64)	2(1)	7(1)	6(4)	72(9)	8	2	0	11(2)	1	3	4	50	19	21	14	3
		245(75)				143(70)			82(9)				19(2)					90			
浄瑠璃Ⅱ期	12(2)		2	2	5(1)		1		3(2)								5	3	3		1
狂言台本Ⅱ期	28(7)	9	3	3	9(8)																
説義本	11	2	2	2	5(1)				5	1							7		2		
喃本Ⅱ期	26(1)	6	6	2	5(1)		4		6	2							1	1	1	5	5
近世雜Ⅱ期	16(1)	4(2)	2	5	11(1)	2(2)	2		5								2		4		2
洒落本	31(3)	14(3)	4	10	14(3)		2	1	9	1							11	4	4	3	2
黄表紙	3	3	3		1				1												
讀本	1			1	2				1												
滑稽本	6(1)	4	10	1	5(1)	1	1	1	2												
人情本	8(3)	2		1	14(3)	1	1		6(1)	1							14	2	9	4	4
俳諧Ⅱ期	14(10)		1	2(1)	28(28)		2(2)	2(2)	3(1)								3	1	33		
近世中後期計	156(28)	44(5)	31	29(1)	99(47)	4(2)	11	4(2)	40(4)	6	0	0	11	0	4	2	47	11	59	7	3
		260(34)				118(51)			46(4)				17					117			
総計	805(175)	145(7)	59(1)	46(1)	345(156)	47(9)	24(1)	15(6)	156(14)	36	2	0	22(2)	1	7	6	109	72	88	37	11
		1055(184)				431(172)			194(14)				36(2)					269			

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

プラスの評価性を「+」、マイナスの評価性を「-」、プラス／マイナスの評価性を有する修飾成分を伴い評価的に中立ではあるものを「+_(n)」「-_(n)」でそれぞれ代えて表した。本文中や用例の末尾にも、この略称を使用する場合がある。

また、参考として、複合名詞・慣用的表現である「色香^{イロカ}」「移り香^{ウツガ}」「梅ガ香^{イロカ}」の三つについても用例数を示した^五。そして、一つ目の「色香^{イロカ}」に関連して、名詞「色」との共起例についても、嗅覚表現名詞それぞれに含まれる内数を示した。これは、多く「色モくモ」の形で、名詞が〈情理・風情〉を表す表現である。この場合、名詞はプラスの評価性を有すると考えた。

第一項 上代

上代には、ニホヒ・カの二つの嗅覚表現名詞の使用が認められる。

プラスの修飾成分を伴い評価的に中立ではあっても、修飾成分を含めた表現全体ではプラス評価を表すことになるため、ニホヒもカも、ともに専らプラス評価を表す語として使用されていることになる。

(1) 宮人の 袖付け衣 秋萩に 仁保比與呂之伎 高円の宮

(2) 梅の花 香を加具波之美 遠けども 心もしのに 君をしそ思ふ

(万葉集・卷二〇・四五〇〇) +_(n)

(万葉集・卷二〇・四三一五) +_(n)

表一からは、カにマイナスの評価性を有する修飾成分を伴う用例のあることが分かるが、これは『日本書紀』平安中期末点の用例であり、中古の確例ではあっても上代のそれとは言えない。

(3) 丙午罷造皇祖母命墓 役 仍賜臣連供造帛布 各有差 是月茨田池水、

漸々变成白色。亦無^{ウツク}臭^{ニホヒ}氣^カ。(日本書紀・卷第二二皇極紀) -_(n)

さて、上代には、ニホヒもカも（単独で、あるいは、修飾成分を含めた表現全体で）マイナス評価を表す用例は見られない。形容詞の連体形名詞や、名詞化接尾辞・ミ・サの添加した形も同様に用例は未見である。このことから、単に、上代の主な調査資料である『万葉集』などにおいてマイナス評価を表す嗅覚表現名詞が必要な描写が出てこなかったに過ぎないと考えたい。後に見るように、描写対象の広がる中古ではマイナス評価を表す嗅覚表現名詞が認められるようになる。

第二項 中古

中古において用例の確認される嗅覚表現名詞は、ニホヒ・カ・カヲリの三語である。このうち、プラス／中立的／マイナスの評価性すべてを有するのはカである。ニホヒはこの頃、マイナスの評価性を有する修飾成分を伴う用例が出現する。

(一) ニホヒ

前代に引き続き⁺、⁺の用例が見られる。これに加え、中古には⁻のニホヒも登場し、この頃すでにニホヒに意味の下降が生じ始めていたことが窺える。

(4) あまた重なりたる御衣ばかりぞ残りける。「口惜しうも心憂し」と、

思へば、身より外につらき人なく、悔しういみじきに、御衾もおしやられ、残りたるにほひばかりは変らで、夜もすがら泣き明かし給ける

(狭衣物語・卷二) +

(5) 梨の花、よにすさまじきものにして、ちかうもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひにい

ふも、げに、葉の色よりはじめて、あいなくみゆるを、もろこしには限りなきものにて、ふみにも作る、なほさりともしやうあらんと、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂ひこそ、心もとなうつきためれ。

(枕草子・三七) +

(6) 御装束の事なども、めやすくしなし給はず、よにあやしう、うちあはぬさまにのみ、むづかり給ふを、あざやかなる御直衣なども、え取りあへ給はで、いと見ぐるし。よべのは、焼けとほりて、疎ましげに焦がれたるにほひなども、異様なり。御衣どもに、うつり香もしみたり。

(源氏物語・真木柱) +

(二) カ

前代同様、⁺、⁺の用例がある他、⁻、⁻のカも見られ、プラス／中立的／マイナスの評価性すべてを表す名詞であることが分かる。

(7) 肴なりける橘をとりて、「五月まつ花たちはなのかをかげばむかしの

人の袖のかぞする」
(伊勢物語・六〇段) +

(8) われも念仏をし入りつゝ、けふそくに寄り居ながら、やがて絶え給と見るほどに、いひしらすかうはしきか、このほどに、ほひて、むらさきの雲、この峰のほどに立ちめぐりたりと見おどろく。

(浜松中納言物語・巻四) [10]

(9) 「女子」父君に尿多にしかけつ。宮に「これ抱き給へ」とて、さし奉り給へば「あな、むつかし」とて押し出で、うちしもへむき給ぬ。君「頼しげなの人の親」内侍のすけにさし取らせて拭はせ給。宮「いかにかくさからん。あな、むつかしや」とて、むつかり給。

(宇津保物語・くらびらきの上) [10]

(10) 「月頃、風病重きにたへかねて、極熱の草葉」「にんにく」を服して、いと、くさきによりなむ、え対面給はらぬ。まのあたりならずとも、さるべからん雑事等は、うけ給はらん」と、いと、あはれに、むべくしく言ひ侍り。いらへに、何とかは。たゞ、「うけ給ぬ」とて、立ち出で侍るに、さうくしくやおぼえけむ、「このか失せなん時に、立ち寄り給へ」と、高やかにいふを、聞き過ぐさんも、いとほし

(源氏物語・帚木) [10]

なお、表一では、マイナスの評価性を有する修飾成分を伴う用例が一例(前掲例(9))とあるが、前掲例(3)も中古の確例であった。また、次の例(11)のように、カと読む可能性の高い「香」もある。

(11) 樞戸の廂二間ある部屋の、酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋の、たゞ畳一枚口のもとにうち敷きて、「我が心を心とする物は、かゝるめ見るぞよ」とて、いと荒らかに押し入て、手づからつい鎖して、錠強く鎖していぬ。君は、万に物の香くさくにほひたるがわびしければ、いとあさましきには、涙もいでやみにけり。(落窪物語・巻一) [10]

近世以前の嗅覚表現自動詞は、「ニホヒがニホフ」や「カヲリがカヲル」などのように、それ自身の連用形が名詞化した語を主語にとることはない。よって、例(11)の「香」をニホヒと読むことはないと考えられる。また、カヲリには一例のみ、例外的にマイナスの評価性を有する修飾成分を伴う用例がある(後述)が、基本的には単独でプラス評価を表す。従って、例(11)の「香」はカである可能性が非常に高いと言えよう。

(三) カヲリ

自動詞カヲルがそうであったように、名詞カヲリも『源氏物語』以降にその用例が増加する。中古のカヲリは十、⁺(n)の用例が認められ、専らプラス評価を表す名詞である。

(12) 梅の木のかぎりあると聞く山を行きて見れば、遠くより風の吹き散らすに、ほひかほりみちて、まことに異木はまじらず、一度に咲きわたりて、たゞ白山と見ゆる、

(浜松中納言物語・卷一) +(n)

(13) 中宮より、白き御裳・唐衣、御装束・御髪上の具など、いと二なくて、

例の壺どもに、唐の薰物、心殊にかほりふかくて、たてまつり給へり。

(源氏物語・行幸) +(n)

第三項 中世前期

中世前期において用例の確認される嗅覚表現名詞は、ニホヒ・カ・カヲリの三語である。また、実際の用例ではないものの、辞書の中にカザも確認される。

(一) ニホヒ

ニホヒの意味の下降は前代においてすでに始まっていた。中世前期末に至ると、単独でマイナス評価を表すまでにその意味変化は進行している。ニホヒがプラス／中立的／マイナスの評価性すべてを獲得したのは、中世前期末頃であった。

(14) 御前の紅梅は、この頃盛りに開けて、吹きすぐる夕風のにほひも、いとゞありし月影もよほさるゝ空の気色に、人は立ち出でぬれど、一人ながめいりて、「問はゞやなそれかとにほふむめがゝに再び見えぬ夢のただちを」

(松浦宮物語・中) +

(15) 女院此文ヲ取出サセ給へバ、妓炉ノ煙ニ薰ツゝ、香モナツカシキ勻アリ。手跡モナベテナラズ厳ク、筆ノ立所モメヅラカナリ。

(源平盛衰記・卷三八・小宰相相局愼夫人) +(n)

(16) 海のちかき里に止まりぬ。浦人のしわざにや、隣よりくゆりかゝる煙、いとむつかしきにはひなれば、夜の宿なまくさしといひける人の詞も思ひ出でらる。夜もすがら風いと荒れて浪たゝ枕に立ち騒ぐ

(十六夜日記・一六ウ) +(n)

(17) 若キ女房、礼盤近ク居テ、眠リケルガ、堂ノ中モ響ホドニ、下風ヲシ

タリケルガ、香モ事ノ外ニ句テ、興サメタル所ニ、導師是ヲ聞テ、「簫・

笛・琴・箏・篳篥・琵琶・鏡・銅鉞、其音モタヘナリト云ドモ、香氣ヲ具セズ。多摩摩〔羅〕跋香多伽羅香、其香カウバシト云ヘドモ、音声ヲソナヘズ。今ノ御下風ニヲキテハ、声モアリ。匂モアリ、聞ベシ、カ
イフセベシ」
(沙石集・卷六・八) □

なお、ニホヒが単独でマイナス評価を表す用例の初出(例(17))は、自動詞ニホフのそれと同様に『沙石集』であった。

(二)カ

中世前期のカには、 $+_{(n)}$ 、 $-_{(n)}$ の用例はあるものの、中古に見られた一の用例が見当たらない。この頃、単独でマイナス評価を表すのは、ニホヒと読み不明の「香」とであり、カの確例はない。

- (18) 「法師」遙ニ深キ山ノ中ヲ通ル間、人跡絶タル所有リ、鳥獸猶シ不走来ズ。而ル間、鼻香俄ニ出来ル、難堪キ事无限シ。鼻ヲ塞テ退クニ、此ノ香ノ奇特ナルヲ漸ク寄テ見レバ、草木モ枯レ、鳥獸モ不来ズ。強ニ寄テ見レバ、一人ノ死人有リ。
(今昔物語集・卷第六第六) □

ここで、中世前期に急激に増加する読み不明の「香」について、その読みを考えてみたい。一〇〇例を超える「香」は一体何と読めるであろうか。まず、カとニホヒとの用例数に着目してみる。ニホヒの用例数を中古と中世前期とで比較してみると、二三六例・二三五例とほぼ同数であることに気づく。これに対し、カは一〇二例・四四例であり、中世前期の用例数は中古のその半数にも満たない。もちろん、中古と中世前期とで調査対象とした言語資料の量は異なるのであるが、ニホヒの用例が二時代において同数程度確認できるのに対し、カの用例があまりに少ない印象を受ける。中古においてプラス／中立的／マイナス評価すべてを表す中心的な名詞であったカが、中世前期に至り突然使用されなくなったとは考えにくい。もしカが何らかの理由で使用されなくなったのであれば、それに代わる名詞が必要であろう。ところが、ニホヒは中世前期末にならないと、一の用例が現れないのである(前掲例(17))。プラス／中立的／マイナス評価すべてを表す中心的な名詞が一時不在であったとするよりも、前代に引き続き、中世前期においてもカがその役目を担っていたとする方が自然であろう。この頃の読み不明の「香」は、カとその評価性が重なるように、 $+_{(n)}$ 、 $-_{(n)}$ の用例が認められる。一見して衰退したかのように見えたカは、「香」と表記され使用され続けていたと考えられないであろうか。この頃、中

立的／マイナス評価を表す名詞としてカがニホヒより優勢であったこと、「香」をカと読む可能性の高いことについて、次に挙げる『名語記』(一一二六八)の記述が参考になる。

(19) 問 香氣アル物ヲ善惡ニツケテ カトナツク如何 答 カハ香也

クサ反レハカトナル コノ字 好香鼻香ノ差別ハアレトモ イツレ
モクサノ心ハカハラサル也 (名語記・卷二)

「クサ反レハカ」とは、クサの子音母音を組み替える(反ル)こととなることを言う(*kusa=ka*)。そのカが、「善惡」(＝プラス／マイナス評価)を表し、「好香鼻香」(＝プラス／マイナスの評価性を有する修飾成分を伴う名詞)としても使えるのだと指摘する。以上のような記述からも、中世前期においても引き続き、カがプラス／中立的／マイナス評価すべてを表す名詞として一般的であったと推測されるのである。

(三) カヲリ・カザ

カヲリは、前代同様、十、⁺⁽ⁿ⁾の用例しか見えない。

(20) 仏像二千余体、經卷幾千万ぞ数を不知。文徳天皇御宇仁寿三年に、智

証大師自入唐して、渡し給へる唐本の一切經、七千余卷も焼にけり。頭密須臾に亡て、大小の書籍も失にけり。三密瑜伽の道場もなければ、振鈴声を断て、一夏安居の仏前もなければ、供花の薫も絶にけり。

(源平盛衰記・卷第一六・同寺焼失) +

(21) 心づくしにまちあかしつる郭公は、それかとおぼめく程の一声に、花
橘のかほりなつかしきも、よそふる人もあり顔の心地して

(中務内侍日記・弘安五年四月十七日) +(n)

さて、中世前期に至るとカザが登場する。しかし、表一に用例なしとあるように、実際の用例ではなく、『名語記』における言葉の説明に見られた例である。カザの用例が豊富になるのは近世以降である。

(22) 香ヲカサトイヘリ如何 クサハマヲ反セハカサ也 (名語記・卷四)

先にカのところでは触れたように、反スとは子音母音を組み替えることである(*kusa sama=ksa*)。

第四項 中世後期

中世後期において用例の確認される嗅覚表現名詞は、ニホヒ・カ・カヲリの三語である。この頃、単独でマイナス評価を表す嗅覚表現名詞が姿を消したかのように見えるが、近世以降には再び用例を確認できるため、調査対象とした言語資料の性格によるものと考ええる。

(一) ニホヒ

前述の通り、ニホヒの一の用例は(一時的に)見えない。ただし、+、⁽ⁿ⁾、⁽ⁿ⁾の用例が確認できる点は前代の様相を引き継いでいる。

- (23) 稻花―秋ノ時分モ半バニモナレバ稻ノ花モ咲イテ香シイ者也。農人ノ家ハ田ノ近処ニアルホドニ柴ノ籬ヲ隔テ稻ノ花ノニライガキコヘタゾ。
(中興禅林風月集抄・四六オ一六) +

- (24) いっしか母はなつかしく、おもひの涙うかびければ、なみゐたりける兵々中を、かなたこなたにゆきめぐり、かれもか、これもかといふ露の袖のほひもかをばしく、あわれみあわれむよそほひは、見る目もすゝむ涙なり。
(曾我物語・卷九・辯才天の御事) +⁽ⁿ⁾

- (25) 草々のみどりの色あざやかに見るといへども、手に取る時ハ匂ひニオイあしく鼻を穿つ事あるごとく、世界の栄花も遙かに詠めやる時ハ如意満

足の粧を頭ハすといへども内証に近付てハ皆そらめなりといふ事を弁ふべし
(ぎやどぺかどる) +⁽ⁿ⁾

(二) カ

中世後期におけるニホヒは、一の用例が(一時的に)見られない点を除き、前代の様相を引き継ぐものであった。これに対し、カは、+、⁽ⁿ⁾の用例しか見られない。また、後者もわずかに一例のみであることから、この頃のカは専らプラス評価を表す名詞として使用されていることになる。

- (26) 前栽なる蘭、女郎花の露重げなるあたりに立寄て、忘がたき香にはほふなど、うちながめる気色
(あしびき・卷一) +
- (27) 醃 醃 醬 …… 何ヤラ、香 イウマサウナカ、スルトテ …… 何サ
マヨイ匂イカスルトテ窺ッ
(古文真宝彦龍抄・二七ウ) +⁽ⁿ⁾

(三) ニホヒとカとの交替

ところで、ニホヒとカとの明確な使い分け意識は存していたのであろうか。前掲例(27)では、「(香イウマサウナ)カ」が後統の文脈で「(ヨイ)句イ」に換言されていることから、二語がほぼ同義で使用されているように思われる。この用例では、プラス評価を表す修飾成分を伴う点も共通している。

しかし、『羅葡日辞書』(一五九五)における二語を参照してみると、評価性において中立的な名詞としては優劣が認められることが分かる。すなわち、プラス／マイナス評価を表す修飾成分を伴うのはニホヒだけなのである。

(28) Suavis …… Amaqi mono, agiuai yoku, niuoi yoqi mono.

(羅葡日辞書)

『ラホ日辞典の日本語本文篇』勉誠出版・二〇〇五

+

(29) Oboleo …… Axiqi niuoino fassuru, niuiga aru, suiriō itasu.

(羅葡日辞書)「同右」

-

『日葡辞書』(一六〇三)では、カは“cheiro, ou perfume.”とあり、ニホヒは“chiero.”とある。〈におい〉を意味する“cheiro”は二語と

もに見られるが、〈芳香〉を意味する“perfume”はカのみに見られる訳語である。この語が単独でプラス評価を表す名詞であることを積極的に認めようとする意識が窺える。

以上から推測するに、中世後期は、プラス／中立的／マイナスの評価性いずれも担う中心的名詞としてカが優勢であった前代までの言語意識が少しずつ弱化した時期であったのではなからうか。そして、カと交替するように、プラス／中立的／マイナスの評価性いずれも担う中心的名詞としてニホヒが台頭し始めているように見える。中世後期は、嗅覚表現名詞にとって、まさに転換期であったと考えられる。

(四) カヨリ・カザ

中世後期におけるカヨリは、全三例と非常に少ない。本論第四部第八章において後述するように、自動詞カヨルの雅語化はこの頃すでに始まっており、その連用形名詞であるカヨリも必然的に文章語(雅語)として認識されていたと考えられる。そして、この文体的意味の確立により、これ以後、評価性もプラスに限定され続けていったのであろう。

また、前代に初めて見えたカザは、やはり用例は未見であるものの、『和玉篇』(一五世紀後半)にその存在が確認される。「香」「臭」の二字の訓と

して配されているのである。漢字の字義からも明らかのように、近世以降のカザはプラス／マイナス評価ともに表す語として使用される(後述)。

第五項 近世前期

近世前期において用例の確認される嗅覚表現名詞は、ニホヒ・カ・カヲリ・カザの四語である。表一からは、いずれの嗅覚表現名詞もプラス／中立的／マイナスの評価性すべてを有するかのように思われる。しかし、その用例をつぶさに見ていくと、プラス／中立的／マイナスの評価性すべてを有する中心的な嗅覚表現名詞がニホヒであることが分かる。

(一) ニホヒ

近世前期におけるニホヒは全二四五例ある。このうち、十の用例が最も多く、評価としては中立的な用例⁽¹⁾・⁽²⁾は全体の一五・九%、一の用例は六・五%をそれぞれ占める。一の用例がまとまって現れていることから、中古に始まったニホヒの意味の下降は、近世前期に至り定着を見たと言えよう。ちなみに、ニホフの意味の下降の定着時期も同時期である(本論第三部第六章参照)。

さて、近世前期の総用例数のうち、十の用例以外が占める割合はカよりも高い(後述)。単に数量的に見た場合、ニホヒの方が中立的／マイナスの評価性を有する嗅覚表現名詞として優勢であると考えられる。

(30) さて川面を見渡せば、波打ち寄する島田の宿、吹き送りたる川風に、

花も散りぬる藤枝の、にほひを留めて岡部の宿、空薫なれや唐衣、宇津の山邊の現にも、夢にも人に逢はぬとや、詠みける歌も理也。

(竹齋) (1)

(31) ▲盗……思ひ出した。夜瓜を取には。ころびを打て。取物じやときいた。さらばこれからころびを打て見よふ。さればこそ。枕の様にあつた

枕の時ねてゐて笑ふひとつづぶれたはと云 扱もくよいにほ

ひじや。こゝに有は。うしろのかたにもあつた。此様にしてとらば。

いか程成ともとられふ (続狂言記・瓜盗人) (1)

(32) 一、髪の毛は胡桃の油を御つけ候べし。色黒く品よくにほひ高からず

してよし。その他の油品々あれども、いづれもよろしからず。匂ひあ

しき油を付たる女は心劣りせらるゝもの也。

(女重宝記・一之巻・六 女化粧の巻) (1)

(33) 女郎夜着の下より尻をつき出すを、不思議に思へば、其あたり響ほどの香かほひふたつまでこく所を火皿にて押えける。覺ありてこきぬるころ入のさもしさ、思おもはずしらずは釈迦もこきたまふべし。

(好色一代男・巻五・七) 一

数量的な面のみならず、用例の得られた言語資料の性質からも、中立的／マイナスの評価性を有する嗅覚表現名詞としてニホヒが一般的であることが指摘できる。すなわち、ニホヒは文章語体・日常語体の言語資料いずれにも出現し得るのに対して、カは専ら韻文を中心とした文章語体の言語資料に多く見られるのである(後述)。

このことを最もよく体现するのが狂言台本である。狂言台本I期におけるニホヒは、謡・ト書きに僅かに使用されながらも、そのほとんどがせりふでの使用である。これに対し、カは全五例中、謡での使用が四例、せりふでの使用はわずかに一例である。このせりふの例も、次に示すように、ニホヒを繰り返し使用することを避けた結果カが使用されたと思われる用例である。せりふで多用されるニホヒの方が、一般的に広く使用されていた名詞である可能性が高い。中世後期の口語を保存するとされる狂言台本

においてこうした使い分け意識の見られることから、前代の中世後期はまさに、ニホヒとカとの勢力が交替し始める時期であったと考えられる。

(34) (伯藏主) 〳〵さりながら、何やらかうはしひにはひがいたすが、何物を

おいてだますぞ……はあ、わかねずみを油あげにしすまひておひたは、

かゝつたが道理じゃ……(伯藏主) 〳〵まつはむまひかゝする……(狐) 〳〵

いやこのかおりをかひでは、かゝつたが道理ぢや (虎明本・釣狐)

こうした日常語ニホヒと文章語カとの使い分け意識の存在をさらに裏付けるのが、次の評判記の用例である。傾城の言葉遣い、つまり、いわゆる話しことばについてどのように表現すべきかを説いている。

(35) 文章の誤りは、其一人のみ見るなれば、外へ漏らさぬ心もあるべし。

これかれ多き付合ひにて、片言〇のみのたまふ傾城を見れば、いと笑止にこそ侍れ。正義を知らぬはことほりなれど、公界ものなれば、片言なからぬやうにこそせまほしき物なれ。何程心安き傾国にても、片言言ひ出したる時、ひしと改めて言ひ聞かする事はしがたきものなれば、常に言ひ扱ふ事を、あらまし此書の後しりに書きつけをくなり。傾国、

心ありて是を見覚えたまはば、詞林の種ともなるべきや。……物にあしき香のするを、女郎の口よりくさいとは聞ゝにくし。わるいにほひの、いやなにほひのなどはいふべし。(色道大鏡・巻第九章部)

まず、文章語体で書かれている地の文では「(悪シ^テ)カ」が使用されている。これに続けて、口頭での言葉遣いについて述べ、「(悪シ^テ)カ」に意味的に対応するクサシでは直接的な表現となり聞き苦しいため、「悪シ^テニホヒ」や「嫌ナリニホヒ」といった迂言的な表現にせよと注意しているのである。文章語(雅語)カと日常語ニホヒとが明確に区別されていたことが明らかである。

(二)カ

近世前期におけるカは全一四三例ある。ニホヒについて述べる中ですでに触れたが、カ全体の中で十の用例以外が占める割合は、ニホヒに比して低く、 $\frac{+カ}{-カ}$ が六・三%、一が四・二%である(ニホヒはそれぞれ一五・九%、六・五%)。こうして単に数量的に見ても、中立的/マイナスの評価性を有する嗅覚表現名詞としてカがニホヒに劣ることは明らかである。

さらに、文章語体・日常語体いずれにも出現し得るニホヒに対して、カは文章語体に散見されるのである。特に、韻文中の用例は非常に多く、近世前期の全用例の半数を占める。プラス/中立的/マイナスの評価性すべてを有する万能なニホヒが誕生した中であつては、カは、和歌など音節数に制限のある中で一音節の名詞が必要となる場合に頻用されたのではなからうか。

(36) 伊庭玄蕃允と聞えし人、侍十人ハかりをぐし、馬にのりて京にのぼるとて、十禅師にすむ僧の、梅のはなさきたるを一えたもちて帰りけるを、その梅わけてたべといはれしに、これハ仏に手向まいらせんとて、

もて帰り侍べる、されと所望をは、いかでむなくすべきとて、俣折して参らするとて、「我宿の仏に手向梅の花折分ぬれハ香こそしるけれ」と申たりければ、玄蕃かんじて、返し、「咲梅にあらぬ鶯こそなり匂ひもふかき僧の哥口」かくて此僧としたしミて、かたのことく寺を立てまいらせけりとかや。(狂歌咄・巻三・一九) +

(37) いまだ少年なれば難波の。よしあし定めんもおとなげなし。去ながら。

むまれ付の面躰は。いかさまあん阿弥の御作にても有べきか。……さきにはふうこんの庭の櫓を触れにし袖の香迄なつかし

(野郎虫・加川右近)

〔40〕

(38) 懐妊極まりたらば、十月が間は心身の慎み第一也。耳にあしぎ事〔41〕をき

かず、目に悪しき色を見ず、仮初にも聖人賢人の教へを聞、書を読む

べし。鼻〔42〕に悪しき香をかぐず、口に悪しき味はひを食せず、

(女重宝記・卷之三・三)

懐妊の時身の持ち様ならびに食物のよしあし)

〔41〕

(39) 「なまなりを漬ける女が」心見にとて菊の花の美しきを敷きて、男

のもとへ遣る。「なまなりの鮪をば五つ白菊の枝になりつゝぶらめく

と見ゆ」男、知らず詠みに詠みける。「腐りつゝにはふがうへのなま

なりは呉れける人のものゝかと見ゆ」

(仁勢物語・一八)

〔42〕

このように、カがニホヒに交替されていく中でも注目すべきは、「色香」

「移り香」「梅ガ香」といった複合名詞・慣用的表現(九〇例)や、「色」

との共起例(全一四例、カと読む可能性の高い「香」を含めると全二三例)

が散見されることである。

(40) 人品と言ふは、身軀よく、えりのあついでい人と言ふにはあらず。縦令、

身体うすき人なりとも。其身やさしき心入れにて。色〔43〕をも香〔44〕をも知り

たる人。

(男色十寸鏡・下)

これらはいずれも、中古から存在した「カ独自の固定的表現である」。

もちろん、「色」との共起などはニホヒにも認められるものの、その数はカ

よりも大幅に少ない。カは、プラス／中立的／マイナスの評価性すべてを

有する嗅覚表現名詞として衰退していく一方、こうした独自の固定的表現

の中にその表現価値を見出されていったと考えられる。

(三) カヲリ

前代において既に雅語化していたと推測されるカヲリは、全八二例得ら

れた。ただし、このうちおよそ半数は西鶴作品の用例が占める。西鶴は、

同時代の他の言語資料であれば通常ニホフ・ニホヒを使用する箇所におい

て、意図的にカヲル・カヲリを使用する傾向があるようである。こういっ

た特定の資料における用例を除けばカヲリの用例数はさほど多くなく、あ

くまでも文章語(雅語)であり、ニホヒのように日常一般に使用される語

ではなかった。

なお、近世前期のカヲリには⁽⁴⁰⁾の用例が二例ある。このうち一例はカヲル・カヲリを好む西鶴作品に見られた用例であり、例外的なものと考えられる。

- (41) 赤子泣たて、むつき「おむつ」のかほり、留伽羅の煙まけて、

鼻つきてうたてかりき。

(色里三所世帯・卷一・四)

⁽⁴¹⁾

また、もう一例は、「カヲリ+良シ+マジ」という婉曲的な表現である。

- (42) 一傾城の髪・衣装に伽羅をとむる事、香炉にたどんを埋め、火あひよ

くし、香盤をよきて閑にとむる事、女郎はせぬがち也。……香炉に火入の火を打こみ、灰をもかけず香盤をもしかず、うちくべたるまゝにてとむるゆへに、よき香もけふりくさくなれば、ついとりく⁽⁴³⁾二度三度置かへて、香具をもしまふやしまはずの躰にて出るがち也。……心せくまゝにもどかしくて、灰をかきおこし、火の上に直に置くなれば、凡薄雲・初音をたきても、かほりよかるまじ。

(色道大鏡・卷第三寛文式上)

⁽⁴²⁾

プラス評価を表す良シを否定するという、間接的なマイナス評価の表現であったために、専らプラス評価を表すカヲリを修飾し得たのであろう。

なお、嗅覚表現名詞においては、上掲例のように、プラスの修飾成分(良シ)にそれを否定する成分(マジ)が下接した用例は他に見出せず、そもそもこうした迂言的な表現自体が稀であつたらしい。

(四) カザ

中世以前において、『名語記』や『和玉篇』といった辞書にのみ確認されたカザは、近世前期に至りまとまった用例が得られるようになる。中世後期の『和玉篇』が「香」「臭」をカザと訓んでいたことと矛盾せず、近世前期におけるカザの評価性はプラス／中立的／マイナスの全てにわたる。

- (43) かくしつゝ契し中のあらはれて蜜柑のかざはふかきふところ

(毛吹草・卷七)

⁽⁴³⁾

- (44) 折節勝手の方より洩来る風に、鼻を驚す魚汁の匂ひ芬々としてげれハ、

一休ふしぎそふに頭をかたぶけ居給ふが、得こらへぬかざなれば、何をか料理し給ふぞや、梅蘭菊の匂ひとても、是程にハ覚え申さず、腹中の時分も最中なれば、とくゝ急がれ候へと仰られければ、新右衛

門承り、いや是ハ和尚さまにまいる物にてハさふらはず、此比の夜寒にて、寸白氣に御座候へバ、菓喰にと存、二三日以前よりたべかゝりたる河豚汁カマクラシの匂ニホヒひにて侍候なれど、和尚様の御出ゆへ、俄に止申なりとあれば、

(杉楊枝・三・河豚汁の呪まじひ)
[16]

(45) ある人の所へ、はうばい一兩人つれだちて、はなしにゆく。ていしゆ出合て、はなしふるまひをして出ず。ぜんなかばに、客人申さるゝ「火の傍に何ぞくばりたるか、あしきかさかする」と言ふ。亭主聞て、人を呼び、「火の傍に、何ぞあるか見よ、何やら、わるいかゞするぞ」と、言ひ付けければ、……「火のはたを、よく見て御ざれとも、なにも御ざらぬが、御方様の、火にあたりて御座る」

(昨日は今日の物語・上)
[17]

(46) 高雄が初音の屏風、吉野が添寐の杜鵑花など、よきものはいづくにてもよし。扱嶋原は境地寂しき在所住まる、菜・大根しやうべんの小便くさきに打うち囲まれ、糞擔子くそたんしのかざ冬葱の追風に鼻を塞がねば堪忍ならず。

(好色万金丹・卷五第二)
[18]

なお、例(44)では、「悪シ十カザ＋スル」が続く文脈で「悪シ十カ＋スル」によって言い換えられており、カザとカとがほぼ同義の語と認識されている。

たと思わせる用例である。あるいは、「悪シ十カザ＋スル」を使用する客人と「悪シ十カ＋スル」を使用する亭主との間に地域差が認められる可能性もあるうが、少なくとも文脈からはそうした差異は読み取れない。

また、カザをニホヒで言い換えられた用例もある。

(47) 話の耳に入らぬ禿は次の間に火渡しするもあり。打倒けて寝たるも夜の更けゆく気色なるに、いづくの墓所むしよに人の骸焼く嗅ぞかほ、透間の風に誘はれ来れば、友加も話を止めて俄に無常を觀ずる顔つき。「げにや如夢幻の世に今日は人の身の上、明日は我身の死出の旅立かも知らず。是を思へば酒が飲まれぬ」といふを、傍なる女郎聞こし召して、「友加様あまり哀れがらんすな。只今のは火葬くわいの嗅にはあらず。わたくしの袂から紙屑が火燧こたつへ落ちて焦げるにほひぞや」

(好色万金丹・卷五第三)

ここでも発話者の言語の地域差などが作用した可能性はあるが、所与の文脈からは詳しいことは分からない。ニホヒほど使用されなかったものの、これの評価性と類似した語として認識されていたことは指摘できよう。

第六項 近世中後期

近世中後期において用例の確認される嗅覚表現名詞は、ニホヒ・カ・カブリ・カザの四語である。表一では、ニホヒ・カ・カザの三語がプラス／中立的／マイナス評価すべてを表すように見えるが、前代に引き続き、やはりニホヒがその典型であると言える。

(一) ニホヒ

前代に引き続き、ニホヒは日常語体・文章語体の別なく現れる。

- (48) 七種の粥には柱といふ餅を入れたり。なつなの匂めで度て、青みは春を顕し、十五日の赤小豆粥も過て、霞引はえ、一重なる梅は散がちに匂まだ残り、未開紅のほめかしきに、三か月のさし出たる夕暮、白魚に海苔のあんばい、ふるけれどいとよし。

(風俗文集 昔の反古・巻二・飲食四季の文并序) + (n) ・ +

- (49) むすこ「ほんにおかしな、匂で御座ります。」通り者「こりや死びとをやく匂だ。じゃが、土手でかげば、死びとの匂も、ゑゐものじやないか。」

(遊子方言・発端) - (n) ・ -

また、近世中後期には、ニホヒに「臭」を当てた用例(一八〇八年)や、

漢語「悪臭」を「アシキニホヒ」と訓じた用例(一七五六年)が現れる。現代語において一般的になりつつある「臭う」「臭い」という表記は、近世以前においては大変稀であったのである。こうした表記は、ニホフ・ニホヒの意味の下降が定着したからこそ成立したものと考えられる。

- (50) 酒を温め、下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ其臭ひを嫌放るに似たり。

(雨月物語・巻一・菊花の約) - (n) ・ -

- (51) 都鄙の遊郎 蕩子あぜつたひの行露 もいとはずたまり壺の悪臭も鼻に入らず千里を通しとせずしてつどひ集り

(西郭燈籠記) - (n) ・ -

(二) カ

表一を見ると、近世中後期におけるカがプラス／中立的／マイナスすべての評価性を有するようになる。しかし、それはあくまでも文章語(雅語)としての使用であり、ニホヒのような日常語として使用されているのではない。

まず、一の用例全四例のうち二例は韻文の用例である。これは、和歌・俳諧など音節数に制限がある中で一音節語である力が必要とされた用例に過ぎない。

- (52) つみに鎌倉に嗅つけられて、七日の説法屁一つに破れぬれば、はては資朝・俊基の屁負ひ比丘尼となられける。または雑混寝の暗がりには、主知らぬ香こそ匂へれと、歌人は詠みもおきしか。

(鶉衣・前篇・鳥羽絵贊)

また、残る一の用例二例は、ともに「音モ無ク、香モ無シ」という固定的表現中の力であり、かつ、文章語体部分の用例である。日常一般の表現からは程遠い。

- (53) 其辞簡にして。無_レ音無_レ臭もの妙所にいたり。
- (54) 「……いかにも彼撒屁漢先年両国にては流行しかど、此度采女原へ出

(風来六部集・放屁論後編)

次に、カの場合、 $+_{[n]}$ 、 $-_{[n]}$ の用例について見てみる。

$+_{[n]}$ の用例全四例のうち二例は韻文の用例である。これは繰り返し述べてきたように、音節数の関係で力が使用されたに過ぎないと考えられる。残る二例のうち、滑稽本の一例は「色モ香モ」を素地にした表現であり文体は硬い。また、人情本の一例は、七音節・五音節を繰り返す韻文めいた地の文中の用例であり、やはり音節数の関係で力を選択されたものと考えられる。

- (55) 平家の人々は。今討れ給迄も。情けをば捨給はず。此殿軍の陣にても。

隙には吹んと思けるにこそ。色なつかしき漢竹の笛を。香もむつまじき鍋の袋に入れて。鎧の引合に指れたり。熊谷是を見奉り云々。「軍を為るに笛を持って出る。イヤハヤなまけた事だ。道理で昨夜笛を吹やら太鼓を打くやら、びい〜と騒ぎつけが、吾は又、平家の陣で、討死の引導渡すと思つた。軍にまで驕るものを、へん久しからずの筈だ。」

(大千世界楽屋探・初編・卷之上)

- (56) 浮世に遠き山住の、春を数へて雪中に、まづ頼母しき冬至梅。其香もゆかし白梅の、闇を照らせし柴折戸に、臥龍が隆中の才智ならねど、

節知り顔の梅一輪。その花びらの五年以来、販元画工の丹誠に、木ぶりも仕上げ枝から枝、やうやく香かをりの高くなりて、

(春色恵の花・自序)

㊦

㊦の用例全一一例のうち九例は文章語体の言語資料中の用例である。残る二例のうち、浄瑠璃Ⅱ期の一例は洒落のためにカが使用されたに過ぎない。また、滑稽本の一例は発話者が「いんきよ」、つまり、老人である。さらに、例57を読み進めると、老人の発話にカを使用しているのに対し、続く北八の心内文ではニホヒを使用しており、発話者によつて使用する名詞を使い分けていることが分かる。プラス評価以外を表すカは、年配者が使用するようなやや古めかしい印象を与えていたと考えられる。

(57) 「……歌学を何ンだと思ふたりや、葱ひともじの事ンだはよ。ハテ鼻へ寄せ

しやがく臭くいを洒落てかくくと付た物。……」

(猿丸太夫鹿巻毫・第二)

㊦

(58) いんきよ「ドレおかん見ましょかい。イヤこれは、けかたいな香かがする。

ペツくく、コリヤ酒さけがかわるなつたのか、よもやそじやあるまい。

ひとつ、おまいのんで見てくだんせ」トきた八へさかづきをさす 北

八……へんなにはひのする酒だと、こゝろにおもひながら、むねをわ
るくして、なでさすりく

(東海道中膝栗毛・六編・上)

㊦

以上述べてきたように、カは中世後期頃にニホヒと交替した後、文章語体部分において中立的／マイナスの評価性を有する嗅覚表現名詞が必要とされた場合に重宝される文章語（雅語）として認識されていたと考えられる。もはや中世以前のようにプラス／中立的／マイナスの評価性すべてを有する語ではあり得ず、カの評価性は専らプラスとなった。ニホヒに意味の下降が生じると同時進行で、カにも意味の上昇が生じていたのである。

最後に、カの衰退の要因が音節数にあった可能性について触れる。カは、日常語としてニホヒに圧倒されていく中、「色」との共起表現や複合名詞・慣用的表現としても継続的に使用され続けた。カ単独の用例数と如上の表現としての用例数との比率に歴史的变化は見出しにくいものの、近世中後期におけるカ一一八例・複合名詞・慣用的表現一一七例という数字は注目すべきである。すなわち、総用例数が必然的に増加する近世中後期において、単独使用のカと複合名詞・慣用的表現としてのカとが同等数あるということから、カが存在価値の半分は複合名詞・慣用的表現としての用法に

存していたと推測されるのである。カの一音節であるという形態の不安定さこそが、ニホヒに取って代わられる要因の一つでもあり、また、現代語にまで生き残るための活路でもあったのではなからうか。

(三) カヲリ

カヲリは、浄瑠璃の謡や、談義本、洒落本・人情本の地の文といった文章語体の箇所偏って現れる傾向がある。近世雑Ⅱ期の五例というのも雅文体の随筆における用例である。

(59) 風流このむもの、今の世いとおほかれど、いづれをまことのみやびと

はいひも定めん。……みやびは花のかほりなり。花と実とありてたり

なん。されどこのかほりありてこそ、梅は桃にまさりぬれ。

(花月草紙・卷一・一九・みやび) ㊦

黄表紙や滑稽本など、日常語の豊富な言語資料の発話部分において使用されたカヲリもあるものの、あくまで文章語(雅語)としての使用である。

次に挙げる例(60)は、後に「なに人やらん」とあることから擬古文を志向した発話であるし、例60も和歌を真似て洒落た言い回しをした発話である。

(60) 薫物のにほひゆかしく、いかなる人やらんと暮ごしにさしのぞきける

に、年のほど二八ばかりのうつくしき娘、短冊に何やらん書き、そばなる腰元にさゝやき、中にもさかりなる櫻の枝へつけさせける。……かの娘立ちあらはれて、二ツの短冊をとりて、岩次郎が方をはづかしげにぞ見ぬたり。「ゆかしい香じや。なに人やらん。」

(敵討義女英・中) ㊦

(61) 大「下僕も大銘酩酊醉に及んで、恐れ入り山のヲホン霜のみみぢば、

真赤にならの八重桜、池田いたみのお酒の香りが京九重に匂ひぬるか
なツ、なんと妙ではげせんか。」 (七偏人・四編・巻下) ㊦

文章語(雅語)としての使用意識の低いと思われる用例もないわけではないが、大変稀である。

(62) あるけんどんなるそば屋、一とびに金まうけせんとして、めうがそバと

いふ思ひつき。「まづやくミがめうが一しき、ちよくがめうがのしほり汁。これハかほりよく、さつハリとしてめづらしひ」と、

(瓢百集・蕎麦) ㊦

カワリの評価性が専らプラスであることも、この語の文体的意味（文章語）の確立を示しているよう。

（四）カザ

前代同様、カザはニホヒ・カ・カワリの三語ほど用例が多くない。江戸語資料にはまず見られず、成立の遅れたカザはわずかに上方語として残存するにとどまったようである。これを引き継いだものが、現代語において「東は佐渡あたりまで、西は九州東岸から沖縄にかけて中央日本を中心にして分布する」カザである（『日本言語地図』第八五図）。

また、カを語構成要素として含むカザであるが、文体的意味はニホヒのそれに類似し、多分に日常語的である。

- (63) ヤイくくく勘六がこと譏り上ったは長八めじゃな。イヤおれじゃな
い久兵衛じゃ。イヤおれじゃないぞく。エ、やかましい。どいつこ
いつの用捨はない皆覚悟してけつかれ。人の銭借っては呑まいし。お
れが酒呑だらうぬらが足でもひよろ付か。なんのいのちつと傍あたり

が熟柿じゆくしくさいばかり。ぬかしおんな。……儕おのいらは銭がないから得喰
はぬのじゃ。おれが此嗅かほをかゞしてこますを有難いと思ひけつかれ。

（新版歌祭文）

- (64) 先女郎の嫌きらみことは。しつこき有様をきらふなり。薰袋にほひやうぶをいれ目を

なぐめにして女郎を見。色めかしき身ぶりをしいやらしき風汗ふうあせ手拭な
どを襟にまき。女郎の兒をほめ。衣装の有なしを語り。くしかふかい
の批判をし。かさがあらふの。くさいのとは決して言ふべからず。：

髻むすは剃り沐浴ゆあみ爪つめなど長からぬやうに。あしきにはひうつりたる衣類
下紐等。必ず無用なり。身むさからぬやうにしてよろし。

（魂胆総勘定・巻之中・遊里に三つのいましめある事）

第四節 おわりに

古来、プラス／中立的／マイナスの評価性すべてを有する中心的な嗅覚
表現名詞はカであった。しかし、中古にニホヒの意味の下降が始まり、中
世末にはニホヒ一語でマイナス評価をも表し得、プラス／中立的／マイナ
スの評価性すべてを有する嗅覚表現名詞が二つ共存するに至る。そして、
そうした語彙の不均衡二四を修正するべく二語は競合することとなり、それ
まで中心的な嗅覚表現名詞であったカとニホヒとが交替したのである。こ

の交替を促したのは、カの一音節語という形態的特徴ではなからうか。しかし、一音節ゆえの不安定さによりニホヒに交替されながらも、一音節ゆえに複合名詞・慣用的表現中で十分に熟すこととなり、その後の表現価値を維持し得たと見ることもできる。ニホヒは、いわば必然的に評価性を拡大し、カと交替していったのであろう。以後、カとニホヒとで文体的意味を棲み分けながら共存し続けたが、カはその文体的意味(文章語)も相まって評価性がプラスに傾いていくのであった。嗅覚表現名詞語彙の変化に特徴的なのは、一語がひとつの評価性を有し、数語で評価性を分担して語彙を構成するのではなく、ニホヒ一語がプラス／中立的／マイナスの評価性をすべてを担うように変化していった点である。これは嗅覚表現自動詞も同様である。

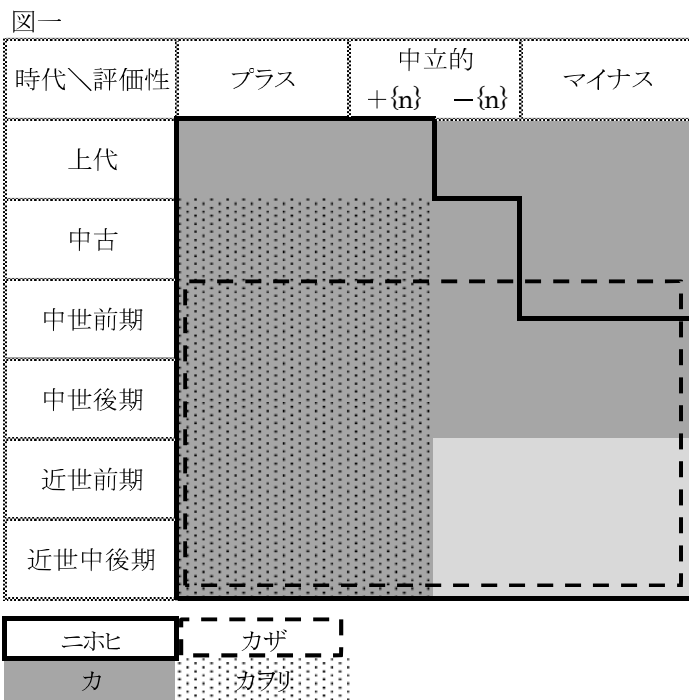
ところで、本論第三部第六章において考察したように、自動詞ニホフの意味の下降が生じる時期、定着する時期は名詞ニホヒと同時期である。しかし、意味の下降の要因は自動詞と名詞とで異なっていた。ニホフは、嗅覚表現自動詞語彙において、そもそも不在であったマイナスの評価性を有する語の必要性の高まりに応えるため意味の下降が生じたと考えられる。そして、ニホヒは、プラス／中立的／マイナスの評価性すべてを有する嗅覚表現名詞としての力が衰退の兆しを見せたため、その穴を埋めるべく意

味の下降が生じたと考えられる。ここであえて、一方の意味変化がもう一方の意味変化を誘発したと捉えるならば、ニホヒは本来ニホフの連用形であるので、自動詞の意味変化に付随して名詞にも意味変化が生じたということもできるかもしれない。しかし、それとは別に、ニホフは嗅覚表現自動詞語彙それ自体に、ニホヒは嗅覚表現名詞語彙それ自体に、それぞれ意味の下降の要因が存していたことには着目すべきであろう。

なお、カの評価性・文体的意味に類似する語としてカフリが、ニホヒの評価性・文体的意味に類似する語としてカザがある。ただし、前者は通史的に見て一貫してプラスの評価性を有する語であったり、後者は上方語の域を出ない方言特有語・俚言であったりと、それぞれに特徴が見出され、カ・ニホヒの表現特性と完全に重なる語ではなかった。

最後に、本章で考察してきた嗅覚表現名詞の史的変遷をまとめた図一を示す。ここでは大まかな流れを示すことを主眼としたため、用例が(一時的に)見られない場合も、前後の様相から用例の有無が十分に想定されれば線で囲んだり塗りつぶしたりした。

図一から分かるように、ニホヒは中古・中世を通じて評価性を拡大し、日常語としての性格が強い語として嗅覚表現名詞の中心的な存在となり得た。これに交替するように、カは文章語(雅語)として専らプラス評価を



表す語と変化していったのであった。もちろん、近世以降、中立的／マイナス評価を表す場合もあったが、文章語がマイナスの評価性を有しにくいという傾向にカももれず、そうした用例は特殊なものとして捉えた方がよからう（それゆえ、図一中、近世以降の「-{n}」「マイナス」は薄く塗りつぶした）。

また、ニホヒの評価性・文体的意味に重なるようにカザが、カの評価性・文体的意味に重なるようにカフリが、それぞれ存在した。ただし、二語と

もにニホヒ・カほど多用される語ではなかった。

嗅覚表現名詞語彙は主にこれら四語により構成され、内部で評価性・文体的意味の分担を図りながら現代語にまで至ったのである。

例えば、『太平記』では、古活字本において「香」とある名詞が、土井本ではニホヒとあり、「香」の訓がカに固定していないことが分かる。

竹林院大納言公重卿、濃香ニ牡丹ヲ織タル白裏ノ狩衣ニ、薄色ノ生ノ衣、洲流ニ鞆絵ノ藤ノ丸、青鈍ノ生ノ織物ノ指貫ニテ、御車寄ニ被参タリ。
(古活字本太平記・巻二四)

竹林院大納言公重卿、濃きにほひに牡丹を織たる白裏の狩衣に、薄色の生絹、洲流に鞆絵の藤の丸、青鈍の生絹の織物の指貫にて、御車寄せに参られたり。
(土井本太平記・巻二四)

準体句・連体句を構成する連体形とは考えられない、単に名詞として機能する連体形を指す。

画艸昏は、理屈臭きを嫌ふといへども、今そのりくつ臭きをもて、一ト趣向となし、三冊に述べて幼童に授く。
(心学早染艸・序)

川端善明（一九七九）の説明するように、形容詞が「語的に体言としての自立的な形態を得ることで安定を果そうとするのが、連体形キ（甲）の成立であった」わけで、形容詞連体形は、「体言を装定する形である以前に、自ら、さま、乃至、ことを意味する体言形だったのではないか」と考えられる（傍点本文）。

なお、古代語では、形容詞連体形^キと、形容詞に名詞化接尾辞^サの付加した^キとが相通じて用いられている場合のあることが指摘される（永田友市一九九三）が、ここではその意味の差異については触れない。

三ニホヒの用例数には、襲の色目（中古一八例・中世前期四五例・中世後期四例）や、匂い威（中世前期九例・中世後期二例・近世前期一例・近世中後期一例）を指す場合も含めた。ニホヒがこれらの対象を指す名詞として使用されることから、視覚情報と嗅覚情報とが「気」という共通項を介し連続することが分かる。本研究では、従来、視覚表現的であると言われてきたこれらの用例も含めて嗅覚表現と考える。

四意味の上昇・下降の捉え方については、小野正弘（一九八四）を参考にした。

五表一では用例数を示したのみで、韻文の用例数を括弧で括るなどはしな

かった。

六宮島達夫（一九七二）は、動詞の主体に、もの・こと、その中間としての現象の三つが想定し得ると指摘し、ものが主体である例として「花ガニオウ」を、現象が主体である例として「ニオイガニオウ」をそれぞれ挙げる。現代語においては、ニオウがそれ自身の連用形名詞を主語にとることができるようである。宮島達夫（一九七二）で紹介されている用例から一例引用する。

綺麗に分けた濃い髪のパマーダの匂ひがブンと部屋に匂った。

（冬の宿・三九）

近世以前に「ニホヒガニホフ」という主述関係は確認されず、いつどのようにして誕生した表現であるかは十分に分かっていない。

七「馥」の誤写と思われる存在しない字が使用されている。

八ニホヒには固定的用字「匂」があり、「香」がニホヒの訓として固定化していたとは考えにくい。

九直接的にマイナス評価を表すクサキ（クサシの連体形名詞）・クササ・クサミ等が増加するわけでもない。中世後期において、クサキは二

例、クササは三例である。

一〇「ここでの「片言」は、訛語ではなく誤用を指すか。

一一表一では、「梅ガ香」が中世前期から見られるとなっているが、『古今和歌集』（九〇五・九一四）にすでに用例があり、その初出は中古に遡る。

むめがかを袖にうつしてとどめてば春はすぐともかたみならまし

（古今和歌集・春上・四六）

よって、「色ガ香」「移リ香」「梅ガ香」はいずれも中古に誕生したと言える。

一二ただし、近世中後期には「梅ガカヲリ」が一例のみ見られる。

梅が薫りの軒伝ひには、扇箱買ませふと囀り、梅の雨の晴間を待てハ、
傘の古骨買ふと名のり、松虫の髭の長き夜をたのみては、蠟燭の流れ
かハふと啼しも、いつしか埋火のもとにうづくまる頃となれば、落嘶
買ませふと鳴り込だる書林の何某。
（気のくすり・序）

しかし、「梅がかを桜の花に匂わせて柳の枝に咲かせたい」といった慣用表現もあるように、「梅ガ」は力に固定的な複合名詞と言えるのではな

ろうか。上掲例は孤例であるので、例外的に結合した形と考えられる。

一三二〇一〇年に改定された常用漢字表では、「匂」（ニオウ）の字が追加された他、「臭」にニオウの訓が追加された。

一四筆者は、類義語の並存という事象すべてが語彙の不均衡に繋がると考えているわけではない。類義語間に競合・交替が認められたという結果から、その語彙においては類義語の並存が不均衡な状態であったと類推するわけである。

第四部 自動詞Ⅱ

カヲル・クンズの文章語としての表現価値の確立

第二節 問題の所在

第二節では、主に問題とする「風カヲル」「薫風」に関する先行研究について触れておきたい。

第八章 カヲルの雅語化

―和語表現「風カヲル」と漢語「薫風」との関係を中心に―

第一節 はじめに

前章で問題にしたニホフに次ぐ嗅覚表現自動詞としてカヲルがある。この語は、語それ自体の史的变化もさることながら、「風カヲル」という慣用

意味との二つに分けることができる。さらに、意味は三つに細かく分けられる。

表現としての史的变化、特に漢語「薫風」との関連についてもいまだ十分に明らかにされていない部分が多い。ともに夏の季語として、俳句のみならず手紙の時候の挨拶にも使用される文章語である和語表現「風カヲル」と漢語「薫風」とについて、後者が前者の成立・発展に影響を与えたとの

○形態

「カヲル風／風カヲル」は、「薫風」の訓読により生まれた表現である（『日

本国語大辞典（初版・第二版）「かおる風」項、佐藤武義二〇〇三「風薫る」項など）^三。

本国語大辞典（初版・第二版）「かおる風」項、佐藤武義二〇〇三「風薫る」項など）^三。

指摘がたびたびなされてきたが、そうした指摘はいずれも、限られた文献を基にした推測の域を出ていないのである。

そこで、本章では、カヲルの史的变化を明らかにした上で、「風カヲル」

○意味^a

の史的变化へと考察を進め、特に漢語「薫風」との関係性について従来の指摘を再検討していく。

和歌中の「風カヲル」は季節の限定がなく（『日本国語大辞典（初版・第二版）』・『角川古語大辞典』）、むしろ春に偏りを見せる（井本農一九八一・

佐藤武義二〇〇三)。よつて、和歌中の「風カヲル」は「薰風」の訓読とは考えにくい（山本健吉一九九六）。

㊦意味 b

連歌以降の「風カヲル」の季節が夏に限定化する（井本農一九八一・

『角川古語大辞典』）のは、「薰風」の影響である（山本健吉一九九六）。

以上の指摘を通史的な観点から図示すると、図一のようになろう。まず、中国語に〈夏の風〉を表す「薰風」があり、日本語はそれをそのまま受容した。受容の時期については諸氏明言していないが、『日本国語大辞典（第二版）』薰風項で挙げられた初出例『懐風藻』（七五一）あたりと考えて良からう（後掲）。

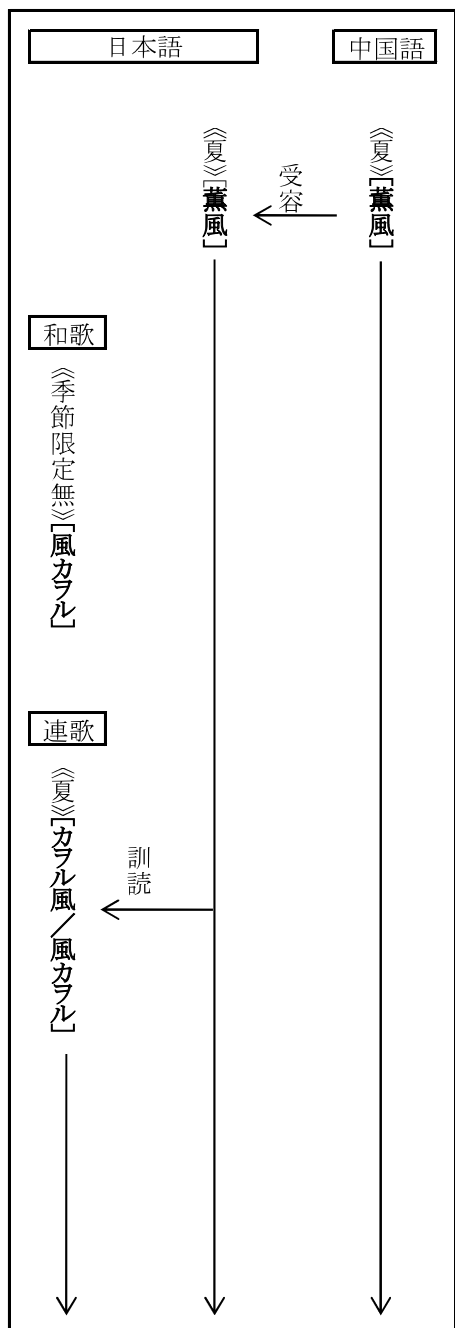
㊦意味 c

「薰風」は〈夏の風〉を表す（諸辞書の「薰風」の記述、また、㊦意味

a・bの指摘の前提に存する認識から）。

そして、日本語に入ってきた「薰風」は、連歌時代以降に訓読され、「カヲル風」あるいは「風カヲル」という表現へと和語化するに至る。連歌以前の和歌にも「風カヲル」という表現は見られていたものの、これには季節の限定がなく、季節が夏に限定される中国語「薰風」との関連は見出し

図一 「風カヲル」の発生・展開



にくかった。これに対し、連歌以降の「カヲル風／風カヲル」は季節が夏に限定されており、「薫風」の影響が及んだ表現と考えることができる。

第二項 本研究の立場

以上のような従来の指摘は、一見、筋道だった漢語の和語化の過程に思われる。しかし、こうした指摘は資料の網羅的な調査の結果導かれたものではなく、検討の余地があるのではなからうか。

特に、①形態について証明するには慎重な考察を要する。なぜならば、「薫風」を中国語そのままに「連体修飾語―被連体修飾語」の関係で名詞として訓読する「カヲル風」が一切見えず（後述）、「主語―述語」の関係で動詞述語文に変化させ訓読する「風カヲル」が定着するという、漢語の和語化における複雑さの原因が一切説明されていないからである。

ここで想起されるのが、「春立ツ」と「立春」との関係である。漢語「立春」の訓読により生まれたと考えられてきた和語表現「春立ツ」が、実は日本語独自の表現であり（新井栄蔵一九七六）、万葉人によって意図せず両者が結びつけられたと見る立場がある（小島憲之一九九〇）。そこで着目されたのも、両者の文法構造の相違であった。すなわち、「立ツ春」ではなく「春立ツ」であり続けた点に、「春立ツ」が日本語独自の表現であること

一証左が見出されたのである。四

この例が示すように、一見関連があるように思われても、漢語と和語とを容易に結びつけるのは危険である。

「風カヲル」と「薫風」とについても、①形態・②意味について、両者の関係を再検討する必要がある。そして、「風カヲル」と「薫風」との間に何らかの関係が見出せたととして、「薫風」の構成要素「薫」の訓に、ニホフやカウバシではなくカヲルが選択された背景も明らかでない。この訓選択の問題についても取り上げる。そのためには、韻文のみならず散文をも視野に入れた調査が必要となる。

第三節 カヲルの史的変遷

第一項 上代

下の表一に示したように、カヲルは古く上代からその使用が確認される。ただし、ニホフが五七例ある（本論第三部第六章、以下ニホフに関しては参照章の注を省略する）のに比してその数は非常に少ない。次に挙げる用

表一 上代

資料ジャンル\対象	カヲル							
	植物(草木/花)	薫物	飲食物	その他	身体(美)	身体(超)	煙霧	風
記紀万葉・上代計	0	0	0	0	0	0	3(2)	0

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

例のうち、例(2)は『日本書紀』平安中期末点に見えるカヲルの訓であるため、上代の確例と呼べるのは例(1)・(3)のわずかに二例である。対象は煙や空気中の水蒸気であり、「煙霧」と一括りにできる。

(1) 伊勢志摩の 海人の刀禰らが 焼く火の気 磯良が崎に 加保利あ

ふ (神楽歌・湯立歌)

(2) 三年夏四月、沈水、漂着於淡路嶋。大一困。嶋人、不知沈水以、交薪

焼於竈。其烟氣遠薰。則異猷之。

(日本書紀・卷第二二推古紀)

(3) 神風の 伊勢の国は 沖つ藻も なみたる波に 塩気のみ 香乎例

る国に うまこり あやにともしき 高照らす 日の皇子

(万葉集・卷二・一六二)

第二項 中古

カヲルは、『万葉集』にある例(3)の後、勅撰和歌集のみならず散文においてもしばらく用例を見ない。そして、『源氏物語』を境に用例が増加し始める。

中古には、下の表二からも分かるように、植物・薫物・身体(美しさ)・

身体(超越性)といった対象が見られる。対象の広がりには二ホフのそれと重なるものの、全体の用例数は二ホフの一二六例に及ばない。

中古において最も早く見える植物は、『源氏物語』よりも先に成立したと考えられる『枕草子』や『和泉式部日記』に見られた用例である(4)・(5)が、薫物・身体(美しさ)・身体(超越性)はいずれも初出が『源氏物語』である(6)・(8)。『源氏物語』が後に成立する仮名散文資料へ与えた影響は、カヲル一語をとつても大きかったことが分かる。

(4) 節は五月にしく月はなし。菖蒲・蓬などのかをり

あひたる、いみじうをかし。(枕草子・三九)

(5) 橘の花をとり出でたれば、「昔の人の」と言はれ

て「さらば参りなん。いかゞきこえさすべき」と

いへば、言葉にてきこえせんもかたはらいたく

てなにかはあだくしくもまだきこえ給はぬをは

かなきことをもと思ひて、「かをるか」によそふるよ

表二 中古

資料ジャンル\対象	カヲル							
	植物(草木/花)	薫物	飲食物	その他	身体(美)	身体(超)	煙霧	風
仮名散文 I 期・中古計	2/7(6)	12	0	0	9	3	0	0

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

りはほとゝぎすかばやおなじ声やしたると」ときこえさせたり。

(和泉式部日記)

第三項 中世

(6) 風、はげしう吹ふゞきて、御簾の中のにほひ、いと物深き黒方にしみて、名香の煙も、ほのかなり。大将の御にほひ、かほり^五あひ、めでたく、極楽思ひやらるゝ夜のさまなり

(源氏物語・賢木)

(7) この君、いと、あてなるに添へて、愛敬づき、まみのかほりて、笑がちなるなどを、「いと、あはれ」と見給ふ。思ひなしにや、猶、いとよう、おぼえたりかし。たゞ今ながら、まなこゐの、のどかに、恥づかしきさまも、やう離れて、かほりをかしき顔さまなり。

(源氏物語・柏木)

(8) 「薰大将の」香のかうはしさぞ、この世のにほひならず、あやしきまで、うちふるまひ給へるあたり、遠く隔たる程の追風も、まことに、百歩のほかも、かほりぬべき心地しける。

(源氏物語・匂宮)

先に触れたように、カヲルの用例は『源氏物語』以降に増加し始めるのであり、この作品が後に与えた影響は大きかったものと思われる。中世前期には、特に擬古物語にその影響が引き継がれる。表三から明らかのように、仮名散文Ⅱ期の言語資料を中心に、中世のカヲルは全三二例(前期二九例・後期三例)確認される。また、中古の勅撰和歌集には見えなかったカヲルも、中世の勅撰和歌集には散見され始める。

なお、『源氏物語』における身体(超越性)を対象とするカヲルは、全て薰大将^六の描写に使用されたものである。『源氏物語』以外に身体(超越性)

をとるカヲルが基本的に見られないことを踏まえると、この資料特有のカヲルの用法であったと見た方がよい。

(9) 木ずゑにはふくとも見えでさくら花かをるぞがせのしるしなりける

(金葉和歌集(一一二七)・春・五九)「新編国歌大観」

(10) かをる香のたえせぬ春は梅の花ふきくる風やのどけかるらん

(千載和歌集(一一八七)・春・一八)「新編国歌大観」

(11) 梅ちらす風も越えてや吹きつらむかをれる雪の袖に乱るゝ

(新古今和歌集(一一〇五)・春・五〇)「新編国歌大観」

(12) 風通ふ寢覚の袖の花のかにかをる枕の春の夜の夢

(新古今和歌集(一一〇五)・春・一一二)「新編国歌大観」

(13) このねぬる朝明の風にかをるなり軒端の梅の春の初花

(新勅撰和歌集(一一三三五) 春・三二) 「新編国歌大観」

(14) 五月雨の雲ふきすさぶ夕風に露さへかをる軒の橋

(玉葉和歌集(一二三一二) 夏・三七四) 「新編国歌大観」

中世後期には全三例しか見えず非常に少ない印象を受けるが、嗅覚表現
それ自体は確認される。よって、調査対象とした言語資料の質差の問題も
含め、一時的にカヲルの用例数が少なくなっているに過ぎない。

しかしながら、中世におけるニホフが全一〇六例(前期九〇例・後期一
六例)あることを踏まえると、やはりカヲルはニホフほど多用されない嗅
覚表現自動詞であったと考えられる。

また、中世のニホフが対象を次々に広げていったのに対し、カヲルは、
植物・薫物の二つの対象(15)・(16)を維持しつつも、中世前期の『増鏡』
の用例(17)を最後に身体(美しさ)は見られなくなる。とる対象の広が
りから考えるに、カヲルはニホフに比して使用場面が限定的な語であつた
と言えそうである。

(15) やう／＼春にもはりゆけは、四方

の山へに霞たなひき、野辺のさわ

らひあしたの雨に萌えいて心地

よけなるも、我身のためにはうら

やましく覚えて花のほひかほ

りわたるにも、

(唐物語・第一四話)

(16) いづれの沈・檀ともわかれぬ御に

ほひの、すゞしく身に染みてかを

りくる風のつては、違ふ所なきも

のから、なほ思ひなしにや、たゞ

仏の御国の心地のみして

(松浦宮物語・下)

(17) 齋宮、紅梅のに「ほ」ひに、葡

萄染めの御小桂なり。御髪いとめ

でたくさかりにて廿に一、二や餘

り給らんと見ゆ。花といはば、霞

の間のかば桜も猶にほひ劣るべ

表三 中世

資料ジャンル\対象	カヲル							
	植物(草木/花)	薫物	飲食物	その他	身体(美)	身体(超)	煙霧	風
仮名散文Ⅱ期	1/6(3)	8(2)			3			
説話	0/1	2						
和漢混淆文Ⅰ期	0/6(3)	2						
中世前期計	1/13(6)	12(2)	0	0	3	0	0	0
和漢混淆文Ⅱ期	0/1	1						
室町物語								
抄物・キリシタン資料・狂言台本	0/1							
中世後期計	0/2	1	0	0	0	0	0	0

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

く、いひ知らずあてに美しう、あたりもかほる御様して、めづらかに見えさせ給。
(増鏡)

ところで、身体(美しさ)を対象としてとらなくなる時期は、カウバシもニホフもカナルと同様、中世前期であった。中世後期以降も身体(美しさ)は度々描写されるが、嗅覚表現語彙がその表現に使用されなくなったのである。室町物語に見られた、美人描写の例を以下に挙げる。

(18) 参り下向の数多きなかに、年の程十五六ばかりなる姫君のなのめならず美しき、女房達四五人して濡らさじと立ち隠す。……御目のうちの

気高き、あくまで愛敬がまし「く」て美し「く」ぞおはしける。

(しぐれ)

(19) 御堂より下向の人々、貴賤知らず。その中に、やごとなき上臈一人ましくける。あまりにうつ「く」しさに目をとめて、見るに心も言葉も及ばぬ美人にてぞおはします。昔の楊貴妃、衣通姫、又は天人と申とも是にはまさらじと見けり。装束は菖蒲襲の十二単衣に、姿かゝり美しとも申すもおろかなり。
(小男の草子)

中世後期以降の美人描写は、上掲例のように、視覚表現語彙が多用されるようになっていったと考えられる。

カナルは、用例数と対象との二側面から見て、上代以来ニホフに圧倒され続けてきた語であった。中世には、ニホフが日常語としてマイナスの評価性をも獲得していく中、それとの棲み分けを図るように、カナルは文章語(雅語)的側面を確立し始める。

(20) *Canori, u, otta. P. i. Niuô. cheirar, ou, recender.*

(日葡辞書) 『パリ本日葡辞書』 勉誠社・一九七六

「邦訳・讃歌譚 *Niuô* に同じ。芳香を放つ、すなわち、かおる。『邦訳日葡辞

書』岩波書店・一九八〇)」

『日葡辞書』のいう「詩歌語」とは、「いわゆる歌語のみとは限らず、物語用語とも通ずる語を含む」が、「物語用語の中に和歌・連歌に用いられる固有の古語と性格的に相通ずるもののあることを認めた」ことを示す用語であり(森田 武一九九三:三三〇-三三一頁)、この注記の見られないニホフ・クンズとは一線を画す語であったのは確かである。

第四項 近世

中世後期に萌芽したカヲルへの雅語意識は、近世において定着を見せる。例えば、俚言に対応する雅言をいろは順に並べた俗雅辞書『詞葉新雅』（一七九二）の「に部」には、俚言ニホフに対応する雅言としてカヲルが挙げられており、ニホフとカヲルとが対比的に捉えられていることが分かる。また、カヲルが人名に頻繁に使用されるようになったことも、この語にニホフやクンズとは異なる意識の持たれたことを如実に表していると言えよう。

(21) 上林家の二世薫かほろにつかへし数弥、後に三代の薫かほろとなりて、前の薫かほろが

紋を付たり。

(色道大鏡・巻第三寛文式上)

(22) ▲ 同町 花屋半四郎内……

一 花月 一 さんご 一 たかせ 一 玉かづら……

一 やへぎく 一 小しぶき 一 いづみ 一 かほる……

(けいせい色三味線・江戸之巻・吉原女郎惣名寄)

表四 近世

資料ジャンル\対象	カヲル							
	植物(草木/花)	薫物	飲食物	その他	身体(美)	身体(超)	煙霧	風
狂言台本Ⅰ期								
仮名草子		2						
浮世草子		3						
噺本Ⅰ期	0/3(2)	1(1)	1					1
井原西鶴作品	3/3(5)	3	1(1)	1		1		3(3)
浄瑠璃Ⅰ期(近松)	0/1(1)	4		3(1) [#]				
近世雑Ⅰ期				1				
俳諧Ⅰ期	0/4(2)	1						6(6)
近世前期計	3/11(10)	14(1)	2(1)	5(1)	0	1	0	10(9)
浄瑠璃Ⅱ期		3(3)						
狂言台本Ⅱ期		1						
談義本						1		
噺本Ⅱ期								
近世雑Ⅱ期	0/1	1	1					
洒落本	0/6	2						
黄表紙								
読本								
滑稽本	0/2(1)							
人情本	1/5(2)	1(1)						
俳諧Ⅱ期								1(1)
近世中後期計	1/14(3)	8(4)	1	0	0	1	0	1(1)
総計	7/47(25)	47(7)	3(1)	5(1)	12	5	3(2)	11(10)

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数) [#] 聴覚情報内数

カヲルに対する雅語意識は、この語の現れる資料ジャンルや文体からも裏付けられる。すなわち、ニホフもカヲルも、和歌を始めとした韻文に使用される点では共通しているものの、散文に注目してみると、カヲルは雅文の文語体に偏って現れる傾向にあるのである。口語的要素の強い、洒落本・滑稽本・人情本におけるカヲルは、すべて文語体である地の文や和歌部分に見られた用例であり、やはり通常語としては意識されていなかったと考えられる。

とる対象は、中古・中世と変わらず植物(23)・薫物(24)の二つがある他、近世前期には新たに風が登場する。飲食物・身体(超越性)もわずかに確認されるものの、後で述べるように、これは非常に特殊な用例である。よって、近世のカヲルのとる対象は、植物・薫物・風の三つが主であったことになる。こうした対象の偏りは、文体的意味(雅語)から影響を受けた結果であろう。

(23) すこふるきみは小若佐の、月のひかりや小更級、こいにそひらく白菊
は、ふゆも常磐の和哥松と、ゆきのうちよりはなふくむ、梅が枝にか
はるかせ、四季のはなさくあけや町、お多との花里とは、ゆふまい物
てハ、はつあ、御座らぬ。

(枝珊瑚珠・三・よし様 太夫格子ほめ言葉)

(24) 古句など口ずさみ余念なき楽しみ合おさへの数も重なり、互ひに酔
いを催し、其儘そこに臂まくらとろく目睡ける折節、いづくともな
く名香薫音楽きこえければ、品葉をはじめ、伝八喜六は不思議やと
打驚きあたりを見れば、其さま威高き異人、忽然として出来たり。
(当世座持話・巻四)

先に少し述べたように、飲食物・身体(超越性)を対象とするカヲルは少々特殊な用例である。

まず、飲食物の用例三例について見てみる。長くなるが噺本I期の用例を次に挙げる。

(25) 「男」西山御室のあたりを過行ことありしに、人はなれなる山のそハ
にわらやに柴の扉をたて、さながら僧庵ともみえず、又在家ともなく、
心あるさまにすみなしたる所あり。ふきくる嵐に、えもいわれぬには
ひ、さとかほりたり。年のうちよりさく梅の、にほひにもあらず。春
ならねバ桜ハ、ほどをし。いかなる君の袖のうつりがにもや、か
る所に、かく色めきたるにほひ、あるべきにあらず。……戸のすきあ

ひに咀くはつくまでとりつき、のぞきぬれば、あやしの戸はづれて、うちへたをけるにぞ。うちよりすさまじや、六十あまりの色くろき法師いであひて、こはなに物ぞとおどろきわめく。かの男も興をさまし、しかくのやうすをさんげしければ、法師もおかしくおもひて、これくわれらが君ハこれなりとて、三升入の大な陶とくりをとりいだししてみせけり。嗅かいで見たれば、荒木酒を越くつめをきけり。かのえならぬにほひハ、この香かほにてこそと、おかしくもはづかしくも、わび言まじりにかへりぬ。

(籠耳・一・一・遠花香)

これは、においの正体が分からない段階で、「梅や薫物（のような良いにおいだけでも、それ）ではないにおい」と、怪訝に思っている際に使用されたカヲルである。結果としてにおいの正体が飲食物であっただけである。

二例目は井原西鶴作品の用例である。留意すべきは、西鶴が嗅覚表現自動詞の中で極端にカヲルを好む傾向にあった点である。そうした書き手の用例であることを考慮すれば、一般的なカヲルの用法とは考えにくからう。

(26) 阿蘭陀漬の風薫り行

(西鶴大矢数・巻四)

残る一例は、近世雜Ⅱ期の上田秋成の随筆に見られた用例である。

(27) 鍋どころあまた、めうくくと湯煙たちて、うまくさき匂ひの、こゝにまで、薫りて、あるじの女、うちほこりつゝ、手づから、飯匕とりて、もりくらふ有様

(癩癖談・上)

この場合、主語が「うまくさき匂ひ」であったことが述語動詞の選択を限定したと推測される。すなわち、「ニホヒがニホフ」や「カヲリがカヲル」などのように、嗅覚表現自動詞はそれ自身の連用形名詞を主語にとることが近世以前においてはなかったため、そうした消極的な理由により「うまくさき匂ひ」の述語としてカヲルが選択されたと考えられるのである。

次に、身体（超越性）の用例二例について見てみる。

一例は、この語を好んで使用する西鶴作品の用例であり、飲食物の前掲例(26)と同様、カヲルの一般的な用法とは言えない。

(28) 今是最期に究めし時、不思議や異香空に薫^{いほ}り、口の露の洒^{そよ}かかると
覺て、おのづから息かよひ出しより力付、時^{より}時あやしき童子^こ天降りて
伴ひ遊び、身体かろく、時しらぬ飲食、飢ず寒からず。

(懷硯・卷二・四)

二例目は、談義本の次の用例である。長くなるが前後を含めて示す。

(29) 梅が枝に木伝ふ鶯あれば、かたへには卵の花の垣根いと白く、雲井に
は子規のおとづれ、紅葉に鳴小男鹿の聲、或はまた川風さむみ千鳥の
むれ居て、雪の降しく処もあり、四時の花実時をあらそひ、砂の色も
常ならず、行水の音までも、其清々たる事また有べきにもあらず。そ
れよりはるか歩行ば、ゑならぬ匂ひの薫^{いほ}来て、管弦の音ほの聞えつゝ、
玉をかざれる楼閣あり。金銀の砂を敷渡し、瑠璃の階・馬腦の欄干、
また譬るにもなし。浅之進は此処に至りて、少し猶予し居たれば、
彼美女、「かく来れ」とて先に立、幾間ともなく廊下を傳ひ行て、一
間なる所へ請じ入けり。數多の美女立かわり茶の給仕しつゝ、様々の
菓子など出すを見れば、何も初メ卵の中より出たる女にもまさりて
あでやかなるに、思ひく^くの繡して、いときらびやかなる衣類をかざ

り、立かわり入替て、出る度に酒肴の数々、善尽し美つくし、今様を
うたひかなで、或は美なる女の來て、手を取足をさすりつゝ、ひとか
たならぬもてなし、浅之進は興に乗じ、思はずも酒をすごして、美女
の膝に打もたれ、とろく^くとまどろみけるが、暫して目を覺し、あた
りを見れば、今まで有つる美女の姿も、酒肴も、宮殿もなし。

(風流志道軒伝・卷二)

ここで重要なのは、対象が神仏ではなく、美女の幻覚であるということ
である。本研究では、いわば非人間的存在を超越的存在と認定しているた
め、美女の幻覚も自動的に、神仏や往生人と同じ超越的存在に分類される
ことになる。しかし、このように例外的な超越的存在はこの例(29)のみであ
る。つまり、対象分類においても例外的な対象なのである。当時であれば
クンズがとるであろう身体(超越性)をカヲルがとったとしても、やはり
この語においては特殊な用例として位置づけた方がよからう。

さて、近世のカヲルにとってもっとも大きな変化は、他の嗅覚表現自動
詞・形容詞^ルが対象としてほとんどとることのない風の用例が現れること
である。カヲル占有の対象であったと考えられることから、読みの分から
ない漢字表記の用例(33)もカヲルと読む可能性が高い。

(30) 南の風かほるすゞしきみな月のくれがた、二階座敷にて四五人はなし
あけるに、ぢしんしきりにゆりければ、二階ハあやうし。

(初音草嘶大鑑・卷五・二〇)

(31) 此書物心付ては風かほる

(西鶴大矢数・卷三)

(32) 祇園会や真葛原の風かほる

(蕪村句集・卷之上・夏之部)

(33) ゆふめしにかますご喰へば風薫 凡兆

(芭蕉句集・猿蓑)

近世前期に突如現れた上掲のようなカヲルは、和歌・連歌の流れの中で発達してきた「風カヲル」という固定的表現であり、例(30)に関しては「風カヲル」が散文にも顔を覗かせた用例と考えられる。雅語として活路を見出すことになったカヲルにとっては、独自の固定的表現「風カヲル」も、衰退しないための重要な表現であったにちがいない。以上を踏まえ、第四節では「風カヲル」と「薫風」との関係性の史的変遷を追っていく。

第四節 「風カヲル」・「薫風」の史的変遷

第一項 中国語における「薫風」

まず、中国語における「薫風」の意味を確認しておく。『大漢和辞典』

『漢語大詞典』ではともに、「熏」「薰」の小見出しとして「熏風」「薰風」をそれぞれ挙げる。次に示す表五は、二辞書の語釈と用例の一部をまとめたものである。そして、表六は、表五をもとに風の名称を整理したものである。

『大漢和辞典』では、「熏風」と「薰風」とが互いに換言されている。また、二辞書の「熏風」と『漢語大詞典』の「薰風」において『呂氏春秋』の用例が挙げられていることから、「熏風」と「薰風」とは同一語と見なせると考えられる。『大漢和辞典』「薰」項では、「形声。艸十熏声。熏は、くすぶるの意。香氣がたちこめる草、香草の意を表す。」とあり、「熏」とは別字とするものの、「一風」の形では両字に大きな意味の相違は認められないのである。以下、「熏風」と「薰風」との表記の別は問題とせず、「薰風」で表記を統一する。

さて、表五・六によると、中国語「薰風」は、春に吹く〈和風〉をも指すことが分かる。つまり、「薰風」は春・夏の二季をまたぐ風を指すのである。このことは、小島憲之氏によっても、日本古典文学大系『懐風藻』「岩波書店・一九六四」の頭注においてすでに指摘されている。

表五 『大漢和辞典』『漢語大詞典』の記述

語	辞書	語釈	用例(一部)
薰風	『漢語大詞典』	和暖的風。指初夏時的東南風。 ②相伝舜唱《南風歌》	『孔子家語・弁樂』 昔者舜彈 _二 五絃之琴 _一 、造 _二 南風之詩 _一 、其詩曰、南風之薰兮、可 _三 以解 _二 吾民之財 _一 兮。 白居易『首夏南池独酌詩』薰風自 _レ 南至、吹 _二 吾池上林 _一 。
熏風	『大漢和辞典』	南方の風。温和な風。和風。熏風。	『呂氏春秋』 何謂 _二 八風 _一 云云東南曰 _二 薰風 _一 。〔高誘注〕熏風、或作 _二 景風 _一 、巽氣所 _レ 生、一曰 _二 清明風 _一 。

表六 風の名称とその季節

季節	太陰曆(太陽曆)	風の名称(一部)	熏風	薰風
春	一月(二月)	東北風	融風	
	二月(三月)	東風	明庶風	和風
夏	三月(四月)			
	四月(五月)	東南風	清明風	
	五月(六月)	南風	景風	
	六月(七月)			

薰風は一般に夏の風(南風)を意味することが多い……しかし初唐の

崔湜の「奉和春日幸望春宮」の中に、澹蕩春光滿_二曉空_一……唯_レ忘_三

率舞樂_二薰風_一の例もあり、誤用ではない。この際は春の和風をさす。

また薰風は「熏風」(東南の風)にも通じる。(四五三頁・傍点原文)

このように、春・夏の二季をまたぐ風であり、さらには《南風歌》(三)

天下太平を表現していた中国語「薰風」が、日本語にいつどのように受容

され、また、発展を遂げ、夏の季語となるに至ったのであろうか。そして、

その史的変遷の中で、「風カヲル」といかに関わり合っていたのであろうか。

次節では、日本語における史的様相を見ていく^{二四}。

第二項 日本語における「風カヲル」・「薫風」

(一) 上代・中古

「薫風」は、漢文資料のうち漢詩文集に集中して用例が見られた。古記録資料には例を見ないため、日常語というよりは、漢詩文を背景とする文章語であったと推測される。中国語「薫風」と同様に、季節は春・夏の二季にわたり(34)〜(36)、(天下太平)を表す用例も見える(37)〜(39)。「薫風」は、中国語の意味をそのままに、日本語の特定の位相に受容されたい。なお、「風(〜)薫」の語順も調査したが用例は確認できなかった。

- (34) 姑射遁太賓。崆巖索神仙。豈若聽覽隙。仁智寓山川。神衿弄春色。清蹕歷林泉。登望繡翼徑。降臨錦鱗淵。絲竹時盤桓。文酒乍留連。薫風入琴臺。黃日照歌筵。

(懷風藻(七五二)・春日・巨勢多益須)

- (35) 淑氣光天下。薫風扇海濱。春日歡春鳥。蘭生折蘭人。鹽梅道尚故。文酒事猶新。隱逸去幽藪。沒賢陪紫宸。

(懷風藻(七五二)・春日侍宴・藤原史)

- (36) 松陰絶冷午時後。花氣猶薫風罷余

(凌雲集(八一四)・夏日陪幸左大将藤原冬嗣閑居院応製・滋野貞主)

- (37) 古詩格等。雖有數家。近代才子。切愛此格。當今。堯日麗天。薫風

通地。垂拱無爲。頌德溢街。

(性靈集(八三五頃)・四・劉希夷集書上表)

- (38) 食花而戲香樓。暗知薫風之盛德。

(江吏部集(二〇一〇・一一頃)

・下・初冬庚申侍宴同賦鸞雀相賀応製詩一首并序)

- (39) 然則逃鵠鼎於微躬。閑求甘露延年之藥。任鵠絃於叡指。長伝

二薫風理世之歌。

(本朝文粹(二〇六〇頃)卷四・同入道表・大江匡衡)

風とカヲルとの連接例はいまだ見えない。二語が同文脈に現れる例はあるものの、風はあくまでも「対象が発散する気を運ぶもの・漂う空間」として存在し、風それ自体がカヲル対象ではない^{一五}。

例えば、前掲例(3)には風の一種である「神風」が見えるものの、地名「伊勢」に掛かって調子を整える枕詞としての「神風の」であり、歌全体の主

意に直接関わるわけではなく、カヲルの主語や被連体修飾語にもなっていない。また、季節感を伴うような風でもない。風とカヲルとが共起している、その背後に「薫風」の存在は認められない。

また、前掲例(8)の「追風」も、薫大将の発する体臭を運ぶもの・漂う空間であり、やはり「薫風」のように特定の季節・堯風舜雨を連想させる風ではない。

以上のように、「薫風」は、上代・中古を通じて、中国語の意味をそのままに日本語の特定の位相において定着していったことが分かる。しかし、「薫風」を訓読したり、そこから発想を得たりしたカヲルの用例は未だ見出せない。

(二) 中世前期

中世前期には、中古にも見られた「対象が発散する気を運ぶもの・漂う空間」としての風とカヲルとが同文脈に現れる用例があることに加え、風とカヲルとの接続例が和歌に見え始める。現在確認し得る初出例は次の例(40)で、風とカヲルとが主述関係にある「風カヲル」である。そして、これに続く接続例も同様に「風カヲル」である。

(40) 暁至りて波の音金の岸に寄る程欲曙風の音珠の簾を過ぐる際……明

方は池の蓮も開くれば玉の簾に風かをるなり

(長秋詠藻(一一七八)・下・釈教・四五二)「新編国歌大観」

(42) 桂 花満自然秋。泰山の上に桂の林あり。秋を迎事ことに花白盛なり。

「風かほる春の匂をみつる哉桂の里の秋の梢に」

(百詠和歌・四・嘉樹部・桂)

(43) 風かをる木の下道は過ぎやらで花にぞくらす志賀の山越

(続拾遺和歌集(一二七八)・春・六八)「新編国歌大観」

釈教の部に所収の例(40)は季節感を伴わない歌であり、また、これを除けば、季節は春に偏る傾向にある。従来、特に後者の点を以て、和歌中の「風カヲル」は「薫風」を訓読したものでない(＝意味a)とされてきた。

また、本調査において確認された季節感を伴わない歌(例(40))の存在によっても、「薫風」と「風カヲル」とは一層遠ざかろう。「風カヲル」は、「薫風」とは別に誕生した、季節の限定なく(風が心地良く吹く)を表す和語表現と言えるのではないか。

(三) 中世後期

中世前期の和歌に登場した「風カヲル」は、春に偏る傾向にあるとは言え季節に限定があったとは考えにくく、「薫風」とただちに結びつく表現ではなかった。これは、中世後期の和歌・連歌においても引き続き指摘できる。

(44) 風かをる花のあたりにきてみれば雲もまがはずみよしの山

(新千載和歌集(一三五九)・春歌上・九五) 「新編国歌大観」

(45) あけわたる霞の遠はほのかにて軒の桜に風かをるなり

(新拾遺和歌集(一三六四)・春歌上・八七) 「新編国歌大観」

(46) 雲をも花とみよし野の山きて見よと桜に風やかほるらん

(新撰菟玖波集(二四九五) 卷一・春上・一三九)

「国際日本文化研究センター」連歌データベース」

(47) みなつきの氷に残る庭の雪すたれをまけはかせかをるやと

(天正四年万句(一五七六) 第五千句・第六)

「国際日本文化研究センター」連歌データベース」

ところが、中世後期の漢詩の手引書類や連歌論書において、「薫風」の季節が夏に限定されると見る記述や、「風カヲル」の語源を「薫風」に求める

記述が突然現れるのである。

まず、連歌最盛期の現存論書のうち唯一季の詞を記載する漢和聯句式目書『漢和法式』と、漢詩作成の韻書『塵芥』とに、「薫風」が〈夏の風〉を表すとする指摘が見られる。

(48) 薫風。夜短。秋近。

(漢和法式(二四九八)・夏部)

「早稲田大学中央図書館蔵本 文庫 20193」

(49) 薫風 夏風

(塵芥(一五一〇・五〇頃)・天部・時節門)

「『塵芥 清原宣賢自筆伊路波分類体辞書』

そして、連歌論書である『至宝抄』と『無言抄』には、「風カヲル」が「薫風」から誕生したと見た上で、「薫風」が〈夏の風〉を表すとする指摘が見られる。これはつまり、「風カヲル」の季節も夏に限定されると見ていることになる。

(50) 一林の鐘 一風かほる 一雲の峰……さして連歌にハ不仕候。一共出

付候。皆唐の言葉より出申候。……風かほると申ハ南の風吹て涼しき事を申候。昔琴を引候へば風のかほりたる由「南風歌」候

(至宝抄(二五八五)・末の夏)

『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』

勉誠社・一九八一(以下、近前十三種)

(51) 薰風 かせかほるなど言ふ事也。

(無言抄(一五九八)・下・三・四季詞・夏)「近前十三種」

これらの記述をもとに、○形態「カラル風／風カラル」は、「薰風」の訓読により生まれた表現である。○意味b「連歌以降の「風カラル」の季節が夏に限定化するのには、「薰風」の影響である。○意味c「薰風」は〈夏の風〉を表す。という指摘がこれまでになされたのであるが、これ以前の史の様相との懸隔が甚だしいことについては十分に検討されてこなかった。例(48)～(51)が、何を参照し、どのような目的で成立したのか、意味の限定化・語源論の根拠が問題となる。

(三・一) 意味の限定化

中国語文献を広く参考にした場合、「薰風」は春・夏の二季にわたるはず

である。夏の二季のみに限定化されるには、〈夏の風〉を指す「薰風」の特定の用例が、一般的に知られるものとなっていたにちがいない。

この頃の「薰風」の用例が得られる言語資料は、禅林抄物の漢籍引用箇所が多いことに気づく。『古文真宝前集』の「薰風自南来」(52)・(53)や、『孔子家語』『十八史略』の「南風之薰」(54)など、いずれも五山僧の漢詩文教科書として愛重された漢籍からの引用である。また、禅僧・策彦周良の漢詩集にも一例見えた(55)。

(52) 薰風自南来、殿閣生微涼、妙・喜又却不然、如何是諸仏出身処

(古文真宝彦龍抄・五〇才)

(53) 人皆苦炎熱 我愛夏日長 薰風自南来 殿閣生微涼……薰殿程

ニト云ゾ。此二句ハ公権ガ句ゾ。(四河入海・二五ノ四)

(54) 舜弾ニ五絃琴ヲ、歌ニ南風ノ詩ヲ、解ニ民愠ヲ、阜スニ民財ヲ、言ハ南風ハ薰風也。南ハ万物ヲ長養スル方也。民ヲ慈愛スルノ義ゾ。云琴弾シテニ五絃ヲ南風阜ニス財ヲトハ此事也。薰絃トモ虞絃虞琴舜琴トモツカウゾ

(燈前夜話(二五世紀後)・上)

「天文二三年古写本『抄物大系』勉誠社・一九七二」

(55) 山寺清幽趣最深。共誰堪話此中心。薰風殿閣簾帷動。明月樓台鐘鼓音。

(南游集(一三六四頃)・和山中即事)

『五山文学全集』思文閣出版・一九七三

Verão que passa por rosas.

(日葡辞書)『パリ本日葡辞書』勉誠社・一九七六

『邦訳…花の中を吹き抜けて来る夏の風のように、芳香を伴って来る風。』(邦訳

日葡辞書』岩波書店・一九八〇)

禅僧の間で、「薰風自南来」や「南風之薰」が「薰風」の代表詩として認識されていた可能性は高い。その結果、これらの詩における「薰風」の意味(夏の風)が、この語の意味として定着したのではあるまいか。そして、当時、禅僧が担い手であった漢詩の手引書類において、例(48)・(49)のような記述がなされたのであろう。「風カヲル」の語源意識の萌芽(後述)と合わせて、ここに、「風カヲル」の季節限定化の母胎が整ったと言えよう。

(三・二) 語源論

ここで、「薰風」に日本語をあてた用例を挙げる。例(56)は翻訳的な例、

例(57)は訓読された例である。

(56) 薰風自南来殿閣生微涼 南カラ 香 上からほろ シイ風ガザツト吹テクレバ座敷
ガ涼シウナル也 (句双紙抄・八ウ)

(57) *Quand. Cōbaxij caje. Vento que traz algũ cheiro configo como o do*

もし、連歌論書(50)・(51)に見られた語源意識がこの頃一般に通用していたならば、文法構造に関係なく「薰風」の「薰」は「カヲル」と読んでしかるべきである。しかし、実際には、「薰」に形容詞をあてる例が散見され、「カヲル風」は見えないのである。『日本国語大辞典(初版・第二版)』「かおる風」項にも用例は挙げられておらず、「薰風」の訓読か否かを問わず、「カヲル風」自体の用例を見出すのは困難と考えられる。

特に、前掲例(57)の『日葡辞書』の字音語の見出しは、その訓読を語釈の冒頭に示すことを本則とし、「身近な日本語で和らげた言い方にかえて言うための手引を与え」「複合語全体の意義を具体的に示す傾向が強い」(『邦訳日葡辞書』岩波書店一九八〇…解題一六頁)とされる。『日葡辞書』が「薰風」を「カウバシイカゼ」と訓読したとすると、先の語源意識が広く定着していたとは考えにくい。やはり、和歌中の「風カヲル」は、「薰風」とは別に誕生した日本語独自の表現と見た方がよからう。

また、次の表七に示す古本節用集類から、「薰」が複数の訓候補を有したことが分かる。「薰風」の「薰」の訓はカヲルただ一つに定まっておらず、むしろ形容詞カウバシが「薰」の訓として多くの節用集に採用されているのである。

表七 古本節用集類における「薰」の訓一例

資料	成立	ニホフ	カヲル	カウバシ
和玉篇	一五世紀後		○	
文明本節用集	中世後期中			○
明応五年本節用集	一四九六奥書			○
天正十八年本節用集	一五九〇			○
饅頭屋本節用集	中世後期末			
黒本本節用集	中世後期			○
易林本節用集	一五九七	○	○	○

それでは、そもそも文法構造の異なる、中国語由来の「薰風」と和歌由来の「風カヲル」との結びつけ、「薰風」の「薰」を「カヲル」と訓読する意識は、どこから生じたのであろうか。

イ、「風カヲル」の語源を「薰風」に求めること

「薰風」を「風カヲル」と訓読した連歌論書の例(50)・(51)に再度着目した

い。なお、例(51)『無言抄』を著した木食応其は、例(50)『至宝抄』の著者里村紹巴に連歌を習い、『無言抄』をまとめる際も彼の校閲を受けている。『無言抄』は『至宝抄』を踏襲した部分のあることが推測されるため、ここでは特に『至宝抄』について触れる。

『至宝抄』は、「風カヲル」が「唐の言葉より出」たために「連歌にハ不仕候」とした。これは、連歌が、和歌の「極端な迄異なった位相語を排斥し、和語の純血を保持」という用語選択の意識を引き継いだためである(滝沢貞夫一九六九・二四三頁) 三三。こうした漢語を排除する傾向が、歌に用いられ得る語への過度な出自意識に繋がっていたのではないか。(ただし、後述するように、「漢語を排除する傾向」における「過度な出自意識」によって焦点を当てられた「風カヲル」であったにも関わらず、連歌や後の俳諧には使用され始めたのであった。) ここにおいて、和歌にすでに見えていた季節の限定がない「風カヲル」が、連歌師によって当時(夏の風)との認識が強くなっていた「薰風」と結びつけられ、「薰風」を訓読した和語表現と認識されるに至る。「薰風」を名詞としてそのまま訓読した場合に想定される「カヲル風」が見出せない事実が、「薰風」の純粹な訓読により生まれた表現が存在しないことを意味するのではなからうか。

ロ、「薫風」の「薫」を「カフル」と訓読する点

「薫」は多くの訓候補を有し、その訓が「カフル」ただ一つに定まってい
ない。また、和歌には「風ニホフ」など、他の嗅覚表現語も用いられる
のであった(注一六参照)。和歌にすでに見えていた「風カフル」が、意味
の相違があるにも関わらず、連歌師によって「薫風」と結びつけられなけ
ればならなかった理由は、依然として不明である。

ここで、漢語の訓選択が、語の意味から影響を受ける場合のあること(長
沼英二二〇〇七二四)を踏まえ、「薫風」についても、訓選択が行われた中
世後期頃における、訓候補としての語の意味・用法を考えてみたい。

まず、カウバシは、(飲食物の焦げる快いにおいがする)さまのみを表す
ように、意味の限定化が始まる(本論第一部第一章)。次に、クズは、神
仏などの登場場面における固定的表現「異香クズ」が定着し始める(本
論第四部第九章)。そして、ニホフは、中古末に生じた意味の下降が進行中
である(本論第三部第六章)。

カウバシやクズのように意味・用法の縮小しつつある語が、新たに対
象を広げ風をとるのは難しいと想像される。また、ニホフのように俗語的
側面を持ち始める語を、専ら漢詩に用いられる文章語「薫風」の訓読に
あえて採用する必要もない。さらに、ニホフに関しては、専用の字「匂」

を有していた(朱 捷一九九八など)ために、「薫」の訓として優先されに
くいという状況であったことも推測される。

これらに対し、カフルは、前掲例(20)の『日葡辞書』にあるように、雅語
的側面を確立し始める。

再掲 *Cauriu, otta. P. i. Niú. cheirar, ou, recender.*

(日葡辞書)『パリ本日葡辞書』勉強社・一九七六

『邦訳・諺歌語, Niú』に同じ. 芳香を放つ, すなわち, かおる. 『邦訳日葡辞
書』岩波書店・一九八〇』

雅俗両面を有するニホフに対して、専ら雅語として用いられるようにな
るカフルの方が、文章語「薫風」の訓読に相応しい印象を与えたのではな
からうか。

「薫風」の「薫」が、複数の訓候補を有するにも関わらずただ一つに限
定されていた要因は、こうした嗅覚表現自動詞・形容詞の意味・用法分
担の中に、すなわち、語彙の在り方にこそ存したのであろう。

ハ、「薫風」と「風カフル」とが接近する場

ところで、連歌師達は、禅僧のよく知る〈夏の風〉としての「薰風」をどこで学んだのであるうか。もちろん、「薰風自南来」などの漢詩に直接触れることもあったろう（前掲例(50)では「南風之薰」を引用する）が、和漢聯句の場において獲得した可能性も高い。和漢聯句とは、中世から近世前期にかけて流行した長連歌の和句・五言の漢句を連ねる文学である。公卿や博士家の人々のうち、和歌・連歌に熟達する者が和句を、漢詩文に通ずる者が漢句を詠んでいたが、後に漢句側に五山の禅僧が加わったとされる。

二五

「風カヲル」が〈夏の風〉を表す「薰風」から誕生したと指摘した『至宝抄』の著者里村紹巴は、和句側として多くの和漢聯句に参加したことが分かっている。そして、実際に参加した際の漢句には「薰風」も見えるのである。禅僧の「薰風」に触れる機会は、和漢聯句においても頻繁にあったのである。

(58) うち眠る南の枝の花の陰 金／薰風已入絃 蒼／村雨の雫は軒に音

づれて 紹「||紹巴」

（弘治二年八月和漢千句・和漢第一〇）

『室町後期和漢聯句作品集』臨川書店・二〇一〇』

禅僧の五山文学に用いられる漢詩の語彙は、和漢聯句の漢句にもしばしば取り入れられ、また、それを和語化し和句に詠まれることもあった（楊昆鵬二〇一一三六）。漢語の和語化が起り得る和漢聯句において、「薰風」も紹巴により和語化される機会を得た。すなわち、本来別々に誕生したはずの、中国語由来の「薰風」と和歌由来の「風カヲル」とについて、後者の語源が前者に求められたのである。ただし、この「薰風」の和語化において意図されたのは、和語化された「風カヲル」の和句への採用ではなく、連歌からの排除であった点が興味深い。そして、そうした意図とは反対に、夏の季語としての「風カヲル」が連歌や後の俳諧に使用されるようになっていくこととなる。

以上の考察をまとめる。筆者は、次の四点が、「風カヲル」「薰風」の意味の限定化・語源論を成立せしめたと考える。

一、禅僧間で生じた「薰風」の意味の限定化と、連歌師によるその偏った知識の獲得

（第四節第二項（三・一））

二、連歌師の漢語出自意識化による「薰風」と「風カヲル」との結び

つけ

(第四節第二項(三・二)イ)

歌の発展的文芸である俳諧にも受け継がれたことが分かる。紹巴の弟子に

三、二を可能にする当時の嗅覚表現語彙の在り方

は、俳諧の基礎を築いた貞門俳諧の祖・松永貞徳(『俳諧御傘』の著者)が、

(第四節第二項(三・二)ロ)

また、貞徳の弟子には、例(58)の『増山井』を著した北村季吟がいる。師の

四、一や二が展開される場としての和漢聯

句の存在

(第四節第二項(三・二)ハ)

表八 俳諧作法書・歳時記類「風カヲル」「薫風」立項状況

資料	成立	見出しの有無			
		「風カヲル」	「薫風」	「薫風自南来」	「南風之薫」 「東南曰薫風」
はなひ草	一六三六	○			
毛吹草	一六四五	○			
俳諧御傘	一六五一	○			
増山井	一六六三	○	○		
俳諧無言抄	一六七四	○	○	○	
番匠童	一六八九	○			
をだまき	一六九七	○			
俳諧新式	一六九八	○	○		○
産衣	一六九八	○			
滑稽雑談	一七一三		○	○	○
俳諧手挑灯	一七四五	○			
改式大成清鈔	一七四五	○	○		
俳諧小笠	一七九五	○			
俳諧通俗志	一七八〇	○			
俳諧四季部類	一七八〇	○			
華実年浪草	一七八三	○	○		○
俳諧歳時記	一八〇三	○			
季引席用集	一八一八	○			
増補改正俳諧歳時記菜草	一八五一	○	○	○	○

網掛け「風カヲル」の語源を「薫風」に求める

(四) 近世
最後に、連歌時代に登場した意味の限定化・語源論が、近世以降どのように継承されていったかを確認する。

まず、俳諧作法書・歳時記類について、見出しに「風カヲル」「薫風」の見える資料²⁷の、表八にまとめて次頁に示す。なお、すべて夏の季語として扱われている。「薫風」はその出典として挙げる詩についても記す。

この表八によれば、連歌時代に見出された「風カヲル」の意味の限定化・語源論は、連

言説を継承していくことは至極当然であるし、また、直接の師の言説でなくとも、一度でも歳時記類に記載されると季語から削除されにくくなる(飛田良文他編二〇〇七・赤羽 学氏執筆「季語」項)。そのため、多くの俳諧作法書・歳時記類によって、「夏の季語「風カヲル」||「薫風」" という認識が確固たるものとなったのである。

(59) 風薫カヲル 南薫ナンクン六月に吹く涼風也。薫風自南

来と古文前集に言へり。(増山井)『近前十三種』

(60) 扱六月には風かほると云也。唐文集の句に、「人ハ皆苦ム炎熱ニ」ミナクルン エンネチ脱

カ我ハ愛スニ夏日ノ長ヲワレアイ ナカキ又柳公権クシフウシか薫風自南来ナンライテンカクシヤウヒリヤウ殿閣生微涼と次し

也。」又東坡ノ付句侍とも略ス。扱風かほるとは、そらたき杯の有之よくく涼しき風の身にふるゝを云也。惣して夏の中は嵐のなきやうにする也。(俳諧無言抄)『近前十三種』

(61) 薫風 家語曰、舜弾ニ五絃之琴、歌ニ南風之詩曰、南風之薫レルアリ兮

云々○唐文宗詩曰、薫風自南来ル、殿閣生ニ微涼ヲ○呂氏春秋曰、東南之風曰薫風ト△六月に南より吹風を云也。

(滑稽雑談・一一・六月之部上)

〔早稲田大学中央図書館蔵本 貴重書庫く5.6326.1-24〕

(62) 風薫かぜかをる 唐太宗ノ詩ニ薫風自南来リ、殿閣生ニ微涼ヲ。呂氏春秋

東南ノ之風ヲ曰フニ薫風ト。

(増補改正俳諧歳時記葉草・夏之部・か・六月)

『増補俳諧歳時記葉草』岩波書店・二〇〇〇』

(63) 風薫カヲル 家語ニ曰舜弾ニ五絃之琴ヲ操ニ南風之詩ヲ注ニ曰南風之薫レル

ニ今可シニ次テ解クニ吾カ氏之挹一兮○唐ノ太宗ノ詩ニ曰薫風自南来リ

殿閣生ニ微涼ヲ○呂氏春秋ニ曰東南之風ヲ曰ニ薫風ト

(華実年浪草・卷八・六月)

『近世後期歳時記本文集成並びに総合索引』勉誠社・一九八四』

次に、実際の用例を挙げる。「風カヲル」は基本的に韻文に現れる(64)・

(65) が、「薫風」は韻文(66)や文章語の連続する散文(67)にも現れる。

いずれにせよ、「風カヲル」も「薫風」も、通史的に一貫して文章語であったと言えよう。

(64) 背くらべの妹の裙へ風薫る

(雑俳・折句袋(一七七九))『日本国語大辞典(第二版)』用例

(65) 今日晴着に風薫る、菖蒲浴衣の白がさね

〔長唄・菖蒲ゆかた（一八五九）〕『日本国語大辞典（第二版）』用例

(66) 満庭竹柏鬱森森 遮却殘陽晚影深 高捲疎簾凭欄坐 薰風吹送一蟬

吟

（紹述先生詩集（一七六一）・納涼・季夏）

(67) 仏舍利の光明たな引くんふうわたつて桐の木のはらりくと吹おとし

（用明天王職人鑑・五）

なお、中世後期以降、〈天下太平〉を表す「薰風」は未見である。「薰風」

が季語として定着していく過程にあつては、転じた意味で使用されることはほとんどなかったであろう。こうした内的要因に加え、〈天下太平〉を表す比喩としては四字熟語「南風之薰」（これはもちろん「南風之薰兮」から出たもの）が使用されるようになるという外的要因も考えられる。

第五節 おわりに

第二節で触れた従来の指摘を修正・補足するかたちで、第四節の考察をまとめる。

再掲○形態

「カヲル風／風カヲル」は、「薰風」の訓読により生まれた表現である。

←

本来、「薰風」とは別に誕生した和歌由来の「風カヲル」は、連歌師の漢語出自意識化のために、「薰風」の訓読により生まれた表現であるとされた。

（第四節第二項（三・二）イ）

再掲○意味 a

和歌中の「風カヲル」は季節の限定がなく、むしろ春に偏りを見せる。よって、和歌中の「風カヲル」は「薰風」の訓読とは考えにくい。

←

和歌中の「風カヲル」には季節の限定がない。また、連歌・俳諧論書においてのみ「薰風」が「風カヲル」と訓読されることを踏まえると、和歌中の「風カヲル」は「薰風」の訓読とは考えにくい。

（第四節第二項（二）（三））

再掲○意味 b

連歌以降の「風カヲル」の季節が夏に限定化するのは、「薰風」の影響である。

←

連歌以降の「風カラル」の季節が夏に限定化するのは、①における中世後期頃の「薫風」に意味の限定化が生じていたためである。

(第四節第二項(三・一))

再掲①意味c

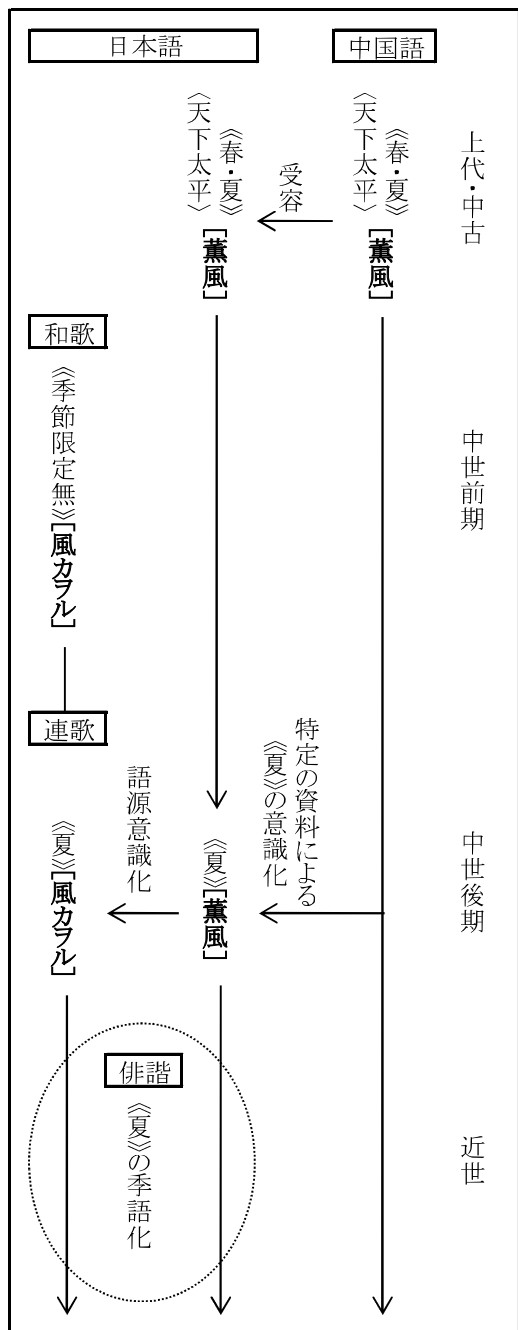
「薫風」は〈夏の風〉を表す。

←

中国語「薫風」は、〈春の風〉〈夏の風〉を表す(転じて〈天下太平〉を意味する)語であり、日本語においてもそのままの意味で受容された。

そして、上述の内容を通史的な視点で図示すると、図二のようになる。春・夏の二季にわたり、〈天下太平〉をも表していた中国語「薫風」は、そのままの意味で、上代にはすでに日本語に受容されていた。時代は下り、中世には「薫風」に対する季節感に変化が生じ始める。すなわち、禅文化の興隆とともに、「薫風自南来」や「南風之薰」が「薫風」の代表詩として認識され、これらの詩における「薫風」の意味〈夏の風〉が強く意識されたのである。

図二 「風カラル」の発生・展開



そして、夏に限定された「薫風」は、和漢聯句の場合などをはじめとして、連歌師にも吸収されることになる。さらには、連歌師によって、「薫風」との関連がほとんど考えられない和歌中の「風カラル」という和語表現の出自が、漢語「薫風」に求められるという記述がなされるまでに至ったのである。こうした過度な語源意識は、連歌が和歌同様に漢語(出自の語)を排除する傾

(第四節第一項)

向にあったことの結果と考えられる。「薰風」を中国語の文法構造そのままに訓読した「カヲル風」が見えず、「風カヲル」の形しか見出せないことは、和歌中の「風カヲル」を「薰風」と結びつけるという意図的な訓読がなされた可能性を示すのである。また、「風カヲル」と「薰風」との結びつけを可能にしたのは、当時の嗅覚表現語彙の在り方であったことについても触れた。

こうして、夏に限定される「薰風」と、それを訓読した「風カヲル」とは、ともに夏の季語として、近世以降も引き継がれることとなった^{二九}。

従来の季語・歌語研究は、和歌と俳諧（連歌）とで分断され検討される場合が多かった^{三〇}。しかし、特に季語となる表現については、和歌―連歌―俳諧の韻文史を通して検討する必要もある。また、その表現の構成要素が各々属する語彙の歴史にも目を向ける重要性についても本章では明らかにした。

本章で追加した調査対象資料

【漢詩文集】

小島憲之校注（一九六四）『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店

本間洋一編（一九九一）『凌雲集索引』和泉書院

渡辺照宏・宮坂宥勝校注（一九六五）『三教指帰 性霊集』岩波書店

川口久雄校注（一九六六）『菅家文草 菅家後集』岩波書店

柳澤良一編（二〇一〇）『江吏部集・無題詩』勉誠出版

川口久雄校注（一九六五）『和漢朗詠集 梁塵秘抄』岩波書店

大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注（一九九二）『本朝文粹』岩波書店

上村観光編（一九七三）『五山文学全集』思文閣出版（『南游集』）

山岸徳平校注（一九六六）『五山文学集・江戸漢詩集』岩波書店（『紹述先

生詩集』『霞舟先生詩集』）

【古記録資料】

東京大学史料編纂所公開の以下のデータベース

古記録フルテキストデータベース

（『大日本古記録』（東京大学史料編纂所）を中心に、平安時代から室町

時代の古記録（漢文日記）、戦国時代の武家日記、歴史書・年代記など。）

古文書フルテキストデータベース

（中世文書を中心に、いくつかの古代・近世文書を含む古文書。『大日本

古文書 家わけ文書』（東京大学史料編纂所）、「入来院家文書」「台明寺

文書」（ともに東京大学史料編纂所蔵）、『中世法制史料集』（岩波書店 第

一（五卷）など。

奈良時代古文書フルテキストデータベース

（大宝二年（七〇二）～宝龜十一年（七八〇）の古文書を網羅的に収録する『大日本古文書』（東京大学史料編纂所）（大半は正倉院文書）。）

平安遺文フルテキストデータベース

（平安時代古文書・金石文などの編年文書集『平安遺文』（東京堂出版）の文書部分、『平安遺文』未収載文書。）

鎌倉遺文フルテキストデータベース

（鎌倉時代古文書・金石文などの編年文書集『鎌倉遺文』（東京堂出版）の全文。）

【連歌・和漢聯句】

国際日本文化研究センター「連歌データベース」

京都大学国文学研究室中国文学研究室編（二〇〇八）『室町前期和漢聯句集

成』臨川書店

京都大学国文学研究室中国文学研究室編（二〇一〇）『室町後期和漢聯句集

成』臨川書店

【俳諧作法書・歳時記類】

尾形仿・小林祥次郎共編（一九八一）『近世前期歳時記十三種本文集成並び

に総合索引』勉誠社

尾形仿・小林祥次郎共編（一九八四）『近世後期歳時記本文集成並びに総合

索引』勉誠社

早稲田大学中央図書館蔵版本『産衣』

早稲田大学中央図書館蔵版本『滑稽雑談』

堀切実校注（二〇〇〇）『増補俳諧歳時記栞草』岩波書店

一 「かぜ薫る」項には語源の説明が見られない。

二 「かをる風」は見出しが立てられていない。

三 日国・NET「日国フォーラム 季節のことば 第一回―初夏 其の一【風

薫る】」（<http://www.nikkoku.net/ezine/kotoba/ktb001.html>）（二〇〇一年

六月四日）最終閲覧二〇一三年一月一七日）では、「訓読みして和語化

したもの」とする。

また、「薫風（くんぷう）より生じた語」とする『角川古語大辞典』「か

ぜ薫る」項もある。

四 漢語の和語化についてはこれまでに多くの報告があり、様々な操作・工

夫の行われたことが明らかにされている。

神谷かをる（一九八六）によると、和歌に漢語を取り入れる際に行われる和語化には、

そのまま訓読する場合

（例、白菊）

日本語の語順・文法に変えて訓読する場合（例、立春∨春立つ）

連語・熟語にする場合

（例、血涙∨血の涙）

翻訳する場合

（例、三途川∨わたり川）

など種々のパターンがあるとされる。本章に関わる第二番目の「日本語の語順・文法に変えて訓読する場合」については、そうした複雑な和語化が行われた理由への言及が見えない。また、「立春」と「春立つ」との関係も、この例としては適切ではないと考えられる。

また、滝沢貞夫（一九八七）では、「漢詩文の表現を注意深く和語化」した例として、次のような表現を挙げ、「翻読語ふう」に直訳されたものとする。

不老不死薬∨老イズ死ナズノ薬、来世∨来ム世、死天山∨死出ノ山、

血涙∨血ノ涙、無常∨常無シ、立春∨春立つ、三途川∨渡リ河

「不老不死薬」や「来世」、「無常」のような「直訳」されたものがある中で、なぜ「立春」に限り文法構造の改変が行われるのか、その理由は考察されてしかるべきである。

^五 いわゆる「誤った回帰」の現れた表記である（遠藤邦基二〇一〇）。表記の別は語の意味に関わらないため、本章では特に問題としない。

^六 「薫に生来そなわった芳香は、仏菩薩の特徴の一つ。」「新日本古典文学大系『源氏物語 四』岩波書店・一九九六・二一九頁」

^七 近世期にはわずかに確認されるも、例外的にカヲルが身体（超）を対象とした用例である（後述）。

八 美人描写に使用される語彙に関しては、『今昔物語集』に焦点を当てた研究として佐藤（一九七三）がある他、御伽草子を取り上げたものとして、染谷氏のもとまった研究もある。染谷氏の調査によれば、御伽草子における美人描写には、古来の美人に例えたり（染谷裕子一九九七）、花鳥風月を持ち出したり（染谷裕子一九九九）といった手法や、光ル・輝クなどの使用（染谷裕子一九九八）が認められるとのことである。いずれも視覚表現語彙を対象とした論考であり、嗅覚表現語彙との交替についてはより詳しく

い調査が必要である。今後の課題としたい。

ただし、漢文の翻訳として、例外的に風を対象とするカウバシが一例見られる(後述)。

一〇 『広漢和辞典』『大修館書店・一九八一・一九八二』も参照したが、語釈の大きな異同は見られなかった。

一一 『日本国語大辞典(第二版)』『薫風』項で挙げる漢籍例も、この『呂氏春秋』の例である。

一二 高橋和夫(一九七八)には、日本と中国との気候について次のような指摘がある。

同じ東アジア気候区に属するとはいえ、日本列島の季節推移と「中国のそれと」は必ずしも一致しないことは、古典古代の人たちにも実感されていたであろう。その二つの大きな違いは、漢土になくて本土にある梅雨と台風(および秋霖、これは主として東日本)だった。すなわち、雨であり湿度である。(四六頁)

中国における「薫風」の季節感(春・夏)と、日本におけるそれとが完全に一致しないまでも、「同じ東アジア気候区に属する」という点を考慮し

て、中国と日本との共時的な気候の差をここでは問題としないことにする。

また、日本の現在の気温と古代のそれとの差は、およそ一・五度以内程度であったと言われる(天気検定編集委員会編二〇〇八)。これを踏まえ、古代と近代との通時的な気候の差もここでは特に取り上げず考察を進める。

一三 中国古代、理想的な仁政を行い天下を治めた伝説上の聖天子舜が作った歌。ここから、「薫風」が〈天下太平〉を意味するようになった。

一四 本節では、「薫風」「風カラル/カラル風」の用例をより多く収集するために、調査対象資料を大幅に追加した(第五節末尾参照)。そのため、資料ジャンル毎に用例数をまとめることが難しくなる。また、「薫風」と「風カラル/カラル風」との用例数を比較するという目的はないため、あえて用例数の表を掲載せず、本文において出来る限り多くの用例を挙げた。

一五 「風」の認知を嗅覚表現によって言語化するという発想が、いつどのように誕生したのかについては、十分に論ずる用意がない。中国文化からの影響関係を含めた考察は、今後の課題としたい。

一六 なお、風との接続はカラル占有の表現ではなく、「ニホフ風」や「風ニホフ」なども韻文には確認される。

一七 「風カラル」は、次の記述からも分かるように、触感的な心地良さ(嗅覚的なそれも含む)を指すと考えられる。

夏風末^ニ嘗香^一也。而称^ニ南風之薰^一亦形容之辞、極^ニ言其爽快^一也。

(夜航詩話(一八三六)・卷一)

〔早稲田大学中央図書館蔵本 文庫17W173〕

一八 『古文真宝』(前集・後集)は、中国の古詩・古文を集めたもので、編集の時期・編者については明らかでないが、宋末か元初の頃の編著と推測され、中国では元明の頃盛んに行われた。日本においては室町時代の五山の学僧に愛重され、詩文の教科書として学習された。『古文真宝』の書誌情報については、『古文真宝(前集)上』〔明治書院・一九七六〕を参照した。

なお、注釈としての和刻本のうち、笑雲清三和尚の『古文前集抄』(室町時代)、榊原篁洲『古文真宝前集諺解大成』(一六八三)にも目を通したが、『薰風』は訓読されず、そのまま引用されていた。

一九 『孔子家語』は、『論語』に漏れた孔子一門の問答を収録した書で、成立年代は未詳であるが、現在伝わるのは魏の王肅の偽作とされる。日本には九世紀末頃に伝わる。版本としては慶長四年の伏見版が最初か。『孔子家語』の書誌情報については、『孔子家語』〔明治書院・一九九六〕に詳しい。

二〇 『十八史略』は、中国の太古の時代から南宋滅亡までの歴史を、故事成語・格言を交えながらまとめた歴史書で、宋末元初の曾先之によって著

された。それまで一部の知識人のみを知るところであった歴史を、広く民衆に浸透させたとされる。日本においては、室町時代に二巻本、次いで七巻本が伝来し、後者は五山版として出版された。以後、漢文の入門書として非常に重視され大流行した。『十八史略』の書誌情報については、『漢詩・漢文解釈講座 第十一巻 歴史IV 十八史略・上』〔昌平社・一九九五〕を参考にした。

三 「薰風」の「薰」を「カラル」と読む例がまったくないわけではない。

薫^{くん}・香^{かう}、風^{ふう}、油^ゆ、修^{しゆ}、読^{どく}、陸香^{ろつかう}、衣香^{えかう}
かほる かうばし、かぜ あぶら おさむ よむ くがかうばし、ころもかうばし、

(落葉集(一五九八)・本篇・二五才)

『落葉集』京都大学国文学会・一九六二

ただし、『落葉集』の傍訓は「定訓(標準的な訓)」とされる(山田俊雄一九七二)ものの、あくまで単字それぞれについて示されたものであり、熟語「薰風」を訓読した確例ではない。

三三 しかし、和歌において「風カラル」の語順しか現れない理由は検討すべきである。今後の課題としたい。

二三 例外として、築島 裕（一九五八）の挙げる仏教関係の和歌がある。早いものでは、仏足跡歌の「舎加乃美阿止」があり、『枕草子』の「盆^{ぼん}」や『源氏物語』の「優婆塞」といった用例があると指摘する。

また、宮田和一郎（一九五六）においても、「江」にかけた「縁^{えじ}」の他、「阿弥陀仏」や「極楽」など、和歌に仏教語の多く詠まれることが指摘されている。

二四 「碧空」は、「ミドリノ空」と「アヲキ空」との二通りに訓読可能であるが、アヲシがマイナスのニュアンスをもつために、訓としてはミドリが採用された。

二五 和漢聯句の略史については、深沢眞二（二〇一〇）、京都大学国文学研究室中国文学研究室編（二〇〇六）の長谷川千尋氏執筆「和漢聯句略史」を参考にした。

二六 仏教伝説からきた故事「面壁九年」を、「壁ニ向カフ」と和らげ連歌に用いるなどの例があるとする。

二七 資料相互に見出される関係については宇田 久（一九三七）・東 聖子（二〇〇三）に詳しい。

二八 「唐柳公権」の誤り。同様の誤りが『華実年浪草』にも見えることか

ら、この箇所は『華実年浪草』に倣ったものと考えられる（植木之行（二〇〇九）『増補俳諧歳時記栞草』所引漢籍校読記（二）―春之部・夏之部―『人文社会論叢（人文科学篇）』一三三）。

二九 ちなみに、現代中国語における「薰風」も、日本語と同様に文章語となっているようである。現代中国語辞典では、「薰風」を「暖かい風。」『中日辞典』小学館・一九九二、「暖かい南風。」『現代中国語辞典』光生館・一九八二」と説明し、「書面語」注記を付す。

三〇 もちろん、和歌の範疇においてその史の変遷を説くことのできる表現は多い。例えば、「時雨」は、金葉和歌集頃まで晩秋・晩冬の二季にわたり用いられていたが、後には冬に固定化したとされる（『日本国語大辞典（第二版）』「時雨」項）。「時雨」については新井映子（一九九〇）の考察もあるが、『日本国語大辞典（第二版）』の記述とは異なる立場を表す。

万葉時代は「時雨―秋」という季節感があつたようである。しかしその後『古今集』に「時雨―神無月」という季節感がみられはじめ、『後撰集』では「冬の始なりける」と詠まれるように「時雨―冬」という季節感の方が強くなってしまった（新井映子一九九〇…二四一頁）

第九章 クンズによる「非日常性の演出」

—漢語系文章語という文体的意味から—

いて検討する。

第一節 はじめに

現代語の嗅覚表現自動詞には、やや特殊な場面で使用されるクンズル(薫ズル)がある。この語は、字音語「薫」とサ変動詞スルとから成る漢語サ変動詞である。そして、漢語出自であることが影響してか、「緑風クンズル候」や「菊花クンジル秋」といった、改まった手紙文における時候の挨拶などの「特殊な場面」で専ら使用される傾向にある^三。語の文体的意味を詳細に付す『類語国語辞典』「角川書店・一九八五」の「くんずる」項には「文章」(＝文章語)注記が見える^三ことから、現代語においては、文章語という文体的意味上の個性が強く認識されていると言える。

しかし、古代のクンズに目を向けてみると、ニホフヤカフルに比して、対象的意味においても個性の色濃さが目立つ。第一に、身体(超越性)を対象にとり往生人や神仏の登場場面に多用されたこと、第二に、マイナスの評価性をも有し得たことである。本章では、一見、何の一貫性もないように思われる上述のクンズの対象的意味の二側面を統一的に理解することを目的とする。その際、特に、文体的意味が対象的意味に及ぼす影響につ

第二節 問題の所在

第一項 先行研究

管見の及ぶ限り、クンズの語史を直接取り上げた論考は見当たらない。ただし、歴史的な立場から中古・中世における漢語サ変動詞全般を扱う先行研究はこれまでも多く見られている。これら先学の研究成果から、平安和文における漢語サ変動詞語彙の特徴をまとめ、まずはクンズの属する漢語サ変動詞語彙の一般的な傾向を把握してみたい。

まず、中古和文における漢語サ変動詞に注目したものとして、佐藤武義(一九六三)や藤原浩史(一九八七・一九八八・一九九〇・一九九三・一九九四)などがある。

佐藤武義(一九六三)は、中古和文一二作品中に漢語サ変動詞は五九語が確認されると述べ、このうち、使用頻度の高いものには一字漢語サ変動詞の多いことを明らかにした^四。また、使用頻度が高く、かつ、より多くの文献に現れるのは、念ズ・具ス・制ス・奏ス・鬱ス・啓ス・困ズ・誦ス・怨ズ(以上、一字漢語サ変動詞)、御覧ズ・対面ス・化粧ズ(以上、二字漢語サ変動詞)であるとし、これらに、「主観的表現を中心にした語、ならば

に对人とのかかわりにおいて用いられる語」(四六頁)という共通性を見出せること、そして、これらが社会生活を営むために必要である語であったために多用されたことを述べる。

しかし、使用頻度の高い一字漢語サ変動詞を扱う藤原浩史(一九九三)も指摘するように、中古和文に頻用された漢語サ変動詞のうち、中世以降も残存し得た語はごく少ない。つまり、中古和文に見える漢語サ変動詞は、「平安貴族社会・宮廷社会に特有の側面を表現するために導入された語彙」(六九頁)と言っても過言ではないのである。また、中世以降も残存し得た漢語サ変動詞、すなわち、特定の位相から脱することのできた漢語サ変動詞には、その国語化の過程で何らかの変化を強いられた語の存することも藤原浩史(一九八七)などにより明らかにされた^{五)}。

次に、中世前期における漢語サ変動詞を取り上げたものとして、桜井光昭(一九六二)や佐々木 俊・牧野泰子(一九七八)、坂詰力治(一九八〇・一九八二)などがある。

『今昔物語集』における漢語サ変動詞を扱った桜井光昭(一九六二)では、分類語彙表の枠組みに基づく二字漢語サ変動詞の分類や、語幹とサ変動詞との熟合度、文体による漢語サ変動詞の出現状況など、『今昔物語集』における漢語サ変動詞語彙を多角的に観察する。特に、三つ目の観点から

は、漢語サ変動詞が漢文訓読体の性格が強い巻二〇以前に頻出するという結論が示された。ただし、「和漢各文体の指標としては、同じ意味をもって両文体に対立して用いられる一対の語が望ましい。その点、本稿の漢語は対立する語の実態が不明確のままである。」(八四頁)と断るように、和語をも含めた考察が必須であると指摘する。

佐々木 俊・牧野泰子(一九七八)は、『三教指帰注』や『法華百座聞書抄』、『光言句義釈聴集記』、『高山寺古往来』など、本研究が調査対象としていない言語資料の調査を行い、『色葉字類抄』との対照も行う。その調査結果によれば、上記の注釈文・説経文・消息文にはクンズの使用が認められないようである。

また、坂詰力治(一九八〇・一九八二)は、一言語資料について和漢混淆文としての性格を漢語サ変動詞の形態から考察するものであり、個別的な議論にとどまる。なお、坂詰氏の取り上げた『保元物語』『平治物語』(坂詰力治一九八〇)、『沙石集』(坂詰力治一九八二)の調査結果にはクンズは見えないようである。

第二項 本研究の立場

中古和文を対象とする先行研究においては、使用頻度の高い語(特に一

字漢語サ変動詞)が注目されやすかった。そのため、平安和文には希有であったクンズ(後述)が特別問題にされることはなく、況や、その語史についてははまだ十分に明らかになっていない。

また、クンズの使用が広がっていく中世前期(後述)を対象とした先行研究では、文体を考察する指標として漢語サ変動詞を位置づける傾向にある。日常語と文章語との差が顕著になる中世前期においては、文体的意味に十分注意して漢語サ変動詞を観察する必要があることを示唆する。このような考察の観点については学ぶべきところも多いが、クンズをはじめとした各漢語サ変動詞に対する微視的な研究も今後の課題に据えられよう。

中世以降も生きながらえた漢語サ変動詞はあまり多くない中、現代に至るまで引き継がれたクンズを取り上げる意義は大いに存する。漢語サ変動詞語彙研究上においても、クンズの語史を明らかにする必要性は見出される。

そして、桜井光昭(一九六二)がつとに指摘したように、和語への配慮も必要である。漢語サ変動詞は「当時の新語・外来語として、和語動詞では表すことのできない表現価値を具有するものと考えられるのであるが、それが如何なる性質のものであるかは未解明である」(藤原浩史一九九三…六二頁)。よって、クンズのような目立たない語であっても、その「和語動詞では表すことのできない表現価値」をつぶさに考察する意義は存し、ま

た、その考察には和語との対比が必須となる。こうした問題意識は、ニホフやカフルなども扱い嗅覚表現自動詞語彙の史的変遷を記述しようとする本研究の主課題にも通ずるものがある。

以上のように、漢語サ変動詞語彙研究と嗅覚表現語彙研究との双方から、クンズの語史の究明が求められると考える。そこで、本章ではまず、クンズの漢語サ変動詞としての振る舞いを文体的意味から確認する。そして、それを踏まえ、嗅覚表現自動詞としての振る舞いを対象の意味から、ひいては対象の意味と文体的意味との関係から考察してみたい。

第三節 クンズの史的変遷

第一項 文体的意味

表一〇三にはクンズの用例数を示した。また、【参考】欄には、ニホフ・カフル、「名詞+スル」のうち代表的な形式として「ニホヒ+スル」、それぞれの用例数を時代ごとに示した。【参考】欄の語の資料名については割愛する。なお、クンズの評価性は基本的にプラスであるため、マイナスの評価性を有し得るニホフ・「ニホヒ+スル」も、プラスのそれに限り用例数を示す。マイナスの評価性を有するクンズの用例も二例あるが、これについては表に掲載せず、第二項(三)で詳述する。

(一) 上代・中古

クンズ以外の嗅覚表現自動詞が古く上代から見えるのに対し、クンズは中古も中後期に至るまで見えない。和文には用いられず、和文脈に漢文脈が混入する歴史物語にようやく初出例が見出せる。なお、訓点資料には用例を確認できず、漢文色の強い和文に特有の語であつたらしい^六。

(1) 三聚淨戒がうくんじて三解脱門風涼しきに、

思ひあつかふ煩惱の焰皆滅除すらんと覚ゆ。

(栄花物語・卷一八)

第二節ですでに紹介したように、漢語を排除する傾向にある中古和文においても、和語動詞にはない表現価値を有していた漢語サ変動詞数語は頻用されるのであつた。これに対し、クンズの登場は遅く用例数も少ない。初出例は、和文が漢文に

表一 上代・中古

【参考】

資料・成立年代\語	クンズ	ニホフ	カヲル	[ニホヒ+スル]
上代計	0	57(57)	3(2)	1(1)
栄花物語	1028-92頃	2		
中古計	2	126(56)	33(6)	2

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

歩み寄りを見せ始める(和漢混淆文成立に必要な一段階としての)歴史物語にようやく見える。このことから、クンズが十分に国語化していない漢語認識の強い語であつたこと、中古の段階ではニホフ・カヲルなどの和語動詞だけでも嗅覚表現自動詞に不足のなかつたことが分かる。

(二) 中世

中世前期では、記録体との影響関係を思わせる歴史物語に一例見える

(2) 他、和漢混淆文の発達を体现する説話(3)や軍記物語(4)に使用され始める。なお、例(3)の『今昔物語集』では、漢文訓読文体の傾向が強い卷二〇以前にクンズ五例中四例が集中する。これに対し、和文体の傾向が強い卷二二以降(卷二一は欠卷)にはニホフ八例中五例が集中するという、二語の文体差が窺える。これは、『今昔物語集』卷二〇以前と卷二二以降とで、前者に漢語サ変動詞の出現が偏るという、桜井光昭(一九六二)の指摘と一致するものである。

(2) 大将殿書き給へりけるをば、世こそりてほめきこえ侍き。低枝を折りてさゝげもたれば、紅蠟の色手に満てり。落葉を踏みてたゞずみたれば、紫麝の気衣に薫ず。(今鏡・みこたち第八・花のあるじ)

表二 中世

資料・成立年代\語			クズ	【参考】		
				ニホフ	カヲル	[ニホヒ+スル]
今昔物語集	1120頃?		5			
今鏡	1170		1			
梶尾明恵上人伝記	1232-50頃		1			
平家物語	13C前		1			
沙石集	1283		1			
源平盛衰記	14C前		2			
中世前期計			11	90(32)	29(8)	0
あしびき	中世後期初		1			
曾我物語	南北朝頃		1			
太平記	14C後		1			
しぐれ	中世後期中-1520		1			
鴉鷺物語	1467-77前後		1			
山谷抄	1500頃		1			
西行	中世後期		1			
毘沙門の本地	中世後期後		3			
地藏菩薩靈驗記	16C後		6			
コンテムツスムンヂ	1596		1			
信長公記	1598		6			
ぎやどペかどる	1599		1			
さいやき竹	中世後期末-近世初		1			
大黒舞	中世後期末-近世初以降		1			
中世後期計			26	16(2)	3	4

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

- (3) 「子无キ夫妻」年来、観音ニ祈リ申ス間ニ、夜ル聞ケバ、後ノ方ニ児ノ呼ク音有リ。是ヲ怪ムデ出テ見ルニ、柴ノ垣ノ上ニ白帖ニ被裏タル者有リ、香薫ジシテ馥シキ事无限シ。(今昔物語集・巻第一二第三八)
- (4) 清盛高野へのぼり、大塔をがみ、奥院へまいられたりければ、いづくより来る共なき老僧の、眉には霜をたれ、額に浪をたゝみ、かせ杖のふたまたなるにすがでいでき給へり。……此老僧の居給へる所に異香すなはち薫たり。人を付て見せ給へば、三町ばかりはみえ給て、其後はかき消つやうに失給ぬ。たゞ人にあらず、大師にてましくけり
- (平家物語・巻三・五)
- 中世前期は、日常語と文章語との隔たりが大きくなる時期であり、現存する資料の多くは文章語の要素が強いと言われる。例(2)～(4)も例外ではなく、文章語である漢語を多く交えた文章である。中世前期の言語資料にクズが多用され始めるということから、この語が文章語的であると言える。
- なお、中世前期に使用が広がると言っても、ニホフやカヲルの用例数には及ばない。「文章語である漢語を多く交えた文章」にも、クズを差し置きこれら二語が専ら使用される。

中世後期も前期と変わらず、クズは文章語の要素が強い資料に特徴的に現れる。中世における和漢混淆文の隆盛に合わせて需要が高まり、文章語としての表現価値を確立させたと考えられる。

(5) 「願書」其ノ詞ニ云ク、「……内証常住ノ月ハ、

遙カニ照ラシニ淡路島ノ秋浪ヲ一矣、外用「||仏の

衆生濟度の働きかけ」随縁ノ花ハ、更ニ薰ズニ津

守ノ浦ノ春風ニ一矣。……」(鴉鷺物語・中・第六)

(6) 如何に御主謙りたる科の後悔はご内証に叶ふ進

物なり。これ乳香「||燻香」よりも猶御前に於ひ

て *yūjō cunzuru* なり。御身の尊きみ足許に捧げ奉

れと思召さるるご内証に叶ひたる薫香は即ちこれ

なり。(コンテムツスムンヂ・卷三・第五七)

(三) 近世

前代に引き続き、近世以降も文章語としての表現価値を維持しながら使用されている。多用された資料群

表三 近世

資料・成立年代\語	クズ	
恨の介	1609-17頃	1
竹斎	1621-23	1
醒睡笑	1623	1
大蔵流・虎明本	1642	5
毛吹草	1645	1(1)
一休はなし	1668	1
色道大鏡	1678	1
元の木阿弥	1680	1
新竹斎	1687	1
続狂言記	1700	1
傾城禁短気	1711	1
聖徳太子絵伝記	1717	3
近世前期計		18(1)
艶道通鑑*	1715	1
軽口機嫌囊	1728	1
猿丸太夫鹿卷毫	1736	1
大蔵流・伊藤源之丞本	1751-72	1
当世花街談義	1754	1
鷺流・名女川本	1761-	1
根無草後編	1769	1
伽羅先代萩	1777	1
道中龜山嘶	1778	1
通言総籙	1787	1
大蔵流・虎寛本	1792	2
滑稽即興嘶	1794	1
戯男伊勢物語	1799	1
和泉流・雲形本	1818-30	3
玲瓏随筆	1859	5
近世中後期計		22

【参考】

ニホフ	カヲル	【ニホヒ+スル】
59(45)	46(21)	8
61(27)	26(8)	22

(): 和歌・謡などの韻文の用例数(内数)

*談義本は一つの資料ジャンルとしてまとめ、近世中後期に含めたため、1725年以前成立の資料もわずかに含む。

を鑑みれば、クンズは一貫して文章語であったと言えよう。

(7) 「願書」其ノ詞ニ云ク、「……内証常住ノ月ハ、遙カニ照ラシニ淡路島

ノ秋浪ヲ一矣、外用「一〓仏の衆生済度の働きかけ」随縁ノ花ハ、更ニ

薰スニ津守ノ浦ノ春風ニ一矣。……」 (鴉鷺物語・中・第六)

(8) 如何に御主謙りたる科の後悔は、内証に叶ふ進物なり。これ乳香「一

燻香」よりも猶御前に於ひて *yoio cunzuru* なり。御身の尊きみ足許に

捧げ奉れと思召さるるご内証に叶ひたる薫香は即ちこれなり。

(コンテムツスムンヂ・卷三・第五七)

(9) 李倫カ住宅ニハ、椒蘭沈香ノ類ヲ粉ラ壁ラ塗リス。サルマ、望メハ門。薰レ渡

レ。

(醒睡笑・卷五・上戸)

(10) ソレ天ハ一氣ニシテヨク品物ヲ生成ス。蓋シ一氣トハ地ノ万物ノ薰ス

ルトコロ、衆合シテ一氣ノ衆薰トハ地ノ万物ナリ。……山川水沢、一

切ノ氣薰スルトコロ、合シテ一氣ナリ。(玲瓏隨筆・卷之四)

また、ニホフやカラルとは異なり、和歌などの韻文ではほとんど使用さ

れなかったことも注目すべきである。表一・二・三中、唯一の韻文例は、

表三の『毛吹草』に見えた、後続する「くんじゆ(群衆)」を引き出すため

に似た音であるクンズが使用された例である。これは、俳諧だからこそ許容された語の選択であり、例外である。伝統的な和歌に許容されない事実は、クンズが漢語系の文章語として認識され続けていたことを示している。

(11) 花はくんじ人はくんじゆの木陰哉 (毛吹草・卷五)

なお、ここまで、終止形で上一段活用と認められるクンズは見られず、その上一段化の時期は確かでない。上一段化の確例は『和英語林集成』の初版まで待たねばならないことを補足しておく。

[12] KUNJI-ru-ta, クンジル, 薫, i.v. To send forth a perfume.

Kunji-wataru, to perfume all about. Syn.KAORU.

(和英語林集成・初版)

『明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス』

(四) 近代以降

文章語という意識は近世以前より引き継がれており、近代は文章語資料

中の用例が目立つ(13)・(14)。ただし、日常語を豊富に含む資料中にもク

ンズは現れ始めており(15)・(16)、やや使用文体が拡大したようである。

(13)内の燈火は常より鮮に主が晚酌の喫台を照し、火鉢に架けたる鍋の

物は沸々と薫じて、はや一銚子更へたるに、未だ狂女の音容はあらず。

(金色夜叉・後編(一八九七)尾崎紅葉)

〔近代デジタルライブラリー〕

(14)その階段の下より嗅ぎ慣れし白檀の芳香、ゆるやかに薫じ来る気はひ
あり。

(白くれない(一九三四)夢野久作)

〔夢野久作全集 第一〇巻〕筑摩書房・一九九二

(15)石楠花がちらほら見えて、深山の花の有する異香をくんにじてゐる

(不尽の高根(一九二七)小島烏水)

〔小島烏水全集 第四巻〕大修館書店・一九八〇

(16)茹あと青い芝生も、庭中の花と云う花も蔭に入り、月下香の香が高く

一庭に薫ずる。

(みみずのたはこと(一九一三)徳富健次郎)

〔近代デジタルライブラリー〕

現代に至ると、第一節で述べたように手紙の時候の挨拶などに見られる

ほか、文学作品中の用例が確認される(17)。新聞記事やインターネット

上での用例は非常に稀である(18)・(19)。

(17)閨中を狼狽させて梅薫ず

(雁道(一九七九)斎藤玄)「書き言葉均衡コーパス」

(18)虚空に花降り音楽聞こえ壺香四方に薫じて思いを絹の道に馳す法隆
寺金堂壁画飛天の公開。

(朝日新聞(一九八九年一〇月四日夕刊)「聞蔵Ⅱ」

(19)言語学では「パラダイム」という言い方をする。ある語を書き付ける

と、それに続く可能性のある語群が脳内に浮かぶ。原理的には、文法
的にそれに続いて破綻しないすべての語が浮かぶ(ことになってい

る)。例えば、「梅の香が」と書いたあとには、「する」で「匂う」で

も「香る」でも「薫ずる」でも「聞える」でも、いろいろな語が可能

性としては配列される。私たちはそのうちの一つを選ぶ。だが、「梅

の香がする」を選んだ場合と、「梅の香が薫ずる」を選んだ場合では、

そのあとに続く文章全体の「トーン」が変わる。「トーン」どころか「コンテンツ」まで変わる。うっかりすると文章全体の「結論」まで変わる。

(内田樹の研究室 (二〇一一年二月二九日))

http://blog.tatsuru.com/2011/12/29_1301.php

二〇一三年一月二一日最終閲覧)

中古和文で頻用された漢語サ変動詞のうち、中世以降も残存し得た語は非常に少ないという指摘(藤原浩史一九九三)を踏まえると、クズは、漢語サ変動詞語彙の中では誕生が遅かったにも関わらず、現代まで生き残ることのできた語となる。

それでは、どういった言語表現においてクズは必要とされ続けてきたのであろうか。嗅覚表現自動詞における文章語クズの表現価値を知るために、この語の対象的意味を考えてみたい。

第二項 対象的意味

第二項では、クズの対象的意味を明らかにしながら、特に文体的意味との関連について見ていく。

まず、(一)クズがとる対象の偏り(対象的意味の偏り)と文体的意味の確立との関係を説く。次に、(二)特定の対象描写に出現し始める固定的表現「異香クズ」が、文体的意味に及ぼした影響を考察する。最後に、(三)マイナスの評価性を有するクズをも含めて、クズの表現価値の統一的な把握を試みる。

(一) 身体(超越性)を対象にとるクズが意味すること

前掲表一から表三で示した用例数を、クズのとる対象により細分類したものが表四である。○数字は、後に触れる主格に漢語名詞「異香」をとるクズの用例数である。

薫物を対象にとる初出例(前掲例(1))に始まり、中世前期には、身体(超越性)を対象にとる用例が増加する(20)。さらに、中世後期には植物を対象にとる用例(21)も見られ始めるが、多くは薫物・身体(超越性)の用例である。対象の拡大は近世以降も続き、その他に分類されるような煙草の用例も見られるようになる(22)が、身体(超越性)を対象にとる用例が特に目立つようになる。

表四 対象別用例数

資料・成立年代\対象	クズ			
	植物(花)	薫物	その他	身体(超)
上代計	0	0	0	0
栄花物語	1028-92頃	2		
中古計	0	2	0	0
今昔物語集	1120頃?	1		4
今鏡	1170	1		
梶尾明恵上人伝記	1232-50頃			①
平家物語	13C前			①
沙石集	1283			①
源平盛衰記	14C前			2
中世前期計	0	2	0	6,③
あしびき	中世後期初			1
曾我物語	南北朝頃			①
太平記	14C後	1		
しぐれ	中世後期中-1520		1	
鴉鷺物語	1467-77前後	1		
山谷抄	1500頃		1	
西行	中世後期		①	
毘沙門の本地	中世後期後			③
地藏菩薩靈驗記	16C後			⑥*
コンテムツスマンヂ	1596		①	
信長公記	1598		⑥	
ぎやどべかどる	1599	1		
さゝやき竹	中世後期末-近世初			①
大黒舞	中世後期末-近世初以降			①
中世後期計	3	2,⑧	0	1,⑫
恨の介	1609-17頃		1	
竹斎	1621-23			①
醒睡笑	1623		1	
大蔵流・虎明本	1642			⑤
毛吹草	1645	1(1)		
一休はなし	1668			①
色道大鏡	1678		1	
元の木阿弥	1680		①	
新竹斎	1687			1
続狂言記	1700			①
傾城禁短気	1711			①
聖徳太子絵伝記	1717		1	②
近世前期計	1(1)	3,①	2	⑪
艶道通鑑	1715		1	
軽口機嫌囊	1728		1	
猿丸太夫鹿巻毫	1736			1
大蔵流・伊藤源之丞本	1751-72			①
当世花街談義	1754		1	
鷺流・名女川本	1761-			①
根無草後編	1769			①
伽羅先代萩	1777		1	
道中亀山噺	1778	1		
通言絵籬	1787			①
大蔵流・虎寛本	1792			②
滑稽即興噺	1794		1	
戯男伊勢物語	1799			①**
和泉流・雲形本	1818-30			③
玲瓏随筆	1859		5	
近世中後期計	1	4	6	1,⑩
総計	5(1)	13,⑨	8	7,⑬

() : 和歌・謡などの韻文の用例数(内数) * [妙香]1例含む。 ** [靈香]の例。

(20) 而ル間、永徹二年ト云フ年ノ正月ニ、僧徹、弟子等ニ告テ云ク、「自カラハ既ニ死ナムトス」ト云テ、衣服ヲ直クシテ繩床ニ端坐シテ、目ヲ閉テ不動ズ。其ノ時ニ、天晴レタリト云ヘドモ花降ル事、雪ノ雨ルガ如シ。香シキ匂ヒ、室ノ内ニ薫ジニテ不消ズ。

(今昔物語集・巻第七第二五)

ところで、クズよりも早く中古和文の中で身体(超越性)を対象にとつ

(22) 名とりのたはこ薫じてハ(新竹斎・四・一・西の京の闇日の出の東路)

もなし。(太平記・巻三二六)

(21) 本高跡下の秋の月照さず云処もなく、化属結縁の春の華くんせす云袖

ていたのは、ニホフやカウバシであった（本論第一部第一章・本論第三部第六章）^{二三}。クンズが身体（超越性）を対象にとり始める中世前期にも、ニホフとカウバシとのこうした用例は見られる。

(23) 夜いたう更けぬれば、七日の月いまは入るべきに、光、忽に明かになりて、かの樓の上と思しきにあたりて、輝やく神はるかになりゆきて、月のめぐりに星集まるめり。世になう、かうばしき風吹きにははしたり。すこし寝入りたる人くく目さめてことくおぼえず。空にむかひて見聞く。樓のめぐりは、ましてさまく珍らしかうばしきかみちたり。
（宇津保物語）

(24) 老蘇宮ノ西南ノ方ヨリ、金色ノ光リ照ラシ来テ、后ノ口中ニ入ケレバ、王子平産アリ。異香殿中ニ勻^{ユラヒ}テ梅檀沈水ノ如也。妃瑞相ニ驚、武川綱ニ仰セテ光ノ源ヲミセラル。（源平盛衰記・卷三九・同人関東下向事）

ところが、近世以降、ニホフ・カウバシは身体（超越性）を対象にとらなくなる。つまり、身体（超越性）はクンズが占有するようになる。また、クンズそれ自体においても、前述の通り「身体（超越性）」を対象にとる用

例が特に目立つようになる」のであるから、「身体（超越性）」をとるという対象の意味²⁴がクンズの表現価値の中心になったとも解釈できる。

しかし、もし、クンズの本質が対象の意味に存するならば、身体（超越性）の描写が激減する近現代語にクンズが生き残っているのは不自然である。時代が切り替わった瞬間、意味の中核に急激な変化が生じるとは想定しにくい。クンズは、対象の偏りが目立つために対象の意味に注意が向けられ、そこに本質があると考えがちである。しかし、この語の本質は文体的意味にこそあると指摘したい。

クンズが、誕生以来一貫して文章語と認識されていたことは、第三節第一項ですでに述べた。そもそも文章語は、クンズに限らず、硬く物々しい感じや重々しい印象を与える文体的意味である。そして、身体（超越性）の描写とは、「往生人・神仏が放つ威厳に満ちた秀囲気・神々しさという非日常性の描写」である。「尊敬・畏怖の念を抱かせる非日常性の出現の演出（以下、非日常性の演出）」を目的として、クンズの文体的意味が重宝されたのではなからうか。クンズにおいて、対象の意味の偏りは表面的な現象でしかなく、注目すべきは、文体的意味の確立・定着である。

（二）固定的表現「異香クンズ」が意味すること

文体的意味の確立・定着に伴う対象の偏りと並行して、主格に漢語名詞

「異香」をとるクンズが増加する。次に、この現象の意味するところについて考えてみたい。

クンズの初出例から二〇〇年ほど下ると、身体（超越性）をとるクンズの中に、主格に漢語名詞「異香」をとる用例が現れる。

(25) 或時不動の法を修し給ふに、道場忽に華苑と成りて、種々の宝華弥布せり。異香薰じて堂内に遍満す。
(梅尾明恵上人伝記・上)

時代が下るにつれて、クンズは例(25)のように「異香クンズ」という形で出現することが多くなり、この固定的表現の存在が他の嗅覚表現自動詞との顕著な違いになっていく。ただし、中世前期の段階では、ニホフが「異香」を主格にとる例が三例あり(26)、クンズが占有する名詞ではなかったようである。

(26) 同二十一日の夜禅堂院の後に葬斂す。其の間形色敢て改まらず。眠れる粧誠に殊勝なり。十八日の夕方より異香常に匂ふ。諸人多く是を嗅ぐ。装斂の後兩三日の間異香猶散ぜず。
(梅尾明恵上人伝記・下)

ところが、中世後期には、クンズ以外の嗅覚表現自動詞が「異香」を主格にとることはなくなり、クンズが「異香」を占有するようになった^{三〇}。これをより裏付けするのが、『日葡辞書』(一六〇三)や『羅葡日辞書』(一五九五)の記述である。

(27) Iqio. Cheiro suave. Iqio cunzuru. Recendero cheiro.

(日葡辞書) 『パリ本日葡辞書』勉誠社・一九七六

「邦訳：よい匂い。『異香くんずる。芳香が強く匂う。』(邦訳日葡辞書) 岩波書店・一九八〇」

(28) Fragro……Niûô, yqio cunzuru, cauoru.

(羅葡日辞書)

『ラホ日辞典の日本語本文篇』勉誠出版一九六七・一九七〇

「『異香薰じたり』は御伽草子^四・キリシタン物等にも継承された常套句。」「日本古典文学大系『今昔物語集 二』岩波書店・一九六〇…一五三頁」と指摘されたように、「異香クンズ」は、中世後期から近世初期の頃には、広く知られる固定的表現となっていたことが窺える。

そもそも、「異香」は、その初出を『後漢書』（四三二）にまで遡ることが出来る漢語である『大漢和辞典（初版）』大修館書店・一九五五・一九六〇。漢語を主格とした場合、述語には漢語（出自の語）が選択されやすくなり、クンズが相応しい述語と考えられ、「異香クンズ」という組み合わせが固定化していったのであろう。

また、次の二点からも、「異香クンズ」が「非日常性の演出」を意図していたことが推測される。

(一)単に〈快いにおい〉を表す「香气」や「芳香」ではなく、「異香（普通とは異なる快いにおい）」や「妙香（妙なる快いにおい）」「靈香（不思議な快いにおい）」といった非日常性を意識させる漢語を主格にとること

(二)この固定的表現が、
身体（超越性）の描写にのみ使用されるようになること^{一五}
身体（超越性）の描写には必ず使用されるようになること^{一六}

さらに、「異香クンズ」の形で使用され続けると、クンズは「漢語名詞に相応しい漢語出自の文章語」という認識も持続されることになる。クンズ

と同様の語構成である感ズル・信ズルなどが、漢語出自の語と意識されないほどに和文に溶け込んでいったのとは反対に、時代が下るにつれて、つまり、「異香クンズ」がより強固な固定的表現となるほどに、クンズは漢語系の語としての認識がより強化されていったのではなからうか。「非日常性の演出」のために身体（超越性）の描写に使用されたクンズが漢語名詞と結びつくことで、文体的意味はより定着することになった。

(三) マイナスの評価性を有するクンズが意味すること

最後に、ここまで触れてこなかった、マイナスの評価性を有するクンズ二例について述べたい。繰り返し主張してきたように、クンズの使用目的は、対象の意味ではなく文体的意味を利用しての「非日常性の演出」にあった。「非日常性の演出」は「異常性の演出」と呼んでもよい。マイナス評価を表すクンズ二例は、ともに〈不快なおいがする〉事態が日常的には起こりえない異常事態であり、クンズの表現価値に通ずる。これは、マイナス評価を表すニホフ・「ニホヒナスル」が想定範囲内で起きた事態に対して使用されるのと対照的である。

(29) 女ノ音^{コエ}ニテ、季武ニ現^{アラハ}ニ「此レ抱々ケ」ト云ナリ、亦児ノ音ニテ、

イカ〜ト哭ナリ。其ノ間、生鼻^{ナシ}キ香、河ヨリ此方マデ薰^カジタリ。…

…此ノ産^{ウマ}女ト云フハ、「狐ノ、人謀^{ヒトノ}ラムトテ為ル」ト云フ人モ有リ、

亦、「女ノ子産ムトテ死タルガ霊ニ成タル」ト云フ人モ有リトナム語

リ傳ヘタルトヤ。(今昔物語集・卷第二七第四三)

(30) 「屋敷^{ヤシキ}キの化生^{カセイ}をしとめたぞ。何れも出やれ。…」：「ナント各々見

さつしやい。此家に年シ経古ル狸。只一ト槍に付とめたは恐らく今シ

夜の秀逸でござらふ」と。自慢びらつく槍の先キ。貫く毛物を水右衛

門立チ寄ツて。「ハテ馬鹿な。よく見さつしやい。狸ではおりない。

こりや是溝石をはしる鼬^{ウサギ}でござるわい。」「ハアほんにそふじや。こり

や鼬^{ウサギ}じや〜。定めてきやつが最期の砌は。甚^{トク}しう薰^カじましたでござ

らふ。是がほんのすか兵法」(道中亀山噺・第二・日待の段)

例(29)では、化けた狐ノ霊が「生鼻^{ナシ}キ香」を発した事態の描写に、例(30)で

は、人を化かす古狸(と思ひ込んでいた鼬)が追いつめられて悪臭を放つ

た事態の描写に、それぞれクンズが使用されている。いずれも、異形の化

け物(と思ひ込んでいたもの)が悪臭を発するという異常事態である。

また、これらの類例として、化け物が「生鼻^{ナシ}キ香」を放った事態の描写に、読みの不確かな「薰^カ」が使用された例(31)がある。

(31) 恐^{オソ}シ気ナル氣配シタル者入来、生鼻^{ナシ}キ香薰^カタリ。恐^{オソ}シキ事无限シ。…

…「此ハ鬼ノ妻ニシテ、常ニ来テ此様ニ懷抱シテ返ル也ケリ」

(今昔物語集・卷第三一第一四)

例(29)・(31)の『今昔物語集』は、基本的には一語に一表記が対応しており、

その用字法は極めて安定していることが指摘されている(峰岸 明一九七

一 a・b、佐藤武義一九七三 b・一九七四、田中牧郎一九八八など)。『今

昔物語集』の嗅覚表現動詞もその用字法はほぼ安定しており、ニホフは

「匂^{ニホフ}」、カヲルは(名詞形カヲリ一例であるもの)「芬^{ニホフ}」、クンズは「薰^カ」

を使用する。このことから、例(31)もクンズである可能性が非常に高い。

以上の用例を説明する際に重要なのは、クンズがマイナスの評価性を有

していたことではなく、クンズが「非日常性の演出」のために利用される

ような文体的意味を有していたことである。クンズの本質が文体的意味に

存すると考えると、例外に見える例(29)・(30)・(31)も、統一的な理解が可能に

なるのである。

第四節 おわりに

クンズは、和漢混淆文が誕生に向かう中で誕生して以来、文章語が多用される和漢混淆文資料に多用され続けてきた。このことから、クンズの文体的意味は、古代より一貫して文章語であったと言える。

また、クンズがその文体的意味ゆえに「非日常性の演出」に利用されたと考えると、中世以降に身体（超越性）の描写に多用されるようになったことや、マイナスの評価性をも有し得たという対象的意味を統一的に説明することができる。すなわち、身体（超越性）の描写における「非日常性の演出」には、硬く重々しい印象を与える文章語が必要であり、そこでクンズが重宝されるようになったのである。「異香クンズ」という固定的表現が身体（超越性）の描写に特徴的に現れることから、この描写において「非日常性の演出」が行われようとしていたことが分かる。そして、マイナスの評価性を有するクンズは、いずれも異常事態における悪臭の描写における用例であることから、これらも「非日常性の演出」のためにクンズが利用された例と見ることができるのである。

補節 狂言台本における神仏の登場場面について

狂言には神仏の登場する曲が複数ある。そこで用いられる表現について、クンズを中心に台本ごとの傾向を述べる。

表五は、神仏の登場場面においてクンズの使用される五曲を中心に、各台本の使用表現をまとめたものである。五曲がすべての台本に所収されているわけではないため、所収されていれば升目を罫線で囲むことにより所収であることを示した。罫線で囲んだ四角に、「異香クンズ」とあれば「異香クンズ」を使用することを、無記入であれば特別な描写の見られないことを、他の語句があればその語句を使用することを、それぞれ表す。

「異香クンズ」は、流派固定以前の二台本（天正狂言本・祝本）に見えず、虎明本に至り五曲の中で使用され始める。しかし、その後の大蔵流諸台本（網掛け部分）には、曲自体三曲しか伝承されず、かつ、その三曲においても必ずしも「異香クンズ」が使用されるわけではない。

流派の別なく見渡してみても、伝承された三曲は「異香クンズ」という固定的表現に縛られることがないようである。特に、一八世紀以降の諸台本では、鷲流保教本・大蔵流虎光本が視覚表現を使用するなどして、独自の様相を呈していることが分かる^{一八}。

つまり、狂言台本に関しては、時代が降るとともに神仏の登場場面における「異香クンズ」が定着するわけではなく、各台本によって表現を様々

に工夫する傾向があるということである。これは、第三節で見えてきた他の言語資料の一般的な傾向とはやや異なる点である。

表五 神仏の登場場面における表現

流派・台本・成立年代\曲名	地獄僧	毘沙門	夷大黒	連歌毘沙門	大黒連歌
他 天正狂言本 1578					
他 祝本 1596					
大蔵流 虎明本 1642	[異香クズ]	[異香クズ]	[異香クズ]	[異香クズ]	[異香クズ]
和泉流 天理本 1645前後					
大蔵流 虎清本 1646					
和泉流 和泉家古本 1653-93					
版本 狂言記 1660					
鷺流 忠政本 1678					
版本 狂言記外 1700					
版本 続狂言記 1700					
鷺流 保教本 1716-24			御機嫌ノヨイ	[異香クズ] カラビタルテイ	目ナレヌ御方
版本 狂言記拾遺 1730					
大蔵流 伊藤源之丞本 1751-72					[異香クズ]
鷺流 名女川本 1761				[異香クズ]	
大蔵流 虎寛本 1792				[異香クズ]	[異香クズ]
大蔵流 虎光本 1817				御機嫌能	きらびやかに
和泉流 雲形本 1818-30				[異香クズ]	[異香クズ]
鷺流 賢通本 1855					

[異香クズ] その曲を所収し、かつ神仏の登場場面において[異香クズ]を使用することを示す

無記入/語句 その曲を所収するが、神仏の登場場面には特別な描写のないことや、他の表現の見られることを示す

一 現代語のサ変動詞を分類した鈴木丹士郎（一九九二）によると、語幹の種類により、サ行変格活用を維持した語、サ行変格活用から五段化した語、サ行変格活用から上一段化した語の三種類に分けられる。そして、案ズル・演ズル・信ズルなどの「撥音の字音語＋サ変動詞スル」は、現代語では上一段活用が優勢であるとの指摘がなされ、語形の上ではクンズルもここに分類される語となる。ただし、クンズルについては現代語の用例が非常に少なく（後述）、そうした一般的な傾向の適否を確かめ得ない。本章では、論述の便宜を図るために古代語クンズとの形態を統一し、サ行変格活用クンズ（ル）の語形を採用し、この形でサ行変格活用・上一段活用の両活用を指すことにする。

なお、一字漢語サ変動詞の活用変化については、小林賢章（一九九一）に詳しい。特に、上一段化の時期については、上下二段動詞の一段化時期に概ね重なること述べ、近世中期にはそうした現象がかなり広く起こっていたと指摘する。

二 挙例は『大辞泉（初版）』『小学館・二〇〇一』による。その他、『新明解国語辞典（第五版）』『三省堂・二〇〇〇』には「梅花―の候」「南風―」などの用例が見える。

三 ニオウやカオルには日常語注記が付される。

なお、宮島達夫（一九七七）が取り上げた文体注記のある辞書のうち、『新選国語辞典（第九版）』『小学館・二〇一一』にも、「くんずる」項に「文章語」（特に改まった口語文に使われる語）注記が見える。ニオウやカオルが無注記であるのと対照的である。もちろん、一口に「文章語」と言ってもその定義は各々異なるが、この注記を付すことで、「日常語的でないこと」を示す⁴態度は共通するものと考えられる。

⁴ 語幹の音節数に関わらず、漢語サ変動詞の使用頻度には性差の存することも指摘する。会話文の調査によると、女性が、使用頻度の高い国語化した語を中心とした限定的な使用にとどまるのに対し、男性は、漢語サ変動詞を自由に取り入れており、女性よりも圧倒的に使用が多いようである。

⁵ 藤原浩史（一九八七）の取り上げた具スなどである。具スは、〈複数の物が集まり完全な集合体となる状態〉を表す語として国語に導入された。しかし、中古中期において、人間の上位・下位の規定という具体的な現象の表現に用いられ始めたことを起因として、状態性から動作性へと意味が推移し、〈人間が主従関係を結ぶ動作〉を表す語と変化した。この国語化が、中古後期以降における表現価値の維持に繋がったのである。

六 ただし、『栄花物語』にはニホフ・カフルも確認される。

七 原典『東大寺要録』には「在柴垣上被裏白帖也薰香満」（巻一・本願章）とある（内閣文庫蔵本『定本丹鶴叢書 第二〇巻 日本書紀（神代巻）・東大寺要録』大空社・一九九八）による）。

八 再版（一八七二）に記述の異同はないが、第三版（一八八六）に至り、本来の活用であるサ行変格活用も見出しに加えられた。

KUNJJI-RU,OR-ZURU クンヅル、薰、i.v. and t.v. To send forth
a perfume; to perfume, scent; kunjji-wataru, to perfume all about.

Syn.KAORU. (和英語林集成・三版)
「明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス」

九 近代以降は、用例の得られた資料の文体が種々様々で、近世以前のよう
に資料ジャンルで用例数をまとめて掲載することが難しい。また、語の表
す意味について、それを可能にした資料一つ一つの文体に触れるのはあま
りに煩雑になると考え、得られた用例を概観しての特徴を記述するにとど
めた。

一〇 他動詞であれば容易に見つけることができる。ただし、香道や仏道な
どの特殊な位相における用例に偏るようである。

茶道愛好者ら、茶せんを供養 出雲の一畑寺 / 島根県

【写真説明】各流派の社中の代表らが見守る中、約200本の茶せん
を、お香で薰じる飯塚大幸管長。出雲市小境町で」

（朝日新聞（二〇〇六年九月四日朝刊）「聞蔵Ⅱ」

線香に薰ずる行為について。ある映画を観ていて疑問に思ったこと
です。嗣書や法衣を線香に薰じている場面がありました。線香でなくて
も、刻み香などに物を薰ずることがあると思いますがそれは何か意味
がありますか？

（Yahoo!知恵袋（二〇〇九年三月一〇日）

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1424011749

二〇一三年一〇月二一日最終閲覧）

このように、現代語には自動詞よりも他動詞が多く見られるのであるが、

近世以前における他動詞の用例は少なく、中古一例、中世前期二例、中世

(懐硯・卷二・四)

後期八例の計一一例であった。用例は少ないものの、『和英語林集成』第三版(一八八六)には自動詞・他動詞の両側面が認められている(注八参照)。

また、宮島達夫(一九七二)は、「[自他]両方にもちいられる可能性がある」とおもわれる漢語サ変動詞」として「薰ずる」を挙げる(七〇六頁)。

二 原典『冥報記』には「其天・気晴・朗雨花如雪香而不消方二里許」(卷上・第三話)とある(尊経閣文庫本『冥報記の研究 第一卷』「勉誠社出版・一九九九」による)。

三 カフルも身体(超越性)をとり得るが、『源氏物語』における薫大将の描写という個別的・特殊な用例であるため、例外と考える。

三 カフルが「異香」を主格にとる例が近世前期に一例見える。ただし、嗅覚表現自動詞中、カフルを多用する井原西鶴作品に見える唯一の例外であり、孤例である。

今は最期に究めし時、不思議や異香空に薫り、口の露の洒かゝると覺て、おのづから息かよひ出しより力付、時時あやしき童子天降りて伴ひ遊び、身体かるく、時しらぬ飲食、飢ず寒からず。

一四 ここていう「御伽草子」が、渋川版御伽草子を指すのか、広義の室町物語を指すのかは定かでない。本研究が考察の対象とするのは広義の室町物語であるが、渋川版御伽草子についても調査を行っている。その結果、渋川版御伽草子におけるクズ八例全て「異香クズ」であることが分かった。渋川版御伽草子が多分に近世的要素を持つこと(松本隆信一九七三)を踏まえれば、室町物語よりも近世的な様相を呈している(全例「異香クズ」である)のも当然の結果である。

一五 中世後期には薫物の描写に「異香クズ」が用いられることもあったが、近世以降には身体(超越性)の描写に限定されるようになった。近世前期に一例、薫物の描写における「異香クズ」の用例が見られるものの、「天人も天下るかと思はるゝ」ほどの「五十二種の名香」という、比喻表現としての「(薫物が)異香クズ」であり、身体(超越性)の描写に準ずる。

五十二種の名香を、風に靡かせたきければ、異香くんじ、天人も天下るかと思はるゝ。

(元の木阿弥・下)

一六 近世中後期には身体(超越性)の描写に単独のクンズが用いられた例

が一例あるが、通常「異香」で表すにおいを「伽羅で申さば百双ぐらひ」

と日常的な基準から捉え直したために、「匂ひ」となった例外である。

夜前不思議な霊夢を蒙る。夢は五臓のなす所と打殴られぬ夢物語り。

所は古郷の宇佐の宮。神殿の扉八文字に開け。伽羅で申さば百双ぐら

ひの匂ひ四方に薫じ。白髪たる老翁白衣の袖に袖を携へ。忽然と顕れ

出。「見よく天照太神の正統は。四十六第孝謙天皇につき果。十善の

位は徳有ル者に譲るべし。汝此旨計らへ」とまぎく敷キ神の託宣。

(猿丸太夫鹿卷毫・第二)

一七 「ほぼ固定化している」としたのは、「薫」の字を使用した、次のような自動詞の例が一例見られたためである。

「家が燃え」煙ノ薫リ合タル中ヨリ搔交レリ飛ガ如クニ出テ、西ノ流

ノ深ニ落入テ、

(今昔物語集・巻第二五第五)

古典文学大系の校注ではクスブルと訓が与えられている。上記の例のよ

うに「煙」を対象としてとっていけば、例(29)もクスブル・クンズのふたつ

の訓が候補として挙げられようが、前後にそのような文脈は見られない。

よって、例(31)を含め、『今昔物語集』における「薫」の字はクンズで固定化している可能性が高いと言えよう。

一八 保教本は、大蔵流その他と用語・演出の相違の見られることがたびたび指摘されてきた。神仏の登場場面における独自性も、一見そうした傾向の中に位置づけられるように思われる。しかし、大蔵流虎光本との間には視覚表現を使用すると言う共通点があり、当代的な描写の可能性もある。

小林賢次(二〇〇八)の指摘するように、複数の台本との対照によってはじめて保教本の「独自性」が見出されよう。

結論

第一章 嗅覚表現語彙の史的変遷

第一節 はじめに

結論第一章では、まず、本論の内容を簡潔にまとめる(第二節)。そして、それを踏まえながら、嗅覚表現語彙の史的変遷についての考察へと進め、この部分語彙の古代性・近代性について検討してみたい(第三節)。こうした部分語彙毎の古代性・近代性の記述を積み重ねていくことで、文法史や音韻史のような古代性・近代性を見出しにくいと言われる語彙史に対して、少なからず寄与できるものがあると考えられるためである。

第二節 本論のまとめ

第一項 形容詞

第一部第一章では、カグハシとその転化形であるカウバシ・カンバシを取り上げ、プラスの評価性を有する嗅覚表現形容詞語彙の変化の様相を考察した。まず、原形カグハシは古く上代から見られるものの、中古にはその第二音節が鼻母音化したカウバシに取って代わられ、以後近世期までカ

ウバシの独擅場が続いたこと、そして、中心的な嗅覚表現形容詞であったカウバシが中世前期には〈燈火の焦げる快いにおいがする〉さまを、中世後期には〈飲食物の焦げる快いにおいがする〉さまをも表すようになったことを明らかにした。一方で、近世前期には、カグハシのもう一つの転化形であるカンバシが、その音声的特徴から漢語のような印象を与える文章語としての表現価値を見出されるようになったこと、これと同時進行的に、カウバシの〈飲食物の焦げる快いにおいがする〉さまを表す語としての意味の限定化が生じたことを述べた。近世中後期には、それまで散文・散文ともに姿を消していたカグハシが文章語(雅語)として復活するに至ったことを指摘した。さらに、近代には、カグワシイが文章語(雅語)として〈快いにおいがする〉さま全般を表す語へ、コウバシイは専ら〈飲食物の焦げる快いにおいがする〉さまのみを表す語へ、カンバシイは否定表現を伴う評価形容詞として〈良くない〉さまを表す語へとそれぞれの意味・用法を確立したことを確認した。

第一部第二章では、成句「梅檀は二葉より―」に注目し、この成句の述語部分におけるカウバシ・カンバシの交替が、近世期に開始し、明治期から大正期にかけ終了したことを明らかにした。そして、こうした成句における二語の交替には、第一章で明らかにしたカウバシ・カンバシの意味・

用法の確立（カウバシの意味の限定化、カンバシの評価語化）が影響を及ぼしていたと推測した。これにより、一般的に、日常語の変化が及びにくいと考えられている成句の中で、「梅檀は二葉より―」は日常語の変化を反映した稀少な例と考えられることを指摘した。

第二部第三章では、クサシとモノクサシとを対照させながら、両者にはほぼ同じ意味変化が認められることを明らかにし、モノクサシはクサシの類義語であったと主張した。ただし、クサシにはない独自の意味を発生させているモノクサシの一面については、モノクサシの一語化が進んだ部分であると考えた。

まず、クサシは、本来の意味である〈不快なおいがする〉が抽象化することにより、単なる《発散》を意味する〈不快な気・感じがする〉という段階が生じる。そこから、「気・感じ」の不確実性、「不快」というマイナス評価の一致を共通項にして、〈事実・真相ははっきりしないが悪い気・感じがする〉という、〈怪しい・疑わしい〉の比喩的転義を派生させたのであった。一方で、〈不快な気・感じがする〉のマイナス評価の側面が強調された、〈気・感じが不快だ（甚だしい）〉という〈わざとらしい〉の比喩的転義も派生させることになった。

モノクサシは、如上のクサシの変化とほぼ同じように意味を拡大して

いった。また、それとは別に、“〈不快な気・感じがする〉ために〈気が進まない〉”という不快感の連鎖からくる独自の意味を獲得した。こうした自己の描写に使用されるモノクサシにやや遅れて、他者が〈気が進まない〉ように思われる様子にもモノクサシが使用されるようになり、原因・理由もなく〈気が進まない〉ように見える、つまり、〈不精である〉という人間の性向を描写する語と変化していったのである。

第二部第四章では、第三章で扱ったクサシに関連して、接尾辞・クサシを取り上げた。まず、¹クサシを通史的に観察した場合、上接成分の種類により六つのタイプに分類できることを明らかにした。すなわち、Aクサシ（物質の変化を表す動詞の連用形・具体名詞を上接）、Bクサシ（具体名詞とも抽象名詞とも解釈可能な身分・立場・場所を表す名詞を上接）、Cクサシ（抽象名詞・形容詞語幹・形容動詞語幹を上接）、A'クサシ（形容詞旨シ語幹を上接）、C'クサシ（動詞照レル連用形を上接）、文末外接形式（句を上接）の六つである。そして、¹クサシの基本的なタイプであるAクサシ・Bクサシ・Cクサシの三つがこの順に発達してきたことから、¹クサシに嗅覚表現から感覚表現への一般化（¹の不快なおいがする）から（¹の不快な雰囲気がある）（¹）が生じたことを指摘した。また、A'クサシ・C'クサシという特殊なものの誕生から、¹クサシにマイナス評価の後景化

(へ)のにおい／雰囲気がする)を表すようになったことも明らかにした。

これはつまり、くクサシの意味の抽象化に二方向が認められるということである。また、くクサシ語彙における(へ焦げる不快なにおいがする)さまを表すくクサシの多さについても指摘した。

第二部第五章では、第四章で扱った接尾辞くクサシの結合例のうち、一見、嗅覚表現に思われない水クサイに着目し、語史を個別に記述した。水クサイは、酒から(水の不快なにおいがする)こと、つまり、(水分が多く(酒本来の)味が薄い)さまを表す味覚表現形容詞として中世前期末に誕生した。近世前期に至ると、抽象的な物事である人物の行為に対して(情愛が薄い)さまを描写するという、情意のニュアンスが付随する評価形容詞としても使用されるようになった。しかし、中央語が上方語から江戸語へと移り変わる際、水クサイは(情愛が薄い)という側面のみが江戸語に伝播し、(水分が多く味が薄い)は江戸俚言水ッポイや甘い・薄いなどの類義語の存在により江戸語の味覚表現語彙から拒否されることになった。水クサイが本来「水(分量)」に注目する語であったことを踏まえると、同じく「水(分量)」を描写する語であった水ッポイが、味覚表現語彙における競合の中で最も意識された水クサイの類義語であったと考えられる。そして、その結果、中央語としての水クサイは、味覚表現から感情表現への変

化が認められるのだと結論づけた。

第二項 自動詞

第三部第六章では、ニホフト、知覚の自動詞と同じ働きをする自動詞的用法「名詞＋スル」とを取り上げた。古くプラス評価のみを表していたニホフは、中古に意味の下降が生じ始め、中世を通じてその意味変化が進行し、近世にはプラス／マイナス両極の評価性を獲得するに至った。こうした意味・用法は、鑑賞としての対象をとる語・文章語(雅語)的な語として、プラス評価を表すという本来の評価性が必要とされ続けたというために成立したと考えられる。しかし、プラス／マイナス評価両方を表すという、相反する二面性を維持し続けたことで、近世以前においてはマイナス評価を表す語として広く定着するには至らなかった。そこで、日常語的表現として認識されていた「名詞＋スル」(主に「ニホヒ＋スル」)が、修飾成分を伴った表現全体でマイナス評価を表す形式として伸長していったと考察した。

第三部第七章では、第六章で扱ったニホフの連用形名詞ニホヒを中心に、カ・カマリ・カザなどを含めた嗅覚表現名詞の史的変遷を追った。古く、プラス／中立的／マイナスの評価性を有する中心的な嗅覚表現名詞は力で

あつたが、一音節という形態的な不安定さゆえに、中世後期頃を境にニホヒと交替したということ指摘した。近世以降、カが「色香」「移り香」「梅ガ香」といった複合名詞・慣用的表現として定着しながら、文章語としての確立とともに評価性がプラスに傾いていったこと（意味の上昇）と、ニホヒが一語でプラス／中立的／マイナスの評価性すべてを担う中心的な嗅覚表現名詞として認識されていったこと（意味の下降）とは、そうした交替を物語る。また、カヨリは文章語（雅語）として、カザは上方語として、一部の位相にとどまりながらも、嗅覚表現名詞語彙を構成していたことにも触れた。

第四部第八章では、カヨルとその慣用表現「風カヨル」、それと関連があるとされてきた漢語「薫風」を取り上げた。本来、「薫風」とは無縁に誕生した「風カヨル」であつたが、中世後期頃における過度な語源意識により、「薫風」を訓読して誕生した和語表現と認識されるようになったと推定した。そして、この語源論の誕生の背景には、カヨルが他の嗅覚表現自動詞との棲み分けを図るように文章語（雅語）として定着しつつあつたこと、つまり、当時の嗅覚表現語彙の在り方が「薫風」の訓選択における主観的な語源論に影響を及ぼしていた可能性がある旨を述べた。

第四部第九章では、第七章のニホフ、第八章のカヨルという和語動詞と

は趣の異なる漢語サ変動詞クンズを扱い、その文体的意味から対象的意味を統一的に理解できることを主張した。クンズは、和漢混淆文が誕生に向かう中で誕生して以来、文章語が多用される和漢混淆文資料に多用され続けてきた。このことから、クンズの文体的意味は、古代より一貫して硬く重々しい印象を与える漢語系文章語であつたと言える。また、クンズがその文体的意味ゆえに「非日常性の演出」に利用されたと考えると、中世以降に身体（超越性）の描写に多用されるようになったことや、マイナスの評価性をも有し得たという対象的意味を統一的に説明することができる指摘した。すなわち、身体（超越性）の描写における「非日常性の演出」には、硬く重々しい印象を与える文章語が必要であり、そこでクンズが重宝されるようになったのである。「異香クンズ」という固定的表現が身体（超越性）の描写に特徴的に現れることから、この描写において「非日常性の演出」が行われようとしていたことが分かる。そして、マイナスの評価性を有するクンズは、いずれも異常事態における悪臭の描写における用例であることから、これらも「非日常性の演出」のためにクンズが利用された例と見ることができるのである。

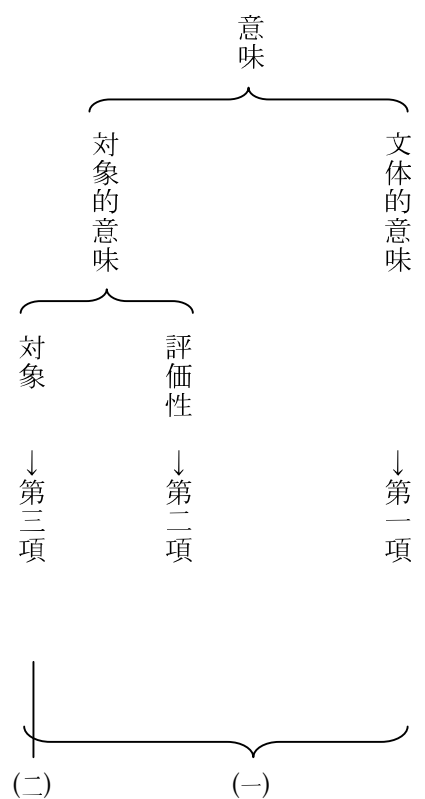
第三節 嗅覚表現語彙の史的変遷

それぞれの語史をまとめたところで、本研究の目的について改めて振り返ってみたい。序論では、次の二つの目的を提示した。

- (一) 嗅覚情報の性質・状態を言語化するためにどのような語彙が必要とされてきたか
- (二) 嗅覚表現語彙がどのような事物・物事の描写に使用されてきたか

本論で主に明らかにしたのは、(一)・(二)の掲げる語彙の問題というよりも、むしろ語の問題であった。もちろん、それぞれの語の表現価値や変化の要因についての考察は、他の語と比較対照する形で進めてきたが、それはやはり「語史」としての性格が強く、語同士の関係そのものを主役とする「語彙史」とは呼びにくいものであった。本節では、本論の成果である嗅覚表現語それぞれの語史を踏まえながら、嗅覚表現語彙の史的変遷という語彙史の問題について記述を進めていく。

論述は、次に示したように、「意味」を構成する情報である文体的意味・対象的意味（評価性・対象）について順に行う。



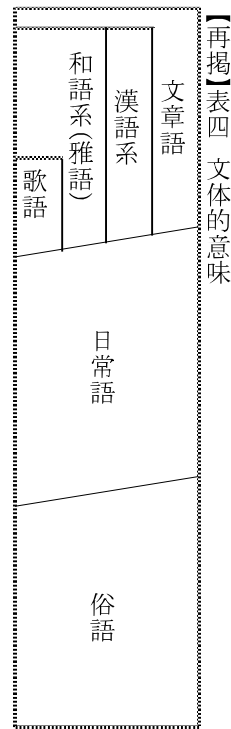
まず、(一)の(快い／不快な)においがする」という「意味」における語同士の棲み分けは語彙の全体像を明らかにし、「(一)嗅覚情報の性質・状態を言語化するためにどのような語彙が必要とされてきたか」を究明する。

次に、その「語彙」が、「(一)の(快い／不快な)においがする」という「意味」以外に表す「意味」をまとめ、「(二)嗅覚表現語彙がどのような事物・物事の描写に使用されてきたか」を検討する。

なお、こうした意味に関する考察を進めるにあたり、形容詞・自動詞間における文法機能の差異は捨象し、「嗅覚情報の性質・状態を言語化する」として同次元に扱った。嗅覚表現形容詞と嗅覚表現自動詞との統語環境の相違点は補節にて補足的に言及することとした。

第一項 文体的意味

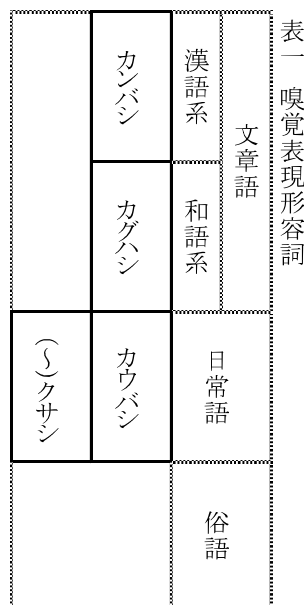
第一項では、文体的意味における嗅覚表現語同士の棲み分けについて述べる。ここで、序論第二章において示した、本研究における文体的意味の全体像をまとめた表四を再掲する。



文章語については、序論第二章において定義したように、「漢文や和漢混淆文のうち文語要素の強い言語資料（あるいは部分）に現れやすい文体的意味」が漢語系文章語であり、「韻文や擬古文に現れやすい文体的意味」が和語系文章語である。「いずれの伝達様式・言葉遣いであっても現れる文体的意味」である日常語とこれら文章語との差異が明確になるのは、様々な文体ジャンルが出揃った後と考えられよう。よって、文体的意味における嗅覚表現形容詞・自動詞の棲み分けについても、多種多様な文体の揃う近世以降に明確になる棲み分けの様相を示すことにする。なお、前掲表四

では、三つの文体的意味が連続的であることを表すため区切り線を斜めに引いたが、以下、表作成の便宜上、区切り線を平行に引いた。

まず、形容詞の文体的意味について表一にまとめる。



不快形容詞（ク）クサシはいずれも日常語としての性格を有し、語による文体的意味の差異は見られない。日常語よりも相対的に価値が高くなる傾向にあるとされる文章語には、クサシの表す意味の卑俗さは馴染まないであろう。なお、「クサシの表す意味の卑俗さ」ゆえに、近代の大正期以降、俗語としてのクサシの文末外接形式が誕生したとも考えられる。一方の快形容詞は、三語それぞれが異なる文体的意味を有することが分かる。カンバシの語種はあくまでも和語であったが、撥音を含むという音声的特徴が手伝い、あたかも漢語のような硬い語感を与え、近世期には文

語文要素の強い和漢混淆文に特徴的に現れる語となっていた。カグハシは中古にカウバシと交替し、いったん韻・散文から姿を消し、近世中後期以降に和語系文章語（雅語）として再び表現価値を見出された語であった。カウバシは、中古から近世にかけて一貫して嗅覚表現形容詞の中心にあったことから明らかなように、日常語と呼ぶに相応しい語であった。ただし、カウバシの意味の限定化が進行するに従い、従来この語が担っていた（快いにおいがする）さま全般を表す日常語的な快形容詞の領域は、空白へと近づいていくことになる。

この「空白」の拡大により、嗅覚表現形容詞語彙に再度変化が生じてもおかしくはない状況であった。ところが、カグハシはその文体的意味を維持し続け、また、カンバシは嗅覚表現形容詞から遠ざかり評価形容詞となり、この「空白」は他の二つの快形容詞によって埋められぬまま現代語に至っている。

一見、不均衡であるかのように思われるこの語彙も、嗅覚表現自動詞を含め捉え直した時、均衡のとれた語彙であることが分かる。すなわち、快形容詞と同じ働きをする知覚の自動詞に目を転ずれば、日常語としてのニホフと自動詞的用法「ニホヒ＋スル」との二つがあるのであり、これらによって「空白」は補われていたと考えられる。次に、自動詞の文体的意味

について表二にまとめる。

表二 嗅覚表現自動詞

	クズ	漢語系	文章語
	カナル	和語系	
「カ＋スル」			日常語
「ニホヒ＋スル」	ニホフ		俗語

前述のごとく、自動詞のうち、ニホフと「ニホヒ＋スル」との二つが日常語としての性格を有する中心的な存在であった。ただし、ニホフは、プラス評価を表す場合にはより文章語的で、マイナス評価を表す場合にはより日常語的であるという、評価性による文体的意味の濃淡が認められる。

ニホフが入り込む和語系文章語（雅語）の領域には、さらにカナルと自動詞的用法「カ＋スル」とがある。前者は、ニホフとの差異化を図るよう中世以降雅語として定着していった語である。後者は、ニホヒと交替し徐々に雅語化していったカを内部に含む形式である。

自動詞のうち漢語系文章語は、漢語サ変動詞クズが担っていた。表二では、クズの左側、漢語系文章語の自動詞的用法が不在であるように見

えるが、本研究では扱わなかった漢語表現「香氣／臭気＋スル」などがこれに相当しよう。

以上、表一・表二より、⊖嗅覚表現形容詞、嗅覚表現自動詞は、近世以降、各々の語彙において語同士が互いに文体的意味を棲み分けることで共存が可能になったことが明らかになった。

第二項 対象的意味

第二項では、まず、評価性における嗅覚表現語同士の棲み分けについて、次いで、とる対象におけるそれについて述べる。

(一) 評価性

次の表三／表七は、評価性における嗅覚表現形容詞・自動詞の分布を時代ごとに示し、古代・中世・近代という大きな三つの時代区分に分けて横に並べたものである。

嗅覚表現形容詞の評価性は基本的に変化しておらず、各語の出現状況がそのまま評価性分担の様相と重なることになる。中古には、プラス評価を表す形容詞においてカグハシとカウバシとが交替し、マイナス評価を表す形容詞において合形成容詞／クサシが登場する(表三・四)。また、中世

においても古代の様相がそのまま引き継がれた(表五)。そして、近世前期にはカンバシが、近世中後期にはカグハシが、それぞれプラス評価を表す形容詞において重要な位置を占めるようになる。形容詞は、古代よりプラス／マイナス評価を表す語がそれぞれ用意されており(カグハシ／クサシ)、時代が下るとともに語のバリエーションが増加していったようである。ただし、評価的に中立な形容詞はついに誕生しなかった。

次に、自動詞に着目してみる。主な嗅覚表現自動詞は、中古の段階においてすでに出揃っていた(表四)。しかし、それらはいずれも専らプラス評価を表しており、古代日本語においてはマイナス評価を表す嗅覚表現自動詞が不在であったらしい。そうした語彙の空き間を埋めるかのように動き出したのが、「ニホフ」と「名詞＋スル」との二つであった(表四・五)。

その結果、近世前期以降、ニホフは一語でプラス／マイナスの両方の評価性を有する語へ、「名詞＋スル」は修飾成分を伴いすべての評価性を覆う形式へと定着していった(表六・七)。中立的な評価を表す形容詞の不在は、こうした自動詞的用法の存在により補われていると考えられる。形容詞の意味特徴の一つとして、命題レベルにおいてすでに主体的評価が絡むことが挙げられる(八亀裕美二〇〇九)が、嗅覚表現自動詞についても同様に指摘できよう。これは、見ユ・聞ユなどの他の知覚自動詞には認められ

ない嗅覚表現自動詞の特徴である。

表三 上代

品詞 \ 評価性	評価性		
	+	n	-
形容詞	カグハシ		クサシ
自動詞	ニホフ		
	カヲル		
	[名詞+スル]		

表四 中古

品詞 \ 評価性	評価性		
	+	n	-
形容詞			クサシ ~クサシ
	カウバシ		
自動詞	ニホフ		
	カヲル		
	クンズ		
	[名詞+スル]		

表五 中世

品詞 \ 評価性	評価性		
	+	n	-
形容詞	カウバシ		クサシ ~クサシ
自動詞	ニホフ		ニホフ
	カヲル		
	クンズ		
	[名詞+スル]		

表六 近世前期

品詞 \ 評価性	評価性		
	+	n	-
形容詞			クサシ ~クサシ
	カウバシ		
	カンバシ		
自動詞	ニホフ		ニホフ
	カヲル		
	クンズ		
	[名詞+スル]		

表七 近世中後期

品詞 \ 評価性	評価性		
	+	n	-
形容詞			クサシ ~クサシ
	カグハシ		
	カウバシ カンバシ		
自動詞	ニホフ		ニホフ
	カヲル		
	クンズ		
	[名詞+スル]		

以上、表三と表七より、第一に、㊶嗅覚表現形容詞においては「プラス評価を表すカグハシ／マイナス評価を表すクサシ」という構造が古代から保持され続け、その転化形や合成形容詞が次々に誕生しても語彙に変化は認められない。第二に、㊷嗅覚表現自動詞においては、古代から主な語(句)が出揃っていたものの、中立的／マイナス評価を表す語(句)は不在であり、後にニホフ・「名詞＋スル」の評価性拡大により補われるという語彙の変化が認められる。

(二) 対象

嗅覚表現語のとり対象について、具体的な事物、抽象的な物事の順にまとめると。前者を対象とする嗅覚表現語は(へ)の(快い／不快な)において(がする)といういわゆる嗅覚的な意味を表すとされる。しかし、後者を対象とする嗅覚表現語は、「(へ)の(快い／不快な)」において(がする)といういわゆる嗅覚的な意味以外の意味を表すと考えられよう。こうした観点からの考察は、「(二)嗅覚表現語彙がどのような事物・物事の描写に使用されてきたか」という、嗅覚表現語彙のいくつかの特徴を拾い上げていく作業ともなる。

(二・一) 具体的な事物

本論において主に見てきた具体的な事物をまとめたものが、次の表八である。このうち、気(精彩)はニホフ、気(煙霧)・風はカラルのみとり得た対象であったが、これを除けば、形容詞と自動詞とのとり得る対象は概ね共通していたと言える。個々の嗅覚表現語がとる具体的な事物の史的変遷については本論に譲り、ここでは、嗅覚表現語全体として、とる具体的な事物がどのように移り変わってきたのか、その古代性・近代性について述べる。

表八 具体的な事物

穢れ	薫物	植物 (草木) (花)	気 (精彩) (煙霧)	身体 (美しさ) (超越性)
その他	飲食物	風		

(注) 表八の中心には「焦げるにおい」とある。

嗅覚表現語彙の古代性を特徴づける対象は、気（精彩・煙霧）と身体（美しさ・超越性）との二つである。気（精彩・煙霧）は上代のニホフ・カヲルの二語が取り得た対象であり、その後は一切見られなくなった。また、身体（美しさ・超越性）は、中古・中世前期の嗅覚表現語彙が盛んに対象としたものの、中世後期以降はその数が減少し、近世以降は（クンズを除き^三）嗅覚表現語彙による描写が衰退していった。以後、上述の対象は視覚表現語彙により描写されるようになっていく。表八で言えば、^四視覚表現語彙と共有する対象であった気（精彩・煙霧）、身体（美しさ・超越性）を手放し、近世以降は太線で囲った具体的な事物の描写に専用の語彙と変化していったのである。

次に、嗅覚表現語彙の近代性を物語る対象について、特に形容詞に注目して考えてみたい。本論第一部第一章にて明らかにしたように、長い間、快形容詞の中心的存在であったカウバシは、中世後期頃に（飲食物の焦げる快いにおいがする）さまをも表すようになり、近世以降はこの意味のみを表す語へと意味の限定化が進行していった。一方、不快形容詞は、本論第二部第四章において指摘したように、中世以降（焦げる不快なおいがする）さまを表すくサシが増加し始め、近世にはこの意味で使われるくサシがほぼ出揃うのであった^四。⑤中近世を通じて増していった「焦げ

るにおい”言語化の需要に応えるように、嗅覚表現語彙において（焦げる快い／不快なおいがする）さまを表す快・不快形容詞が整備されていったのである。なお、「焦げるにおい」の発生源は薫物・飲食物・穢れ・その他が想定されるため、表八ではこの四つに亘るように「焦げるにおい」を配置した。

（二・二）抽象的な物事

本論では、嗅覚表現形容詞を中心に、抽象的な物事を対象とする場合に見られる新たな意味の派生について取り上げてきた。そうした新たな意味が語の意味として定着した語例に関して、その場合にとる抽象的な物事を整理したものが次の表九である。

表九 抽象的な物事

語	対象
カンバシ+否定表現	好ましくない事態
ニホフ	事実・真相が不確実な事態 人間の言動
クサシ	
モノクサシ	
水クサシ	

まず、カンバシは、近代に入り、否定表現を伴いながら好ましくない事態を対象とするようになり、抽象化派生義^六（「良くない・好ましくない」を獲得した（本論第一部第一章））。

次に、クサシは、近世以降、事実・真相が不確実な事態を対象とするこゝとで比喩的転義^六（「怪しい・疑わしい」を、演技（表九では「人間の言動」に含めた）を対象とすることで比喩的転義（「わざとらしい」を、それぞれ表すようになった（本論第二部第三章）。前者については、同様の意味の派生が、近代以降（具体的な時期はいまだ不明）のニホフ（本論第三部第六章）や、近世期におけるモノクサシ（本論第二部第三章）にも指摘できる。

また、モノクサシは、中世前期に、（「あるものが」不快な気・感じがする」というところから推論的派生義^七（「気が進まない」を獲得し、さらに、これが対他者に使用されること（「不精である」）さまをも表し得たのであった（本論第二部第三章）。「不精である」を表す場合、対象は人間の言動という抽象的な物事である。

近世以降の水クサシも同様に、人間の言動を対象とすることで比喩的転義（情愛が薄い）を表すようになった（本論第二部第五章）。なお、カンバシのとする「好ましくない事態」や、ニホフ・クサシ・近世期におけるモノクサシのとする「事実・真相が不確実な事態」に、「人間の言動」が関わる場

合もあると考え、表九では「人間の言動」をすべての語例がとる対象として示した。

上述の現象に共通するのは、語の表す意味が客観的意味から主観的意味へ変化している点である。すなわち、⑥ 感覚を通して認識した具体的な事物の客観的な属性を表すことを職能としていた状態形容詞（それに類する知覚の自動詞）が、抽象的な物事を対象とすることで主観的な感情・評価の付随する評価形容詞としても振る舞うようになるという変化が、近世を中心起こったのである^八。客観的な状態を表す語から主観的な評価を表す語へと変化するのは、感覚を通して認識それ自体が、社会的・客観的なものであると同時に、個人的・主観的なものともなり得るためである（西尾寅弥一九七二）。あるにいが芳香であるか悪臭であるかについて、客観的な判断を下せる場合もあれば、非常に主観的な判断となる場合もある。嗅覚という感覚を通して認識それ自体が全き客観性によって支えられたものでないために、主観的な評価の意味を派生させる契機が潜んでいるのではなからうか。

第四節 おわりに

如上の考察を踏まえ、意味を構成する情報ごとにその古代性・近代性を

簡潔に述べる。

【文体的意味】

「㊶嗅覚表現形容詞、嗅覚表現自動詞は、近世以降、各々の語彙において語同士が互いに文体的意味を棲み分けることで共存が可能になった」。ここから、㊶嗅覚表現語彙の**古代性**として「文体的意味の未成熟^九」が、**近代性**として「文体的意味の成熟・分担」が、それぞれ指摘できる。

【対象の意味―評価性】

「㊶嗅覚表現形容詞においては「プラス評価を表すカグハシ／マイナス評価を表すクサシ」という構造が古代から保持され続け、その転化形や合成形容詞が次々に誕生しても語彙に変化は認められない」。また、「㊶嗅覚表現自動詞においては、古代から主な語（句）が出揃っていたものの、中立的／マイナス評価を表す語（句）は不在であり、後にニホフ・「名詞＋スル」の評価性拡大により補われるという語彙の変化が認められる」。ここから、㊶・㊷嗅覚表現語彙の**古代性**として「プラス評価を表す語の豊富さ」が、**近代性**として「マイナス評価を表す語の増加」が、それぞれ

挙げられる。

【対象の意味―対象―その一】

「㊸視覚表現語彙と共有する対象であった気（精彩・煙霧）、身体（美しさ・超越性）を手放し、近世以降は太線で困った具体的な事物の描写に専用の語彙と変化していった」。ここから、㊸嗅覚表現語彙の**古代性**として「視覚表現との機能の重複」が、**近代性**として「視覚表現との機能の分化^{一〇}」が、それぞれ考えられる。

【対象の意味―対象―その二】

「㊹中近世を通じて増していった「焦げるにおい」言語化の需要に因應するように、嗅覚表現語彙において「焦げる快い／不快なおいがする」さまを表す快・不快形容詞が整備されていった」。ここから、㊹嗅覚表現語彙の**古代性**として「一語の意味が総合的」が、**近代性**として「一語の意味が分化・特殊化（特に、「焦げる快い／不快なおいがする」さまを表す語の増加）」が、それぞれ指摘できる。

【対象の意味―対象―その三】

「㊺感覚を通して認識した具体的な事物の客観的な属性を表すことを

職能としていた状態形容詞（それに類する知覚の自動詞）が、抽象的な物事を対象とすることで主観的な感情・評価の付随する評価形容詞としても振る舞うようになるという変化が、近世を中心に起こった。ここから、^④嗅覚表現語彙の「**古代性**」として「状態形容詞として存在」が、「**近代性**」として「状態形容詞から評価形容詞への変化」が、それぞれ挙げられる。

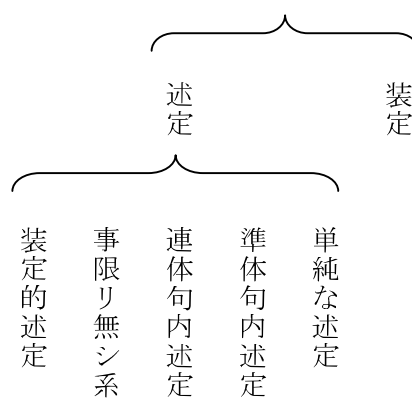
嗅覚表現語彙の史の変遷から見えてくるこの部分語彙の古代性・近代性は、以上のようにまとめられよう。

補節 嗅覚表現語彙の統語環境

本章では、嗅覚表現形容詞と嗅覚表現自動詞とで統語条件を揃えず、意味にのみ焦点化し、嗅覚表現語彙の史の変遷について検討した。そうした考察の前提には、両者の文法機能が大部分において概ね重なるという事実が存する。補節では、この前提について補足しておきたい。

第一項 用法の分類

はじめに、嗅覚表現形容詞・自動詞（以下、語（句）と呼ぶ）に関わる全用法を示し、順に説明する。



まず、語（句）の名詞との関わり方により、**装定**と**述定**とに二分する。前者は主述関係を指し、後者は倒逆的な主述関係を指す。

装定 「此湯は臭^{くさ}匂^{かほ}のする湯^ゆたい。……」（浮世風呂・前編・巻上）

述定 此香ハ臭^{くさ}イト云者モ、香イト云者モ有マイゾ。（山谷抄・巻三）

述定は、前掲例のように構造が単純なものだけではない。結果として述定的に働くものが四つある。

第一に、語（句）が準体句の構成要素となっており、かつ、その準体句の内部では述定として機能していると考えられるものがある。これを**準体**

句内述定と呼び、述定に含めた^二。

準体句内述定 蓼くふ虫もすきくにて。書物数寄のひまらしき。歌ずきの古人めける。連歌好きのひなびたる。俳諧ずきの行すぎたる。茶人のしさいらしき。^{（香きゝのきやらくさき）}。盆石の好きのおさまりたる。花数寄のしたりがほ。鳥ずきのあほうらしき。碁ずきの仙人らしき。将棋ずきの軍師めける。軍書ずきの無念らしき。^{（虫ぼしずきの古筆くさき）}。
^{（風流碎談議・卷三）}

第二に、語（句）が連体句の構成要素となっており、かつ、その連体句の内部では述定として機能していると考えられるものがある。これを**連体句内述定**と呼び、述定に含めた。

連体句内述定 「御利益は四方にかほれる」観世音梅さくらにてつくりたまへば」
^{（東海道中膝栗毛・七編・下）}

第三に、形式面からは語（句）が装定として機能しているように見えるが、実際には語（句）が述定の強調として機能している「語（句）＋事限

り無し」という固定的表現がある。これを**事限り無シ系**と呼び、述定に含めた^三。形式的な述定である点は次の装定的述定と共通するが、説話に頻出するという特徴を有するため（後述）、一つの用法として立てた。

限り無シ系 此河水俄に紅血に変じてなまくさき事限なし。かゝる所に三尺ばかりに見へける劍、一ふり流れけり。
^{（室町殿日記・八）}

第四に、語（句）の連体修飾を形式名詞が受け実質的には語（句）が述定として機能していると考えられる場合や、形容詞の連用修飾を受けている用言^四よりも形容詞の方が述定として機能していると考えられる場合がある。これらを**装定的述定**と呼び、述定に含めた。

装定的述定 シテ……やれ、ここな者。さてもく酒臭い事かな。
^{（賢通本・茶壺）}

藕花ノ汚レタ泥中ヨリ出テ、チツトモ汚レイデ結句花モ美シク香クアルゾ。
^{（中興禅林風月集抄・三ウ四）}

第二項 用法から見た嗅覚表現語彙

分類の結果は品詞ごとにまとめ、表一〇・表一一として示す。

変化は見出しにくい。いずれも、通史的に一貫して述定としての使用が多

さて、形容詞・自動詞ともに、装定・述定それぞれが占める割合の史的

表一〇 形容詞の用法

時代\用法	快形容詞					不快形容詞						
	装定	述定	準体句内述定	連体句内述定	事限り無シ系	装定の述定	装定	述定	準体句内述定	連体句内述定	事限り無シ系	装定の述定
上代計	2 28.6%	5 71.4%	1	0	0	0	1 100.0%	0 0.0%	0	0	0	0
中古計	21 33.3%	42 66.7%	6	0	3	5	3 30.0%	7 70.0%	1	0	0	2
中世前期計	44 34.1%	85 65.9%	5	0	18	14	29 39.2%	45 60.8%	2	0	14	8
中世後期計	20 17.1%	97 82.9%	6	3	1	24	21 32.3%	44 67.7%	14	1	0	5
近世前期計	16 23.9%	51 76.1%	8	1	0	7	106 38.7%	168 61.3%	18	10	2	31
近世中後期計	18 29.5%	43 70.5%	8	6	0	6	129 29.5%	308 70.5%	38	21	2	61
総計	121 27.3%	323 72.7%	34	10	22	56	289 33.6%	572 66.4%	73	32	18	107

表一一 自動詞の用法

時代\用法	自動詞					自動詞的用法						
	装定	述定	準体句内述定	連体句内述定	事限り無シ系	装定の述定	装定	述定	準体句内述定	連体句内述定	事限り無シ系	装定の述定
上代計	23 37.7%	38 62.3%	2	7	0	0	0 0.0%	1 100.0%	0	0	0	0
中古計	39 23.6%	126 76.4%	16	25	0	0	0 0.0%	6 100.0%	1	0	0	0
中世前期計	31 23.3%	102 76.7%	4	9	2	1	0 0.0%	5 100.0%	0	0	0	0
中世後期計	4 8.0%	46 92.0%	1	3	0	0	1 9.1%	10 90.9%	2	0	0	0
近世前期計	26 19.4%	108 80.6%	6	11	0	2	3 8.1%	34 91.9%	1	0	0	1
近世中後期計	21 16.2%	109 83.8%	10	17	0	1	3 4.2%	69 95.8%	0	1	0	1
総計	144 21.4%	528 78.6%	39	72	2	4	7 5.3%	125 94.7%	4	1	0	2

いということが分かる。総計における述定の占める割合の高さで並べると、自動詞的用法(九四・七%)∨自動詞(七八・六%)∨快形容詞(七二・七%)∨不快形容詞(六六・四%)となることから、自動詞(的用法)の方が述定に多用されたと考えて良さそうである^{一五}。

述定のうち準体句内述定・連体句内述定は、自動詞に特に多い用法である。連体句・準体句といった句の特性(どういった品詞が句を構成しやすいのか等)も考慮しなければ

ばならないが、嗅覚表現においては、形容詞よりも自動詞の方が句を構成しやすい傾向にあるようである。なお、自動詞的用法においては、準体句内述定・連体句内述定が全用例数の三・八%しかなく、この点に自動詞との顕著な違いを認められる。

述定のうち事限り無シ系・述定的装定に関しては、自動詞(的用法)よりも形容詞に特徴的な用法のようである。なお、藤井俊博(一九九〇)の指摘するように、「事无限シ」は「漢文の表現から生まれた翻訳語法」であり、説話に多く取り入れられた表現である。今回の分類でいうところの事限り無シ系には、事類無シなどの類義表現もわずかに含まれているものの、形式名詞「事」で承けた用言を強調するこういった表現の類において、藤井氏の指摘する資料の偏りが当てはまると言える。

以上述べてきたように、述定を詳細に分類した場合には、形容詞と自動詞(的用法)との間にわずかな差異が見られるものの、ともに述定が主な用法であることが分かった。ただし、クンズと自動詞的用法とについては、専ら述定として使用されたようである(注一五参照)。つまり、装定は形容詞と自動詞ニホフ・カヲルとが担う用法であったと考えられる。

一 岩淵悦太郎(一九六三)の説くように、雅語はその歴史的な厚み(どのように使われてきたかという歴史)から理解する必要がある。ここでも、嗅覚表現自動詞語彙における雅語と嗅覚表現形容詞語彙におけるそれとで、質差が存することに注意しなければならない。すなわち、形容詞カグハシが、「中古にカウバシと交替し、いったん韻・散文から姿を消し、近世中後期以降に和語系文章語(雅語)として再び表現価値を見出された」という雅語化を経た語であったのに対し、カヲル・「カ+スル」は、韻文・散文ともに使用され続けた中で雅語化していった語(句)であるという相違が指摘できる。

二 ただし、本来マイナス評価を表す・クサシの結合例である旨クサシは、〈旨いにおいがする〉というプラス評価を表す(接尾辞それ自体の評価性は中立的で、プラス評価は上接成分である形容詞旨シの語幹からもたらされる)。

三 「異香クンズ」による身体(超越性)の描写は近世以降も続いた。ただし、これは非常に固定化した文章語的表現であったと考えられる(本論第四部第九章)。

四 中世には焦ガレクサシ・焦ゲクサシ・^{フスボ}燻リクサシ、近世には煎リクサ

シ・煙硝クサシ・紙子クサシ・衣クサシ・煙クサシ・焼ケクサシ、近代には燻^{イウ}シクサシ・煙^{ケナ}クサシがそれぞれ登場する。

五 用語は国広哲弥（一九九七）による。

六 注五に同じ。

七 注五に同じ。

八 なお、本論では詳しい語史を述べられなかったが、他にも、近世以降、状態形容詞から評価形容詞へ変化したことの分かっているクサシがある。

次にいくつかその語例を挙げる。

青クサシ〈青物の不快なおいがする〉↓〈未熟である〉

黴クサシ〈黴の不快なおいがする〉↓〈古めかしい〉

キナクサシ〈焦げる不快なおいがする〉

↓〈怪しい〉〈何かが起こりそうである〉

乳クサシ〈乳の不快なおいがする〉↓〈未熟である〉

泥クサシ〈泥の不快なおいがする〉↓〈野暮つたい〉

生グサシ〈生ものの不快なおいがする〉

↓〈僧侶が〉〈世俗的である〉〈生々しい欲望や利害が絡んでいる〉

九 古代における文体の種類が、中世以降のそれに比して乏しいことから招かれた結果とも考えられる。「嗅覚表現語彙の古代性」の一つとして数えることも躊躇われるが、後掲の近代性と対比させることを優先して記した。

一〇 ただし、抽象的な物事を対象とし、語に意味の抽象化が起こる場合、嗅覚情報は抽象化を経て「雰圀（気）」となり、嗅覚表現は視覚表現的な意味を表し得る。ここでは、具体的な事物における視覚表現との機能の分化を指す。

二 用語は、佐久間 鼎（一九四一）を参考にした。佐久間 鼎（一九四

一）は、Jespersen の “nexus”（例、鳥が飛ぶ。）を「述定」、

“junction”（例、飛ぶ鳥。）を「装定」とそれぞれ訳す。

三 山口堯二（一九九二）では、準体句について次のように述べる。

活用語連体形は、用言性の語句を連体修飾語として体言と相関させる活用形であり、準体句は、その活用形で統括されることによって、用言性の語句自体に、体言性（体言的な対象性）を担わせられたもの名である。だが、そうは言っても、準体句は本来用言を述語とする句である。それを統括する活用語連体形には、接続法の前句をまとめ

るといふ機能もある。だから、連体形自体が、特定の格関係に立つその文脈を離れて、それに安定した体言性を保証するわけではなく、準体句の体言性の認定は、その相関すべき語句との格関係に依存していると言つてよいだろう。(三三頁)

二三 藤井俊博(一九九〇)は、この固定的表現について次のように説明する。

「事无限シ」を構成する「こと」「かぎり」「なし」の各語は何ら特別な用語ではないが、表現全体としてこれを組み合わせた「ことかぎりなし」は、その頻度の高さにおいて特徴的であり、さらに用言の意味を「強調」するという独自の用法を指摘できる(一四六頁)

一四 アリ・ゴザル・ナス・候フ・侍リ・連語シテなど。

一五 なお、自動詞のうちクンズは述定の用例しか見えない。

第二章 成果と課題

結論第二章では、まず、本研究が「嗅覚表現語を語彙体系論の立場から、かつ、歴史的な観点から考察する」(序論第一章第三節)ものゆえに得られた成果についてまとめる(第一節)。そして、最後に今後の課題を明らかにする(第二節)。

第一節 本研究の成果

第一項 語彙研究として

筆者は、嗅覚表現語に限らず、ある語を常に、何らかの部分語彙(さらには日本語全体)の一部に位置づけながらその意味・用法を考察するといふ、「部分—全体の意識」が重要と考える。これにより、ある語の変化が、個別的な事象に留まるか(、加えて、その変化の独自性を担保する特徴とは何か)、あるいは、類例のある事象で部分語彙(さらには日本語全体)に普遍的であり得るか、などの議論へと発展させることができるからである。

例えば、本研究では、(「焦げる不快なおいがする」さまを表す形容詞「クサシ」の増加現象に目を向けることにより、個別的な現象に見える形容詞「カウバシ」の意味の限定化が、嗅覚表現語彙において「焦げるにおい」に関する快／不快形容詞の需要が増したという、部分語彙の一傾向であったと

指摘した(本論第一部第一章)。

また、個別に観察しては意味の変化が起こっていないように見えるニホフ・カラル・クンズのような自動詞を比較対照することで、これら三語間に文体的意味を棲み分けていくという変化の起こったことが明確になり、各語の新たな表現価値を見出すことができた(本論第三部・第四部)。

こうした「部分—全体の意識」は、そもそも日本語研究それ自体に求められてしかるべき問題意識ではなからうか。研究者は、それぞれ独立に日本語の個別的な問題を扱いながら、日本語の全体像の解明に携わる一員としての意識を常に持ち、共通の目的に向かい連携していくのが理想である。また、そうした目的意識の下では、自身の研究が日本語のどの部分を明らかにするものであるかという、語彙の観点が不可欠である。如上のことを踏まえれば、本研究はまさに、「部分—全体の意識」から成る、日本語学における語彙研究の重要性を体現する研究として意義を有すると言えよう。ところで、部分語彙の歴史をいくつも積み重ねていくことで、はたして語彙史の構築となり得るのかという指摘がある(柳田征司一九八六)。これに対し、筆者は、部分語彙A・部分語彙B・部分語彙C……の間に何らかの共通性や、重なり、相互影響が認められるのであれば、それらを総合した際に、「語彙史の構築」が可能になると考える。そして、嗅覚表現語彙史

の研究は、部分語彙を積み重ねることの重要性を示す格好の語彙例である。すなわち、感覚表現語彙の部分語彙である嗅覚表現語彙は、到達すべき「全体」が想定しやすだけでなく、次に述べるような、部分と部分との共通性が興味深く観察される点においても、語彙研究の対象として理想的な語彙なのである。

本論を通して明らかにしたように、嗅覚表現語彙と他の感覚表現語彙との間には、いくつかの共通性が見出せるのであった。《発散》の描写においては視覚表現語彙と、《内部感覚》の描写においては味覚・体内感覚表現語彙と、それぞれ類似することを指摘してきた。これは、嗅覚表現語彙が、嗅覚を通して認識した対象（体外の事象）の属性を表すという側面と、嗅覚を通して認識した対象に対する内部の生理的反応（体内の事象）を表すという側面との両面を有することに起因しよう。つまり、感覚表現語彙には、少なくとも次のような二つの側面が指摘でき、嗅覚表現語彙はその二側面を有するがゆえに、複数の感覚表現語彙との共通性が認められるのである。

一、対象（体外の事象）の属性を表す

（例、嗅覚・視覚・聴覚表現語彙）

二、対象に対する内部の生理的反応（体内の事象）を表す

（例、嗅覚・触覚・体内感覚表現語彙）

そして、嗅覚表現語彙のように二側面を有する部分語彙を中心に取上げたからこそ、感覚相互の結びつき（部分語彙同士の関連）を明確に示すことができ、今後取り組むべき感覚表現語彙という「全体」の概観が可能になったのである。

さて、ここまで、嗅覚表現語彙―感覚表現語彙という部分―全体について述べてきたが、想定すべき「全体」は感覚表現語彙にとどまらない。例えば、前章においても述べたように、嗅覚表現形容詞の中には、抽象的な物事を対象とすることで主観的な感情・評価の意味を表すようになるものがいくつかある。その場合に類義語となる語例を次に挙げる。

カンバシ …… 良シ・宜シ・悪シ・悪ワシネなど

クサシ …… 胡散クサシ・キナクサシ・怪シ・疑ハシなど

モノクサシ …… モノウシ・ケダルシ・カヒダルシ（√カッターイ）・

大儀ダ・不精ダなど

水クサシ ……冷タシ・ヨソヨソシ・薄情ダ・冷淡ダ・淡泊ダなど

この他にも、クサシが、雰囲気の描写に使用されることにより、ライヤ・ポイなどとの接尾辞と類義の関係になったり、水クサシが（表面的には嗅覚表現でありながら）味覚表現としての使用を意図するために甘シ・薄シなどと類義の関係になったりする。本研究では、嗅覚表現語の意味変化の考察を通じて、嗅覚表現語彙が様々な意味分野の語彙と部分語彙を構築できること、つまり、今後より大きな全体語彙の研究として発展していく可能性を示すことができたと言える。

第二項 歴史的な研究として

歴史的な観点から語彙を考察することにより、古代語から近現代語へ向かう中で日本語が保存してきた側面、または、放棄してきた側面を総合した記述が可能になる。これは、“日本語の歴史の現在”である現代日本語の語それぞれの存在価値・存在理由を説明することに繋がる。

例えば、本論第二部第四章で触れたように、現代語の観点からクサシの表す意味を記述しようとすると、接尾辞クサシが表す嗅覚的でない意味（例、面倒クサシのクサシ）と、合成形容詞クサシが表す嗅覚的でない

い意味（例、青クサシにおける〈未熟だ〉の意味）とが同次元に扱われることになる。しかし、これを歴史的な観点から捉え直すと、接尾辞クサシの表す嗅覚的でない意味は、〈くの不快なおいがする〉という本来の嗅覚的な意味が抽象化した結果の〈くの不快な雰囲気がする〉であり、比喩的な転義として嗅覚的でない意味を表す合成形容詞クサシとは区別すべきことが分かる。また、現代語では唯一、照レクサイが評価性の後景化した語のように見えるが、歴史を遡れば、旨クサシという語の存在も認められる。そして、評価性の後景化が、《におい》に関わる語（旨クサシ）においても、《雰囲気》に関わる語（照レクサイ）においても同様起こったことが明らかになるのである。

こうした現代語成立の背景を究明する歴史的な研究は、共時的に深く掘り下げた考察を行う現代語研究の成果と関連づけることで、より正確な日本語の姿の記述に繋がると考える。特に、本研究のように上代から近代に至るまでの長い時代を対象とする歴史的研究であれば、一層現代語との繋がりが意識される。

ただし、現代語のように言語資料の豊富でない時代の日本語を、現代語に連続するものとして扱う場合には、残存する当代の言語資料を可能な限り多く調査する必要がある。本研究では、そうした課題も越える網羅的

な調査を行ってきた。また、網羅的に調査する中でも、言語資料のジャンルや文体に配慮し、語の意味の側面である文体的意味についても着目した。

以上を総括するに、本研究は、歴史をより長く・言語資料をより多く調査し、語の意味を多面的に考察したものと呼べる。こうした特色を有する歴史的な本研究は、「より正確な日本語の姿の記述」に寄与するものである。

第三項 他の領域と連携する研究として

本論では、語彙史研究が他の領域の研究とも関わり合っていくことを示唆してきた。最後にそれらをまとめ、他領域と連携する研究としての成果を述べる。

第一に、本研究全体がそうであったように、形容詞や動詞といった品詞を越えて語彙を想定することで、語彙史は文法史と深く関わっていくことを明らかにした。また、本論第三部第六章で扱ったニホフと「名詞＋スル」のように、単純一語のみならず分析的な類義表現にまで視野を広げることとで、語彙史は表現史たり得よう。

第二に、本論第一部第一章におけるカグハシ・カウバシ・カンバシ三語の考察を通して、音韻変化（語形変化）による原形―転化形の別語意識の

確立と、それに伴う語の意味変化という、語彙史と音韻史との密接な関係を改めて検討した。

第三に、本論第二部第五章において水クサイの意味変化を論ずるにあたり、文献調査だけでは十分に得られないデータを言語地理学の成果から援用し、通時的にも共時的にも広がりのある語彙史の記述を可能にした。

第四に、本論第四部第八章で和語表現「風カラル」と漢語「薰風」との関係を取り上げたことで、語種を越えた語彙史の在り方を示した。漢語の日本語における受容の側面のみならず、中国語における史的様相にまで考察を及ぼすことができれば、日中対照研究にも繋がっていこう。

第二節 今後の課題

今後は、前節で確認したような嗅覚表現語彙の共時的な意味の広がりをより巨視的に捉え、部分語彙から全体語彙の記述をさらに進めていかなければならない。特に、ある一つの感覚表現語彙の特徴を他の感覚表現語彙との比較の中で浮かび上がらせること、また、感覚表現語彙全体の変化の傾向やその古代性・近代性について検討することが大きな課題となる。その中で、嗅覚表現語彙の史的変遷についても再考していかなばならない。

また、そうした意味分野語彙史の研究を進めるとともに、「総体として語

彙史を説明する原理を探究する必要」もある(柳田征司一九八六・四七頁)。
そうした理論の構築も試みながら、研究を進めるべき意味分野語彙の記述
を丁寧に進め、日本語の語彙史の解明に努めたい。

『日本国語大辞典(第二版)』「かいだるい」項では、「かいなだるい(腕
弛)の変化した語」とあるが、「かいだるい」項の初出例はカイダルの
それよりも後の年代のものである。

既発表論文・口頭発表と本稿との関係

次に挙げる既発表論文・口頭発表の内容は、博士論文としてまとめるにあたり大幅な加筆・修正を行った。

第二章

・成句「梅檀は二葉より」述語部分の変遷―カウバシからカンバシへ―
『早稲田大学院教育学研究科紀要』二〇・一、二〇一二年【論文】

序論

書き下ろし

第二部

第三章

・「モノクサシの語史―クサシとの関連から―」国語語彙史研究会、二〇一三年【口頭発表】

本論

第一部

第一章

第四章

・「嗅覚表現形容詞「カグハシ」「カウバシ」「カンバシ」の意味変化」早稲田大学日本語学会、二〇〇九年【口頭発表】

・「嗅覚表現形容詞「クサシ」「ククサシ」―接尾辞「クサシ」の発達を中心に―」『国語語彙史の研究 第三集』和泉書院、二〇一二年【論文】

・「嗅覚表現形容詞「カウバシ」の意味変化―「焦げるにおい」を表すようになるまで―」『早稲田大学院教育学研究科紀要』一八・一、二〇一〇年【論文】

・「接尾辞・クサシ再考―古代・近代の使用状況から―」『早稲田大学院教育学研究科紀要』二一・二、二〇一三年【論文】

・「嗅覚表現形容詞「カグハシ」「カウバシ」「カンバシ」―近世以降における意味・用法の分担過程―」『国文学研究』一六二、二〇一〇年【論文】

二〇一三年発表の論文は、二〇一二年発表の論文において不十分であった先行研究の検討を踏まえた上で再考を試みたものである。特に、先行研究の中でも玉村千恵子（一九八八）は、共時的な立場からクサイの意味

と上接成分との関連についていち早く注目したものであり、接尾辞研究において重要な位置を占める。そうした先行研究を十分に取り入れられなかったことを深く反省するとともに、玉村氏に対して心よりお詫びを申し上げる。

第五章

・「水クサイの語史―水ツポイとの共存過程にみる意味の分担―」早稲田大学国語教育学会、二〇一二年【口頭発表】

・「水クサイの意味変化―水ツポイとの共存過程から考える―」『日本語の研究』一〇・二二（『国語学』通巻二五七号）、二〇一四年予定【論文】

第三部

第六章

・「嗅覚表現自動詞「ニホフ」の意味の下降について―「カヲル」「クンズ」

「名詞＋する」との関連から―」日本語学会、二〇一一年【口頭発表】

・「嗅覚表現自動詞ニホフの意味の下降について―「名詞＋スル」との関連から―」『国文学研究』一七〇、二〇一三年【論文】

第七章

・「嗅覚表現名詞カ・ニホヒの史的変遷―その交替に着目して―」『早稲田日本語研究』二二、二〇一二年【論文】

第四部

第八章

・「風カヲル考―漢語・薰風との関連から―」早稲田大学日本語学会、二〇一二年【口頭発表】

・「風カヲル」考―漢語「薰風」との関連から―（小林賢次・小林千草編『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版）二〇一四年

第九章

書き下ろし

結論

書き下ろし

参考文献

治書院

青木 孝（一九五七）「色葉字類抄「辞字」考」『青山学院女子短期大学紀要』八

浅野敏彦（一九八九）「語義の変化」『講座日本語と日本語教育 六 日本語の語彙・意味（上）』明治書院

要』八

麻原美子（一九八六）「軍記物語における成句—ことわざ・格言類—の位相（一）」『国文目白』二五

青木秀虎（一九五一）「速記術から見た大阪弁」『大阪弁』三

東 聖子（二〇〇三）『蕉風俳諧における〈季語・季題〉の研究』明治書院

青木博史（二〇〇七）「近代語における述部の構造変化と文法化」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

安部清哉（一九八五 a）「温度形容語彙の歴史—意味構造から見た語彙史の試み—」『文芸研究』一〇八

赤羽 淑（一九五八）「源氏物語における呼名の象徴的意義—「光」「匂」「薰」—」『文芸研究』二八

安部清哉（一九八五 b）「国語語彙論の方法について」『文芸研究』一一〇

秋本守英（一九七六）「接尾語「さ」構文の文章史的考察」『王朝』九

安部清哉（二〇〇九 a）「語彙の特性から見る語彙史研究の諸相—「語彙的カテゴリー」「部分語彙」「反現象」「中和」—」『人文』八

秋本守英（一九八三）「接尾語「さ」の構文的機能の変遷」『表現研究』三八

安部清哉（二〇〇九 b）「語彙史研究と語彙的カテゴリー—その多様性と体系化」『シリーズ日本語史 二 語彙史』岩波書店

朝倉 尚（一九八五）「禅林の文学—中世の漢詩文—」『中世文学研究の三十年』中世文学会

安部清哉（二〇〇九 c）「意味から見た語彙史—「パーツ化」「名詞優位化」—」『シリーズ日本語史 二 語彙史』岩波書店

浅田秀子（一九九七）「形容詞の意味の分析—ジャンル別・対象者別・ニュアンス別の分析例を中心に—」『国語論究 六 近代語の研究』明治書院

新井栄蔵（一九七六）「万葉集季節観攷—漢語〈立春〉と和語〈ハルタツ〉—」『万葉集研究』五

書院

新井映子（一九九〇）「しぐれ」考」『玉藻』二五

浅田秀子（一九九九）「尊敬と侮蔑の「形容詞」」『語彙・語法の新研究』明治書院

新井映子（一九九〇）「しぐれ」考」『玉藻』二五

浅田秀子（一九九九）「尊敬と侮蔑の「形容詞」」『語彙・語法の新研究』明治書院

新井映子（一九九〇）「しぐれ」考」『玉藻』二五

浅田秀子（一九九九）「尊敬と侮蔑の「形容詞」」『語彙・語法の新研究』明治書院

新井映子（一九九〇）「しぐれ」考」『玉藻』二五

浅田秀子（一九九九）「尊敬と侮蔑の「形容詞」」『語彙・語法の新研究』明治書院

新井映子（一九九〇）「しぐれ」考」『玉藻』二五

書院

新井映子（一九九〇）「しぐれ」考」『玉藻』二五

浅田秀子（一九九九）「尊敬と侮蔑の「形容詞」」『語彙・語法の新研究』明治書院

新井映子（一九九〇）「しぐれ」考」『玉藻』二五

荒木良雄(一九六三)「連歌界における紹巴と木食上人応其の地位―特に『至宝抄』と『無言抄』を中心にして―」『甲南大学文学会論集』二二

池上嘉彦(一九七五)『意味論』大修館書店

池田 温編(二〇〇六)『日本古代史を学ぶための漢文入門』平文社(Ⅲ)「日

本古代史研究と漢籍」

池田亀鑑(一九六四)「服飾美の表現」『平安朝の生活と文学』角川文庫

石井正彦(一九九二)「造語力をはかるために」『日本語学』一一・五

石井正彦(一九九九)「阪倉篤義の『語彙成論』」『語彙・語法の新研究』明

治書院

井島正博(二〇〇六)「述語と格の構造」『日本語学論集』二

泉井久之助(一九三五)「語彙の研究」『国語科学講座 三 国語学』一 明

治書院

出雲朝子(一九八三)「仰ぐ」「倒る」などの語形について」『馬淵和夫博

士退官記念国語学論集』大修館書店

市井外喜子(一九八四)「塩味がうすいについて」『大東文化大学紀要 人

文学学』二二

稲田利徳(一九六六)「正徹の共感覚的表現歌の系譜」『国語国文』三五・

稲田利徳(一九七一)「芭蕉発句の共感覚的表現の分析」『文学研究』三三

稲田利徳(一九七五)「共感覚的表現歌の発生と展開―上―」『岡山大学教

育学部研究集録』四三

稲田利徳(一九七六)「共感覚的表現歌の発生と展開―下―」『岡山大学教

育学部研究集録』四四

乾 善彦(二〇〇一)「語彙史の時代区分・文字史の時代区分」『国語語彙

史の研究』二〇

大塚 旦(一九五四)「匂ふ」「匂ひやか」「花やか」考」『平安文学研究』

五〇

井上文子(二〇〇〇)「味覚を表す方言の全国分布」『日本語学』一九・七

伊原 昭(一九七六)「にほふ」―京極派和歌の美的世界―」『語文』四一

伊原 昭(一九六九a)「にほふ」攷」『文学・語学』五三

伊原 昭(一九六九b)「にほふ」と「うつろふ」と―大伴家持における

―」『国語と国文学』四六

芋阪良二(一九六九)「嗅覚現象」『講座心理学 三 感覚』東京大学出版会

井本農一(一九八一)『季語の研究』古川書房

岩崎真梨子(二〇〇八)「形容詞性接尾辞「―ぱい」の展開」『岡大國文論

岩崎真梨子(二〇一一)「「ぼい」の意味用法と展開」『岡山大学大学院社

七八・六

会文化科学研究科紀要』三一

大野久枝(一九八六)「定家の嗅覚的表現のある歌の特色―にほふとかをる

岩津資雄(一九六九)「歌論史 中世」『和歌文学講座 二 和歌史・歌論

―』『国学院大学大学院紀要』一八

史』桜楓社

大橋紀子(一九九〇)「近世における訓の関係―すい・いき・つう・しやれ

岩淵悦太郎(一九五八)「言語生活の歴史」『現代国語学 Ⅲ ことばの変

の場合―』『近代語研究』八

化』筑摩書房

大庭 脩(一九九七)『漢籍輸入の文化史―聖徳太子から吉宗へ―』研文出

岩淵悦太郎(一九六三)「雅語と俗語―現代の言葉(一一二)」『群像』一八・

版

一一

大堀壽夫(二〇〇五)「日本語の文法化研究にあたって―概観と理論的課題

岩淵悦太郎(一九七四)『語源散策』毎日新聞社

―』『日本語の研究』一・三

宇田 久(一九三七)『季の問題』三省堂

岡部嘉幸(二〇〇四)「近世江戸語におけるラシイについて」『近代語研究』

浦部重雄(一九八五)「もう一つの「匂ひ」」『解釈 国語・国文』三一・五

一一

漆谷広樹(二〇一〇)『接尾辞「げ」と助動詞「そうだ」の通時的研究』ひ

岡部嘉幸(二〇一一)「江戸語の推定表現」『日本語文法の歴史と変化』く

つじ書房

ろしお出版

遠藤邦基(二〇一〇)『国語表記史と解釈音韻論』和泉書院(第一章「平安

尾崎左永子(一九八七)『源氏の薫り』求龍堂

仮名文献の表記)

尾上圭介(一九九九)「文の構造と“主観的”意味―日本語の文の主観性を

遠藤好英(一九八六)「前田富祺著『国語語彙史研究』」『国文学 解釈と教

めぐって・その2―』『言語』二八・一(尾上二〇〇一所収)

材の研究』三一・一一一

尾上圭介(二〇〇一)『文法と意味I』くろしお出版

大野 透(一九七七)「匂―漢字の変体としての和字―」『国学院雑誌』

小野正弘(一九八三)「しあわせ(仕合せ)」『講座日本語の語彙 一〇 語

小野正弘(一九八四)「因果」と「果報」の語史―中立的意味のマイナス

化とプラス化―『国語学研究』二四

小野正弘(一九八五)「天気」の語史―中立的意味のプラス化に言及して

―『国文学研究』二五

小野正弘(一九八七)「感情的意味」について『国文鶴見』二二一

小野正弘(一九九一)「室町末期から江戸初期における『様態・形態』を表

す語彙―「恰好」の中立的意味の成立を考えるために―『日本近代

語研究』一

小野正弘(一九九九)「意味本質観」と「意味情報観」―日本語の意味変

化を考えるために―『鶴見大学紀要(国語・国文学)』三六

小野正弘(二〇〇〇)「漢語「恰好」の受容とその変容―中立的意味とプラ

スの意味の共存―『伝統と変容 日本 の 文 芸 ・ 言 語 ・ 思 想』ペリカ

ん社

小野正弘(二〇〇一a)「意味変化の形態的指標となるもの」『国語語彙史

の研究』二〇

小野正弘(二〇〇一b)「通時態主導による「語彙」「語彙史」「国語学研

究』四〇

小野正弘(二〇〇五)「同語か、別語か?―「無念」の語史を通して―」『日

本近代語研究』四

小原真子(二〇一〇)「接尾辞「―ぼい」について」『島大言語文化』二九

沢瀉久孝(一九四三)『万葉佳品抄』全国書房

春日政治(一九五六)『古訓点の研究』風間書房

片桐洋一(一九八三)『日葡辞書』の歌語―その性格と時代性―『国語語

彙史の研究』四

加藤定彦(一九九一)「コトワザの歴史―近世を中心に―」『日本語学』

一〇・二

加藤正信(一九六六)「日本語地図」から―〈砂糖が〉あまい・〈汁の塩

味が〉うすい―『言語生活』一七

門倉正美(一九九六)「くくさい」『あいまい語辞典』東京堂出版

金子金治郎(一九六五)『菟玖波集の研究』風間書房

金田章宏(一九九三)「動詞と形容詞をつなぐもの」『国文学 解釈と鑑賞』

五八・一

金田孝子(一九七八)「にはふ」―その語義の変遷―『国語国文薩摩路』

二二

金井清光(二〇〇五)『一遍聖絵新考』岩田書院(『一遍聖絵』に見る草履・

草鞋と被差別民の草履作り」

金澤裕之(一九九二)「明治期大阪語資料としての落語速記本とSPレコー

ド―指定表現を中心に―」『国語学』一六七

樺島忠夫(一九八一)『日本語はどう変わるか』岩波書店

神谷かをる(一九八六)「古今集における「白」「初」「四季」の語彙

―詩語から歌語へ―」『光華女子大学文学部紀要』二四(神谷一九九

九所収)

神谷かをる(一九九九)『古今和歌集用語の語彙的研究』和泉書院

亀井 孝(一九五四)「国語の変遷と歴史(要旨)」『国語学』一七

亀井 孝(一九五六)「ガ行のかな」『国語と国文学』三三・九(亀井一

九八四所収)

亀井 孝(一九五九)「意味の変化と表現価値」『国語学』三七

亀井 孝(一九七一)「言語の歴史」『言語の系統と歴史』岩波書店

亀井 孝(一九八四)『日本語のすがたとこころ 一』吉川弘文館

亀井 孝・河野六郎・千野栄一編(一九九六)『言語学大辞典 六 術語編』

三省堂

亀井 孝他編(一九六六)『日本語の歴史 別巻 言語史研究入門』平凡社

亀井裕子(二〇〇四)「近世上方語における接尾語「ラシイ」について」『国

学院大学大学院紀要(文学研究科)』三五

亀山泰紀(一九七二)「風―素材史研究―」『研究紀要』二〇

河内 章(一九八五)「万葉集「にほふ」の語意と用法とについて」『愛知

大学国文学』二四・二五

河上誓作編著(一九九六)『認知言語学の基礎』研究社(第五章「史的研究

―文法化・意味変化―)

川上富吉(一九六五)「にほふ美意識考―大伴家持小論―」『中央大学国文』

八

川口明美(一九八五)「らし」「らしい」「らしさ」の系譜」『立正大学国語

国文』二一

川端善明(一九五八)「形容詞文」『国語国文』二七・一一

川端善明(一九七六)「用言」『岩波講座日本語 六 文法一』岩波書店

川端善明(一九七九)『活用の研究Ⅱ』大修館書店

川端善明(一九八三)「日本文法提要三 文の構造と種類―形容詞文―」

『日本語学』二・五

神島武彦(一九七三)「広島市地域方言における「きなくさい」という語の

分布について―語詞の分布と地域生活―」『広島大学方言研究会会報』

二〇

北住敏夫（一九四一）『万葉集』における「にほひ」の美『文学』九・

のインタフェース』岩波書店

一〇（北住一九五〇所収）

工藤 浩（一九八二）「叙述副詞の意味と機能―その記述方法をもとめて―」

北住敏夫（一九五〇）『万葉の世界』角川書店

『国立国語研究所報告 七一 研究報告集三』秀英出版

北原保雄（一九八一）『日本語の世界 六 日本語の文法』中央公論社（第

工藤力男（二〇一〇）「におひ彷徨―日本語雑記・二―」『成城文藝』

九章「客体的表現と主体的表現」

二一〇

北原保雄（二〇一〇）『日本語の形容詞』大修館書店

国広哲弥（一九六七）『構造論的意味論』三省堂

木村 晟（二〇〇二）『中世辞書の基礎的研究』汲古書院

国広哲弥（一九八〇）「意味の構造と概念の世界」『講座言語 一 言語の

木村 晟（二〇〇七）『塵芥』の主要典拠と編纂意図について『日本語辞

構造』大修館書店

書研究 第五集』港の人

国広哲弥（一九八二）『意味論の方法』大修館書店

京都大学国文学研究室中国文学研究室編（二〇〇六）『京都大学蔵実隆自筆

国広哲弥（一九九七）『理想の国語辞典』大修館書店

和漢聯句訳注』臨川書店（長谷川千尋氏執筆「和漢聯句略史」）

国広哲弥（二〇〇二）「類義語・対義語の構造」『現代日本語講座 四 語

京都大学国文学研究室編（一九七二）『清原宣賢自筆伊路波分類体辞書 塵

彙』明治書院

芥』臨川書店（安田章氏執筆「塵芥開題」）

小池清治・河原修一（二〇〇五）『シリーズ〈日本語探究法〉四 語彙探究

京都大学文学部国語学国文学研究室編（一九六二）『慶長三年耶蘇会板落葉

法』朝倉書店（小池氏執筆「憂し」という形容詞はなぜ消滅したの

集』京都大学国文学会（土井忠生氏執筆「解題」）

か？」

京楽真帆子（二〇〇八）「平安京貴族文化とにおひ」『薫りの源氏物語』輸

小泉 保（一九八九a）「品詞分類としての動詞―「動詞」規定のむずかし

林書房

さ―『言語』一八・九

金水敏・乾善彦・渋谷勝己（二〇〇八）『シリーズ日本語史 四 日本語史

小泉 保（一九八九b）「五感の動詞」『言語』一八・一一

小出慶一(二〇〇〇)「形容詞の意味の側面―「まる」と「み」のつ

く形容詞―」『群馬県立女子大学国文学紀要』二〇

小出慶一(二〇〇五a)「知覚動詞の語彙構造について」『群馬県立女子大

学国文学研究』二五

小出慶一(二〇〇五b)「接辞「ぼい」の用法の広がり―「雪が降るっぼ

い」という表現はどのように成立したか―」『群馬県立女子大学紀要』

二六

黄 其正(一九九八)「認知過程からみた接尾辞「らしい」と「っぽい」

『広島大学日本語教育学科紀要』八(黄一九九八所収)

黄 其正(二〇〇四)『現代日本語の接尾辞研究』淡水社

国立国語研究所(一九六四)『国立国語研究所資料集 六 分類語彙表』秀

英出版

小島聡子(一九九六)「らしい」について」『山口秋穂教授還暦記念国語学

論集』明治書院

小島聡子(二〇〇三)「接尾語「ぼい」の変化」『明海日本語』八

小島憲之(一九七六)「漢語享受の問題に関して―「万葉語」の場合―」『国

語国文(高野山大学)』三

小島憲之(一九七七a)「漢語表現の受容―一、二の漢語を通して―」『国

文学論叢』二二

小島憲之(一九七七b)「漢語享受の一面―嵯峨御製を中心として―」『龍

谷大学論集』四一〇

小島憲之(一九九〇)「漢語の摂取―漢語「立春・立秋」と「春立つ・秋立

つ」など―」『万葉』一三五

小林賢次(一九八八)「憎まれ子世にはばかり―ハバカル・ハビコル・ハダ

カルの交渉―」『日本語研究』一〇

小林賢次(二〇〇八)『狂言台本とその言語事象の研究』ひつじ書房

小林賢次(二〇一一)「中世語資料としての『一遍上人語録』」『他阿上人法

語』―モノクサ・サバクル・イロフなど―」『一遍教学の総合的研究

報告書』

小林賢章(一九九一)「漢語サ変動詞の上二段型への変化とその背景」『同

志社女子大学学術研究年報』四二・四

小林祥次郎(一九八六)「季語の歴史」『日本語学』五・一

小林 隆(一九八四)「変化の要因としての語彙体系」『国語学研究』二四

小林 隆(一九八五)「言語地図における意味の問題―中国山地と瀬戸内海

での調査から―」『国立国語研究所報告 八四 方言の諸相』『日本

言語地図』検証調査報告』三省堂

小林 隆(一九八六)「文献国語史と言語地理学の対照による語史構成の方
法」『国語論究 一 語彙の研究』明治書院

小林 隆(二〇一〇)「日本語方言の形成過程と方言接触―東日本方言にお
ける「受け手の論理」―」『日本語学』二九・一四

小林芳規(一九七八)「漢字とその訓との対応及び変遷についての一考察」
『国語学』一一二

小松登美(一九七六)「中古仮名文学に於ける嗅覚表現―名詞を中心に―」
『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社

こまつひでお(一九七六)「句字考」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』
表現社(小松一九九八所収)

小松英雄(一九七三)『国語史学基礎論』笠間書院

小松英雄(一九八一)『日本語の世界 七 日本語の音韻』中央公論社

小松英雄(一九九八)『日本語書記史原論』笠間書院

小柳智一(二〇一二)「被覆形・情態言・形状言・情態性語基」『日本語文
法史研究』一 ひつじ書房

今野真二(二〇一三)「和訓」を「翻訳」としてとらえる」『国語語彙史の
研究 第三二集』和泉書院

斎藤倫明(一九九五)「語構成と意味―合形成容詞「くさい」を例として

考える―」『国文学 解釈と鑑賞』六〇・一

斎藤義光(一九五七)「紹巴連歌の特質―貞門俳諧の先蹤として―」『国語
と国文学』三四・九

佐伯昭市(一九七六)「芭蕉・発句の世界―嗅覚表現―」『国文学解釈と鑑
賞』四一・三

阪倉篤義(一九六一)「接尾語の位置」『国語国文』三五・五

阪倉篤義(一九六六)『語構成の研究』角川書店

阪倉篤義(一九七一)「語彙史の方法」『講座国語史 三 語彙史』大修館
書店

阪倉篤義(一九七四)『改稿日本文法の話』教育出版

阪倉篤義(一九七五)『文章と表現』角川書店(第四章「用字と語義」)

阪倉篤義(一九七七)「国語史の時代区分」『講座国語史 六 国語史総論』
大修館書店

阪倉篤義(一九八五)「歌ことばの一面」『文学・語学』一〇五

阪倉篤義(一九八六)「接辞とは」『日本語学』五・三

坂詰力治(一九八〇)「和漢混淆文におけるサ変動詞についての一考察」『文
学論藻』五五

坂詰力治(一九八二)「和漢混淆文としての『沙石集』について―漢語サ変

動詞からみた和漢の混淆現象―『国語学研究』二二一

坂詰力治(二〇一一)「抽象的表現から具体的表現へ―「もの」形容詞を通

して見た一考察―」『言語変化の分析と理論』おうふう

坂橋隆司(一九七〇)「にほひ」と「かをり」と―その同義部分の起点を

求めて―」『国学院大学栃木短期大学紀要』五

作田啓一(一九六七)『恥の文化再考』筑摩書房(恥と孤独―恥の文化再

考)

佐久間鼎(一九四一)『日本語の特質』育英書院

桜井光昭(一九六二)「今昔物語集の漢語サ変」『国語学』四八

迫野虔徳(一九八七)「中世的撥音」『国語国文』五六・七

佐々木 俊・牧野泰子(一九七八)「院政鎌倉時代の六文献に於ける漢語サ

変動詞語彙の比較研究―特有語彙と共有語彙の観点から―」『鎌倉時

代語研究』一

笹原宏之(二〇〇七)『国字の位相と展開』三省堂

佐竹昭広(一九五六)「語彙の構造と思考の形態」『国語学』二七(佐竹二

〇〇〇所収)

佐竹昭広(一九六四)「見ゆ」の世界」『国語国文』三三・九(佐竹二〇〇

〇所収)

佐竹昭広(一九六七)『下剋上の文学』筑摩書房(怠惰と抵抗―物くさ太

郎―)(佐竹二〇〇九所収)

佐竹昭広(一九六八)「意味変化について」『言語生活』二〇四(佐竹二〇

〇〇所収)

佐竹昭広(一九七五)「花ぞ昔の香にほひける」『東京新聞』一九七五年

四月五日(一〇月一五日掲載)(佐竹一九八六所収)

佐竹昭広(一九七七)「意味の変遷」『岩波講座日本語 九 語彙と意味』

(佐竹二〇〇〇所収)

佐竹昭広(一九八六)『古語雑談』岩波書店

佐竹昭広(二〇〇〇)『萬葉集抜書』岩波書店

佐竹昭広(二〇〇九)『佐竹昭広集 第四卷 閑居と乱世』岩波書店

佐竹秀雄(二〇〇九)「日本語学とことわざ研究」『国文学 解釈と鑑賞』

七四・一二

佐藤喜代治(一九四九)「言語過程説についての疑問」『国語学』二一

佐藤喜代治(一九五八)「文章の変遷」『現代国語学 III ことばの変化』

筑摩書房

佐藤喜代治(一九六三)「語彙史の問題」『国語学』五三(佐藤一九七一所

収)

佐藤喜代治（一九六七）「和歌と言語」『和歌の世界―その周辺と展開―』

桜楓社

佐藤喜代治（一九七一）『国語語彙の歴史的研究』明治書院

佐藤武義（一九六三）「中古の物語における漢語サ変動詞」『国語学研究』

三

佐藤武義（一九七三a）「中世における類義語に関する一考察―美人の表現

を中心に―」『文芸研究』七二（佐藤一九八四所収）

佐藤武義（一九七三b）「今昔物語集の形容詞の研究（一）」『宮城教育大学紀

要』七（佐藤一九八四所収）

佐藤武義（一九七四）「今昔物語集の形容詞の研究（二）」『宮城教育大学紀要』

八（佐藤一九八四所収）

佐藤武義（一九七五）「翻訳語としての万葉語の考察―「白雲」を中心にし

て―」『解釈』一一一

佐藤武義（一九八四）『今昔物語集の語彙と語法』明治書院（第三章「今昔

物語集の形容詞語彙」）

佐藤武義（一九九六a）「歌語論の展開と現状」『国際文化研究科論集』四

佐藤武義（一九九六b）「歌語研究の方法」『国際文化研究』三

佐藤武義（一九九九）「歌語「風立つ」考」『語彙・語法の新研究』明治書

院

佐藤武義（二〇〇二）「語と語彙構造」『現代日本語講座 四 語彙』明治

書院

佐藤武義（二〇〇三）『日本語の語源』明治書院

佐藤武義（二〇〇五）「古代歌語源流考―「青」を中心に―」『日本語学の

蓄積と展望』明治書院

佐藤武義（二〇〇六）「歌語「故郷」源流考」『日本語辞書学の構築』おう

ふう

佐藤武義編（一九九五）『概説日本語の歴史』朝倉書店

佐藤 亨（一九九九）『国語語彙の史的研究』おうふう

佐藤宣男（一九八三）「かぐ（嗅ぐ）」『講座日本語の語彙 九 語誌一』明

治書院

山王丸有紀（二〇一一）「もの―」小考―「ものくるほし」の「もの」と

は何か―」『国語語彙史の研究 第三〇集』和泉書院

信太知子（一九八四）「アガルとノボル―史的変遷からみた類義語―」『国

語彙史の研究 第五集』和泉書院

信太知子（一九八九）「かはいらしい」考―近世における「かはいげ」「か

はいさう」との相関―」『国語語彙史の研究 第一〇集』和泉書院

篠原俊吾 (二〇〇八) 「相互作用と形容詞」『ことばのダイナミズム』くろしお出版

柴生田稔 (一九五九) 「かをる」と「にほふ」『国語と国文学』三 (柴生田 一九八六所収)

柴生田稔 (一九八六) 『万葉の世界』岩波書店

柴田省三 (一九七五) 『英語学大系 七 語彙論』大修館書店

柴田 武 (一九七八) 『方言の世界―ことばの生まれるところ―』平凡社

柴田 武 (一九八八) 『語彙論の方法』三省堂

島田泰子 (一九九五) 「接尾辞タラシイの成立」『国語学』一八〇

清水康行 (一九九八) 「速記は「言語を直写」し得たか―若林珪蔵『速記法

要訣』に見る速記符号の表語性―」『文学』九・一

寿岳章子 (一九七〇) 「語彙と文体」『季刊 文学・語学』五七

寿岳章子 (一九八三) 「形容詞の語彙的変遷―中古から中世へ―」『室町時

代語の表現』清文堂出版

朱 捷 (一九九六) 「「にほひ」にみる日本人の嗅覚」『日本研究 国際日本

文化研究センター紀要』一五

朱 捷 (一九九八 a) 「匂」という字の由来及びそこからみる日本人の嗅

覚と中国人の聴覚」『同志社女子大学日本語日本文学』一〇

朱 捷 (一九九八 b) 「再び「匂」という字の由来について」『同志社女子
大学学術研究年報』四九・四

朱 捷 (二〇〇一) 『においとひびき―日本と中国の美意識をたずねて―』
白水社

新谷秀夫 (二〇〇四) 「にほひ」を嗅いだ家持」『高岡市万葉歴史館論集 七
色の万葉集』

新村 出 (一九五〇) 「語源をさぐる 一」(新村出 (一九七二) 『新村出全
集 四』筑摩書房所収)

新屋映子 (一九八九) 「“文末名詞”について」『国語学』一五九

新屋映子 (二〇〇九) 「形容詞述語と名詞述語―その近くて遠い関係―」『国

文学 解釈と鑑賞』七四・七

鈴木丹士郎 (一九六三) 「形容詞「―シシ」について」『国語研究』三

鈴木丹士郎 (一九九二) 「動詞の問題点」『品詞別日本文法講座 三 動詞』

明治書院

鈴木丹士郎 (一九八四) 「動詞とは何か」『研究資料日本文法 二 用言編

一 動詞』明治書院

鈴木英明 (一九八五) 「明治期以降のラシイの変貌」『国語国文』五七・三

鈴木英夫 (一九九〇) 「接辞、接頭語・接尾語」『日本語学』九・一〇

関井光男（一九九四）「笑い／含羞」『別冊国文学・太宰治事典』学燈社

染谷裕子（一九九七）「御伽草子の美人描写―古来の美人にたとえる表現―」

『調布日本文化』七（染谷二〇〇八所収）

染谷裕子（一九九八）「御伽草子の美人描写（二）―「光る」「輝く」「玉」

をめぐって―」『調布日本文化』八（染谷二〇〇八所収）

染谷裕子（一九九九）「花鳥風月を以てする美人描写―御伽草子の場合―」『調

布日本文化』九（染谷二〇〇八所収）

染谷裕子（二〇〇八）『お伽草子の国語学研究』清文堂出版

高嶋由布子（二〇〇八）「五感の動詞の意味拡張―知覚者の意味役割の二重

性とメタファーの観点から―」『言葉と認知のメカニズム―山梨正明

教授還暦記念論文集―』ひつじ書房

高橋和夫（一九七八）『日本文学と気象』中央公論社

高橋庸一郎（二〇〇二）『匂いの文化史的研究―日本と中国の文学にみる―』

和泉書院

高山善行（二〇〇三）「極限のとりたての歴史的变化」『日本語のとりたて

―現代語と歴史的变化・地理的変異―』くろしお出版

滝沢貞夫（一九六九）「和歌の用語」『和歌文学講座 第一巻 和歌の本質

と表現』桜楓社

滝沢貞夫（一九八七）「古今和歌集の歌語」『古今和歌集―日本の古典文学

四―』有精堂

龍本那津子（二〇〇五）「にほふ」考―『万葉集』における「にほふ」の

意味用法をめぐって―』『萬葉語文研究 一』和泉書院

龍本那津子（二〇一〇a）「橘のほへる香」―卷十七・三九一六番歌を

めぐる―考察―』『叙説』三七

龍本那津子（二〇一〇b）『懐風藻』における嗅覚表現―『万葉集』との

比較を通して―』『人間文化研究科年報』二五

竹尾正子（一九七四）『人麻呂用字考』桜楓社

竹島奈歩（二〇一〇）「接尾辞「ぽい」と共起する名詞について―新聞記事

の見出しを例に―』『日本文化研究』八

武智雅一（一九五七）「万葉集の「にほふ」について」『愛媛国文研究』六

田島毓堂（一九九八）「語彙論のための用語」『名古屋大学文学部研究論集

（文学）』四四（田島一九九九b所収）

田島毓堂（一九九九a）「なぜ比較語彙研究か―なぜ語彙研究は未開だった

か、なぜ必要か―』『名古屋大学文学部研究論集（文学）』四五（田島

一九九九b所収）

田島毓堂（一九九九b）『比較語彙研究序説』笠間書院

多田一臣(二〇〇四)「古代人の感覚ニホフとカから」『文学』五・五

『月刊日本語』一・六

舘谷笑子(一九九七)「接尾語タシの成立過程―タシ型形容詞の考察から―」

田村専一郎(一九五四)「にほふ考」『文学論輯』二

『語文』六九

舘谷笑子(一九九九)「接尾語コシの成立過程」『待兼山論叢』三三(文学)

丹保健一(一九九〇)「五感語彙の多義性について―多義の意味的広がりをめぐる―」『金沢大学語学・文学研究』一九

田中章夫(一九七八)『国語語彙論』明治書院

千々和到(一九八七)「仕草と作法―死と往生をめぐる―」『日本の社会史』八 生活感覚と社会』岩波書店

田中章夫(一九八二)「日本語の語彙の構造」『講座日本語の語彙』二 日本語の語彙の特色』明治書院(田中二〇〇二所収)

趙青(二〇〇五)「梅が香―共感覚的表現の視点から―」『表現研究』八四

田中章夫(一九九九)『日本語の位相と位相差』明治書院

田中章夫(二〇〇二)『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版

陳世娟(二〇一一)「匂い」と「香り」の意味用法―評価性とそのコロケーションに着目して―」『言語変化の分析と理論』おうふう

田中牧郎(一九八八)「仮名交じり文 三 『今昔物語集』」『漢字講座』五

古代の漢字とことば』明治書院

塚原鉄雄(一九六四)「暖かい」と「暖かだ」『口語文法講座』三 ゆれ

田中牧郎(二〇〇〇)「統語的方法に基づく語の意味研究―万葉集・八代集

ている文法』明治書院

のカナシの分析を例として―」『日本語学』一九・一一

塚原鉄雄(二〇〇五)「清少納言の嗅覚」『枕草子研究』新典社

谷川 渥(二〇〇四)「花の彷徨―カントからユイスマンスまで―」『文学』

塚本瑞代(一九九五a)「にほひ」について その一―感覚の相互性―」

五・五

『群馬県立女子大学紀要』五

玉村竹二(一九六八)「禅と五山文学」『講座禅 第五卷 禅と文化』筑摩

塚本瑞代(一九九五b)「にほひ」について その二―襲色目における―

書房

『群馬県立女子大学紀要』八

玉村千恵子(一九八八)「嗅覚と非嗅覚―合成語―くさい」をめぐる―」

築島 裕(一九五八)「国語の語彙の変遷」『国語教育のための国語講座』四

朝倉書店

築島 裕（一九七〇）「和訓の伝流」『国語学』八二一

築島 裕（一九七四）「鎌倉時代の言語体系について」『国語と国文学』

五一・四

辻 勝美（一九九八）「歌語の研究史―現状と展望―」『歌ことばの歴史』

笠間書院

土橋 寛（一九九〇）『日本語に探る古代信仰』中央公論社

寺井由美子（一九九三）『源氏物語』における呼び名の効果―光る・薫る・

匂ふ―』『国文学ノート』三〇

寺村秀夫（一九八二）『日本語のシンタクスと意味 一』くろしお出版

天気検定編集委員会編（二〇〇八）『なるほど！お天気学 天気検定公式テ

キスト』毎日新聞社

時枝誠記（一九四一）『国語学原論』岩波書店（第二篇第三章文法論）

時枝誠記（一九三六）「語の意味の体系的組織は可能であるか―此の問題の

由来とその解決に必要な準備的調査―」『日本文学研究』二一

時枝誠記（一九五九）『古典解釈のための日本文法（増訂版）』至文堂

徳川宗賢編（一九七九）『日本の方言地図』中央公論社

豊田知加子（一九七四）「平安朝文学における語彙について―「もの」複合

形容詞について―」『大谷女子大國文』四

中井幸比古（二〇〇二）『京都府方言辞典』和泉書院

長尾 勇（一九八三）「味覚用語の変遷と分布」『言語生活』三八二

長尾 勇（一九八二）「五味考―味覚用語の変遷と分布―」『語文』五五

中川正美（一九九八）「散文表現と歌ことば」『国語論究 第七集 中古語

の研究』明治書院

中島由美（一九八三）「くらしイ・くっポイ・くくサイ」『意味分析』

永積安明（一九八七）「和漢混淆文の成立」『日本文学講座 二 文学史の

諸問題』大修館書店

永田友市（一九九三）「接尾語「さ」の意味」『表現研究』五七

長友 武（一九七六）「にほふ」という言葉の美意識」『琉球大学教育学部

紀要』一九・一一

長沼英二（二〇〇四）「嗅覚表現と恋部和歌―選定方針の変化と『源氏物語』

の影響―」『表現研究』三〇

長沼英二（二〇〇七）「漢語訓読と和歌表現―〈碧空〉は、なぜ「あをきそ

ら」でないのか―」『表現研究』八六

奈倉哲三（二〇〇九）「戊辰戦争下「見立ていろはたとへ」の概要」『国文

学 解釈と鑑賞』七四・一一一

新山茂樹（一九六〇）「形容詞の接尾語」……つばい……つばい」の生成」

『国語研究』一〇

西尾寅弥（一九九五）「名詞形成接尾辞サについて」『大妻女子大学紀要 文系』二七

西尾寅弥（一九六二）「語感をさぐる」『言語生活』一三一（西尾一九八八

西尾寅弥（一九九八）「ことばの意味に伴う評価性」『国語と国文学』七五・

所収）

六

西尾寅弥（一九七〇）「語彙論と意味論」『季刊文学・語学』五七

西崎亨編（一九九五）『日本古辞書を学ぶ人のために』世界思想社

西尾寅弥（一九七二）『国立国語研究所報告 四四 形容詞の意味・用法の

西下経一（一九五四）「源氏物語の「もの」」『国語と国文学』三一・一

記述的研究』秀英出版

西下経一・栗山理一（一九五八）「日本文学の美的理念」『国文学解釈と鑑賞』二三・一二

西尾寅弥（一九七七）「語の意味の周辺」『松村明教授還暦記念 国語学と

賞』二三・一二

国語史』明治書院（西尾一九八八所収）

根来 司（一九八五）『時枝誠記研究 言語過程説』明治書院

西尾寅弥（一九七八）「語意味における評価的な側面についての小調査」『語

野村雅昭（一九七七）「造語法」『岩波講座日本語 九 語彙と意味』岩波

学と文学』一九（西尾一九八八所収）

書店

西尾寅弥（一九八二）「形容詞性述語の史的展開」『講座日本語学 二 文

野村雅昭（一九九二）「造語法と造語力」『日本語学』一一・五

法史』明治書院

野村雅昭（二〇〇一）「口語資料としての明治期落語速記」『早稲田大学大

西尾寅弥（一九八六）「語の有縁性について」『松村明教授古稀記念 国語

学院文学研究科紀要』四六・第三分冊

研究論集』明治書院（西尾一九八八所収）

梅花女子大学日本文化創造学科「風の文化誌」の会編（二〇〇六）『風の文

西尾寅弥（一九八八）『現代語彙の研究』明治書院

化誌』和泉書院

西尾寅弥（一九八九）「語感」『講座日本語と日本語教育 六 日本語の語

橋本四郎（一九五七）「ク活用形容詞とシク活用形容詞」『女子大國文』五

彙・意味（上）』明治書院

（橋本一九八六所収）

橋本四郎（一九八六）『橋本四郎論文集 国語学編』角川書店

蜂矢真郷（一九九八）「形容詞語幹の用法―く形容詞語幹の構成の複合

形状言について―」『万葉集の世界とその展開』白帝社

蜂矢真郷（一九九九）「形容詞語幹の用法」『井手至先生古稀記念論文集 国

語国文学藻』和泉書院

蜂矢真郷（二〇〇二）「形容詞の形容動詞化と形容動詞の形容詞化」『語文』

七五・七六

蜂矢真郷（二〇〇二）「ク活用形容詞語幹を後項に持つ形容動詞語幹」『国

語語彙史の研究 第二二集』和泉書院

蜂矢真郷（二〇〇三）「語幹を共通にする形容詞と形容動詞」『国語語彙史

の研究 第二二集』和泉書院

蜂矢真郷（二〇〇四）「語基を共通にする形容詞と形容動詞」『国語語彙史

の研究 第二三集』和泉書院

蜂矢真郷（二〇一〇）「形容詞語基の用法」『国語と国文学』八七・六

蜂矢真郷（二〇一三）「ク活用形容詞語幹の重複・並列から」『国語語彙史

の研究 第三二集』和泉書院

服部四郎（一九六四）「意義素の構造と機能」『言語研究』四五

浜田 敦（一九五一 a）「長音（上）」『人文研究』二・五

浜田 敦（一九五一 b）「長音（下）」『人文研究』二・六

浜田 敦（一九五二）「撥音と濁音との相関性の問題―古代語における濁子

音の音価―」『国語国文』二二・三（浜田一九八四所収）

浜田 敦（一九五六）「ガ行子音」『国語国文』二五・二（浜田一九八四

所収）

浜田 敦（一九八四）『日本語の史的研究』臨川書店

林 巨樹（一九六七）「動詞と形容詞との区別」『講座日本語の文法 3 品

詞各論』明治書院

林 四郎（一九九二）「日本語造語要素結合度の3段階性、その社会言語学

的意味」『明海大学外国語学部論集』三二

林 大（一九五七）「語彙」『現代国語学 II ことばの体系』筑摩書房

原口 裕（一九七一）「活用語に接続する「ラシイ」―明治におけるその定

着の状態―」『語文研究』三二・三二二

東辻保和（一九九七）『もの語彙こと語彙の国語史的研究』汲古書院

樋口文彦（二〇〇二）「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学 一〇』む

ぎ書房

彦坂佳宣（一九八三 a）「おつ（乙・異）」『講座日本語の語彙 九 語誌 I』

明治書院

彦坂佳宣(一九八三b)「みつともない」『講座日本語の語彙 一』 語誌

III 明治書院

飛田良文(一九七三)「近代語研究の資料」『季刊文学・語学』六六

飛田良文・浅田秀子(一九九一)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版

飛田良文他編(二〇〇七)『日本語学研究事典』明治書院

飛田良文・松井栄一・境田稔信編(二〇〇三)『明治期国語辞書大系 別巻

書誌と研究』大空社

平尾得子(一九九〇)「サ変動詞をめぐる」『待兼山論叢日本学篇』二四

平山輝男他編(一九九二・九四)『現代日本語方言大辞典』一補 明治書

院

ひろしまみんぞくの会(一九七八)「きなくさい」と「こげくさい」『フオ

クロアひろしま』三

深沢眞二(二〇一〇)『「和漢」の世界―和漢聯句の基礎的研究―』清文堂

出版(第一章「和漢聯句・和漢俳諧 式目と作法の概説」)

福島邦道解説(一九七七)『勉誠社文庫 二二 キリシタン版落葉集』

勉誠社

福島直恭(二〇〇八)『書記言語としての「日本語」の誕生―その存在を問

い直す―』笠間書院

福田成樹(二〇〇四)「感覚表現「Nガスル」の意味構造」『言語表現研究』

二〇

福原隆善(二〇〇一)『往生要集』における『観仏三昧海経』の受容』『香

川孝雄博士古稀記念論集仏教学浄土学研究』永田文昌堂

藤井俊博(一九九〇)「事限り無し考」『京都橘女子大学研究紀要』一七(藤

井二〇〇三所収)

藤井俊博(二〇〇三)『今昔物語集の表現形成』和泉書院

藤沢 真(一九七五)「味の表現の地域差―『日本言語地図』から―」『言

語生活』二八六

藤田加代(一九七三)「にほひ」「にほふ」考―源氏物語の例について―

『高知女子大國文』九(藤田一九八〇所収)

藤田加代(一九七五)「ひかり」「かがやく」主人公と「かをる」主人公

『高知女子大國文』一一(藤田一九八〇所収)

藤田加代(一九八〇)『「にほふ」と「かをる」―源氏物語における人物造

型の手法とその表現―』風間書房

藤田保幸(一九八二)「準引用」『待兼山論叢』一五(文学)

藤原克己(二〇〇八)「匂い―生きることの深さへ」『源氏物語―におう、

よそおう、いのる』ウェッジ

藤原浩史（一九八七）「漢語サ変動詞「具ス」の和化過程」『国語学研究』

二七

堀井令以知編（二〇〇三）『日常語の意味変化辞典』東京堂出版
堀井令以知編（二〇〇五）『ことばの由来』岩波書店

藤原浩史（一九八八）「漢語サ変動詞「怨ず」の意味と表現価値」『国語学

研究』二八

前田富祺（一九六八）「個別的な語史研究から体系的な語史研究へ」『文化』
三一・三（前田一九八五改変所収）

藤原浩史（一九九〇）「漢語サ変動詞「念ず」の表現機構」『国語学研究』

三〇

前田富祺（一九六九）「語彙研究資料としての節用集」『国文学言語と文芸』
一一・五（前田一九八五所収）

藤原浩史（一九九三）「平安和文における漢語サ変動詞による感情表現」『日

本語学』一二・一

前田富祺（一九七三）「語彙の体系について」『東北大学教養部紀要』一九
（前田一九八五改変所収）

藤原浩史（一九九四）「漢語サ変動詞「御覧ず」の表現価値」『国語学』

一七六

前田富祺（一九七五）「語彙に体系はあるか」『新・日本語講座 一 現代
日本語の単語と文字』汐文社（前田一九八五改変所収）

古屋 彰（一九八六）「塵芥の依拠した一資料」『金沢大学文学部論集 文

学科篇』六

前田富祺（一九八〇）「国語語彙史研究の課題」『国語語彙史の研究 第一
集』和泉書院（前田一九八五所収）

細川英雄（一九八九）「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』

一五八

前田富祺（一九八二a）「和語の意味変化」『講座日本語学 四 語彙史』
明治書院（前田一九八五改変所収）

細川英雄（一九九二）「感情形容詞研究の一視点―『万葉集』に見える「か

なし」の意味分析から―」『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』

明治書院

前田富祺（一九八二b）「語の変化」『講座日本語の語彙 一 語彙原論』
明治書院（前田一九八五改変所収）

堀井令以知（一九八九）「臭覚」句いのことば」『言語』一八・一一

代の語彙』明治書院（前田一九八五所収）

前田富祺（一九八四）「語義変化と意味関係」『国語語彙史の研究 第五集』

和泉書院（前田一九八五改変所収）

前田富祺（一九八五）『国語語彙史研究』明治書院

前田富祺（一九八六）「語彙資料の扱い方」『国語論究 一 語彙の研究』

明治書院

前田富祺（一九八七）「古語と近代語」『日本語学』六・四

前田富祺（一九八九）「文化としての語彙」『国語語彙史の研究 第一〇集』

和泉書院

前田富祺（一九九〇a）「語彙から見た文体と文字から見た文体」『国語語

彙史の研究 第一集』和泉書院

前田富祺（一九九〇b）「語彙論―国語語彙論の確立と展開―」『国語と国

文学』六七・五

前田富祺（一九九〇c）「連合的意味と統合的意味の間」『国広哲弥教授還

暦退官記念論文集 文法と意味の間』くろしお出版

前田富祺（一九九三a）「語彙史における類義語―漢語の問題を中心に―」

『国語語彙史の研究 第一三集』和泉書院

前田富祺（一九九三b）「国語意味論研究の一視点―メタ言語との関わりか

ら―」『国語学』一七五

前田富祺（一九九六）「語彙と言語文化」『国文学 解釈と教材の研究』

四一・一一

前田富祺（一九九八）「日本語基本語語誌辞典から日本語言語文化史大辞典

まで」『日本語学』一七・一四

前田富祺（二〇〇二）「語彙史」『朝倉日本語講座 四 語彙・意味』朝倉

書店

前田富祺（二〇〇五）「語源研究における漢語」『日本語学の蓄積と展望』

明治書院

前田富祺（二〇〇九）「文化から見た語彙史」『シリーズ日本語史 二 語

彙史』岩波書店

牧村史陽編（一九八四）『大阪ことば事典』講談社

益岡隆志（二〇〇〇）『日本語文法の諸相』くろしお出版（第四章「属性叙

述と事象叙述」）

益岡隆志編（二〇〇八）『叙述類型論』くろしお出版

増田真奈美（一九九四）「中世和歌の「にほふ」世界―〈にほふ声〉を中心

に―」『日本文芸論叢』九・一〇

松浦照子（一九八一）「複合形容詞「うら―」「こころ―」「もの―」「なま

―」の形成―平安女流文学における―」『山形女子短期大学紀要』

松浦照子（一九八三）「うらさびしい（心寂しい）」『講座日本語の語彙 九

語誌Ⅰ』明治書院

松浦照子（一九八四）「もの」形容詞・「こころ」形容詞の形成』『名古屋

短期大学研究紀要』二二

松浦照子（一九八五）「複合形容詞の形成と継承—平安時代散文作品における—」『国語語彙史の研究 第六集』和泉書院

松木正恵（一九九六）「とみえる」の表現性—「らしい」との比較を通して—」『表現研究』六四

松田謙次郎編（二〇〇八）『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房

村田菜穂子（二〇〇五）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院

松本健一（一九八二）『太宰治とその時代 含羞のひと』第三文明社（一 含羞のひと）

松本隆信（一九七三）「伝本から見た御伽草子二十三篇について」『長沢先

生古稀記念図書学論集』三省堂

松本 剛（一九七八）「カグハシ考」『万葉』九九

三木雅博（一九八二）「句」字と「にほふ」—菅原道真と和語の漢字表記

—」『文学史研究』一三三（三木一九九九所収）

三木雅博（一九九九）『平安詩歌の展開と中国文学』和泉書院

三木雅博（二〇〇四a）「漢詩文と古今集—万葉から古今に至る（香）の世

界の展開と漢詩文—」『古今和歌集研究集成 二』風間書房

三木雅博（二〇〇四b）「香」と視覚—古今集前後における詩と歌の交感

—」『文学』五・五

三木幸信（一九五〇）「かをとにほふ考」『平安文学研究』四

水谷静夫（一九六五）「語彙論の術語をめぐって」『国語学』六二

水田紀久・頼 惟勤編（一九六八）『中国文化叢書 九 日本漢学』大修館

書店（IV「漢籍の伝来と和刻」（大庭 脩氏執筆「漢籍の輸入」、中村 幸彦氏執筆「和刻本」「翻訳・註釈・翻案」）

三田村紀子（一九六七）「形容詞の意味分類」『奈良女子大研究年報』一〇

三田村雅子・河添房江編（二〇〇八）『薫りの源氏物語』翰林書房

峰岸 明（一九七一a）「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論—

副詞の漢字表記を中心に—」『国語学』八四（峰岸一九八六所収）

峰岸 明（一九七一b）「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論—

副詞の漢字表記を中心に—」『国語学』八五（峰岸一九八六所収）

峰岸 明（一九七七）「記録体」『岩波講座日本語 十 文体』岩波書店（峰

岸一九八六所収）

峰岸 明(一九八一)「記録語文における漢字表記語の解説方法について―

『自筆本御堂閑白記』を例として」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』(峰岸一九八六所収)

峰岸 明(一九八六)『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会

三宅知宏(二〇〇五)「現代日本語における文法化―内容語と機能語の連続性をめぐって―」『日本語の研究』一・三三

宮地敦子(一九七八)「国語史における時代区分」『人文論究』二八・三(宮

地一九七九所収)

宮地敦子(一九七九)『身心語彙の史的研究』明治書院

宮地 裕(一九七四a)「成句」の分類」『語文』三二一

宮地 裕(一九七四b)「成句」の二三の用法について」『季刊文学・語学』

七四

宮武利江(一九九八)「へにほひ・にほふ」の表現価値―源氏物語に見る―」

『東京成徳短期大学紀要』三一

宮島達夫(一九六六)「意味の体系性」『教育国語』四(宮島一九九四所収)

宮島達夫(一九七二)『国立国語研究所報告』四三 動詞の意味・用法の記

述的研究』秀英出版

宮島達夫(一九七七a)「語彙の体系」『岩波講座日本語』九 語彙と意味』

岩波書店(宮島一九九四所収)

宮島達夫(一九七七b)「単語の文体的特徴」『松村明教授還暦記念国語学
と国語史』明治書院(宮島一九九四所収)

宮島達夫(一九八八)「単語の文体と意味」『国語学』一五四(宮島一九九
四所収)

宮島達夫(一九九四)『語彙論研究』むぎ書房

宮田和一郎(一九五六)「和歌と漢語・仏教語」『解釈』二・一一

宮脇真彦(二〇〇一)「季語の断面(四)南風・風薫る」『俳句研究』六八・

八

村上昭子(一九八一)「接尾辞ラシイの成立」『国語学』一二四

村上雅孝(一九八三)「うさん(胡散)」『講座日本語の語彙』九 語誌I』

明治書院

村木新次郎(一九九一a)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

村木新次郎(一九九一b)「日本語の語彙と日本文化」『日本語学』一一・

三

村木新次郎(二〇〇二)「意味の体系」『朝倉日本語講座』四 語彙・意味』

朝倉書店

村木新次郎(二〇〇九)「日本語の形容詞―その機能と範囲―」『国文学』解

『和鑑賞』七四・七

村田菜穂子(二〇〇五)『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院

目加田さくを(一九九五)「源氏物語論―嗅覚美形成―」『日本文学研究』

三〇

本廣陽子(二〇〇八)「もの」形容詞の意味と用法の発展―源氏物語の果

たした役割―『国語国文』七七・六

榎山洋介(一九九二)「接頭辞「モノ」を含む形容詞・形容動詞の意味分析」

『日本語論究 三 現代日本語の研究』和泉書院

榎山洋介(二〇〇二)『シリーズ・日本語のしくみを探る 五 認知意味論

のしくみ』研究社

森岡健二(一九六〇)「語彙体系と語彙史」『国語と国文学』三七・一〇

森岡健二(一九八六)「接辞と助辞」『日本語学』五・三

森田 武(一九九三)『日葡辞書提要』清文堂出版

森田良行(一九七七)『基礎日本語 一』角川書店

森田良行(一九八九)『基礎日本語辞典』角川書店

森田良行(一九九六)『意味分析の方法―理論と実践―』ひつじ書房

森田良行(二〇〇八)『動詞・形容詞・形容動詞の事典』東京堂出版

森 朝男(二〇〇八)「芳香の成立」『薫りの源氏物語』翰林書房

森 正人(二〇〇四)「罪業のしるしと予感―古代仏教説話に漂う匂い―」

『文学』五・五

森本治吉(一九五七)「にほふ」語一族『万葉研究』七

森本治吉(一九六三)「にほふ」の語義

八亀裕美(二〇〇八)『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点から―』

明治書院

八亀裕美(二〇〇九)「形容詞述語文をとらえるために―分析に必要な視点

―」『国文学 解釈と鑑賞』七四・七

安田 章(一九七八)「語彙研究としての通俗辞書」『国語と国文学』五五・

五

安田政彦(二〇〇七)『平安京のニオイ』吉川弘文館

安田政彦(二〇〇八)『源氏物語』における闇とにおい『薫りの源氏物語』

翰林書房

谷田貝光克編(二〇〇五)『香りの百科事典』丸善

柳田国男(一九四六)『毎日の言葉』創元社

柳田征司(一九八六)「前田富祺著『国語語彙史研究』」『国語学』一四七

柳田征司(一九九八)『室町時代語資料としての抄物の研究 上・下』武蔵

野書院

柳田征司（一九九三）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院

（第三章「活用語の語幹末から活用語尾にかけて生じた母音連続」）

山内洋一郎（一九八二）「語史試論」『国語語彙史の研究 第三集』和泉書院（山内一九九六所収）

院（山内一九九六所収）

山内洋一郎（一九九六）『野飼ひの駒―語史論集―』和泉書院

山縣 熙（一九九三）「第三感覚―匂いの美学のために」『思想』八二四

山縣 熙（二〇〇四）「匂いの美学」再論』『文学』五・五

山口堯二（一九九二）「古代語ノ・ガの関係表示」『国語と国文学』六九・

一一（山口二〇〇〇所収）

山口堯二（二〇〇〇）『構文史論考』太洋社

山口仲美（一九八二）「感覚・感情語彙の歴史」『講座日本語学 四 語彙史』明治書院

史』明治書院

山口仲美（一九八四）『平安文学の文体の研究』明治書院

山口仲美（一九八七）「前田富祺著『国語語彙史研究』」『国語と国文学』

六四・二

山口佳紀（一九八四）「形容詞の活用」『研究資料日本文法 三 用言編二

形容詞形容動詞』明治書院

山口佳紀（一九八五）『古代日本語文法の成立の研究』有精堂出版

山口佳紀（一九八七）「各活用形の機能」『国文法講座』二 明治書院

山崎良幸（一九七八）『源氏物語の語義の研究』風間書房（第三篇 心情

表現の語）

山下喜代（一九九五）「形容詞性接尾辞「―ぱい・―らしい・―くさい」に

ついて」『講座日本語教育』三〇

山田 巖（一九五八）「古代語から近代語へ―活用形の変遷を中心として―」

『現代国語学 Ⅲ ことばの変化』筑摩書房

山田 巖（一九五九）「平家物語と中世語法」『講座解釈と文法 五』明治

書院

山田俊雄（一九七一）「漢字の定訓についての試論―キリシタン版落葉集小

玉篇を資料にして―」『成城国文学論集』四

山田孝雄（一九四三）『国語学史』宝文館

山梨正明（二〇〇〇）『認知言語学原理』くろしお出版（第四章「外界認知

と言葉の身体性」）

山本英一（二〇〇二）『順序づけ』と「なぞり」の意味論・語用論』遊文

舎（Ⅱ 「なぞり」の意味論・語用論）

山本健吉（一九九六）「薫風」（講談社編『常用版』日本大歳時記』講談社）

山本佐和子（二〇一一）「モダリティ形式「ラシイ」の成立」『日本文法史

研究 一』ひつじ書房

治書院

山本俊英(一九五五)「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」

吉田則夫(一九八二)「四国方言の感情語・形容語―高知県構原町四万川方

『国語学』二二三

言―』『講座日本語の語彙 八 方言の語彙』明治書院

湯浅茂雄(二〇〇〇)「近代語研究の要点と課題」『日本語学』一九・一一

吉田光浩(一九九五)「平安期形容詞の意味と終止用法について―『枕草子』

湯浅茂雄(二〇〇二)「語彙研究史」『朝倉日本語講座 四 語彙・意味』

『源氏物語』『栄花物語』を資料として―』『宮地裕・敦子先生古稀記

朝倉書店

念論集 日本語の研究』明治書院

湯川恭敏(一九七二)『言語学の基本問題』大修館書店(第八章「和歌山方

吉村晶子(二〇〇八)「身体が匂う」ということ』『薫りの源氏物語』翰林

言の若干の形容詞の同一性」)

書房

湯沢幸吉郎(一九三六)『徳川時代言語の研究』刀江書院

吉村研一(二〇〇九)『源氏物語』における「かをる」と「にほふ」の互

湯沢幸吉郎(一九五七)『増訂 江戸言葉の研究』明治書院

換性』『日本文学』五八

楊 昆鵬(二〇一一)「五山文学と和漢聯句」『文学』一一・五

吉本隆明(一九九九)『匂いを讀む』光芒社

横田 貢(一九八三)「しんき(辛気・心気・沈気)」『講座日本語の語彙

米山忠雄(二〇〇〇)「雨くだる」考―和語と漢語との間―』『解釈』四六・

一〇 語誌Ⅱ』明治書院

五／六

吉沢義則(一九三七)「香ひの趣味」『国の花』一一(吉沢義則(一九四二)

李 成奎・和田康二(二〇一一)「接辞「ポイ」「ラシイ」「クサイ」の運用

『源氏随攷』晃文社所収)

について―名詞語基を中心に―』『日本学報』九一

吉田金彦(一九七一)「辞書の歴史」『講座国語史 三 語彙史』大修館書店

渡辺 実(一九九六)『日本語概説』岩波書店(第Ⅱ部「意義―意味論―」)

吉田金彦(一九七七)『国語意味史序説』明治書院

Alain Corbin (山田登世子・鹿島茂訳)(一九九〇)『においの歴史―嗅覚

吉田秀三(一九八三)「すい(粹)」『講座日本語の語彙 一〇 語誌Ⅱ』明

と社会的想像力―』藤原書店

- Constance Classen (陽美保子訳) (一九九八) 『感覚の力』 工作舎
- Eugène Minkowski (中村雄二郎・松本小四郎訳) (一九八三) 『精神のコ
スモロジー』 人文書院 (初出: "Vers une cosmologie, fragments
philosophiques", 1936)
- Florian Coulmas (諏訪功・菊池雅子・大谷弘道訳) (一九九三) 『ことば
の経済学』 大修館書店
- Gustaf Stern (五島忠久訳) (一九六二) 『意味と意味変化』 研究社
- Hubertus Tellenbach (宮本忠雄・上田宣子共訳) (一九八〇) 『味と雰
気』 みず書房
- Pierre Guiraud (佐藤信夫訳) (一九五八) 『意味論—ことばの意味—』 白
水社
- Stephen Ullmann (山口秀夫訳) (一九六四) 『意味論』 紀伊国屋書店
- Stephen Ullmann (池上嘉彦訳) (一九六九) 『言語と意味』 大修館書店

嗅覚表現研究史年表

参考文献と重なる部分も多いが、発表年順に嗅覚表現研究に関わるものを挙げる。

一九三〇代・一九六〇年代

吉沢義則（一九三七）「香ひの趣味」『国の花』一一（吉沢義則（一九四二）

『源氏随攷』晃文社所収）

北住敏夫（一九四一）『万葉集』における「にほひ」の美『文学』九・一

○（北住敏夫（一九五〇）『万葉の世界』角川書店所収）

澤瀉久孝（一九四三）『万葉佳品抄』全国書房

新村 出（一九五〇）「語源をさぐる 一」（新村出（一九七二）『新村出全

集 四』筑摩書房所収）

三木幸信（一九五〇）「かをるとにほふ考」『平安文学研究』四

犬塚 且（一九五四）「匂ふ」「匂ひやか」「花やか」考『平安文学研究』

五〇

田村専一郎（一九五四）「にほふ考」『文学論輯』一一

武智雅一（一九五七）「万葉集の「にほふ」について」『愛媛国文研究』六

森本治吉（一九五七）「にほふ」語一族『万葉研究』七

赤羽 淑（一九五八）「源氏物語における呼名の象徴的意義―「光」「匂」

「薫」―」『文芸研究』二一八

西下経一・栗山理一（一九五八）「日本文学の美的理念」『国文学解釈と鑑

賞』一三三・一一一

柴生田稔（一九五九）「かをる」と「にほふ」『国語と国文学』三（柴生

田稔（一九八六）『万葉の世界』岩波書店所収）

森本治吉（一九六三）「にほふ」の語義」

池田亀鑑（一九六四）「服飾美の表現」『平安朝の生活と文学』角川文庫

佐竹昭広（一九六四）「見ゆ」の世界『国語国文』三三三・九

川上富吉（一九六五）「にほふ美意識考―大伴家持小論―」『中央大学国文』

八

稲田利徳（一九六六）「正徹の共感覚的表現歌の系譜」『国語国文』三五・

一一一

伊原 昭（一九六九 a）「にほふ」攷『文学・語学』五三二

伊原 昭（一九六九 b）「にほふ」と「うつろふ」と―大伴家持における

―」『国語と国文学』四六

一九七〇年代・一九九〇年代前半

坂橋隆司（一九七〇）「にほひ」と「かをり」と―その同義部分の起点を求めて―『国学院大学栃木短期大学紀要』五

稲田利徳（一九七一）「芭蕉発句の共感覚的表現の分析」『文学研究』三三

藤田加代（一九七三）「にほひ」「にほふ」考―源氏物語の例について―

『高知女子大國文』九（藤田加代（一九八〇）『にほふ』と「かをる」

―源氏物語における人物造型の手法とその表現―『風間書房所収』

岩淵悦太郎（一九七四）「クサイとニオウ」『語源散策』毎日新聞社

稲田利徳（一九七五）「共感覚的表現歌の発生と展開―上―」『岡山大学教

育学部研究集録』四三

佐竹昭広（一九八六）「花ぞ昔の香にほひける」『東京新聞』一九七五年

四月五日（一〇月一五日掲載）（佐竹昭広（一九八六）『古語雑談』岩

波書店所収）

藤田加代（一九七五）「ひかり」「かがやく」主人公と「かをる」主人公

『高知女子大國文』一一（藤田加代（一九八〇）『にほふ』と「かを

る」―源氏物語における人物造型の手法とその表現―『風間書房所収』

稲田利徳（一九七六）「共感覚的表現歌の発生と展開―下―」『岡山大学教

育学部研究集録』四四

伊原 昭（一九七六）「にほふ」―京極派和歌の美的世界―『語文』四一

小松登美（一九七六）「中古仮名文学に於ける嗅覚表現―名詞を中心に―」
『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社

こまつひでお（一九七六）「匂字考」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』

表現社（小松英雄（一九九八）『日本語書記史原論』笠間書院所収）

佐伯昭市（一九七六）「芭蕉・発句の世界―嗅覚表現―」『国文学解釈と鑑

賞』四一・三

長友 武（一九七六）「にほふ」という言葉の美意識『琉球大学教育学部

紀要』一九・一一

大野 透（一九七七）「匂―漢字の変体としての和字―」『国学院雑誌』七

八・六

金田孝子（一九七八）「にほふ」―その語義の変遷―『国語国文薩摩路』

二二

松本 剛（一九七八）「カグハシ考」『萬葉』九九

三木雅博（一九八二）「匂」字と「にほふ」―菅原道真と和語の漢字表記

―『文学史研究』二三（三木雅博（一九九九）『平安詩歌の展開と中

国文学』和泉書院所収）

佐藤宣男（一九八三）「かぐ（嗅ぐ）」『講座日本語の語彙 第九巻 語誌Ⅰ』

明治書院

浦部重雄（一九八五）「もう一つの「匂ひ」」『解釈 国語・国文』三一・五

『群馬県立女子大学紀要』五

河内 章（一九八五）「万葉集「にほふ」の語意と用法とについて」『愛知

塚本瑞代（一九九五b）「にほひ」について その二―襲色目における―

大学国文学』二四・二五

『群馬県立女子大学紀要』八

大野久枝（一九八六）「定家の嗅覚的表現のある歌の特色―にほふとかをる

朱 捷（一九九六）「にほひ」にみる日本人の嗅覚」『日本研究 国際日本

―』『国学院大学大学院紀要』一八

文化研究センター紀要』一五

尾崎左永子（一九八七）『源氏の薫り』求龍堂

宮武利江（一九九八）「へにほひ・にほふ」の表現価値―源氏物語に見る―」

堀井令以知（一九八九）「〈臭覚〉匂いのことば」『言語』一八・一一

『東京成徳短期大学紀要』三一

土橋 寛（一九九〇）『日本語に探る古代信仰』中央公論社

朱 捷（一九九八a）「匂」という字の由来及びそこからみる日本人の嗅

山縣 熙（一九九三）「第三感覚―匂いの美学のために」『思想』八二四

覚と中国人の聴覚」『同志社女子大学日本語日本文学』一〇

寺井由美子（一九九三）『源氏物語』における呼び名の効果―光る・薫る・

朱 捷（一九九八b）「再び「匂」という字の由来について」『同志社女子

匂ふ―』『国文学ノート』三〇

大学学術研究年報』四九・四

増田真奈美（一九九四）「中世和歌の「にほふ」世界―へにほふ声―を中心

吉本隆明（一九九九）『匂いを讀む』光芒社

に―』『日本文芸論叢』九・一〇

朱 捷（二〇〇一）『においとひびき―日本と中国の美意識をたずねて―』

白水社

一九九〇年代後半・二〇一〇年代

高橋庸一郎（二〇〇二）『匂いの文化史的研究―日本と中国の文学にみる―』

目加田さくを（一九九五）「源氏物語論―嗅覚美形成―」『日本文学研究』

和泉書院

三〇

山本英一（二〇〇二）「なぞり」の意味論・語用論」『順序づけ』と「な

塚本瑞代（一九九五a）「にほひ」について その一―感覚の相互性―」

ぞり」の意味論・語用論』遊文舎

堀井令以知編(二〇〇三)『日常語の意味変化辞典』東京堂出版

新谷秀夫(二〇〇四)「にほひ」を嗅いだ家持『高岡市万葉歴史館論集 七

色の万葉集』

多田一臣(二〇〇四)「古代人の感覚 ニホフとカから」『文学』五・五

谷川 渥(二〇〇四)「花の彷徨―カントからユイスマンスまで―」『文学』

五・五

長沼英二(二〇〇四)「嗅覚表現と恋部和歌―選定方針の変化と『源氏物語』

の影響―」『表現研究』三〇

三木雅博(二〇〇四a)「漢詩文と古今集―万葉から古今に至る〈香〉の世

界の展開と漢詩文―」『古今和歌集研究集成 一』風間書房

三木雅博(二〇〇四b)「〈香〉と視覚―古今集前夜における詩と歌の交感

―」『文学』五・五

山縣 熙(二〇〇四)「匂いの美学」再論」『文学』五・五

龍本那津子(二〇〇五)「にほふ」考―『万葉集』における「にほふ」の

意味用法をめぐって―」『萬葉語文研究 一』和泉書院

趙 青(二〇〇五)「梅が香―共感覺的表現の視点から―」『表現研究』

八四

塚原鉄雄(二〇〇五)「清少納言の嗅覚」『枕草子研究』新典社

堀井令以知編(二〇〇五)『ことばの由来』岩波書店

笹原宏之(二〇〇七)『国字の位相と展開』三省堂

藤原克己(二〇〇八)「匂い―生きることの深さへ―」『源氏物語―におう、

よそおう、いのる』ウェッジ

森 朝男(二〇〇八)「芳香の成立」『薫りの源氏物語』翰林書房

吉村研一(二〇〇九)『源氏物語』における「かをる」と「にほふ」の互

換性」『日本文学』五八

工藤力男(二〇一〇)「におい彷徨―日本語雑記・二―」『成城文藝』

二一〇

龍本那津子(二〇一〇a)「橘のにほへる香」―卷十七・三九一六番歌を

めぐる―考察―」『叙説』三七

龍本那津子(二〇一〇b)『懐風藻』における嗅覚表現―『万葉集』との

比較を通して―」『人間文化研究科年報』二五

陳 世娟(二〇一一)「匂い」と「香り」の意味用法―評価性とそのコロ

ケーションに着目して―」『言語変化の分析と理論』おうふう

調査対象資料使用テキスト一覧

年代	前代(資料本文・複製品(※一階層者)・成立年代)		利用本文	
	記述(複製品(※))	成立年代		
中古	仮名散文字類	土俗語	712	類名本文書・徳田辰徳編(一九五八)『古事記大成』二頁注
		日本書紀	720	藤田鳴鶴・石塚晴明(一九五八)『最新文庫蔵書新日本書紀』語部本冊行末
		万葉集	8C後	和歌集刊行本文(一九〇〇)『萬葉集』語部
		律家	上代	土屋清・小園寛一・松本(一九五七)『古代語彙』語部
		伊勢物語	10C前	大前浩・宇島鶴子編(一九七二)『伊勢物語』語部
		土俗語	935頃	小久保繁晴・山田孝藏編(一九八一)『土俗語』本文及び索引・空閑書院
		大正物語	947-57頃	國府謙輔・宮田文雄編(一九七〇)『大正物語』語部
		平中物語	965頃	山田清・木野清・山内隆三・木野昭雄(一九六九)『平中物語』本文及び索引・雄文社
		宇津保物語	970-99頃	佐藤保樹・藤原久雄(一九七三・一九七五)『宇津保物語』本文及び索引・本文編纂所編・空閑書院
		陸奥日記	974頃	佐竹謙久・伊牟田泰久編(一九八一)『政司新編』分冊之三『陸奥日記』本文編纂所編・空閑書院
		源朝語	10C後	國府謙輔・江口正弘編(一九六七)『源朝語』語部
		枕草子	10C末	島岡博司・藤原邦彦・武山隆昭・藤原清・藤井和美編(一九六七)『枕草子』語部
		源氏物語日記	11C前	東郷長・藤原敏雄・浦田敏彦編(一九五九)『源氏物語日記』語部
		源山語	1001-14頃	藤井清・澤田信助・鈴木日出男・藤井良史・今西浩一・船橋(一九九八)『源氏物語日記』語部
		紫式部日記	1010頃?	今西浩一・藤井・上田宗代・中下唯勝編(一九九二)『紫式部日記』語部
		茶社物語	1028-92頃	高野大次郎・文部省国語学研究会(一九八五・一九八六)『茶社物語』本文及び索引・本文編纂所編・武蔵野書院
		源中納言物語	11C中頃	浦田敏彦編(一九八四)『源中納言物語』語部
源氏物語	11C中-13C頃	浦田敏彦編(一九六六)『源氏物語』語部		
中世前期	仮名散文字類	源氏物語	1059頃	東郷長・藤原敏雄・浦田敏彦編(一九五九)『源氏物語』語部
		源氏物語	1069-77?	國府謙輔・鈴木守次・井原隆子編(一九七三)『源氏物語』語部
		源氏物語日記	1108頃	浦田敏彦・伊原隆子編(一九八八)『源氏物語日記』本文及び索引・空閑書院
		大鏡	12C前	藤原清・藤井和美・國府謙輔(一九八四)『大鏡』本文及び索引・空閑書院
		今鏡	1170	藤原清・藤井和美・國府謙輔(一九八四)『今鏡』本文及び索引・空閑書院
		よみかほや物語	12C後	鈴木五朗(一九七三)『よみかほや物語』語部
		源氏物語	12C後	小久保繁晴編(一九七〇)『源氏物語』本文及び索引・空閑書院
		松浦島物語	12C後	若原隆文編(一九七四)『松浦島物語』語部
		源氏物語	12C後	若原隆文編(一九七〇)『松浦島物語』語部
		源氏物語	1198-1202頃	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部
		源氏物語	1204	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部
		源氏物語	1211頃	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部
		源氏物語	1219	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部
		源氏物語	1240	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部
		源氏物語	1279-82頃	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部
		源氏物語	1292頃?	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部
		源氏物語	1331頃	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部
源氏物語	1349	藤原清(一九七五)『源氏物語』語部		

中世後期	和漢語文時期	とほすかたり	14C前	法住持勸修(一九九三)『とほすかたりの總索引』自立編 龍溪閣書院 法住持勸修(一九九二)『とほすかたりの總索引』本文編 空閑書院
		増補 今昔物語集	1368-76頃	門倉昌雄編(一九七九)『増補總索引』明治書院
		古今昔物語集	1120頃?	藤田昌隆編; 石原清子編(一九八二)『古今昔物語集』自立編 空閑書院
		古今昔物語集	1130頃?	山内洋一郎編(一九六九)『古今昔物語集』龍溪閣書院
		昔物語集	1134頃	飯沼保和(一九八〇)『昔物語集』清文堂出版
		昔物語話	12C中	藤田昌隆編(一九七九)『昔物語』校木及び總索引 空閑書院
		昔物語集	1216頃?	藤田昌隆; 飯沼保和編(一九八五)『愛心集』本文; 自立編 空閑書院
		昔物語集 昔物語話	1221頃	田中義久; 長野照子編(一九七五)『昔物語集』總索引 清文堂出版
		昔物語文	1222頃	橋本博; 王朝文字研究會編(一九七四)『四国及』本文及び總索引 空閑書院
		昔物語	1239頃	久保田武; 松尾幸江編 藤田昌隆; 大塚正十郎編(一九七九)『昔物語』藤田昌隆; 長野照子編; 藤田昌隆編(一九七九)『昔物語』藤田昌隆; 長野照子編
	撰集抄	1250頃	安部孝子; 橋野きみ子; 野崎典子; 藤田昌隆編(一九七九)『撰集抄』自立編 空閑書院 安部孝子; 橋野きみ子; 野崎典子; 藤田昌隆編(一九七九)『撰集抄』校本編 龍溪閣書院	
	十訓抄	1252	飯沼保和編(一九八二)『十訓抄』本文及び總索引 空閑書院	
	古今昔物語集	1254	石原清子編(一九八〇)『古今昔物語集』空閑書院	
	沙石集	1283	飯沼保和編(一九六六)『沙石集』龍溪閣書院	
	源氏物語十帖和歌	1248-60頃	名島行雄; 多摩純後俊注(一九六四)『源氏物語十帖和歌』龍溪閣書院	
	日蓮上人遺文	中世前期	藤田昌隆編(一九八二)『日蓮上人遺文』總索引 龍溪閣書院 立正佼成会日蓮宗研究部編(一九八二)『日蓮上人遺文』本文 立正佼成会	
	源氏物語十帖和歌	1232-50頃	飯田昌隆編(一九三三)『源氏物語十帖和歌』藤田昌隆	
	源氏物語十帖和歌	1238		
	源氏物語十帖和歌	中世前期	藤田昌隆編(一九七九)『源氏物語十帖和歌』藤田昌隆	
	和漢語文時期	和漢語文時期	1058	『和漢語文』(一九七九)『和漢語文』藤田昌隆
水鏡		12C後	藤田昌隆編(一九九〇)『水鏡』本文及び總索引 空閑書院	
大正記		1212	青木公忠編(一九六六)『大正記』武蔵野書院	
保元物語		1220頃?	飯沼保和; 長野照子編(一九八二)『保元物語』龍溪閣書院	
保元物語		1220頃?	飯沼保和; 長野照子編(一九七九)『保元物語』龍溪閣書院	
保元物語		13C前	金田一隆; 清水功; 飯沼保和編(一九七九)『保元物語』龍溪閣書院	
海軍記		1223頃	鈴木孝彦; 飯田昌隆; 中山昌樹編(一九七九)『海軍記』龍溪閣書院	
海軍記		1242	山口昌樹編; 熊本女子女子学同好会研究會編(一九七七)『海軍記』本文及び總索引 空閑書院	
海軍記		14C前	藤田昌隆編(一九七九)『海軍記』龍溪閣書院	
海軍記		南北朝頃	大塚正十郎; 武蔵野書院編(一九七九)『海軍記』龍溪閣書院	
寄町物語	寄町物語	中世後期中	大塚正十郎; 天田比呂呂(一九八二)『義経記』龍溪閣書院	
	大正記	14C後	藤田昌隆; 飯田昌隆編(一九九七)『大正記』本文及び總索引 龍溪閣書院 藤田昌隆; 飯田昌隆編(一九九七)『大正記』本文及び總索引 龍溪閣書院	
	信長公記	1598	飯沼保和; 長野照子編(一九六九)『信長公記』龍溪閣書院	
	信長公記	16C後	藤田昌隆編(一九八四)『信長公記』龍溪閣書院	
	とほすかたり	中世後期中	法住持勸修(一九九三)『とほすかたりの總索引』自立編 龍溪閣書院 法住持勸修(一九九二)『とほすかたりの總索引』本文編 空閑書院	
	とほすかたり	中世後期中	藤田昌隆編; 石原清子編(一九八二)『とほすかたりの總索引』自立編 空閑書院	
	とほすかたり	中世後期中	山内洋一郎編(一九六九)『とほすかたりの總索引』龍溪閣書院	
	とほすかたり	中世後期中	飯沼保和(一九八〇)『とほすかたりの總索引』清文堂出版	
	とほすかたり	中世後期中	藤田昌隆編(一九七九)『とほすかたりの總索引』空閑書院	
	とほすかたり	中世後期中	藤田昌隆; 飯沼保和編(一九八五)『とほすかたりの總索引』空閑書院	

抄物	通語物語	中世後期	
	西行	中世後期	
	集賢物語	中世後期	
	赤穂物語	中世後期	
	湯島問の本地	中世後期後	
	湯島の草子	永祿年間後半頃	
	通語物語	中世後期末	
	巧ノ老翁	中世後期末・近世初	
	大徳舞	中世後期末・近世初以降	
	通語物語の記	中世後期	中古草紙(一九四一)『本邦草紙』一 古風文庫
	通語物語	近世初期	
	丑五郎御前抄	中世後期	『時代別回語大辞典等時代別用語』
	杜若抄	1439頃	大塚光信(一九九二)『新抄物資料集』一〇 清文堂出版
	源氏抄	1458-60	
	五十音韻抄	1462	
	史記抄	1477	岡田基博・大塚光信(一九七六)『抄物資料集成』一 清文堂出版
	日本書紀集解抄	1481	大塚光信(一九九二)『新抄物資料集』一〇 清文堂出版
	古文書抄	1485頃	
	古文書抄	1490頃	
	山中抄	1500頃	
	關白御前抄	1504	水田隆雄(一九九七)『徳山御前抄 本文と総索引』清文堂出版
	通語物語抄	1514	『時代別回語大辞典等時代別用語』
	源氏抄	1529頃	岡田基博・大塚光信(一九七六)『抄物資料集成』七 清文堂出版
	源氏抄	1530	大塚光信(一九九二)『新抄物資料集』一〇 清文堂出版
	吉野抄	1532-55	岡田基博・大塚光信(一九七六)『抄物資料集成』一 清文堂出版
	四河入海	1534	岡田基博・大塚光信(一九七六)『抄物資料集成』一 清文堂出版
	中興森林風見集抄	1550頃	水田隆雄(二〇〇〇)『中國神林風見集抄』清文堂出版 大塚光信(二〇〇〇)『新抄物資料集』一〇 清文堂出版
全凡集	1566頃	岡田基博(一九八二)『類証書集』九 丸屋製本	
句及抄	16C	水田隆雄(一九九二)『句及抄』清文堂出版	
中華書本抄	1633	藤野田龍溪・深野徳成(一九八三・一九八六・一九八八)『中華書本抄 文簡索引』一・中・下 笠岡書局	
通語抄	室町末・近世初	藤野田龍溪(一九八四・一九八七)『通語抄の國語学的研究』藤野田龍溪 研究索引編 笠岡書局出版	
玉殿抄	1563	中田保長(一九七〇・七二)『玉殿抄』創風社	
三國志本意抄	1556	『日本回語大辞典(案)』(廣) 同例	
古文書抄	1525	『日本回語大辞典(案)』(廣) 同例	
三傳抄	1620	『日本回語大辞典(案)』(廣) 同例	
田原三郎抄	室町末・近世初	松方國文庫(一九七二)『松方國文庫所藏 田原三郎抄』三 笠岡書局	
源氏抄	中世後期	『時代別回語大辞典(新訂時代編)』同例	
龍興抄	中世後期	『時代別回語大辞典(新訂時代編)』同例	
三傳抄	1527	中田保長(一九七二)『三傳抄』抄物大系 創風社	
三傳抄	1622	『日本回語大辞典(案)』(廣) 同例	
五段本抄	1592	五中五(一九八八)『五段本抄』清文堂出版	
五段本抄	1593	大塚光信・水田隆雄(一九九二)『五段本抄』清文堂出版	

キョウカノ律科

近世前期	狂言草木	玉葉美合草紙	1593	金田忠雄(一九六九)『天皇御成金草紙本文及索引』三才社
		玉のふりくさくさ	1596	松浦清吉、三橋雅雄(一九七九)『きりくさ』資料集成三〇三・三〇四・三〇五『勁草社
		和をたぐ(和)の	1599	野島浩之(一九八七)『和をたぐ』版きやんかどる 本文・索引 講談社出版
		ふらふら草紙(ふらふ)	1600	小島孝敏(一九七〇)『ふらふら草紙』たけなご 本文・索引 講談社出版
		玉の玉草紙	1578	竹田五(一九九八)『玉の玉草紙』本文、索引、研究 勁草社
	字面雑 注(原出「狂言・草紙」の意 は「狂言」に転じる)	和木	1596	水井通(二〇〇三)『狂言草紙』三才社
		お(る)し	1363-64頃	大橋孝雄、井木隆一(一九六二)『連歌集 佛傳』宮城書店
		通鑑	室町末-近世初	藤原保子、北原保雄(一九九四)『藤の木の草紙』宮城書店
		おやまの道の記	1533頃	増保仁(一九二八)『群書類目』一八 群書類目見込及注
		歌謡公草紙※	1474-1536	『日本国歌大辞典(漢・語)』巨例
		田舎草紙※	1608	『日本国歌大辞典(漢・語)』巨例
		河津草紙(河津草紙)	1577頃	増保仁(一九二五)『群書類目』四下 群書類目見込及注
		河津草紙(河津草紙)	1461-1498	『日本国歌大辞典(漢・語)』巨例
		連歌集抄	1349	大橋孝雄、井木隆一(一九六二)『連歌集 佛傳』宮城書店
		田舎草紙	1430	増保仁(一九六二)『連歌集 佛傳』宮城書店
	河津草紙	1471	『日本国歌大辞典(漢・語)』巨例	
	狂言草木上則	三十一、通鑑ノ巻合	1494頃	『日本国歌大辞典(漢・語)』巨例
		大藏流、使清本	1642	北原保雄(一九八二、一九八八)『大藏流明狂言』東京 総合書局『電機印刷部 池田忠雄、北原保雄(一九七二、一九八三)『大藏流明狂言』東京 総合書局 本文・索引 勁草社
		和泉流、天理本	1645前後	東京師範大学中世研究會(一九〇五)『狂言』東京 勁草社出版 北原保雄、小林武俊(一九九二)『狂言』東京 勁草社
		大藏流、使清本	1646	松浦清吉、藤原通博(一九六二)『大藏流狂言』『狂言』東京 勁草社出版 川瀬 隆(一九六二)『大藏流狂言』『狂言』東京 勁草社出版 『狂言』東京 勁草社出版
和泉流、和泉家古本		1653-93	藤原通博(一九七五)『和泉家古本』東京 勁草社出版 『日本国民文化史料集成 狂言』勁草社	
狂言記		1660	北原保雄、大倉浩(一九八二)『狂言記の研究』講談社、索引 勁草社	
藤原、忠政本		1678	田口和夫(一九七五)『藤原狂言』東京 勁草社出版 『狂言』東京 勁草社出版	
狂言記外		1700	北原保雄、大倉浩(一九八二)『狂言記外』勁草社	
藤原、忠政本		1700	北原保雄、小林武俊(一九九二)『藤原狂言』勁草社	
酒袋草紙		不明	中島真次(一九四七)『酒袋草紙』勁草社	
大蔵		1606頃	前田金吾(一九六五)『大蔵草紙』勁草社	
明の介		1609-17頃	前田金吾(一九六五)『明の介』勁草社	
大蔵物語		1615頃	渡辺守邦、渡辺常可(一九九二)『大蔵草紙』勁草社	
竹藪		1621-23	前田金吾(一九六五)『竹藪』勁草社	
酒袋草紙		1632	野田善雄(一九六〇)『酒袋草紙』勁草社	
大蔵物語	1632	渡辺守邦、渡辺常可(一九九二)『大蔵草紙』勁草社		
清水物語	1638	渡辺守邦、渡辺常可(一九九二)『清水物語』勁草社		
伊勢物語	1639頃	前田金吾(一九六五)『伊勢物語』勁草社		
大蔵物語	1639-40頃	渡辺守邦、渡辺常可(一九九二)『大蔵草紙』勁草社		
伊勢物語	1655-58	渡辺守邦、渡辺常可(一九九二)『伊勢物語』勁草社		
酒袋草紙	1662	野田善雄(一九六〇)『酒袋草紙』勁草社		
伊勢物語	1662	野田善雄(一九六〇)『伊勢物語』勁草社		
酒袋草紙	1665頃	前田金吾(一九六五)『酒袋草紙』勁草社		
大蔵物語	1680	野田善雄(一九六〇)『大蔵物語』勁草社		
酒袋草紙	1681	渡辺守邦、渡辺常可(一九九二)『酒袋草紙』勁草社		

浮世草子	好色尾端	1682	博識全書(一九六八)『好色草子集 本文』築山『古曲文庫』
	好色尾端回廊	1686	
	好色巨谷	1687	
	好色十人談	1687	
	好色遊樂圖正	1687	
	好色遊樂圖正	1688	
	八世平伝	1688	
	好色古今伝	1694	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色大権威	1697	好色古今伝(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷伝	1698	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷三味線	1701	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷三味線	1702	『日本回廊大権威(築山)』巨峰
	好色巨谷三味線	1706	八世平伝(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷三味線	1708	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷三味線	1710	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷三味線	1711	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
好色巨谷三味線	1717	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院	
好色巨谷三味線	1717	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院	
好色巨谷三味線	1726	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院	
好色巨谷三味線	1732	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院	
好色巨谷三味線	1752	『日本回廊大権威(築山)』巨峰	
好色巨谷三味線	1781	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院	
浮世草子 後編(好色草子)1169-1170	好色尾端	1655	好色古今伝(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷	1660	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷	1677	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷	1678	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷	1680	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷	1681	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷	1681	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
物本十郎	好色尾端	1596-1624	博識全書(一九六八)『浮世草子集』汲古書院
	好色巨谷	1613	
	好色巨谷	1623	
	好色巨谷	1636	
	好色巨谷	1656	
	好色巨谷	1659	
	好色巨谷	1659	
	好色巨谷	1667	
	好色巨谷	1668	
	好色巨谷	1672	
	好色巨谷	1672頃	
	好色巨谷	1672頃	
	好色巨谷	1677	
	好色巨谷	1678	
	好色巨谷	1679	
	好色巨谷	1680	

	西國通上産	1693
	西國通留上産	1694
	西國通つれごと	1695
	下の文区古	1696
	西國通の友	1699
	生野通草	近世前期
	鐵道通上産	近世前期
	鐵道通	近世前期
	生野・桑田之他	近世前期
清調通一列(近松)	出世通前	1685
	三世通	1686
	注下通	1689
	續丸	1693頃
	十一段	1698頃
	藤田中蔵口上膳	1699
	日本通上膳	1699頃
	御座通中	1702
	田所上膳之鑑	1705
	御座通致	1706
	山中通世通	1707
	田上通世通之公	1707
	山田の纏包	1707頃?
	宗廟出世通	1709
	藤田通立記	1710
	山田通草	1710
	赤松通	1710頃
	赤松通	1710頃?
	山田通通脚	1711頃
	藤田通	1711頃
	山田通	1711頃
	藤田通	1712頃
	山田通	1712頃
	山田通	1712頃
	山田通	1715
	山田通	1715
	山田通	1715頃
	山田通	1717
	山田通	1718
	山田通	1718
	山田通	1718
	山田通	1718
	山田通	1718
	山田通	1719
	山田通	1719
	山田通	1720

近松全集刊行六種(一九八五—一九九〇)『近松全集』一一一 尚書部

近世前期	野上田川	1720		
	女教養開闢録	1721		
	信州山中白合藏	1721		
	心中恋話中	1722		
	世説時代記	1722		
	茶圃白話	1602頃	佐竹昭彦編(一九八〇)『茶圃白話上』上野川書店	
	巨女集	1671	宮田安隆校注(一九八四)『巨女集』岩波書店	
	機嫌草紙	1676-1681	宮田安隆校注(一九八四)『機嫌草紙』岩波書店	
	女堂記	1692	有馬頼一、西田照子(一九九五)『女堂記』の研究 著引、研究編『東洋女子短期大学女性文化研究所 有馬頼一、吉杉勇男、西田照子(一九八七)『女堂記』上(女文選)』東洋女子短期大学女性文化研究所	
	阿久婆	1692	中村幸彦校注(一九七五)『阿久婆』岩波書店	
	文芸草七草	1715	田中幸彦校注(一九八五)『文芸草七草』岩波書店	
	ひらね	1724-25	中村幸彦校注(一九八五)『ひらね』岩波書店	
	大之集	1633	森田四郎、加藤定彦校注(一九九一)『大之集』岩波書店	
	手抄草	1645	竹中静江校注、新村出校注(一九八八)『手抄草』岩波書店	
	興木	1656	影形俊成訂(一九六〇)『興木』岩波書店	
	菊屋文集	近世前期	松浦世一郎、宮本三郎、森野清校注(一九五五)『菊屋文集』岩波書店	
	近世前集	近世前期	大寺謙謙、中村俊彦校注(一九六二)『近世前集』岩波書店	
	東讀長女文芸	1694	『日本国語大辞典(漢)』岩波	
	三冊子	1706	太田幸彦、井本照一校注(一九六一)『三冊子』岩波書店	
	國語三書	1707	風崎三郎、藤生謙次校注(一九八四)『国語三書』岩波書店	
口語(長女文芸)	1656	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
長女文芸(長女文芸)	1675	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
大之(長女文芸)	1679	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
口語(長女文芸)	1694	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
長女文芸	1674	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
口語(長女文芸)	1651	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
長女文芸	1697	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
長女文芸(長女文芸)	1708	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
長女文芸	1716-36	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
長女文芸(長女文芸)	1666	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
長女文芸(長女文芸)	1672	『日本国語大辞典(漢)』岩波		
近世中後期	浄瑠璃目録	心中恋の中途	1715	長友千代治編(一九九一)『類文苑集 浄瑠璃』上 古典文庫
		心中(一)脱巻	1722	森田四郎校注(一九七五)『心中(一)脱巻』岩波書店
		五右衛門傳(長女文芸)	1724	『日本国語大辞典(漢)』岩波
		木蘭傳(長女文芸)	1730	『日本国語大辞典(漢)』岩波
		八右衛門(長女文芸)	1731頃	八尋昌隆校注(一九八〇)『八右衛門』上野川書店
		機嫌草紙(長女文芸)	1732	宮田安隆校注(一九八四)『機嫌草紙』上野川書店
		銀丸(長女文芸)	1736	宮田安隆校注(一九八四)『銀丸』上野川書店
		ひらね(長女文芸)	1740	八尋昌隆校注(一九八〇)『ひらね』上野川書店
		機嫌草紙(長女文芸)	1745	
		機嫌草紙(長女文芸)	1746	『日本国語大辞典(漢)』岩波
		機嫌草紙(長女文芸)	1757	『日本国語大辞典(漢)』岩波
		機嫌草紙(長女文芸)	1770	中村幸彦校注(一九八七)『機嫌草紙』岩波書店

狂言白土山期	桂川地陣備	1776	柳川地陣備(一九三九)『近頃河原引 桂川地陣備』岩波書店
	柳川地陣備	1777	柳川地陣備(一九三五)『柳川地陣備』岩波書店
	赤川山陣	1778	赤川山陣(一九九八)『近頃河原引 赤川山陣』二国書行会
	柳川地陣備	1780	柳川地陣備(一九三五)『柳川地陣備』岩波書店
	鎌倉白土記	1781	
	近頃河原引	1785	柳川地陣備(一九三九)『近頃河原引 桂川地陣備』岩波書店
	鎌倉白土記	1793	鎌倉白土記(一九九八)『近頃河原引 鎌倉白土記』岩波書店
	柳川地陣備	1753	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1773	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1786	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1789	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1813	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1816	柳川地陣備(一九三九)『柳川地陣備』岩波書店
	柳川地陣備	1817	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
柳川地陣備	1863-80	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店	
狂言白土山期	柳川地陣備	1870	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1881	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1883	柳川地陣備(一九三九)『柳川地陣備』岩波書店
	柳川地陣備	1716-24	大蔵院蔵書 狂言白土山期之研究 狂言白土山期(一九八四)『狂言白土山期』一四八頁
	柳川地陣備	1730	柳川地陣備(一九八七)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1751-72	柳川地陣備(一九八七)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1761	柳川地陣備(一九八七)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1792	柳川地陣備(一九八七)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1817	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1818-30	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1855	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1715	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1727	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1744	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
近世雜目期	柳川地陣備	1752	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1753	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1763	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1763	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1769	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1769	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1771	『日本国語大辞典(漢・語)』岩波書店
	柳川地陣備	1771	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1785	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	18C中頃?	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1778	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1787?	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店
	柳川地陣備	1791頃	柳川地陣備(一九九〇)『狂言白土山期』岩波書店

証証辭	1792
母上壽	1792頃
寄書集の巻	1793
長崎新聞の巻	1794
人の心解	1795
怪口茶話	1795
閑談雑話	1795
因てく	1796
坊家茶話	1796
陰子木田日記	1796
蘭學の行儀	1796
蘭家茶	1797
自由語	1797
三途語	1797
聖王上意	1798
新皇語	1798
通史の文	1799
通史の談	1799
通史の政と雜話	1799
蘭學茶話	1800
世説のほんけ	1800
世説話	1800
世説上林	1801
大徳花	寛政頃
く曲選集用紙	1802
海鏡雜用紙	1802
寄書集のり余	1802
絵の味	1803
世説話	1803
世説茶	1803
世説の行儀	1804
世説の門と手	1804
世説の巻	1804
世説のすみか物語	1805
世説の巻	1805
世説の世ひき	1805
世説の巻	1806
世説の巻	1806
世説の巻	1807
世説の巻	1808
世説の巻	1808
世説の巻	1810
世説の巻	1811
世説の巻	1812

今定書式	1812
種々家	1812
世系書	1814
[文定系統書問文庫]	1816-1844頃
足利初書(文)	1822
私職傳(文)	1822
世系書(文)	1822
今定口口口口口	1823
世系書(文)	1824
世系書	1824
口口口口	1825
世系書	1826
世系書	1830
口口口口口口口口	文政頃
口口口口口口口口	文政頃
口口口口	1832
世系書	1833
世系書(文)	1836
世系書(文)	1836
口口口口	1839頃
口口口口口口口口	1842
世系書(文)	1845
口口口口	1846
口口口口	1850
世系書(文)	1851
口口口口口口	1852
世系書(文)	1864
世系書	19C中頃
世系書	1805
世系書	1730
世系書	1733
世系書(文)	1733
世系書(文)	1737
世系書(文)	1737-?
世系書	1742
世系書	1743
口口口口	未刊(宝暦4改作刊行)
世系書	1747
世系書	1747
世系書	1748
世系書(文)	明和末・安永頃?
世系書	1749
世系書	1750?
世系書	1750?

酒巻本

酒巻本大成編集委員会編(一九七〇)『酒巻本大成』 中央公論社

西条山	1753	
徳公文庫	1753	
平井武行家系	1754	
土屋由康鑑	1754	徳政女大成續纂家目録(一九三)『徳政女大成』 中公文庫記
文之巻源記	1754	
系家孫孫鑑	1754	
佛蘭西圖定	1754	
本寺家傳	1754	
精説人情帳	1755	
花道集待寄留答	1755	
雲外餘話	1756	
風俗中流家	文政末年	
國俗小治家	1756	
國俗餘話	1756	
國語くち	1757	
國語餘話	1757	
花道集待寄留答	1757?	
徳政山	1757頃	
徳政山編・新編	1758?	徳政女大成續纂家目録(一九三)『徳政女大成』 中公文庫記
徳政山	刊行許可申出1757	
水戸のぼたん	1758	
流石山	1758	
皮袋餘話	成立上不明・元文・寛政頃?	
田舎余話	~1757?	
田舎余話(後)	~1757?	
上田余話(後)	1759	
田舎余話(後)	1761	
上田余話(後)	1761	『日本回廊大辞典(後)』巨厚
徳政山	1762	徳政女大成續纂家目録(一九三)『徳政女大成』 中公文庫記
徳政山	1762	
徳政山	1763?	
徳政山	宝暦年間	
徳政山	宝暦年間	
徳政山	1757-	
徳政山	宝暦初年?	
徳政山	宝暦末・明和初?	
〔風評事録(後)〕	1755-56	徳政女大成續纂家目録(一九三)『徳政女大成』 中公文庫記
徳政山	宝暦頃	
水之巻	宝暦頃	
徳政山	1764	
徳政山	明和年間	
徳政山(一九) 札	1766	
徳政山	1766	
徳政山	1768	

	世田屋遺跡	1768	
	間似合自評	1769	
	江戸新刊傳編	1769	
	新中全書	1769	
	新中全書(原本)	1771?	
	計測帳各々草	明和年間	
	たぐまの記	明和年間	
	遊士日記	1770	
	良巳之園	1770	
	團次遊談錄	1774	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九七二)『酒巻太左衛門』中央公論社
	伊豆遊談	1775	
	伊豆夜合二	1776	
	新中全書續編	1777	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
	半曲宗風	1777	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	酒巻時中時所	1778	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
	酒巻宗	1781頃	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	寄贈川見	1782	竜文好尚社(一九三三)『酒巻太左衛門』
	酒巻宗上巻	1782	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
	此世宗	1783	水戸尚書社(一九五八)『読友紙』酒巻本集『読友新聞』
	つれづれ断小川	1783	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
	酒巻宗上巻	1783	竜文好尚社(一九三三)『酒巻太左衛門』
	酒巻の四時	1784	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	酒巻宗	1784	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
	酒巻宗	1787	水戸尚書社(一九五八)『読友紙』酒巻本集『読友新聞』
	酒巻宗	1789-1801頃	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	酒巻宗之世田屋之遺	1791	水戸尚書社(一九五八)『読友紙』酒巻本集『読友新聞』
	酒巻宗(酒巻)	1798	
	酒巻宗	1800	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	酒巻宗	1800	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	酒巻宗(酒巻)	1802?	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	酒巻宗(酒巻)	1804	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	酒巻宗	1832	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
表紙	酒巻宗(脚日記)	1776	水戸尚書社(一九五八)『読友紙』酒巻本集『読友新聞』
	酒巻宗(酒巻)	1781	『日本回廊大辞典(茶・歴)』附例
	酒巻宗(酒巻)	1785	水戸尚書社(一九五八)『読友紙』酒巻本集『読友新聞』
	酒巻宗(酒巻)	1785	
	酒巻宗(酒巻)	1785	
	酒巻宗(酒巻)	1790	
	酒巻宗(酒巻)	1795	
	酒巻宗(酒巻)	1802	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
	酒巻宗(酒巻)	1818	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
	端	酒巻宗(酒巻)	1776
酒巻宗(酒巻)		1807-11	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社
酒巻宗(酒巻)		1808	酒巻太左衛門編纂委員会編(一九八〇)『酒巻太左衛門』中央公論社

用例数一覽

